異世界ラブコメ大作戦

サイモン・ユージ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界ラブコメ大作戦

【Ｎコード】
Ｎ８９０９Ｕ

【作者名】
サイモン・ユージ

【あらすじ】
異世界？　魔法？　勇者？　魔王？　フンフン、なるほど。つまりは世界の危機なわけだ。大変だねー。でもさ……世界を救うのなんて、超絶朴念仁美少年と絶世天然美少女をくっつけるより簡単じゃね？　天に二物を与えられまくった少年少女の友人たちが、二人をどうにかくっつけようと奮闘する、異世界ラブコメストーリー。
（注意：主人公たちがほぼ最強の状態でスタートします）

No．1：side・ryuzi「異世界へは突然に」

さて。
天は二物を与えず、なんて言葉が日本には存在するが。
断言する。ありゃ嘘っぱちだ。
現に俺の親友は、顔よし頭よし性格よし、運動神経に図画工作、家事手伝いに料理まで、ありとあらゆる分野に関して人並み以上の成績を残してやがる。
男女分け隔てなく接することができる聖人のような性格で、なおかつ正義感も強いもんだから厄介ごとの類はスルーしない。スルーできない、じゃなくてしない。これ重要。
で、だ。
天は二物を与えず、って言葉があるよな？
さっきも言ったように俺の親友は天から二物どころか六も七も貰ってるような人間だ。
でもそんな人間、結構ごろごろしてるよな？　いや周辺に散らばってるとかそういう意味ではなく、探せばそれなりに見つかるって意味で。
だから俺は今まで二物を与えず、ってのは一所に二人以上天才はいない、って意味で捉えるようにしてたんだよ。
それでも俺はこのことわざが嘘だと断言せざるを得なくなった。
何故かって？
そんなもんお前決まってるじゃねぇか。
天から与えられた二物目が俺の目の前に現れたからだよ。

放課後、学校玄関前。
何やら団子に固まってる人だかりを前に、俺――隆司と、その隣に立つ女――真子はのんびりと眺めていた。
きゃいきゃいぎゃーぎゃー漏れ聞こえてくる言葉を聞くに、部活の助っ人やら家庭科で作ったクッキーがどうのやら一緒に帰ってーやら。ともかく、ありとあらゆる誘い文句が聞こえてくる。
ともかく人だかりはその中心にいる連中の気を引きたくて仕方がない様子だったが、渦中の人たちは「ごめんね、ごめんね」とひたすら謝りながら人ごみを割って進んでいるのが見えた。

「あとどのくらいかかるかねー？」
「さすがにもうすぐでてくるんじゃないのー？」

少しずつ道のようになっていく人だかりを前に、俺と真子はこんな時のために買っておいた某有名紅茶を舐めるように飲んだ。
ただボケっと突っ立ってると喉が渇いてくるんだよなー。

「ごめん、隆司！　ちょっと遅れた！」
「真子ちゃん、お待たせ！」

そして俺たちの目の前で二つに割れた人だかりの中から、超絶イケメンと絶世の美少女が姿を現した。
イケメンの方はすらっとした長身のモデル体型で、某アイドル事務所のアイドルも格やという顔の整いっぷり。その瞳は優しげであるが、意志の強さも感じられる。
美少女の方も負けず劣らずの目立ちっぷりだ。イケメンの隣に立つと一回り幼く見えるが、出るとこは出て引っ込むところは引っ込む素晴らしさ。気の弱そうな風貌だが、見た目だけだというのが顔を見ればわかる。
そんな二人の声をかけられたことで、人だかりはようやく俺たち

の存在に気が付いたのか、アッという顔でこちらを見つめる。
しかしまあ、いつものことなのでこっちはスルー。

「いつも通りだから気にスンナー、光太」
「待ってないからいいわよー、礼美」

俺たちはそれぞれイケメンと美少女――光太と礼美に声をかけ、そのまま二人を挟み込む立ち位置に立って学校の玄関前を後にした。
後ろの人だかりから何やらブーイングに似たような声も上がるが、ひらひら片手を振ってお見送りを受けておく。おまいらがしっかり誘惑できてれば、こんなことにはならんのだよ。
まあ、うらやましいのはわかるがね。何しろ、校内でトップクラスのアイドル二人を独占してる状態なんだし。
ただな、おまいら。

「それじゃあ、帰りにどこに寄ろうか？」
「新しく喫茶店で来たみたいだし……そこにいこっか？」

お互いに瞳を見つめあって、どことなくいい雰囲気だしてるくせに、お互いに友達以上の認識を持たない奴のそばにいてみ？
わけもなく死にたくなるから。

さて。
俺の親友――光太は、あらゆる分野で人並み以上に秀でていると言ったよな？
そんな完璧超人にも、弱点というか欠点というか。とにかく穴が

存在するんだよ。

先に聖人君子のように男女分け隔てなく接するとも言ったが……これが欠点だ。

意味が分からない？　わかりやすく言うぞ？

光太にとって、男も女もすべからくみんな一緒の生き物っつー認識なんだよ……。

繰り返すが、光太は完璧超人だ。その上顔もいい。こんな優良物件、世の女性たちが放っておくと思うか？

小学生の頃には同級生どころか上級生まで光太に色目を使い。

中学生の頃には、生徒どころか先生まで危ない放課後を行おうとする。そういや最終学年になったあたりだと、ガチムチも色目使ってた様な気がするな……。

ちなみに光太は今だ未経験だが、よく守り抜いてきたと思うよ。

それもこれも天が与えた二物以上が原因だろうけど。ついたあだ名は機織職人。ネットの流言（スラング）ってのはバカにできねーな。はまり具合がどんぴしゃ過ぎる。

ただそのおかげで光太の親友ポジションの俺の胃はダメージ限界値を毎年記録することになるわけだが……。

完璧超人の親友になんて、そうそうなるもんじゃないなぁ。厄介ごとに巻き込まれたら何度死ねばいいのかわからん。

それが女性関係ともなると、今どうして俺生きてるんだろうって不思議に思えるほどだよ。

包丁とかぬるいぬるい。チェーンソーが出てきたときには笑うしかなかったね。

まあ、そういう部分も何とかしちゃうからこそ完璧超人なんだろうけどね……。実際何とかなったし……。

で、だ。

正直平時の厄介ごとはともかく、女性関係の厄介ごとに巻き込まれるのは御免こうむる俺としては、さっさと特定の誰かとお付き合いしてもらいたいわけだ。

並みの女性だと命の危機かもしれんが、そこまで面倒見きれん。
主人公補正でなんとかしてくれ。
だが、こいつの機織職人っぷりは見てて清々しいほどだった。自分で立てて自分で折るんだもんよこいつ。どうしろってんだよ。
小学校中学校とそんな調子で上がってきたせいで、俺の胃はそろそろ穴開くんじゃないかってくらい痛む日々だ。ガキのいうセリフじゃないよなぁ……。
ただ、転機が訪れたのが高校に上がった時だ。
十年連続で同じクラスになったと喜ぶ光太。俺としては十年目の厄介ごとが舞い込まないように祈るばかりだったが……。
そんな光太の隣の席。
そこには女神が座っていた。尋常じゃないくらい後光が差して見えた。
周りの男子のみならず、女子までうっとりするような超絶美少女。
それを見たとき、俺は直感した。
（光太にとっての）運命の女神きたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！
と。

喫茶店で軽く休憩し、雑貨屋を冷かしていき、その帰り道。
俺は光太の隣を歩きながらげんなりしていた。
たぶん、二人を挟んで向こう側の真子も似たような表情で歩いてるんじゃなかろうか。
なにしろ、光太と礼美のわけのわからん仲の良さを見せつけられたからだ。

まず、喫茶店。
定員さんがお勧めというので、とりあえずそれを頼んで出てきたのが。
いわゆる恋人たちが飲むペアグラスってのはどういうわけだ。しかも×二。
で、それを平然と飲む光太と礼美。もちろん一緒にだ。
俺と真子？　上に載ってたデザートは真子が食って、下のジュースを俺が頂いたよ……。
連中曰く「一つのスナック菓子を一緒に食べるのと何か違うのかなぁ？」。おまいら、間接チューって知ってますか。
次、雑貨屋。
雑貨といっても様々だ。今日行ったのは、いわゆるアクセサリーの種類と量に力を入れてる小間物屋だ。
そこで光太は礼美の髪に髪飾りを指してやったわけだ。「似合ってるよ」の一言ともに。
礼美が喜んで真子にそれを見せに行ったタイミングで、俺はこう言う。
「なんだよお前。恋人みたいな気遣いできるんじゃねぇか」
そしたらあいつなんて言ったと思う？
「ちょっと礼美ちゃんの髪が乱れてたから、あれで整えてあげたん

だけど……？」

風が強かったからねー、と。いいわけでもなんでもなく。照れているわけでも焦っているわけでもなく。

ただただ不思議そうに、そういうあいつの顔を見て。

こいつマジだと確信した。

そして不思議そうな礼美の向こうでがっくりしてる真子を見て。

あっちもガチか、と確信した。

さて。

高校に上がってから出会った美少女の名前は礼美だと割とすぐに判明した。

まあ目立つ奴だったし、何より俺と似たような目的で一緒に近づいてくるやつがいたからだ。

そいつが真子。何やら期待に目を光らせて、積極的に光太と礼美を二人きりにしようとしていた。

で、目的が俺と一緒だと確認して、なおかつお互いに情報交換して。

俺たちはがっくりと肩を落とす羽目になる。

何しろ光太と礼美。ほとんどの点が共通していたのだ。

細かい趣味や個人的な趣向はともかくとして、それ以外の点がすべて共通し。

なおかつ異性に対するスルースキルの高さも共通しているらしい

とのことだった。

真子は真子で、天然アイドルの礼美に振り回されっぱなしだったらしい。

ただ、光太のような人物は今までいなかった、とのこと。こちらも礼美のような奴はいなかった。

だから、これがおそらく最後のチャンス。

高校修了までの三年間。その間でこの二人がくっつかなければ、おそらくこの先十年以上異性とくっつくことはあるまい。

最悪縁側で日向ぼっこするような御歳になっても一人身の可能性がある。というかその未来が見える。

まあ、結婚がどうの色恋がこうだのというのは、自分の裁量で決めるべき事柄だ。俺たちが口を出すべきじゃない、ってのはわかってる。

でも、曲がりなりにも親友やってて。自分より他人を優先する二人を見て。人並みに幸せになってほしいって思うのは普通のことだろ？

なら、似合おうが似合うまいが、恋のキューピッドでも教会の牧師でも、やってやろうじゃねぇか。

楽しそうにおしゃべりをする光太と礼美を横目で見る。

赤い夕日に照らされた二人の顔は、まるで頬を染めているように見えなくもない。

はたから見れば……というか、だれが見ても初々しい恋人たちだろう。

事情を知らなけりゃ、俺だってそう思う。
ただ、光太とは長い付き合いだ。その経験が、今の光太が平時の状態だというのを告げる。
夕日に照らされる美少女の隣にいて一般的なメンタルとか何様だよおまいは、と心の中で毒づいてやる。

「？　どうしたの、隆司」
「なんでもねぇよ」

そしたらどういう理屈か、光太がこちらの方を心配そうな顔で見る。
顔に出てたか、あるいは読心術なのか。その鋭さをぜひ女心に対して発揮してください。

「そう？　ならいいけど」

何かあるなら言ってよね、と心配そうではあるが笑顔で告げ、似たようなタイミングで真子に話しかけていた礼美の方を向く。
ああ、真子の方でも俺と似たようなこと考えてたんだろーなー、と疲れた脳みそで考える。
……礼美と真子の二人に出会って、そろそろ三ヶ月くらいか。
もうすぐ夏休みに入る。そうなればなったでイベントくらいは用意できるが……。
ゴールデンウィークとかに遊園地に連れて行ってもほとんど無反応だったしなぁ……。
夏休みといえば水泳か海水浴での水着イベントが好感度アップ間違い無しだろうけど……。
煩悩どころか欲望すら見えん光太にその程度のイベントで太刀打ちできるかどうか……。
ああっ、くそったれ。

いっそ異世界召喚で二人が異世界に飛んだりしねぇかなぁ……。
と、うかつにも俺はそう思ってしまった。

――まるで、その言葉を待っていた。といわんばかりのタイミングで。

ギャリンッ！

後ろの方で、鏡か何かが割れるような音がした。

「「「「！！？？」」」」

あわてて振り返ると、まるで口を開くようにひび割れた空間がそこに存在していた。
その口の中から覗き込む向こう側は、無明の闇。
だが、恐ろしさは感じない。むしろこちらを受け入れるような、そんな優しさを――。

ゴウッ！

そんな風に呆然としていたせいで、突然吸い込むように息を始めた空間の口の方に引き込まれる。
やべぇ、受け身とれねぇ！？

「ぐっ！？」
「ちょ！？」
「きゃぁ！」
「礼美ちゃん！」

ザリッと靴を滑らせながら引き込まれる俺。あわててスカートを抑える真子。
そしてよろめく礼美を抱きかかえる光太。
ナイス光太！　できればそのまま二人っきりで異世界へ旅立ってくれ！　お土産は二人の子供でいいから！
なんて言う俺の現実逃避もむなしく。
俺たち四人は、あっという間に……竜のアギトのようなその空間の中へと飲み込まれていってしまった。

Ｎｏ．１：ｓｉｄｅ・ｒｙｕｚｉ「異世界へは突然に」（後書き）

我慢しきれずオリジナルに手を出してしまう始末……。
いいやもう開き直る！
目指せお気に入り百人！

No．2：side・mako「勇者が四人？」

そしてあたしたちは、大きな意志の流れ……のような？
なんだろう、形容しがたい何かだってのはわかるの。
ともあれ、そういうものに流され続けた。
一秒に満たない短い時間だったのか、それとも一時間以上流されたのか、それはわからない。
時間感覚も、完全に狂った空間だったんだと思う。
唐突に始まったそれは、やっぱり唐突に終わりを告げた。
あたしたち四人は、いきなり石畳の地面に放り出される。
ちなみにあたしはうつ伏せだった。

「あぶっ！？」

そのせいで、鼻打った……。
たぶんその隣では、礼美を抱きかかえた光太が背中から落ちたのだろう。あたしが落ちた時よりも大きな音がする。
その向こうでは……両足でしっかり着地したような音がした。
ちくしょう、隆司の奴はしっかり受け身とったのね！？　運動神経いいのはわかってたけど腹立つー！

「あいたた……」

まあ、何はともあれ起きないと。
あたしは鼻をさすりながら、ゆっくり体を起こして……。

「……」

目の前の、何とも受け入れがたい事実を目にする。

……どこの、セットでございますか？

石造りの、おそらく神殿か何かなのだろう。支柱が規則正しく幾柱も立っているのが見える。

あたしたちが今いるのは、魔法陣の上らしい。幾何学的な……これは、文字、かしら？　とにかく、いろいろ書いてある大きな魔方陣の上に座ったり立ったりしている。

そしてあたしたちの目の前に、顔の青いあたしたちと同い年くらいの少年がいて、その奥に十人くらい、神官のような服を着た人たちがいる。

こいつらが、あたしたちを召喚したってことかしら？

「う、うーん……」

「大丈夫、礼美ちゃん？」

「う、うん。ありがとう、光太君」

隣で光太に支えられて立ち上がる礼美も、目を丸くして周りをきょろきょろと見つめた。

光太は礼美をかばうような立ち位置に移動して油断なく目の前の少年と、奥にいる神官たちをにらんでいる。

で、隆司は……へっぴり腰のような体勢で目の前の光景を受け入れがたい様子で見ていた。どうでもいいけど、その体勢辛くないの？

「あ、あなたがたが……」

とりあえず小石でもぶつけて隆司を再起動させるか、と周りを見回していたあたしの耳に、やや低めの少年の声が聞こえてきた。

そちらを見ると、今にも倒れそうなほど顔の青い少年がこちらにふらふらと近づいてくるところだった。……っていうか本当に大丈夫なのこいつ？　近くで見ると、病人一歩手前って感じなんだけど。顔はいいだけに台無しねぇ。

「あなたがたが……勇者様、ですか……？」

……。

おーけー。お約束ですよね？

「ゆ、勇者？」

「勇者……ですか？」

さすがに光太も礼美も困惑したような声を上げた。

まあ、いきなりわけのわからないところへ呼び出されて、勇者呼ばわりされればねぇ。

あたしが隆司の方を見ると、無事に再起動を果たしたらしいあいつと目があった。

あたしたちは小さくうなずくと、黙って目の前の病人の次の言葉を待つ。

「ま、待ってください！　僕たちは――」

「お願いします！　私たちを……アメリア王国を御救いください！」

光太が「勇者」の言葉の意味を思い出して何かを言うより先に、目の前の病人が地面に頭をこすり付ける。

おー、見事な土下座の体勢。いきなりすぎて、光太も面喰って目を白黒してるし。これが演技だったら、見事なもんだわ。

「お願いします……！　もう、すぐそこまで魔王軍が迫っているのです……！」

「ま、魔王軍……ですか？」

魔王、の言葉に反応する礼美。

すると、しゃらん、と衣擦れの音を立てながら、神官の中で一番偉そうなおじいさんが前に出てきた。
おじいさんは病人の隣に並ぶと、自分も地面に深々と頭を下げた。

「はい、勇者様……今この国は、魔王の軍勢によって滅びる危機に直面しているのです……！」
「滅びの……！？」
「はい……！」

光太が驚いたような声を上げるのを皮切りに、奥にいた神官たちが手に持っていた杖を次々と放り投げて、病人やおじいさんになって地面に頭をこすり付け始める。

「どうか、どうか勇者様！」「この国を、お救いください……！」
「もう、我々には手がないんです！」「どうか……！」

あまりもその真剣な様子に、光太たちは困惑を隠しきれず。

「う、ふぐっ……！」

おそらくは、必死にこらえていたであろう、病人のうめき声と、その顔の下に点々とついた染みを見て。
二人の顔色が決意に染まる。
光太が一歩前に出て、一番先に頭を下げた病人の肩を叩く。

「みなさん、顔をあげてください」
「……はい」

顔をあげた病人の顔には、やはり幾筋もの涙の跡がついていた。

「僕には、皆さんの事情も、みなさんが僕に何を求めているのかもわかりません。でも、助けを求められているのだけはわかっているつもりです」

その言葉に続くように、礼美が光太の隣に座り込んで病人の目の前に自分のハンカチを差し出した。

「どうか、涙を拭いてください。私たちに何ができるのかはわかりませんけど、皆さんのために精いっぱい頑張らさせてもらいます」

「勇者様……っ！　ありがとう、ありがとうございます……！」

病人は目の前に差し出されたハンカチを握りしめ、それを額に押し当ててまたうめくように涙をこぼし始めた。

おや、礼美を前にしても頬を染めるでもないし、呆然とするわけでもないとは。よほどせっぱつまってるのかしら。それとも美的感覚の違い？

そんな病人の様子を見て、光太と礼美は痛ましそうに顔をゆがめるが、すぐに決意の表情に戻って立ち上がる。

「……隆司」

「……真子ちゃん」

そして振り向かぬまま、私たちの名前を呼んだ。

大方私たちは何もしなくて大丈夫、だから安心してとかそういうことを言おうとしているのだろう。

でもね、あんたら。

「みなまで言うな。だいたいわかるからよ」

この状況は、あたしたちにとっても好都合なのよ？

「どーせ、この城でおとなしくしてろ、とかいうんだろ？」
「うん。隆司は、こういうのはあまり……」
光太が二の句を告げるより先に、隆司の奴が光太を小ばかにしたように鼻で笑い声をあげた。
「おいおい！　お前が知ってる辰之宮隆司は、こんな状況でダチをほおっておけるほど野暮な男だったか？」
そして芝居がかった調子で、大仰な身振り手振りでそう告げる。
いや、あんたが吹っ切れるとそういう面があるってのは短い付き合いでも知ってるけど……ノリがいいわねー。
「隆司……」
「心配すんな。いつもと何も変わらねぇ。やることしっかりやって、満足して帰ろうじゃねぇか」
「うん……！」
力強さのこもった隆司の言葉に、光太の顔が感極まったように歪んだ。不安はあったのね、光太にも。
男二人の暑苦しい友情劇を見届けたあたしは、横目に礼美の顔を見る。
「……礼美？　あんたもまさか、光太みたいに考えてるんじゃないでしょうね？」
礼美は当然といったような顔でうなずき、当たり前だといわんばかりの表情で口を開いた。

「だって、真子ちゃんは女の子だよ？」

何たわけたことぬかしてるんだこの娘は。

「じゃああんたは何よ？」

「私は……私だよ」

意味不明な抗弁を聞いて、一瞬頭に血が上る。私は私って、こいつ……！

「あんただって女の子でしょーが！　普通はあたしと一緒にお留守番する立場なの！」

「でも……！」

思わず反射的に激昂するが、真剣な礼美の表情を見て、すぐに頭を冷やす。

落ち着けあたし。今回は礼美の考えに反対するわけじゃないんだ。

「……はぁ。わかってるわよ。あんたが頼みごと、断るわけはないもんね」

「うん。だから……」

「で・も！　あたしだけ留守番は納得できないわ！」

あたしがそう言い放つと、礼美の大きな目がさらに大きく見開かれた。

そんなに大きく開くと、目玉が落ちるわよ？

だがそんな可愛らしい表情も一瞬で険しいものへと変わった。

「だめだよ！？　危ないんだよ！？」

言うに事欠いて危ないと申すかこいつ。

「あ・ぶ・な・い・の・は・あんたも一緒でしょうがぁー！！」

「ひゃうっ！？」

たわごとぬかすボケ娘の両頬引っ張って、これ以上何か言えないようにしておく。

そうして痛みに涙目になる礼美の額に自分の額を押し付け、噛んで含めるように言ってやる。

「それにね……知らない場所で、あんたのことを一人っきりで心配するあたしの身にもなってよ……」

「まこひゃん……」

「大丈夫だって。男二人盾にして、後ろでのんびりしてたら、危ないこともないでしょ？」

「まこひゃーん……」

あたしが笑顔でそう言うと、なぜか礼美の目がジト目になった。

我ながらナイスアイデアだと思うんだけど、何かおかしいのかしら？

「まあともかく。あたしも一緒に行くわよ。あんた一人で男二人と一緒にもしておけないしね」

「光太君も隆司君もいい人だよ！？」

うん。二人が悪人じゃないのは知ってるけどさ。

女が言ういい人ってのは「どうでもいい人」って意味でもあるのよ？

あたしらの意見がまとまったのを見て、おじいさんが一歩前に出てあたしらの顔を見回した。

「それで、勇者様……」
「はい。僕ら四人、このアメリア王国のために尽力を尽くさせていただきます」
「おお……！」

四人を代表して光太がそういうと、神殿の中が一気に歓声で包まれた。
本気で嬉しそうな声を聴いて、光太も礼美も嬉しそうに顔を綻ばせる。
そしてあたしと隆司も顔を綻ばせる。いや、どっちかというとニヤリと歪める。
正直あたしにとってアメリア王国とやらの存亡はたいした問題じゃない。
もちろんなくなってもらっては困るので、問題解決に尽力はする。だがそれが最重要ではないのだ。
あたしに……あたしと隆司にとって一番重要なのは、非日常的なこの状況そのものなのだ。
頼るべき大人がおらず、知り合いもいない。その上見も知らぬ他人に頼られ、魔王軍とやらと一戦やらかさなきゃおさまらないこの空気……。
あたしたちにとって、本当の意味で頼れるのも信じられるのも、あたしたち四人だけだ。こんな状況で、恋に落ちない男女はいない……！
いわゆる吊り橋効果だ。もちろん、あたしと光太、隆司と礼美がくっつく可能性も残ってる。でもあたしは鈍感も天然も礼美だけで間に合ってるし、隆司と礼美がくっついてくれても別に問題ない。むしろ厄介な問題を隆司に丸投げできるので万々歳だ。
隆司の方もそう思っている可能性は高いので、当面は光太と礼美をくっつけることに腐心することになるだろうが。

勇者として奉られ、病人――どうやらこの国の王子様らしい――から詳しい話を聞いている光太と礼美の後ろで、あたしと隆司は目線を交わして今にも高笑いをあげそうな顔で笑みを深めた。

―異世界ラブコメキタァァァァァァァァァ！！！！―

Ｎｏ．２：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「勇者が四人？」（後書き）

今、悪い顔してる真子ちゃんと隆司君には誰も注目してません。
それよりも勇者してる光太君と礼美ちゃんの方が目立つからです。
次は病人（王子様）から状況説明の回となります！
早くストーリーを進めたい……！

No．3：side・ryuzi「魔王軍、その所業」

さて。

とりあえず勇者召喚の儀式とやらも終わったので、食事でもどうですかと王子が言うので、俺たちは王子の先導に従って飯を食う運びになった。

途中歩く廊下から外を見てみると、ゆっくりと月が上がるところだ。

そういや、こっちに来る前の世界は夕方だったなぁ。どのくらい時間が経過したのかはわかんねぇけど、体感時間を頼りにするならそろそろ日が暮れてもおかしくないくらいか。

……ひょっとして、こっちの時間の流れと向こうの時間の流れ、全く同じ？

もしそうなら、全部終わった夏休みが終わってたり、周りの連中が進級してたりするんかね……？

俺はファンタジー的お約束の「元の世界に戻ってみれば、意外と時間は経過していない」に期待しつつ、王子の背中を追いかけた。

しばらく歩くと食堂らしい場所につき、中に入ると真っ白なテーブルクロスを乗せた長机の上には菜食主義万歳といわんばかりのメニューが並び、そのそばには十歳くらいの女の子……いや、王女様かな？　煌びやかなドレスを身にまとった王女らしい女の子がこちらの方を向くと、パッと顔を明るくした。

「お兄様！　そちらの方々が勇者様ですか？」

「うん、そうだよ」

王子は女の子の言葉に、少しだけ申し訳なさそうな顔で答える。

どうやら兄妹らしい。

……しかし王子様、なんか俺たちに引っかかることでもあるんか

ね？

王子は女の子の肩を抱いてこちらの方に体を向かせる。

こうして並ぶと確かに兄妹だな。よく似てる。

「では改めまして……私の名前はアルト・アメリア。このアメリア王国の第一王位継承者です」

「初めまして、勇者様！　私の名前はアンナ・アメリア、第二王位継承者です！」

アルトは静かに、アンナは元気よく自己紹介を終えた。

なんつーか、対照的な兄弟だな。アルトの顔色は悪いけど、アンナは血色いいし。

とりあえず、その自己紹介に応えるように俺たちも自己紹介することにする。

「僕の名前は、櫻野光太です」

「春日礼美といいます」

「辰之宮隆司だ」

「琴場真子。よろしくね」

「ええっと……サクラノ様にカスガ様、タツノミヤ様にコトバ様ですわね」

名前を覚えるように復唱し、アンナがよろしくお願いしますと笑いかけてくれた。

「「ウッ……」」

そんな純真な彼女の言葉に、俺と真子は思わず涙ぐみかけた。

「え、ちょ！？　ど、どうされました！？」

「わ、私何か粗相を！？」
「いや、ちがくて……」
「あたしと隆司の名前、元の世界だといろいろ突っ込みどころが多い名前でね……」

あわてる兄妹に、俺と真子はそう答える。
俺なんかは名前は隆司なのに「竜の字がダブってるねー」って笑われるし、真子に至っちゃ「言葉真子」って間違えられるし。
まあ、そんなの漢字がなさそうなこの世界には関係ないか。

「まあ、そういうことだから、気にしないでね？」
「はあ……」
「あと、俺たちの世界……いや国だな。俺たちの国じゃ、名前は後ろの方の奴になるんだ」
「そうでしたかー」

アンナにそう説明すると素直にうなずいて、コウタ様レミ様リュウジ様マコ様ですわね、と改めて復唱してくれた。素直ないい子だよ……。

「それでは皆様、席についてください。この国の食事がお口に合えばよいのですが……」

アルトの言葉に俺たちは、俺・光太・礼美・真子の順番で座る。
そしてその対面、光太の前にアルトが、礼美の前にアンナが座る。
俺たちの目の前にあるのは、野菜のスープにパンとサラダ。それからなぜか米か何かを固めて焼いた、餅もどきのソース掛けだった。
……なぜに主食に主食を併せるの？　いやそれ以上に。

「なあ、肉はないの？」

「すみません、リュウジ様。肉の類は、ギルドが狩りをおこなわなければ手に入れられないので、不定期にしか入手できないのです」
「……じゃあ、せめて魚とか」
「魚には季節がございまして、今は季節が外れてしまいますの」
「さいか……」
「隆司、お肉大好きだもんね」

申し訳なさそうに答えてくれた兄妹に、俺はがっくり肩を落とす。
俺の肩を、光太が苦笑しながら慰めるように叩いてくれた。
別に野菜が嫌いってわけじゃねぇんだけど、光太のいうように俺は肉をよく食う。
肉食わないと、飯食った気がしねぇんだよなぁ……。
次にギルドが肉を卸したときには、真っ先に作るようにすると約束してくれた兄妹に礼を言いつつ、俺は目の前のナイフとフォークに手を。

「ところで……国王様やお妃様はどちらに？」

かけようとしたところで、礼美の質問に手を止めた。
そういえばそれらしい人がいねぇな。上座にも特に用意されてないし。
礼美の質問に、アルトは顔を堅くしうつむいた。
この様子だとまさか……。

「国王……父は、昨年に亡くなりました……」
「あ……」

アルトの言葉に、礼美は気まずそうに頭を下げた。

「す、すいません……」

「いえ、いいんです」

そして場のフォローをするように光太が口を開いた。

「やはり、国王様は魔王軍の侵攻で……？」

って、フォローじゃねぇ、さらに突っ込んだ！

避けろよお前、そういう話題！　気になったから聞いたんだろうけど！

俺も聞くけどさ！　むしろ助かったけど！

「いえ。医者によると心臓の病らしく」

「違うのかよ！」

さらっと明かされる事実に思わず口に出してツッコミを入れてしまった。

このタイミングなら、王は魔族と勇敢に戦って死んだとかじゃないの！？

「ちなみに、どんな人だったの？」

「あちらに肖像がございますわ」

真子の質問にアンナが答える。

彼女が指差した先にあった肖像には、でっぷり肥え太ったチョビ髭のおっさんが描かれていた。

あー……あれですね。生活習慣病ってやつですね！　王様って、動きそうにないしね！

一気に脱力した俺をスルーして、王子は訥々と語り始める。

「そして、魔王軍の侵攻が始まったのが、その一ヶ月ほど後だった

のです……」

ああ、そこにつながるのね。

王子の語りによると、王が死亡してから一ヶ月ほど経った後、竜の谷と呼ばれるアメリア王国と魔王の領域に存在する渓谷を監視していた砦からの早馬が王国へ駈け込んできたらしい。

魔王軍が突然侵攻を開始した、と。

「竜の谷って？」

「かつて古竜（エンシェントドラゴン）が存在していたとされる、霧に覆われた渓谷です。向こう岸が見えないほどの幅があるのですが、魔王軍は巨大な翼竜に乗って超えてきたらしいのです」

その後、魔王軍はきわめてゆっくりと侵攻を開始したらしい。

まるでこちらの領土すべてを覆い尽くさんと、アメリア王国直下の貴族領土ばかりではなく、大陸の端っこにある小さな農村までその魔の手を伸ばしていったとか。

「魔王軍の侵攻を食い止めることはできず、ついに前線はこの王都のすぐそばにまで押し込まれてしまったのです……」

悲痛に耐えるアルトの背中を、アンナがそっと支えるように撫でた。

なるほど、王様が死んですぐに魔王軍の侵攻が始まったのか。

アルトが第一王位継承者なら、王としての重責が全部のしかかってくる形になる。やたら顔色が悪いのもそのせいだな。

まだ王位を継承していないのも、戦時中だからか？　略式でいいから、即位しといたほうがいいんじゃねぇかなぁ。

「にしても改めて聞くとやばいわねぇ……」

「だよなぁ。今すぐにも攻めてくるんじゃねぇの？」

すぐそこに前線があるってことは、魔王軍はすぐにでも王都を攻め入れるってことだ。

俺たちとしちゃ、少しでも鍛える時間が欲しいんだけどなぁ。だってただの高校生だし。

「ご安心ください。それはありません」

「ん？　そうなのか？」

だがそんな俺たちの心配に、アルトは力強く答えた。

なんか秘策でもあるのか？　神様結界みたいな。

「魔王軍が攻めてくるのは、魔王軍がのろしを上げてから三日後になります」

「それに、ここ最近の魔王軍は一度攻め込むと最低でも二週間は時間を空けますの。前に攻めてきたのは三日前ですので、まだ時間はございますわ！」

「「……ん？？」」

アルトとアンナの言葉に、俺と真子は首をかしげた。

なんだろう。今の違和感。

なんか目の前で雨にぬれる子犬を不良が拾ったような、そんな違和感が。

そんな俺の横で、光太が驚いたように声をあげていた。

「三日前……大丈夫だったんですか！？」

「はい。ですが、負傷者が出てしまいまして。前線も少し押し込まれてしまったのです……」

「大丈夫ですわよ、お兄様！　魔王軍との戦いで、死者が出たこと

は一度もないじゃありませんか！」
「それはそうだけど……」
「「すとっぷ」」

俺と真子が声をあげて兄妹の会話を遮った。
今のは聞き逃せねぇし。
なに？　死者が出てない？
目頭を押さえながら、低く唸るように真子が質問した。

「あのさ……確認するわよ？」
「はい、なんでしょう？」
「魔王軍相手に死者が出てない？」
「ええ」
「……あたしらいらなくない？　そんなに強いんなら」

真子の反対側で椅子にぐったり座り込んでる俺も同じ意見だった。
仮にも魔王軍の侵攻に、死亡者ゼロならきちんと準備さえできれば勝てるじゃねぇかよ。
だが、アルトは慌てたようにその質問に答える。

「ま、待ってください！　確かに死者は出ておりませんが、負傷者は出ているのです！」
「いや、戦争してる相手に負けて死者ゼロの時点で、負傷くらい大したことないでしょう」
「いえ、それ以上に！　魔王軍がこちらに死者が出ないようにしているのです！」
「「はい？」」

アルトの言葉に、今度は目が点になる俺と真子。
あの……魔王軍ですよね？

「どゆこと？」
「はい。明らかに止めが差せる状況にかかわらず、見逃すのは当然。相手が負傷すればそれ以上追い打ちをかけず、行軍からはぐれた新米兵士を送り届けてくれたこと数回……」
「聞くところによると、占領した領地では、ご老人方のお手伝いをして厚く迎えられてるんだとか」
「「なにそれこわい」」

苦悩するアルトの隣で、俺たちと同じ疑問は持っているらしいアンナが変な顔で続けた。
まおう……ぐん？
死傷者が出ないっていうのは舐められてる、で説明つくけど……。ご老人のお手伝いは何故？　メリットゼロじゃん魔王軍。なにしてんの？
ただ、老人のお手伝いをしているというくだりを聞いて光太が目を輝かせた。
あ、なんかいらんこと思いついたなこいつ。

「それって……ひょっとして、話が通じるんですか！？」
「ええ、そのようですわね。前線兵士によると、何度かお話したこともあるとか」
「そもそも魔王軍の構成要因の見た目は、私たち人間とほとんど変わりません。ただ、明らかに人間にはついていない耳や尻尾、あるいは鱗なんかも」
「なん……だと……！？」

アルトの言葉に、今度は俺の全身に衝撃が走る。
その特徴は……もしや……！？
まさか、俺が望んでやまなかった世界がここに……！？

「……隆司？」
「……ハッ！？」

一瞬トリップしかけた俺の意識を、光太が目の前で手を振って戻してくれた。
い、いかんいかん。まだそうだと決まったわけではないのだ……。

「そ、それで……光太。話が通じるならどうしたんだよ？」
「もし話が通じるなら、説得できるかもしれないと思って！」

ああ、やっぱそういうこと考えたか。
まあ、基本的に平和志向な奴だしな。
隣の礼美も光太の言葉を聞いて目を輝かせている。その向こうでは真子が呆れている。
まあ……相手が相手だもんなぁ。

「相手は魔王軍よ？」
「それでも、やらないよりはましだよ、真子ちゃん！」
「私たちといたしましては、魔王軍の侵攻を食い止めてくだされば問題はございませんけど」
「ほら！」

アンナの後押しに、礼美はさらに勢いづいた。
まあ、言葉で解決できるなら、今の俺たちにもどうにかできるかも知れないけど。
ただまあ、今は無理だよなぁ。

「その意見自体は賛成だけどよ、それは強くなってからだな」
「え？」

「あのねぇ……明らかに武力だけでどうにかできる相手の話を、相手が聞いてくれると思う？　しかも戦争中の」
「それは……」
俺たちの言葉に、光太と礼美の顔が陰る。
理屈としてはわかるけど、って顔してんな。
でも、真子が言ってることは正論だ。武力でどうにかできると思ってるから戦争を仕掛けるんだからな。まあ、魔王軍の行動を見るにそれが理由っぽくはないんだがなぁ……。
一足飛びにどうにかしたがんのは、こいつらの悪い癖だな。なまじ能力があるだけに。
まあ、それを冷静にさせんのが俺たちの仕事だけどな。
俺は目の前で不安そうな顔をしているアルトと、若干呆れ顔のアンナに顔を向ける。
「まあ、筆頭勇者がこう言ってるんで、魔王軍とは何とか言葉による平和的な関係を築いてもらうことになりそうだわ。問題ありそうか？」
「いえ、特には……。ないはずだよね？」
「と思いましたけれど。詳しくは宮廷魔導師のフィーネに聞いてみませんと」
ああ、やっぱり魔導師もいるんだなー。俺も魔法使えるかな？
「じゃあ、当面は訓練、ってことでいいわよね？」
「うん、しょうがないね」
「私も、それでいいよ」
真子が光太と礼美に確認を取って、二人がうなずいたのを見て俺もうなずいた。

とりあえずの目的は決まりかな。

「では今日はもう遅いですし、明日になったら宮廷魔導師のフィーネをご紹介いたします」

「きっと皆様の力になってくれますわ」

「そいつは楽しみだねぇ」

俺はにやりと笑って、ようやく目の前の料理を食べるためにナイフとフォークを手に取った。

どうでもいいけど、どっちも木でできてんな。ちゃんと切れんのか？

「そういやお妃様はどうしたの？」

「いえ、母は人見知りが激しくて……」

「“見ず知らずの方とお食事なんてできません……！”と」

「引きこもりかなんかか」

Ｎｏ．３：ｓｉｄｅ・ｒｙｕｚｉ「魔王軍、その所業」（後書き）

そんなわけで現状の説明回になりますー。
この世界は普通の異世界とは明らかに違うという説明。まおうぐんはやさしいよ！
まあ、ラブコメするのに陰惨な戦争はないだろうってことでこうなったんですけどね。
次回は力の覚醒回になりますー。

＊７月２１日誤字修正。申し訳ないです。

No．4：side・mako「覚醒の儀式」

で、無事食事も終わり、宛がわれた部屋でぐっすり休んだあたしたちは、翌日宮廷魔導師だというフィーネとやらのところまで来ていた。

王子の先導でやってきたのは、王国宮殿の中でも奥まった場所だ。

「ここに、宮廷魔導師のフィーネがいます」

「フィーネさんは、どんな方なんでしょうか、アルト様？」

小首をかしげた礼美の質問に、王子は少し考えるようなそぶりを見せてから。

「……たぶん、ご覧になられた方が分かりやすいかと」

そういって、目の前の扉に手をかけた。

……見た目にインパクトのあるやつってこと？

そして王子が開けた扉をくぐると、その向こうには。

「うわぁ……！」

なぜか夜空が広がっていた。

かなり広い。まるで満天の星空だ。見上げれば見渡す限りすべてが漆黒の闇で、その中すべてに星が瞬いている。

あっれー？　今は朝だし、ここは室内のはずじゃ……。

「驚いてもらえたようで、何よりじゃ」

礼美が感嘆の声を上げると、広い部屋の中央から少女の声がした。

そちらの方に目を向けると、部屋の真ん中に小さな少女がいた。
見た目だけならアンナと同い年くらいかしら。長い長い髪の毛を一度折り返してまとめている。
ただ、見た目通りの歳かはわからなかった。小さく微笑むその姿は、純真でもあり老獪にも見える。

「この部屋の名前は夜天宮（プラネタリオ）。見ての通り夜空を再現したものじゃ」
「あの、あなたが……？」
「うむ。私がこのアメリア王国の宮廷魔導師、フィーネじゃ」

少女――フィーネの見た目に驚く光太の様子を、おかしそうに見つめるフィーネ。
見た目で驚かれているのに慣れているのだろう。まあ普通、宮廷魔導師といえば魔法使いのトップエリートだ。年若い少女がそのトップなんて言うのはなかなかありえないんだろう。
ただまあ。

「……フィクションとしてはありがちよねぇ……」

誰にも聞こえないようにポソリとつぶやく。
よくある話よねぇ。見た目こそ若いけれど、中身が老獪なばあさんっていうのは。
目の前の少女もきっとその類なんだろう。なめてかかると、確実に痛い目に合うわね。
こっそり警戒しつつ、あたしは礼美の後ろからフィーネの様子を見る。
フィーネは素直に驚く礼美と光太の前で、机の上に置いてあった本を手に取った。
水晶球とかじゃないの、こういう場合？

「さて、本日の用向きは勇者たちの力の覚醒であったな？　準備万端、整っておるよアルト王子」
「ああ、ええ。それもあるのですが……」
王子はフィーネの言葉を聞いて、迷うようにあたしたちとフィーネの間で視線を右往左往させた。
そういや昨日、魔王軍との戦争は平和的手段で解決しようって決めたところだっけ。
まあそれも重要だけど、今は力の覚醒とやらが先ね。話なら後でもできるし。
あたしは王子の顔を見て、うなずいてみせた。
「昨日のことは後でいいわ。それより、力の覚醒って？」
「そのままの意味じゃよ」
あたしの問いの答えたのは、王子ではなくフィーネだった。
フィーネは手に取った本の背表紙をほっそりとした指でゆっくりとなぞる。
木枠で強化されたその本には、どこを見ても名前のようなものは記されていない。
「おぬしらの中に秘められた力を、この本によって覚醒させる」
「え？　あたしら、そんな大層な存在なの？」
フィーネの言葉に驚くあたし。
いや、展開としては読めるわ。でも、さすがにただの高校生にそんなものが宿ってるとは思えなかった。
それにあたしが驚いたのはそこだけではなく。
「……フィーネ。まるであたしらの中に力があるって、確信してる

みたいだけど……それはどうして？」
「単純に、おぬしらの運命を見たからじゃ。この夜天宮（プラネタリオ）は先読みのための占星術を行う場でもある。おぬしらがこちらへ招かれるより前からずっと、私はこの夜天宮（プラネタリオ）でおぬしらの運命を読んでおった」
……つまり、この夜天宮（プラネタリオ）とやらであたしらがどういう風になるか占ったってこと？
じゃあ、魔王軍とやらとどうなるかとかそういうこともわかるのかしら？
あたしの表情から言いたいことを察したのか、フィーネは小さく首を振った。
「……残念ながら、夜天宮（プラネタリオ）での占星術は不完全なものでの。漠然とした未来しかわからぬ。やはり本物の夜天に比べると、精度が落ちるでな」
ふーん、そうなのか。やっぱり作り物じゃうまくはいかないってこと……いや、作り物でも未来が見えるって地味にすごいんじゃ……。
うんうん唸るあたしの前で、礼美が一歩前に出た。
「じゃあ、フィーネ様。私たちにはみんな、何かしらの力があるということでしょうか？」
「そのようじゃな。漠然としておるが、皆一様に力を宿しておる。その力は、この世界を救うであろうという未来も見えたしの」
フィーネの言葉に礼美と光太の表情が明るくなった。
フィーネの予言は、あたしたちが間違いなくこの世界を救える可能性があるというものだからだろう。
だが、漠然としているということはいくらでも変わる可能性があ

るということだ。
その辺はきちんとわかってるんでしょーねー？

「それなら、魔王軍とも……！？」
「かもしれんし、そうでないかもしれん。結局はおぬしら次第ということじゃな」

意気込む光太に水を差すようにそう言って、では誰から行う？とフィーネはあたしたちを品定めするように順に見ていった。
うーむ。順番なんて正直どうでもいいけど、やっぱり可能性の高い順よねこういう時は。

「じゃあ、光太か礼美からで」
「え！？　僕ら！？」
「真子ちゃんが先に行ってよ！」
「いや正直俺たちが行ってもなぁ」

驚く二人に、あたしと隆司は肩をすくめてみせた。
いやだってあたしと隆司、向こうの世界じゃ凡人ですからね？
あんたたちみたいな完璧超人と一緒にされてもね？

「ではコータからでよいかの」
「えぇ！？　なんで！？」
「いかにも勇者って面してるからだろ」
フィーネの推薦と隆司の無情な背中押しもあって、一番初めの覚醒を行わされる光太。
まあ、こういうときの生贄役でもあったしねぇ。なんかあっても大丈夫でしょう。

「ううぅ……大丈夫かなぁ……？」

「大丈夫じゃから、ホレ。この本の表紙に掌を置いてみよ」

なんか涙目になりながらも、光太はおとなしく掌を無銘の本の表紙に置いた。

すると、目の前にいるはずの光太の気配が急に薄くなり……。

――カッ！！！！――

その背中から急に光が溢れ出した。まるで光太の中に眠っていた大きな力が、本に触れることによって引き出さ

って、痛い！　この光、目に痛い！　具体的には目の慣れた暗闇の中でいきなり目の前でライトをつけられたときくらい痛い！　しかも目に直接！

礼美は「キャァァァァ！？」って悲鳴上げてるし、王子は王子で目を両手で覆ってるし、隆司なんかはしっかりサングラスってオイイィィィィィ！？　そのグラサンどっから出したぁぁぁぁぁぁぁ！？

「いや、いつも持ってるじゃん俺」

そういやそうね！　目つき悪いからって、芸人みたいな真ん丸サングラス礼美に贈られて、いつも持ち歩くようにしてんのよね、受けも狙えるから！

思わずド突き漫才はじめようとするあたしらを置いて、光太の覚醒は続く。

光太の背中から溢れ出していた光はやがてゆっくりと光太の体の中へと収束していく。

光はやがて完全に光太の体を覆うものだけとなり、それも幾度かの明滅ののちに消えていった。

「……終わりじゃよ、コータ。もう手を離しても良いぞ」

「……あ、ああ。はい……」

覚醒をしっかりと見届けたフィーネの声を聞いて、呆けていた光太が我を取り戻してうなずいた。

そのまま頼りない足取りながらも、あたしたちのところへと戻ってきた。

なんだか夢見心地な表情ね。覚醒の中で何かあったのかしら。

「どうだったよ、覚醒は？」

「よく……わからなかったよ。なんだか、体の中から何かを引き出されたって感じだった」

隆司の質問の答えも、なんだかあいまいだった。

なんだか無理やりって感じなのねぇ。意識が朦朧としてんのも、その影響かしら。

「じゃあ、次は礼美ね」

「うう……緊張するよ……」

あたしがそう促すと、おっかなびっくりといった感じで礼美はフィーネの方へと近づいて行った。

「では、掌を」

「はい……」

フィーネの言葉のままに、礼美は本の表紙に掌を置いた。

すると今度は礼美の気配が逆に濃くなっていき、ゆっくりと礼美の体が光を放ち始めた。

光太のときと違い目も痛くない、穏やかな光だ。光太の光をライトに例えたが、礼美の光は陽光のような感じがする。

「へえ、こんな風に僕も覚醒したんだ……」
「いや、お前の覚醒は痛かった」
「痛かったの！？」
「いや、あんたは痛くなかったでしょうが」

自分の覚醒に驚愕している光太をいじりつつ、礼美の覚醒の終りを待つ。
初めが穏やかなら、終わりもまた穏やかだった。
礼美の体から溢れ出した光は、ゆっくりと礼美の体の中へと納まっていく。
光は小さく小さく礼美の体の中へと納まり、やがて消えていった。

「レミよ、これで終わりぞ」
「はい……ありがとうございます……」

礼美はフィーネにそう礼を言って、こちらへと戻ってくる。
足取りはなんだかふわふわしているが、顔はうれしそうだ。

「なんだか気持ちよかったよ～」

どうやら機嫌がいいのは覚醒が思いのほか気持ちよかったからしい。
それを聞いて、光太がさらにへこんでいる。
まあ、痛い覚醒って言われたら誰だってへこむわよね。

「じゃあ次は俺だな」
「うむ」

へこんだ光太はそのままに、隆司がフィーネの前まで歩いてゆき、フィーネの言葉を待たずに手を本に乗せた。

……。

「……なあ」

「……なんじゃ？」

「なんで変化ないの俺……？」

「私にいわれてものー……」

そのまましばらく掌を乗せていた隆司だったが一向に変化がない。

あたしらからだけではなく、隆司本人も変化が分からないらしくフィーネも首をかしげて。

「あ」

いたが、何やら素っ頓狂な声を上げた。

「なんだよ？」

「おぬし、魔力が出とらん」

「……はい？」

「じゃからおぬし、魔力が外に出て来とらんのじゃ」

「それがどうかしたのか？」

「この本、正確には人間の体から出て来とる微力な魔力を引き出すものなんじゃが、おぬしにはそれがないんで力が引き出せんのじゃ。すまんな」

「おおおぉぉぉぉい！！！！　それじゃあ俺、完全生身で魔王軍に挑めと！？」

「魔法武器もあるしそれで……いや、あれも体から出とる魔力つこうとったな」

「どうしようもねぇじゃねぇか！？」

あらら。わかってたけど、やっぱり特殊な力があるのは光太と礼美だけなのね。

おかしいのぅ、とつぶやくフィーネを置いて、がっくり肩を落とした隆司が戻ってきた。

「残念ねー、秘められた力がなくて」

「ちくしょう。魔法、使ってみたかったんだけどなぁ……」

よほど魔力が出てないのがショックなのねぇ。まあ、魔法の武器も使えないなんて言われたらへこむわよね。

「では最後は……」

「あたしね」

あたしは一つうなずいて、ゆっくりフィーネの方に近づいて行った。

「真子ちゃん、頑張ってね！」

「はいはい」

礼美の声援に思わず苦笑。

本に掌載せて魔力を引き出すだけなのに、頑張るも何もないでしょうに。

それにどうせ隆司みたいに何もないだろうし、ちゃっちゃと終らせようかしら。

「それじゃ、触るわね」

「うむ」

あたしはフィーネに一言断りを入れ、掌を本の上に乗せる。

すると、あたしの目の前の景色が一変した。
目の前にいたフィーネの姿が掻き消え、後ろにいたはずの礼美たちの姿も見えなくなり、夜天宮（プラネタリオ）の星々も消滅した。
そしてその場に、あたしと目の前の本だけが残された。

「……え？」

あまりにも唐突で、いきなりな展開についていけず、あたしは呆然と周囲を見回すしかできなかった。
そんなあたしの目の前で、今度は本が浮かび上がる。
ゆっくりと浮かび上がった本は、突然その表紙が開くと凄まじい勢いでページがめくられていく。
バラララ！という轟音が、何もない空間に不気味に響き渡った。

「ひっ……！？」

凶悪にページをめくられていた本は、やがて最後のページまで進み、大きな音を立てて表紙を閉じた。
その音に、あたしは思わず目を閉じたがそれがまずかった。
目を閉じた次の瞬間。

ズヌッ。

と気持ちの悪い音を立てて、あたしの胸元にさっきの本が飛び込んできた。

「カ…ハッ……！？」

異物が体の中に無理やりねじ込まれる感触が、ひどく気味が悪い。
喉から漏れようとする嗚咽を抑え込むように、本は強引にあたし

の中に潜り込んだ。

「ゴエッ……」

喉に引っ掛かった何かを吐き出そうと、あたしはえづくが異物感は消えない。

だが異物感は一所にとどまらず、まるであたしの中を浸食するように、体中に広がっていく。

なに……これ……！

そのまま意識が遠のいて――。

「――子ちゃん！　真子ちゃん！」

気が付くと、あたしは夜天宮（プラネタリオ）に戻ってきていた。

あたしの肩を礼美がゆすっている。

そちらの方に顔を向けると、心配そうな礼美の顔が見えた。

「……礼美？」

「真子ちゃん、大丈夫？」

礼美の問いかけに、あたしはあいまいにうなずいた。

「だから言ったろう、大丈夫だと」

「でも、真子ちゃん何にも変化ないのにぼーっとして」

呆れたようなフィーネに礼美が抗議するが、あたしはそれよりさっき見えたヴィジョンが気になっていた。

何よ今の……。わけがわからない。だいたいなんで本があたしの中に入ってきて……。

「時にマコよ。もう、手を離しても良いぞ？」

フィーネにそう言われて、あたしはまだ例の本の上に手を乗せていたのに気が付いて、あわてて手を離した。

「……ッ」

「真子ちゃん？」

「……大丈夫」

まだ心配してくれる礼美にそう笑顔で答えて、あたしは自分の身に起こった変化について考える。

覚醒っていうからには、何か変わってるはず……よね。

「力の覚醒の儀は終わった。あとは、各自ゆっくりとその力になれていけばよいじゃろう」

「俺の力は覚醒してないんですけどー」

隆司のとぼけた抗議の声も、今のあたしにはどうでもよかった……。

No．4：side・mako「覚醒の儀式」（後書き）

そんなわけで各人の力の覚醒編ー。といっても一名、覚醒してないみたいな描写ですが。仲間外れはいませんよ？

しかし回を重ねるごとに、文章量増えていってるな……。この調子で増えていったら、偉いことになるんじゃ……。

次回からしばらく男組と女組に分かれますー。

No．5：side・ryuzi「勇者たちの武器選び」

さて。

無事に覚醒の儀式を終え……いや、俺は覚醒してないんだけど。

ともあれ儀式を終えた俺たちはいったん男組と女組に分かれて行動することになった。

まあいつでも一緒に動かなけりゃならないわけじゃないけど、それ以上に真子に気になることがあるらしい。魔法を礼美と一緒に教えてもらうつもりのようだ。

その間に俺と光太は、騎士団長に紹介してもらって鍛えてもらうことになった。今はアルトの先導に従って、騎士団の詰め所に向かっているところだ。

つっても武術経験があるのは光太だけだから、俺を重点的にってことになるだろうなぁ。

一応路上の喧嘩くらいなら経験あるけど、相手が二人以上になった時点で逃げる算段始めなきゃいけないレベルだ。対して光太は、剣道をやっていたおかげか、三人くらいに大立ち回りを演じられる。一対一なら間違いなく光太の方が強いんだよなぁ。

そこまで考えて、俺は陰鬱な気分になってため息をついた。

「……はぁ」

「隆司、どうしたの？」

「いや、俺一人だけ今んとこお荷物っぽいの思い出してなぁ」

さっきの覚醒の儀式で、光太と礼美は光が、真子は真子で何か見たらしいのに俺だけ何も見れなかったのが悲しい。

フィーネ曰く、俺の体からは魔力が出ていないためあの本による覚醒の儀式が行えなかったようだが……それって単純に俺の中に魔力がないってことじゃねぇのかなぁ。

もしそうなると、俺には魔法が使えないってことになる。もちろんこれは俺の想像だから、魔力がないなんてことはないのかもしれない。

……でも、今すぐ使えるようになれるわけでもないだろう。そうなると、俺は一人で地道に訓練しないといけないんだよなぁ。

「そんなことないよ！　隆司がすごいのは、僕が知ってるよ！」

「はいはい、ありがとうな」

「いたっ。痛いよ隆司」

真剣な顔で慰めてくれる光太の頭を二、三度ポンポン叩いた。痛いってそんな大げさな。

こいつどうにも、自分を低く見る癖があるからなぁ。いろいろスペック高いはずなのに、この謙虚さはどうしたことなんだろうな。

「ゴルト団長！　いらっしゃいますか！？」

そうこうするうちに、騎士団の詰め所へと到達していたらしい。いつの間にか王城の外に出ており、すぐそばにあった兵舎のような場所に俺たちは立っていた。

アルトが大声を上げて兵舎の中へと呼びかけると、扉が開いて中から一人の男がのっそりと顔を出した。

無精ひげが目立つ、三十路くらいの男だ。身長は俺たちよりも高い。

しっかり筋肉はついているが、筋肉ダルマってわけじゃない。全体的なシルエットはスマートな方だ。

おそらくゴルト団長らしい人物は、不機嫌そうに眉根を寄せてアルトをにらみつけた。

「そんな大声出さなくても聞こえてるぞ」

「ああ、いてくれてよかった……」

男の顔を見て、アルトはほっと安心したように息をついた。

「まるでいつも俺がいないみたいじゃねぇか」

「いつもではありませんが、いて欲しいときにいないものですから……」

ますます不機嫌になる男にペコペコ頭を下げてから、アルトは改めて俺たちに男を紹介してくれた。

「コウタ様、リュウジ様。こちらがアメリア王国騎士団団長の……」

「ゴルトだ。お前らが、今回召喚されたっていう勇者たちか？」

男――ゴルト団長はアルトの紹介を受けてから名乗り、俺たちをうさん臭そうな目で見つめた。

まあ、明らかにアルトと同い年のガキにしか見えないよな、俺たち。団長さんが胡散臭いと思うのも仕方ないか。

「光太です」

「隆司だ」

俺たちも団長さんにならってそれぞれ自己紹介した。

「コウタにリュウジな……。とりあえず、こっちに来な」

俺たちの名を復唱した団長さんは、顎をしゃくって兵舎のすぐそばに備え付けられていた大きめの倉庫の方を指示した。

先立って歩く団長さんの背中を追いかける。なんだなんだ？

団長さんは倉庫のカギを開けながら、どうして倉庫に連れてきた

か説明してくれた。

「とりあえず、お前らが使う武器を決めておこうと思う」

「武器を、ですか？」

「ああ。まんべんなくやってたら時間かかりすぎるからな。さっさと武器を決めて、それに慣れろ」

乱暴に言い放った団長さんは、倉庫の扉を開いて中を示してみせた。

中には剣やら槍やら、ともかくたくさんの武器が雑多に突っ込まれている。

何やら埃まで積もって見えるが、不思議とくたびれた印象はない。変な模様とかも描かれてるけれど、もしかしてこれ。

「この中には、魔導師団の連中が作った魔法武器や昔試作されて武器の類が治められてる。一足飛びに強くなりたいんなら、これが一番だからな」

「わぁ……！」

魔法武器と聞いて光太が目を輝かせるが、俺は違うことが気になった。

「なあ、団長さん。これだけあるんなら、騎士団の連中が使った方がいいんじゃないのか？」

「ん？」

「いや、魔王軍に負けてるなら、出し惜しみしてる場合じゃないだろ？」

「ああ、そのことか。残念ながら、まともに使いこなせる奴がいなくてな」

「これだけあって……？」

さっそくいろいろと物色し始めた光太に続いて中に入った俺は、軽くラインナップを確認してみる。
剣の形をした武器が多い。斧や槍の形をしたものもあるが、ほとんど剣だ。
なんか変な効果でもついてんのか？　これだけあれば、使いこなせないなんてことないだろうに。
そんな俺の疑問を察したのか、団長さんは追加で説明してくれた。

「実はこの国、あまり鉄が産出されなくてな。その関係で、大量に鉄を使う剣じゃなくて、木で作ってもある程度威力のある棒状武器が主力なんだよ。なんで、騎士団で剣を使えるやつはあまりいないのさ」
「我々王族はたしなみ程度に剣術を行いますが、本当にたしなみ程度ですから」
「ふーん」

俺は二人の言葉にあいまいにうなずいた。
異世界の騎士団っていえば、剣を象徴にしてるイメージだったんだが……。
鉄があまり出てこないなら、槍みたいな棒状武器が主力になるのも仕方ないかねぇ。
剣が多いのは、王族が剣術やってるからかね？
とりあえず納得した俺は、山ほどある剣を物色し始めた。
……つっても、魔力が出てこない俺にとっちゃ魔法武器なんてあってないようなもんだけど……。
光太はうんうんうなりながら細身の剣を見つめ、団長さんとアルトは俺たちに合いそうな武器をそれぞれ一緒に探してくれた。

「コウタ様、こちらのブロードソードなどどうでしょう？」

「うーん。あまり、危険な武器はちょっと……」
「ホレ、こっちとかどうだ？　炎が出てくる魔法剣だが……」
「あ、ごめん団長さん。俺、魔力が出てこないとかで、魔法武器使えないんだわ」
「なに？　お前さん、それでどうやって魔王軍と戦うつもりだよ」
「そこが問題だよなぁ……んお？」

痛い所を突かれてガシガシ頭を掻いていると、視界の端に興味をひかれるものが映った。
なんだなんだと武器を掻き分けてそこまで行ってみると。

「……なんだこりゃ。鉈か？」

倉庫の奥まった部分に突き立てられていたのは、石で作られた鉈のような剣だった。
剣の長さは、突き立った時点で俺の腰の少し下位までか。
素材を乱雑に斬りおとして作られたらしく、刃に当たる部分は刺々しいし、峰に当たる部分はごつごつと棍棒のようになっている。
鉈と形容はしたが、鉈ほど刃の幅は狭くない。刃の広さだけ見ると、菜切り包丁に近いな。
そして柄には乱雑に汚れた包帯のようなものが巻かれているだけ。これ、握り部分が滑らないようにってだけか？
武器というにはあまりに原始的だ。ただ、その無骨なそのデザインは俺の心を強く掴んで離さなかった。
何とはなしにつかんで、床から引き抜いてみる。

「……っと」

重いことは重いけど、思ったほどじゃないな。ずっしりとした感触が掌の中にしっくりと納まる。

切っ先に当たる部分は、平たく斬りおとされているようだった。
ますます鉈だな、これじゃ。

「ん？　おい、お前何を持って……！？」

俺が鉈を持っているのに気が付いた団長さんがなんかこっちを壮絶な顔で見つめている。
なんだろう。これ、ひょっとして呪われた武器かなんかか？
こっちに気が付いた光太とアルトも振り返る。
光太はこっちに近づいてきたが、なんかアルトまですごい表情になったんですけど。なになになんなの。

「うわぁ。隆司、何その剣？　でいいの？」
「どっちかっつーと鉈だよなぁ」

光太がしげしげと見つめる前で、俺は軽く鉈の振るい心地を確かめる。
柄の長さも両手持ちできるくらいに長いし、振った時に刃に持って行かれそうになる感覚もない。
こんな見た目なのに、武器としてのバランスはかなり良いらしい。

「隆司、隆司。ちょっと僕にも持たせてよ」
「おう」

光太がせがむので、俺は手に持っていた剣を手渡――。

「ちょ、待った！」
「コウタ様！　その剣を持ってはいけません！？」

そうとしたら、アルトと団長さんがあわてて止めようとした。

いや、そんなこと言われてももう渡しちゃ。

「うわぁっ！？」

ズドンッ！！

悲鳴と同時に、石に何かが突き刺さる轟音が響き渡った。

「……」

俺は恐る恐る視線を下に向けた。

びっくりして飛びのいた光太の足元。そこには先ほどまで俺が普通に持っていたはずの剣が深々と突き刺さっていた。

っていうか鍔元くらいまで突き刺さってるんですけど……。

「っぶねぇ……。リュウジ、お前どうやってその剣持ち上げたんだよ？」

「どうって……普通に……？」

「普通にって……」

ひきつったような俺の言葉に、団長さんはあきれたという風に首を振った。

「……この剣はな、大昔からこの倉庫にあるんだが、だれにも持ち上げられないことで有名な剣なんだよ」

「持ち上げられないって……」

団長さんは屈みこんで、剣の柄に手をかける。

そして柄を強く握ると。

「……っ！！」

全身の筋肉を躍動させて剣を持ち上げようとする。
明らかに全力と見て取れるほど筋肉が膨れ上がり、ギシリと剣も小さな音を立てるが……。
そこから先は決して動こうとしなかった。まるで根が張っているようだ。
団長さんは顔を真っ赤にしてさらに力を込めるが、剣は動く気配すら見せない。

「っ、くはっ！」

結局団長さんは根負けして手を離して、勢いよく尻餅をついた。
俺はそんな団長さんを見てから、改めて剣に手をかける。
今度は二、三回深呼吸を繰り返してから、勢いよく剣を引き抜く。
……今度はたやすく剣が引き抜けた。

「……どういうことだよ？」
「……その剣はな、でたらめに重いはずなんだよ」

呆然とする俺に、団長さんはゆっくり立ち上がりながら説明してくれた。

「大昔から倉庫に眠ってたんで、魔導師団の連中もこぞって研究従ったんだがどうあがいても動かせず。何とかこの場で調べて分かったことは、この剣は普通の鉄や石なんかと比べてべらぼうに重いことだけ」
「初代アメリア国王が携えたという曰くもある剣なのですが、その重さのせいでほとんど何もわからずじまいな、正体不明の剣なのです」

なんとまあ、そんな曰くがあったとは……。
でも、それじゃあ……。

「なんで俺はこの剣が持てるんだよ……？」

少なくとも俺にとってこの剣はそこまで大層な重さのものじゃないんだけど。

「……リュウジ。ちょっとこれ、片手で持ってみろ」

団長さんは少し考えて、倉庫の壁に立てかけてあった巨大な盾を叩いた。
俺は何も言わずにそれに近づいて、手をかける。

「……嘘」

呆けたような光太の声が、目の前の光景を端的に表していた。
何しろ鋼でできているはずの巨大な盾を、俺は片手一本で、しかも盾の端を板のように持つという方法で持っているのだ。
普通なら、あり得ない。嘘だと思うんなら、大きめのテーブルの端を持って持ち上げようとしてみ？　絶対動かねぇから。

「……どーゆーことだよ……」

「……確か、魔力が出てないんだよなこいつ？」

「はい。そのため儀式の際には覚醒が唯一行えませんでした」

考えるようなそぶりを見せる団長に、アルトが答える。
そうだ、その通りだ。でもそれとこれに何の関係が……。
しばらくして、団長は何かをあきらめるように首を振りながら答

えてくれた。

「……納得はいかねぇが、おそらくお前さんの魔力が全部身体強化にまわってるんだろう。だから、その剣を持てる」

ただ、答というにはあまりにも荒唐無稽なものだったが。

「身体強化って……あり得るのかよ？」

「納得はいかねぇって言ってるだろ。俺たちには女神の加護があるから、魔力を身体能力の強化にも回せるんだが、ここまで極端な例は聞いたことがねぇ」

あまりの答えに抗議するが、団長さん自身も半信半疑なようだ。

わけがわからねぇ……。まさか、これが俺の覚醒だったりすんのか？

あんまりの事態に、俺はげんなりと肩を落とした。

一方、光太は安心したようにというか素直に喜んでいた。

「でも、良かったじゃない、隆司！」

「え？　なにが？」

「隆司も、こっちに来てからすごい力が宿ってたんだよ！　僕たち、みんな一緒なんだ！」

えーあー……。

光太や礼美はともかく、俺の馬鹿力は、そういうのにカウントしていいのかね……？

「まあ、才能といえば才能だろうさ。わけはわからんが、素直に喜んでいいんじゃねぇか？」

「ええ。それだけのお力があるなら、きっと魔王軍とも対等に戦え

ますよ」

考えるのを放棄したような団長さんの声に、慰めるようなアルトの後押しまで加わる。

いや、あんたらはそれでいいのかもしれんが……こんな変な力が加わっちまった俺はかなり気持ち悪いんですけど。

まあ、力はあって困るもんじゃねぇし……いいか、もう。

この剣自体は気に入ったし、使えるなら何でもいいや。

「じゃあ、とりあえず俺はこれ使っていいか？」

「ああ。どのみちお前にしかつかえねぇだろうしな」

「ＯＫ。じゃああとは光太の分の武器だな」

「あ、うん。なるべく、刀みたいな武器がいいんだけど」

「カタナ、ですか」

アルトに刀がなんなのか説明する光太の背中を見つめながら俺は一つため息をついた。

いったい全体、何が起こってんのかね俺……。

No．5：side・ryuzi「勇者たちの武器選び」（後書き）

そんなわけで、男組からー。どうやらスーパーマンらしいですよ隆司君！

パーティー的には、勇者・僧侶・戦士・魔法使いって感じにしていきたいのです。

次回は僧侶と魔法使いの描写です！

No．6：side・mako「魔法少女たちの午後」

瞳を閉じた礼美が、深く何かに祈りをささげるように掌を組んでいる。
しばらくそうしていると、少しずつ礼美の掌が輝き始めた。
その光は柔らかく周囲に広がっていき、やがて礼美の目の前で座っていた神官服を着た男の体を包んでゆく。
男を包んでいた光は、男の両肩へと収束していき強い光を放つ。

「おお……！」

男は驚きに目を丸くして、光が収束したらすぐに二、三回肩をぐるぐる回した。
礼美は光が収まったのと同じくらいのタイミングで目を開いて、男に話しかけた

「あの、どうですか？」
「素晴らしいです、レミ様！　まさか私の四十肩がこんなあっさり治るとは……！」

治してたのは四十肩かい。
ただ、何を治したというのは重要ではないらしい。
周りで見ていた神官やら魔導師やらがこぞって絶賛を始めた。

「すごいですレミ様！」
「さすが勇者様御一行のおひとり！」
「本当にありがとうございます！」
「あ、ありがとうございます！」

周りの賞賛や男の感謝に礼を言う礼美。いや、あんたは礼を言われる立場で……。
まあいいや。

「にしても反則くさい能力ねぇ。祈っただけで他人を癒せるなんて」
「まったくじゃ……」

周りを囲まれてちやほやされている礼美を少し遠い所から眺めていたら、ふてくされたように机の上に顎を乗っけたフィーネが同意してつぶやいた。
その隣には山と積まれた大量の本が置いてある。
その表面にはこの世界の言葉でいろいろ書かれてあった。あたしには読めない。

「せっかくいろいろ教えちゃろうと思っとったのに、魔術言語（カオシックルーン）なしに魔法に似た効果を発現させるとか……」

ぶー、という表現が似合いそうな感じで顔を膨らませるフィーネ。
こうしてみると、見た目相応の仕草ね。

「ご愁傷様ね」
「何言うとるか反則魔導師」

慰めてあげると、なぜかこっちまで睨まれてしまった。
心外な。反則なんて言われのない中傷だ。

「しつれーね。あたしはそこまで反則じゃないわよ？」
「何言うとるか！　どの世界に、初めて見たはずの魔術言語（カオシックルーン）の意味を、何の補助もなしに読解する人間がおるんじゃ！」

今度はガー、という感じで怒鳴られる。いやまあ、怒鳴りたくなる気持ちはわかるんだけれどね。

フィーネのいうとおり、どうやら覚醒したあたしの力はこの世界にとっては魔法を使う基盤となる言葉である魔術言語（カオシックルーン）の意味を完全に理解するというものらしい。

それだけでなくある程度呪文の内容を知っていれば、呪文の構成を頭の中で組み立てて呪文の名前を唱えるだけで、その魔法が速攻で発動する。いわゆる詠唱破棄ね。

おかげで数冊の魔導書……この世界では魔法の教本みたいなものらしいんだけど、ともかくそれを読んだだけであたしはある程度魔法を使えるようになってしまった。

魔力量自体は並みらしいから、威力の大きい魔法はあまり連発できなさそうだけどね。

「なんでおぬしらそろってそんな反則くさい能力なんじゃ……」

「なんでといわれてもねぇ」

覚醒したから、としか？

と思っていたのだが、フィーネは疑わしい瞳でこちらを睨んできた。

「いいや、覚醒ではありえぬ」

「そうなん？」

「うむ。あくまであの本は魔力の覚醒を促すものであって、能力の覚醒を促すものではない。おぬしが見た本のイメージといい、わからぬことが多すぎるわ」

フィーネの言葉に、あたしは軽く肩をすくめてみせた。

光太たちと別れた後、あたしはすぐにフィーネに自分が見たものを教えた。

あの本のイメージや、それがあたしの体に潜り込んだこと。
包み隠さず教えたのだが、フィーネはあたしの話を半信半疑で聞いていた。
そもそもあの覚醒の本でそんな凶悪なイメージを抱く方がおかしいらしい。
先にフィーネ自身が言ったように、あの本は魔力を覚醒させるもので、覚醒した際に見えるイメージは基本的にその人間が持つ魔力の属性になるらしい。
なので見えるのは地水火風の四属性と光か闇かの全六種類のイメージになるはずらしい。この場合、礼美は光属性ね。
なのにあたしのイメージは覚醒に使ったはずの本で、しかもそれが潜り込んできた。こんな属性イメージはないだろう。

「おぬしらの世界は本当に魔法がなかったのか？　いやそもそもおぬし、本当に異世界の住人か？」
「しつれーね。あたしは生まれた瞬間から向こうの世界の住人よ」
ジト目でこちらを睨んでくるフィーネに、あたしははっきりとそう返した。
こちとら礼美とは幼稚園の頃からの付き合いなのよ。今更生きてきた時間を否定されてたまりますか。
とはいえ、このわけのわからない力も確かに不安なのよね……。魔導書読んだ瞬間に頭の中に流れ込んできた情報には酔いそうになるし。魔術言語（カオシックルーン）を頭の中で変換して魔法使った時なんかは、あまりに非現実的な自分に吐きそうになったくらいよ。
とはいえ、考えてもさすがに埒は開かないわよね。何しろ宮廷魔導師のフィーネにわからないんだもの。
今はそれよりも。

「というかさっきの話、本当なのフィーネ？」

「む？　うむ、事実じゃよ」

あたしの確認に、フィーネはとりあえずうなずいてくれた。

「めんどうねぇ。まさか女神が魔王にさらわれてるとは思わなかったわ」

「さらわれたというても、もう数百年ほど前じゃがの」

あたしの言葉に、フィーネは首を振った。

女神の話になったのは、あたしのイメージを話した後のことだ。

魔王軍と会話できるなら、話し合いで魔王軍との戦いを終えることができるんじゃないだろうか、という話をフィーネとしたのだ。

そうしたらフィーネは。

「それは神官たちが許さんじゃろうな」

と答えてくれた。

それは何故かという質問に対する答えが「女神が魔王にさらわれた」だったのだ。

「数百年前にさらわれたんなら、勇者召喚はその時にやんなさいよ」

「当時は女神が残した召喚魔法陣の解析が不十分だったせいで、発動すらできん状況だったらしいからの」

「だからって、この機会に女神奪還までやらされるあたしらの身にもなってよ……」

あたしはげんなりつぶやいた。

神官たちは当然女神を信奉する者たちで構成されるのだが、今回の戦争で一番やる気があるのが彼らなのだ。

曰く、数百年前にさらわれた女神様を魔王から助け出す絶好の機

会だと。
　他力本願にもほどがあるわよ、まったく……。
　ともあれ、一度は魔王軍の本拠地に乗り込まなきゃ、神官たちが暴動起こすかもしれない、というのがフィーネの見解だった。
　この戦争に勝利して、女神も助け出す。どっちもやらなきゃなのが、勇者のつらい所ってところかしら？

「可能な限り魔導師団も援助するから、ぜひ頑張ってもらえんかのう」
「そりゃ、できることはするけど……できないことはできないからね？」
「もちろんそれでかまいませんとも」

　フィーネと話をしていると、不意に横合いから声をかけられた。
　そちらに顔を向けると、ひげをたっぷり蓄えた神官服の……あ、この人召喚されたときに見たことあるわ。一番偉そうな神官のおじいさんだわ。
　あたしの不躾な視線に対しても、慈愛をたたえた瞳であたしを見つめているおじいさんは、小さく頭を下げた。

「神官長の、オーゼです」
「どうもご丁寧に……」

　思わずあたしも頭を下げた。
　てっきり礼美につきっきりになると思ってたんだけど……。
　そんなあたしの考えを読んだのか、オーゼさんはゆっくり微笑んだ。

「レミ様は、私などがおらずとも大丈夫なようでしたからね」
「ああ、それはそうねぇ」

あたしが礼美の方に目をやってみると、今度は可愛く顔を力ませてシールドのようなものを出しているところだった。ああ、盾の類も呪文無視で使えるのねあの子。

「じゃあ、お伺いしたいことが」
「私にわかることでしたら」
「神官の皆さんは、今回の戦争に関してどう思われてるのです？」

オーゼさんは私の質問にしばらく黙って考えると。

「……女神様がおられなくなって数百年です。やはり若い者たちは、女神様奪還に意気込んでおります」
「やっぱ？」

まあ、そりゃそうよねぇ。自分たちが信奉する女神を奪還するチャンスがあるとなれば、そこに全力注ぎ込むわよねぇ。

「ちなみに、数百年前に女神を奪還できなかった理由は？」
「今回の戦争と同じで、魔族に対抗できるだけの力がなかったためといわれております。なのでこの数百年は、そのための力をつける期間のはずだったのですが……」

結局魔王軍には対抗できていない、と。

「後、龍の谷を越える方法が見つからんかったというのもある。その後数百年の間、様々な方法を研究しておるが、いまだによい方法は見つからんの」

あー、飛行機の類や大型生物もいないのか……。その辺もあたし

らがどうにかしないとダメなのかしら。
あたしは祈るように天を仰いで、ため息をついた。

「ああ、もう……。あたしに関しては、多少段階すっ飛ばしてもよさそうなのは幸いかしら……」

礼美はまだあの力には慣れていないでしょうし、光太も右に同じ。一番の問題は隆司よねぇ……。いっそ、後方支援に完全に回すってのも手よね。

最悪、光太と礼美の関係改善に専念させるのもありだし。

そうしたら、今から礼美周りの人間に理解を得てもらうべきよね。

さしあたっては、神官たちと魔導師たちの長とか。

「神官長と宮廷魔導師さんから見て、礼美はどうかしら？」

あたしの質問に、まずはフィーネが答えてくれた。

「どうといわれてものぅ。女神の加護が強い人間にはレミのように祈るだけで人を癒すもののもいるにはいるが、それでも一発で肉体改善など無茶すぎるし……。オーゼはどう思う？」

「女神様の加護が強い……というよりは女神様のお力に近いというべきに感じます」

続くオーゼさんの言葉に、あたしは眉根をひそめる。

女神の力に近いですって？

「その根拠は？」

「女神様の加護は、女神様の祈りが私たちの体を通して力として顕現している現象と聞いたことがあります。ならば、祈りのみで本当に人の体を癒せるレミ様のお力は――」

「――女神の力そのものに近いってわけ？」

理屈としてはあってるけど……。

あたしがウンウン唸り始めると、フィーネがあたしの方を見て一緒に唸り始めた。

「宮廷魔導師として気になるのは、むしろおぬしの方じゃがな。マコよ」

「ん？　あたし？」

「さっきも言うたが、魔術言語（カオシックルーン）を何の補助もなしに読解するなど普通ではない。おぬしが見たイメージに関係することじゃろうが……」

フィーネは少しためらうように黙ってから、意を決したように口にした。

「おぬしのその能力、むしろ魔王軍の……魔族の者たちが持つ特徴に近い」

「……」

フィーネの言葉に黙り込むあたし。

……やっぱり、この世界の魔法の語源って。

「元々魔術言語（カオシックルーン）は、女神が魔族たちの言語を我々人間にも使えるように改良して授けたものだ。なら、その言語を理解できるおぬしは……」

「やめなさい、フィーネ」

何も言えなくなったあたしに畳み掛けるフィーネの言葉の先を、オーゼさんが止めてくれる。

……少し、安心しちゃった。

フィーネは言葉の先を止められたことに不満があるのか、オーゼさんの顔をキッと睨みつけた。

「オーゼ、しかし！」

「たとえ何であれ、今のマコ様は我々の味方です。それ以上の真実が必要ですか？」

優しい口調だが、有無言わさぬ強さを秘めたオーゼさんの言葉に、フィーネはグッと喉元に声を詰まらせた。

そのままうつむいて黙るフィーネにため息をついて、オーゼさんがあたしに向き直る。

「申し訳ありませんマコ様。宮廷魔導師殿は、少々配慮に欠けるところがありまして」

「いえ、フィーネの疑問も当然だと思うので……」

この世界の魔法の言葉……魔術言語（カオシックルーン）が元々魔族の言語だっていうなら、今のあたしは魔族だってフィーネじゃなくても思うもの。

今でこそ、勇者補正があるからみんな信じてくれるけど、最悪周りがみんな敵になってるって自体もあり得るのよね……。

今度は何やら補助系の魔法を成功させたらしい礼美が完成を受けているのを三度眺めながら、あたしはうっそりと目を細めた。

最悪、一人でやっていく覚悟位、決めておいた方がいいかしらね……。

Ｎｏ．６：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「魔法少女たちの午後」（後書き）

真子ちゃんは警戒心が強い猫みたいな女の子です。
その代わり気を許した相手の懐にはガンガン踏み込んでくる感じ。
次は夜中の作戦会議！

No.7：side・ryuzi「四人で過ごす夜」

さて。

一通り訓練も終わった俺たちは、宛がわれた部屋の一つ……女子部屋にやってきていた。

今日あった出来事を、お互いに報告しあうためだ。修学旅行的なドキドキイベントではない。

俺と光太の方は、まず俺の身体能力の向上。目の前でベッドを片手で持ち上げてやったら、見事に沈黙を返してくれた。

それから、光太の使う武器と能力。光太が選んだのは刀くらいの長さがある魔法剣で、刀身を渦巻く風で覆うというものだ。元々は相手の武器を絡め取るために開発された魔法剣らしい。普通に剣としての機能もあるが、相手を傷つけるのを嫌がった光太は刀身に風を纏わせたまま切りかかれば棍棒のように殴れるとこれを選んだようだ。それ以外にも、訓練中に纏わせた風を衝撃波のように飛ばす方法も見つけていた。やろうとすればカマイタチのような刃を発生させることもできるらしいが、光太はそれを使うつもりはないようだ。

そして今判明している光太の能力は、魔力の異常な燃費の良さ。光太の使う魔法剣は常に風を纏わせることもできるが、そもそも風を渦巻かせるだけで結構な魔力を消費するものらしい。だが、光太はそんな魔法剣を訓練中、ずっと発動させ続けることができた。普通なら昏倒するはずらしいが、そのあとクールダウンと称して魔法剣での素振りをやるくらいだった。有り余りすぎだろう、体力。

ちなみにこれは余談になるが、魔法剣に銘はなかったので「エア・キャリバー」と光太自ら命名した。俺の使う剣？　普通に石剣でいいだろってことにしておいた。超重剣も捨てがたいけど。

続く真子と礼美の方は、魔法関係のチート能力か。詠唱破棄ができる真子はともかく、祈るだけで癒せる礼美の方は本当に特殊能力

だなぁ。
　そのあとは、どうやら女神が魔王にさらわれてるらしいから、それを助けないと元の世界には返してくれなさそうだということ。
　まあ、こういう場合に元の世界に反してくれそうなのは神様って相場は決まってるしな。真子はめんどくさそうに溜息ついてるけど、「魔王軍と和解する」よりももっと目的がはっきりしたからいいじゃねぇか。
　そして。

「これが最後になるんだけど……どうもあたしの能力は魔族のそれに近いらしいのよ……」

　衝撃の告白。
　光太と礼美はその言葉に目を丸くし、俺は片目を眇める。
　うつむいた真子の表情はうかがえないが、その声は堅い。

「礼美。そういう話は聞いてんのか？」
「き、聞いてないよ！　真子ちゃん！？」

　あわてたような礼美の声。本当に聞いていなかったらしい。
　礼美の声に顔を上げることもなく、弱弱しく首を横に振る真子。

「少なくとも……フィーネはそう思ってるみたい……」
「そんな……！」

　光太の声に焦りのようなものが混じる。そりゃ、友人の一人が敵側陣営だと疑われりゃな。
　とはいえ、まだその核心は断定には至ってはないようだ。こうして真子が俺たちといるのが何よりの証拠だ。

「つっても、確定じゃねんだろ？　単に近いだけ。魔法ならフィーネだって使うじゃねぇか」
「フィーネとあたしとじゃ、理由が違うじゃない……。フィーネは自力で覚えたものだろうけど、あたしの場合ほとんどそういうのがなかったんだもの……」
俺の言葉にも弱弱しい返事しか返ってこない。
こりゃ相当参って……。
「最悪、あたし一人でやってかなきゃいけなくなると思うと……」
と、真子の奴が一瞬俺の目を見た。
視線が合った瞬間、俺はジト目で真子の方を見た。
一瞬だが見えた真子の目は、弱っているどころか力強さすらともなって見えたのだ。
今弱弱しく見えんのはみんな演技かコン畜生が。俺の心配を返せ。
だが俺の視線も真子の演技も気が付かない礼美は、素早く真子に近づいてその頭を掻き抱いた。
今目の前にいる、見た目、弱弱しげな少女が消えてしまわないようにしっかりと抱きとめた。
「そんなことないよ真子ちゃん！　私が、そんなこと絶対させないよ！」
「ありがとう、礼美……」
豊かな胸部に包み込まれて、真子の表情はうかがえない。光太は二人の友情を篤く見守っている。俺は真子の奴を羨ましく眺めていた。俺だって健全な男だし。
しかし同じ場所同じ学校同じ時間生きてきたはずなのに、どうして神様ってやつは不公平なのかね。礼美は実り多く幸豊かなボディ

なのに、真子の奴は両面。

「――」

……不埒なことを考えていたら、真子が凄絶な眼差しをこっちによこした。それ以上考えたら殺スと。

つってもこっちはてめぇの真意が読めねぇんだよ。せめて演技始める前にこっちに何か一言よこせよ。適当なこと考える以外に仕事ねぇじゃねぇか。

若干ふてくされてやるが、真子はそんな俺にかまわず演技を続けたままそっと礼美から体を離した。

「ありがと、礼美……」

「真子ちゃん……」

大丈夫だというように笑顔を見せる真子の様子に、それでも不安が募る礼美は意を決したように顔を引き締め、そのあとすぐに笑顔になって光太と俺の方に振り向いた。

「ねえ、光太君、隆司君！　何かして、遊ぼうよ！」

「はい？」

「……うん、いいよ！」

礼美の言葉に疑問符を浮かべる俺に対し、光太は一拍置いたがすぐに元気よく返事をした。

立ち上がって、礼美と真子のそばに近づくと対面のベッドに腰を掛けた。

「昨日はいろいろあって、すぐ眠っちゃったしね……。何して遊ぼうか？」

「トランプ……はないんだよね、アハハ……」
「ないなら作ればいいんじゃないかな？　紙は豊富にあるって団長さんが言ってたから、メイドさんにお願いして、堅めの紙と色ペンを持ってきてもらえれば……」
「あ、そっか！　じゃあ、私ちょっと行ってくるね！」
「僕も行くよ。隆司、真子ちゃんをお願いしててていいかな？」
「へ？　お、おう」

あれよあれよという間にトランプすることになって、トランプを作るための素材をメイドさんにもらうために、光太と礼美は連れだって部屋を出て行った。
あっという間の展開に呆然としていると、真子の奴がつかれたようにため息をつくのが聞こえた。

「まあまあかしら。とりあえず、あいつらを二人っきりにするのは成功ね」

……つまりあいつらに共通の目的を与えて二人っきりにするのが目的だったのか？　そのためだけに魔族云々の演技を？

「……お前もようやるわ」
「利用できるものは何でも利用よ」

ひきつったような笑い声をあげてやると、真子の奴はさっぱりと返事を返してくれた。
こいつのこういう一面は見習うべきなんだろうけど、さすがにここまで割り切れんわ……。

「しかし魔族云々ってのはマジなのか？」
「さあ？　少なくともフィーネがそういってたのは本当だけど……。

もしそうなら、あたしは落ちるところ間違えたのかしらね？」

軽く肩をすくめた真子。

最悪、この国全部が敵に回るかもしれないってのに、のんきなもんだぜ。

まあ、こいつなら一人でも案外うまく立ち回るんだろうけどよ。

しかし、俺はこいつの言葉に自分を顧みてちょっとへこんだ。

「お前が魔族なら、俺はいったいなんなんだよまったく」

光太と礼美は間違いなく女神だろう。そして真子が魔族。

なら体がひたすら強力になってる俺は？

「体の強化に魔術言語（カオシックルーン）がいらないって話だし、女神でいいんじゃないの？」

「その魔力を使う感覚すらわからないうえに、その強化って意識的にやってる話だろ？　俺、別に意識して強化してるわk」

ドガシャーン！

勢いよく投げつけられた花瓶を顔面で受け止める俺。

叩きつけられた花瓶は、むしろ俺の顔の堅さに負けて粉々に砕け散る。

「あらほんと。鼻血も出ないのね」

投げつけた張本人は清々しい笑顔で俺の変化を眺めている。

いや確かに不意打ちで花瓶投げつけられりゃ、強化もできるわけねぇだろうけどよ。

……さっきいろいろ考えてた復讐かこの野郎。そもそもなんで俺

の考えが読めるんだよ。

「顔に出てんのよあんた。わかりやすすぎるわ」

また人の心読むし。今度は冷ややかな視線付ときたもんだ。

やってられなくなった俺は、顔についた水滴を掌で拭って立ち上がる。

「ちょっと。どこ行くのよ?」

「着替えだよ。さすがにこのままじゃいらんねぇだろうが」

先ほどの花瓶攻撃のおかげで、着ている制服だけじゃなくて床までぐっしょり濡れてしまった。最後まで装飾の役目を果たせなかった花も、心なしか無念そうに床にくたっと伸びている。

「着替えって、替えなんてあるの?」

「お前の部屋にもタンスあるじゃねぇか。中に替えの一着でもあるんじゃねぇの?」

俺は濡れたシャツのボタンをはずしつつ、部屋を出て行った。

で、タンスの中に入っていたシャツに着替えて戻ってみると、トランプの材料と結構な量の食べ物と飲み物に加え、なぜかメイドさんと神官服をきた俺たちと同い年くらいの男が部屋にいた。

「あれ?　誰そいつら?」

「あ、隆司。こちらはメイドのメアちゃんと神官見習いのヴァンくん」

「食べ物も必要かと思って、手伝ってもらったの。それに、今夜のトランプ仲間だよ!」

輝かんばかりの笑顔で答えてくれた二人だが、肝心の連れてこられたメイドと神官は挙動不審である。ひたすら周囲と俺たちの顔とを見比べている。

肉食動物を前にした小動物か、拉致られてきた子供って感じだな。

「な、なんですか、トランプ仲間って!?」

「わ、私たちが勇者様たちとご一緒しても、本当によろしいんですか!?」

何も知らされてないのか、あるいは勇者の部屋にいるという緊張感か、若干声が裏返っているように聞こえる。

あー……。こいつら、さては強引に押し切って連れてきたな……？

光太も礼美も、友達が落ち込んでるといつもは発揮しない強引さで周りを巻き込んで、友達を元気づけようとするからなぁ。

真子の方を見ると、「余計な連中を……」って顔でメイドと神官の後頭部を睨んでるな。こいつとしては、トランプで夜過ごして少しでも光太と礼美の親睦を深めたかったんだろう。

まあ、こうなっちまったら仕方ねぇ。メイドと神官……メアにヴァンだったか？　二人にゃ悪いが、今夜一晩付き合ってもらうとしよう。

俺は挙動不審な二人の生贄に黙とうをささげつつ、トランプを作り始める光太と礼美の手伝いを開始した。

なんにせよトランプがなきゃ、はじまらねぇしな。

Ｎｏ．７：ｓｉｄｅ・ｒｙｕｚｉ「四人で過ごす夜」（後書き）

作戦会議！　というよりは修学旅行の夜って感じですが。
これで二日目、三日目以降はゆっくりフラグ強化の話になると思われます。
おもに光太と礼美の周りの連中ですが。
果たしてメアちゃんとヴァン君はそのフラグに入れるのか！？

No．8：side・mako「小さな魔法使いたち」

思いのほか盛り上がったトランプ大会の翌日。
あたしと礼美が魔導師団の詰め所へといってみると、見習いのヴァンとやらが興奮気味に周りに昨日のトランプ大会のことを自慢していた。
いやあれは……自慢というより宣伝？　聞こえてくる内容が半分以上礼美に関することだし。
礼美様はお優しいとか美しいとか可愛らしいとか、そんなんばっかり随所に出てくるんだけど。礼美の正面や隣には絶対おかないようにしたんだけど、逆に観察する間を与えた感じになっちゃったのかしら……。

「真子ちゃん？　どうしたの？」
「……なんでもない」

ちょっと不機嫌になったのが伝わっちゃったのか、礼美が不思議そうに首をかしげてきた。
それでこちらの存在に気が付いたらしいヴァンとその周りの人間がこちらを見て、口々に礼美の名を呼びながら近づいてきたので、あたしはいったん離脱した。

「レミ様！」
「あ、ヴァン君。昨日はありがとうね」

礼美が花咲くように微笑むと、途端に緩むヴァンとゆかいな仲間たち。わかりやすいわよねー。
ため息つきつつフィーネの姿を探すと、向こうからこちらに近寄ってくるところだった。

その胸には不釣り合いな大きさの本を抱えている。装丁に書かれている魔術言語（カオシックルーン）を見るに、死霊術の類のようだ。

「マコ！」

「はぁい、フィーネ。元気そうね」

あたしの名前を元気よく読んだフィーネは、きょろきょろ周りを見回して誰かを探すようなしぐさをした。

「よし、おらんな……」

「おらんって、誰が？」

「オーゼじゃ。奴がおると、いろいろうるさいしの」

警戒するように唸り声をあげ、オーゼさんがいないのを確認したフィーネは、あたしの服の裾をチョンとつまんでイスと机がある場所まで誘導してくれた。

いやなんでわざわざそんなとこつまむのよ。思わずかわいいとか思っちゃったじゃない。

礼美たちのいる場所からそこそこ離れた長机に並んで座ったあたしたち。フィーネは抱えていた本を机の上において、改めるようにあたしに向き直った。

「よし。マコよ、実は折り入って話があるのじゃが……」

「なに？」

話って……昨日の魔族云々のことかしら？　もしそうなら、いきなり離脱イベントってことになるけれど。

スゥッっと、自分でも驚くほど心が冷えていくのがわかる。魔族呼ばわりに、怒りを感じてるってことなのかしら。それとも、悲しんでるのかしら？　ちょっと自分でも不明瞭ね。ホントに魔族呼ば

わりされたら、どうなるかわからないわね……。
フィーネはそんなあたしの様子に気が付いているのかいないのか、フィーネは興奮したように頬を赤く染めながら、あたしにこう頼んだ。

「この本を読んでもらえんか！？」
「……この本を？」

ずいっと差し出された本の表紙を指でなぞり、いぶかしげにフィーネの顔を見る。
その顔は今か今かと待ちわびる、子供のような……いや子供なんだけど……期待するような子供の表情だった。

「……いや、こんな本位読めるでしょ？　宮廷魔導師なんだし」
「いいや読めぬ！」

あたしの返答への回答は、やたらに自信満々だった。胸を張るところじゃないわよ。

「もともと私が師事しておったおばあさま……先代の宮廷魔導師は私たちにすべてを授けてくださる前に召されてしもうて、まだわからぬことが多いのじゃ……」
「そんなんでよく宮廷魔導師勤まるわね……」

あたしの素直な感想に、フィーネは疲れたようにため息を返してくれる。

「先代の指名じゃったから……これでもいろいろ大変なんじゃよ……？」

キャラ作りとか、とボソッと漏れ聞こえてくる愚痴。
その喋り、キャラ作りだったんだ……。
だがフィーネは首を振って去来したらしい何かを振り飛ばすと、あたしの方に押した本を見つめる。

「魔術言語（カオシックルーン）の基本的なことや、そこからの発展形は一通り終わっておったんじゃが、こういった特殊分野に関するものに関してはまだ完全に終わっておらなんでな。おかげで解読するにも一苦労じゃった……。じゃが！」

そこで力強く拳を握って、あたしの顔をまっすぐ見つめた。瞳の中に宿る光は、知的探究心に燃える科学者のようであり、興味をひかれる事柄を前に期待を膨らませる子供のようでもあった。

「そこで出てきたのがおぬしじゃマコ！」
「あたし？」
「うむ！　何の補助もなく、あっさり魔術言語（カオシックルーン）を読解してしまえるおぬしなら！　この本に書かれた内容も読めるはずなのじゃ！」

あたしは言われて、ペラペラと本の中を読んでみる。読んでみるが……わざわざ知りたい内容じゃないわこれ。死体の作り方はともかく、その内臓から別の使役獣作る方法とか、痛みなく人を殺傷する呪文とか、書いたやつの性格が悪いことを全力でこちらに伝えてくる内容だ。
中を読んでげんなりするあたしにかまわず、さらに拳を振って力説するフィーネ。

「読めぬ魔術言語（カオシックルーン）を前に、私は半ばあきらめておった！　いっそ魔王軍に投降していろいろ教えてもらうおうかとも思っておった……！　じゃがおぬしがおるなら、おぬしが教えてくれるならそれも必

要ではない！　頼む、どうかこの通りじゃ！」

ガバッと勢いよく頭を下げてくるフィーネのつむじを見つめつつ、あたしは何とも言えない表情になっていた。冷えた心も、ぬるま湯につかったように溶けていくのがわかる。

まさか昨日の魔族云々って、ここにつながる予定だったわけ？じゃあ、孤立するかもしれないっていうのはあたしの取り越し苦労？

確認するために、あたしはフィーネに質問してみることにした。

「じゃあ、聞くけどフィーネ。あたしが魔族だったらどうするわけ？」

「？　どうするとは？」

きょとんと首を傾げられてしまった。ちくしょう可愛い。

「だから、魔族よ？」

「？」

今度は反対側に首を傾げられた。わざとやってんのかしらこの子。

だが、これで分かった。少なくとも目の前の少女は、あたしが魔族だったとしても知らない魔術言語（カオシックルーン）教えてくれる先生くらいにしか考えていないということが。

「……はぁ。まあいいわよ」

「本当か！？」

あたしが首肯した瞬間、フィーネの輝きが数倍に増した。うおぉ、まぶしい！

まあ、本を読むくらいなら別にいいわよね。小さな子供に絵本を読むようなものでしょ。内容がアレでも。

そう考えて死霊本を取り上げようとした瞬間、あたしの背後から伸びた小さな手でかすめ取られてしまった。

「あら？」

「ぬ！」

「フン、ダッセー奴。こんな奴に習おうとするなんてよ」

小生意気な言い草に振り返ってみると、フィーネと同い年くらいに見えるガキンチョがそこにいた。

悪ガキの代表格みたいな顔してるせいで、体に纏う魔導師のローブが死ヌほど似合わない。むしろ半袖に短パンの方がよほど似合うだろう。

悪ガキはその手に持った死霊本をぺしぺし叩きながら、フィーネを小ばかにしたような顔で睨みつけた。

「仮にもきゅーてーまどーし様が、ぽっと出の見習い魔導師に教えを乞うなんて、恥ずかしいと思わねぇのかよ？」

「知らぬことを知っておるものに教え乞うのは当然のこと！　おばあ様もそう言っておったじゃろうが！」

「それがダセェってんだよ。この国にお前ほど魔法に精通した奴なんかいねぇじゃねぇか。だってのに、こんな頭の悪そうな奴に聞こうとする、その根性がよぉ」

「貴様、おばあ様が解析なさった召喚魔法陣によって呼び出されたマコ達を侮辱するか……！？」

頭の悪そうな奴に頭が悪そうって言われた。死にたい。

……それはともかく、この状況何とかならないかしら？

あたしは別に大人ですから？　こんな子供にとやかく言われても、大人の余裕ってやつでスルーできますけど？

問題はフィーネの方ね。あたしたちを通じておばあ様とやらが侮

辱されたと受け取ったわね。顔が真っ赤で今にも爆発しそうだわ。

「フン。こんなうそつき魔族なんかより、俺の方がよっぽど優秀だぜ」

「マコがうそつき魔族じゃと！？」

「昨日だって魔法使って見せたけど、あんなの教本読めば誰でも使えるクズ魔法じゃねぇか。そんなの使えた程度で魔術言語（カオシックルーン）が理解（わ）できる（か）なんて絶対ウソじゃねぇか！」

オーケー小僧、そこに跪け。あたしを魔族呼ばわりした罪は重いわよ。

あたしは微笑ましい子供たちの喧嘩を笑顔で見つめる優しいお姉さんを演じつつ、頭の中でさっき見た死霊本の中にあった「死ヌほどの激痛が全身を襲うけど、絶対に気絶できない拷問魔法」の構成を丹念に丹誠に練り。

「コラッ！」

「うわぁ！？」

――次の瞬間、悪ガキの体が宙に浮いていた。いや、テレキネシスの魔法構成を編んだ覚えはないわよ？

よく見れば、悪ガキの後ろにいつの間にか礼美が立っていた。あんた、いつの間にそこに？

礼美は引っ掴んだ悪ガキの襟首を持って自分の方に体を向き直らせ、地面におろして両肩掴んで逃げられないように体を固定した。

「真子ちゃんとフィーネちゃんに謝りなさい！」

「な、なんだよお前！？」

「誰でもいいわ！　二人に謝りなさい！」

いつにない真剣な調子で悪ガキに詰め寄る礼美。悪ガキはその剣幕に飲まれ、うろたえたように手を振り回す。

あらやだこの子、お母さんモード入ったわね。こうなると長いわよー。

「あなた、自分が真子ちゃんとフィーネちゃんに何を言ったのかわかってるの!?」

「な、なんだよ!?　本当のこと言っただけじゃないか!!」

「真子ちゃんは、魔族じゃないしうそつきでもない！　フィーネちゃんはただ素直に真子ちゃんに知らないことを教えてもらおうとしただけ！　あなたはそんな二人を傷つけたのよ！」

うーん、清々しいほどまっすぐにそういわれると、なんかちょっぴり照れちゃうわねぇ。

フィーネはいきなり出てきてあたしと自分を援護してくれた礼美の存在に驚いて目を丸くしている。

そして取り巻きだった神官さんたちは、なんだなんだとこちらの方に近づいてきた。

「さあ、謝りなさい！」

さらに追い詰めるように礼美が激しく声を荒げる。

それに呼応するように、礼美の後ろの神官の皆様が悪ガキを責めるように睨みつける。

四面楚歌な状況だ。ザマァミロ。

「な、なんだよ……みんなして……」

悪ガキは全面的な自業自得の嵐にさらされて、だんだん涙目になっていき。

「――チクショウッ！」
「キャッ！？」

意外なほどの力強さを発揮して、礼美の両手を振り払った。
――一瞬だけど、自己強化の魔法を使ったわね。無詠唱発動とはやるなクソガキ。
そのままの勢いで本を持ったままズダダダー！と駆けていき、詰所の出口に手をかけながらこちらに振り返り、半べそで大声を上げた。

「俺は絶対謝らねぇ！　俺は何も間違ってねぇ！」
「待ちなさい！」
「俺は間違ってねぇんだぁ！」

礼美の怒りの制止も聞かず、本を持ったまま詰所を飛び出していく悪ガキ。
そんな悪ガキの姿を見ていて呆然としていたフィーネだが、バタンという扉が閉まる大きな音を聞いて我に返った。

「待て、ジョージ！　その本は置いていけぇ！」

ああ、そういえば持っていかれたわねあの本。解読されて、あの悪ガキが敵に回るとかそんな話になるのかしら。
と思ったら、詰所の前で何やら大声で言い合う音が聞こえたかと思ったら、今度はオーゼさんが入ってきた。その手に持っていかれたはずの本を抱えている。

「何やらジョージが大騒ぎしていたようですが、いったい何事ですか？」

ジョージが何をやらかしたのかは察しがついているのだろう。質問というより確認という声色だった。

「オーゼ！　その本は……」

「ジョージから取り上げましたよ。詰所の本は外に持って行ってはいけないといつも言っているのに……」

まったくとつぶやきながら、オーゼは迷いない歩みで本を戸棚の中に戻していった。

それを見て、フィーネが「ああ……」と残念そうな声を上げる。ああ、本棚に刺さってる札は読めないけど、あの辺りは子供が呼んじゃダメ系の本がそろってるのかしら。高さ的にも、届きそうにないしねぇ。

どうでもいいけど地味に不便ね。魔術言語（カオシックルーン）は読めるけど、この世界の公用言語が読めないっていうのは。

「それで、一体何が？」

「……いいえ、なんでもないですっ」

再度のオーゼの質問に答えたのは、礼美だった。

礼美は努めて明るく笑顔を作り、なんでもないといったように両手を広げてみせた。

「ただちょっと、私が興奮しちゃって！　魔術言語（カオシックルーン）って、いろいろあるんですね！」

「……ええ。なにしろ、基本言語だけで、百近い数の文字が存在しますからな」

オーゼは礼美の言葉に小さくうなずいて、別の本棚から一冊の本

を取り出した。えーっと、「魔術言語（カオシックルーン）の基本　～魔法を始める第一歩～」？　いちいち魔術言語（カオシックルーン）で書く意味あるのコレ？

オーゼが背中を見せた瞬間、礼美は急いで後ろにいた神官たちの方を振り向いて、

「みんな、ごめんね？」

と片目をつむって小さく舌を出し、すまなさそうな笑顔でそうつぶやいた。オーゼに対しての嘘のことだろう。

それだけで意思疎通が図れたのか、一糸乱れぬ動きで神官たちはうなずいた。調教されすぎよあなたたち。

……礼美は、ジョージのことは自分でけりつけるつもりかしら？　でも、オーゼはそれを理解したうえで、礼美の発言をスルーしてるくさいし……。

「なんかめんどくさいフラグが立ったかしら……」

「？　ふらぐ？」

あたしがボソッとつぶやくと、聞こえていたらしいフィーネが反復してきた。

なんでもないのよーと、フィーネの頭をなでてあげると、くすぐったいのか猫のように目を細めて気持ちよさそうに喉を鳴らしてくれた。

ああ、癒されるわぁ……。

Ｎｏ．８：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「小さな魔法使いたち」（後書き）

悪ガキと世話焼きなお姉さんのコンビは定番ですよね？
ジョージ君に関しては、まあそのうち彼のピン回しでも。
続くフラグは女騎士！　こっちも王道だよね！

No．9：side・ryuzi「野外訓練のお時間」

「来い、リュウジィ！」

猛るように吠える団長さんに応えるように、俺は素手で突撃する。
まず右拳でパンチを叩きこむが、棒であっさり弾かれる。
めげずに今度は左。やはり弾かれた。
むきになって両手でラッシュを叩きこんでやるが、あっさり全部弾かれてしまった。

「ちっ！」

ならばと今度は弾かれないほどの力を込めて殴りかかると、あっさり避けられて背中を強く叩かれる。
一瞬息が詰まるが、それにかまわず振り向きながら蹴りをお見舞いしてやる。
でもバックステップで避けられた。
棒を肩に担ぐような格好の団長さんは、何度かうなずきながら俺の動きを分析してくれる。

「まだまだ動きが直線的だし、読みやすいな。身体能力が変わっても、経験がそれに追いついてない感じだ」
「まあ、武術とかの経験ないし、喧嘩やったことあるっつってもいつもやってたわけじゃねぇし……」
「それから、力の出し具合とかも測り兼ねてるな？　人間相手に、どれだけ力を出せばいいのか……」
「むう」

団長さんの言葉に、俺は口をへの字に曲げて自分の拳を見つめた。

実はそうなのだ。昨日、騎士団員の一人に手加減を誤ってしまい、その片手を骨折させてしまった。

それ以降、誰かが怪我をしないようにと団長さんが相手をしてくれているのだが、俺の方は手加減の具合がほとんどわからず、拳を打つにしても蹴りを放つにしても、向こうで体を動かしていた時よりも遅い感覚で打っているのだ。

結果として子供のようにあしらわれているのだが……。

「遠慮するな……とか言ったら、頭が潰されちまいそうだからいわねぇが、こうした訓練よりも自分の力がどの程度なのか把握するほうが先かもな」

「かなぁやっぱ。でも、それってどうしたらいいんだよ」

ぐっぱぐっぱと握ったり開いたりを繰り返す俺の拳。

力の入れ具合は今まで通りという感じだが、そこにどれだけの力が込められているかがいまいち把握できない。

異常なほどの身体強化っていう特異な力があったのはうれしいけど、それを持て余すようじゃ宝の持ち腐れだよなぁ。

ため息ついて思い悩んでいると、団長さんが顎の無精ひげをなでながらうーんと唸り声をあげた。

「やりようはあると思うが……一番は壊してしまってもいいものを全力で壊してみるとか」

「巻き藁とか？」

「だな。あとは、ハンターズギルドに行って、討伐対象の動物に全力で挑んでみるとか」

「ハンターズギルド……」

そういやアルトがちらりと「ギルドが肉を卸す」みたいなことを言ってたけど、その大元かな。もしそうなら、肉を手に入れるのと

修行とが一緒にできるかも！
そう思って口を開こうとした瞬間、団長さんの頭ががっしと握りしめられた。

「団長？　勇者様の訓練も大変よろしいかと思われますが、それよりも先に済ませなければならない決済書類の始末が先かと思われますが？」
「え、まだ残ってたっけ？　俺全部片したと」
「ご自分の机の中に書類を隠すのは片したとは言いません。さあ、参りますよ」

がっしと団長さんの頭をつかんだのは、妙齢の女性騎士、副団長さんだ。
そのままずるずるとドナドナされていく団長さんは、申し訳なさそうに俺に向かって掌をヒラヒラと振ってくれた。

「つーわけで悪い、適当にやっててくれー。そのあたりに植えてある巻き藁は全部ぶっ壊していいからー」
「えー……」

何とも言えない適当な物言いに、思わず呆然としたつぶやきが声に出てしまう。
適当にやっててっていわれても……昨日の一件のせいで、普通の騎士の人たちは俺のこと恐怖の目で見るし、光太の奴は――。そういやどうしてるかな？
俺は少し気になって、光太の姿を探す。
すると、木剣を持って一人の女騎士と対峙しているところだった。
両者青眼でにらみ合い、お互いに一歩踏み出す機会をうかがっているようだ。
周りでは威勢のいい騎士たちの掛け声が聞こえるが、二人を取り

巻く空間だけぽっかりと穴が開いたような静寂に包まれている。
――先に仕掛けたのは、女騎士の方だった。

「っしぃやぁぁぁぁ！！」

鋭い掛け声とともに振り上げられた木剣が、光太の頭へと振り下ろされる。
光太の木剣の切っ先が、女騎士の刃を軽くはじく。
同時に繰り出される突きを、返す刀で受ける女騎士。
光太が一歩後退すると、女騎士が一歩踏み込んで打ち込む。
木剣で受ける光太。鍔迫り合いの形になった。
そのままの形で、互いに打ち合いを始める。だがしっかりと握られた木剣はぶれることなく、互いの体も一歩として譲らない。
そのまま千日手になるかと思われたが、光太がその状況を打ち崩す。
打ち合おうとするその瞬間、木剣で受けずに、そのままの体勢で少し体を引いた。

「！？」

あるべきはずの手応えの消失に、女騎士の表情が驚きに歪むのがここからでもわかる。
そのまま前傾姿勢で倒れそうになる女騎士の体を、光太が両手で支えてしまった。

「っと、大丈夫ですか？」

申し訳なさそうな微笑と謝罪に、女騎士は憮然とした表情で答えた。

「……光太様。今のは余りといえば余りでございます」
「ごめんね？　今のは正直、普通に打ち崩せる気がしなかったから……」
「だからといってお体を引くなど！　私が、その……そう、常以上の強さと速さで打ち込んでおりましたらぁ……そのぉ……」
なんか急に怪しげな雰囲気になってきやがった。遠目でもわかるくらいに女騎士の顔が赤いし。
光太は不思議そうな顔で笑顔を作りながら、相変わらず抱きしめるような体勢で女騎士の言葉を待っている。
いろいろな意味で見ていられなくなった俺は、ため息とともに巻き藁のそばに移動。
そしてせっせこ巻き藁を準備していた特徴がないのが特徴といわんばかりの顔の騎士に声をかける。
「ちょっといいかー？」
「あ、はい！　自分に何か用でありますか！？」
背中から声をかけただけなのに、エライ勢いで敬礼をとられてしまった。ちょっと申し訳ないと思いつつ、巻き藁を指差した。
「えっと、巻き藁使ってもいい？」
「は、もちろんであります！　武器は何を？」
「武器っつーか、素手なんだけど……」
言いつつ俺は巻き藁の前に立ち、二、三度軽く飛び跳ねる。
それから右手を引くような半身立ちで構え、軽く右拳を握り込む。
えーっと、拳が当たる瞬間にギュッと握り込むと威力が上がるんだよな……。
そんな俺の様子に驚いたらしい騎士が、あわててそばにあった箱

の中を探り始める。

「は？　素手？　ちょ、せめてバンテージを巻いてください！」

一生懸命包帯探してくれてるけど、正直巻き藁くらいじゃ壊れないよ俺の拳？

そんな益体もないことを考えつつ、俺はボールを振りかぶるように拳を構え、左足をあげ……。

「――――っりゃぁ！！」

踏込と同時に、勢い良く拳を巻き藁に叩きつける！

パァン！！！

たいした手ごたえもなく、勢いよく爆ぜる巻き藁。

「あれ？」

思わず間抜けな声が上がる。

折れるでも割れるでもなく、爆ぜた。しかも風船とかそういうのじゃなくて、巻き藁が。

力強く振りぬいた拳は巻き藁の向こう側にぴったりと停止している。

拳を引いてしげしげと眺めるが、傷一つ見受けられない。叩きつけた瞬間も、たいして痛くなかったし。

巻き藁の方を見ると、砲弾か何かに撃たれたような傷跡を残して、上半分がきれいさっぱり消滅している。破片は細かく砕けて散らばっているらしく、ほとんど見つけられない。

何とはなしに振り返ると、訓練していたはずの騎士たちが壮絶な

表情でこっちを見ている。きっと音が聞こえたんだろう。インパクトの瞬間を見てしまったらしい騎士なんかは、絶望に近い表情だ。

気になって隣を見てみると、包帯を手にした騎士は顎が外れたのかと心配したくなるくらい大きな口を開けてこっちを見ていた。

「……大丈夫か？」

「……っは！？」

ヒラヒラ目の前で手を振って見せると、正気を取り戻したのか目に光が宿り、なぜかいきなり土下座の体勢になった。

「ももも申し訳ありません！　自分の準備が甘かったせいで巻き藁が、巻き藁がぁぁぁぁ！！」

「いや、これ全面的に俺のせいじゃない？」

ねぇ？と騎士の皆さんの方に振ってみると、一糸乱れぬ動きで肯定してくれた。

「ほらな？　だから土下座やめてくんない？　いろんな意味で申し訳なくなってくるから」

「いいえ、むしろ勇者様のお力を理解していなかった自分の責任！　この懲罰はいかようにでもぉぉぁぁぁぁ！！」

「懲罰て」

これはあれか、理解不能な現実を前に思考が混乱しているに違いない。決して俺の全力を垣間見たせいで恐怖を抱いたとかではない。と思う。

どうしたものかと頭をがりがり掻いていると、さっきまで剣の稽古をしていたはずの光太がこちらの近づいてくるのが見えた。その隣には、いまだほんのりと頬を染めている女騎士の姿も見える。

「隆司！　今、なんだかすごい音がしたけど、大丈夫？」
「んー、大丈夫なんだかそうじゃないんだか」

とりあえずありのままを口にしてみると、案の定光太は信じられないような表情で、いましがた俺が破砕した巻き藁と俺の顔を見比べる。

「隆司が、これを？」
「うん、そう」
「……お言葉ですが、真意を測りかねます。そのようなことを申して、いったいなんになるのです？」

いぶかしげな表情で問いただしてくる女騎士。どうやら俺が嘘をついていると思っているらしい。
まあ、ただの人間が巻き藁を木っ端微塵にとかありえないよな。なので、実演することにする。

パァン！

先ほどと同じ手順でもう一本巻き藁を粉砕してやると、女騎士は目を見開いて目の前の光景を見た。光太も同じ顔だ。いや、光太の方が純粋に驚いている風情だな。どっちでもいいけど。
俺は二本目の巻き藁をダメにしたことを、いまだに土下座姿勢の騎士に謝った。

「ごめんなー、二本も巻き藁ダメにしちゃって」
「いいえいいえ！　むしろ何本でもダメにしてやってください！　この哀れな見習い騎士に、実力の違いというのもの知らしめてやってくださいぃぃぃ！！」

「お前、自分が何言ってるかよくわかってねぇだろ」

人間って、混乱の極致に至るとこんな風になるのな。

「すごい……」

「ん？」

「すごいよ、隆司！」

称賛の声に振り返ると、光太が偉い勢いで顔を輝かせてこっちを見ていた。あれ、なんか賞賛されるポイントあった俺？

「僕は巻き藁なんて壊したことないけど、隆司は壊せるんだね！　知らなかったよ！」

「俺も知らなかったよ？　こんな風になるなんて」

「やっぱり隆司はすごいよ！　僕も負けてられないなぁ……！」

何やら良い刺激を受けたらしい光太が、ぐっと拳を握って決意も新たにしている。

……うん、まあ、結果オーライ？

自分に対する意味不明度は上がったけど、光太の士気は上がったし？　もうこれでいいや？みたいな？

もうなんか生暖かい気持ちで、ガッツポーズをとる光太を見つめつつ、隣で呆然としている女騎士の方に目を向けた。

ありえない、そう必死に目で訴えてくる女騎士の顔の前で手をふりふりしつつ、光太に問いかける。

「ところでこちらはどなた？　ずいぶん仲良かったみたいだけど？」

「あ、この人はアスカさん。騎士団で唯一の剣士らしくて、今の僕の剣の先生だよ」

「――ハッ！？」

光太の声を聴き、再起動を果たす女騎士。

「ド、どうもアスカと申します。よ、よろしくお願いしますです」

何やらぎくしゃくした動きで、あいさつしてくれた。

うん。恐怖ではないよね？　そうだよね？　どもってるのは純粋な緊張だよね？

「んー、光太がお世話になっているようで……」

「いえいえ、光太さ……勇者様のおけいこは、団長より言いつかっております事項ゆえ……」

「アスカさん？　大丈夫？　なんだかおかしいよ」

「だ、大丈夫ですっひゃう！？」

ぎくしゃくした動きを見咎めた光太が、ペタペタとアスカの体を触って異常がないかを確認し始めた。

いや、確かにアウトな部位は触ってないけど、場合によっては訴えられるぞお前？

「……大丈夫そうだね、よかった」

「よ、よかった？」

「僕のせいで怪我しちゃったら大変だし……女の子だものね」

そう言って微笑む女殺し。真正面からそれをとらえてしまったアスカさんは、ボムと音がしそうな勢いで顔を真っ赤に染めた。

……堕ちたな。

「あ…あうあうあうあうぅ……」

「ど、どうしたのアスカさん！？　本当に大丈夫！？」

二人の間にどんなやり取りがあったかは定かではないが、もうこうなったらアスカの存在は無視できねぇなぁ。どうしよう。

俺は顔を真っ赤にしたアスカの両肩を揺さぶる光太＋土下座したまま顔を上げない名前も知らない騎士さんに囲まれるという、とても貴重な体験しつつ美しい青空を仰いだ。

ホントどうしてくれよう、この状況……。

Ｎｏ．９：ｓｉｄｅ・ｒｙｕｚｉ「野外訓練のお時間」（後書き）

わかりやすくフラグを立ててみんとす。
その一方で分かりやすく化け物にしてみる隆司君。握力×重量×スピード＝パワー！
次回は……神官かなぁ？　たぶん？

No．10：side・mako「女神の再顕現」

「うぅ～」

分厚い本を読みながら唸り声をあげる礼美。本好きなこの子にしては、珍しい光景だわ。

まあ、仕方ないんだけどね。何しろ本は本でも、魔術言語（カオシックルーン）で書かれた本だもの。

題名は「魔術言語（カオシックルーン）の基本　～魔法を始める第一歩～」だ。これから魔法を始めようという、魔法初心者のために作成された魔導書らしい。

題名から内容に至るすべてが魔術言語（カオシックルーン）でできているという、初心者に全く優しくない作りなんだけど、オーゼさんによると読める人間に教えてもらいながら学べるようにという配慮らしい。

まあ、あたしらにはあまり関係ない話だ。言葉は通じるけど文字は読めないんだし。

「真子ちゃーん、ここなんて読むのー？」

「だからあたしじゃなくて、オーゼさんかフィーネに聞きなさいって」

唸り声をあげながら、なぜかこちらに近づいてくる礼美にそういってやる。

向こうではおいでおいでと手招きするフィーネと、そんな少女を微笑ましそうに見つめるオーゼさんの姿が。

だけど、礼美は不満そうに頬を膨らませながら首を傾げた。

「でも、真子ちゃんも読めるんでしょう？」

「そりゃ読めるけどさ」

ため息つきながら、あたしは礼美の読んでいたページを覗き込んでみる。

ほとんど読み進んでないようで、表紙から二、三ページというところか。ずらっと書かれているのは……日本語で言う五十音順、つまり魔術言語（カオシックルーン）の文字表だ。

ペラペラめくってみると五、六ページにわたって紙いっぱいにびっしりと魔術言語（カオシックルーン）が書かれてる。やたら多いわね……。

あたしとしても、礼美のためにこの本でやること自体はやぶさかではない。

でもまあ、あたしじゃ無理ね。

「読めるけど、あたしじゃ教えられないわよ」

「え？　どうして？」

今度は不思議そうな顔であたしを見つめる礼美。

それにあたしは首を振って答えた。

「読めるのはあくまで能力でだからね。数学問題を、途中式抜きに答えだけ理解して回答に書いてるような感じなの。あたしは途中式を一切知らず、答えだけはわかる。あんたに必要なのは、途中式でしょ？　だから、あたしじゃあんたに魔法を教えられないの」

「そうなんだー」

ほへー、とびっくりしたような顔になる礼美。

わかりやすく言うなら、ゲームをチート使いながら進行しているようなものなのよね。途中でどれだけ強い敵が出ようとも、チート活用でごり押しできるせいで、弱点なんかはわからない。

確かに便利は便利だが、こういった知識を一から伝えるのには不向きなのよね。

「というわけで、素直にフィーネに教えてもらいなさい」
「うむ！　教えちゃろ教えちゃろ！」
「ひゃう！？」

いつの間にか礼美の後ろまで来ていたフィーネに水を向けてやると、とてもうれしそうな顔でうんうんうなずいた。
びっくりして飛び上がる礼美の肩をつかんで向き直らせてやると、困惑しつつも素直にうなずいてくれた。

「う、うん。じゃあ、そうするね。フィーネ様、よろしくお願いします」
「うむ！　じゃあ、こっちにおいでなのじゃよ～♪」

若干地が出てきてるみたよ、フィーネ。
……なんていうのも野暮なくらい、フィーネってば嬉しそうね。
宮廷魔導師とはいえ、どうも見た目通りの年齢らしいからねぇ。
誰かにものを教えるなんて機会もなかなかないでしょう。
フィーネが本の一ページを指差しながらそれについて得意げに解説するのを、礼美は興味に深そうにうんうんうなずいて聞いている。
何も知らない深窓令嬢に、小さな少女が常識を教えてあげているようになんだか和む光景ね。
あたしは二人の小さな勉強会を邪魔しないように、そっとその場を離れた。
……しかし離れてもやることがないわね。使えそうな魔法を今のうちに探しておこうかしら。
そう考えてあたしが本棚の方へ向かおうと、体を本棚へと向けるとこちらをじっと見つめている青年神官と目があった。そこそこのイケメンだ。街で微笑み浮かべながらナンパとかしたら、かなりの命中率を誇りそうだ。ちょっと好みかも知れない。

びっくりしたあたしに、青年神官は小さく微笑みながら会釈をしてくれる。反射的にあたしも会釈し返すと、青年神官は笑みを浮かべたままこちらへ近づいてきた。

え、なにかしら？　あたしなんかやらかした？　あるいは魔族疑惑が確定!?

内心びくつくあたしのそばまで来た青年神官は、今度は会釈といえない角度で頭を下げてきた。

「昨晩は、弟がご迷惑をおかけしたようで申し訳ありません、マコ様」

「え、弟？」

思わぬ一言に、あたしは首を傾げる。

はて、こんなイケメンの弟にかかわった覚えは……。

首を傾げるあたしの様子に苦笑しつつ、神官はゆっくりと魔導師詰所の一角を指差した。

そこにいたのは周りにまだ昨日のトランプ大会の様子をしゃべり続ける、ヴァン君の姿が。よくネタが尽きないわね……じゃなくて。

「ああ、ヴァン君のお兄さんでしたか」

「ええ」

青年神官は小さくうなずいて、改めてあたしに名前を名乗った。

「ヨハンと申します」

「どうも。知ってると思うけど、真子よ」

あたしの物言いに、ヨハンさんは今度は苦笑ではなく小さく微笑んだ。

「ええ、存じ上げております」
「ありがとう。ところで、何か用？」
「用、とは？」
「いや、そっち向いた瞬間に目が合うのは偶然かなぁ、って思って」
あたしの質問に、ヨハンさんはちょっと驚いたような顔になった。
さすがのあたしも、振り向いた瞬間に目が合うのを運命って言えるほど乙女じゃないわよ？　ヨハンさんがずっとこっちを見ていたと考えるのが妥当なところでしょう？
驚きをすぐに照れたような表情になるヨハンさん。見た目より感情表現は豊かなのね。
「いや、申し訳ありません。確かにレミ様とマコ様のことを見ておりました」
「あら、やっぱりレミのことが気になるのかしら？」
あたしはからかうような表情でそういってみる。
だいたい礼美のことを見る奴は、男にしろ女にしろ礼美に強い興味を抱くのよねー。
童顔低身長のスタイル抜群の美少女だもの。気になるのも仕方がないわ。
……だったんだけど、ヨハンさんが見せたのは今まで出会ってきた人間とは微妙に違っていた。
「……ええ、そうですね」
ヨハンさんはそういって笑顔を浮かべた。
――純粋な興味や色恋を抱いた照れたような笑みではない、きわめて透明度の高い笑み。
その中にあるのは、あたしが今まで見たことのない感情だった。

「レミ様は、なぜ魔法を？」

あたしがその感情の色に戸惑っていると、ヨハンさんは礼美の方を見つめながらあたしに質問を返してきた。

「礼美が魔法を覚えようとしてる理由？」

「ええ。レミ様は、祈りのみで女神様の奇跡を顕現されるはずですが……」

その声色も、さっき見た笑顔のような感情が込められていた。

あたしはいぶかしく思いながらも、素直に答える。

「いや、さすがにそれだけで魔王軍とは戦えないわよ。素直に後ろで守られてるような性格でもないしね」

あたしとしても、礼美やあたしは光太たちの後ろであいつらの戦いをのんびり観戦といきたいのだが、礼美はそれを良しとしようとしない。

他人任せにしっぱなしというのが礼美の性に合わないのもあるし、光太や隆司が傷つくのを許せないというのもあるのだろう。

しかし礼美の運動能力が高いといっても、男子顔負けというほどではない。女子としてはハイレベル、にとどまっている。変に突っかかって行っても返り討ちにあうだけだ。

だからこそ、遠距離攻撃のための手段として魔法を覚えさせようとあたしは考えた。

そのままほっといたら、正直杖一本で光太たちと一緒に接近戦しかねないし。なら後ろから援護する形を覚えさせた方がまだ心臓に優しい。

「“あたしも光太君たちと戦う！”っていって、突っ込みかねないからね。なら、遠距離攻撃覚えさせた方が危険も少ないと思ったのよ」

「……なるほど」

ヨハンさんは小さくうなずくと、また例の笑みを浮かべた。

うーん、なんか調子狂うわね。まだ礼美に惚れてるとかわかりやすい反応なら――。

「――さすがはレミ様。まさに女神の再顕現と呼ばれるにふさわしい……」

ゾクリと、なぜか、総毛立つ。

その言葉に込められた感情故にか、あるいはその感情の深さ故にか。

あたしは悟る。ヨハンさんが礼美に抱いている感情の正体。

それは恋慕や情欲などでは決してない。

あたしたちの世界で、最も戦争の原因となってしまったもの。

ただそれだけならば何の問題もないはずのそれは、人々が多く集まり、その数と種類を増すごとに多くの争いを生み出した。

それはまったく同じもののはずなのに、まるで異なる性質を見せることすらあった。

その感情の名は、信仰。

ヨハンさんの言葉や表情がところどころ透明だったのは、その信仰の純粋さだったのだ。余計なものが混じる余地がないほど深い、信仰心ゆえに生まれたものだったのだ。

「容姿、能力、そしてその想いの深さ……。すばらしい、本当に素晴らしいお方です……」

……うわぁ……。

やばい、この人本物だ。本気で礼美のことを女神様と同一視してる……。

確かに礼美は意志ひとつで他人を癒せる、女神のような力を持って入るし、顔も可愛いけれど……。

まさか信仰の対象になるとは……。ここにきて、礼美ちゃんパワーアップ？

あたしがげんなりしている間に、ヨハンさんは礼美の方へと近づいて行った。

礼美の方はというと、フィーネの指導の下、掌に光球を生み出す魔法に成功していた。

「うむ！　うまいぞレミ！」

「ありがとうございます、フィーネ様！」

「調子はどうでしょう、レミ様」

「え！？」

「うぬ？」

不意にかけられた声に驚いた礼美があわてて振り返る。

そんな礼美の様子に、ヨハンさんは慌てたように膝をついた。

「も、申し訳ありません、レミ様！　私はレミ様を驚かせるつもりは……！」

「あ、いえ、いいんです！　ちょっと、集中し過ぎちゃって……」

いきなり頭を下げられて、礼美も慌てたように頭を下げる。

「集中していたところをお邪魔するつもりもなかったのです……！本当に、申し訳ありません……！」

礼美の言葉にさらに深く頭を下げるヨハンさん。

「いえいえ！　いいんですよ別に！」

礼美はそんなヨハンさんの態度に、さらに深く頭を下げる。

そのままお互いに頭を下げあう二人を見て、フィーネは目を白黒させている。

「な、なんじゃなんじゃ一体……」

「……あー」

どうしようこの状況……。

「ヨハン、頭をあげなさい」

あたしがヨハンさんに椅子をぶち込むか花瓶をぶち込むか割と本気で悩んでいると、オーゼさんが口を開いた。

声こそ穏やかだが、目頭を押さえている。どうもヨハンさんの扱いにはこの人も苦労しているみたいだ。

「しかしオーゼ様！」

「レミ様がよいと申されているのです。その御意思にまで反するつもりですか？」

「はっ！？」

その言葉に、ヨハンさんは天啓を受けたような顔になって、素早く膝についたほこりを払って立ち上がり、またまた礼美に恭しく頭を下げた。

「申し訳ございませんレミ様。レミ様の御意志を無為にしてしまう

ところでした……」
「いえ、いいんですよ！　わかってくだされば……」
あまりの変わり身の早さに、さすがの礼美も困惑気味だ。今までいなかったタイプだからなぁ……。
女神のごとく崇められることはあっても、女神そのものとして崇められるのは。
礼美はどうしたものかという顔でヨハンさんを見つめてたけど、何かを思いついたように手を叩いた。
「あ、じゃあ、えーっと……」
「ヨハンと申します」
恭しくヨハンさんが名乗ると、礼美はパッと笑顔になってヨハンにお願いを始めた。
「ヨハンさんも一緒に、私のお勉強手伝ってもらえますか？」
「私だけじゃ不満なの！？」
地ー。地が出てるわよフィーネ。
「いやそうじゃないんです！　でも、ところどころ専門用語が混ざるから……」
「うぬぅ……」
ああ、天才にはありがちよね。あたしも似たようなもんだけど。
年若い宮廷魔導師が窮している様子を見て、期待を込めた視線を向ける礼美を見て、ヨハンさんは少し考えるそぶりを見せてから口を開いた。

「……そういうことでしたら、レミ様が分からぬ専門的な部分だけを私がご説明する、という形でよろしいのでは？」
「むむぅ……そういうことなら……」
ヨハンさんが出した妥協案に、フィーネは不承不承というようにうなずいた。
礼美の教師役をとられなくて一安心、ってところかしら。
「お願いできますか？」
「私のような若輩者でよろしければ……」
「ありがとうございます！」
礼美の笑顔が輝きを増した。ホント嬉しそうに笑うわよね。
だがヨハンさんは、そんな礼美の笑みを正面からとらえてもぶれることなくそれを微笑で受け止めた。スゲー。いや、信仰心の方が上回ってるのかしら……。
勉強を始めた三人の背中を尻目に、あたしはオーゼさんに近づいた。
「ちょっと聞きたいんですけど、ヨハンさんってだいたいあんな感じ？」
「ええ。女神様への信仰心が強いのはよいことなのですが……」
どうもその信仰心、もはや崇拝の領域に届いているのだとか。
さらに、今回の魔王軍との戦闘で特にやる気になっている推進派の筆頭でもあるのだとか。
「めんどくさー……」
思わずこぼれる本音。

おそらくヨハンさんが礼美を慕って……信仰しているのは純粋な気持ちだろうけど、魔王軍との和平を目的とする礼美と衝突したりしないかなぁ……。

あたしはこれからやってくるかもしれない嫌な未来を振りほどくように、大きくため息をついた。

Ｎｏ．１０：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「女神の再顕現」（後書き）

そんなわけで神官さんです。信仰心ＭＡＸです。礼美ちゃんが女神様に昇格しました。

暴走シーン考えると残念なイケメンでしょうか？

次は魔女っ娘！

No. 11：side・ryuzi「彼らの日常」

一通り訓練も終わったということで、俺たちは魔導師詰所とやらに行ってみることになった。

発端は当然光太。魔法が使ってみたいとのことだ。

まあ、できれば程度の要望だったんだけど、正直やることもなかったし、向こうには真子も礼美もいるはずだ。冷やかしも悪くはねぇだろ。

場所が分からなかったんで、光太が仲良くなったアスカさんと、ついでになんか妙に味があった名前も知らない騎士の兄ちゃんと一緒に行くことにする。

「アスカ殿はともかく、なぜ自分も一緒なのでありますか！？」

「ノリと勢い」

「それだけ！？」

まあそれだけじゃなくて、少しでも仲のいい騎士を増やしておきたいという下心でもあるんだけどな。

光太の隣にアスカさんが立ち、俺が騎士の兄ちゃんの肩を強引に組んで進んでいると、目の前から同い年くらいの女の子が近づいてきた。

女の子はこちらのそばまでくると、まず光太の存在に目を丸くして、それからアスカさんに頬を膨らませながら詰め寄っていった。

「ちょっとちょっとアスカァ～！　どうして勇者様と一緒にいるのよぉ～！」

「どうしてもなにも、先ほどまで一緒に訓練していたからですが……」

「ぶぅ～！　あたしも勇者様と仲良くなりたいのにぃ～！」

妙に舌っ足らずで間延びしたしゃべり方だ。これが地か？
詰め寄られたアスカはため息をつきながら、光太の方に顔を向けた。

「申し訳ありません、勇者様。こちら、私の幼馴染の……」
「アルルって言いますぅ～。こう見えて、魔法使いなんですよぉ～」

アスカさんの言葉を遮って女の子――アルルが上目遣いで自己紹介した。
顔いっぱいの笑顔な上、わざわざ腰を折ってまでの上目遣い……。
俺が何とも言えない気分になっていると、光太は笑顔を返しながら挨拶を始めた。

「初めまして、アルルさん。僕は光太って言います。それでこっちが」
「隆司だ」
「はぁ～い。コウタ様に、リュウジ様ですねぇ～よろしくお願いしますぅ～」

おぉう……。すごい勢いで媚を売る声だぁ……。

「それでぇ、コウタ様はどちらに行かれるところだったんですかぁ～？」
「うん。魔導師詰所ってところで、魔法を勉強しようかと思って」
「そうなんですかぁ～！　なら、ご一緒しますよぉ～！　あたしぃ、これでも魔法使いですしぃ～！」

光太の行先を知って、これ幸いとばかりの売り込み……。わかりやすすぎる……。

光太はアルルの思惑を知ってか知らずか、嬉しそうにうなずいた。

「本当ですか！　それじゃあ、お願いします」

「はぁ～い！　がんばって、教えちゃいますよぉ～！」

そんなわけで一人加わった俺たちはまっすぐに魔導師詰所へと向かっていった。

「そういや、研究室じゃなくてなんで詰所？　名前的におかしくね？」

「それはですねぇ、基本的に魔法の研究は個々人で行われるからなんですぅ～。だから研究室は個人で持つものでぇ、みんなが集まる場所は公平性を重視してぇ、詰所って呼ばれてるんですよぉ～」

「へーそうなんだー」

「と申しましても、個人で王宮に研究室を持っておられるのは宮廷魔導師のフィーネ様くらいですので、ほとんど研究室と同義なのですがね」

「ぶぅ～！　それあたしのセリフゥ～！」

といった雑談を交えながら歩くと、あっという間に魔導師詰所へと到着していた。

両開きの扉に何やら文字の書かれたプレートがかかっている。読めないが、魔導師詰所と書かれてるんだろうな。

「はぁ～い、到着ぅ～。ここがぁ、魔導師詰所ですよぉ～」

「ここが……」

「じゃあ、真子ちゃんも礼美ちゃんもここにいるのかな？」

「まあ、魔法の練習するっつってたしな」

扉を開いて中を覗き込むと、ちょうど真子が何らかの魔法を成功

させているところだった。
ボムと景気のいい音と、勢いよく立ち上る火柱を見るに、炎系の魔法なのだろう。

「むぅ。相変わらず反則くさいの、真子は……」
「わかるんだから仕方ないじゃない。っと、隆司？」
「おう」

片手をヒラヒラ上げつつ中に入っていくと、真子がいぶかしげな顔でこっちを見た。

「あんた、訓練はどうしたのよ」
「今日は終わりってことで。あとは、光太の魔法訓練だよ」
「ふぅん……。で、この人だれ？」
「自分、ノリと勢いであります……」
「は？」

顔をひきつらせて珍妙な挨拶をする騎士の兄ちゃんを、アホを見る目で見つめる真子。
すっかりしょげかえってるけど、勇者御一行様とつながり作ってるんだからそういう顔されっと心外なんだけどな。
続いて入ってきた光太の姿を見た真子は、ジト目で俺の方を見返した。

「ちょっと隆司」
「みなまで言うな。わかってるから」

俺より後に入ってきた光太は、両脇にアスカさんとアルルを従えている。
これがどういう図に見えるかは……まあ、言わずもがなだろう。

ただ、これで俺が怒られるのは納得いかないぜ？

「そこ突くなら、俺はあれについての説明を求めるぞ？」

俺がそういって指差した先には、イケメン神官と昨日の……えーっと、ヴァンだったか？と一緒に魔法の勉強をしている礼美の姿。

しかもその二人だけじゃなくて、ほかの神官や男の魔法使いまで一緒になってる。

逆ハーレムってレベルじゃねぇぞ。

むしろ被害者を二人に抑えた俺は感謝されて……。

「あ、アルル、どうして勇者様と一緒なのよ！？」

「これからぁ、勇者様と魔法のお勉強なのぉ～」

「ずるーい！　アルルがやるなら、私も！」

「勇者様、こちらへ！　魔術言語（カオシックルーン）をお教えいたしますよ！」

「あ、抜け駆け禁止！」

「あたい、教本持ってくるよ！」

きゃいきゃい騒ぎながら光太を連れて移動し始める魔法少女たち。

光太はそんな少女たちの様子に困惑しながら、素直に感謝しつつ魔法の勉強を始めた。

ちなみにアスカさんは光太によって来る少女たちを睨みつつも、一歩離れた場所で直立不動の体勢をとった。監視のつもりなんかな？

「「……」」

思わず沈黙する、俺と真子。

わかってた。わかってたけどよぉ……。

「どうすんのよこの状況……」

「俺に言うなよ……」

あっという間にハーレム形成しやがる光太の女誘蛾灯っぷりに辟易しつつ、遠目でそのお勉強の様子を眺める。

「それじゃあぁ、コウタ様は魔法に関しては素人なんですよねぇ～？」

「うん。全然わからないかな」

「ならぁ、まずは光を灯す魔法から覚えましょうねぇ～。だいたいの魔法に通じますからぁ～」

「じゃあ、よろしくお願いします」

「はいぃ～、お任せくださぃ～」

にっこりほほ笑むアルル。周りの少女たちは取り仕切ってるのがアルルというのに不満はあるようだが、目立って騒ぎ立てるでもなく虎視眈々と光太との会話のチャンスをうかがっている。その瞳の輝きは狩人のそれだ。

あ、この光景にちょっと泣きそう。

すげぇ、向こうでの光太の日常っぽい。

「やばい、ホームシックになりそう……」

「奇遇ね、さっきからあたしもよ……」

そういう真子の視線の先を追うと、そこには礼美がいた。

「――つまり、女神様のお力を顕現するには魔法を使用する方法と、強く祈りをささげる二通りの方法があるのです。ですが、祈りをささげる方法は多くの人間と強い信仰心が必要となりますので、一般的な方法は魔法による顕現が用いられます」

「そうなんですか……」

「ですが、レミ様ならばどちらの方法も取れますでしょう。強き祈りも、魔法の力も、必ずやレミ様のお力になってくれるはずです」
「そんな……。真子ちゃんほどじゃありませんよ」

謙遜して照れたように笑う礼美。
そんな可憐な少女の様子に周りの男どもはデレデレと笑み崩れ…
…いや、隣に座ってる兄ちゃんはなんか違うな。なんだあれ。
でもこの光景も、礼美にとっての日常風景に他ならなかった。

「なんであいつらって、どこ行っても結局こうなるのかしら……」
「さあなぁ……」

ブレねぇよなぁ、ほんと……。
ただこれだけなら問題ないんだけどな……問題はこの先かぁ……。
未来を憂いてため息をつく俺。そんな俺の様子に、いまだに肩を組んでる騎士の兄ちゃんが心配そうな顔をした。

「大丈夫でありますか、勇者様」
「あ？　ああ……」
「もし、心配事があるならば、自分、話を聞くであります。話しか聞けませんので、解決にはなりませぬが……少なくとも一人で抱えずに済むであります」

強制的につれてきたうえ肩を無理やり組みっぱなしだってのに、俺を心配してくれるのか……。
思わぬ優しさに、涙腺が緩む。ちくしょう、天井の魔法の光が目にまぶしいぜ……。

「……私も、話くらいは聞けるのじゃ。今すぐ帰してやれぬことに責任も感じておる……。何か、できることはないか、マコ」

「うん、ありがとねフィーネ」

隣では、マコがフィーネの言葉に感動してその頭をなでなでしている。

優しいなぁ、こいつら……。

じゃあ、さっそくだけど愚痴に付き合ってもらっちゃおうかなぁ……。

俺と真子は二人を伴って礼美と光太からそれなりに離れた場所に移動して、円陣組んでボソボソと愚痴り始める。

「――だからな？　俺たちとしては誰かと付き合うとか人気があることに文句があるわけじゃないんだよ」

「問題は、そこから厄介ごとが発生するってことなのよ。色恋沙汰なんて犬でも喰わないっつのに……」

「それは大変でありますな……」

いやな顔せず俺たちの愚痴に付き合ってくれた騎士の兄ちゃんは、痛ましそうな顔でうんうん頷いてくれた。いい人だホント……。

「じゃ、じゃあ、おぬしらは、その、光太と礼美を付き合わせたいと思うとるわけなのじゃな……？」

一方のフィーネは、初めこそ大変そうだなぁ、って面して聞いてたんだけど、光太と礼美を付き合わせたいという話の流れになると顔を赤くして興味津々という様子で話に食いついてきた。

なんでそんな初々しい雰囲気なの宮廷魔導師殿？

「うん、まあ。あの無敵コンビがカップルになったら問題ごとも一気に解決しそうだし」

「一番の問題は、あいつらが他人の好意に究極的に鈍感ってとこな

んだけどな……」
「う、うむぅ……。それは大変なのじゃ……」
「話を聞くに、察しが悪いわけではなさそうなのでありますが……」
「受け取り方が問題なんだよなぁ。あの二人、他人の好意は好意として受け取るんだけど、その下心までは察しないからなぁ」
「底なしのお人好しなのよね。それで騙されることもあるんだけど、何度騙されても人を信じることをやめないし」
「それは美徳でありますな」
「過ぎれば悪徳だろ」

俺の辛辣な物言いに、騎士の兄ちゃんが苦笑する。なんか弟を見るような目なんですけど？

「で、でも、お互いまだ友達、としか思っておらぬのじゃろ？」
「そう。だから、なるべく二人っきりとかにしてもっと近づけたいんだけど……」
「ふ、二人きり……」

真子の言葉になんかもじもじし始めるフィーネ。いやだからその反応はなんなのよ？

「こっち来たときは、異世界にくりゃもっと仲良くなってくれるかと思ってたんだけど、あっという間に向こうにいた時と同じようになっちゃったのよねぇ……」
「どうなってんだよあれは本気で。チートってレベルじゃねぇぞ」
「ちーと？」

俺の言葉に可愛らしく首を傾げるフィーネ。
そんなフィーネを微笑ましく見つめながら、騎士の兄ちゃんが口を開いた。

「人というものは、身の周りが変化しても意外とその生活自体は変化しないものであります。それは細かい癖が原因だったり、本人の人柄そのものが要因だったりさまざまでありますが、コウタ様とレミ様がお変わりないのであれば、ああなるのは仕方なかったのかもしれないであります」

「……そういうもんなのか？」

「そういうものであります。実際自分も、農家の長男だったでありますがほとんど役に立たず、自分自身で口減らしのために王都へやってきたのでありますが、こちらでも役に立たず……」

「自分で言っててダメージ受けるなよ」

どよーんと落ち込む騎士の兄ちゃんの肩を慰めるように叩きつつ、俺は真子の方を見た。

「でもホントどうするよ？　この調子だと、またなんかあるぞ？」

「どうしろってのよ……」

真子は真子でげんなりと肩を落としている。

まあ、問題山積みな上に、個人的な問題は解決しそうにないってところだからなぁ。

俺たちは顔を見合わせるとため息をついた。

「「ホントどうしてくれようか……」」

向こうの方で何らかの魔法を成功したらしい、光太と礼美が浴びている賞賛が今は恨めしい。

俺たちがため息をつくと、騎士の兄ちゃんとフィーネがねぎらうように俺たちの背中を叩いてくれるのであった……。

No.11：side・ryuzi「彼らの日常」（後書き）

そんなわけで魔法少女のフラグです！　あんまりそれっぽくはならなかったなぁ……。

次回あたりからフラグ以外のお話を進行していきたいですー。

No．12：side・mako「朝食の一騒ぎ」

あれから結局増加するフラグを止めきれず、小さなものだけなら十本以上もフラグ立ててくれちゃってまぁ……。

ホントブレないわよねぇ……羨ましい……。

ぼんやりそんなことを思いつつ、あたしは朝食である固焼きのパンにチーズを塗り口に運んだ。

この国、肉の類は出てこないけど乳製品は普通に出てくるのよね。これなら肉牛くらいいそうなものだけど……。

結局この三日間、一口も肉が食べられてない隆司なんか、若干黒い気配を漂わせながらモソモソ目玉焼き食べてるし。なんで鶏肉がないんだって顔つきね。

そんな風に、王子たちとの恒例になっている朝食をつつましくいただいていると、何やらダカダカと騒がしい音を立てながら、貴族風味な男が食堂へと乗り込んできた。どうでもいいけど、貧相な見た目にカイゼルひげがめっちゃ不似合だわ。

ひげ男は王子の姿を認めると、肩をいからせながらこちらへと近づいてきた。

「アルト王子！」

「ああ、フォルクス公爵……」

王子はひげ男を認めた途端、疲れたようにため息をついた。ものすごい嫌そうね。隣に座るアンナなんか露骨に舌打ちしたし。いったい何者？

シャキシャキのレタスっぽい野菜を口に入れながら観察していると、王族の食事の場だってのにひげ男はつばを飛ばしながらアルトに詰め寄り始めた。

「いったいいつになったら騎士団は我がフォルクス領を取り戻してくださるのですか!?」
「公爵、そのお話はまたあとで……」
「いいえ、待てませぬ！　我が領地には、私の帰りを待つ領民たちが震えて待っているのですよ!?　だというのに、騎士団は一向に腰を上げない……。これはおかしなことではありませんか!?」

相手は王子だってのに、無思慮なやつねー。最悪、その場で不敬罪に問われても文句言えないわよ？
領民たちが震えている、というフレーズのあたりで礼美と光太がピクリと反応した。
でもひげ男はそれに気が付いているのかいないのか、ひたすら文句を飛ばす。

「だいたい王都の守りが先決だとおっしゃいますが、ならば民草のことはどうでもよいと王子はおっしゃるのですか!?」
「そんなことは言いません。ですが……」
「でももかかしもございません！　ああ、こうしている間に我が領民たちに苦痛を強いているのかと思うと、私、胸が張り裂けそうになっているのですよ!?　王子はそんな私を見て何も思わないと!?」

芝居がかった仕草が鼻につく。どう考えても領民じゃなくて領地そのものの方が大切な奴の言い草ね。
畳み掛けるような“領民たちの痛み”で礼美が立ち上がりそうになったけど、あたしは無言でマッシュポテトを乗せたスプーンを礼美の口の中にツッコんだ。

「むぐっ」

一瞬息を詰まらせるけど、礼美は律儀にポテトを租借し始めた。
あたしに恨みがましい視線を送ってくるけど、あたしは素知らぬ顔でパンを口に含む。
礼美の気配にひげ男は一瞬こちらを見るが、すぐに視線を王子の元に戻す。

「フォルクス公爵の気持ちは痛いほどわかりますが……」
「いいえ、わかってらっしゃいませんでしょう!?　わかってくださるなら、今すぐに騎士団を派遣してください！　そして私の領地を取り戻し、我が平穏を取り戻してください！」

何とも理不尽な言い草ね。騎士団が魔王軍に負けっぱなしだってのに、それで領地を取り戻せ、か。総力つぎ込めば簡単でしょうけど、その間に王都が確実に落ちるわねー。
その王子を責めるような口調に物言いたげな顔になった光太が立ち上がるより早く、あたしはプチトマトみたいなオレンジ色の野菜をつまむ。
そして開きかけた口にそれをポイッと突っ込んでやる。

「光太、これおいしいわよ？」
「あぐっ？」

完全な不意打ちだったけど、喉に詰まらせることなくトマトをかみ始める光太。器用なもんね。
あたしは若干涙目でこっちを見る光太に肩をすくめてみせつつ、牛乳？を口に含んだ。いや、ミルクとは聞いてるけど牛の乳とは限らないし。
やっぱりこちらの様子をちらちら伺ってくるひげ男だが、彼が口を開くより早くアンナが声を上げた。

「フォルクス公爵、客人の前だというのにずいぶん無礼じゃありませんか？」
「客人！？　確かにその通りでしょう、我が国を救ってくれる勇者様ですからな！　ですが、いまだその資質を疑う者が多くいることをお忘れなく！」
ひげ男の暴言に、王子はうつむき、アンナは顔を赤くして目を吊り上げ、光太と礼美は今度こそガタリと音を立てて立ち上がった。
ああ、チクショウ、結局こうなるの――。
「うるせぇぞさっきから」
瞬間、光太の隣から殺気さえ伴った底冷えのする声が上がった。
ずっとうつむいて静かに食事をしていた隆司が、じろりと視線だけ上げてひげ男を睨む。
黒髪の間から覗く瞳が、幽鬼のような迫力でひげ男の両目を射抜く。元々の目つきの悪さも相まって、視線だけで人を殺せそうな迫力だ。
「ヒッ……！？」
隣で立ち上がった光太すらひるむ迫力に、ひげ男が一歩後ずさった。
隆司は無表情のまま、ただ、ただひげ男の顔を睨み続けた。
「飯くらい静かに食わせろ。黙れねぇならとっとと失せろ。そのおしゃべりな舌、引っこ抜くぞテメェ」
「き、きさま！？　わたしをいったい、だれだとおもって！？」
隆司の迫力と恐怖のあまり、声まで裏返ってるわ。あと一押しっ

てところかしら？

「わ、私はアメリア王国の公爵の一人……」

「失せろっつってんだろぉがぁ！！」「強風撃（ブラスト・ウィンド）」

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？？」

隆司の激昂に合わせて、こっそり構成していた魔法をひげ男に向かってぶっ放す。

人一人程度ならあっさり吹き飛ばせる強風がひげ男に集中し、枯れ枝か何かのようにみっともなくその体が転がっていく。

そのまま転がっていったひげ男は、いましがた自分が出てきた扉に背中を強打する。

「ぎゃふん！？」

情けない声を上げた男はしばらく恐怖の眼差しで、いまだ自分を見つめる隆司を見つめていたが。

「失せろ」

「ひ……ひぃぃぃぃぃぃぃぃ！！？？」

抑揚なく、吐き捨てるように放たれた隆司の声と同時に、悲鳴を上げながらその場から立ち去って行った。

しばらく食堂が沈黙で満たされたが。

「……ぷ……アハハハハ」

こらえきれない、といった様子でアンナがおなかを抱えて笑い始めた。

そんなアンナの様子に、光太と礼美はぼけっと突っ立ったまま呆

然と礼美の顔を見つめるし、王子はそんな妹の様子を見て天を仰いだ。

「アンナ。あまり、こういうことで笑うものではないよ」

「だ、だってお兄様、さっきのフォルクス……プ、ククク」

兄にいさめられても、こらえきれないのか可愛らしく掌でおおわれた口からはまだ笑い声が漏れてくる。

光太と礼美はしばらく顔を見合わせていたけど、そのまますぐに座りなおした。顔は若干納得いかないって様子だけどね。

アンナは笑いの発作が治まると、まずは笑顔のまま隆司への礼を口にした。

「リュウジ様、ありがとうございました。あのフォルクスという貴族、自らの領地にばかり固執する小物なうえ、粘着気質なせいでここ最近うっとうしかったんです」

「いいよ気にすんな、俺も気にしねぇから……」

隆司は力なくそう言うと、こってりとチーズを塗りたくったパンを口の中に詰め込んだ。

そのまま咀嚼して、ごくりとのみこむけど満足した様子はないわねぇ。そんなに肉が食いたいのかしら。

光太はしばらくそんな親友の様子を心配そうに見つめていたが、意を決したように王子に向き直った。

「それにしても、アルト王子。先ほどの公爵……」

「……おおむね、アンナの言った通りです」

アルト王子は陰鬱にため息をついた。

つまり小物で粘着気質なせいで、王子にひたすらからんでくるっ

てことかしら。
あんなのに毎日絡まれてりゃ、そりゃあったときみたいな顔も真っ青になるわね。
若干ノイローゼの気もあるんじゃないかしら。

「魔王軍に占領された領地があるのは、以前お話した通りなのですが、基本的に魔王軍の通り道にあった領地にのみが占領されている状態なのです。そのため、自らの領地が占領されてしまった貴族たちが、早く領地を取り戻してくれと毎日嘆願にきているのです……」
「そんなもの、今は無理だって突っぱねればいいじゃない」

呆れた。一々あんなのに対応してるわけ？　そりゃ、小物で粘着気質な奴が調子づいてこんなところまで乗り込んでくるわよ。
あたしの言葉に同意するように、アンナも力強く頷いてみせた。

「お兄様、マコ様のいうとおりです！　お兄様は今この国の代表なのですから、もっと気を強く持ちませんと！」
「うん、わかっているけれど……ね……」

アンナの言葉に、弱弱しく笑顔を作る王子。
典型的な押しに弱いタイプかしら？　王様が死んですぐに王位をつがなかった……継げなかったのは、この性格のせいね。大方、王様の地位を狙ってる貴族あたりが難癖つけてるんでしょうねぇ……。

「……アルト王子」

なんて声をかけるべきか少し考えていると、光太が静かに声をかけた。

「……はい」

「召喚されたばかりで、私たちはこの国のことがよくわかりません」
「……はい」
王子は光太の言葉の真意を測りかねているのか、いぶかしげに眉根を寄せた。
光太はそんな王子を安心させるように、柔らかく微笑んで言葉を続けた。
「なので、今日はこの国についていろいろ教えていただけませんでしょうか？　できれば、城下町を見回りながら」
「コウタ様……ですが……」
王子はその言葉に唸るように考える。たぶん、今日も公務か何かが詰まってて忙しいんでしょうね。
そんな王子の背中を押すように、礼美も身を乗り出して王子にお願いを始めた。
「私からもお願いします。この国のこと、いろいろ知りたいんです」
「レミ様まで……」
にっこりほほ笑む礼美の顔を見て、呆然としたような顔になっちゃって……。
って、頬を染めるでもなく呆然としてる？　礼美の笑顔を見て？
「……公務なら、同じ王族のアンナがやればいいんじゃないかしら？」
王子の精神状態が心配になったあたしは、さっきからじっと兄を見つめていたアンナの方に水を向けてみた。
うずうずしてるし、あたしが言わなくても自分から言い出したか

もしれないけど。

「マコ様、しかし……」

「マコ様のいうとおりです、お兄様！　たまには息抜ｋ、じゃなかった……。まだこの国に不慣れなコウタ様たちに、この国のことをもっと知っていただくのは、この国の代表として重要な仕事ですわ！」

「しかしアンナ……」

「善は急げと申します！　コウタ様、アンナ様、今すぐ城下町までお兄様がお連れしますわ！」

アンナがそう叫ぶように言うと同時に、どこからともなく妙齢のメイド長っぽい人が現れた。

ギョッと叫びそうになるが、何とか抑える。いったいどっから出てきた！？

「アルト様、そうとなればご用意をさっそくいたしましょう」

「め、メイド長！？　でも、今日の公務が……」

「じゃあ、よろしくお願いしますね王子！」

「私たち、城門のあたりで待ってますから！」

言うが早いか、反論を許さないスピードで光太たちが立ち上がり、あっという間に食堂から出て行ってしまう。

「さーて、大臣に言って今日のお仕事貰ってきませんとね！」

「ちょ、アンナ……！？」

アンナはアンナで、鼻歌交じりに部屋を出て行った。

王子が伸ばした手が空しく空をつかむ。

……ちょっと哀れになってきたわねー。

飼い主に捨てられた子犬みたいな目をしている王子の肩を叩いて、あたしは優しくこういった。

「じゃあ、王子。今日一日、あの二人のことをよろしくお願いしますね？」

「……はい」

あたしのとどめに、がっくりうなだれる王子に一つ頷いて、小さく会釈してくれるメイド長さんに会釈を返し、テーブルの上に残った料理をモソモソ食ってる隆司の方を見た。

「満足できそ？」

「まったく」

首を横に振る隆司。筋金入りの肉食獣ね……。

「それでしたら、ハンターズギルドに行かれてはいかがでしょうか？」

そんな隆司の様子を見かねてか、メイド長さんがそんなことを言い出した。

「ハンターズギルド……？」

「はい。王都の外にある森に赴き、狩猟をおこなっているのがハンターズギルドになります。そこならば、お肉が手に入るかもしれません」

メイド長さんの言葉が、隆司の瞳に火を灯した。

隆司は無言で立ち上がると、メイド長さんに深々と頭を下げた。

「メイド長。いろいろ教えてくれてありがとうございます」
「いえ、お客様に満足頂くのもメイドの務めですゆえ」
「行くなら一人で行ってらっしゃいね？」
「おう、わかった」

上機嫌な隆司が食堂を出ていくのと同時に、何やら情けない悲鳴が聞こえてきた。
今日はいったいどういう理由なのでありますか！？なんて聞き覚えのある声が聞こえてくる。運がないわねぇ、あの騎士の人。
……そういえば、あの人なんて名前だっけ。

「……フィーネのところに行って、魔法の勉強でもしよっと」

しょんぼり肩を落としながら出て行った王子の背中とメイド長さんを見送った後、つぶやいてあたしは食堂を後にした。

No.12：side・mako「朝食の一騒ぎ」（後書き）

脅し役（表向き）＝隆司、脅し役（裏から）＝真子の図。元の世界でもだいたいこんな関係図だったと思われ。

次回はギルドのお話！　そろそろ騎士さんにも名前上げないとなー。

No. 13 : side・ryuzi「狩りのお時間」

「ここがハンターズギルド？」
「はい……」

肉が手に入る、というメイド長さんの助言に従い、騎士の兄ちゃんを引きずってここまでやってきた俺は、ハンターズギルドと看板を掲げられた建物の中へと入った。
そして思わず眉根をしかめる。何しろ中には人っ子一人おらず閑散としており、繁盛しているようには見えなかったからだ。

「ギルドってのはもうちょっと活気があるもんだと思ってたんだが……」
「自分も詳しくはないでありますが、こんなものでは？　王都では仕事もたくさんあるでありますし」

騎士の兄ちゃんの言葉に一つ頷く。言われてみりゃそうか。街道を歩いた城下町の活気を見りゃそれなりの職に就くのも……いや、向こうの世界のこと考えると一概にそうとも言えないのか？　でも道行く人々の数見るに人口過多ってわけでも……。

「あんたら、ギルド加入希望者かい？」

一瞬いろいろ考えそうになった俺を引き戻す声が聞こえてくる。
声のする方に顔を向けてみると、ボウガンを背中に背負ったショートヘア短パン少女がこっちを睨んでいた。若干小麦色にも見える健康的な太ももがなかなか悩ましい。
俺は人がいることに喜んで、努めて明るい声と笑顔を心掛けて話しかけた。

「ああ、そうなんだよ！　こいつに、ここがハンターズギルドって聞いてね」
「どうもであります」
いつものようにがっちり肩を組み、無理やり騎士の兄ちゃんを矢面に立たせる。
ちなみに騎士の兄ちゃんは騎士団の制服のままだが、俺は騎士の兄ちゃんに貸してもらったマントを羽織って顔には丸グラサンをかけている。単純に向こうの世界の衣服は目立つのと、顔を覚えられないようにとの対策だ。
勇者ではあるが、素性は隠したほうがいいだろ、一応。
「元々田舎の方じゃ乱暴者だった俺でも、こういうとこなら職にありつけるかと思ってねぇ」
……という設定。これなら多少腕力過多でも誰も疑わないだろう、ということで道すがら騎士の兄ちゃんと相談して決めたことだ。
もちろん偽名も決めてある。といってもそんな複雑なもんでもねぇけど。
「俺の名はリュウっていうんだけど、ねえちゃんは？」
「あたいはカレン。そっちのさえない騎士は？」
「……おい、聞かれてんぞ。自己紹介くらい、自分でしろよ」
「ええぇ！？」
聞かれて俺は騎士の兄ちゃんを小突いた。そういや俺、この兄ちゃんの名前知らねぇ――。
「自分、サンシターと申します」

……。

ここ、笑うところではないよね？

「あんたいきなり黙り込んでどうしたんだい？」

「な、んで、もない……」

吹き出すな俺！　この世界では「三下」なんて言葉はないし、故郷の幼馴染なら名前には慣れているはずだ！　笑うほうがおかしい。

しばらく笑いの発作を横隔膜の痙攣という形で抑え込んでから、一つ深呼吸。

「……まあ、ともあれ、そういうわけでね。加入申請したかったんだけど、人っ子一人いないじゃん？　どったの？　ひょっとしてここ、流行ってないの？」

「ここが流行ってないんじゃないよ。ここ最近森の様子がおかしいせいで、稼ぎにならないどころか危険なせいさ」

「森の様子が？」

「おかしい、でありますか？」

俺と騎士の兄ちゃん――サンシターが顔を見合わせると、カレンが肩をすくめた。

「あたいにいわせりゃ業深いだけだよ。適当に狩って適当に稼げりゃいいんだ、こんなもん」

そうして俺たちに背中を向け、肩ごしに振り返る。

「これから加入ってことは、初心者だろ？　いろいろ教えてやるよ。加入の仕方から仕事の決め方、んで狩りの仕方もね」

「……そいつはありがたいねぇ」

俺はにやりと笑って、マントの下に入れっぱなしの左手の石剣を強く握りしめた。

これの試し斬りも兼ねてるんでね。なるべく大物で頼むぜ？

そのあと俺たちはカレンのいうままにギルドの名簿に名前を登録。ハンターズギルドの証であるというペンダントを受け取り、カレンの仕事に随伴する形で初依頼となった。

内容は、ウッピーとやら十頭の狩猟。カレン曰く、初心者にはもってこいの超簡単な依頼だそうな。

「何しろ、ボーっと草食ってるところを、隠れて討ちゃいいんだ。こんな楽な仕事もないだろう？」

「まあ、そうだな」

草むらの陰でじっとして、草をモリモリ食べているウッピーに狙いを定めるカレンの隣で、あいまいな相槌を打つ俺。

件のウッピーとやらは、両手が痩せ細った代わりに下半身が異様に発達したウサギみたいな生き物で、体毛は純白だった。大きさは三十センチ程度。

なんでも味は淡白であまりうまいものではないらしいが、成体になるまで一ヶ月程度で繁殖力も高く、一匹いたらとりあえずその森には三百匹はいるのことで、庶民の食卓に最も上る回数が多い動物なのだとか。

でもあの大きさだと、あんまり食うところなさそうだな……。

―ぴー！―

ぼんやりしてると、カレンの矢がウッピーの頭をしっかり捉えた。
鮮やかなもんだ、これで六匹目だ。隠れてじっとしているとはいえ、距離はそれなりに離れている。目算で……十メートルちょっとか？　標的のウッピーは三十センチの大きさしかないうえ、頭の大きさはそれ以下だ。
それで六匹全部にヘッドショット決めてやがるんだ。これを見事と言わずになんという？
ちなみに仕留めたウッピーは一匹ずつ括ってサンシターが担いでる。

「っし！　これであと四匹だ！」
「見事なもんだな、全く」

嬉しそうにガッツポーズ決めるカレンの後ろを、石剣担いでテコテコついていく。
この石剣見せた瞬間「あんたベルベルタイガーでも仕留めるつもりかい？」って呆れられた。ちなみにベルベルタイガーは背中に鈴みたいなものがくっついたトラらしい。狩猟生物としてそれはいいのか。
手早くサンシターの背負っていた縄に六匹目のウッピーを括ったカレンは、得意げな顔して俺を見上げる。褒められて心なしうれしそうだ。

「あんただって、慣れりゃこのくらいできるさ。まあ、その前に……」

一瞬言いよどんで俺の石剣を見ながら肩をすくめる。

「弓に慣れないとだけどね」

「そりゃそうだ」

言われて軽く肩を竦め返して、サンシターの方を向いてみる。

「ちなみにサンシター。お前、弓使えたっけ？」

「十センチ程度の大きさでよろしければ……」

お前、それは玩具だろ。

呆れてツッコみを入れる気力もない俺の耳に。

―シュー……シュー……―

というか細い音が聞こえてくる。

細い管の中を空気が漏れていくような……いや、呼吸音かこれ？

よく聞くと、一定のリズムを刻んでる感じだし。

「？」

軽く周りを見回してみるが、音の発生源らしい生き物の姿は見えない。

だが、音は絶えず聞こえてくる。

俺の様子に気が付いたカレンが、怪訝そうな顔をする。

「リュウ？　どうしたんだい？」

「いや、なんか聞こえてこねぇか？」

「？　いんや？　何が聞こえたんだい？」

「なんつーか、空気が漏れるようなシューって音が……」

聞こえてきた音の説明を仕様と、俺がカレンの顔を見つめた時。

―シャァッ！！―

という音と、首に激痛が走る。

「リュ！？」

驚いたカレンの表情が高速でぶれる。

横殴りの衝撃を受けた俺は、石剣から手を離しそのまますぐそばにあった木へ頭から突っ込んでいった。

ズドン！という石剣の地面へとめり込む音が聞こえる。

「リュウ！？　いったい……！？」

カレンは焦ったような声をあげ、攻撃が行われた方向に顔を向けたようだ。

同時に驚愕と恐怖を抱いた気配が伝わってくる。息伝いが、やたら荒くなっていくのが聞こえた。

「なん、で……こんなとこに、アイティスが……！？」

「あ、あいてぃす？　なんでありますかそれ？」

「ウッピーが主食の肉食獣だよ！　一定のテリトリー作るんだけどテリトリーに入ったウッピー以外の生き物は、みんな殺すうえ、姿も見えないから森の暗殺者って言われてる……！」

「えええぇえぇえっ！！？？　ああ！？　言われてみれば、さっきまでそこにいたのにもういない！？」

暗殺者たぁ、ずいぶんな二つ名だな……。音が聞こえても姿が見えないのは擬態か何かか？

「ど、どどどうするでありますか！？」

「どうもこうも、逃げる！　アイティスは、普通ならハンターが十人以上のチームを組んで狩る動物だ……！　あたしらだけで勝てる相手じゃない！」
「じゃ、じゃあリュウ殿を……」
「そんな暇ないよ！　いつこっちに攻撃が来るかわからないんだ！」
「そんな！？」

おいおい、さすがに置いてけぼりは勘弁だぜ。とはいえ、痛みのせいで目も開けられねぇが……。

「それに、アイティスの一撃は人間の骨なんて一発でへし折るんだ！　首逝っちまったら、助けるもくそもないだろう……！」

悔しそうなカレンの声に涙が混じる……ってなに？
いや確かに首に一撃貰ったけど、まだ死んでないぞ？　いや思いたい。
痛みを我慢しながらゆっくりと片目を開ける。
サングラスは吹っ飛んだのか、視界は明るい。
ぼんやりとした視界の向こうには、もうすでに泣いてるサンシターと今にも泣きそうにわめいているカレン。
そして、カレンの頭をしっかりと狙っているトカゲもどきの姿だった。

「あんただって命惜しいだろ！　幼馴染は気の毒だったけど……！」

ヤベ、激昂してるせいでトカゲもどきに気づいてねぇな……。
ゆっくりと口を開けるトカゲもどきの存在に、俺は慌てて痛みを無視して体を跳ね起こす。

「どけぇ、カレン！」

叫ぶとまるで喉が裂けちまった痛みとともに、口から血泡が噴き出す。やべぇ、声帯あたりが傷ついてるかも……。

「え、へっ？」

「あ、リュウ殿！？」

俺の叫びを聞き、呆けたようにカレンが振り向くが、これ以上何か言う時間をトカゲもどきは与えてくれそうにない。

くそ、恨むんじゃねぇぞ！？

「おらぁ！！」

声をあげ、左手でカレンとサンシターをまとめて左へ吹っ飛ばす。同時に、トカゲもどきの口から舌が一瞬で伸びてくる。

「い、きゃぁぁぁぁ！？」

「ぎゃぁぁぁぁぁ！？」

吹き飛ぶ二人の声と同時に一瞬で伸びた舌はカレンの頭があった場所を貫き、俺の眉間へと伸びてくる。

だが、来るとわかってりゃ対応するのは簡単だ。

「しっ！」

伸びてくる舌が眉間に触れる寸前、俺は残った右手で舌を掴み取る。グヌリとした質感とどろどろの唾液が絡みつき、何とも言えない不快感を与えてくる。

―！？―

同時に伝わってくるもどきの動揺。
ふん。さすがに舌をつかまれた経験はないようだな……！
俺は気持ち悪さを我慢して、右手に二、三回奴の舌を巻きつけ、さらに伸びきった舌を左手で掴む。

「降りてこいやぁ、トカゲもどきぃ！！」

そして舌が伸びたまま姿を隠そうとする間抜けを俺は全力で引っ張る！
バキリ、と大仰な音を立てて奴の爪ガキからはがれた。
中空を勢いよく飛び、さらに舌が縮んで勢いよくこちらへと突進してくるトカゲもどき。

「おおぉおりゃぁぁぁぁぁぁ！！」

そのままの勢いで、手近にあった大木にもどきの体を叩きつける。
舌はまた勢いよくのび、背中を叩きつけられたトカゲもどきは悲鳴を上げる。

―ごぎゃぁ！？―
「まだまだぁ！！」

そしてまた近づいてくるモドキの体を木に叩きつける。

―げぎゃぁ！？―
「もいっちょぉ！」

さらにおまけともう一回叩きつけてやろうと、渾身の力でトカゲもどきの舌を引っ張ると。

ぶちーん。

「おわぁ！？」

途端にトカゲもどきの舌が勢いよく千切れた。

どうやら何度も渾身の力で叩きつけてやったせいで、トカゲもどきの体の方が耐え切れなかったらしい。

っかー、情けねぇし、しまらねぇ……。

―ぎ、ぎゃぁ……！―

「ん！？」

舌が千切れて自由になったと理解した途端、トカゲもどきが逃げようともがき始める。

舌が千切れたってのに元気な生き物だぜ……。

だが。

「今更、逃がすかぁ！！」

俺は素早く地面に埋まった石剣を抜き取ると、木を登り始めたトカゲもどきの頭めがけて横殴りに投げつけた。

風切り音を立てて石剣はトカゲもどきに迫り。

ザゴン！

と豪快な音を立ててトカゲもどきの首だけじゃなくて木まで切り倒す石剣。

「……おおぉう」

俺は呆然と声を上げるが、石剣の勢いは止まらずそのままさらに二、三本の木を斬り、五本目でようやく幹に突き刺さって止まった。
……俺の力だけじゃねぇよなさすがに。やべぇ、石剣の方まで取り扱いに注意しねぇとならねぇんか。
ぼりぼり後ろ頭掻いて、石剣を回収しようとする俺の背中に呆然とした悲鳴のような声がかかった。

「ちょ、ちょっと待てよ!?」
「んー?」

振り返ると、ちょうどサンシターを座布団にした格好のカレンがこっちの方を見ていた。
腰でもぬかしたのか、ペタリとした力の入っていない女の子座りだ。

「な、なんで生きてるんだい!?　さっき、アイティスの舌が……」
「あ、あー?　なんでだろうな?」
「なんでだろうって……!」

睨まれるけど、答えられるわけがねぇ。だって生きてるんだもの。
そういえば、さっき血が出てきたせいで鉄くさい口の中だが、今はもう血が出てくる気配はない。のどの痛みも引いている。傷が治ってるのか?
ってことは、俺の体、異常に再生力も上がってるのか……?　でも、トカゲもどきの攻撃で首の骨が折れた感じはしなかったし……。
なんか謎が増えた感じの俺の体に辟易しつつ、血塗れた石剣の血を振り払い、首を無くしたトカゲもどきの体を担ぎ上げた。

「お、おい。アイティスの体なんか持って、どうするんだ……?」

「え？　だってトカゲだし、食えるだろ？」
「く、食うって……。仮にもお前、五十万アメリオンもする狩猟対象を……」
呆れたような視線を受け、憮然となる。
なんだよ、トカゲの肉って鶏肉みたいって聞いたことがあるから試してみても損はないだろうがよ。
「そんなことより、立てそうか？　そろそろサンシターがつぶれそうなんだけどさ」
「え、は！？　ご、ごめんよ、今どくから！？」
「ぐぐぐ……自分のことは御気になさらず……」
サンシターのうめき声を聞いて慌てて立ち上がるカレンを笑って見つめながら、俺はさっきトカゲもどきに攻撃された首筋をそっと撫でた。
さっきまで激しい痛みを発していたはずのそこは、もう何も発していなかった。
で、カレンが無事に狩猟を終えて持ち帰ったアイティスとやら。
ギルドでさばいてもらって持ち帰ったら意外とうまいと好評だった。
カレンに仕事回してもらえるよう頼んどいたし、また狩りにいこっと。

Ｎｏ．１３：ｓｉｄｅ・ｒｙｕｚｉ「狩りのお時間」（後書き）

ちなみに食べた人たちは、それがトカゲ肉だということを一切知りませんｗ

しかし戦闘系は久しぶりに書いたけど、書きやすいなぁ……。

次回は、魔法関係にもう少し突っ込んでみようかなー？

No．14：side・mako「魔法陣のお勉強」

「魔法陣を書く場合は、円が乱れていないことが重要での。少しでも歪むと、効果の是非が変わってしまうのじゃ」
「フリーハンドで真円とか書ける気がしないわね……」

隆司が無事に狩りを終えて翌日、あたしは引き続きフィーネに魔法に関するあれやこれやを教えてもらっていた。
あたしの能力は魔術言語（カオシックルーン）を補助なしに読解するものだけれど、それ以外に関しては本当に無力だ。
たとえば魔法陣。儀式魔法に欠かせないシンボルだけど、あたしは魔法陣の中に組み込まれた魔術言語（カオシックルーン）の意味は分かっても、その書き方はわからない。
たとえば魔法武器。あたしはこの中に刻み込まれた魔術言語（カオシックルーン）の正体はわかっても、これに刻み込むことはできない。
魔術言語（カオシックルーン）をプログラム言語とするなら、魔法陣や魔法武器はパソコンね。中身は作れても外側は作れないってわけ。

「なんの、心配はいらぬ。円を正しく書くための道具はこれこのように」
「ああ、コンパスはあるんだ」
「なんと！？　我ら魔術師団が百年余りで開発したこの道具が、マコの目には当然のごとく……！？」
「いやまあ、あたしらの世界でもそれなりの期間で開発してると思うけどね」

コンパスの先にチョークが付いた道具を片手にプルプル震えるフィーネの頭をポフポフ撫でながら、あたしは今日の題材に指定したあたしたちを召喚してくれた魔法陣を見下ろした。

先代の宮廷魔導師が、その人生をかけて解析したという召喚魔法陣……。あたしの目から見てもなかなかに厄介極まりない性質をもつものに見えた。

「しかしこの魔法陣、良く解析で来たわね……」

「うむ、そこはおばあ様……先代の宮廷魔導師殿の腕であるな」

誇らしげにうなずくフィーネだが、あたしが言いたいのはそこではなかったりする。

「そうじゃなくて、あたしでも読めない字がいくつか含まれてるんだけど」

「ふえ？」

あたしの言葉に目を丸くするフィーネ。

あたしはしゃがみこんで、フィーネが持っていたチョークを取り上げていくつかの文字を丸で囲っていく。

まるで囲っていった字はやがて図形となり、あたしらの世界で言う八角形の図を描く形となった。

「今あたしがまるで書いた文字は、あたしでも意味が解らないわ」

「な、なんと！？　そ、それでは魔法陣の解析は不完全だったと……！？」

がびーん、とわかりやすく衝撃を受けるフィーネだが、あたしは首を横に振って見せた。

「いや、それに関しては問題なさそうね。この文字、読めないけれど魔法陣の意味自体は全く阻害してないみたいだし」

「というと？」

「それは魔力を流してみたほうが早いわね」

言うが早いか、あたしは体の中の魔力を魔法陣に流し込む。この辺の技術は、昨日習ったものだ。

あたしが流し込んだ魔力は順に魔法陣を照らしていき、やがてすべての文字が輝く。

が、あたしが円で囲って見せた文字は一切輝かない。

「なんと……？」

「ほらね？　……聞くけど、こういうことってあり得るの？」

「いや、通常はあり得ぬ……。魔法陣は、真円の中にあるすべての魔術言語（カオシックルーン）が魔導法則として成り立たねば成立せぬ。じゃというのに、機能不全すら起こさぬとは……？」

「ばあさんも言ってたぜ。解析はできたけど、こういう部分があるからこの魔法陣は使わないほうがいいって」

恐れ慄いたようなフィーネの声に、何やら小生意気な声が割り込んでくる。

あたしが顔をあげると、いつの間にかそこにはジョージが立っていた。

息は荒いし顔は赤いし、急いでここまで来たのかしらね？

ジョージはあたしの顔を見るなり、赤かった顔をさらに赤くしてこっちに詰め寄ってきた。

「……っていうかテメェ！　あいつどうにかしろよ！」

「あいつって？」

あたしがわざと可愛らしく首を傾げてやると、ジョージは地団太を踏む。

「あいつだよ！　えーっと……ほら！　勇者の一人！」
「隆司かしら？　それとも光太？」

さらに反対側に首を傾げてやると、両手をぶんぶん振り回してさらに声を荒げる！

「女で！　光属性で！　神官連中にちやほやされてるあいつだよぉおぉおぉおぉお！！」
「ああ、礼美のことね」
「そう、そいつ！」

あたしがようやっと礼美の名前をあげると、ジョージは嬉しそうに人の顔を指差した。
なんかむかついたので、間接の逆方向にねじってみた。

「あだだだだ！？」
「人のことを指差さなーい。で、なんかあったの？」
「なんかあったのじゃねーよあだだだ！！」

ジョージは慌ててあたしの指から自分の指を引きはがして、フーフー息を吹きかける。
そして涙目であたしを睨むとズイっと近寄ってきた。
うっとうしいのでヘッドバットで迎撃。

「ぎゃぁ！？」
「乙女の顔に近寄んな。で、なんなのよ？」
「人に絡んできてうっとうしいんだよ！」

本格的に涙声になり始めたジョージに、あたしはさもありなんと頷いて見せる。

「あの子、あんたがあたしとフィーネに謝るまで許さないって言ってたからねぇ」
「謝ったじゃねぇかちゃんと！？」
ジョージの抗議に、あたしは今朝の魔導師団詰め所での光景を思い出す。
今日は光太と礼美も含めた三人で魔導師団詰め所まで行ったのだが、ちょうどフィーネもジョージもいた。
ので礼美は大急ぎでジョージの首根っこを押さえ、あたしとフィーネの前に連れ出すと「この間のこと、二人に謝りなさい！」と一喝。
ジョージはこの間の光景を思い出したのか顔をしかめたが、すぐに謝った方が得策と悟ったのか、あたしとフィーネに頭を下げた。
「ドーモスイマセンデシター」
そのあまりの誠意のこもり方に、フィーネは胡乱げな眼差しでジョージを見つめ、あたしは微笑ましさに口元に笑みを作り、礼美は顔を真っ赤にした。
で、部屋の隅までずるずる引きずっていくと正座を強要。
当然ジョージは嫌がったが、即座に動き出したヨハンさんによって拘束。
そのまま二時間のお説教コースが開始されちゃったわけである。
あたしとしてはもうジョージのことは割とどうでもよかったので、魔法少女たちに引きずられていった光太に礼美のことを任せ、その後魔法陣までフィーネと一緒に移動したんだけど……。
どうやら引き続きいろいろな目に合っていたらしい。
「お前仲間だろ！　どうにかしろよ！」

「どうにかといわれても、どうしようもないわねぇ」

ジョージに詰め寄られ、あたしは仕方がないというように肩をすくめてみせる。

「一発で解決する方法は、あんたが普通に謝ることね」

「だから謝っただろうが！」

「あれが謝罪なら、普通に生きてる人間は全員演技派よ？」

「く……」

一応白々しいという自覚はあるらしい。

と、カツカツカツカツ！と足早にこちらへとやってくる足音が聞こえ、あたしの視界に怒り肩で近づいてくる礼美の姿が見えた。その後ろにはヨハンさんが付かず離れずの距離で付き従っている。

「いたわね、ジョージ君！」

「いけませんね、ジョージ君。レミ様のありがたいお言葉の途中でいなくなるとは……」

「ぎゃあ！？　お前ら、なんでここが！？」

悲鳴を上げて後ずさるジョージの体をがっちりつかんでやるけど、ジョージにはそれを気にする余裕はないようね。

礼美はあたしとフィーネがいる状況がちょうどよいと思ったのか、力強い笑顔で一つ頷いた。

「ちょうどいいわ！　さあ、ジョージ君！　二人に謝りなさい！」

「ジョージ君、早く謝りなさい？」

ヨハンさんまでなんだかおっかない笑顔で迫る中、鏡を前にしたガマガエルか何かのようにだらだら脂汗を流すジョージ。

「て……」
「て？」
「転移術式（テレポート）！」

だが、転移術式（テレポート）でその場を脱出してしまう。
まさか転移術式（テレポート）まで詠唱破棄できるとは……侮れないわね。

「また逃げて！　今度はどこに行ったの！？」

形のいい眉を跳ねあげた礼美は、来た時と同じ怒り肩でそのまま立ち去って行った。当然ヨハンさんも一緒である。
なるほど。転移術式（テレポート）使って逃げたのね。

「今の転移術式（テレポート）だけど、詠唱破棄じゃ大した距離は飛べないわよね？」
「うむ。せいぜい十メルトといったところかの」

フィーネに確認すると、結構な距離の答えが返ってきた。いや、十メルトって。確か一メルトが一メートルくらいだから……。二階建ての一戸建て分くらい？

「それにしても、距離を抜きにしたとしても転移術式（テレポート）を詠唱破棄できるなんて、何者なのジョージって？」

あたしの質問に、フィーネは少し黙った。
さらっと驚きを流しているが、転移術式（テレポート）は別の場所へ距離を無視して移動するという性質上、かなり複雑な構成が必要な魔法だ。元地点と移動先の地点との間に存在する物質も無視する必要があるため、法則構築のための詠唱もかなり時間がかかる。魔術言語（カオシックルーン）が読め

るあたしでも、練習なしの詠唱破棄で成功する自信はない。
だが、ジョージは成功させている。あの年齢で転移術式（テレポート）の詠唱破棄ができる練度の魔導師なんて、宮廷魔導師のフィーネ並みといっていいんじゃないかしら？

「……ジョージはもともと、私と一緒におばあ様に師事していたのじゃ」

しばらくの沈黙の後、フィーネはぽつりとそういった。

「おばあ様って、先代の宮廷魔導師？」
「うむ。私とジョージは元々孤児での。おばあ様に拾われてからは、おばあ様の後継者としてそれぞれ育てられたのじゃ」

二人が孤児だったとは……。まあ、そこは重要じゃないわね。話したくもないでしょうし。

「なるほどね……。先代の宮廷魔導師肝入りか。それなら、あの構成練度も納得ね」
「うむ。私は幅広い魔法知識を蓄えるのが得意じゃが、ジョージは転移術式（テレポート）の詠唱破棄をはじめとする、構成構築の効率化が得意じゃ」
「構成構築の効率化？」
「構成の一部を省略したりすることで、魔法の発動を素早くスムーズに行う研究のことじゃ。詠唱破棄ばかりではなく、魔術言語（カオシックルーン）の数を減らすことで詠唱を簡潔にする技術も含まれるのじゃ」

なるほど。裏技的なものなわけね。確かに小ずる賢そうな顔してるから、そういう蛇の道は蛇的な裏技は得意そうだわ。

「なら、次はジョージにその構成構築の効率化とやらを習おうかし

ら？」
「あの様子じゃと、教えてくれんかもしれんがのー」
「まあね」

呆れ気味のフィーネの言葉に、同意するようにうなずいた。
ただでさえ礼美に追い掛け回されてるところを、助けるどころか事実上放置しちゃったわけだからねぇ。
まあ、礼美をとりなしてやる代わりに裏技教えてもらうってことにすればいいか。

「まったく……。ジョージも私が宮廷魔導師になる前はもう少し素直じゃったのに」
「あらそうなの？」
「うむ。私が宮廷魔導師に指名されて以来、誰に対してもあんな感じなのじゃ」
「ふーん……」

フィーネが宮廷魔導師に指名されて以来、ねぇ……。
少し気になったので、質問してみる。

「フィーネ」
「うむ？　なんじゃ？」
「その指名ってのは誰に？」
「おばあ様にじゃが」
「そのあとすぐにフィーネが宮廷魔導師に？」
「うむ。おばあ様は星のめぐりからいつ自分が没するか悟っていたようで、私を指名されて数日のうちに……」
「なるほど」

うなずくあたしを見て不思議そうに首を傾げるフィーネ。

これはあたしの勝手な想像だけど、ジョージがああなった原因はフィーネが宮廷魔導師に指名されたせいね。

二人そろって宮廷魔導師として競い合うように鍛え上げられたのに、実力をお互いに試させることなく、先代の指名って形でフィーネが宮廷魔導師になってしまった。

そのことに不満を呈する間もなく先代が死んじゃったせいで、感情の行き場をなくしちゃったせいでジョージは今あんなふうになってるんじゃないかしら？

「ちなみに、先代が死んじゃったのはいつ？」

「半年ほど……前じゃったか……」

意外と最近ね。まあ、フィーネとジョージの年齢考えればおかしな話でもないか。

あたしは少しうつむいてしまったフィーネの視線に合わせるように屈みこみ、その顔を覗き込んだ。

「フィーネは、ジョージに元に戻ってほしい？」

あたしの言葉に、フィーネはかすかに驚いたように目を見開いた。ただの確認だったのだが、フィーネは少しだけ逡巡するように視線をめぐらせ。

……コクン。

と小さくうなずいた。

「……ＯＫ。魔法習うついでに何とかしてみるわね」

思ってもみない反応に、あたしも動揺しつつそう口に出す。

いつまでもあんなツンケンした態度を取られるのはしんどいし、礼美にジョージにかかりっぱなしになられるのも今後の戦力的に勘弁願いたいし。

……ってつもりだったんだけど。なんだかこっちもめんどくさいフラグが立ってそうねぇ。

小さくため息をついたあたしは、すっくと立ち上がってジョージと礼美の追いかけっこを探すための魔方陣の部屋を出た。

Ｎｏ．１４：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「魔法陣のお勉強」（後書き）

なんかめんどくさいフラグを見つけることに定評がありそうな真子ちゃんです。

幼馴染が別の人に懸想してて……っていうのもありだと思うんだ！

次回はちょっと視点変更してお送りしたいと思います。

No．15：side・kota「光太修行中」

木剣と木剣が打ち付けあう乾いた音が、兵舎脇の訓練場に響き渡る。

今日、僕の相手はこの国の王子である、アルト王子だった。

「ハッ！」

「……！」

掛け声とともに打ち掛かると、冷静にそれを受け止められる。

木剣をはじかれて打ち掛かられるけれど、今度は僕が受け止める。

剣劇の応酬。凡庸といわれちゃうとそれまでだけれど、僕らは常に真剣にそれに挑んだ。

さらに二、三度打ち合いを続け、僕は勝負に出ることにする。

「……ィヤッ！」

打ち込む瞬間、相手が剣で受け止めるタイミングでさらに一歩踏み込んだ。

ガギリ、と今までにない音を木剣が奏でた。

「う……！？」

王子がたまらずたたらを踏んだ。

「セェイ！」

僕はそのまま体ごとぶつかって、王子の体を弾き飛ばす。

「うぁ！」

たまらず尻餅をつく王子。そして王子の喉元に木剣の切っ先を突きつければこの打ち合いは終了だ。

「そこまで！」

王子の喉元に木剣を突きつける前に、勝敗が決したとみたらしいアスカさんの制止の声が聞こえてきた。

僕はその声に従って、素早く剣を引き、王子に一礼。

そして息を荒げている王子に向かって手を差し伸べた。

「王子、けがはありませんか？」

「ああ、はい……」

王子は僕の手を取って体を起こし、ゆっくりと呼吸を落ち着けていった。

「これで三勝四敗。あと一勝で、王子に追いつけますね」

「ええ、そうですね……」

僕が笑ってそういうと、王子も笑って返してくれた。

でも、その笑顔は申し訳なさそうというか、壁一枚隔てた遠慮のようなものが見え隠れするものだった。

……この間、礼美ちゃんと一緒に街を案内してもらった時もそうだったけれど、アルト王子は僕たちに対して遠慮というか、少し距離を取って接しているような気がするんだよね。

やっぱり異世界から来た子供が相手だからかな？と思ったんだけど、それも少し違う。

僕らが王子にこの国や世界について質問するたび、王子は申し訳

なさそうな顔をするんだ。
まるで「ごめんなさい」と謝りたさそうな顔を。

「王子、先ほどのように――」

アスカさんにさっきの試合の内容に関して注意されている王子の背中を見つめながら、僕は王子の表情の理由を考える。
王子が僕たちに感じている感情の正体が、僕の考えているように申し訳なさだったとしたら、どうしてそんなものを感じているんだろう？
ひょっとして、僕たちを召喚してしまったことに対する謝罪なのかな？
もしそうなら、僕はどうすれば王子の心を晴らしてあげられるんだろうか……。

「おう、アスカ。お疲れー」
「ハッ。団長も、お疲れ様です！」

そうしてうんうん唸っていると、僕の背後から団長さんの声が聞こえてきた。
振り返ると、団長さんがいつものように棒を担いで立っていた。
でも確か、隆司の訓練をやっていたと思ったんだけど……。

「団長さん、隆司はどうしたんですか？」
「ああ、あいつか？　さっき、ギルドの使いとやらが来て喜び勇んでてってたぜ？」

ああ、ギルドに行ったのかぁ……。この間ギルドからお肉を持って帰ってきたときは、本当に嬉しそうだったからなぁ。
ちょっと、うらやましい。せっかく異世界に来たんだから、この

世界ならではの生き物を見つけたり、ギルドに登録して依頼とかこなしてみたいなぁ……。

「……コウタ様。コウタ様はまだこちらに来て日が浅いのです。今しばらくは、修練を重ねていただきますよ？」

「え？　あ、はい」

アスカさんが急にそんなことを言ってきた。ひょっとして、顔に出てたのかな？

隆司にも、お前顔に出やすいなぁ、なんて言われたことがあるし、気を付けたほうがいいのかなぁ。

「おいおいアスカ。いくらコウタと離れたくないからって、そんな物言いはないんじゃないか？」

「なっ！？」

団長さんの言葉に、アスカさんが顔を真っ赤にした。

？　どういう意味だろ。

意味が解らず首を傾げると、にやにやとなんだか悪いことを考えている隆司みたいな顔をしている団長さんに、アスカさんがガー！と吠えるように詰め寄っていった。

「だ、団長！　そのようなことは決してありません！」

「そうか？　じゃあ、俺が見た朝から晩までみっちりきめられたコウタのトレーニングメニューは見間違いかなぁ……？」

「み、見たのですか、あれを！？　というか、その手に持っているのは！？」

いつの間にか団長さんがひらひらさせていた一枚の紙を見て、アスカさんが顔色を変えて一生懸命取り戻そうとしている。

ぴょんぴょんアスカさんが飛んでも絶妙な位置取りで動いて紙を取らせない団長さん。さすがだなぁ。って、感心してる場合じゃないか。

「団長さん。アスカさんが嫌がってますよ？」

「フフフ、これは愛の鞭さコウタ」

「愛の鞭、ですか？」

「そう。今までたった一人の剣士ということで団の中でも浮いていたアスカに、ようやく訪れた転機……。これを逃せば次の機会（いじるタイミング）はないと俺は思うのだよ！」

「何の話ですかっ！！」

怒声一発。何とか紙を取り戻したアスカさんは、大急ぎでそれをポスターみたいに丸めてしまう。

でも、団長さんの言葉を借りれば、あれは僕のトレーニングメニューなのかな？

ちょっと気になるかな？　やっぱり僕のトレーニングだし。

「アスカさん、それ見てもいいですか？」

「だ、ダメです！？　それだけは、絶対に！！」

アスカさんの声に込められた絶対の拒絶意志に、思わず僕は目を丸くした。

そんなにひどいメニューなのかな？　たとえば、一日で百人斬り達成とか……。

そんな僕の様子を見てか、ハッと気が付いたようなアスカさんは気まずそうな顔になった。

「こ、これはまだ完成してないトレーニングなのです。なので、完成したら御覧に入れようと……」

アスカさんの言葉に、ああと頷く。
それならさっきの言葉も納得だね。まだ未完成なら誰にも見せたくないのは当たり前か。

「そうなんですか？　なら、楽しみにしてますね」

僕はそういって微笑んだ。アスカさんが作ってくれるメニューなら、きっと隆司やみんなの足手まといにならないように強くなれるはずだ。
すると目の前で急に紅くなったアスカさん。ボンと音が聞こえてきそうな勢いだ。

「ど、どうしたんですかアスカさん！？」
「な、なんでもありません！　お気になさらずぅ！！」
「そ、そういわれても……」

ホントにいきなりだよ！？　大丈夫なの！？

「勇者様ぁ～」

アスカさんの肩に手を置いて支えようか迷っていると、城の方からアルルさんの声が聞こえてきた。
バスケットを抱えてこちらに駆け寄ってきたアルルさんは、顔を真っ赤にしているアスカさんを見てクスクスと小さく微笑んだ。

「あら～？　アスカってば、相変わらずねぇ」
「な、何が相変わらずだっ！？」

アスカさんがどなり声をあげるけど、気にした様子もなくアルル

さんは僕の方を向いた。

「勇者様～。アスカってば昔から赤面症の気がありますからぁ、あまりお近づきになってはダメですよ～」

「赤面症、ですか？」

「アル、もがっ」

「はい～。昔なんかぁ、男の子がそばにいるだけで顔真っ赤にしてぇ、大変だったんですから～」

なぜかアスカさんの口をふさぐアルルさんの言葉に、僕は小さくうなずいた。

そうなんだ。でも、普段騎士さんといるときはそんな風には見えないんだけどな？

首を傾げると、僕の言いたいことを察してくれたアルルさんが補足してくれる。

「騎士団に入ってからはぁ、多少はましになったんですよ～？　男の人がたくさんいますから～」

ああ、なるほど。結構女の人もいるけど、男の人が多いものね。いつも一緒にいれば慣れちゃえるか。

「～！　ぷはぁっ！」

「もちろん、それだけじゃないわよね～？」

「やかましいわっ！」

何とかアルルさんの手をはがしたアスカさんは、顔を真っ赤にしながらアルルさんに怒鳴り声をあげる。

ニコニコと笑顔になりながら「きゃ～♪」と言いながらアスカさんから逃げ回るアルルさん。

何とも微笑ましい光景に、思わず顔がほころんだ。
アスカさんとアルルさん、本当に仲がいいなぁ……。

「くそ、のらりくらりと！」
「きゃ～こわ～い♪　勇者様ぁ、助けてください～♪」
「うわ！？」
「なっ！？」

急に胸の中に飛び込んできたアルルさんを、あわてて受け止めた。
びっくりしたぁ……。

「あ、アルル……！　早くコウタ様から離れろ！」
「勇者様～、アスカが怖いです～」
「えぇい、猫なで声を出すなぁ！」

僕が何かを言うより先に、アスカさんがアルルさんを僕から離してくれた。

「あ～ん、勇者様～」

声は助けを求めるそれだけど、顔は明らかにアスカさんの態度を面白がっているそれだった。
これ、どうしたらいいんだろ……？
とりあえず、助けを求められたので、アルルさんに味方することにしよう。

「ええっと……。アスカさん、もうそのくらいで……」
「いいえなりません！　このアホには一秒でも早く常識を叩きこまねば……！」

それほど常識破りじゃないと思うけど……まあ、多少は目に余るかなぁ……？

ちょっと判断に困っていると、アルルさんは頬を膨らませて手に持ったバスケットを見えるように持ち上げた。

「ぶぅ～！　そんなこというんならぁ、アスカにはお昼ご飯上げないんだから～」

「え、お昼ごはん？」

アルルさんの言葉に空を見上げると、もう太陽が天上に差し掛かる頃合いだった。

王子と七連戦してる間に、結構時間過ぎてたんだなぁ。

「はい～。私ぃ、お料理もできますから～」

にっこり笑ってバスケットの中身を見せてくれる。

中には具がたくさん詰まったサンドイッチだった。

それを見た途端、僕の体はお腹がすいたと激しい自己主張を始める。

ぐー。

遠慮ない音に思わず顔が赤くなるけど、アルルさんはそんな僕の反応に嬉しそうに微笑んでくれた。

「フフフ、大丈夫ですよ～。たくさんありますからね～？」

「あ、あはは……」

恥ずかしくなってごまかし笑い。

アルルさんは背中を引っ張っているアスカさんの方を見やった。

「ね～？」
「何がねー、だ……まったく……」
呆れたようにため息をつきながら、アスカさんはアルルさんの背中から手を離す。
「では、しばし休憩としましょう。コウタ様」
「わかりました。アスカさんも一緒ですよね？」
「……ええ。片付けが終わったら、ご一緒させていただきますね」
アスカさんは微笑んでそういうと、王子や団長さん、ほかの騎士さんたちのところへと向かっていった。
やっぱり、アスカさんくらいになると忙しいのかな？
「じゃあ勇者様ぁ、こちらへどうぞ～」
「あ、はい」
アルルさんに言われて、いつの間にか敷いてあったシートの上に腰かける。
バスケットを開いて、中にあったコップを持ち出し、アルルさんは何かの呪文を唱え始めた。
「湧水（ウォーター）」
アルルさんの呪文に合わせて水の玉がコップの真上に生まれ、コップの中身を満たしていく。
「すごい、こんな魔法もあるんですね……！」
「はい～。フィーネ様くらいになりますとぉ、アペルやオランゲの

ジュースを出せるんですけどね～」
「そうなんですか……」
僕たちの世界ではアペルはリンゴ、オランゲはオレンジのこと。
なんだか語感というか、根っこの部分はそっくりなんだよね。
でも、フィーネ様は何もない所からリンゴジュースが出せるのかぁ……。
「さあ、勇者様～。アルル特性サンドイッチ、ぜひご賞味ください～」
「はい、いただきますね」
僕は野菜がたくさんはさんであるサンドイッチを手に取り、さっそく一口頂いてみる。
「ん～……」
おいしいなぁ。レタスみたいな野菜はシャキシャキと歯ごたえがあるし、一緒にはさんであるトマトみたいな野菜も程よい酸味が効いてる！
何より、それらの野菜に和えてあるドレッシングが絶妙！　野菜の味を邪魔しない素朴な風味が具材のおいしさを引き立ててる！
「おいしいですね！」
「本当ですか～!?　よかった～」
「このドレッシングは、ひょっとしてアルルさんのお手製ですか？」
「あ、おわかりになります～？　いろんな調味料を混ぜ合わせた特性ブレンドなんですよ～」
魔法薬を調合する要領で作るんですよ～、と自慢そうに言いなが

らアルルさんもサンドイッチを食べ始める。

「ん～、おいしい～」

「アルルさん、魔法だけじゃなくてお料理もできるんですね」

「はい～。どっちも趣味の範疇なんですけどね～」

「あはは、そんなことないですよ」

アルルさんは僕の魔法の先生をやってくれているけど、周りの魔法使いの人たちに比べて頭一つ抜けてレベルが高いみたいだった。

ほかの人が気が付かない僕の発音の間違いに気がついたり、真子ちゃんみたいに詠唱なしで魔法発動したりもできる。

その上料理もできるなんて……ホントにすごい。

「アルルさんなら、きっといいお嫁さんに慣れますよ！」

「……」

僕の言葉に、アルルさんは軽く目を見張る。

そしてゆっくりと笑顔を大きくすると。

「なら、勇者様？」

「はい、なんですか？」

「私のことを、もｒ」

「チェストォ！」

後ろからやってきたアスカさんに後頭部を蹴り飛ばされた。

え、ちょ、なんで！？

「言わせん！　言わせんぞぉ！」

「いった～い！　何するのよ！？」

「そういう貴様は何を言おうとした！？」

「ガルルルル！」
「グルルルル！」

そのままにらみ合いが始まっちゃった……。
わけがわからず呆然とする僕のことを、遠くから王子と団長さんが笑って見つめていた。

Ｎｏ．１５：ｓｉｄｅ・ｋｏｔａ「光太修行中」（後書き）

やっと表題っぽい話が書けた気がします……。
このように基本的に光太・礼美視点ではこういったラブコメいた話、それ以外では作品全体を進める裏話的な視点で進めていきたいと思います。
そんなわけで次回は礼美ちゃん視点となりますー。

No.16：side・remi「礼美勉強中」

「つまり、呪文の中の長くて無駄な部分を別の魔術言語（カオシックルーン）に置き換えるわけね？」

「それだけじゃねぇけど、つまりそういうこと」

ジョージ君の言葉に、真子ちゃんがウンウンと頷きました。

私はそんな二人をむすっとした顔で見ているのでした。

結局、ジョージ君は真子ちゃんとフィーネ様に謝ってません。

何度かお説教したし、何度も謝らせようとしたんだけど、最後は真子ちゃんにそんなことさせなくていいって言われちゃいました。

こういう教育は最初が肝心なんだよ！って言ったのに、いや別に教育しなくてもいいでしょ？って……。

「でもそう簡単に置き換えなんてできるの？　文字って普通は意味が重複しないと思うんだけど」

「魔法の基礎を形作る基本言語が９８文字、でその意味を補助する追加言語がその三倍以上あるんだよ。しらみつぶしになるけど、探せば案外見つかるぜ？」

真子ちゃんは今、ジョージ君に魔法詠唱の効率化というのを習っています。真子ちゃん曰く、効率化が図れるなら戦術的威力の上昇につながるとか……。私にはよくわかりません。

魔法を唱えるのが早くなる、というのは理解していますけど……。

でも、改めてジョージ君のお話を聞いていると、ジョージ君はすごいってことに気が付かされます。

真子ちゃんと専門的なお話をしているのもそうですけれど、それを実践に移しているんです。

さっきも私が覚えたての光の魔法を、たった一言で発動させてい

ました。ヨハンさんに聞いてみても、初歩の発光魔法とはいえたった一言での発動はジョージ君にしか使えないそうです。
　無詠唱の発動なら、ヨハンさんもできるみたいだけれど、一言となると逆に難易度が上がってしまうとかで。

「つまり、全部合わせると最低でも４００近い文字があると……それはほんとに文字なの？　もはや漢字の領域ね……」
「カンジ？　言ってる意味はわかんねぇけど辞書ならそこに入ってるから見たらわかるぜ。一文字一文字に込められてる文字が違ってくるからよ」
「それは嫌ってほどわかってるわよ」

　真子ちゃんがため息をつくと、立ち上がって辞書を取りに行きました。
　私がじとーっとその背中を追っていると、ジョージ君が落ち着きなさげに体をゆするのが視界の端で見えました。

「……なあ、あんた」
「……」

　つーん。

「……なあ、オイ。聞いてんだろ」
「……」

　つーんつーん。

「聞いてんだろ！　返事しろよ！」
「私はあんたなんて名前じゃありませんー」

名前を呼ばなきゃ返事しないもん。
あたしの言葉にうんざりしたように、ジョージ君は頭を掻きました。

「えぇい、チクショウ。……レミ！」
「……はい、なんですか？」

仕方ない、というようなジョージ君の態度に、私も仕方なくという風に答えます。
答えたくないわけじゃないですけれど、いやいやという風に名前を呼ばれて気持ちよく返事ができるわけもありません。

「なんですかじゃねぇよ、こっち睨むのやめろよな！」
「睨んでません。授業の様子を見てるんです」
「同じじゃねぇか！」
「同じじゃないですー」

私の反論に、ジョージ君の目つきがどんどん悪くなっていきます。
子供っぽい反論だってわかってます。でも、ジョージ君の態度につられてついこんな風になってしまいます。
いけないって、わかってるんですけど……。
私も負けじと睨み返すと、ジョージ君もまっすぐ私の目を睨みつけてきます。しばらくお互いの顔をまっすぐに見て、にらみ合いっこです。
不意に、にらめっこのような状況であることに気が付いて、私は笑いそうになりますけど我慢します。
く、と少しだけ頬を膨らませて耐えると、なんだかジョージ君が落ち着かなさげになってきました。
あ、そういえばこれ、にらめっこの初めっぽいなー。

「ちょっとジョージー？　そういえばあたし、公用語が読めないんだけどー？」
「はぁ！？　魔術言語（カオシックルーン）が読めて、公用語が読めないってどんな頭してんだよ！？」

なんて考えていると、突然真子ちゃんがジョージ君に声をかけました。
ジョージ君はその声を聴くと、私とのにらめっこを中断して真子ちゃんの方に駆けていきました。
真子ちゃんの方に行くとき、なんだかほっとしたような顔してたのは気のせいかなぁ……。

「はぁ……」
「いかがなさいました？　レミ様」
「あ、ヨハンさん」

ため息をつくと、横からヨハンさんがそっと紅茶が差し出してくれました。
ヨハンさんはこちらの世界にきて以来、私たちのお世話を買って出てくれた人です。あまりこちらの常識に馴染みがない私たちに、いろいろなことを教えてくれます。
それに、細かいことにも気が付いてこうしてよく差し入れをしてくれる、優しい人です。
優しい人、なんですけど……。

「ヨハンさん、紅茶ありがとうございます」
「ああ、なんてありがたきお言葉……！」

暖かな紅茶に思わずほっとして笑顔でお礼を言うと、ヨハンさんがいきなり片膝をついて私の前で両手を組んで祈るようなポーズに

なりました。
　優しい人なんですけど、ちょっと困ったところがあるんです。
「私のような未熟者にそのようなお言葉をかけてくださるとは……！」
「あ、あの、ヨハンさん……？」
「不肖このヨハン、レミ様の今のお言葉、子子孫孫受け継いでいきたいと思います……！」

　そのまま深く頭を下げて、なんだか男泣き？っていうのかな？
そんな風に声をあげて泣き始めるヨハンさん。
　ヨハンさんの困ったところは、このオーバーリアクションなんです。
　私がちょっとお礼を言ったり、ヨハンさんの言葉に感動したりすると、すぐにこんな風に泣き始めちゃって……。
　真子ちゃんにこの子と相談したら、若いけど涙腺ゆるいんじゃない？って魔術言語（カオシックルーン）のお勉強しながら言われちゃって……。
　そういうのじゃないように見えるんだけどなぁ。
　どうしようかと困っていると、ジョージ君と一緒に何冊かの魔導書を抱えて戻ってきた真子ちゃんが、膝をついて泣いてるヨハンさんの姿を見てジトーっとした目になりました。

「……何してんの、ヨハンさん」
「おやこれはマコ様。ご機嫌麗しく」

　呆れたような声で真子ちゃんがそういうと、途端にヨハンさんが泣くのをやめて立ち上がりました。
　よくわからないんですけど、真子ちゃんが声をかけるとこうなるんです。

「実はよい茶葉が手に入りまして。レミ様とマコ様にもご賞味いただこうかと」
「……もらっとくわ。ありがとう」
「いえいえ。これも勇者様に使える神官としての務めですゆえ」

ヨハンさんは朗らかに笑うと、真子ちゃんとジョージ君のために紅茶を用意し始めました。
なんで真子ちゃんのとこは普通で、私が声をかけるとオーバーリアクションになるのかなぁ？
私もヨハンさんと普通にお話ししたいのに……。
ため息つきながら椅子に座った真子ちゃんの隣まで移動して、こっそり聞いてみます。

「真子ちゃん、真子ちゃん」
「なに？」
「今度、ヨハンさんと二人っきりでお話ししてみていい？」
「……やめときなさい。今のヨハンさんと話したら、間違いなく滂沱の涙で溺れて死ぬわ、彼」

ダメでした。ヨハンさん、そんなに涙腺ゆるいのかなぁ……？
でも、真子ちゃんがいい加減なことを言うとは思っていないので、我慢です。
きっといつか、きちんとお話しできるよね？

「それで、今日はジョージ君もそろって何を？」
「構成構築の効率化の勉強ね。魔法構成を効率的に運用できるなら、少ない魔力で魔法を発動させたり、逆に使用魔力量を変えずに威力強化を図ったりできるようになるしね」
「なるほど。女神様の御威光をより世に広めるためと……。マコ様は勤勉でございますね」

「いや、うん、まあ。そういう意味にとれなくないけど……」

ヨハンさんの言葉に、そういえばそうかと頷きます。

元々魔術言語（カオシックルーン）は女神様が人々に、よりよい生活が送れるようにと賜ったものなんだそうです。

元になった言葉は、今アメリア王国に攻め込んできている魔族さんたちが使っていた法則破壊言語（イレイドルーン）と呼ばれるものだそうで、それを人間でも発音できるように変換しているんだそうです。

だからこの世界では、神官の人でも魔法を使えるし、神官の人と魔法使いの人の仲が悪い、なんてこともないようです。

だからこうして、ヨハンさんとジョージ君が顔を合わせても何の問題もないんですけど……。

「それにしてもジョージ君？　あなたは少しレミ様のお言葉を無視しすぎる。人間、素直になることも重要ですよ？」

「うるせー。キッチリ謝ったのに、いつまでも絡んでくるやつのいうことなんて聞けるかよ！」

「謝罪とは誠意の表れ。謝る相手に対する誠意の欠けた言葉は、謝罪とは言えませんよ？」

「やかましい！　女の尻にべたべたくっつくだけのヤローにいろいろ言われる筋合いはないんだよ！」

「ほう……？」

「なんだよ！　やるのかよ！？」

バチバチと火花を散らして言い合うヨハンさんとジョージ君。なんだかとっても仲が悪い感じです。

ガタリと立ち上がった二人はにらみ合いつつ、口々に魔術言語（カオシックルーン）を唱え。

「ってだめー！？」

私は慌てて二人の間に割って入りました。
今の攻撃魔法の詠唱だったよ！？　習ってまだ五日くらいだけど、私にもわかるくらいはっきりとした攻撃魔法の詠唱でした。
慌てて割って入ったせいで、二人の目と鼻の先にシールド張っちゃったし、本当に驚いたよ！？

「どうして攻撃魔法なんか唱えるんですか！？　それでなくても喧嘩はだめです！」
「うっせぇ、どけ！」
「はい、レミ様の御心のままに」

ジョージ君はまだ掌の上に魔法の構成保ったままだったけど、ヨハンさんはすぐに戦闘態勢を解いてくれました。よかったぁ……。
あとはジョージ君だけど、どうしようかな……。
と迷っていたら、真子ちゃんがゆっくりジョージ君の背後へと周り。

「消去（イレイズ）」

構成除去の魔法を唱えて、発動寸前だったジョージ君の魔法を握りつぶしちゃいました。

「うえ！？　高位魔法（ハイスペック）！？　誰がそんなもん教え」
「私じゃ」

いきなりの真子ちゃんの対応に驚いたジョージ君が振り向くと、真子ちゃんの背中からひょっこりとフィーネ様が顔を出しました。

「フィーネ、テメェ！」

「ジョージ。ここ最近の行動は特に目に余るぞ。それでなくとも、普段から素行が悪いといわれとるのに……」
「うるせぇ！　宮廷魔導師だからって、お前の指図に従う義理はねぇぞ！」
そういって、フィーネ様を追い払うように腕を振るうジョージ君。
罵声にも近いその声に、フィーネ様の顔が一瞬悲しげに歪むのが見えました。
でも、フィーネ様はすぐにその表情を消すと宮廷魔導師の顔になってジョージ君の説得を続けました。
「確かにそうじゃ。だが、王城に存在する規律を乱す者あらば、それを処罰する権利があるのを忘れるな」
「だからなんだ!?　お前が、俺に勝てるのかよ!?」
獰猛に笑って吠えるジョージ君。フィーネ様はそんな彼に答えるように、悔しそうに下唇を噛みました。
「……勝てぬ」
「そら、みろ！　宮廷魔導師なんて言っても、どうせそんなもんじゃねぇか！」
フィーネ様の言葉に我が意を得たりといった様子のジョージ君。
でも。
「お前なんかが宮廷魔導師になったのが間違いなんだよ！　ばあさんが指名したからって……！」
そうやって勝ち誇るジョージ君はどうしてかボロボロになっていくみたいで。

「みんなが認めたって、俺は認めねぇ……！　お前は宮廷魔導師になんかなれやしねぇ！」

気づけば、私はジョージ君を背中からぎゅっと抱きしめていました。

「な！？　おい、いきなりなにしやが」

「ダメだよ、そんなこと言っちゃ」

今度ばかりは逃げられないように、ギュッと力強く抱きしめます。ジョージ君が渾身の力で振りほどこうとするけれど、まるで鋼が通ったみたいに私の体は小揺るぎもしませんでした。

「また説教かよ！　おおきなお世話――」

「そんな、無理やり自分を傷つけることしちゃ、ダメだよ」

私の言葉に、ジョージ君の動きが止まります。

「なに、言って……」

「気づいてないならもっとダメ。そんなの、誰も幸せにならないもの」

私には、さっきまでのジョージ君の言葉が、まるで自分を責めているように聞こえました。

宮廷魔導師に選ばれなかった、宮廷魔導師に慣れなかった自分を責めるような……そんな風に。

フィーネ様は、先代様の指名で宮廷魔導師になったと聞きました。でもそれは望んだからそうなったわけではないのかもしれません。

人には言えない苦労があって、誰にも聞かれないように泣いてい

たのかもしれなくて。
ジョージ君はそんな彼女のことを知っていたのかもしれません。
「誰もジョージ君を責めないよ。……誰もジョージ君を責められないんだよ……？」
だからこそ、ジョージ君はこんな態度を取るのかな。誰かに、罰を与えて欲しくて。
フィーネ様の代わりになれないから、自分を責めて欲しいから……。
「――」
ジョージ君はしばらく黙ったままでしたが。
「――転移術式（テレポート）――」
また、転移術式（テレポート）でどこかに行ってしまいました。
私は、今度は無理には追いません。
きっと、踏み込んではいけない部分にまで私は踏み込んじゃったから。
今度は、私が謝らなきゃね……。
「……礼美、あんた……」
「真子ちゃん……」
真子ちゃんの声に顔をあげると。
「どんだけ人間離れしていくわけ……？」

なぜか恐れおののいたような真子ちゃんの顔が見えてきました。
わけがわからず、首を傾げてしまいます。

「え？」
「いやあんた。さっきジョージ抱きしめた時、体が光ってたわよ？」
「えええぇ！？」

体が光ってって、なに！？
慌ててフィーネ様の方を向くと。

「確かに光っておった」

何かをあきらめるような顔で首を振ってました。
ならヨハンさんは！？

「ああ、女神レミさまぁ……！！　なんて慈愛に満ちたお姿とお言葉……！！」

すごく感動した表情で、滝のように涙を流しながら私に膝をついて祈りをささげていました。
ちょっと待ってよぉ！？

「いやー、さすが女神の再顕現。体が光るとか、ぱないわぁ」
「肉体強化の術式？　いや、構成そのものが未知のものに見え取ったし……」
「レミ様ぁ、レミ様ぁ～！！」

三者三様の反応に、私は思わず涙目になります。
だって、人間離れなんてしてないもん！
でも反論の言葉が思い浮かばなくて。

「うわ～ん！？」

私の涙交じりの悲鳴が、魔導師詰所の中に響き渡るのでした……。

No.16：side・remi「礼美勉強中」（後書き）

シリアス？　いいえ、シリアルです。思いのほか長くなったなぁ……。

普通にラブコメっぽい空気の光太サイドに比べると、ジョージ中心に人間関係が回ってる感じですねー。あんまり湿っぽくはしたくないんだけどなー。

次回はついに奴らが動き出す？

No.17：side・ryuzi「魔王軍、侵攻」（前書き）

今回、若干変態描写がございます。
そういうものが苦手な方はご注意ください。

No．17：side・ryuzi「魔王軍、侵攻」

「のろしが上がった、だって！？」

いつもの朝食。最近の主食になりつつあるウッピー肉をかじっていると、王子の驚愕の声が耳に入ってきた。

「はい、前線の物見係からの報告があり……！」

「そんな……！」

そちらの方に目を向けると、さっきやってきた伝令の報告に愕然としている表情の王子が目に入った。

でも、なんでそんな驚いてんだ？

「……ちょっとアンナ。魔王軍って確か二週間に一回くらいのペースで進行してくるんじゃなかったの？」

「そのはずです！　一週間なんて早すぎますわ！？」

真子とアンナの会話のおかげで記憶のサルベージに成功する。

そういやこっちの魔王軍、二週間に一回くらいのペースでしか侵攻しないうえに、のろし上がってから三日くらい間を開けるんだっけ？

改めて考えると、侵略戦争しかける軍としてどうなんだそれはって感じだな。確かに補給とか必要だとは思うけど、連戦連勝なら間を挟む必要はないはずだし。

まあ、こっちとしてはありがたい話、だったんだな。

「でものろし上がってから三日くらいで攻めてくるんだろ？　その間に準備したらいいんじゃねぇの？」

「そ、そうですね。今から騎士団に命じて……」
「伝令ー！　伝令ー！」

俺の言葉に王子が若干落ち着きを取り戻したのもつかの間、また伝令が息を切らして走ってきた。
ああ、もう嫌な予感しかしねぇな。

「何事です！？」
「前線より報告！　魔王軍将校より《今すぐ勇者を出せ。さもなければ、王都侵攻を開始する》と……！」
「なん……だって……！？」

ああ、やっぱりな。しかもまさかの御指名ときたよ。

「勇者がいることがばれてる……？　どういうことよ」

真子がいぶかしげな様子でつぶやいている。
確かにまあ、ばれてるのは問題かもしれねぇな。外に情報漏れてるってことだし。
でも今重要なのはそこじゃねぇな。

「……アルト王子。僕たちが行きます」
「そんな！？　まだ皆様の修業が終わって……」
「大丈夫です、アルト王子。私たちには力があります。なら、皆さんのために戦うのは怖くありません！」

光太と礼美が勢いよく立ちあがって力強く頷いている。
出てこなければ王都侵攻を開始するといわれて、この二人が黙ってるわけはねぇな。
だがその隣では真子が渋い顔をしてやがる。

今戦うのは避けたい、って顔してんな。真子の表情も案外読みやすいよな。

「おいおい、待て待て」

なら一番槍は、俺がもらっていこうじゃねぇか。

「お前らまだ実戦すらこなしてねぇじゃねぇか。ここは俺に任せとけよ」

「隆司君!?」

「隆司、でも!」

「……確かに、あたしたちの中で実際に戦いの経験があるのは隆司だけよね」

俺の言葉に光太たちが反論しようとするけど、真子の冷静な声が二人の言葉を詰まらせる。

さらに言うなら、俺たち四人の中で一番死ににくいのは俺だろう。体の頑丈さと回復力が桁外れだもんな。

「真子ちゃん……でも……!」

「あたしだって隆司だけ戦わせるのは嫌だけど、今すぐ戦えって言われても準備ができてないのよ……仕方ないわ……」

礼美の言葉に真子が仕方がないというように首を振っているが、その眼は何より雄弁に語っている。

死んでも情報持って帰れ、と。

腹黒軍師殿の厳命にゲンナリしている俺の肩を、うつむいて唇を噛んでいた光太ががっしり掴んだ。

「……隆司」

「なんだよ？」
「ごめん、今回はお願いしてもいいかな……？」
うつむいたまま目を合わせようとしない、光太。親友を危険な目に合わせようとしているのが分かっているから、どうしても自分が許せないんだよなこいつは。
だからまあ、俺のセリフは決まってる。
「ああ。任せとけ、ダチ公」
にやりと笑って、力強く宣言する。
そう簡単に、やられたりはしねぇさ。

急ピッチで進められた防衛準備。でたらめにあわただしく準備を整えた騎士団は、大慌てで王都を出発した。
今、俺はデンギュウとかいうムカデみてぇに大量の足が生えたきわめて気持ち悪い哺乳類系の何かが引っ張るでっかい車輪付きの箱の中に座って前線へと向かっていた。ちなみに屋根はない。
俺以外には騎士団長以下十数名の騎士たちの姿がある。騎士団は王都にいるだけで三百人前後くらいいるらしいが、前回の会戦の傷が癒えてなかったり非番だったりで、今回の戦いに出てこられるのがこれだけしかいないらしい。
聞くところによると、魔王軍が攻め込んでくる人数がだいたい同じくらいらしいので圧倒的不利が確定してるわけだ。どうすんだよこの状況。
「なんか作戦あんのか団長さん。この戦力だと、確実に前線押し込まれちまうけど」

「それについてだがな。今回戦うのはお前だけだ、リュウジ」
「はい？　どういうことだよ？」
「実は魔王軍との戦闘は全戦力をぶつけ合う総力戦と将校同士の一騎打ちが選べてな。前回は総力戦だったんで、今回は一騎打ちが選べるんだよ」

したり顔でうなずく団長さんだけど、総力戦はともかく一騎打ちに勝ったらおとなしく帰るのか？　相変わらず意味不明だな魔王軍。

「勇者を指名してきた以上、お前が戦うことは決まってる。さすがに勝てはしないだろうが、向こうも勇者の調査が目的だろう。なら、お前一人が戦えば今回は終わるさ」
「すげぇ楽観的だなおい」

さすがの俺も呆れざるを得ない。ホントに戦争中なのかよ？
っと、そういえばひとつ確認しておきたいことがあったんだよな。

「魔王軍だけど、基本的に人型なんだっけ？」
「ああ、そうだな」
「でも人間じゃねぇんだよな？」
「おう。少なくとも人間の頭に耳が生えてたり、ケツに尻尾があったりはしねぇな」

なるほど……。
俺は人知れずほくそ笑んだ。
これは光太にも教えてない、というか理解は得られそうにないんで黙ってるんだけど。
俺の好みはいわゆるモンスター娘である。
擬人化分野の中でもモンスター系に特化しているジャンルで、基本的に人間に化け物のパーツをくっつけたような姿が大半、ごくた

まにモンスターに人間の特徴をくっつけたようなものもある。
俺はどうしようもなくこのジャンルが好きだった。なんでかといわれても困るけど、好きだった。
でもあれだ。ぷりてぃこぬこと美少女くっつけられたらどうしようもなく萌える。だろ？

「なんだよ急に笑い出して気持ちわりぃな」

俺の表情を見て若干引いている団長さんを置いといて、俺は笑みを深めていった。
この世界にはどんなモンスター娘がいるのかなぁ……。

で、前線に到達した俺たち。
俺の目の前には、まさに夢のような光景が広がっていた。
犬耳尻尾なだけじゃなくて肘と膝までモッフモッフなワーウルフに、肉球まで完備したワーキャット。肉球プニプニしてぇぇぇぇぇぇ！！

もちろん軍というだけあって、女の子だけじゃなくて野郎もいて、割合としちゃ半々くらいだけどもうこの際そんなことはどうでもいい。今すぐ撫でたいさわりたい超モフりたい。
だが、前線に到着した俺の目の前にいたのはそんなフワカワ系モンスターだけではなかった。

「ほう？　お前が勇者か？」

流麗蒼美の差しが俺を射抜く。サファイアのような瞳が面白そうに揺らめいた。

「異界より顕現したものと聞いていたが……なるほどな」

ゆらりと大きな尻尾が彼女の心を表すようにくるりと揺れた。だが力強さを感じる尻尾は決して地面に触れないように丁寧に丸められていく。

「見たことのない黒髪黒瞳とはな。だが……」

ばさりと背中に生えた大きな翼を広げ、凶悪な笑みを浮かべてこちらに華麗な礼装が施されたレイピアを突きつけた。

「黒は私の色だ。その色を纏うのは不遜と知れ」

その身を覆うのは漆黒の鱗。起伏に富んだその体を包む鎧もまた漆黒。

その両の手には鋭いかぎ爪。牙を備えた美しい顔には不釣り合いな禍々しい角が生えている。

「我が名は魔竜。魔竜姫ソフィアだ。名を名乗れ、勇者」

見紛うこともない。ファンタジー世界につきものの生き物。最強と名高い、伝説の生物。

「ドラゴン娘キタァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！」

（俺の嫁）

ブラックドラゴンの姿がそこにあった！

やべぇ超興奮する！　俺の気合に呼応して羽織っていたマントがバタバタ音を立てて靡いちゃうくらい興奮してる！

俺の反応にびっくりしたらしい、目の前のドラゴン娘……ソフィ

アが手に持っているレイピアを取り落しかけた。

「お、おれの？」

「ああ、すいません思わず本音が」

素早く紳士的に頭を下げつつ、俺はソフィアの姿を隅々まで脳裏に焼き付けるように観察する。

きめ細かい鱗は、彼女が身に着けている鎧に負けないほどの輝きを放っている。

髪は戦いに邪魔なのか肩口あたりで切りそろえられているショートヘアだが、勝気な雰囲気の彼女にはとてもよく似合っている。むしろそれ以外の想像が……ポニテも捨てがたいな。

スタイルはグンバツ。出るところは出て引っ込むところは出ているだけじゃなくて、鎧のスカート部分から除く生足はむっちりしているとか凶器ですか。俺を挟み殺すんですねわかります。

目の前の俺の様子に戸惑ってひそめられている形の良い眉、瞳、鼻、唇。すべてのパーツが黄金比を保って俺の向けられている。おっとヨダレが。

思わずたれそうになったヨダレをぬぐい、俺は礼を逸しないうちに自己紹介を始める。

「俺の名前は辰之宮隆司。（まさかこんなに早く嫁に出会えるなんて超幸運じゃねぇかグェヘヘ）この世界に召喚された勇者の一人だ」

「心の声がダダ漏れになってんぞオイ」

隣に立っている団長さんが何か言ってるけど無視。

俺は手に持った石剣を右手に持って、ソフィアに突き付けた。

気味悪がって引いていたソフィアも、そんな俺の様子を見て力強い笑みを取り戻し、手に持ったレイピアをこちらに突き付けてきた。

「言っていることの意味は分からないが、勇者には違いないのだな

？　ならばその力、私に見せてみろ！」
「欲しいものは自分の力で手に入れる……。今！　男のロマンを叶えさせてもらうぜ……！」

俺とソフィアは、合図もなく同時に飛び出した。

「おおぉぉぉぉ！！」
「どりゃぁぁぁ！！」

俺たちが振りかぶった刃は轟音を立ててお互いの剣に牙を立てる。想像通りの力強さに俺は笑みを深める。そうだ、ドラゴンはこうでなくっちゃなぁ！
だがソフィアは想像以上の俺の力に圧倒されたのか、一瞬後ろに体が揺れる。

「ぐっ！？」
「しゃぁっ！」

俺はその隙を逃さずレイピアを上へと弾き飛ばし、石剣を大きく振りかぶる。

「おらぁっ！」

勢いよく振り下ろされた刃は、しかしソフィアの翼の制動によって見事に後方回避されてしｍ。

キィン！！

あれ、なんかすごい甲高い音がしたんだけｄ。

ブチィン！！

「きゃぁっ！？」

突然、ソフィアの胸がはじけ飛んだ。

いや、違うか？　壊れた胸部鎧は縦一文字のまっすぐな傷を見せている。その間から見えるのは、染みひとつない肌色と、包帯のような細い布。

なるほど。おっきいおっぱい気にして、普段はさらしで封印しているんですねわかります。

突然の窮地に顔を真っ赤にして涙目になり、あわてたように左手で胸を抑え込むソフィア。そのかは悔しさと羞恥に歪んで、とてもそそる。誘ってんのか。

そんな彼女の様子をじっと見つめていた俺に気づいた彼女は、ハッと気が付いたような顔になりすぐに取り繕おうとした。

「ふ、ふん！　思ったよりやるじゃないか！　み、認めてやろう貴様の力を！」

一生懸命胸を張ろうとしているけれど、素敵なロケットおっぱいを隠そうとしているせいで、すごい腰が引けてます。

気丈に威厳を保とうとしているが、赤い顔に涙目のせいで、むしろ彼女の愛らしさを引き立ててしかいない。

思わず、つばを飲み込む。

……ゴクリ。

思った以上に大きな音が出た。

そんな俺の様子に気が付かないソフィアは、じっとしている俺をキッと睨みつけると。

「ど、どうした！　遠慮せずかかってくるがいい！！」

と、おっしゃってくださった。

本人からＯＫも出たし、いいよね？

「……では遠慮なく」

「さ、さあ！　来るがいい！」

俺は石剣を肩に担ぎなおすと、何とか背を伸ばそうとするソフィアに駆け出し。

「おぉっと足が滑ったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

石剣を放り出して、内股になっているムチムチな太ももと鱗の間にヘッドスライディングを決めた！

「え、この状況でそっち行っちまうのお前？」

また団長さんが何か言ってるけどガン無視。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？？」

女の子っぽい悲鳴とともに、ソフィアの体が俺に引き倒される。

あ、スパッツ。こっちにもあるんだなー。まあ、今はそんなことより。

スリスリスリスリ。

「あ、ちょ！？　ん……！　やめ……！」

んー、人間肌のムチムチ具合と鱗のスベスベ具合が相まって極上の触感に――。

「やめなさいっていってるでしょぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！？？？」

ずごぉぉぉぉぉぉぉんんんん！！！

エライ勢いで後頭部に剣の柄が叩きつけられた。さすがに痛い。俺の顔が地面に埋まるのと同時に、俺の頬に当たっていたソフィアの足が高速で撤退していった。

少し力を入れてズボッ！と地面から顔を引き抜くと、荒い息でこちらを睨んでいるソフィアと目があった。

顔は赤いし目つきは鋭い。ここは謝っておくべきだろう。

「思わぬ可愛らしさに興奮しました。ごめんなさい」

「可愛いなどとそんな褒め言葉で……！」

「だが後悔も反省もしていない！」

俺が力強く言い切ると、ソフィアの顔と翼と尻尾がビクゥ！と跳ね上がった。かーいいーなー。

「え、え！？」

「というわけで、引き続きその太もも堪能させてください！」

勢いよく立ち上がり、クラウチングスタートの体勢になる俺。狙いは当然……。

俺の視線にまたビクゥ！と体を跳ねあげたソフィアは。

「い……イヤァァァァァァ！！？？」

胸を隠したポーズのまま、大急ぎで後退。空を飛ぶその速度は音速の勢いである。

「……あ！？　ソフィア様、お待ちくださいー！？」

俺とソフィアのやり取りを呆然と眺めていた魔王軍兵士諸君は大慌てで自分の上官を追いかけていく。移動用の乗り物もないのに馬並みのスピードで走る姿を見ると、やっぱり人間とは違う生き物なんだなぁ。

そして最後まで残ったワーキャットは、面白そうに俺の顔をまじまじと見つめ。

「これからもソフィア様をよろしくですニャ♪」

にやりと笑ってそう言い、そのままスキップしながら殿を務めていった。

俺はゆっくり立ち上がると、額の汗をぬぐう。

「いやぁ、魔王軍は強敵でしたね……」

「後頭部にデカいたんこぶこさえながら、シリアスにそんなこと言われてもなぁ」

やっぱり団長さんが何か言ってるけどスルーし、俺はソフィアが去って行った方向をじっと見つめていた。

また会おう嫁よ……。

No．17：side・ryuzi「魔王軍、侵攻」（後書き）

己の欲望には直球で正直。それが辰之宮隆司という男です。
こういう世界観だから魔族ってことにしてますが、本来なら獣人と表記すべき姿ですかね？　人間的なパーツの方が多いです。人間ベースに動物のパーツを加えてる姿を想像してくだしあ。男も女も同じ姿です。
次回はもう一回魔王軍に出張ってもらいます。いやだって、戦いらしい戦い一切してねぇし。

Ｎｏ．１８：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「魔王軍、連戦」（前書き）

流血表現有につき、念のためＲ－１５及び残虐表現有を今回から入れようかと思います。
そういった表現が苦手な方はご注意ください。

No．18：side・mako「魔王軍、連戦」

結局なんの情報も持ち帰らなかったアホを氷漬けにして放置した翌日。

つつがなく凍死しかけたアホを沸騰したお湯で溶かして戻しつつ朝食を頂いていると、血相を変えた伝令の人がまた飛び込んできた。

「勇者様方！　魔王軍がまた……！」

「またぁ？」

二日連続の侵攻に眉根を寄せる。昨日の時間破りといい、魔王軍妙に張り切ってるわね……。

「はい。今度も《勇者を出さねば王都を攻撃する》と……」

「あー、もう……。わかったわよ。今度はみんなで出るって団長さんに伝えておいて」

「は！　かしこまりました！」

あたしがそう伝令の人に伝えると、王子と王女が心配そうにこちらを見ていた。

「あの……本当に大丈夫なのですか？」

「昨日はリュウジ様のおかげで負傷者はおりませんでしたし、今回は騎士団に任せても……」

「そうはいうけど、王都まで来られる方がたまったもんじゃないわよ。向こうが勇者を見に来たってだけなら、あたしたちで出たほうがいいわ」

あたしの言葉に、礼美と光太も力強く頷いた。

「昨日はいきなりだったからびっくりしたけど、今日は大丈夫です！」

「隆司ばかりに戦わせるわけにはいかないからね！　それに……」

光太が隣に座っているアホに目を向ける。

「今の隆司に戦わせるのは、ちょっと……」

そこに座ってるのは丸々一晩氷漬けにされたせいで半死半生になっている隆司の姿があった。

体をガチガチ震わせ、少しずつ温かいスープを飲んでいるその姿は冬山の遭難者を思わせる。

頑丈さと回復力が上がってるっていうから、このくらい平気だと思ったんだけどなー。

「まあ、隆司は自業自得よ。まさか何も聞かずに相手を返すとは思わなかったし」

「人生目標を達成したと思ったら地獄を見たでゴザルの巻……」

なんか震えながらぶつぶつ言ってるけど無視。

あたしは今の自分たちの戦力を頭の中で確認する。

あたしはある程度基本的な魔法が使える。殺傷力は高めだけど騎士団にも魔法が使える人がいることを考えると当たらないと考える方が無難かしら。

礼美は魔法以外に、祈りというか意志ひとつで回復と防御が使える。ただし防御がどのくらいの堅さなのかはわからないので、後ろで援護担当させるのが無難ね。

光太の剣の腕前は一応普通の騎士より高いらしいけど、魔族とやらの身体能力がネックね……。魔法剣でうまく相手を足止めできれ

ば、あたしの魔法も当てる機会があるかしら。
　で、アホもとい隆司。昨日の会戦でも相手の将校とほぼ互角だったらしいから魔族と戦うときの要にできるわね。……問題は戦ったのがほんの一瞬だったのとその敵将校に惚れてるらしいってことだけど……。

「とりあえず隆司を矢面に立てて、あたしと礼美で援護。光太は遊撃ってことでいいわね？」
「うん、わかったよ真子ちゃん」
「僕もそれでいいよ」

　あたしの確認に頷き返す礼美と光太。隆司も一応うなずいてくれた。震えが収まりかけてるのを見ると、多少は回復してきたか。

「じゃあ、ご飯食べ終わったらさっさと行きましょうか。相手を待たせて癇癪起こされても面倒だしね」
「わかりました……どうかお気をつけて……」

　不安そうな王子にひらりと手を振って答えてから、あたしは食事を再開した。
　何はともあれ、食べないと力も出ないしね。

　やたら気持ち悪い哺乳系のデンギュウに連れられたあたしたちは、前線哨戒キャンプまでやってきていた。
　道中の団長さんによると、ここまで後退してきた奪われた領地の騎士団の人たちで構成されているらしい。たまに王都の騎士団とも後退しているので、今いるメンバー全員がそうではないらしいが。

「……で、隆司？」
「なんだよ？」
あたしはその前線哨戒基地のすぐそばで、たった一人仁王立ちしているオオカミの顔をした獣人を指差して隆司に尋ねた。
「あんたの嫁ってあれ？」
「いや、ソフィア（俺の嫁）はあんなゴツカワ系じゃねぇよ。あのフルモッフフェイスもあれはあれで心惹かれるけど」
「惹かれるんかい。あと心の声が漏れてるわよ」
まあ、遠目から見ても明らかに男だってわかるしねぇ。
でもなんで一人だけなのかしら。昨日はもっといたっていうのに……。
「隆司、僕は隆司のことを応援するからね！」
「私もです！　頑張ってね隆司くん！」
「応援ありがとう！」
あたしらの隣から隆司にそれぞれ声援が上がる。
まあ、この二人は元々魔族とも仲良くしたいと考えちゃうような奴らだからねぇ。
そんな会話を繰り広げながら魔族に近づいていくと、オオカミ魔族はニヤリと笑って見せた。口が裂けそうな笑みって、こういうのを言うのかしら。
「貴公らが、此度召喚されたという勇者たちか。魔竜姫閣下を退けたというからどれほどの猛者かと思いきや……」
あたしらを面白そうに観察しているオオカミ魔族の前に、隆司の

奴が一歩出た。
そして恭しく礼を一つ。何する気かしら。
「どうもこんにちは。魔竜姫（俺の嫁）ソフィアは元気ですか？」
「隠せ、少しは」
至極真面目な顔でそんなこと言い放つアホの後頭部に氷の塊をぶつけてやる。
隆司の言葉にかあるいはあたしの行動にか。ともあれよほど愉快に映ったのか、オオカミ魔族は豪快に笑い声をあげた。
「ああ、元気だとも！　ただ、昨日の会戦で少々ショックを受けたのか寝込んでいるがな」
「それはいけない、ぜひそっちに行って看病しないと」
「もう黙れお前はぁぁぁぁぁぁ！！！」
今すぐにでもオオカミ魔族に近づきそうになったボケナスを竜巻の魔法で上空に吹っ飛ばしてやる。
そんなあたしたちの漫才をさておいて、礼美と光太が一歩前に出た。
「僕の名前は、櫻野光太といいます」
「春日礼美です」
「これはご丁寧に」
敵を前にしての変わらない二人の礼儀正しさに、嬉しそうに笑ったオオカミ魔族は堂々たる名乗りを上げた。
「我が名はヴァルト・ルガール！　魔王軍四天王が一人にして、魔王軍の精鋭たる戦士たちをまとめる長！　魔王軍最強の将なり！」

うへぇ、四天王で最強の将がいきなり来ちゃったよ……。
あたしの後ろに胴体着陸を決める隆司を無視して、あたしも一歩前へと出た。二人の名乗りには少し遅いけど、一応名前くらいは言っておこう。

「少し遅れるけど、あたしは琴場真子。で、後ろに落ちてきたこのアホが……」
「タツノミヤリュウジだな？　話には聞いているよ」

何やらうめき声をあげながら体を起こす隆司を見ながら、その眼を眇めるヴァルト。
その視線に険はない。相変わらずこちらを面白がっているような表情だ。
まあ、異世界から来た上にみんな揃いの黒髪黒瞳の子供だ。面白くないわけはないだろう。

「突然閣下に求婚した挙句、その太ももをしっかり堪能した勇者が一人いると」
「何してんだお前はぁぁぁぁぁぁ！！！」
「ぬわー！？」

振り返ったあたしの蹴りをまともに食らって悲鳴を上げる隆司。
太ももを堪能！？　そんな話ひとかけらも聞いてないんですけど！？
団長さんをじろりと睨むと視線をそらされた挙句、口笛まで吹かれた。
つまり事実か。
足元に転がるゴミをどう処刑するか真剣に考えるあたしの耳に、またも豪快な笑い声が上がった。

「そう怒るな魔女よ。あの方に対してそんな態度がとれる男はそういない」
「こんな変態奴がそんなポコポコいてたまるかぁぁぁぁぁぁ！！！」
振り返った怒声にも動じずさらりと受け流すヴァルト将軍。
涼しい顔しやがって、暑苦しい毛皮持ってるくせに……！
憤るあたしだが、頭の片隅が警鐘を鳴らした。
今、何か違和感がなかったか？と。

「それに巫女よ。そう恥じることもあるまい。男が女性のそういう部分を魅力に思うことはままあることよ」
「え、え？　こ、光太君もそうなの？」
「え、そんなこと聞かれても……」
「そういう時は、胸を張るものだ、若き騎士よ。そうすれば、だいたいどうにかなる」
「は、はあ……」

隆司が太ももを堪能、の部分で顔を真っ赤にしてしまったらしい礼美に変な質問をされてうろたえる光太。
珍しいショットな上にあたしが望んだ展開だが、素直に喜ぶだけの余裕はない。
……今この男、光太と礼美を何と呼んだ？

「そう思わないかね、勇敢なる戦士よ」
「まったくだな。世の男はもっと欲求に正直になるべきだと常々思う」

いつの間にか復活していた隆司が、胸を張って堂々とそう答える。
そして、片目を眇めてヴァルトを睨んだ。

「ところで将軍？」
「なにかな？」
「ソフィアたんを嫁にください」
もうこの男に対する期待は一切捨てることにした。
隆司の言葉に今度こそ爆笑し、にじむ涙を指先で拭うオオカミ将軍。まさに抱腹絶倒よね。あたしも笑っとこうかしら、アッハッハッハッ。
「ああ！　むしろもらってくれるとありがたい。あの気性ゆえ、国のものにも恐れられる始末でなぁ」
「なぜあの性格の良さがわからんのだ……気の強い女性が羞恥に顔を染める姿こそ至高だというのに……！」
そこまで言ったゴミクズはふと何かに気が付いたように将軍の顔を見つめる。
「そういや、将軍。光太はともかく、良く真子が魔女で礼美が巫女だってわかったな、あんた」
「「――――！？」」
その言葉に礼美と光太の顔が驚愕に染まる。
っていうか気が付いてたんならさっさと言えよコンチクショウが。
「……フフ」
隆司の言及に、ヴァルト将軍は黙して語らない。ただ、小さく微笑むのみだ。
今のあたしたちの格好は、基本的に元の世界に来た時のもの……

つまり学校の制服姿だ。
その上から、隆司はマント一枚のみを羽織った状態であり、光太は革製の鎧をつけている。この二人に関しては、特に推測が難しいわけじゃない。隆司に関しては向こうも知ってるだろうし、光太の着ている鎧は騎士団のものだし。
問題はあたしと礼美だ。あたしたちは持っている能力の関係上、特別に何かの補助が必要にはならない。そのため、今のあたしたちの格好は学校の制服。この姿から、それぞれのポジションが魔女と巫女と推察するのは困難のはずだ。
……あたしたちが、訓練している姿を見ていなければ。

「そういえば、ここ最近の魔王軍、王都に勇者がいると決めつけて行動していた節があるわね」
「真子ちゃん……？」
「あんたたち、アルト王子に国の中を案内してもらったわよね？」
「う、うん」
「その時、自分たちが勇者だって言って回った？」
「い、いいや。僕たちのせいで、王子に余計な迷惑がかかるのは困るから、偶然知り合えた王子様にいろいろ案内してもらってる田舎の子ってことにしておいたけど……」

一般人を王子が連れまわしてることの方がよほど怪しいけど、この際それは置いておこう。
隆司も、外で活動するときは偽名を名乗り田舎者だって言い張ってるらしい。
つまり、あの国に勇者が召喚されたことを知っているものは、王城にいる人間のみということか。
……まさか、ね。

「……さて、立ち話もなんだ。せっかく来たのだし、一つ太刀合い

でもお願いするとしよう」

ヴァルト将軍はそういうと、自分の後ろに突き刺していた斧を肩に担ぎなおした。

片方の刃だけであたしや礼美が体を丸めたくらいの大きさがある巨大な斧だ。人間程度なら一撃で両断できるだろう。

顔は笑顔のまま視線を強くし、隆司をまっすぐに見つめる。

……直接睨まれたわけじゃないのに、体がすくむ。礼美も光太も息をのんだ。礼美なんか、顔から血の気が引いている。殺意も殺気もないはずなのに、どうしようもなく恐ろしい。

「戦士よ。お相手を願えるかな？」

「……いいぜ」

隆司はそんな視線をまっすぐに受け止めながら、マントの下から取り出した石剣を肩に担ぎなおした。

しばし両者はまっすぐに互いを見つめ……。

ズドンッ！

踏み込むような轟音と同時に、斧を振り切ったヴァルト将軍と真横にすっ飛ばされる隆司の姿があった。

え、なにが……？

「リュウジィ！　まっすぐ踏み込むバカがあるか！」

後ろで傍観者に徹していた団長さんの怒鳴り声が耳に入る。

あたしはそっと隆司の立っていた場所を見下ろすと、土が隆起しているのが見えた。

つまり、隆司が全力で踏み込んだのをヴァルトが迎撃した、と…

…？

見えないほど早い隆司もだけど、それをあんな巨大な斧で迎撃するとかどんなパワーよ……！？

「む？　いかんな……」

呆然とするあたしの耳に、今度はヴァルトの声が聞こえてくる。

それは何かに困惑するような声色だった。

「思わぬ速度にゴルトを相手にする感覚でやってしまった。死んでいなければよいが……」

「おおおおぉぉぉぉぉぉ！！」

心配そうなヴァルトに答えたわけじゃないんだろうけど、血を吐きながら隆司が斬りかかっていった。そんな隆司の姿に、ヴァルトは嬉しそうな笑みを取り戻す。

でも隆司の体の左側は、真っ赤に染まっている。まさか……！

だが体が両断されているとは思えない俊敏さで飛びかかった隆司の刃を、ヴァルトは素早く斧で受け止める。

隆司の石剣は、鉄か何かでできているはずのヴァルトの斧に食い込んでいった。

「く……！？」

うめき声をあげながらも、笑顔を絶やさないヴァルトは勢い良く斧を振るって隆司の体を弾き飛ばした。

吹っ飛ばされた隆司は、受け身も取らずに地面に叩きつけられる。

だが、素早く起き上がってヴァルトを睨みつけた。

その表情は、いつになく余裕がない。

「フフフ、ゴルトほどではないが良い動きだ。閣下の鎧のみならず、我が斧の刃を斬り裂くとはな……」
「っらぁぁぁぁぁぁぁ！！」

再び突撃をかける隆司。だが、今度は縦一直線に振り下ろされた斧をまともに食らってしまった。
血飛沫が、上がる。

「ご、ぐ、がぁぁぁぁぁ！？」
「そのうえ、この手ごたえ……。我が斧の刃が止まるなど。よほど鍛えているのか、一日や二日ではこうなるまい」

それでも石剣を振るうが、今度はたやすく避けられてしまった。

「が、ぐそぉ！」
「フフフ。腕前としては閣下と同じ位か。その上、純粋な身体能力のみでこれとは恐れ入る」

嬉しそうに笑い、隆司のみならずあたしたちにも刃を向けられる。

「さあ、どうした？　いざ太刀合おうじゃないか勇者たちよ」

冗談じゃ、ないっつーの……。
もはや血に濡れていないところはないというような隆司の姿を見て、あたしは自分の認識の甘さを再認識させられていた……。

No.18：side・mako「魔王軍、連戦」（後書き）

そんなわけで魔王軍最強が喧嘩を売りに来ました。そして隆司が己に正直すぎて止まりません。どうしよう。

しかしいきなりズタボロですねぇ、隆司。まあ、最強に挑むからこうなるわけですよね！

次回も引き続き戦闘です。次回は隆司視点になります。

No．19：side・ryuzi「魔王軍、最強」

「うるぁあぁぁぁぁぁ！！！」

掛け声とともに踏み込み、一閃。
だがあっさり避けられる。

「おら、おら、おらぁぁぁぁぁ！！」

避けられた方向に、がむしゃらのさらに三回斬りつける。
すべて、手にした斧で弾き返された。

「フフフ、それほどの傷を負いながら……いや、もう癒えているのかね？」

涼しい顔で、愉快げに聞いてくるヴァルト。
そんな奴に、俺は不敵に見えるように微笑んで見せた。

「はっ！　ひょっとしたら、ぎりぎり当たってねぇのかもだぜぇ……！」

そう強がっては見るものの、見れば一発で分かる。全部しっかり当たってる。
その上で、俺の体は完全に治癒していた。
内臓まで届いていたはずの最初の一撃も。
腕をちぎりかけたさっきの一撃も。
断絶した神経すら自己治癒のみで完全に治っていた。
こりゃあれか？　やっぱり真子じゃなくて俺が魔族でしたってオチか？

ヴァルトは濡れそぼった鼻をヒクヒクと動かしている。ひょっとしたら血の匂いか何かで怪我の状態もわかったりすんのか？

「この桁外れの治癒速度、閣下以上だな……。さらに……」

「っしゃぁぁぁぁ！！」

ぶつぶつつぶやいてる奴に、突撃を仕掛ける。

隙をさらしてるように見えるが、わざとだろうな。だいたい隙があるかどうかなんてわかんねぇし……！

ヴァルトは何かを探るように瞳を揺らし、またも縦一文字に俺を斬り裂こうとする。

だがさすがに何度も喰らったりしねぇよ！

斧が当たる直前。ギリギリのところで俺は横に飛ぶ。

そのままなら当然すっ飛ぶが、逆手に持った石剣を地面に突き刺して、斧の射程圏ギリギリで踏みとどまる。

斧は俺の脇を通り、地面に向けて放たれる。

回避成功！　次は――。

瞬間、地面が揺れる。

ゴォオオン！！

「！？」

続く轟音に体が揺れた。

叩きつけられた斧から発せられた衝撃と音だと気付いたのは、そのあとすぐに放たれたヴァルトの蹴りが腹に食い込んでからだった。

「ご、がぁっ！？」

一瞬、意識が飛ぶ。視界が白濁する。息が止まり、胃の中のもの

がひっくり返りそうになる。
そのまま後ろにすっとび、恐怖に怯えるような光太たちの表情を目の端に捉え。

「おう、お疲れ」
「づあっ！？」

目の前で人がボコボコにされてるってのに、のん気に呟いて俺を受け止める団長さんの声で我に返った。背中に叩きつけられた棒のせいで、体が弓のように勢いよく反る。
んなろー……。こっちゃ（元）怪我人だっつーの……。

「が、ごほ……！」
「隆司！」

光太の悲鳴に顔をあげると、いささか残念そうなヴァルトの顔が目に入った。

「反射神経も良いが、惜しむべくは技術が伴わん点か……。そこだけ見ると、そのあたりの子供とさして変わらんな……」

俺ぁ、元々その辺にいるガキだよチクショーが……。
そもそも残念そうな顔されるいわれだってねぇっつの……。
ああ、チクショウ。どうせなら空手でも習っとくんだったぜ……。

「さて、次は……」
「っ！　僕が相手だ！」

ヴァルトが視線をめぐらせ、光太たちに向けられた。
光太は一瞬体をすくませるが、即座にそれをふるい落とし腰に帯

びたエア・キャリバーを素早く抜いた。
構えは青眼。剣道の基本にして、光太が最も得意とする型。

「二人とも、下がって！」

光太の言葉に、真子と礼美が一瞬の躊躇ののち、俺が吹き飛ばされた場所まで後退してきた。

「隆司、無事！？」
「今、怪我を治しますから！」

膝をついて荒く呼吸を繰り返す俺がどう見えたのか、いつもの腹黒軍師の姿は影もなく、礼美の顔は今にも泣き崩れそうに歪んでいた。
光太の援護に立ち上がりたいが、どうしても体が言うことを利かない。全身を倦怠感が包んでる。
くそ、体は治ってるけど体力の方が追いついてねぇ……！　回復の方に体力が持ってかれてるのか……？
礼美が一生懸命回復しようとしてくれるが、ほとんど焼け石に水だ。
何とか呼吸を落ち着けようとする俺の目の前で、光太がヴァルトに斬りかかっていった。

「ハァッ！」

すり足からの上段打ち。素早い一撃がヴァルトに迫る。
ヴァルトは斧で刃を弾く。が、俺と違い光太は素早く刃を引いた。

「シッ！」

続けざまに放ったのは胴打ち。ヴァルトは剣の腹を拳で叩いて対処する。

「フム、なるほど……」

「チェァッ！」

何を感じたのか興味深く頷いているヴァルトに、弾かれた剣を肩に担ぎなおしての袈裟懸け！

だが、全力を伴ったであろうそれすらヴァルトは二本の指で受け止めた。

「技術は及第点。だが、能力が伴わぬか」

やはり残念そうな様子だ。こいつ、戦闘狂の類か？

だが、その剣を受け止めたのはまずったな……！

「風よっ！」

「！　おお！？」

光太の言霊と同時に、刃を軸に風の渦が生まれる。

敵の持つ武器を絡め取るための突風だ。さすがに無事じゃすまねぇだろ……！

「驚いた！　人間の軍にはこのような武器が存在するのか！？」

ヴァルトは剣の刃を指でつまんだままの体勢で、今の自分に起こっている状況に驚いていた。

って、無事なのかよ！　あれか！　さっきの俺の考えはフラグだったとでもいうのか！？

「だが、この状況から考えうる使用用途に対して威力が不足しているな」
「……！」

ヴァルトの冷静な分析に、光太が自分の失策を悟ったような顔になる。って、手を抜くなよ！　ここは全力でぶっ飛ばすところ！
そんなところに博愛精神発揮せんでもいいだろう！？
俺は、いまだにだるい体に活を入れて立ち上がろうとする。
だが、それより先に真子の言葉が耳に突き刺さった。

「炎の槍（フレア・ランス）！」

真子の魔術言語（カオシック・ルーン）によって解き放たれた炎の槍が、一直線にヴァルトの顔面に炸裂する。
炎が爆ぜ、あたりが一瞬真っ赤に染まり、光太は慌てて後退する。

「光太！　そんな化け物相手に、一々手加減しない！」
「ご、ごめん！」
「フハハハ！　不意打ちかね！？　なかなか痛かったぞ！」

光太が今までいた場所ごと、自らを包む爆炎を吹き飛ばすヴァルト。
手に持った轟斧が巻き起こした炎風は、俺たちがいるところにまで届いた。

「だが、詠唱破棄にしては威力が大きいな！？　これが貴公の実力かね！？」
「あたしの力が見たけりゃ、そのままじっとしてなさい……！　今すぐ消し炭にしてやるわよ！」

過激な発言だが、真子の手は小さく震えている。ヴァルトがまっすぐに見据えた瞬間からだ。
射竦められているのは、誰が見ても一目瞭然だ。ヴァルトもそれがわかっているのか、それ以上突っ込んで何かを言おうとはしなかった。
俺は素早く立ち上がって、ヴァルトの視線から真子を遮ってやった。

「ちょっと隆司……！」
「俺が前線、光太が遊撃！　そんでお前らが援護だろ！　役割間違えんな！」

真子の抗議の言葉を遮って、声を張り上げてそう宣言する。
最初に決めたポジションだ。真子としては、もっと大人数に対してのポジションだったのだろうが、一騎当千の化け物相手なら大して変わらないはず……！
く、と真子が唇を噛む音が聞こえてきた。
俺はそれを無視して何度目かになるヴァルトへの突撃を再開する。
ただし今度は……。

「光太ぁ！」

俺のダチも一緒だぜ、ヴァルト将軍……！

「わかった！」

俺の呼びかけに頷いて光太は八双の構えを取る。
そのまま光太の背中まで駆け、俺は右に、それを察した光太は左に駆ける。

「ほほぅ……」

面白そうに笑ったヴァルトは左手に持った斧を肩に担ぎ、右の拳を握りしめる。

それぞれに対しての迎撃なんだろうが、さすがに二人じゃ一撃で葬られちまうよな……！

「強風撃（ブラスト・ウィンド）ォ！！」

「ぬおっ！？」

真子の両手から放たれた強風の一撃が、俺たちの間を通り抜けヴァルトの動きを一瞬止める。

いつかの朝の時と違い、遠慮も呵責もねぇ一発だ。ただの人間ならそれだけで気絶しそうな暴風。

そんなもん受けて、動きが一瞬止まるだけとか化け物にもほどがある。

だけど、その一瞬がとてつもなく遠い……！

「おらぁ！」

両手で持って、バットか何かのように石剣をヴァルトの胴体に向けて叩きつける。

が、寸前斧の石突でもって俺の石剣を地面に向けて逆に叩きつけられた。

「っづ！？」

「まだまだぁ！」

楽しそうに笑うヴァルトが斧を回転させ、石突を俺の体に叩きつけてきた。

俺は両手でなんとかその石突を抑え込む。

ズドォム！

とんでもない轟音が響き渡るが、何とか体を浮かさずに済んだ…

…！

そして動きが止まった瞬間を見て、ヴァルトの斧を体に掻きこむ！

「むぅ！？」

「捕まえたぜ……！」

これで左手を封じた形だ！

その瞬間を狙ったわけじゃないだろうが、一瞬遅れて光太がヴァルトに斬りかかった。

「ヤァッ！」

袈裟懸け。面打ち。逆胴。

ほぼ一瞬にして三段打ち。我が親友ながら恐るべき速度と技術だ。

だが、ヴァルトもまた超一級。

「なんのぉ！」

武器を持たぬ右手……いや。獣特有の鋭いかぎ爪でそのすべての剣閃を受け止めてしまった。

逆袈裟。切り上げ。胴打ち。

光太に対して逆の剣閃を持って、対抗して見せた。

一瞬で見抜くんじゃねぇよ腹立つなぁ！

「おおおぉぉぉぉ……！！」

俺は気合を入れて、ヴァルトごと斧を持ち上げてやろうと足を踏ん張る。

が、さすがに重たい……！　オオカミというとスマートな体系を思わせる生き物だが、ヴァルトの姿はトラとかライオンとか重量系肉食獣のそれに近い。体脂肪率０．何％の世界なんだろうなぁ……！

「おおおりゃあああぁぁぁぁぁ！！！！」

だがこれしきでひるんでたまるかよ……！

一矢報いるどころか、百泡は吹かせてやるぜぇ……！

「ぬぉ！？」

ギシリと斧の柄が悲鳴を上げ緩やかに湾曲する。さしもの轟斧も、極端な力のかけられかたされたら、こうなるわなぁ……！

同時にヴァルトの体がゆっくりと浮き上がる。地上からだいたい数センチ程度。本当に僅かだ。

……だが地に足つかぬ者をひねり飛ばすには十分すぎる。

「うぅおるぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

俺は勢いよくヴァルトの体を斧ごと投げ飛ばす。投げ飛ばすといっても、せいぜいが体の体勢を崩してしまった程度。

しかし続く一撃につないでいけば……！

「光太ぁ！」

投げ飛ばしきる一瞬で飛ばした激に、俺のダチは的確に答えてくれた。

――大量の魔力を注ぎ込まれた、竜巻へと進化した己の愛剣という形で。

「ストーム……ブリンガァァァァ！！」

突きと同時に、今度こそ全力で解き放たれた竜巻は、投げ飛ばされたヴァルトの体だけをさらって一度二度体をくねらせ、そのまま地面に叩きつける。

そして追撃でダメージは加速していく！

「炎風乱舞（フレア・ストーム）ッ！！」

礼美が解放した膨大な魔力とともに、光太の放った竜巻が炎の渦へと変わり、容赦なく周囲を焼き尽くした。

爆炎はやがて収縮していき、巨大な音とともに火柱を立ち上らせた。

その光景を見て、おー、とのん気な声を上げる団長さん。

「見事なもんだなぁ、マコ。もう高位魔法（ハイスペック）が使えるんだな」

「なにを、のんきな……」

ぜいぜいと荒い息をつく真子。さすがにあれだけの魔法となると、体力まで消耗するんだな。

しかし、団長さんの落ち着きが妙に引っ掛かるな。目の前で魔王軍の四天王がエライ目にあってるってのに……。

自分一人参加できずに、涙目で俺たちの様子を見ていた礼美が、ホッと一つため息をつき。

「っ！？　光よ！」

何かに気づいて、叫ぶ。
同時に俺の体と光太の体をシャボン玉のような光の膜が覆うのと、オオカミのような魔力の塊がそれに遮られてはじけ散るのが同時だった。

「「！！？？」」

魔力の塊が耳障りな音とともに消滅するのに合わせて、それが飛んできた方向に目を向ける。

「見事だ、勇者たちよ！　これほどの戦は、ゴルトとの初邂逅以来だな！」

そこには多少毛皮が焦げ付いているものの、ほとんど無傷で立ち上がり、嬉しそうにこちらに掌を向けているヴァルトの姿があった。
その足元には、十体を超えるオオカミの魔力が出現していた。
そういや、オオカミって群れる生き物だよな……。
そんなことを呆然としながら考えていると、凄絶な笑みを浮かべたヴァルトがこちらにオオカミの群れをけしかけてくる。
数の割合は光太が三、俺が七。ってオイィィ！？　差別が過ぎやしませんかね！？
という抗議の声を上げる間もなく、礼美が張ってくれた障壁に食らいつくオオカミたち。
同時に炸裂。魔力の爆風が障壁をあっさり打ち破り、俺の体をゴミクズか何かのように吹き飛ばした。
悲鳴もなくゴロゴロと転がっていく俺。もはや上に着ていたカッターシャツもサンシターに借りたマントもボロ布。だがズボンは死守したぞ……！

「っが、はぁ！」

倒れた体を慌てて起こして周囲を見回すと、光太は何故か礼美の足元で呆然と座り込んでいた。しかも無傷で。光太だけ助けたのかテメェェェェェェ！！

だが、抗議はしない。真子の顔が真っ青を通り越して白くなっているからだ。もうヴァルトを見る目が化け物じゃなくて、もっとひどい何かになってる。

礼美も似たり寄ったりだ。だが、まだあきらめていないのかぐるぐるといろいろ考えているのが見て分かる。

光太は呆然自失というのが正しそうだ。あれだけやって無傷だもんな。わかるぜその気持ち。

俺はため息をついて首だけヴァルトの方に向ける。

楽しそうな顔をしたヴァルトがこちらに向けて全力で突撃してくるところだった。

どーしようかね、これ……。

No.19：side・ryuzi「魔王軍、最強」（後書き）

最強が最強たる所以。それは理不尽であることが、理由の一つとして上がると思います。

次回あたりは、ちょっと団長さんに出張ってもらって作戦タイムでしょうかね。

そろそろ暑苦しいこの戦いに終止符を打っておきたい……！

No．20：side・mako「魔王軍、撤退」

今考えうる中で最大威力の魔法を受け、平然と突っ込んでくるヴァルトの姿に呆然とするあたし。

そんなあたしのすぐそばを、一陣の風が薙いだ。

いや……そこまで強烈なものじゃない。本当に僅か、風が動いたように感じただけだ。

でも次の瞬間、ヴァルトと団長さんがお互いの武器をぶつけ合っていた。

「何か用かな、ゴルト！？　今、私は勇者たちと戦っていたのだが……！」

「作戦タイムだとよ。せっかちは嫌われるぜ？」

興奮のままに声を荒げるヴァルトに対しても、涼しい調子で答える団長さん。

そのまま二人は一歩も譲らず攻防を開始した。

離れたここからでも風切音が聞こえてくるほどのスピードで動く、ヴァルトの斧。

でも団長さんはそれを何ら問題にしていない……どころか、確かに当たっているように見えて実は当たってないという感じに見える。っていうか残像？　なにあれ。

隆司だったらもうとっくにバラバラになってそうな斧の勢いだけど、団長さんは涼しい顔で全部避けている。ただ、さすがに手は出せないようだ。手に持った棒は斧の軌跡をいなすのに使われている。

光太も礼美も、さらに隆司すらも目の前の光景の驚き固まっている。っていうか団長さん、こんなに強かったんだ……。

「勇者様！」

あたしたちを呼ばわる声に振り返ると、確かアスカとか呼ばれていた女騎士がこちらに駆けてきていた。付いてきてたんだ。

「大丈夫ですか……！？」

「今、この状況が大丈夫に見えるんなら、医者に行きなさい」

「も、申し訳ございません！」

「ま、真子ちゃん……」

刺々しさどころか悪意すら感じられるあたしの言葉に、勢いよく頭を下げるアスカ。

礼美があたしを諫めようと声をかけてくるが、我慢できるわけがない。

だって……。

「アスカ、こうなることを知って、いえ、わかってたわね？」

「……はい」

アスカの返答に、光太と礼美が目を丸くする。そして光太が信じられないという様子でアスカを見つめた。

「……以前、魔導師団の方々に協力を願い、高位魔法（ハイスペック）による魔王軍将校の打倒を試みたことがあったのですが、その一切が無力化されてしまい……」

「無力化？」

「はい。おそらく、敵側の魔導師の手腕と思われます。それだけでなく、マコ様のように直撃した高位魔法（ハイスペック）も、あのように……」

アスカの示す先には元気よく団長と戦うヴァルトの姿が。

つまり、ただの高位魔法（ハイスペック）は通用しないってことね？

「どんなチートスペックよ……！」
「お前が言うな」
「いや、隆司も言えないからね？」

うめくあたしに、ボケとツッコミが突き刺さる。
たわごとぬかすバカを一発殴ってやろうとか振り返るが、意外と筋肉質な肉体に傷の跡一つないのを見て思わず目を丸くした。

「……あんた本当に大丈夫なの？　あれだけやって傷一つないって……」
「ないんじゃなくて治ってんだけどな」

自嘲するように笑う隆司。魔術言語（カオシック・ルーン）が読めるから魔族云々で悩んでたのが馬鹿馬鹿しくなるくらいの化け物っぷりね。どういうことだろう。
ただまあ、それに関しては後で悩もう。今は、あの猛将をどうにかするのが先だ。

「勇者様、撤退いたしましょう」

だけど、そんなあたしに水を差すようにアスカがそんなことを言い始めた。

「もう、十分です。今回は時間だって足りませんでした。団長が殿を務めることになっています。急いで、戻りましょう」

痛ましい様子のアスカに、光太が悔しそうに眉根を寄せた。
まあ、正しい判断ではあるわね。召喚されてたった一週間でまさか将校に勝てるわけもないわ。

あたしだって、怖い。向けられる視線にただ闘争の意志を込められただけで、足がすくみそうになるんだ。格が違いすぎると思う。
でも。それでもね。やられっぱなしってのは性に合わないのよ……！

「撤退はなしよ」
「しかし……！」
「っさいわね！　もし仮にあれが癇癪起こして、団長ぶっとばして王都まで来たらどうすんのよ！？　あんたたちだけであれが止められんの！？」
「……ッ！！」

激昂したあたしの言葉に、アスカは悔しそうに唇を噛んだ。
……やっぱり、今のところあれに対抗、というか拮抗できるのは今回避に専念してる団長さんだけか。今までの一騎打ちとやらも、隙をついて強力な一撃を撃ち込むとかそんな感じで進めてきたのね。

「……確かに、無理かもしれません……ですが！」
「まあ、このまま逃げるってのもなんか悔しいよなぁ。せめて手傷の一つは負わせて帰りてぇ」

アスカの反論にかぶせるように、隆司が口を開いた。
その眼はいつになく真剣だ。いや、暗さのような物すら見え隠れする。

「僕も、真子ちゃんに賛成だ」
「コウタ様まで……」

光太も言って、手に持った風の魔剣を握りしめる。
使命感に燃えてる顔だ。あたしが行った、あれが王都に攻め込む

という状況を考えてしまったのかもしれないわね。

「アスカさん、心配してくれてありがとうございます」
「レミ様……」
「でも、私たちは勇者なんです。だから、逃げちゃダメなんだと思います」

理屈にならない理屈を、笑顔で言い切る礼美。
いや、三文ロープレの主人公だって逃げると思うけどね。
でも、これからは逃げられない。いつかはやりあう。

「もう一度言うわ。撤退はしない」
「……」
「逃げるときは、あたしたちが倒れた時よ。そん時は引きずるなりなんなりで、持って帰って頂戴」
「……はい、わかりました」

梃子でも引こうとしないあたしたちの様子を見て、自分の無力をかみしめるように声を絞り出し、そのまま引き下がっていくアスカ。
あたしたちはすぐに円陣を組んで、今団長さんがひきつけてくれているヴァルトをどう倒すかを話し合い始める。

「で、あれをどうするかなんだけど……」
「その前に、一ついいか？」

だが、隆司が片手をあげてあたしを制止した。

「なによ一体？」
「そろそろ限界……」
「隆司！？」

わずらわしくてほっとこうかと思ったが、すぐ隣でいきなり膝をつかれたらそうもいかない。
隆司の様子に驚いた光太があわてて隆司のそばにしゃがみ込んだ。
っていうかちょっと待ってよぉ!?

「ちょ!?　あんたが今んとこ最大攻撃力なのよ!?　もう限界なの!?」
「無茶言うなって……。さっきから体治したり吹っ飛ばされたりだぜ？　向こうでだったら十回は死んでる……」

げっそりしながら声を出す隆司の顔色は、確かに戦えるような人間の顔色じゃない。
しかし元の世界で十回は死ぬような攻撃受けて、今まで限界来てなかったって……。アドレナリンのおかげ？

「隆司、大丈夫だよ。隆司の代わりに僕が……」
「隆司以上のスピードで動けるんならそれでいいんでしょうけどね……」

隆司を安心させるように口を開く光太だが、実際問題一番ダメージを期待できる隆司がこうでは、どうしようもない気がしてくる。
ええぃ、仕方ない。
あたしは光太のしゃがみこんでいる反対側にしゃがみ、魔術言語（カオシック・ルーン）を唱える。

「体力強化（エクステンド）」

あたしの体が光り、その光がゆっくりと隆司の体を包み込んでいく。

するとどんどん隆司の顔色がよくなっていく。
しばらくすると、光も収まり。

「……お？」

隆司が驚いたように立ち上がった。

「りゅ、隆司？」
「すげぇ、体力が回復した！　真子、こんなこともできんのか！？」
「最後の手段よ、最後の……」

喜ぶ隆司の隣で、今度はあたしがへたり込む。
今の魔法は、いわゆる強化の魔法。対象に魔力を流し込むことで強化を図る魔法なんだけど、少しアレンジしてあたしの体力を移し替えることで対象の体力を回復させるものにしている。
おかげで隆司は回復したけど、こっちは立ち上がるのも億劫なほど体力を消耗したわけ。

「真子ちゃん、大丈夫！？」
「礼美……。できれば今度、体力回復の祈りでも覚えて頂戴……」
「が、頑張る！」

グッと拳を握る礼美。きっとこの子なら何とかしてくれるでしょ……。

「で、何か作戦はあるのか真子？」
「もうこうなったら一発勝負でしょ……」

あたしはぜいぜい荒い呼吸をしながらまた魔法を唱え始める。
こんなところで使う羽目になるとは思わなかったわ……。出来れ

ばもっと後になってから使いたかったんだけど。
あたしの呪文が完成すると同時に、三人はいぶかしげな顔になる。
「なにもなってねぇけど？」
「失敗、したの？」
「礼美ちゃん？」
「心配しなくても失敗はしてないわよ」
三人が気づいていない変化をしっかりと目におさめつつ、あたしはほくそ笑んで次の呪文を唱える。
「竜巻（ストーム）」
完成した呪文は、本来竜巻を特定の地点に発生させるものだけど、これもアレンジで隆司の右手に巻きつくような形で竜巻が発生する。
「おお！」
「いい？　作戦を伝えるわよ……」
あたしが伝えた作戦内容に、光太が抗議の声を上げる。
「そんな！　危険だよ！」
「そんなもん誰だって一緒でしょう……。これ以外になんかあるの……？」
「それは……！　えっと……」
「光太君」
あたしに反論しようとする光太の両手を、礼美がそっと両手で包み込んだ。たぶん

「大丈夫だよ。私、怖くないよ？　真子ちゃんが任せてくれて、光太君と隆司君も一緒だもん。だから、大丈夫だよ」
「礼美ちゃん……」
ああああ超いいシーンなのに！　こんな場面じゃなけりゃ、跳ねて喜ぶのにぃぃぃぃぃぃ！！
「じゃあ、二人の意志が一つになったところでー」
二人の様子をにやけ面で眺めている隆司が光太と礼美の注意を引いたと思われる。
「――ヴァルトに一泡吹かせに行こうじゃねぇか」
で、獰猛な笑みを浮かべたような声を上げた。
「「……うん！」」
二人は力強く返事をして、礼美を先頭に光太と隆司がその背中にぴったり張り付いて団長とヴァルトの戦いに近づいていってるはずだ。
これでうまくいけば御の字。でも、失敗すれば……。
親友を最も危険な役割に配置した作戦。あたしは唇の内側を噛んで耐える。
うまくいきなさいよ、お願いだから……！
「団長！　避けろ！」
隆司の怒鳴り声に反応したわけじゃないだろうけど、大上段から振り下ろされようとしているヴァルトの斧を横っ飛びに避ける団長

さん。
ヴァルトはそれにかまわず勢いよく斧を振りおろし。
「光よっ！」
「なにぃっ！？」
聞こえた礼美の声と、突然現れた光の盾に、目を見開いて驚愕する。
そして、バリンと何かが割れる音がして礼美の姿が現れる。
同時に。
「「ダブルストーム……」」
打ち合わせでもしていたのか、声を合わせた男どもの必殺技の名前が響き渡る。
「「ブリンガァァァァァァァ！！！」」
姿は見えずとも渦巻いた竜巻は礼美の両脇から現れ、お互いの体を喰らい、その身を強大にして目の前の猛将を飲み込んだ。
光太単独で放った時の数倍に比する大きさの竜巻はヴァルトを飲み込んでまっすぐに突き進んでいった。
またもバリンと音がして、礼美の両脇から拳と刃を突き出した隆司と光太の姿が現れる。
そんな三人の姿に、何かに納得したような団長さんがうなずいた。
「ははぁん？　姿隠し（インビジブル）しか」
その通り。一番最初に三人にかけた魔法は姿隠し（インビジブル）。魔法をかけた対象の姿を完全に見えなくする魔法だ。同じ魔法をかけられた者同

士の姿は認識できるし、何かに触れると魔法は消える。こういった戦闘行為にはほとんど意味のない魔法。魔術言語（カオシック・ルーン）が見えるあたしからも、体中を文字で覆い隠した人形の姿が見えてしまう。

だけどほかの連中にはそこに誰もいないように見えなくなっていたはずだ。

あたしが建てた作戦は、そうして姿を隠した三人が特攻し、ヴァルトの攻撃を礼美がガード。しかる後、最大威力まで溜めた光太の竜巻をあたしが隆司にかけた魔法で強化してヴァルトを攻撃するというものだ。

この作戦最大の肝は、礼美がヴァルトの攻撃をガードしきれるかどうか。下手をすれば礼美の防御力が足りず、縦に真っ二つになる可能性だってあったのだ。

作戦が終わり、安心したのか腰が抜けたのか、ペタンと女の子座りになる礼美。

そんな彼女を安心させるように、光太がその両肩に手を置いた。

「礼美ちゃん、ありがとう。おかげで、全力で撃てたよ」

「あ、あはは……。役に立てて、よかった……」

うーむ、これがフラグになってくれれば楽なんだけどなぁ……。

あたしが隆司に目を向けると、油断なくヴァルトが吹っ飛んで行った方向を睨んでいた。

まあ、炎風乱舞（フレア・ストーム）食らっても平然としていた奴が、これしきでぶっ倒れるとも思えないわよね。

あたしが完全に脱力した体に活を入れて立ち上がろうとすると。

「やれやれ。これまた、手ひどくやられたねぇ」

耳にしたことのない、女の声が聞こえてきた。

慌てて聞こえてきた声のする方に目を向ける。すると、土煙が晴

れた向こう側に、倒れたヴァルトとそのすぐそばに立つ魔族の女の姿が見えた。

妖艶、という言葉がよく似合う凄味のある美女だ。上半身は踊り子のような露出の多い衣服で身を覆い、下半身には下着すらつけてない。いや、必要ないというべきなのかしら？

何しろ、彼女の下半身は数多の蛇の尾で構成されているのだ。腰辺りに巻いている一枚の布が唯一の防御かも知れない。

「スキュラキタァァァァァァ！！？？」

「おや？　どうしてあたしの名前、知ってるんだい？」

何かに驚愕するアホに首を傾げて答えながら、美女は改めて妖しい笑みを浮かべて自らの名を名乗った。

「改めて自己紹介しておくよ。あたしの名前は、ラミレス・スキュール。そっちの坊やの言うとおりスキュラで、魔王軍四天王の一人さ」

四天王の二人目とか……この状況で相手にできないわよ……。

睨みつけるあたしの様子に、ラミレスはおもしろそうにコロコロと笑い声をあげた。

「心配しなくても、今日はもう帰るさね。このバカの治療もあるしねぇ」

そういって、ラミレスは足の一本を使ってヴァルトの巨体を持ち上げた。

その体は節々が乱雑に斬り刻まれたように傷つき、来ている鎧もボロボロだ。唯一無事なのは、その手に握りしめた斧だけだった。

「すまぬ、ラミレス……」
「本当だよ。この後、覚悟しておきなよ」

妖しい笑みを浮かべ、舌なめずりをしながらヴァルトの顔をなでるラミレス。ヴァルトは何かに怯えるようにうめき声をあげた。

「じゃあね、勇者様方。次会うときを楽しみにしてるよ」
「ちょ、ま……！」

ラミレスは一方的に言い放って、あたしが質問する間もなく姿を消した。
その瞬間にラミレスたちの体を覆った魔術言語（カオシック・ルーン）が、ラミレスの使った魔法の正体を告げる。
転移（テレポート）を無詠唱発動って……。さすが四天王……。

「おう、お疲れー」

気だるげに棒を担いだ団長さんが、あたしたちに声をかけてくる。
あたしはキッと団長さんを睨みつけて、声を荒げた。

「団長さん！　あいつがこんなに強いなら、先にそう言ってくれてもいいじゃないですか！」
「ん？　ああ……」

団長さんは礼美を立ち上がらせてあげている光太と、石剣を回収に行っている隆司の背中を見てからあたしの方に顔を向けた。

「一回、あの二人の全力が見ておきたくてな。敵の将軍なら遠慮なく全力が出せるだろ？」
「なにそれ……」

「今後の修練の方向性を一回定めときたかったんでな。悪かったよ」

団長さんの言葉にがっくりと倒れ伏すあたし。

つまりあれか？　あの二人の修業のために一切の情報なく、あんなチートと戦わせられたっての？

わ、割に合わねー……。

「ま、真子ちゃん!?　大丈夫!?」

最後の一線もぷっつり切れ、意識が途切れるあたしの耳に、礼美の心配そうな声が聞こえてきた。

No.20：side・mako「魔王軍、撤退」（後書き）

そんなわけで魔王軍最強、ヴァルト・ルガールが撤退しました。
体力低下で撤退イベントは基本だよね！
なんで炎風乱舞（フレア・ストーム）が無傷で、ダブルストームブリンガーでズタボロにされたのかは、次回説明いたします。
魔王軍軍勢側の回でなぁ！

No．21：side・Sophia「その頃の魔竜姫」

ぺちんぺちん。

「も～。ソフィア様～、いい加減、機嫌治してくださいってばニャー」

「うるさい」

ぺちんぺちん。

私の尻尾が全力で今の気分を椅子の背にぶつけている。

机の上に突っ伏しながら、私、ソフィアは魔王軍前線本部の中に用意された、私専用のテントの中で不貞腐れていた。

原因は言わずもがな。あの男のせいだ。

「何が勇者だラミレスの奴……ただの変態じゃないか……！」

「にゃー。さしものラミレス様も、あんな男が召喚されてるなんて見抜けんですニャー」

さっきからニャーニャーうるさい、私の親衛隊の一人であるミミルがため息をつく。

その隣の方で、誰かがガバッと勢いよく地面に伏せるような音が聞こえた。

「申し訳ございませぬぅぅぅぅぅぅ！！　このガオウが御伴できませなんだばかりにぃぃぃぃぃぃ！！」

「武器の手入れをしてたせいで行軍に遅れるとかないにゃー」

「ガオウうるさい」

「申し訳ございませぬぅぅぅぅぅぅ！！」

どうやらミミルの隣にいたのは親衛隊の一人のガオウだったらしい。口やかましい……というより全体的にうるさい男だ、相変わらず。ただ、忠誠心はミミルより厚い、頼もしい男でもある。

私はようやく顔をあげ、二人の親衛隊の方を振り返る。

土下座体勢のガオウを、呆れたようなまなざしで見下ろすミミルがそこにいた。

ミミルは顔を上げようとしないガオウにため息をついた。

「まあ、ガオちんが一緒に来ても止められたかどうか微妙だと思うにゃよ？」

「どういうことだミミル！？　ヴァルト・ルガール将軍の一番弟子である、このガオウより！　異界からやってきた、ただの子供の方が強いと申すのか！？」

「うん」

「ぬわにぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！？？」

ミミルの断言に、ひときわ大きな声で叫ぶガオウ。相変わらずの音量だ。こいつの声は百メルト離れていてもよく通る。

ミミルは思わず頭の耳を両手で覆い、私は私で顔をしかめる。

とはいえ、私も同意見だったりするのだが。

「ミミルの言うとおりだ、ガオウ」

「そ、ソフィア様までぇ！？　何故！？」

「確かにお前は強い。だが、その剣は私の喉元に届くか？」

「そ、それは……」

私の質問に、ガオウは頭の上の耳をぺたりと伏せた。

この男、ヴァルトの一番弟子を名乗るだけあって戦闘力は魔王軍でも一、二を争うだろう。

とはいえ、それは一般兵卒の中での話。
私も伊達に魔竜姫など名乗っていない。ヴァルト以外に私の体に触れられる奴はそうそういない。

「……あの男、タツノミヤリュウジの刃は確かに私へと届く。これが貴様とあの男の差だ」
「そ、それほどまでの力の持ち主なのですか！？」
「そうにゃー。しかも純粋身体能力でそれにゃ」
「し、身体能力のみで！？　そんな人間、存在するのか！？」

ガオウの驚きももっともだ。今まで私たちが戦ってきた人間たちは、時折驚くような技術を持った者はいたが、基礎身体能力だけで見れば魔王軍の中でも下位以下と断じていいだろう。
女神とやらの加護のおかげで能力値の底上げもできるようだがそれも雀の涙。魔族の肉体には遠く及ばない。
だがあの男はそんな人間たちの力を大きく上回る能力を見せた。
私と剣を交わせるだけでなく、私に背中の翼を使わせるだけの腕の持ち主。
本来であれば、宿敵（ライバル）とも呼べるあの男の存在を、喜びこそすれ嫌悪する理由などない……はずなのに……。
私は奴より受けた恥辱を思い出し、拳を握っていろいろなことに耐える。

「そうだ……それだけの力の持ち主なのに……なんであんな奴なんだ……！！」
「そ、ソフィア様！？　お気を確かに！」
「にゃー」

フルフルと体を震わせる私の姿に怯えたようにガオウは一歩下がり、ミミルは同情するような視線を向ける。

「何が嫁だ、何が太ももだ！　私のそういった部分を見るのは一向に構わんが、それを戦場で口に出すなど……！」
「よ、ヨメ！？　畏れ多くも、魔竜姫ソフィア様に対してそのような口を利くなど、生意気な……！」
「しかも戦場でおっぱいポロリされかけたもんにゃー。怒りも憎しみもひとしおにゃー」
「そ、それを言うなぁ！？」

突然の発言に慌てて私は鎧をまとっていない自分の胸を覆い隠す。普段は邪魔だし、その、目立つのでさらしを巻いているのだ。決して恥ずかしいとかそういう理由ではない。
だがあの男との戦いの際、避けきることのできなかった一閃が私の胸を掠り、鎧のみならずその下のさらしまで斬り裂かれてしまった。
慌てて胸を隠そうとしたが、それが仇となって結局引き倒され……。

「あああぁぁぁぁぁぁ！！！」

余計なこと思い出したー！？　あいつめあいつめあいつめぇぇぇぇぇぇ！！

「ちょっとガオちん、急にうつむいてどったにゃ？」
「は、鼻血が……！」

何かガオウがいろいろ言っているがそれすら耳に入らない。
何がその太もも堪能させてくださいだ変態めがぁぁぁぁぁぁ！！
私が怒りのままに地団太踏んでいると、テントの入口に見覚えのある白い耳の娘が入ってきた。

「そ、ソフィア様！」
「む？　マナか。いったいどうしたそんなに慌てて」
私の親衛隊最後の一人であるマナは、息を切らせながら私の顔を見上げる。
運動が苦手なこの娘がここまで慌てるとはいったい……。
「ヴァ、ヴァルト将軍がお戻りになられました！」
「ん、そうか」
「で、でも、相手側にひどい傷を負わされてて……！」
「なにぃ！？」
ヴァルトの体に傷をつける、だとぉ！？
私は慌ててテントから飛び出した。そのあとをミミルたちもついてくる。
我々魔族は、人間を凌駕する身体能力を持つが、普段の身体強度自体は人間とそう変わらない。普通に刃は刺さるし、魔法だって通用する。普段の生活においては、力を加減していなければならないほどだ。そうしなければ、自分で自分の体を壊してしまう。
だが闘争心が高ぶっているときは、全身を巡る魔力が我々の肉体の強度そのものをあげてくれる。拳は巌のように、足は鋼のように。そうすることで我々の身体能力を支える土台にするのだ。
そしてヴァルトほどの使い手ともなれば、高位魔法（ハイスペック）をほかの魔法の補助なしに防ぎきるほどだ。実際そうして高位魔法（ハイスペック）を防いでいるのを見たことがある。
だというのに、傷を負って帰ってくるなど……。いったい何があったのだ！？
目の前に見えた救護用テントの中へ一目散へ駆け込んだ私は、ヴァルトの姿を探す。

彼は魔王軍の中では唯一の完全なる獣人だ。その姿は一目で……。

「おや、姫様じゃないか」

「ラミレス！」

ヴァルトを発見するより先に、今回の行軍に同行していたはずのラミレスを見つけた。

まあ、行軍といってもヴァルトとこのラミレスの二人だけだったのだが……。

私はその姿を確認すると、肩を怒らせながらそばへと歩んでゆく。

「ラミレス！　ヴァルトが怪我をしたそうだが」

「ああ、それが？」

「貴様が付いていながら、どういうことだ！？」

ラミレスは魔王軍、魔導師団の長だ。人間程度、問題にならないほどの技術と魔力を持つ。

そんな彼女が付いていながら怪我を負うなど……！

「そう言われても、手出し無用って言われてたんだよ」

憤慨する私に対し、ラミレスはやれやれと子供を相手にするようなしぐさで肩をすくめた。それが何とも腹立たしい。

「ヴァルトの奴、勇者たちの実力が見てみたいってね。いつもの悪い癖さね」

「だからといって、仲間が傷つくのを黙って……」

「これは閣下。いかがいたしました？」

飄々とした態度のラミレスへと詰め寄ろうとすると、その背後か

ら見慣れた獣の顔が現れた。
体の節々に包帯を巻いた、ヴァルトだ。

「ヴァルト！　怪我は！？」
「大事ありませぬ。それより、いかがなさいました？」
「貴様が怪我をしたと聞いた！　どういうことだ！？」

私の言葉に目を丸くして、ヴァルトは苦笑とともに私の背後に目をやった。
それに合わせて私も背後を振り向くと、ミミルはどうでもよさそうに、ガオウは怪我をした師の姿を信じられないように。
そして。

「お前か、マナよ」
「は、はい……」

自分が余計な事を云った、とでも思っているのか。真っ白な耳をぺたりと伏せたマナがそこにいた。
ヴァルトはマナのそばまで歩み寄ると、その大きな手でマナの頭を撫ではじめた。

「閣下への報告はありがたいが、大げさな報告は困るな。閣下は心配性だからな」
「は、はい……」
「自らの配下のことを心配せぬやつがどこにいる」

ヴァルトの物言いに、私は憮然と返した。
ヴァルトは間違いなくこの魔王軍一の使い手だ。それが傷を負って帰ってくるなど一大事以外の何だというのだ。
ヴァルトは続いて、自らの傍らに片膝をついて首を垂れるガオウ

に目をやった。

「ヴァルト様！　御体の具合は！？」
「見ての通り、支障はない。この後、お前の稽古もつけてやれる」
「ハハッ！　ありがとうございます！」

ヴァルトの言葉に、ガオウは厳格な物言いの中にわずかに喜びの色を混ぜて答えた。
ガオウのこの向上心、見習わねばな……。

「それで、ヴァルト。勇者との戦いはどうであった？」
「昨日、ソフィア様がほとんど戦闘できなかった分も報告よろにゃー」

いらんことを抜かすミミルに尻尾を叩きつけようとするが、持ち前の俊敏さで回避されてしまう。こなくそ。
ヴァルトはそんな私たちの様子を微笑ましそうに見つめ、しかしすぐに魔王軍将校としての顔を取り戻す。
傷を負ったままだというのにガオウのように私に片膝をつき首を垂れる。
ああ、もう。怪我が開いたらどうするつもりなのだ、こ奴。

「ヴァルト、無理をするな」
「問題ありませぬ。して、此度の会戦ですが」

私の心配をよそに、ヴァルトは今回の報告を始める。
勇者と呼ばれる人間の数は四人。そのいずれも黒髪黒瞳の少年少女であるということ。
かねてからの報告の通り、その構成は騎士、戦士、魔法使い、巫女であること。

それぞれの地力は、現時点でも私の親衛隊と同程度かそれ以上であるということ。
結果として、一瞬の油断がこの怪我を招いたということ。

「――そして最も注意すべきはおそらく騎士と巫女でありましょう」
「……？　どういうことだ」

ヴァルトの言葉に、私は首を傾げる。
話を聞く限り、詠唱破棄で相当な威力を出せる魔法使いと、魔族以上の身体能力を持つあの変態の方が厄介だと思うのだが……。

「この二人から、女神の力を感じました。おそらく、女神の眷属として目覚めかけているのでしょう」
「女神の……」

女神、の言葉に私は目を見開いた。
かつて魔王様がその腕に抱いたとされる女神。魔王様と双璧をなすその力は間違いなく強大。何しろ世界の柱を担うものの一つなのであるから。
そんな女神の眷属として目覚めかけている二人か……。確かに、要注意ではあるな。

「とはいえ、あくまで目覚めかけているだけ。現状において厄介なのは、戦士と魔法使いですな」
「そのことだが」

私はヴァルトの報告を遮って、陰鬱な表情を称えながらヴァルトの顔を見た。

「あの男、どうして消さずに戻ってきた」

「無体なことを申しまするな」

途端に輝かんばかりの笑顔で私の方を見るヴァルト。なんかすごい腹立つ。

「我が轟斧の直撃に耐えたばかりか、私の体を持ち上げるような剛の者を、それだけ消して来いというのは至難の業」

「そもそもあの坊や、極端に死ににくいみたいだからねぇ。ヴァルトでも、殺すのは難しいんじゃないかい？」

ヴァルトの体にしなだれかかり、その足をヴァルトが逃げないようにその体に絡めていくラミレスを見る。

「どういうことだ？」

「私もよくわからないんだけどねぇ。あの坊や、尋常じゃないくらい体機能が発達してるっぽいんだよ。姿隠し（インビジブル）使ってなきゃ、あたしが直接調べたいくらいだよ」

「ちょ、やめ……！」

体が絡め取られていくのにうろたえて、何とか引きはがそうとするヴァルトの首根っこにかじりつくラミレス。

私はそんな彼女の様子を無視しつつ、自分の考えを述べる。

「不死者（イモータル）ではないのか？」

「それはないね。不死者（イモータル）なら核があるけど、あの坊やには見当たらなかった。ごく普通の人間だよ。体が異様に死にづらいってことを除けば」

「だからやめろと！？　閣下の御前だぞ！？」

ニュルニュルとヴァルトの体を完全にホールドしてしまうラミレ

ス。なおもヴァルトは抵抗するが暖簾に腕押しだ。そもそも彼がラミレス相手に本気を出しきれるとも思えない。

不死者（イモータル）とは、何らかの方法で魂を核に封じ、それを起点に幾度も蘇る存在だ。魂が核に封じられているので自力で昇天することはなく、核を破壊することによってのみ消滅する。

あの変態が不死者（イモータル）なら核が存在するはずだが、それに気づかないラミレスではない。

ならば奴はいったい……？

「一番近い存在をあげるとすれば……」

「すれば？」

「それは姫様、あんたさね」

もはやいろいろあきらめた表情のヴァルトに抱きつきながら、ラミレスが変なことを言い出した。

「私が？　どういうことだ？」

「この魔王軍一の頑強さを誇る竜の娘……あの男と比較できる対象があるとすれば、それだけってことさね」

にやりと妖しい笑みを浮かべるラミレスの言葉に、私は憮然とした表情を作る。

何をバカな。あの変態と私が同じ存在だなどと、笑い話にすらならん。

「ちょうどいいんじゃにゃい？　向こうも、ソフィア様を嫁認定してるし」

「黙れバカ猫」

放った尻尾の一撃を踊るように回避するミミル。ち、伊達に隠密（ハイシーフ）

ではないな、やはり……。

「にゃによー。別に女を捨てたわけじゃにゃいんでしょー？」

「それとこれとは話が別だ、たわけ」

だいたいなんで変態に嫁がにゃならんのだ。もっとロマンチックな出会いがいいわい。

ため息をついた私は、まずは目の前の部下をねぎらっておくことにする。

「ともあれ、今回はご苦労であったヴァルト。今は傷を癒すことに専念するがいい」

「ハッ。もったいなきお言葉です、閣下」

ラミレスの下半身に絡め取られた何とも情けない姿ではあったが、ヴァルトは私の言葉にしっかり返事をしてくれた。

私はヴァルトに一つ頷き返し、親衛隊を引き連れてそのまま救護テントを出ていった。

そしたらすぐに中から聞こえてきた色々な音は極力無視する。

……ラミレスは、自重を知らんからなぁ。

「……そ、それで、ソフィア様？　次はどうするのですか……？」

顔を真っ赤にしているマナの言葉に、私は空を見上げて答えた。

「……一週間後、もう一度仕掛けよう。今度は、お前たちも共に」

「私たちも、ですか？」

「ハハァッ！　ありがたき幸せ！」

私の言葉に驚いたような顔を見せるマナに、即座に返答を返すガ

オウ。
私は疑問符を浮かべるマナの顔をまっすぐに見つめた。
「そうだ。なんであれ、障害は排さねばならない。ならば、全力で当たるまで」
「全力で当たろうとして、逆に当てられちゃったんにゃん？」
旋回尻尾撃をつつがなく回避するバカ猫に舌打ちしつつ、マナたちの顔を見つめる。
「ついてきてくれるな、二人とも」
「ハハァッ！」
「は、はい……」
「あれー？　私はー？」
打てば響くように返事を返してくれた二人に満足し、私はそっと拳を握り込んだ。
次こそは、勝つ……！

No.21：side・Sophia「その頃の魔竜姫」（後書き）

そんなわけでソフィアさんのターン。あれです、第一章終了的なノリです。邂逅編、みたいな？

次から修行編的なノリの何かが始まるわけです。ついでに伏線をばら撒く作業が始まるわけです。

こっからが正念場ですなぁ……。がんばるぞー。

＊八月二十五日、名前ミス修正。キャラの名前ミスるとか死にたい。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ：キャラクターファイルその一（前書き）

第一章終了的なノリに合わせて、勇者四人組の情報を軽くまとめてみましたー。あとは元の世界での生活に多少言及している部分も。

一応ネタバレが含まれますんで注意です。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ：キャラクターファイルその一

Ｎａｍｅ：辰之宮隆司
Ａｇｅ：１６
Ｐｏｓｔ：高校生兼勇者
Ｅｑｕｉｐ：やたら重い石剣？
Ｓｋｉｌｌ：いろんな意味で化け物じみた身体能力
Ｏｔｈｅｒｓ：魔王軍の将校、魔竜姫ソフィアを嫁と呼ぶ。
作者一言メモ：体を張ったギャグ＆変態担当。並大抵のことでは死なないため、相当乱暴なツッコミでも死なない素敵な奴。
こ奴の変態成分の九割は作者の願望でできています。しかしハイスペック変態とか厄介すぎる。
好きなジャンルはモンスター娘。さらにフルオープンスケベ。欲望のままに太ももとか鱗とか堪能したがります。ソフィたん逃げてー。
作中において特に容姿に言及はありませんが、ワイルドな少年ってイメージです。牙とか生えてそう。

Ｎａｍｅ：琴場真子
Ａｇｅ：１６
Ｐｏｓｔ：高校生兼勇者
Ｅｑｕｉｐ：特になし
Ｓｋｉｌｌ：魔術言語（カオシック・ルーン）斜め読み
Ｏｔｈｅｒｓ：ストレスで胃に変調起こしかけている。
作者一言メモ：勇者メンバー唯一のツッコミ。初めは隆司もツッコミだったはずなのに解せぬ。
メンバー随一というか唯一の常識人でもありますが、常識を持った

うえでそれを踏み破るタイプ。腹黒軍師万歳。
今のところ唯一恋愛的描写が書かれていない娘です。ヨハンがちょっとタイプだといった部分くらいかな？　将来的には、全員にラブコメいてもらう予定なので早いとこいい人捜してください。
真子ちゃんの容姿についても言及は今のところありませんが、気の強そうな美人さんタイプです。額のしわが消えるのはいつかなー。

Ｎａｍｅ：櫻野光太
Ａｇｅ：１６
Ｐｏｓｔ：高校生兼勇者
Ｅｑｕｉｐ：螺風剣（エア・キャリバー）（自分で命名）
Ｓｋｉｌｌ：燃費のいい魔力
Ｏｔｈｅｒｓ：現在のフラグ・アスカ、アルル
作者一言メモ：一般的な勇者君担当。元々は隆司よりも強かったんですよこれでも。
そして第一のハーレム担当。現在は二人ですが、作者のノリと勢いによっては増えます。
いわゆる人の好意を額面通り受け取る子です。そのまま受け取りすぎるせいで、下心とか全然見抜きません。おかげでフラグは増え続けるという。ヤンデレとかも普通に受け入れるから、隆司が刺されそうになったこともしばしば。なんでやねん。
作中でイケメンと評されていますが、隆司と比べると童顔です。黒髪黒瞳より金髪碧眼の方が似合う美少年面。ともすれば女の子に見間違えられることも？

Ｎａｍｅ：春日礼美

Ａｇｅ：１６
Ｐｏｓｔ：高校生兼勇者
Ｅｑｕｉｐ：特になし
Ｓｋｉｌｌ：治癒の祈り、防御の祈り
Ｏｔｈｅｒｓ：現在のフラグ・ヨハン
作者一言メモ：一般的な女勇者担当。作が作なら襲われ担当かもですね。触手とか触手とか触手とかに。
そして第二のハーレム担当。フラグには書いておりませんが、いずれはジョージ君を引き込む予定。ネタバレ？　いいえ、予告です。
この子も増えるかもしれませんがね、フラグ。
この子は若干天然気味で、人の悪意とか悲しみには敏感だけど恋愛感情には疎い感じです。裏は読めない、という点で光太と似てます。
ただ野郎は女子に比べて単純なんで、光太と違ってヤンデレとかに襲われた経験はありません。その代わりファンクラブとかは多いですけど。
作中で美少女と評してますが、童顔低身長、真子と比べてスタイルがいいという感じですね。カップのサイズはＤに限りなく近いＣ。
ちなみに真子はＡＡ。なにがって？　聞かないで上げてください。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ：キャラクターファイルその一（後書き）

だいたいこんなもんでしょうか？　元々は普通の子供だから、裏設定とかは特になし。どこかの怪しい事務所でバイトしていたとか、実はどっかの一族の末裔だとかそういう秘密の履歴書も一切なし。

ただ、隆司と真子に関しては、いろいろ危うい一面もあります。

それに関してはまたおいおい。

No．22：side・ryuzi「そうだ、服を買おう」

ヴァルトの襲撃から三日。
俺たちはそれぞれ力をつけるための修業を始めていた。
光太は以前にも増して剣の稽古に励むようになった。
礼美も、自分の祈りの汎用性を上げようといろんな人から話を聞いている。
真子は様々な魔法のアレンジに余念がないようだ。
そして俺は。

「なあ、服買いに行かね？」
「あ〝？」

なんてことを提案して真子にスゲェ形相で睨まれているところだった。
いや、マジメに修行もしてるよ？　最近では団長さんに効果的な体の使い方とか教わってるし、その復習も兼ねて難易度の高い狩猟対象の依頼を受けたりしてるし。
ただ、だからこそ気になる部分が出てきたっつーか。

「いや、お前らはいいけど、俺は今このマント一枚じゃん？」

そう、この間の戦いで元の世界から持ってきた俺のシャツは塵も残さず消滅しちまった。
城には用意された衣服もあるけど、さすがに借り物を血で汚したりズタ袋みたいにするのは気が引けるから、俺はサンシターから借りたマント一枚羽織って生活している。
なに？　サンシターの持ち物はいいのかって？　いいんだよサンシターなんだから。

しかし昨日この格好でハンターズギルドまで行ったら、カレンに真っ赤な顔で猛抗議された。

曰く「そんな変態くさい格好で表に出る奴があるか！？」だそうだ。意外とウブよのぅ、じゃなくてもっともな指摘だ。全裸に靴下ネクタイよりましとはいえ、ズボンと裸マントは紳士スタイルの一つな気がする。

その指摘を素直に受け、俺は昨日の分のギルドの依頼の報酬は換金し、ついでにこいつらの衣服も買ってやろうと思いついたわけだ。

「それにいつまでもお前ら、着たきり雀ってわけにもいかねぇだろ？」

俺の言葉に、真子はドロンとした昏い眼差しで自分の格好を見下ろす。

こっちに来た時の学校の制服姿のままだ。一日おきに用意されている服を着ているとはいえ、この格好の方が圧倒的に多い。光太と礼美にも言えることだ。

「……まあね」

「それによ」

真子の同意を得られたところで、俺は顔を寄せてひそひそ声で真子につぶやく。

「服屋でお互いの服を選んでみるって、それなりのイベントじゃね？　やっておいて損はねぇと思うんだが」

「……あんた一応、そのこと忘れてはいなかったのね」

俺の言葉に真子が驚いたように目を丸くした。

どういう意味だこの野郎。

「いや、だってあんた。ハンターズギルドに登録したり、敵将校を嫁って呼んだり、こっちに骨を埋める気だとしか思えなかったからさ」

安心したようにため息をつく真子を、俺はジト目で睨みつける。

さすがの俺も当初の目的忘れるほどアホじゃねぇよ。光太と礼美がくっつかねぇと安心して浄土にいかれねぇし。

「まあ、こっちに骨埋める気満々ではあるけどな」

「満々なんだ」

あたりめぇよ。嫁がいない世界なんて今更考えられないね！

「ともあれ、俺は光太に伝えてくるから、お前は礼美に頼むな」

「わかった。いつ行くの？」

「どうせなら今日行っちまうか？　今は朝だし、この三日、光太は根詰め過ぎな気がするし」

「そうねぇ……」

真子が呟きながらあらぬ方に視線を向けた。

その視線を追ってみると、必死な様子で何かに祈りを捧げる礼美の姿が。額には汗の玉が見え、しっかりと握られた両手は血の気をなくして真っ白になっている。

そばに立つ……ヨハン？だっけ？　ともあれ、神官の兄ちゃんも必死の形相で礼美にエールを送っていた。

「……礼美もあの調子だしね。息抜きにはちょうどいいかしら」

「じゃあ、今日でいいな？」

「そうねー」

俺は一つ頷いて、修練場にいる光太を呼びに向かった。
さて、どういって納得させるかねー。

なんやかんやで意外と光太の説得に時間がかかり、そろそろお昼なんじゃないかなーというくらい太陽が昇ったあたり。
やむなく俺たちは、料理長に無理を言って早めの昼食を取り、服を買いに城下町へと繰り出していった。

「それはよいのでありますが」
「なんだよ？」
「何故自分も一緒なのでありますか！？」

俺と肩を組んだサンシターが恐れおののくような悲鳴を上げた。
その隣には光太が、その反対側、つまり俺側には真子と礼美がいるんだから当然か。
とはいえ、いい加減慣れてくれてもいいんじゃね？　俺と二人きりの時はリラックスするくせに。

「何故って、お前がいなきゃ服屋の場所がわかんねぇじゃん」
「他の方に聞くという選択肢は！？」
「ごみ箱に捨てておいたから安心しろ」
「それは安心の要素ではありません！」

こんな扱いではあるが、サンシターの利便性はこんなもんじゃない。
その雑学知識の多さ、俺の知らないこっちの世界の常識を聞いたとしても素直に教えてくれるその優しさ。

なにより、打てば響くようなツッコミが魅力的だ！

「というわけで、サンシター。そこそこ丈夫でそれなりに安く、なおかつ種類が豊富な服屋へと案内するがいい」

「条件が細かい上に難度高いでありますよ！？」

いろいろぐちぐち言っていたものの、心当たり自体はあるらしいサンシター。

さっそく俺たちを伴って城下町を歩き始めた。

「時にリュウ様。ご予算の方は？」

「昨日アイティス倒した分の、五十万アメリオン」

「服を買うだけで！？　あの、ブランドものじゃないでありますよね？」

「そりゃ、こっちでの生活に必要な分まとめて買うつもりだし」

「はあ……」

「ところで」

バッサバッサと札束を仰ぐ俺とサンシターの間に、ずいっと割り込んでくる真子。

なんだなんだ、いきなり。

「そのアメリオン、ってあたしの感覚でどんくらいになるのよ？」

「んー？　ああ、そういえばお前だけか。城下に来たことないのは」

半目の真子の顔を見て、俺は思い出す。

俺はハンターズギルドに顔を出す関係でちょくちょくこっちに来てサンシターがなんか買ってるのを見てるし、光太と礼美は一回アルトに案内してもらってたか。

「だいたい俺たちの世界と同じ感覚でいいんじゃね？　その辺の屋台で売ってる軽食が確か五百アメリオン位だし」
「つまり五十万も服買うつもりなの！？　何考えてんのよ！？」
「いや、頭割りだから、一人十二万ちょっとだぞ？」
「それでも着れない服が出てくるわよ……」

何やらゲンナリしてるけど、そんなに大量になるかね？　上下で一万前後で揃えたら、十着くらいじゃね？
そんな俺の顔を見て光太が苦笑する。

「なんていうか、その辺は大ざっぱだよね隆司って」
「そうかぁ？　まあ、そうかもな」

俺は服なんて着れればいいって感覚だからなー。
などと思っていると、礼美が苦笑しながら俺に教えてくれた。

「隆司君、女の子にとって服を買うって結構大事なことなんだよ？」
「そうなのか？」
「うん。だって、たくさん服を買ったけど、一度も袖を通さない服って結構あるもん」
「……そりゃ、もったいなくねぇか？」
「うん、もったいないよ？　だから私と真子ちゃんは、一回のお買いもので服を買うときは一着だけって決めてるもん」

礼美の言葉に、俺は首を傾げる。
あー、あれか？　表紙買いした漫画がはずれで、結局積んじまうとかそんな感じか？
女の感覚はよくわからねぇなぁ。
……でも礼美と真子って確か頻繁に出かけてるはずだから、結局服は増える一方なんじゃねぇの？

「まあ、下着なんかも含めて考えりゃいいんじゃねぇか？　せっかくだし、上下も中身も揃えちまおうぜ」
「中身って、隆司……」
俺の言葉に、さすがに呆れたような顔つきになる光太。まあ、普通は異性との買い物で下着なんか買わんわな。
俺だってわかってるよ。でもお前、平然と礼美の下着選びに付き合いそうだから逆に釘を刺すためのセリフだかんな？
「……！？　きゃぁぁぁぁぁぁっ！！？？」
「ぎゅぇっ」
光太をジトッと睨んでいると、何やらそんな女の子っぽい悲鳴が聞こえてきた。同時に聞こえてくるサンシターのうめき声。
そちらの方を見やると、ギュッと目をつぶった真子が、サンシターに体ごと抱き着いていた。その両手はがっちりサンシターの気道を極めている。
「なんだよ、どうしたんだ？」
「あ、あれ！　あれぇ！！」
相変わらずサンシターの気道を極めたまま指差す先にいたのは、結構デカい茶色のドブネズミだった。
「チュ？」
ネズミは何故指差されたのか分からない、といった風に首を傾げてこちらをじっと見つめている。
ただし普通のネズミに比べて二、三倍くらいデカいせいか、可愛

らしさより気持ち悪さの方が先立っている。
真子は顔をネズミの方に向けないようにしながら、必死に手を振ってネズミをどこかに追い払おうとしている。

「あれぇ！　なんとかしてよぉ！！」
「なんとかって」

まさかの腹黒軍師の弱点に若干驚きつつも、早急に対策を立てることにする。
でなけりゃ、どっかの猫型ロボットのように街中だってのに魔法使いかねん。
さしあたって足先で突いて追い返すかと、一歩二歩とネズミの方に歩み寄る。
すると、ネズミの方が危険を察知したのか素早く身をひるがえし、建物と建物の間へと駆けこんでいった。

「……おい、もう行ったぞ」
「ホントに!?　本当に!?」
「ホントだよ」
「嘘じゃないわよね!?　嘘だったら、ここで消し炭にするわよ!?」
「嘘ついてもなんも得ねぇじゃねぇか。だから……」

俺は一つため息をついて、サンシターの惨状を説明してやった。

「いい加減、サンシターの首から手を離してやれよ。顔色変わってきてんぞ」
「……え？」

俺の言葉に真子が目を開ければ、その眼の前ではサンシターが紫

色の顔色で泡を吹いているところだった。

慌てた真子が礼美に蘇生を頼んでしばらく。

「ホントごめん、サンシター……」

珍しく本気でしょげ返っている真子が、サンシターに謝っていた。

「い、いえいえ。誰にでも苦手なものはあるであります。自分なんかは、爬虫類なんかちょっと苦手で……」

顔色の方は紫色から青色へと変化しているが、割と平気そうな声でサンシターが真子をなだめた。っていうかお前、爬虫類苦手だったんか。俺が狩ってるのって、結構爬虫類が多い気がするんだけど。

「にしても、真子がネズミ嫌いとはな」

「……子供の頃見た、トラウマ物のパニックホラー映画がネズミ主題の奴だったのよ……」

若干笑いを含んだ俺の言葉に、ばつが悪そうにそう弁解する真子。とはいえ、サンシターは映画がなんなのか理解できずに首を傾げているけどな。

「大量発生したネズミが一つの街を喰い尽くすって話なんだけど、その描写が変にリアルで人間を足元から……」

そこまで言って、真子はブルリと体を震わせた。

「……それを五歳くらいの時に一人で見たせいでトラウマになってて……。以来ネズミ系はみんなダメ。ハムスターも無理」
「真子ちゃん、小学校の時、クラスで飼ってたハムスターに絶対近づこうとしなかったもんね」

何とも微笑ましそうなエピソードじゃねぇか。クラスの中にいじめっ子がいたら、絶対無理やり近づけようとするだろうな。
見えるなー。ガキ大将に無理やりハムスターのところに連れて行かれそうになって、礼美の奴に助けてもらうか、そのガキ大将を泣くまで張り倒す真子の姿が。
真子は思わぬ思い出話に顔を赤くし、みんなにその姿が見えないように背を向けてしまう。

「ああ、もうその話はなしなし。ネズミの話もこれでおしまい！」
「ああ、ちょい待ち。そのネズミのことなんだけどな」
「なによ一体！？」

終わらせようとしたトラウマ話題を蒸し返されて、鬼の形相で俺を睨む真子。
そんな顔すんなよ、そこそこ重要な話なんだからよ。

「なあ、サンシター」
「なんでありますか？」
「茶色のネズミなんか、この国にいたか？」
「は？」

俺の言葉の意味が解らず、間抜けな顔をする真子。
まあ、普通そうだよな。俺たちの常識で言えばネズミは茶色い生き物だ。
だけど、忘れるなよ？　ここは異世界だぜ？

「いいえ、いないはずであります。そもそも街中でネズミを見かけるなんてことさえあり得ないはずであります」
「なんですって!?　じゃあ、今のネズミはなんなのよ!?」

真子はサンシターの言葉に目を剥いた。
サンシターはそんな真子をなだめるように、ゆっくりと説明を始めた。

「ええっと、順を追って説明するであります。まずこの国近辺で確認される主なネズミは、トンガラネズミといって、全身が真っ赤な色に染まったネズミなのであります」
「赤い……ネズミ?　なにそれ」

自分で想像して怖くなったのか、顔面蒼白になる真子。
ネズミの話題になると面白いくらいキョドるなこいつ。

「なんでも、大型の捕食生物に食われないように、毛から肉から血に至るまで全部が辛いんだとよ。唐辛子が赤いのと同じ理屈だな」
「大きさも五センルから十センル程度。先ほど見かけました子猫ほどの大きさの個体はめったに見かけないであります」

センルは向こうで言うセンチの単位。さらに真子には内緒の余談だが、トンガラネズミは一般的な香辛料として、この国に普及してる代物だ。昨日の晩飯の味付けにもしっかり出てる。
聞いたら気絶しかねんなー、とか思いつつサンシターの先を促す。

「……そしてこの王都にネズミが出ない理由でありますが、単純に城下町を守るための城壁全体にネズミをはじめとした害獣除けの魔法をかけられているからであります。この魔法は、王都で暮らす人

間の魔力を利用する魔法陣によって発動していますので、王都から一定数の人間が出ていかない限り、ネズミはこの王都には自分から入ってこれないのであります」

「……元々この王都に存在していた個体は？」

「害獣除けの魔法をかけたのがだいたい百年くらい前で、その当時に大掛かりなネズミなどの害獣駆除を行ったと聞いているであります。その後も、ネズミは見たら駆除、と言われているでありますし、王都に生き残りのネズミがいる確率はかなり低いと思うであります」

そう、だからおかしいのだ。

さっきのドブネズミが、この王都に存在していること自体が。

「……どういうことよ一体」

「さてね。案外、真子をビビらすために魔王がこっちに投げてよこしたのかもよ？」

「やめてよ、ちょっと」

唸って考え出す真子に冗談めかしてそう言ってやる。途端に真っ青になるんだから、本気で苦手なんだなネズミのことが。

とはいえ、無視しきれる存在でもないな。

「後で、ハンターズギルドに寄っておくか。もし、新種のネズミだってんなら、なんかの形で討伐依頼が出てるかもしれねぇし」

「出てなかったらあたしが出すわ。依頼の出し方、今から教えて頂戴」

「はいはい」

怖いくらいに真剣な真子に肩をすくめて返事をしつつ、俺はサンシターを突いて服屋へと急がせた。

Ｎｏ．２２：ｓｉｄｅ・ｒｙｕｚｉ「そうだ、服を買おう」（後書き）

そんなわけで、某猫型ロボットと同じくネズミが弱点の真子ちゃんでしたー。普通ならサンシター得イベントなんでしょうけど、触れるものがないんじゃ（ｒｙ

しかし動物の説明が某冒食漫画っぽくなってるな……。一応危険な生物の方が多い設定なのですが。

次回はようやく服屋へー。久しぶりに日を股がないな。

No．23：side・mako「勇者のファッションショー」

極めて不愉快で冒涜的な小生物の話が終わってからしばらくして、ようやく目的の服屋へと到着。

掲げられている看板は……まだちょっと読めないわね。知らない単語だわ。ただ服屋にしては妙に大きい気がするわね。小さめのスーパーくらいありそうだわ。

「到着したであります。ここが自分が愛用しております古着屋“テイクオフ”であります」

「離陸してどうすんのよ」

思わぬサンシターからのボケに、反射的に突っ込む。ちくしょう、こいつはツッコミじゃないの！？

だが、サンシターは意味が解らず首を傾げるのみ。ドツボかコンチクショー！

悔しさに地団太踏んでると、ポン、と隆司が肩を叩いた。

「おちつけよ、ここはいせかいなんだぜ（笑）」

おまえは笑ってんじゃねー！

「と、ところでサンシターさん。この古着屋は、どういうお店なんです？」

隆司にチョークスリーパーを極めるあたしに気を使ってか、急いで話題変換を図ろうとする光太。

でもチョークは止めないわよ。

「お前にチョーク極められてもたいしたことないっていうか、むしろ背中がいたグギュ」

いらんことぬかすアホの首をしっかり捻る。

「ええっと、このテイクオフは王都で唯一古着を買い取るお店なのであります」

そのまま崩れ落ちるアホを真っ青な顔で見ながらサンシターが説明を始める。

「この王都は、この国で一番服が多く産出される関係で、結構な量の古着が出るであります。それをそのまま処分するのはもったいないと考えたテイカーさんが始めた商売で、買い取った古着を補修してまた着れるくらいに仕立て直して、通常定価より安く販売しているであります」

「どっかで聞いたことあるシステムね……」

というか買い取りをやってる店なんて大体そんなもんかしら。でも服の買い取りっていうのはあまり聞かないわねぇ。他人が着ていた服なんて、あまり着たいとも思わないし。

というようなことを正直に言うと、案外そうでもないというような回答が聞こえてきた。

「確かに抵抗がある、という方も多いでありますが、いくら製布技術が発達している王都とはいえ、衣服は職人による手縫いがほとんどなのであります。そのせいで、一般的な服は庶民にとっては一年に一回買うか買わないかくらいに高価なのでありますよ」

「ありゃ、そうなんだ……。まあ、あたしらの世界とは違うからねぇ……」

でも製布技術はあっても、服を作るのは手縫いなのか……。変なところでアナクロね。

「それに、服職人を目指す若者などは、自分の手縫いの服を古着といってこの店に売りにきて、誰かが買ってくれるかどうかをこっそり見守る、なんて話もあるであります」

「あー、職人にとっての登竜門的な？」

「トーリューモンというのがどういうものかは知らないでありますが、ニュアンス的にそんなもんかと思うであります」

なるほどねぇ。こういうお店なら店員さんの目利きもしっかりしてるだろうし、変なブランド背負うよりははるかに顧客の目も肥えてるから、キッチリ売れるかどうかわかるかもね。

「それじゃあ、種類も豊富なんですか？」

「はい、レミ様。王都中の古着が集まるでありますので、その分種類も豊富なのであります」

それならこの広さも納得ねぇ。そんだけ種類があるなら、結構な面積が必要になるだろうしね。

「じゃあ、さっさと中に入ってみましょうか」

「その前に、リュウ様の気付けが先でありませんか……？」

商品のラインナップに期待を寄せつつ店に近寄るあたしにそういうサンシター。

ん？と足元を見下ろしてみれば、首を変な方向に曲げたままビクンビクン体を揺らしてる隆司の姿が映ったのであった。

つつがなく隆司の蘇生を終え、あたしたちはテイクオフの中へと入っていく。

「いらっしゃいませー」

元気な店員さんの声に迎えられて中に入ったあたしたちがまず目にしたのは、服、服、服と大量の衣服。

半袖から長袖、ワンピースからセパレート、ちょっと渋い革ジャンやゴシックロリータ御用達のフリフリな洋服までたくさん揃えてあった。

「うわぁ……！」

おしゃれ大好きな礼美がさっそく目をキラキラさせて店の中を見回している。

女の子としては、結構魅力的な光景よねー。基本的に専門店的な趣が大きい向こうの服屋だと、似たような種類な服しかないけど、この店には雑多ともいえる種類の多さの服がある。

特に男物の洋服なんて、なかなか見る機会もないものね。ちょっとけしかけてみようかしら。

「せっかくだし、お互いの服をコーディネイトしてみよっか？」

「え？　私と真子ちゃん？　いつもやってるよね？」

「いや、あたし相手じゃなくて男どもの。この機会だし」

「うーん……それも面白そうだね！」

あたしの提案に少し悩んで見せるけど、すぐに明るく笑ってくれた。

今の悩みはうまくできるかな？って考えたってとこね。
じゃあ、さっそく礼美に光太を宛がって、あたしは隆司の……。

「……って、隆司どこ行ったのよ？」
「リュウ様なら」

いつの間にか姿が消えた隆司の姿をジト目で探すあたしに、サンシターがひきつったような苦笑で答えてくれた。

「先ほどズイズイ店の奥へといかれたであります……」
「……」

あんのボケがぁぁぁぁぁぁ！！！？？？
人の考えアッサリ水泡に帰しやがってぇぇぇぇぇぇ！！！
フリーダムにもほどがあんでしょうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！
チィッ、ならば！！

「じゃあサンシター！　あんた、あたしの相方やりなさい！」
「え！？　ええ！？　自分、役不足であります！　辞退させて……」
「文句ぬかすなぁ！　礼美、勝負よ！　光太とサンシター、どっちにより似合う格好させられるか！」
「真子ちゃん、なんだかやる気だね！　負けないよ、私！　いこっか、光太君！」
「え、あ、う、うん」

あたしのテンションの上がり具合に触発されたらしい礼美が、鼻息も荒く返事を返してくれる。
そんな礼美の様子に若干引き気味の光太だけど、この際構うこたぁない。
このあたしのストレス解消に付き合ってもらうわよ、サンシター！

―数分後―

「どうよ！」

「どうかな！？」

ずい！っとお互いに着換え終わらせたパートナーを差し出す。

「え、えーっと……」

さんざん礼美に振り回されたのか、ちょっと疲れたような表情で頬を掻いている光太の姿は、今時の若者風、とでもいうべきかしら？

上は白い袖なしのジャケット、その下に黒いアンダーシャツを着こみ、したにはカーゴパンツとでもいうのかしら？　ポッケとベルトがあしらわれた茶色のズボンだ。やるな異世界。

適当にそのあたりに合った服を着せただけなのかもしれないけど、元々は優男風な顔つきでスタイルもいいから、結構何着ても似合うのよねこいつ……。

「……」

一方あいまいに微笑んで、何かをあきらめたような悟りきった笑顔を見せるサンシターは……なんていうのかしら、これ？

普通にアロハシャツみたいなもの着せて、それに合いそうな色のズボンをはかせてるんだけど……なんて言うか、似合う似合わない以前の問題のような……。

顔が印象に残らないせいか、なに着せてもぼんやりとした印象しか残らないのよね……。これならまだ、さっきまで着ていた騎士団の制服の方が印象はっきり残るわ……。

あたしは自分の敗北を悟ると、フッとニヒルに微笑んで見せた。

「……あたしの、負けね……」
「真子ちゃん……」
「でも、忘れないで……。今回の敗因は素材よ！　サンシターでなければ、あるいはあなたが光太じゃなかったら、あたしが勝っていたかもしれないってことを……！」
「うん……！　うん……！」

感極まって涙ぐむ礼美が抱き着いてきたので、あたしもぎゅっと抱きしめ返す。

「……僕、とりあえずこれ買おうかなー」
「自分はこれを返してくるであります……」

勝利の後の友情の抱擁を行っているあたしたちの脇で、素材どもがなんか言ってるけど無視。
ああ、強敵（友）よ……！

「なにしてんのお前ら……」

横合いから、どこかに行っていたボケの声が聞こえてくる。

「なにって、戦いの後に友情を確かめ合ってんのよ」
「いつ軍師からお笑い芸人に転職したんだよ、お前」
「誰が芸人じゃコラァ！？」

ボケの余計なツッコミに吠えてそちらの方を振り返ってみると。
何ともアジアンテイストなお侍がそこにいた。

「わぁ、隆司君！　似合ってるよ！」

呆然とするあたしの横で、真子が歓声を上げる。
今の隆司の姿は、細部は異なるが江戸時代辺りに暮らしていた武士のような姿になっていた。
上は着物に下半身は足首あたりで窄まってるけど袴状ね。折り目のない山袴って感じかしら?。ただし、上の着物はだいぶ着崩してあって、何も来ていない裸の上半身が見えている。
っていうかズボンを履いて、その上に着物羽織って、適当に帯びしめただけよねこれ? 余った裾が腰から後ろにコートみたいに伸びてるし。着物なら中に入れるべきよね?
とはいえ、荒っぽい雰囲気がなんとなく隆司によく似合ってはいる。悔しいけど。
隆司は袖から抜いた片手を腹の部分の余った布に引っ掻けながら、にやりと嬉しそうに笑って見せた。

「おう、あんがとな。礼美にそう言ってもらえれば、選んだかいがあったな」
「どこにあったのよその一式」
「どこって、店の奥?」

そういって親指で背後を指差してみせる。
ちょっと背伸びしてみてみると、店の奥の方には確かに普通の洋服とは違う形の衣服が纏まっているコーナーがあるように見えた。

「あ、隆司いいなぁ! 僕もそういうの着てみようかなぁ」

大きめのコートを手に取りながら、光太が羨ましそうに隆司の姿を見つめている。まあ、うらやましく思うのは自由だけど、手に持ったコートは若干でかいと思うわよ?
アロハシャツ一式を返してきたらしいサンシターが、隆司の姿を

見てちょっと驚いたように目を見開いた。

「おや、それはトウキに伝わる伝統衣装でありますね」

「知っているのか、サンシター！？」

「はい。王都から南の方に離れた地方にある村落で、日差しが強く気温が高めなため、そういった風通しの良く面積が広い衣服が進化していったという話であります」

なるほどねぇ。言われてみれば、着物って結構風通しがいいものね。似たような形になるのも納得かしら。

でも隆司？　なんであんたそんな残念そうな顔してるわけ？

「……まあ、いいや。俺これにするわ。っていうか、もうこれ一式を七着くらい包んでもらっちゃったし」

「はや！？　もうちょっと悩んでみなさいよ！？」

「いいよこれで。これなら」

そういって隆司は残った片袖からも手を抜いて。

「キャストオフっ！」

なんて叫びながらいきなり上半身を脱ぐ。

「とこう、戦いのときにすぐ脱げるだろ？　もう血に濡れるのも、ぼろ屑にするのもごめんだし」

「いいから着ろ！　周りから奇異の視線が向けられてるでしょうがっ！」

「さすがにここでの瞬間脱衣はまずいでありますよ！」

いきなり半裸族になったアホの体をサンシターと協力して隠しな

がら、急いで上を羽織らせる。
　礼美なんかは若干顔を赤くしつつ「うわー……」なんて言ってる。
あんた三日前にも見てるでしょうが。

「なんだよ、いい案だろ？」
「悪くないけど、時と場所を考えなさいって言ってんのよ！」
「今後の展開を考えて服を選ぶのはよいと思うでありますが……」

　一々フォローしてやらなくていいのよサンシター？　バカがつけ上がるだけだから。

「そういうけど真子。お前らはもう何買うのか決めたのか？」
「あ、私はこのあたりのお洋服にしようかなって思ってるよ」

　そういう礼美が手に取ったのはワンピースというか……法衣？
なんというか宗教的な匂いがするんだけど……。

「神官のみんなと見た目が似てるから、こういうのがいいかなぁって」
「それは女神感謝祭などで作成される服でありますね。神官の皆様の制服を模して造られるお祭り用の服で、一年ごとに作られるでありますから、結構年代物の時もあるでありますが」
「そうなんだー」

　ああ、神官たちの制服に似てるんだ……。どうりで。

「僕はこのあたりの服にしようかなぁ」

　そういって光太が選んでいる衣服は、質素だけど頑丈そうな服だ。
なんだろう、ＲＰＧにありがちな皮の服とかその辺に近い気がする

わ。

「それはいいけど、なんで？」

「胴着代わりになるかなっていうのと、いかにも冒険者って感じがするから……」

ちょっと照れたようにそう言う光太。ああ、あんたまだ冒険をあきらめてはいないわけなのね……。

「で、真子？　お前は？」

「あたし？　あたしは……」

あたしは適当に周りを見回して、目的のものを見つける。

それを手に取って、くるりと振り返って見せる。

「とりあえずこういうの？」

「ズボンじゃねぇかそれ」

あたしが手に取って見せたものを見て、隆司が呆れたような声を上げる。

せめてパンツといいなさいパンツと。

「いいのよ。あたし、私服には基本的にスカートをはかないの。こういう動きやすいのが、あたしのデフォルトなのよ！」

拳を握って力説して見せる。

確かにスパッツや見せパンなんてものがたくさん出てきてはいるけど、何が悲しくて隠してる部分を野郎どもに見せてやらなけりゃいけないのよ！

「まあ、体系的にもそれが当たりだよな」
「黙れ変態」
うんうん何を納得しているのか、くだらないことつぶやくアホの顔面に飛び膝蹴りを叩きこんでおいてやった。

翌日。

「よくお似合いです、レミ様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「そ、そうですか？　エヘヘ」

さっそく神官風味な礼美が魔術師団に顔を出すと、ヨハンさんを筆頭とした礼美派の皆さんが膝をついて礼拝を開始し始めた。
やだ、なにこれ……。

Ｎｏ．２３：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「勇者のファッションショー」（後書き）

ちなみに山袴というのは山の中とかで動きやすいよう、足首あたりで窄まってる袴のことで、忍者装束の下半身あたりを想像してもらうとわかりやすいかと。

基本的に適当に書いてるけど、何も考えてないと隆司がフリーダム過ぎる。いきなり上半身脱ぎ始めるとかホントに主人公チームかこいつ。いやみんな、好き勝手に動くんですけどね。

次回は光太君ハンターになるの巻です。

No．24：side・ryuzi「ギルドからの依頼」

「うーん……やっぱり、王都の中でネズミが出たって依頼はないね」
「マジか？　どういうことだよ……」

服を無事に買った翌日。俺と光太は買ったばかりの服を着てハンターズギルドへとやってきていた。
昨日は服を買い終えた後は、余った金で適当に王都の中を散策して終わってしまい、結局ギルドへネズミ関係の依頼が出ているか見るのを忘れてしまったのだ。
そのことに気が付いたのは今日の朝食の時。思わずネズミと口走って真子の口の中の牛乳を顔面に浴びる羽目になったのは微笑ましい思い出だと思う。
混乱した腹黒軍師の命を受け、俺は飯を食い終えたら速攻でハンターズギルドへとやってくることとなったわけである。
だが、俺はまだ公用言語が読めない。だからいつものようにサンシターを引っ張っていくつもりだったんだが、今日は非番らしかった。
で、そんなサンシターの代わりに名乗り出したのが光太だった。

「にしても、光太。お前いつの間に、こっちの公用言語なんて覚えたんだよ」
「あ、これ？　アスカさんとかアルルさんに教えてもらって」

エヘヘと光太が嬉しそうに微笑む。まあ、本好きなこいつがこっちの言葉を覚えないなんて欠片も思わなかったけどな。
いろんな国の本を読むためだけに英語をはじめとした主だった外国語を覚えるような奴だし。
ちなみに一緒に来ているのは光太だけじゃない。

「うぅん～。王都でネズミちゃんなんて～、いまさら見かけないと思いますけど～」
「そうですね。私も、そのような話を聞いたことはありません」

俺たちの隣で同じく依頼ボードとにらめっこをしていたアルルとアスカさんが難しい顔でそういった。
この二人も、今回のネズミ調査についていきたいと申し出てくれた。まあ、主な目的は光太なんだろうけどな。
今の光太の格好は、昨日買った服の中で緑の上着に白いズボンというどっかの勇者みたいなスタイルに、騎士団の中で使い古されていた革鎧を装備している。勇者というよりは駆け出しの戦士だな。
アルルはスカートが短めの黒いワンピースにマントととんがり帽子という魔法使いスタイル。アスカさんは、サンシターが着ていたような騎士団制服に長剣を腰に帯びているのみ。
ハンターズギルドは相変わらず人がいねぇけど、もし人がいたら目立ってしょうがなかったろうなぁ……。

「リュウジ……あ、いえ。リュウ様。本当にネズミをご覧になられたのですか？」
「ああ。一匹だけだけど、確かにな」

アスカさんの疑問に、俺はうなずいてみせる。
さすがに昨日の光景を白昼夢だと思いたくはねぇなぁ。別に疲れてるわけでも、寝不足ってわけでもねぇし。

「アルルさん。仮に、ネズミが王都に侵入するとしたら、どういう状況だと思います？」
「うぅ～ん、ちょっと想像できませんね～。そもそも害獣除けの魔法って～、害獣たちの意識が王都に向かないようにするための魔法

なんですよ～」
「意識が王都に向かないように……？　王都が危険だとかそういう風に思わせるってことですか？」
「いいえ～。そもそも危険だとも～、思わせないようにするんですよ～」
「簡単に言えば、そこに王都が存在しないと思わせる効果なのです。結果、ネズミは王都に近寄ることはしません」

光太の疑問に答える二人。
そこに何もなければ、食料が豊富な森の方に意識が向くようになるってことか？
まあ、害獣を根こそぎ殺すような魔法をかけたら、王都の中の人間にまで被害が及ぶよな。それを考えればずっと安全か……？

「でもよ。それって王都がないように思わせるだけだよな。じゃあ、連中からこの王都がある場所はどういう風に見えるんだ？」
「さあ……？　何とも言えませんが、何もないように見えるんじゃないでしょうか……？」

俺の質問に、アスカさんがあいまいに答える。
まあ、そりゃそうか。そこにないと思い込めば見えなくなるって効果なら、そこには何もないはずだ。
王都の広さを持つ、広大な草原か何かがそこに広がっているって考えるべきか……。

「お？　リュウ！」
「んあ？」

一瞬思考に没しそうになった俺は、後ろから呼ばわる声に振り返る。

カレンがこちらに向かって軽やかに駆けてくるところだった。
「あんたようやく服買……って！　結局ほとんど変わってないじゃないかい！？」
振り返った俺の姿を見たカレンは失礼なことにそんなことを叫んだ。
何を言ってるんだか。
「裸マントが、肌蹴着物に変わってるじゃねぇか。よく見ろ」
「結局、上は見えっぱなしじゃないかい！　もっと隠せ！」
また顔を赤くして叫ぶカレン。
なにこいつ。ひどく男に不慣れじゃない？
「まあ、そんなこたぁどうでもいいんだよ」
「よくない！」
「なあ、カレン。王都でネズミが出た、なんて噂聞かねぇか？」
カレンの抗議を無視して、俺は質問をねじ込む。
俺の言葉に、カレンは眉根をひそめた。
「ネズミが？　どういうことだい？」
「昨日、古着屋に行く途中でネズミを見たんだよ。見たことねぇ種類だったし、ギルドでなんか依頼が出てるかと思ったんだよ」
カレンは何かを考えるそぶりを少し見せ、そして頭を振った。
「悪いけど、そういう話は聞かないね。ネズミといやぁ、穀物を食い荒らすから第一級害獣に指定されている大物だけど、今日日の王

都で見るような生き物じゃないからね」
「そうか……」
うーん、こうなると手詰まりだなぁ。まさかネズミが一匹こっきりこの王都に生息してるわけはないだろうし、そのうち依頼が出るんだろうけどそれもいつになるやら。
と、カレンが俺の背後を覗き込む仕草をした。
「ところで、そいつらは？」
「ああ、忘れてた」
そういや今日一緒にいるのはサンシターじゃなくて光太ハーレムだったか。
「こっちで知り合ったダチでな。コウにアスカにアルルだ」
「初めまして。コウです」
「アメリア王国騎士団所属のアスカだ」
「同じく王国所属の魔法使い、アルルです～」
「あたいはカレン。よろしくな」
ちなみにコウってのは光太の偽名だ。俺もこっちじゃリュウで通してるしな。
そして俺と光太の関係はこっちで知り合いになったダチ。それ以外はサンシターとのつながりってことにしてる。
「にしても騎士に魔法使いか……。あんたも結構人脈広いねぇ」
「まあな」
カレンの言葉に気を良くした俺は、大きくふんぞり返って見せる。
そんな俺の姿に光太は苦笑し、カレンは大きく声をあげて笑った。

「相変わらずだねぇ。昨日はアイティス討伐成功させてるし、景気がいいようで何よりだよ」
「フフン。もっと褒めろ褒めろ」
最近真子からは罵倒しか聞いてない気がするからな。ちょっとは褒められてもいいはずだ！
「ああ、こちらにおられましたか」
「ん？」
急に声をかけられそっちを見ると、何ともひょろっとしたメガネのおっさんが立っていた。叩いたら折れそうだ。
で、今度は誰だ？
「あ、ギルド長さん。お久しぶりです」
「はい。カレンさんも、いつもご苦労様です」
カレンが頭を下げるとおっさん……ギルド長は丁寧に頭を下げ返した。
ああ、この人がハンターズギルドのギルド長か。
どっちかっつーと書類仕事が似合いそうな印象だな。いや、ギルド長ともなるとそっちの方が多いのかね？
「それで、君がリュウ君でしたね。初めまして」
「どもっす」
「実は、あなたに折り入ってお願いがあるんですよ」
お互いにあいさつを終えると、ギルド長は何の前置きもなく用件を切り出してきた。

「お願い？　俺に？」
「はい。ここ最近、このギルドにほとんど人が出入りしていないのはご存知ですよね？」
言われて俺は一つ頷く。
いつ来てもこのギルドに人はいない。カレンによれば、森が妙に危険なせいなんだそうだが……。
「森がおかしいんでしたっけ？」
「ええ、はい。森の深部を本来のテリトリーにする臆病なアイティスが、森の入り口付近にやってきているのがいい例ですね」
ああ、アイティスってもっと奥地にいる生き物なのか。初めて見たときにカレンが妙に驚いてたのはそのせいってわけだ。
しかも臆病とか。テリトリーに入ってきたら容赦なく殺しにかかる生き物とは思えない……。
ん？　待てよ？
「あの、ギルド長？　一ついいっすか？」
「はい、なんです？」
「アイティスが臆病ってことは……なんでテリトリーの移動を？」
臆病、ということは自分が安心できるテリトリーからは移動したがらないだろう。そんなアイティスがわざわざ森の奥から入口に移動してくる……ってことは？
「実はその調査をお願いしたいのですよ」
ああ、原因不明なんだ……。

「アイティスがテリトリーを移動する要因は、自身に危険が降りかかると感じた時と聞きます。なら、普段のテリトリーに何か危険な生物が巣を作ってしまった可能性があるのです」
「なるほど」
道理といえば道理か。臆病な生き物は、言い換えれば危機感知能力がとても高いってことだろう。
なら、すぐそこにある危険を避けて森の外側へ逃げ出すのも当然だ。
「今回あなたに依頼したいのは、アイティスがテリトリーを移動する原因の調査です。可能ならその原因を排除していただきたい」
「もし不可能なら？」
「情報を持って戻ってきてください。こちらで対処しましょう」
「……なんでそんな話を俺に？　まだギルドに所属して一ヶ月もたってないド新人っすよ？」
俺は慎重に言葉を選びながら、ギルド長に問いかける。
普通、一週間いるかいないか程度の新人に任せる仕事ではない。
確かに人がいないけど、それならそれで手紙か何かで依頼すればいいんじゃねぇのか？
だが、ギルド長の答えは俺が思っている以上に切ないものだった。
「いえ、誰も森に行きたがらないんですよ……。もう一ヶ月くらい前からいろんな人に依頼してるのですけど……」
曰く「アイティスがいられるような場所へ行けるか！　俺はひきこもる！」。
曰く「婚約者を待たせているんです。彼女を悲しませたくない」。

曰く「死んだばあちゃんが手招きする気がするから嫌だ」。

「そんなわけで、依頼を受けてくれそうな人がいなくて……」

ギルド長の言葉に、俺は何故か目頭が熱くなった。

いくら何でも情けなさ過ぎねぇか……？

いや、傭兵ギルドみたいな場所じゃないし、それでいいのかもしれねぇけど。

死んだばあちゃんが手招きしてるってなんだそれ……。

「それに、あなたはギルドに登録して一週間ほどですが、その間にアイティスを初めとした相応に危険な生物の討伐に成功しています。しかも単独で」

目頭を押さえる俺の右手を、ギルド長さんはその骨ばった両手で包み込んだ。

顔をあげると、少なくない期待の視線にさらされる。

「私もこのギルドに所属して長いですが、あなたほどの戦績を持つ人にはいまだお会いしたことはありません」

「……そっすか」

思わずうなずく。まあ、ハンターズギルドの目的が食糧確保なら、ウッピー狩りまくってればそれなりに稼げるしなぁ。

「あなたなら、アイティスを怯えさせる原因に出会ったとしても必ず戻ってきてくれる。そう信じております」

「……リュウ、受けようよ。この依頼」

懇願するようなギルド長さんを後押しするように、光太が一歩前

に出て俺の肩に手を置いた。

「コウ？　お前……」

「確かに危険かもしれないけど、今日はアスカさんもアルルさんもいる。それに僕もいるんだ。何とかなるかもしれないじゃないか」

振り返ると、こっちを見つめる瞳の中に使命の炎がメラメラと燃えていた。

あー……スイッチ入りましたね？　止まらないわけですね？

俺は一つため息をつくと、ギルド長に向き直った。

「ギルド長。この依頼が成功した場合の報酬は？」

「原因を排除できた場合は五百万アメリオン。原因の情報を持ち帰った場合でも百万アメリオンをお支払いいたします」

「ご……！？」

その金額に、そばで話を聞いていたカレンが息をのむ。

アイティス換算で十頭分か。高いのか低いのか……。向こうの世界の平均年収と考えれば破格かね？　いや、討伐対象の正体が不明じゃむしろ安いくらいかも。

とはいえ、我がチームの勇者様がやる気になってる以上、断るなんて選択肢はないだろう。俺が受けなくても、光太が勝手に受けちまうだろうし。

「わかった。正体不明の原因に立ち向かうには安い気もするけど……この依頼、受けるよ」

俺がそういって頷くと、ギルド長の顔が目に見えて明るくなった。

ホントに頭悩ませてたんだな……。

「ありがとうございます、リュウさん。もしよろしければ、お連れの方々もギルドのメンバーとして登録いたしますが」

ギルド長がそういうと、さっきまで指名に燃えていた光太の瞳が、何やら期待にキラキラと輝きだした。

ああ、そういえばこういう冒険もしてみたいみたいなことを言っていたような……。

とはいえ、みんなまとめて登録されてもアスカやアルルは困るよな。

「その辺は自由意志ってことで。報酬は依頼そのものに対してだよな？」

「申し訳ありませんが、ギルドもカツカツでやっておりまして……」

俺の言葉に、ギルド長は深々と頭を下げた。

チッ。さすがに一人頭とはいかねぇか……。五百万は山分けになるな。

「単なる確認だから、気にしないでくれ」

俺がそういって手を振ると、ギルド長は話題が終わったのを感じて光太たちの方に目を向けた。

「それでは、登録なさる方はいらっしゃいますか？」

「あ、じゃあ僕は登録させてください！」

「それなら私も～」

「わ、私は……」

ギルド長の言葉に光太が一番に名乗り出て、それに乗っかるようにアルルも声を上げる。

アスカさんは自分が騎士団であることに気後れを感じて少し逡巡したが、連れ立って歩く光太とアルルの姿を見て、意を決したように二人の背中を追いかけた。
光太はともかく、アスカさんとアルルは幽霊メンバーにならねぇか……？
そんなことをもいながら、手持無沙汰に背負った弓をいじっていたカレンに俺は声をかけた。

「そうだカレン。お前も来るか？」
「え、あたいも！？」

まさか声をかけられるとは思っていなかったのか、カレンがたまげた声を上げる。

「あ、あたいはいいけど……あんたたちはいいのかい？」
「ああ。俺たち見事に前衛ばっかりだからな。お前みたいな偵察できる奴がいねぇんだ」
「ほかの奴に意見を聞かなくていいのかい？」
「気にしねぇだろあいつらなら。頼むぜ」
「……うん、わかった」

そう言って頭を下げると、カレンはしばらく迷ってから笑って頷いてくれた。
さって、メンバーは戦士（俺）・剣士（光太）・剣士（アスカさん）・魔法使い（アルル）・狩人（カレン）か……。
鬼が出るか蛇が出るか。楽しみにしておこうじゃねぇか。

No.24：side・ryuzi「ギルドからの依頼」（後書き）

そんなわけでネズミ捜索編。森の中にいったい何がいるのか！？
しかし支援型後衛色がいねぇからバランス悪いなこのメンツ。

No．25：side・ryuzi「大きな亀とお約束」

その後、無事に登録を終えた三人が帰ってきて、さっそく捜索を開始することになった俺たち。

ギルド長さんから渡された、アイティス出現ポイントが書かれた森の地図をもとに、光太が一番怪しい地点を割り出す。割り出す、といってもいくつも真円を書いて、書かれたアイティス出現ポイントすべての円が重なる部分を導き出しただけだけど。

あとはカレンに先導してもらってなるべく野生の生き物に会わないようにしつつ、そのポイントまで行ってみたわけなんだが。

「……なにあれ」

やや呆然としたようなカレンの声が聞こえてくる。

「なんだよどうし……なんだあれ」

あとから追いつき、視線の先を向いた俺の目に飛び込んできたのは……。

「……亀の、甲羅？」

光太の言葉通り、これでもかというくらい亀の甲羅だった。

背中に刻まれたのはヘキサゴン型の亀甲模様。その色は緑。首や足は引っ込められているのか、甲羅には均等に六つの穴が開いている。

カクンと落ちた顎がなかなか戻ってこない。そのくらい見事な亀の甲羅だった。

そんな亀の甲羅は大きく開けた広場に鎮座し、特別動く様子はな

い。寝てんのか？

「……」

「あらあらまあまあ～」

もうなんか言葉もない。正直アルルの言葉がこの状況に最もふさわしい気がしてきた。

「……なんでこんなとこに亀の甲羅が……」

「たぶん陸亀の甲羅じゃないかなぁ。なんだかドーム状になってるし」

光太の無駄知識のおかげで、陸亀と判明した亀の甲羅。なるほど、それなら丘にいてもおかしくはねぇな。

とはいえ、何の問題の解決にもなってねぇな。これがアイティス大移動の原因？

「……どう思うよカレン。あれがアイティスが移動する原因だと思うか？」

「ど、どうなんだろ……。正直あたいも、こんなデカい亀見たことないから何とも……」

俺たちの中で最も狩猟経験がありそうなカレンに聞いてみるが、答は芳しくない。

うーん。こっちの生物に詳しいカレンが分からんのじゃ、このメンツで分かりそうな奴いない気がするなぁ……。

と、勝手に思っていると。

「う～ん～。たぶん～、アイティスちゃんの大移動は～、この子が原因で間違いないと思いますよ～？」

「なに？　どういうことだアルル」

アルルが何かを言い始めた。

「ほら～、亀ちゃんの周りを見てください～」

言われて亀の周りを見てみる。

といっても開けた広場にドデンと亀が居座ってるだけだよな？

「……なんだアルル。あの広場がなんだというのだ」

「も～。アスカの鈍感～。そんなんじゃ～、男の子一人落とせないわよ～」

「今それは関係ないだろうが！？」

「今まで歩いてきた道は～、ほとんど獣道だったのよ～？　急にこんな～、亀ちゃんのために用意された広場があるわけないじゃない～」

「……あっ！？」

ああ、なるほど。言われてみれば、この森に生息するには図体がデカすぎるよな。

木の間を通るにしても、一々なぎ倒してるんじゃ森林破壊と何らかわんねぇし。

「つまり、この場所はあの亀のために用意された場所ってことですか？」

「はい～♪　その通りですコウ様～♪」

「なら、アイティスの移動も道理だね。テリトリーを犯された挙句、そこに居座ったのがあんなんじゃ逃げるしかないよ」

「じゃあ、決まりだな」

「はい。問題は、あれをどうするかですが……」

アスカさんの言葉に考える。
さすがにあの図体となると、ぶち殺すのも骨だしなぁ……。そもそも寝てんのか、起きてんのかもよくわからねぇし。
……でもあの巨体なら、〆て鍋にするのも悪くねぇよな？
なんて思っていると。

『いつまでもそこに隠れてられるとは思わないことねっ！』
「「「「「「！？」」」」」」

突然、若いんだか年喰ってるんだかわからない女の声が響き渡る。
音源は……。

『ふぁいやっ！』

目の前の亀！？
ビビってる間に亀の穴の一つがこちらに向き、その中でオレンジ色の光が瞬く。
次の瞬間には目の前に迫る火の玉！

「うぉぉぉぉ！！？？」

慌てて石剣でボールか何かのように打ち返す。

ガキィン！

えらくいい音が響き、打ち返した火の玉はファールラインを描いて木のうち一つにぶつかった。
あ、木の真芯にめり込んでる。よく見るとボールかなんかに火がついてるだけなんだなあれ。

『んっふっふっふっ……。やるじゃない！　キッコウちゃんの“ふぁいやーかのん”を打ち返したのは、君が初めてだよ！』

なおも響き渡る声に呼応するように、亀の中から手足と頭、そして尻尾がせり出してくる。

だが、それは既存の生き物のものではなく……っていうかいやにメカメカしいなおい。

外側は完璧に亀の甲羅なのに、手足と頭にネジやらボルトやらが丸見えじゃねぇか。

完璧に足を出し、立ち上がった亀が一声鳴いた。

―がおーん！―

いや亀は鳴かねぇよ。

『試作型陸上拠点、キッコウちゃん！　よくぞその居場所を見抜いたと褒めてあげるわ！』

なにぃ！？

「試作型陸上拠点……！？」

「なんて心揺さぶられる響きなんだ……！」

なんてこった……！　男のロマンの塊じゃねぇか……！

きっとこいつ、火の玉を吐くだけじゃなくて空を飛んだり、回転しながら攻撃を仕掛けてきたりするに違いねぇ……！

「あ、あの、コウ様？」

「コウ様は～、ああいうのがお好きなんですねぇ～」

「ちょいとリュウ？　しっかりしておくれよ？」

あ、いかん。思わぬ言葉に我を忘れかけた。

「よし、閑話休題。……試作型陸上拠点！？」

「そっからなのかい！？」

うむ。やはりツッコミは必要不可欠だな。

まあ、それは置いておいて。

「どういうことだ、貴様！」

俺は石剣を亀の頭に突き付ける。ヤダなんか卑猥。

『んっふっふっふっ……。言葉通りの意味だよ！　この子は私たちの拠点の一つ！　どこでも活動でき、なおかつどんな場所も走破できる、夢の拠点なのさ！』

「なんてこった……！　どこへでも侵攻できる、まさに移動要塞じゃねぇか……！」

恐れおののく俺の言葉に、アルルが驚愕を顔に張り付けて叫び声をあげた。

「そんな～！　そんなもの、いったいどこの誰が開発できるっていうんですか～！」

『もちろん、栄えある魔王軍！　その筆頭開発者！　四天王の一人、このリアラちゃんに決まってるじゃない！』

ん。それが聞ければ問題ないな。

「なるほど。じゃあ、中にいるお前さんを捕まえたら万事解決だな」
『ふえ？』
いきなり声のトーンが落ち着いた俺に驚いたのか、間抜けな声を上げるリアラとやら。
俺はにやりと笑って横に避け。
「ストームブリンガー！」
そのわきを、渦巻く豪風が通りぬけてゆく。
『んきゃー！？』
突然の豪風に驚き叫ぶリアラ。とはいえ亀の巨体がこれしきの風でひっくり返るわけもない。
『んもー！　そんな風くらいで、キッコウちゃんはひっくり返らないもんね！』
「じゃあ～、こういうのはいかがですか～？」
亀の側面へと回り込んでいたアルルが、のんびり唱えていた魔法を完成させ、両の手を地面に着く。
「隆起岩掌（アースハンド）～」
とたん、亀の真下の地面からげんこつが飛び出し亀の体をひっくり返そうとする。
『きゃー！？　きゃー！？』

いきなり揺れる亀の振動にたまらないように悲鳴を上げるリアラ。
とはいえ傾いたのは三十度前後くらいか。あと一押し位だな。

「アスカさん！　合わせてくれ！」
「はい、リュウ様！」

素早く傾斜の下に割り込み、俺は軽く跳んでアスカさんは両手の剣に魔力を込める。

「ＥＸ徹甲脚！！」
「牙斬昇竜撃！！」

同時に放たれた俺の蹴りとアスカさんの剣撃が、亀の巨体をさらに浮かび上がらせる！

『いやぁー！？』

哀れ、亀はその一撃が止めとなってぐるりとひっくり返る……。

『負けてたまるかー！』

はずが、背中の亀甲模様の一部がバネのように弾け、さらに反対側へと体勢を立て直す。
遠慮ない轟音を立て、木をなぎ倒しつつ着地。下敷きになった木をその重みで押しつぶしている。

『うぬぬ！　キッコウちゃんに喧嘩を売るとは、さてはあなたたち命知らずね！』

言いながらリアラは亀の頭をこちらに向けようと、たぶんキッコ

ウを操作してるんだろう。
だがその速度は遅い。まだ子供の歩くスピードの方が速そうである。
まあ、あの巨体な上に忠実に亀の体を再現してるからなぁ……。
「どうしよう隆司!?」
「俺はリュウな。さて、どうするか……」
なるべく無傷かつ穏便に中にいる四天王を捕らえておきたいんだけどなー。
「とりあえず、五体ばらしてみるか」
「オッケー!」
俺の言葉に光太は一つ頷くと、駆け足で亀の足へと近寄っていく。
「コウタ様! 危険です!」
「私たちもまいります~!」
その背中を追って、アスカとアルルも駆けだした。ところで、そいつの名前はコウだかんね、一応。
「リュウ!」
「おう、カレン。悪いな、変なことに巻き込んだ形になって」
「いや、それはいいんだけど……」
カレンはメカメカしい足に一生懸命斬りつけている光太の背中と、悲鳴を上げて制止を呼びかける亀の頭を見る。
「なんなんだい一体? 魔王軍だの四天王だの……」

「今アメリア王国に喧嘩を売ってる連中……だろ？」
「それはわかってるよ。なんでそんな大物がこんなところにいるんだい？」
それは俺に聞かれてもなぁ。
「まあ、とっつかまえてみればわかるんじゃねぇか？」
「そうだねぇ」
一つ頷いて、俺たちも駆け出す。
狙うは光太が狙っているのとは逆の前足だ。
「どうやって壊すんだいあんなの！？」
「まずは、普通に斬ってみようぜ！」
俺は手にした石剣を両手で握り、ぐるりと体をまわして斜め上に切り上げる要領で亀の足を狙う！
「おらぁ！」
ズバン！と思いのほかいい音がして丸太のように亀の足が切断される。
あらやだ、やっけー。
『いやぁー！？　キッコウちゃんの足がー！』
そのまま傾くキッコウ。
反対側では。
「エアスラッシュ！」

何やら新しい技を繰り出したらしい光太の声と、ズバシュ！という鈍い音が。

『反対側まで！？　鬼、悪魔、人でなしー！』

「いや魔族が言うセリフじゃねぇだろ」

呆れ交じりにそう言ってやるが、頭が沸騰しているらしいリアラには届かないようだ。

『頭きた！　必殺ぐるぐるアタックで、みんな吹っ飛ばしてやるー！』

「ゲ」

わかりやすすぎるネーミングに、あわてて下がる。

期待通り、キッコウは手足と頭を引っ込める。

たぶんそのままくるくる回転し始めるはずだ。

この巨体に回転はじめられたら、さすがに止めようが……。

「やっ！」

「火炎球（ファイヤーボール）～！」

だが、回転を始めるより先にカレンの矢と、アルルの魔法が放たれる。

矢くらいでダメージ与えられるわけ……あれ、先になんか括りつけてある。

カレンが放った矢は寸分違わずキッコウの前足が引込められた穴へと吸い込まれていき。

ずぼんぬ！！

と轟音と炎を吹き上げて爆発した。

『にゃー！？』

反対側から放たれた火炎球（ファイヤーボール）の威力もあり、勢いよく飛び上がるキッコウ。

「今の矢は？」

「火薬満載の爆裂矢さ。外の皮が堅い獲物相手に使うやつなんだけど、あれにも通用するみたいだね」

自慢げに胸を張るカレン。なるほど、火薬自体はこの国にもあるんだな。今の威力からすると、結構な大物専用って感じか？

回転することもかなわず、内部から焼き尽くされたキッコウ。残った穴からも中の機械か何かに引火したのか爆風と炎を吹き出しはじめ。

ぼしゅ！

「きゃー！？」

背中から一人の少女をはじき出した。

緊急脱出用の装備か何かだったのか、丸い枠のようなものの中に納まった少女は二、三回バウンドを重ね一本の木へと衝突する。

「きゃひん！？」

シートベルトのようなものは着用しているため、身体へのダメージ自体はさほどなさそうだが、衝撃のせいでそのまま気絶。しかも

逆さまの体勢になってる。あれだと頭に血が上りそうだな。
しかし四天王にしちゃ間抜けな奴だ。何ともお粗末な結果だぜ。

「きゅ～……」
「あれ？　人間……？　しかも子供！？」

目をまわしている逆さ吊りの少女の姿を見て、光太が驚いたような声を上げる。
白衣を身にまとい、顔にかかっているのは瓶底メガネ。今は垂れ下がっている長い髪の毛は、先っぽで二つにくくられている。
しかし逆さづりになっている少女は、魔族の特徴である耳も尻尾もなく、何やら骨太そうな、っていうか人間の少女と比べて一回り位たくましい腕や肉体、それに反するような低身長くらいしか特徴が見受けられない体だ。
光太がビビるのも無理はない。小学校低学年くらいにしか見えんし。
しかし耳はピンととんがったいわゆるエルフ耳。これらの特徴に合致する種族は……。

「たぶんそいつドワーフだな」
「ドワーフ……ってあの？」
「手先が器用な種族で有名だし、このメカ亀作った本人だっていうなら、間違いなくドワーフだな」
「なるほど……」

光太が納得したようにうなずく。
しかし獣人以外の種族もいるのか魔王軍。そのうち吸血鬼とか出てこねぇだろうな？

「それじゃあ、この子どうしようか？」

「どうするも何も、騎士団の人がいるんだから引き渡すのが道理だろ。なあ？」

光太の言葉に俺がアスカさんに水を向けると、アスカさんは驚いたような顔をしたのち、今の俺たちの設定を思い出して慌てて頷いた。

「え？　あ、はい！　ではこちらで身柄をお引き受けしましょう」

「依頼に関してはどうするんだい？」

「どうもこうも、原因がこのありさまだからな」

続くカレンの言葉に、いまだ火を噴くキッコウを顎でしゃくって示す。

こうなると、もう俺たちの手じゃどうしようもねぇな。まさか持って帰るわけにもいくめぇ。

「とりあえず、原因自体は止めたけど、もの自体は残ってるって報告するしかねぇな」

「だねぇ。じゃあ、そっちのちびっ子を縛るなりなんなりして……」

そういってカレンが腰のポーチからロープを取り出す。

その瞬間だった。

「――ハッ！」

掛け声が聞こえ、同時に俺たちの体に影が差す。

「なっ！？」

アスカさんの驚きの声と同時に、巨大な馬が一匹広場に現れる。

黒い毛並みを持った馬で、たてがみの代わりに白い炎を吹き上げている。
その上にまたがっているのは、バイザーのような仮面をつけた黒い鎧の女騎士だ。
なんで女ってわかるかって？
ソフィアと似たような、胸の形がはっきりわかる鎧着てるんだよなー。あれって鎧の意味あるんかね。
女騎士は素早く馬を操りリアラに駆け寄ると、剣の一閃でその拘束を解く。

「リアラ様！　我が背にお乗りください！」
「うきゅ～」

ベルトが切れて気が付いたのか、目をまわしたままであるが何とか馬によじ登るリアラ。器用な奴め。

「させるか！」

アスカさんが勇み、素早く地面を蹴って女騎士に飛びかかる。
だが、女騎士もそれに反応し剣を一閃。

ぎぃん！

「くっ！？」

踏ん張りの効かない空中ということもあり、アスカさんはあっさり弾き飛ばされてしまう。

「アスカさん！」

光太があわててアスカさんに駆け寄ってその体をキャッチ。
その様に一瞥もくれず、女騎士は素早く腕を一閃させ、キッコウに一本のナイフを投げつけた。

「貴様ら！　命惜しくば、すぐにこの場から離れるがいい！」

女騎士はそれだけ言い捨てて、素早く広場から立ち去って行った。

「ま、待て！」

アスカさんが制止の声を上げるが、馬に乗った女騎士は振り返ることはない。
鮮やかな手際だな。あのリアラの部下にしては武骨すぎる気もするけど……。
でもさっきの忠告って何ぞ？

「あ」

アルルが何やら間抜けな声を上げる。
それに反応してキッコウの方を見ると、カウントダウンか何かのように刺さったナイフがカッチカッチと明滅していた。
ああ、うん。自爆はお約束ですよね？

「逃げろー！？」

慌てて叫ぶ俺の声に反応して、光太はアスカさんを抱えたまま、俺はカレンの首根っこ引っ掴んで、アルルは光太の背中にかじりつきながら広場を後にする。
しばらくのち、王都内にあったハンターズギルドにも聞こえるほどの爆音が、森の中を満たしたのであった。

No.25：side・ryuzi「大きな亀とお約束」（後書き）

証拠隠滅に爆破はロマン。そして敵メカ自爆はお約束（キリッ
そんなわけで、二回連続で隆司のターンとなりました。テンポは大事。
次は真子さんのターン。軍師さん考えるの巻ー。

No．26：side・mako「軍師様に通達！」

「つまり、例のアレは今確認されていない……と？」
「一応な。いつ出るかは知らねぇが」

王城まで聞こえるような爆破の翌日。ズタボロになった隆司たちに話を聞くのはさすがにはばかられたので、一日おいての事情聴取となった。

場所は魔導師団詰め所。メンバーはあたし、フィーネ、隆司、光太、アルル。アスカには訓練があったし、礼美は今日はオーゼさんに話を聞くみたいだ。フィーネは興味本位といったところかしら。

まずは例の不愉快で冒涜的な小生物関係の依頼は一切なかったということ。

少なくとも誰も見ていないし、ギルドでも確認されてないってことになるんだろうけどそんなことはない。極めて不愉快なことにこの生き物に関するあたしの記憶力はすべてにおいて優先されてしまうのだ。調査ってことであたしが出しとこう。

次に、森の中で自称魔王軍四天王と名乗ったちびっ子がいたこと。

あたしは見てないから何とも言えないわね……。見た目がただの子供って時点では信憑性はゼロよね、普通。

そしてそのちびっ子が乗っていたのが、試作型陸上拠点とやらだったこと。

つまり、魔王軍の一部が王都付近の森を拠点に活動していたということを示している。そこで何をしていたのか、ということを考えると疑問が尽きないわね……。

最後に、そのリアラとやらを回収しに女騎士が現れたということ。

回収しに来たってことは、ちびっ子が四天王かどうかとはともかくこっちの手に渡っては困る程度の存在ではあるってことよね……。

あたしは隆司たちの話から拾えた情報を吟味する。

断片的ではあるけど、何気に重要よね。まさかこんなところで魔王軍と鉢合わせるとは思ってなかったし。

しかし試作型陸上拠点、ねぇ。

「……その、試作型陸上拠点とやらの部品なりなんなりは回収できなかったわけよね？」

「んー、見事にばらばらになったからなぁ」

何故か残念そうな隆司。こいつもその手のものには弱いのかしら。

何やら懐に手を突っ込んでごそごそやっていたかと思うと、一枚の鉄板を取り出した。

「回収できた中で一番きれいな奴がこれだなぁ」

「そう……。まあぜいたくは言えないわ、十分よ」

あたしは言って、隆司から鉄板を受け取る。

緑色の鉄板だが、どうも鉄でできてるわけじゃないわね。便宜上鉄板とは言ってるけど。

あたしが普通に曲げようとしてもある程度曲がるくらいの柔軟性はあるようね。そのくせそのある程度以上曲がる気配はない。

ひょっとして、こちらの世界か魔王軍が独自開発した鉱石かしら。これを解析できないもんかなぁ。

あたしはそばで興味深そうに話を聞いていたフィーネに顔を向ける。

「ねえ、フィーネ。魔導師団でこれの分析とかできない？」

「できる！　……と断言できればかっこよかったのじゃが……」

勢い良く立ち上がったかと思ったら、途端に自信なさげに眉根が下がる。どっちなのよ？

「一応、鉱石を専門とする魔導師もおるんじゃ。でも、既存の鉱石をどう活用するかが主な研究内容になっとるから、未知の鉱石となるとどこまで通用するか……」
「いや、完璧に解析しろとは言わないわよ……」
いくらなんでも、そんな無茶言えるわけないじゃない……。
ある程度解析できて、その結果が技術応用できれば万々歳よ。
あ、でも、この国じゃあまり鉱石は取れないんだっけ……。
「まあ、ともかく頼むわね」
「うむ、任された」
フィーネはあたしから鉄板を受け取り、腰からいつも下げている袋の中にしまい込んだ。
「次は四天王とやらだけど……。ホントに四天王なのそいつ？」
「実際に見たけど、正直自称以上ではねぇなぁ」
「うん。僕も普通の子供にしか見えなかったなぁ」
隆司と光太、各々頭やら頬やらを掻きながら自信なさげにそういった。
ええっと、隆司の見立てじゃドワーフなんだっけ？　見た目小学校低学年くらいだとか。
「アルルはどう？　四天王に見えた？」
「うぅ～ん～。私にも～、ちょっと四天王さんには～、見えませんでしたね～」
やたら間延びした変なしゃべり方にイライラしつつも、あたしは

一つ頷いた。
三人からそう思われる以上、魔力やなんかの数値も人並みってことかしら。

「フィーネ。ドワーフって、魔族にいるの？　普通は亜人とかそういう扱いだと思うんだけど」
「その“どわーふ”というのがすでに初耳なんじゃが」

ああ、そうなのね。同じ名前とは限らないし、特徴言えば分ってもらえるかしら？
と思ってドワーフに対する一般的な認識を話してみるが、結果は芳しくなかった。

「やっぱり知らんのぅ。少なくとも、アメリア王国内で同じ特徴を持つ生物はおらんな」
「そう……」

となると、魔王軍に味方してるとかそういう感じなのかしら？

「一応、ドワーフみたいな亜人も魔族として扱われる作品はあるよ？　たぶん、ケースバイケースだと思うけど」
「だからって、生まれまで魔族ってわけじゃないでしょう？」
「うーん、そうだね」

光太の言葉に反論しつつも、ちょっと意外性を感じる。
ドワーフとかが魔族として扱われるって、ちょっと信じられないわね。
まあ、それは置いとこう。今は考えなきゃならないことが山ほどある。

「で、そのちびっ子を回収に来た騎士だけど……腕前としてはどんなもんなの？」

自称四天王を回収しに来たってことは、逃げ切れる自信あってのことでしょう。

馬に乗ってたらしいけど、魔導師がいることを考えるとアドバンテージは少な目よね。後ろから狙撃すればいいんだし。

「うーん……。戦ったのは一瞬で、相手がアスカさん。その上アスカさんは跳んでたから、正直どこまで強いのかは」

「でもアスカさんを片手で持った剣で弾き飛ばすくらいに膂力はあると思うぜ？　空中とはいえ、成人女性一人分だ。相当だろう」

光太の言葉に、隆司が補足情報を入れる。

でも参考になるのかしらそれ。

「だって魔族でしょう？　身体能力だって人間と桁外れじゃ……」

「あ。忘れてた。その人間もどっちかっつーと亜人だぜ？」

「はい？」

「え？　そうだった？」

なにそれ。光太も初耳みたいだけど？

胡散臭げに見てやると、隆司は肩をすくめた。

「まあ、じろじろ観察したわけじゃねぇけど、しっぽも耳もなかったぜ」

「あ～、それ私も見ました～。あの騎士さん～、お耳も尻尾もなかったですよ～？」

隆司を後押しするような、間延びしたアルルの声。

うーん、隆司一人ならともかく、アルルも同じこと言ってるってことは、少なくともその女騎士は獣人じゃないってこと？

「アルルさん、よく見てましたね！　すごいです！」

「エヘヘ～♪」

ただ、光太に褒められてだらしなく笑むアルルを見てちょっと考えを改める。

まさか、光太に褒められたくて隆司に同調したんじゃないでしょうね……？

「じゃあ、その女が獣人系じゃない魔族だとして……。隆司、それに該当する魔族って何がいるの？」

「いや正直それだけじゃ……」

……そりゃそうよね。見た目が人間ってだけじゃ、まともに案も。

「まず見た目が人間で有名なのはヴァンパイアだろ？　女だってことを考えるとサキュバスかもしれねぇし、顔上半分が隠れてたから単眼系のサイクロプスってこともありうるよなぁ。ひょっとしたら角が折れたオーガ系？　肌の色は普通に見えたけど……。ああ、ゴーレム系の可能性もあるよな、機械作ったリアラの部下なんだし。場合によっちゃドッペルゲンガーかもしれねぇし、人間の死体に魔族の魂が憑依したゾンビってことも……。ああ、騎士だしデュラハンかも？」

って、多いな候補!?　ぱっと出ただけでそんなにいるの!?

何やら悩みだす隆司になんて声かけたらいいのかわからず、思わず上げた手を所在なさげにさ迷わせるしかないあたし。

「……ええっと。ごめん、ちょっと待ってもらっていい？」
「んー？」
「とりあえず、候補が多すぎるのはわかったわ……。でもそいつらも人間より身体能力上ってことなの？」
「まあ、魔族として扱われる漫画とかじゃだいたい人間より強いな」
ああ、そうなんだ……。世界って広いわね……。
「じゃあ、その辺の確認はまた会った時ってことで……」
「えー？」
正直ほっとくと、いつまでも人間系の魔物を列挙しかねないし。
何やら不満そうな隆司を置いといて、あたしは次の話題に入った。
「で、陸上拠点とやらだけど……。それがアイティス大移動の原因で間違いないのかしら？」
「一応、俺たちは原因と睨んだけどな」
「ギルド長さんの話だと、一週間くらい様子を見て、アイティスが元の場所に移動したら亀のメカが原因で間違いないって言ってたよ」
「ちゃっかりしてんよな……。移動が確認できるまで依頼料は払わねぇって言うし」
ははは、と乾いた笑いを上げる隆司。
いやそれは契約内容をしっかり確認しなかったあんたの落ち度でしょう？
その手の口約契約なんて、信じないのが基本よ？
「なら、例の生き物もアイティスの移動につられた可能性があるわね……」
「あん？　ああ、ネズ――」

「ほらっ！　連中は、なんか危険を察知したら大移動を開始するとか生意気な習性があるじゃない！？」
「いやだからネズ――」
「ならばぁ！！　危険を察知して王都の中にまで逃げ込んでくるのが自明の理！　公明の罠！」
「公明の罠て」
「なんじゃ？　何の話じゃ？」

不思議そうなフィーネに、さっきまであきれ顔だった隆司がやさしい顔していらん説明しようとする。

「いやなに。真子はネズ――」
「イ〝エ〝ァァァアアアアア！！！」
「――ミが苦手って話だよ」

あ、チクショウ！？　奇声上げて紛らわそうとしたのに！？
でも、あたしの弱点を聞いたフィーネの反応は意外なものだった。

「え、マコもか？」
「え？」

マコ“も”？
恐る恐るフィーネの顔を見ると、恥ずかしそうに顔を染めながらはにかんだ微笑を浮かべた。

「いや……私もネズミが苦手で……」
「同志よー！」
「きゃー！？」

思わぬところに同志を発見した嬉しさのあまり、あたしは勢いよ

くフィーネに抱きついた。
そのまま柔らかなほっぺに頬ずりしながら、思いのたけを世界に対して叫んでやる。

「そうよね、そうよね！？　あんな不愉快で冒涜的な小生物なんて滅ぶべきよね！？」
「え、え？　いや、さすがにそこまでは……」
「なんであんな生き物が存在するのよ！？　しかも普通に街中で見かけることもあるし！　実験に使うならともかく、地域によっては食うところもあるとか！？　意味わかんねーし！！」
「ふえーん！？　リュウジー！　マコがこわれたー！」

なぜか半泣きながら隆司に助けを求めるフィーネ。
なによなによー！　同じ生物を嫌う物なんだし仲良くしましょうよー！
そんなフィーネを見た隆司は、何やらニヒルな笑みを浮かべた。

「ふ、仕方ないなフィーネは」
「いや、助けてあげようよ」

光太の言葉を無視して、隆司は何やら右手を高く掲げた。
？　何する気よ？
不審なあたしの視線に、隆司は不敵に微笑みながら自信満々に宣言した。

「いでよツッコミの申し子！　サンシタァァァァァァ！！」

高らかな叫び声と同時に、パチィィン！と勢いよく指を鳴らす隆司。
あたしはフィーネを抱きしめながら覚めた眼差しで隆司を見てや

る。

「あんたバカでしょ？　そんなんで人が一々出てくるわけ」
「呼んだでありますか？」
「「出てきたし！？」」

驚きの声はあたしと、呼んだ張本人の隆司のものだ。
がらりと扉を開けたサンシターは不思議そうな顔でこっちを見ている。
驚愕冷めやらぬあたしたちに苦笑しつつ、光太が口を開いた。

「サンシターさん、今日はどうしたんですか？」
「ええ。今日も一応非番でありますので、せっかくだから本でも読もうかと」
「本？　何の本よ？」

いち早く復帰したあたしは、抱きしめたフィーネを膝の上に座らせながらサンシターを怪訝な顔で見る。
一応の騎士が魔導師団詰め所の本を読むって、どういうことよ。

「ええ。料理の本を少し」
「そんなもんまであるの！？」
「う、うむ。この魔導師団詰め所には、この国で発行された本のほとんどが蒐集される故、そういった雑学系の本も集まるのだ」
「この国で～、本を出す条件の一つが～、魔導師団の検閲を通ることなんですよ～」

ああ、そうなのねー。魔導師団が出版まで担当してるんだ……。
納得しつつ、あたしはフィーネの長い髪を手櫛で梳いてやる。

「ふにゃっ」

フィーネは驚いたような声を上げたが、同時にさっきまで硬かった体から力が抜けていくのを感じた。気持ちよさそうに喉まで鳴らしてくれている。

ああ、いいわねー。あたしも妹が欲しかったなぁ……。

「にしてもサンシター、お前料理もできたんだなー」

「ええ。こちらに来て五年になるでありますが、女性にご縁がなくてずっと自炊していたのであります」

「いや、そんな悲しい自己申告はいらん……」

「すごいですね、サンシターさん。僕も料理できるように……」

「できなくても～、私が作ってあげますよ～♪」

「え？　そんな、悪いですよ」

「お前はそれ以上スキル身に付けるな！　そしてお前も媚を売るな！　やめろそれ以上面倒なフラグ立てんな！」

何やら隆司が大変そうにツッコミしてるけど、あたしは知らん顔でフィーネの髪の毛をいじって遊ぶことにする。

たまにはいいでしょ？　ポジションチェンジしてもさ。

No.26：side・mako「軍師様に通達！」（後書き）

そんなわけで今回は役得な真子ちゃん。またの名を情報整理のターンとも言います。

軍師キャラいないだけでこういう回が作れる……素敵……！

次も真子ちゃんのターン。久しぶりに野郎が増えます。わー、うれしくねー。

No．27：side・mako「光輝石と金属片」

あたしとフィーネは、鉱石を専門とする魔導師のところへ向かっていた。
あの後、続々と増える光太のフラグに対応しきれなくなった隆司とサンシターは放置。
なに？　逃げただろうって？　その通りだけどなんか悪い？

「あ、真子ちゃん！」

どうやらオーゼさんの話を聞き終えたらしい礼美が、ジョージとヨハンさんをひきつれて現れた。
ヨハンさんはともかくなぜジョージ？

「真子ちゃんたちのところに行こうと思ってたから、ちょうどいいかと思って」

あたしの質問ににへーっと答える礼美。たぶん強引に引っ張ってきたんだろうなぁ。ジョージはなんか渋い顔してるし。
ヨハンはいつも通りの笑顔だ。信仰心的な意味で。

「真子ちゃんたちはどこに？」
「昨日、隆司が持ち帰った変な金属を見てもらいに」

今はフィーネが持っている金属片。うまく解析できればいいんだけど……。

「私もついて行っていい？」
「別にいいわよー」

二つ返事で了承し、あたしは礼美たちも伴って鉱石魔導師のところへ向かうとする。
魔導師団詰め所から遠く離れ、なおかつ地下への階段を下って行った。
鉱石専門らしく、どうやら地下暮らしらしい。
しばらく階段を下りていくと、ようやく研究室の入口らしい場所へとやってきた。

「……で、ここがその魔導師の？」
「うむ」

あたしの質問にフィーネがうなずき、どんどん扉をノックし始めた。

「ギル！　ギルベルト！　起きておるか！？」

大きな声を上げ、遠慮も呵責もなく大きな物音を立てる。
しばらくは無反応であったが、やがて扉の向こうから何か熊の唸り声のような声が聞こえ、扉がゆっくりと開いた。
中から顔を見せたのはいかにもむさくるしいおっさんだ。無精ひげは手入れされていないうえに、髪の毛も伸ばし放題らしく、前髪が目元までかぶっていまいち表情が読みづらい。
でも、今まで眠っていたらしく、眠そうな声をあげながらフィーネの顔を見つめた。

「なんだ、お嬢……。そんな大声あげんでも聞こえてるよ……」
「嘘つけ。私が来るとだいたい寝とるじゃろお前」

呆れたようなフィーネの声。寝てるってことはサボり魔？

フィーネは一つため息をつくと、あたしたちの方を振り返った。
「紹介しよう、マコ、レミ。この男が、魔導師団唯一の錬金術師のギルベルトじゃ」
「あん？」
フィーネの紹介に預かったギルベルトさんは、怪訝そうにあたしと礼美の顔を見つめた。
「なんだなんだ。魔導師団の新入りか？」
あれ？　この人、あたしたちのこと知らないの？
「ギルのおっさん、またこもりっきりだったのか？」
「ギルベルト殿。この方たちは此度召喚されました、勇者様たちです」
そんなギルベルトさんに、ジョージとヨハンさんが説明してくれた。
「勇者ぁ？」
でもギルベルトさんは相変わらず怪訝そうだ。
「なんだ。そんなもん召喚する必要があるのか？」
「いや、魔王軍と戦争してるでしょう？」
「ああ。それがどうした？」
あたしがそういうと、何を当たり前なという顔で一つ頷くギルベルトさん。

え、まさか？
あたしの疑問を体現するように、礼美が恐る恐る問いかけた。
「じゃあ、その前線が王都付近まで来てるということは……？」
「なんだとぉ！？　そいつはどういうことだ！？」
うわ、やっぱり知らなかった。
やっぱりか、という顔で呆れているフィーネがまたため息をついて、ここ十日くらいの出来事を話し始める。
「――というわけで、この二人を含めた四名の勇者が召喚されたというわけじゃ」
「なんてこった……」
フィーネからの説明を聞き終えたギルベルトさんが恐れおののいたような声を上げる。
まあ、魔王軍がもうすぐそこまで迫ってるなんて聞かされればねぇ……。
「もう半年もたっちまってるなんて……」
「え、そっちなんですか！？」
珍しく礼美の方が先に驚いた声を上げた。
とはいえ、あたしも同じ気持ちだ。なんでそっちなのよ。
「おい、レーテ！　教えてくれてもいいだろう！」
「ん？」
誰？
不思議に思って覗き込むと、中には一人のメイドさんがせっせと

研究室を掃除している姿が見えた。
ごちゃごちゃと机の上やら床の上やらにいろんな石や道具の詰まった箱を見る限りではまさに研究室といった感じだが、妙な清潔感がある。たぶん、メイドさんが埃とか吹いてくれているからだろう。
今も箒をかけているメイドさんが、ギルベルトさんの声に振り返った。
……って。

「メイド長!?」
「これはマコ様。ようこそ、錬金研究室へ」

驚きに思わず声を上げるあたしに恭しく頭を下げてくれるメイド長。
え、なんでメイド長がわざわざ……？
そんなあたしの疑問をよそに、メイド長は涼しげな眼差しをギルベルトさんに向けた。

「教えても、どうせ“今日がいつなんてどうでもいいじゃないか”といって、私の話を聞かないじゃありませんか」
「い、いや、それはそうかもしれんが」
「だいたい、一度だって私の話を聞いてくれたことがありますか？きちんと整頓してくれと言って私が整頓しても、半日もすれば元の木阿弥に戻しますし」
「いや！　某にとってはこの状態が一番機能的なんだよ！　どこにあるかわかってれば、それでいいじゃないか！？」
「ダメです。フィーネ様が転んで大けがを負われたこと、忘れたとは言わせませんよ？」
「そ、そんなことあったか……？」

まっすぐに見つめてくるメイド長から、ツイッと視線をそらすギ

ルベルトさん。フィーネの方を見ると、怒った表情でうなずいてる。
ああ、そういうことがあったの……。
それにしても、いかにもなダメ人間なのね……。見た目からしてダメっぷりがにじみ出てるけど。
でも……。

「まったく。私がいないと、本当にダメなんですから」
「いや、そんなことは」

なんて言っちゃうメイド長は、なんだかとてもうれしそうで。
女としてのあたしは、そんなメイド長が少し羨ましく思えてしまった。
女の幸せって奴かー。世話好きだったら、この環境は垂涎ものよねぇ。ダメ人間もセットならなおさら。

「礼美。あんた、メイド長を見て何か思うところは？」
「え？」

こそっと、ためしに礼美に話題を振ってみる。
もちろんフィーネや男どもには聞こえないようにだ。
礼美はメイド長の姿を見ると、ゆっくりと息をついた。

「メイド長さん、幸せそうだよね……」

羨望の眼差しでメイド長を見つめる礼美。
うん、こういう感情自体がないわけじゃないのよねこの子。
なのになんで、フラグに一向に気が付かないのよ……。

「そ、そんなことより！　今日は、何の用だ、お嬢！」

と、何やらギルベルトさんが強引な話題転換を図り始めた。
メイド長との正面からの言い合いに不利を感じたのかしら。今更過ぎない？
大けがしたことに関して忘れたふりをされたフィーネはご立腹だったけど、それでも今の用事を忘れるほどじゃないらしい。

「今日は、ちと見てもらいたい金属があってきたのじゃ」
「金属？　おいおい、ここ以外に金属を扱ってるところなんてほとんど……」
「今日持ってきたのは、魔王軍が使用しとると思わしき金属で――」
「魔王軍!?　何故そいつを早く言わない！　さっさと見せてくれ！」

フィーネが魔王軍、と言ったとたんに目の色を変えて……目は見えないからなんとなく雰囲気だけど、ともあれ声を荒げ、フィーネの両肩をつかんで揺さぶり始めた。

「ちょ、ま、落ち着かんか!?」

いきなり揺さぶられて焦るフィーネだけど、何とか腰の袋から例の金属片を取り出した。

「こ、これじゃ」
「こいつか！」

ギルベルトさんはフィーネの手の中から金属片をむしり取り、素早く体をひるがえして研究室の隅を占領している巨大な箱へと近づいて行った。

「いたた……。相変わらずじゃな……」

「大丈夫ですか？　フィーネ様」
「うむ、大事ない……」

いきなりむしりとられて、指を少しこすってしまったのか指をさするフィーネにハンカチを差し出すメイド長。傷ついていないみたいだけど、大丈夫かしら？
まあ、ここはメイド長さんに任せよう。あたしは箱の中に金属片をセットしているギルベルトさんの背中を追いかける。

「で、ギルベルトさん。この箱は？」
「こいつか！？　こいつは、某が開発した鉱石分析器よ！」

自慢げに言っていきなり始まる専門的な解説。
マナ波長がどうの、鉱石比率がこうの。

「――というわけだ！」
「なるほど」
「おいおい、ギルのおっさん。こいつ基本的に魔法のことは素人なんだぜ？　そんな説明わかるはずが……」
「つまり特定の波長を浴びせて、鉱石が反射してきた波長を解析することで分析するってことよね？」
「その通りだ！」
「うそぉ！？　わかんの！？」

ジョージが驚愕の声を上げるけど、別に全部理解してるわけじゃないわよ？
単純に要点を抜き出すのが得意なだけよ。

「真子ちゃんはね、私と違ってこういう数学的なことを考えるのが得意なんです！」

「なるほど。さすがレミ様の御友人」

ちょっとうしろ。人のことを自慢するのはいいけど、あんたの隣に立っている奴はあんたの友人というステータスしか見ない奴だからね？

「でも、動力は何？　まさか、ギルベルトさんの魔力？」

「某の魔力は大きめだが、さすがにこいつを動かすには足りん！　だからこいつには複数の光輝石（マナクリスタル）が組み込んである！　それがそれぞれの動力となってるのさ！」

「光輝石（マナクリスタル）？」

初めて聞く言葉に首を傾げる。今までそんな言葉聞いたこともないんですけど。

「光輝石（マナクリスタル）は、ギルが発見した新しい鉱石の一つでして。魔力をため込んだり魔法を込めたりすることができる鉱石なんです」

「あ、こら！？　人のセリフを取るな、レーテ！」

メイド長の説明に、ギルベルトさんが悔しそうな顔をする。

でもちょっと待って。魔法を込めたり？

「それってどういうこと？　魔法武器とかあるわよね？　あれと何が違うの？」

「魔法武器との最大の違いは、魔力供給の必要があるかどうかじゃな」

「魔法武器は人間が魔力を込めなきゃ魔法が発動しねぇけど、光輝石（マナクリスタル）を使えば、人がいなくても魔法が発動できるんだよ」

「ちょ、お前らまで！」

ああ、なるほど……。時限方式がとれるかとれないかなのね。

「それから！　光輝石（マナクリスタル）は魔力を込めることができる！　この性質を使えば、さほど魔力を持たない人間でも強力な魔法を使うことができるようになるんだ！」

何やら大声で、光輝石（マナクリスタル）の性質を説明してくれるギルベルトさん。

そんなに説明したかったのかしら。

でもこれは結構大きい点よね。つまり光輝石（マナクリスタル）があれば、魔力を外に出せない隆司でも魔法が使えるようになるってことよね。

「でも、そんな鉱石なら、結構貴重よね？　そうそう発見できないんじゃ……」

「フッフッフッ。光輝石（マナクリスタル）にそんな心配は無用！　何故なら！」

「光輝石（マナクリスタル）は人のいるところでしか発見できないのです」

「レーテェェェェェェェェ！！！」

またもセリフを取られたギルベルトさんの慟哭が響き渡る。

でもなんか普通の鉱石に見られない特徴ねそれ。

「人のいるところでしか？」

「う、ううっ！　光輝石（マナクリスタル）は！　人の魔力が結晶化したもの！　だから、ある程度以上人間が暮らしていて、きっかりとした範囲が定まっている場所でなければ発見できないんだぁ！！」

今度こそセリフを取られまいと、大声で叫ぶギルベルトさん。

しかし人のいるところでしか取れない鉱石、ねぇ……。

「ひょっとして、時間をおけばまた回収できる？」

「うむ」

わーお、永久機関。

「当然だけど、ある程度使えば摩耗しちまう。魔力がたまらなくなったり魔法が込められなくなったりな」

つまり電池みたいなものなのね。魔力版電池。電池と回路が一緒くたになってるってことかしら……。

「ちなみに、ある程度以上の人間ってどのくらい？」

「！　だいたい百人以上いて、しっかりと円形の範囲で町が発展していれば極小の光輝石（マナクリスタル）が発見できるぞ！」

あたしが質問すると、フィーネとヨハンにセリフを取られていじけていたギルベルトさんがパッと顔を明るくして答えてくれた。

なんか子供がそのまま大人になったみたいな人ね……。

「じゃあ、この王都なんかだと結構な大きさの光輝石（マナクリスタル）が発見できるんだ」

「ああ！　町の中心の地下だとかなりのものが見つかるぞ！　それ以外にも、王都くらいの大きさがあれば、王都内のどこでも見つけることができる！」

「確定ではないがの」

取り放題……ってわけじゃなさそうだけど、便利そうね。光輝石（マナクリスタル）使って何か作れないかしら……。

「あ、分析器から紙が出てきましたよ！」

話に加われなくて若干さびしそうにしていた礼美が、鉱石分析器

から吐き出される紙を見て、嬉しそうな声を上げた。
紙に結果が書かれて出てくるって、あたしたちの世界の分析器とそんなに変わらない精度ってこと？　魔法スゲー。

「よし！　もう出たか！」

ギルベルトさんが分析器が吐き出した紙を毟り、嬉々として中身を読む。
でも途端にその顔が無表情になった。

「……なんだこれは」
「なに？　どうしたのよ？」

あたしが声をかけると、ギルベルトさんは無言で書かれた内容を見せてくれる。
分析器に書かれていたのは、紙を半分に割るようにまっすぐ書かれた線だった。
フィーネとジョージもあたしの後ろから覗き込んで紙を見る。
そして怪訝そうな声を上げた。

「なんじゃこれ？」
「おい、ギルのおっさん。壊れてんじゃねぇのか、この箱」
「そんなことはない！　ついさっきまで、しっかり動いていた……」

はっきりと大声でそう宣言するギルベルトさんだけど、後半はしぼんでいった。
この結果に納得がいってないのね。まあ、当然だと思うけど。
たぶん、この分析器は線の揺れ幅で鉱石の成分を示すものよね？
それが一切ぶれずに一本の線を描くってことは……。

「……ねえ。分析器が吐き出した魔力の波長が、一切反射されなかったってことはあり得ないの？」
「なに？」
「分析器は反射した波長を解析するのよね？　こういう結果が出たってことは、波長を解析してないってことじゃない。なら、波長が一切反射されてないってことにならない？」
あたしの疑問に、ジョージが小ばかにしたように鼻を鳴らした。
「バカいえ。金属が魔力を反射しねぇなんてあり得るかよ」
「じゃあ、この結果はどう説明するの？」
「だから、分析器がどっか壊れてんだろ？　早く直せよギルのおっさん」
つまらなさそうにジョージが言うが、ギルベルトさんはそれに答えず無言で別の金属片を分析器の中にセットした。
今度は数分と立たずに結果が表示される。
カクカクと機敏に波打った線が描かれた紙が吐き出されるという形で。
「あ、あれ？」
「分析器は壊れとらんようじゃな……？」
「つまり、マコ様のおっしゃるとおりに、こちらの金属片が波長を吸収しているということでしょうか？」
ヨハンさんの言葉に、一同は首を傾げる。
ただ一人、ギルベルトさんだけがぶつぶつとつぶやきながら研究室の中をぐるぐる回り始めた。
「マコのいうとおりに波長を吸収するのか……？　ならばなぜ吸収

する？　波長を吸収するということは、そこに何か理由があるはずだ。さっき入れた金属との違いは？　含まれるのが鉱石だけじゃないのか？　だが――」

自分の世界に入り込んでしまったギルベルトさんの様子を見て、メイド長があたしたちの方に体を向けた。

「どうやらギルが自分の世界に入ってしまいました。今日は御引取ください」

「うむ。今回の一件、何か分かれば報告してもらえるように言っておいてくれるかの？」

「ええ、了解しました」

フィーネとメイド長の会話を聞きながら、あたしも考える。

今日はいろいろ収穫のあった日ね。特に光輝石（マナクリスタル）は結構デカい収穫だわ。

何か作れないか、明日からいろいろ考えてみよっと。

Ｎｏ．２７：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「光輝石と金属片」（後書き）

そんなわけで新しいおっさん登場！　なぜかコブ付きですが。
子供みたいなダメなおっさんと理知的な女性の組み合わせもおいしいと思うんですよ。
次回は隆司に戻りますー。修羅場じゃないのよ？

No．28：side・ryuzi「第二会戦、開始！」

光太のフラグ数が思いのほか多すぎることに驚愕した次の日、魔王軍の襲撃予告の狼煙が上がった。

その日は前回の時と違い、本当に予告だったらしく襲撃はなかった。残念。

「で、今日は間違いなく総力戦よね？」

そして前回の会戦からちょうど一週間。いよいよ第二次魔王軍侵略戦が開始されようとしていた。

今回は真子の提案で、相手よりも先に前線に到着している。作戦タイムが欲しかったらしい。

「なのに、肝心の騎士団長さんがいない。これについての釈明は？」

「申し訳ありません……」

真っ黒のオーラさえ見える真子に必死に頭を下げるのはアスカさん。

今日の会戦に当たり、なぜか団長さんは不参加となっている。非番らしい。

一応副団長さんは来てくれているが、本人曰く団長さんほどの力はないらしい。

「非番だからって引っ込む騎士団とかありなの？　ねぇ？」

「本当に申し訳ありません……！」

真子のいっそ清々しい笑顔だけど、禍々しさなら魔王並みだな。

「ええっと、真子ちゃん？　もうそんなもんで……」
「あんた、もしヴァルトが今回も出てきたらどうすんのよ？」
何とか光太が取り成そうとするけど、真子はヤバげな角度で眉毛を吊り上げて振り返った。コエー。
「いえ、それはおそらく大丈夫かと」
「大丈夫？　何が？」
副団長さんの言葉に、真子が怪訝そうに顔をしかめた。
「団長が非番の日の会戦は今回だけではありませんでしたが、団長の不在の時のヴァルト将軍は後方で指揮に徹していましたから」
真子の顔がまた一段と歪んだ。
バカじゃないのか？って顔つきだな。
「それはマジで？　冗談じゃなく？」
「はい。そもそも、ヴァルト将軍が顔を出すこと自体、最近は稀ですので」
「まあ、ここまで押し込めてりゃ、あのチート将軍なんて必要ないでしょうけど……」
真子は何かを考えるような顔つきになった。
もしヴァルトが出てきたら、俺たちが対処しないといけないんだろうけど、そうなると残った連中を騎士団の面々で相手しなけりゃならないわけか。
また少し前線が押し込まれるかなー。
「もし前線が王都に近づいたらどうするー？」

「負ける前提で話さない。こうなったらしょうがない、相手側に負傷者を増やして速攻で撤退させる方向で行きましょう」
「大丈夫かな……」

真子の作戦に、光太が不安そうな声を出す。
ただその不安そうな声には、作戦が成功するかどうかよりも相手への安否の方が透けて見える。

「大丈夫よ。最悪、騎士団が囮になって、あんたと隆司で潰して回ればいいんだから」
「お、囮ですか……」

余りといえば余りな真子の言い草に、アスカさんが冷や汗を流す。
まあ、使えない宣言されれば仕方ないか。
とはいえ、今まで負け続けの騎士団としては、反論もできないようで、真子の言い草に対してうつむいたりそっぽを向いたりするものがほとんどだった。

「まあ、囮作戦は最悪だろ？　とりあえずまじめにやってみて、適宜俺たちでどうにかする感じでいいんじゃねぇの？」
「そうね。じゃあ……」
「マコ様！　魔王軍がこちらに近づいてきています！」

物見役からの報告に、マコの顔が緊張する。
うっすらと地平線の向こうにこちらへと駆けてくる魔王軍の姿が見える。

「構成は？　ヴァルト将軍の姿は！？」
「現在確認されていません！　人数は二十名！」

ヴァルトがいないと聞いて、マコの顔が少し安心したように緩んだ。
とはいえ二十人かー。こっちの今日の人数は、俺たち四人を除いて二十六名ほど。ちょっとヤバいかなー。

「人数差がちょっと縮まってんな」
「そうね。騎士団一同！　無理しなくていいわ。光太と隆司が遊撃に回るから、怪我しないように踏ん張りなさい！」

真子の言葉に、騎士団の面々が雄叫びとともに手に持った槍を空に向かって突き上げた。
それと同時に、魔王軍の姿が視認可能なほどに

「キタ！　嫁キタ！　これで勝つる！！」
「嫁言うなぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

俺の言葉に反応して、ソフィアが怒鳴り声をあげる。
今回の魔王軍の構成は、物見役の報告通り二十名ほど。
四天王の姿はそこになく、代わりにソフィアの周りに彼女を守るように三人の魔族が立っていた。
うち一人に見覚えはあるな。一番最初の会戦の時に殿を務めた猫娘だ。
残りの二人は……。

「狐に、狼？」
「なにぃ！？」

礼美のつぶやきに反応して、狼獣人が大声を上げる。
声を上げた狼獣人は腰に三本ずつの刃がくっついた凶悪な剣を二振り、腰に吊り下げた軽装鎧姿。機敏な動きで、相手を一撃で倒す

のが得意そうだな。今は怒りか何かで、しっぽが分わっと広がっている。ちょっと面白れぇな。

その隣で、狼獣人の声にびっくりしたのはキツネ娘。今俺が羽織っているトウキの民族衣装によく似た着物姿で、俺のと比べるとやはり女性的なデザインだ。さすがに俺と違って黒いアンダーを着ている。レオタードかなんかだろうな。しかし尻尾がフルモッフで、枕にしたら気持ちよさそうだなぁ。

「この未熟千万なガオウを！　ヴァルト将軍と同じ、気高き狼と同列に扱うなど！　ヴァルト将軍への愚弄も同然！　訂正しろぉぉぉぉぉぉぉ！！」

「え、そこは怒るところでありますか！？」

今回は一緒についてきているサンシターが思わず突っ込むが、それに一切構わずガオウが大きく口を開けて宣言した。

「私は犬だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

……。

「ああ……いぬでありますかぁ……」

サンシターが困ったような声を上げる。

あのツッコミ師サンシターですら、すべてを放棄してしまうほどのいっそ堂々とした宣言……！　こいつ、できる……！　いやまあ、俺の思ってる意味とは違うんだろうけど、種族的な方向で。

立派なドヤ顔で尻尾を得意げに振るガオウ。ああ、あの表情はどことなく犬っぽいなぁ。

その背後では猫娘がやれやれといった風に首を振り、狐娘は顔を赤くしうつむき、ソフィアは掌で顔を覆っている。

きっと、向こうの一団の天然及び残念担当なんだろう。

「前回は事情により不戦であったが、今回は違う！　このガオウがいる限り、ソフィア様に指一本触れさせん！！」

ガオウはそう宣言し、腰にさげている爪のような剣を引き抜いた。

あ、名乗り上げ口上入りそう。

「我が名はガオウ！」

さすがに付き合いきれんし、もう我慢も限界ですたい。

そっとガオウの視界から隠れるように動き、光太の背後に回ってちょっと屈伸運動。

「我はソフィア様親衛隊の「ひょー！」斬り込み隊長！　我が爪の一撃を恐れぬ者からかかってこいぃ！」

「あ、ごめん。うちのフリーダム担当が今まさにあんたの頭上を飛び越えていった」

「なにぃ！？」

慌てて振り返るガオウの姿を眼下におさめつつ、俺は一直線にソフィアのもとへと跳んで行った。

「ひゃっはー！」

「くっ！？」

石剣を下に向け、ソフィアの眼前に勢いよく着地する。

ドオォォォォォンンン！！！

地面に叩きつけた石剣が想像以上の轟音を立てて、土煙が上がる。
残念ながらソフィアのスカート状の鎧が捲れ上がるのは拝めなかった。
ソフィアが土煙に隠れるのと同時に、鞘から刃が抜かれる音がする。

「はっ！」
「ハッハァ！」

風を貫く音と同時に現れたレイピアを勢い良くはじく。
衝撃とともに風が巻き起こり、土煙が晴れる。
凛々しい顔をしたソフィアが、二度三度と剣を引き、また勢いよく突きこんでくる。
それもまた石剣で弾き返し。

「セェイァッ！」

一歩踏み込んで斬り込む。

ガギィィィン！！

「くっ！？」

ソフィアの体が少し後方へ押し込まれる。

「く……ハァァァァ！！」

だが、裂帛の気合とともに全身の筋肉を躍動してソフィアが俺の体を押し返した。

「おっと」

俺は弾かれるままに後ろへ飛ぶ。

「クフフ、一週間ぶりだなぁソフィア！」

「気安く私の名を呼ぶな！　私は魔竜姫！　誇り高き、魔族の戦士！」

「じゃあ嫁って呼ぶわ。嫁ー」

「嫁言うなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

顔を真っ赤にして突撃してきたソフィアの刃を真っ向から受け止める。

「誰が貴様の嫁だ！　私の婿を自称したくば誇りを持って行動しろ！」

「失礼な。私は紳士ですよ？」

「出会いがしらに相手の太ももを堪能したがる紳士がいるかぁぁぁぁぁ！！」

もっともな言葉とともに、一歩下がったソフィアの無数の突きが俺の眼前に迫る。

スウェーで回避。耳元を鋭い刃の音が過ぎていく。

さらに一歩踏み込んど横薙ぎの一撃は、滑るように後ろに下がって回避した。

「く！？　ヴァルトから聞いていた動きと違うぞ、貴様！？」

「クフフのフ。一週間ですぞ？　何もしなかったわけがなかろう！」

そう。この一週間で俺は、団長さんから効率的な体の動かし方を学んでいた。

むやみに力を込めて体を振り回すばかりでなく、軽く脱力をすることを覚え、そこから瞬発的に力を込める方法を学んだ。

団長さん曰く、武術に関して完全に素人の俺は型やらなんかを覚えるよりは、力の使い方そのものを覚えたほうがいいんだとか。その方が応用が利きやすいとか。

「そう、もはや一週間前の俺はいない……！　男子、三日会わざれば、括目して見よ！　前のままだと思ったら、やけどするぜ！？」

「フン！　学習し、修練を重ねるその姿勢やよし！　だが、一週間を鍛錬に費やしたのが貴様だけだと思うな！」

「なに！？」

なんだって！？　ソフィアも何か鍛錬を積んでいたのか……！

当たり前だけど！

ソフィアはその大きな胸を張り、堂々とこう言った。

「私はこの一週間、ラミレスの指導の下……貴様のような変態と相対しても動揺しない心の強さを学んだ！」

「な、なんだとぉ！！」

ば、バカな！　そんな鍛錬を積んでいたなんて……！

俺はひとしきり驚いてから、小さく首を傾げて問いかけた。

「でもそれってつまり、武術的には何もしてないってこと？」

「うん……」

小さくつぶやいて、ソフィアはがっくり肩を落とした。

ああ、そんなにうつむかなくても……。

「ちょっとー。そこの親衛隊ー。早くこの子慰めてあげてー」

「落ち込ませた奴が言うなぁぁぁぁぁぁぁ！！　ソフィア様ぁぁぁぁぁぁ！！」

俺は後ろに振り返ってこっちを見ている親衛隊の連中に声をかけると、ガオウが声を張り上げながらこちらへと駆けてきた。

あとを任せて、俺は真子たちのところへ戻る。

「ただいまー」

「いや、ただいまじゃないわよ」

「どこから聞くべきなのでありますか……？」

ひきつったようなサンシターの顔に、俺は悩む。

やはりここは嫁がいかに可愛いかから語るべきか？

「あ、いえ。やっぱりよいであります。マコ様がすごいお顔になってるでありますので……」

サンシターの声に顔を上げると、怒ってるんだか呆れてるんだかわからない真子の顔と目が合った。

俺は静かにサムズアップしておいた。わかってるさ。嫁は可愛い。

真子はため息をつき、必死にソフィアを慰めている魔王軍をジト目で見つめた。

「なんなのよこれ。あんたがフリーダムになると周りまで感染すんの……？」

「人を病気みたいに言うなよ」

まあ、否定はしねぇけど。

ソフィアの周りでは、必死にソフィアの親衛隊たちがソフィアに慰めの声をかけていた。

「ソフィア様元気出すにゃー。大丈夫勝てる勝てる」
「そうです！　ソフィア様が本気を出せば、あの程度の男一ひねりです！」
「だ、だから、元気出してください……！」
「ううう……」
「いけますって魔竜姫様！　確かにあいつ強いですけど！」
「ヴァルト将軍が認めるだけはありますって！　あれに勝てれば、きっと楽勝ですって！」
「あの人なら、きっと魔竜姫様の全力を受け止めてくださいますよ！　だからファイト！」

親衛隊はもちろん、一緒についてきた魔族たちまでソフィアを励まし始めた。
慕われてるんだなぁ……。
ちなみにこっちの騎士団は、なんだか居心地悪そうに佇んでいた。
まあ、こんな展開になればなぁ。でも前回も似たような展開になってたべ？

「いや、前回とは少し違う気もしますが……」
「そう？」

アスカさんの言葉に首を傾げる。そこまで違うかなぁ。
なんて首をひねっていると、何やらそわそわしていた礼美が真子にこそこそと耳打ちを始めた。

「ねえ、真子ちゃん」
「なによ礼美？」
「今なら、この戦争をやめようって提案できないかなぁ……？」

ああ、そういえば元々はそういう方向性だっけ？

「あー、そうねぇ……。ねーちょっとー？」

真子が大声を上げてソフィアたちに呼びかける。

すると、少しだけ暗いままの表情でソフィアが顔を上げた。

「なんだ……？」

「もう戦いやめない？　ほら、なんか馬鹿馬鹿しくなってきたし。平和的にいきましょうよ」

「……そうはいかん！」

真子の停戦の提案に、しかしソフィアはしばしの沈黙を挟んで気丈に答えた。

「これは戦争だ！　戦争とは、どちらかの負けを持って終わりとなるもの……。我々も、貴様たちも、負けを認めてはいないはずだ！　ならばこの戦争はまだ終わらない！」

「だってさ、礼美。まずは相手の心を折らないとね」

「そんなぁ……」

残念そうな礼美の肩を、慰めるように真子が叩いた。

「ひょっとしたら、って思ったのになぁ……」

「残念だったな。戦いはまだまだつづくっぽいぜ？」

礼美と同じ思いだったらしい光太が、残念そうに溜息をついた。

まあ、嫁がやる気なんだ。こっちとしては、それに応えるのはやぶさかじゃないんだぜー？

そして両軍がにらみ合い、緊張が高まっていく。

光太はゆっくり剣を抜き、俺は石剣を肩に担ぎなおす。
向こうではソフィアがレイピアを構え、ガオウが改めて両手に持った剣を握りしめる。
それぞれの軍勢が武器を握り、一瞬空白が生まれたように無言となる。

「「――全軍、突撃ぃっ！！」」

真子とソフィア。二人の号令と同時に、戦いの火蓋が切って落とされた。

No.28：side・ryuzi「第二会戦、開始！」（後書き）

そんなわけで、第二回戦となります。
今回も隆司がフリーダム。こいつのこの系統のネタは割と浮かぶんだけどなー。
次回は真子ちゃんが一週間の成果を見せます。

No．29：side・mako「天星いずる」

互いの戦力をぶつけ合う総力戦。その様子はほとんど泥沼にしか見えないわ。

ほとんど二対一だっていうのに、こっちの騎士団は翻弄されっぱなし。

剣道三倍段って言葉があるはずなんだけどなー。

「ていやー！」

「ぎゃー！？」

あ、サンシターやられた。

「よおーし、次の奴に」

「まだまだぁぁぁぁ！！」

「ええっ！？」

あ、復活した。これで三回目ね。

もちろん、サンシターのように極端にやられやすいものがいる一方で、単体でも頑張っている人はいる。

副騎士団長と、意外なことにアスカだ。

副騎士団長は持ちやすい長さに切られた二本の槍を両手で巧みに操り、両脇から攻め込もうとしている魔族を蹴散らしてほかの騎士団の援護に向かおうとしている。

一方のアスカは、さすがに他の騎士団の援護に迎えるほどの余裕はないようだが、それでも二人の魔族を相手取ってほぼ互角の戦闘を繰り広げている。

「ひゃっはー！　この人強いよー！」

「今日は当たり引いたよー！」
「人が景品のような言い方をするな……！」

相手にしている魔族は妙に興奮しているようだが、こっちの準備が完了するまでは持つだろう。もうちょっと頑張ってほしい。

「おりゃー！」
「ぎゃー！？」

いやほんとがんばってほしい。サンシター、あんたこれで四回目よね、やられるの。

「よ、よし。今度こそ」
「まだまだぁぁぁぁ！！」
「ぎゃー！？」

復活で帳消しになってるのかしら、一応。

「そこをどけぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

ひときわ大きいバカ声に振り向くと、ガオウとやらが両手に持った爪のような双剣で光太に斬りかかっているところだった。

「ここを通すわけにはいかないよ！」

手に持った長剣で、暴風のような連撃をしのぐ光太。よく見ればすでに剣は風を渦巻いている。あの風で双剣を凌いでるのね。

「が、ガオウ君の邪魔を、しないでください……！」
「そうはいきません！　隆司君とソフィアさんの邪魔をさせません

！」

そのやや後方では、狐っ娘が魔法を乱射し、それを礼美が防御で防いでいるところだった。

ああ、あの狐っ娘、魔法使いか。完全詠唱破棄であそこまで魔法が連射できるってことは、実力的にはジョージかフィーネくらいあるってことかしら。魔力の大きさ分、二人よりは強力そうね。

しかし光太も礼美も、隆司の嫁発言に魔族との和解フラグを見てるみたいねぇ。

まあ、異種族間の恋愛が戦争終結のカギになるのはよくある話だけど……。

その隆司が勢いよく踏み込んで、ソフィアと鍔迫り合いの体勢に入った。

「フゥハハァハー！　この勝負に勝った暁には！　その鱗ペロペロさせてください！」

「わけがわからない！？　鱗なんか舐めてどうするんだお前は！？」

「しかも一枚や二枚じゃない！　全部だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「こぉぉぉぉとぉぉぉぉぉわぁぁぁぁぁるぅぅぅぅ！！！！」

そのまま涙目になりつつ、全力で隆司を弾き飛ばすソフィア。

さすがに同情するわねー……。あんな変態に目をつけられるなんて。

「にゃーん。ずいぶん余裕にゃーねー？」

はぁ、と一つため息つくと、隣から声をかけられた。

そちらに顔を向ける。

そこに立っているのは、白黒縞の猫耳と尻尾を生やした猫娘だっ

た。
　鎧を装着しない軽装姿で、盗賊か何かのような印象を与えてくる。節々に小さなポシェットのようなもの……正しい名前なんて言うのかしら？　ともあれ某スニーキングゲームの主人公が装備するような装備を付けている。武器っぽいものはないけど、ネコ科であることを考えると、爪も立派な武器か。
　さらにその後ろには、似たような恰好をした猫娘が二、三人立っていた

「……あんたは？」
「私にゃ？　私はソフィア様親衛隊、隠密担当！　ミミルちゃんにゃ！」
「そして！」
「私たちは！」
「ミミル様直属の隠密部隊！」
「「「「四人合わせて、キャットシスターズ！　よろしくにゃーん♪」」」」

　聞きもしないのにそう名乗り、四人で一斉に招き猫の真似みたいなポージングを取る。
　いったいどこに媚び売ってるんだろうこいつら。
　見てるのはあたしだけ――。

「あ、ちょっとかわいいかも！？」
「むかー！　人が相手してる時によそむくな！」
「ぎょえー！？」

　リザードマンを相手取っていた騎士が、こっちを向いて横っ面をはっ倒されていた。
　こっちの世界にも、隆司みたいな人間がいるのね……。

「まあ、それはおいておいて」

あたしは箱を横に置くような動作をしてから、改めて猫娘どもに向き直る。

「あいにく、あたしはあんたたちを相手にできるような能力はないわよ？」

「にゃーん。承知の上にゃーん？」

可愛らしく首を傾げたミミルとやらだが、目が欠片も笑っていない。

「でもでもー？　そういうのを放っておいて、勝利が手に入るなんて思ってないにゃーん？」

「追い詰められたネズミは、時として猫を襲うといいますもの！」

「そうしてできちゃった婚に追いやられた仲間たちは数知れず……」

「だから私たちは、あなたのような存在を放っておかないのです！」

「今明らかに不必要なカミングアウトが入ったわよね？」

猫とネズミの合いの子って、どんな魔族が生まれるのよ。

とはいえ、目をつける点はいいようだ。こっちにとっては悪い点だが。

ソフィアもガオウとやらも、理知的なしゃべり方をする一方で、基本的に戦うことしか考えないような脳みそ筋肉な点がある。

泣いたり嫌がったりしつつも、結局戦いを仕掛ける隆司に正面から対応するのがいい証拠だ。本気で嫌なら逃げるなり拒絶意志を表明するなりやり様もある。

それ以外の魔族も同様。何もしようとしない、武器も持たないあたしに見向きもしない。

そうしてほとんどの魔族が騎士団との戦いを優先して、棒立ち状態のあたしを放置した。あたしの思惑通りに。

そんな中で、こいつらはあたしの存在に気づいてアクションを起こした。いきなり襲いかかるんじゃなくて、声をかけてワンクッションまで置いてみせた。

なるべく情報を引き出したうえで、勝利するつもりだろう。戦場において、最も注意すべき手合いだ。戦争を制するのが、数でも、質でもなく、情報だと知っている。

「そういうわけだからー、おとなしくしてにゃん？　大丈夫！　痛いのは一瞬だから！」

「一々下いわね、このエロ猫」

「エロは褒め言葉にゃ！　見事悩殺して見せるにゃーよー？」

その言葉を合図にしたように、じりじりとあたしを包囲するように動き出す猫娘ズ。決して焦らず、確実に仕留める気だろう。３６０度完全に覆ってから、一度にかかってくる気かしら？

その一方で、明らかに隙を見せているようにも見える。ネコの俊敏性が備わっている……と思われるこいつらなら、あたしを囲って瞬殺するまで秒単位で終わらせられると思う。

待っているのだ。あたしが手の内を見せるのを。剣を持つ隆司と光太はともかく、情報量が圧倒的に不足しているのはおそらく、礼美とあたし。その内、一人孤立しているあたしの方が組し易いと考えたか。正しい判断ね。

……こういう手合いに対して、手の内を見せるのは本来最も避けなければならない状況だ。それが、切り札にもなりえるならばなおさら。

でも、正直周囲の状況はそれを許してくれない。ネコ包囲網もそうだけれど、騎士団の面々が思っていた以上に頼りにならない。

「ぎゃー！？」
「こ、これだけやれば……」
「まだまだだぁぁぁぁ！！」
「もうやだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？？」

いや、もうこれで通算七回はやられてるサンシターは置いておくとして。

アスカと副団長さんを除く騎士たちの能力が思っている以上にひどい。というより対人戦に明らかに慣れていないのが丸わかりだ。

一年負け続けてるんなら、そういうのに力入れときなさいよ……。

あたしはもう一つため息をついて、戦いが始まってから練り続けた魔法を解き放つことにする。

この状況を、確実に打開するために。

両掌を打ち合わせ、その間に野球ボール大の隙間を開け、魔法の名を紡ぐ。

「集え天星（サテライト・スターズ）」

聞こえた呪文に反応し、猫たちが身構える。

そしてあたしの呼び声に応じるように隙間に光がともり、そこから八つの光球が現れる。

現れた光球は、そのままくるくるあたしの体の周りを、衛星のようにまわり始めた。

「……にゃん？」

身構えていたミミルが首を傾げた。

てっきりこの光球で攻撃を仕掛けると思っていたのだろう。

だが、その予想では五十点。半分しか点を上げられないわよ？

あたしは小さく微笑むと、両の手をゆっくり広げた。

「囲え天星（フィールド・サークル）」

呪文と同時に、八つのうち四つが四方へと跳んでいく。光球はあたしを中心に、戦場を覆い尽くすように広がっていき、光球は半球型の結界を展開する。

でも、何も起きない。

「にゃ？　にゃ？」

いよいよ困惑し、結界を見上げるミミル。結界まで張って何も起きないんじゃ、当然よね？

ますます笑みを深めたあたしは、さらに呪文を唱える。

「刻め天星（サーチ&ロック）」

あたしの呪文に答え、結界を張った光球がゆっくりと光を強める。すると不可思議なことに、戦っている魔族たちの体に、何かの文様が浮かび上がって見えた。

まるで、ターゲットをロックするような、円と十字を組み合わせた模様が。

「にゃ！？」

自分の体に浮かんだその模様を見て、ようやくミミルの顔に焦燥が浮かぶ。

ほかの猫たちも驚くが、魔族たちは戦いに集中してそれに気が付いていない。

「く！？　これ以上は……！？」

「あ、こら！？」

猫娘のうち一人が、焦燥に駆られてかあたしに襲い掛かってきた。

とはいえ、遅すぎるわ。ロックされた時点で、あんたの動きはあたしの手の内よ？

「討て天星（ストライク・スター）」

呪文と同時に勢いよく飛び出した、あたしの手元にあるうち一つの光球が、猫娘の腹を強く打ち据えた。

「ぐ、がはっ！？」

そのまま猫娘は勢いよく空を飛び、ミミルが一っ跳びで回収した。

あら？　思っていた以上に威力が出たわね……研究の余地はまだまだあり、かしら。

あたしは想像以上の結果に満足しつつ、手元に残る光球の一つに魔力を込めて、空へと飛ばす。

「何をする気……！？」

「隔て天星（サテライト・シールド）」

これ以上邪魔させないために、残った二つの光球に命じ、近づくものを弾き飛ばすように設定する。

あたしの呪文を受けた光球は、あたしの体を中心にくるくると衛星のように回転し始める。

この状態の光球は、あたしが呪文を解除するか魔力が切れるまで、近づくものを弾きとば。

「これでどうだー！」

「ぎゃー！？」

ヒューン、ドガッ！

「ぎょえー！？」

「いやー！？　吹っ飛ばしたのに、吹っ飛んで戻ってきたー！？」

……うん。今飛んできたサンシターのように、敵味方の区別なく近づいてきたものを弾きとばすのよ。見境ないけど、確実なのよ。

あたしはサンシターの背骨が無事なのを祈りつつ、空へと飛ばした光球に、呪文を放つ。

「爆ぜよ天星（スプラッシュ・スター）！」

光球は一瞬強く発光し、砕け散り、数多の魔力の銃弾となって魔族たちだけを正確に撃ちぬいた！

「「「「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？？」」」」

突然の空からの強襲に、ほとんどの魔族たちが受け身も取れずに魔力弾で体を打ち抜かれる。

魔力弾だけあって、物理的ダメージはないだろうけど、痛みは本物よ？

「にゃ、にゃんにゃのよ……！？」

む。今の魔力弾の雨を回避したのかしら？　ミミルが恐れおののきながらも、あたしに攻撃しようと隙をうかがっている。

とはいえ、手の内をこれ以上さらすのはよくない。十分すぎるほど、あたしの技は見せたわよね？

ミミルにとどめを刺すべく、手元へと戻ってきた光球に魔力を込め新たな呪文を唱えようとし。
ふと、横を見ると。
「ふぬ、ふぬ！　なんで持ち上がらな……！？」
「あー……」
いつどのタイミングでそうなったのかは知らないし知りたくないけど。
尻尾に抱きついた隆司を必死に持ち上げようとしているソフィアの姿と。
抱き枕のようにソフィアの尻尾に抱きつき、その先端を口にくわえようとしている隆司（変態）の姿が。
「なにしてんだあんたわ撃ち滅ぼせ天星（シューティング・スター）ァァァァァァァァァァァァァァ！！！！」
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？？」
「キャァァァァァァ！！？？」
あたしは迷わず光球にため込んだ魔力を隆司（ド変態）に向かって解き放つ。
一瞬の発光の後、再び砕け、大量の魔力を収束した魔力砲撃が、一直線に隆司へと叩きつけられる。
余波でソフィアも被害を受けているけど、隆司（超変態）から助けてあげたんだから文句は言わないでほしい。
「隆司ィ！　あんた、一人でいったい何してんだゴラァ！　しまいにゃ、本気で消し炭にするわよ！？」
「ぐへぇ……」
足音も甲高く倒れ伏した隆司へと近づいていくけど、隆司の反応

が今一つだ。
　ん？と思って光球の防御指示を解除して、光球を使って隆司の体をひっくり返すと、半分意識を失っているような面をしていた。
　あれ？　まさか、魔力ダメージが弱点ってオチ？

「ソフィア様！　いったん引くにゃ！」
「く、くそぅ……って、え？　ま、まだやれるぞ！」
「ソフィア様がやれても、周りが無理にゃ！　よく見るにゃ！」
「ん？　あああぁぁぁぁ!?　い、いつの間に!?」

　あたしが思わずペチペチ隆司の頬を叩いて様子を確かめている間に、ミミルがソフィアに近づいて撤退を進言していた。
　ミミルのいうとおり、ガオウやそばにいた狐っ娘を除いてほとんどの魔族の動きが鈍くなっていた。戦えなくはないが、今や騎士団以下の動きだ。
　さっきの魔力弾のダメージが効いてるんだろう。

「い、いかん！　皆の者！　撤退するぞ！」
「「「「「お、お～……」」」」」

　慌てたような撤退指示に、覇気も薄げに魔族たちは答えて大急ぎ……っていうにはいまいちなスピードで撤退を開始し始めた。

「こっちは無理に追う必要はないわ！　どのみち、向こうの本隊にはヴァルト将軍（化け物）が待ってるんだからね！」
「「「「「お……おおおぉぉぉぉ！！！」」」」」

　まさかの魔王軍撃退に、騎士団の士気はダダ上がりだ。
　思っていた以上の戦果に、あたしが知らぬうちに笑みを深めていると、ふとミミルの姿が目に入った。

ミミルもあたしの視線に気が付いたのか、悔しそうな顔でこっちを見つめてきた。

「まさかのダークホースにゃ……。ここまで魔法に通じてるにゃんて……」

「まさかの撤退、残念賞ね。この間の拠点壊滅といい、そろそろ本気出していいのよ？」

「……拠点？」

ミミルはあたしの言葉に一瞬怪訝そうな顔になったが、すぐに敗走する魔族たちの背中を追って駆け出した。

「――――？」

あたしはそんなミミルの表情に、強い違和感を覚えるのだった。

Ｎｏ．２９：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「天星いずる」（後書き）

そんなわけで、ほぼ真子さんオンステージの第二会戦でした。
今回真子さんが駆使した魔法、でたらめに強力っぽいですが、良く考えると結構不便な魔法です。きちんとした支援を前提としております。
そのあたりの細かいことは、次回の祝勝会にて！

No．30：side・kota「初めての祝勝会」

二回目の、魔王軍との戦闘が無事勝利に終わって、僕たちは王城へと戻った。

騎士団の勝利の報告を、アルト王子もアンナちゃんもとても喜んでくれた。

「さすが勇者様ですわ！　ねぇ、お兄様！」

「ああ……。本当に、ありがとうございます……！」

アルト王子なんかは、目に涙をためて今にも溢れ出しそうになっていた。

聞けば、騎士団の人々がほとんど無傷かつ、堂々と戻ってくることは今までほとんどなかったみたいだ。

真子ちゃんは今回、騎士団が思った以上に役に立たないから早めに決着をつけたって帰り際にこっそり言ってたけれど、おかげで騎士団の人たちは無傷だったんだ。やっぱり真子ちゃんもすごいな……。

そのあとは、アンナちゃんの提案で祝勝会を開くことになった。

日も高いうちに戻ってこれたから、その日のうちにってことになって、メイド長さんをはじめとする従者の皆様がすごく忙しそうだった。

お手伝いしようかと思ったけれど、メイド長にはやんわり断られて、隆司に首根っこ引っ掴まれて連れ戻された。

「お前、今回の主役の一人が準備に回るのはいろいろおかしいだろ？」

とか隆司は言っていたけれど、僕はほとんど何もしてないんだけ

どなぁ……。

祝勝会は、王城の中の大広間で行われることになって、月が顔を見せるころには大広間中所狭しとたくさんの料理が並んでいた。

そして祝勝会の始まり。

「では……勇者の皆様の初勝利を祝って……」

アンナちゃんがグラスを掲げ、僕たちや参加者である貴族の皆さんもそれにならってグラスを高く掲げる。

「「「「「「乾杯っ！！」」」」」」

乾杯の音頭とともに、祝勝会会場は歓声に包まれていった。

そこからはもうてんやわんや。

何しろ次から次へと人が僕のところにあいさつに来るものだから、その対応に追われてしまった。

とてもじゃないけど料理を楽しむような暇もなくて、そもそも手に持った飲み物すら、乾杯の時の一杯だけになってしまった。

「勇者様！　此度の会戦、勝利おめでとうございます！」

「あ、いえ――」

「やはり勇者様が、此度の勝利に貢献したのですよね？」

「いえ、真子ちゃ――」

「しかし勇者様は物が違いますなぁ！　騎士団が一年も戦って、ほとんど勝利できなかった魔王軍をたった半月の修業で打倒せしめるとは！」

「いや、それは――」

「どうですかな、勇者様！？　ぜひ我が娘を嫁にもらってくれませんか！？　父親の私が言うのもなんですが、なかなかの器量良しで……」

「い、いえ！　そういう――」
「まあ！　笑わせますわ！　あなたのところの不器用な娘より、私のところの娘の方が勇者様にふさわしいですわ！」
「いえ、ですから――」
「何を言う！　私のところの――！」「いいえ、私の――！」「それを言うなら吾輩のところの――！」

ずっとこんな調子で、僕の周りには人が集まりっぱなしだった……。

メイド長さんが用意してくれたタキシードのせいかなぁ……？
別に派手じゃないんだけど、いい生地使ってるおかげか、少し輝いて見えるんだよね。
礼美ちゃんも何だか似たような目にあってるみたい。たくさんの人たちが押しかけて、いろいろ声をかけられてる。
でも、僕と違ってすぐそばにヨハンさんがいていろいろフォローしてくれてるみたいだから、少し安心かな。
隆司と、今回の本当の主役であるはずの真子ちゃんは……。
あ、よく見たら普通に料理楽しんでる！　ずるいよ！？
隆司も真子ちゃんもほとんどいつもの格好と変わらないけど、一応ドレスアップしてるのに！
で、よく見てたら、声をかけられたらなんか僕たちの方指差してる。
みんな隆司の誘導なの！？　僕も料理食べたいよ！？

「勇者様！？　いかがですか！？」
「あ、はい！？　なにがです！？」
「ですから――！」

なんて恨み言を言う暇もなく、時間は無情に過ぎていって……。
さすがに疲れたので、無理を言って人の輪を抜け出す。

いくらなんでも二十人を一度には相手できないよ……。
一人でふらふらとバルコニーまで逃げると、後ろから隆司がニヤケ面で追いついてきた。

「お疲れー。飯食う？」
「ああ、うん……」

隆司が持ってきてくれた料理を、やっと食べられた。
ああ、うん……。冷えてもおいしいよ……。

「大変だったなー。まさかあんなに人が集まるとは思わんかった」
「いや、うそでしょ？　一部、隆司が誘導してたじゃない」

白々しい隆司の物言いに、料理を食べつつ恨みがましい視線を送ってみる。
でも、隆司はそんな僕の視線を受けても涼しい顔だ。

「いやいや、あそこまで集まるのはほんと予想外だったんだぜ？」
「勇者様ですか？」って聞かれたら「あっちがそうですよ」って答えたけど」
「隆司だって勇者じゃない！　なんで僕だけ……」
「俺は飯食うのに忙しいし、嘘だって言ってねぇよ！　勇者かどうか聞かれたら、あっちだって答えただけだよ！」
「なにそれ」

隆司の言葉に、思わず苦笑する。
らしいなぁ。パーティーとかだといつもこれだよ。
学校行事の打ち上げとかやると、だいたい僕に人が集まってきて、隆司はご飯食べるのに集中してたなぁ。なんだか懐かしいや。

「そういえばさ」
「ん？」
「もう、二週間経っちゃったんだよね」
僕はバルコニーの手すりに手をかけて、うつむきながらそんなことを言ってみる。
隆司も手すりに腰を掛けながら、頷いてくれたみたいだった。
「ああ。そのくらいになるな」
「向こうはどうなってるかな？」
「時間が同じように流れてたら、大騒ぎしてるんじゃねぇか？　お前んとこのおふくろは過保護だから、捜索願くらい出てるかもな」
「だよねぇ。隆司のところは？」
「自分探しの旅に出たとか勝手に納得してるに違いねぇよ」
「何それ」
半目でそんなことを言い放つ隆司に笑い声をあげてしまう。
自分探しの旅なんてないだろうし、きっと心配してくれてるに違いないよ？
「おーい、野郎ども二名ー」
そういって上げようとすると、真子ちゃんの声が聞こえてきた。
僕は振り返る。
「おう。やっと巫女様引っ張り出せたか」
「まったくよ。ヨハンさんがいなかったらどうなってたやら……」
隆司と真子ちゃんがなんだかため息ついてるけれど、みんなが離したがらないのも納得かなぁ。

「ど、どうかな？　光太君」

少し疲れているのか、顔がこわばっている礼美ちゃんの姿は巫女姫様、なんて言葉がよく似合う、神官さんたちの着ている服装をそのまま華麗に仕上げたような意匠だった。

神官装束の意匠を失わないようにしながらも、華美になりすぎず、さりとて凡庸にも貶めず。

なんて言うんだろう。とにかく礼美ちゃんによく似合ってる衣装だった。

「あ、ああ、うん。似合ってるよ、礼美ちゃん」

「ホント？　隆司君、どうかな？」

「んー？　似合う似合う」

「そう？　えへへ……」

はにかんで礼美ちゃんが笑った。

なんだかほっとするなぁ。遠目で見ても、たくさんの人に囲まれてた礼美ちゃんは緊張してる様子だったから。

「隆司君も、それに光太君も！　二人とも、かっこいいよ！」

「え、あ、うん！　ありがとう、礼美ちゃん」

「俺の場合、柄変わってるだけだけどな、一応」

隆司はともかく、僕はかっこいいかなぁ？　普通のタキシードだと思うんだけど。

そんなことを思いつつ、自分の格好を見下ろしていると、隆司と真子ちゃんが連れ立って歩き始めた。

「あれ？　真子ちゃん、どうしたの？」

「そろそろ勇者様探して、貴族連中がウロウロしだすかと思ってねー」
「今度は俺たちが相手してやんよ。ちょっとゆっくりしてなー」
「あ、うん。ごめんね隆司」

思わず謝ると、隆司は何も言わず、振り返ることもなく、片手だけ挙げて答えてくれる。
いつもこうだよね。パーティーとかで僕が疲れてくると、何も言わずにさっきまでご飯食べてたはずの隆司が周りを巻き込んでゲーム始めて、僕がゆっくりできるようにしてくれるんだ。
感謝しても、し足りないよね。
僕は隆司に感謝しつつ、礼美ちゃんの方に向き直った。

「礼美ちゃんは、ご飯食べた？」
「あ、うん。少しだけ。こっちに来る途中、真子ちゃんがとっておいてくれた分を食べたよ」
「ならよかった」

あんなにたくさんあるのに、食べられないなんてかわいそうだもんね。

「……」
「……」

なんとなく、沈黙が舞い降りる。
でも気まずさとか、そういうのはない。
話題がないわけじゃないけど、何を話せばいいのか……。

「……こっちに来て、二週間くらいだね」
「……そうだね」

しばらくして、口火を切ったのは礼美ちゃんだった。
内容は僕が隆司に問いかけたのと同じもの。
「光太君は、こっちの生活にはもう慣れた？」
「うーん、どうかな？　言葉は、簡単なものなら覚えたけれど」
「私は……まだちょっとかな。ヨハンさんたちが、私のことを女神様の再臨って呼んでて、ちょっと気疲れしちゃう」
そういって、礼美ちゃんは仕方ないなぁって言う風に微笑んだ。
そっか、礼美ちゃんはそんな風に言われてるんだ。
「真子ちゃんは？　今日の魔法とか、すごかったけど」
「あ、すごかったよね！　じつはね、この間真子ちゃんと一緒に、錬金術師さんに会いに行ってたんだけどね」
「うん」
「その時に見せてもらった、光輝石（マナクリスタル）っていうものを参考にしたんだって！」
「まなくりすたる？」
「うん！　光輝石（マナクリスタル）っていうのはね――」
礼美ちゃんの説明を聞きながら、僕は考える。
やっぱり真子ちゃんも、どんどん強くなっていってるな。
隆司は言わずもがなだ。昨日の訓練なんかだと、複数人の騎士を相手取って善戦してた。手加減もうまくできるようになってきてるみたいだ。
それに引き替え……。
「――そうなんだ、すごいね」
「うん！　私も、少しだけど今までと違うお祈りとかできるように

――」

僕は、ダメだな。

剣の腕前には自信があったけど、アスカさんに比べれば大したことない。

魔法方面の才能も、魔力の燃費はいいみたいだけど魔術言語（カオシック・ルーン）をきっちり覚える暇がない。

何か特殊能力があるかといえば、それらしいものはない。

身体だって、普通だ。隆司みたいな、超人体質じゃない。

「――――強く、なりたいな」

「……え？」

あ、まずい。

「光太君？」

礼美ちゃんが心配そうに、僕の方を覗き込んできた。

隣に礼美ちゃんがいるのに、何言ってるんだ僕は……！

「ああ、いや、その」

僕は何とかごまかそうと言葉を必死に探した。

けど、じっと顔もそらさず見つめてくる礼美ちゃんに負けてしまう。

「……僕だけ、今のところあまり役に立ってない気がして……」

「そうかな？　今日だって、ガオウ君を立派に引き留めてたよ！」

「うん。だけど、僕よりアスカさんの方が強いから……」

言って僕は少し自嘲するように笑う。
そう。あの役割は、アスカさんでも問題はなかったんだ。
「それに、礼美ちゃんが守ってくれなかったらやられてたよ」
「そ、そうだけど……」
礼美ちゃんが一生懸命言葉を探すように、視線をあちこちに向け始める。
でも、見つからないのかだんだん表情が暗くなっていく。
ああ、くそ。礼美ちゃんを悲しませたくないから黙るべきだったのに、僕ってやつは……！
「こ、光太君が一番がんばってるよ！！！！」
一瞬。
何を言われたのか理解しきれなかった。
その小さな体に似合わない大きな声で、大広間中に響き渡るように声を張り上げた礼美ちゃん。
ギュッと目を瞑り、大声を出して恥ずかしいのか顔は真っ赤にして。
それでも必死に僕を慰めようとしてくれている。
「こっちの言葉だって、自分で覚えたし、いろんな人と仲良くなってるし、隆司君と一緒にハンターにだってなってるし！　そんな光太君が役に立たないなんてない！」

礼美ちゃんは立て続けにそう捲し立てた。
言い切って、ぜいぜいと息を荒げて、最後に僕の方を悲しそうに見つめて。

「だから……！　まるで、自分がいらないみたいな言い方、しないでよ……！」

泣きそうな声色でそういう礼美ちゃんの姿が、いつもより小さく見えた。

「礼美ちゃん……」

僕はそんな彼女を見つめて、拳を握って心配させないように力強く言う。

「ごめんね。ちょっとホームシックにかかっちゃったのか、ナーバスになってたみたい」
「光太君……」
「ありがとう礼美ちゃん。もう、大丈夫だから、顔を上げて」
「うん……」

まだ心配そうな顔をする彼女に、僕は柔らかく微笑む。
そして、決意する。
目の前にいる、この小さな女の子に心配をかけないために。
何も言わずに、ただ貪欲に。強くなろうと。

「――まあ、ご覧になられたように、当方の騎士と巫女はあんな感じの仲でして」
「嫁やら婿やら、そういう申し出は全部断る方向性なんスよ。申し訳ねぇッスけど」
「そ、そうなのか……」
「確かに、あれだけの仲を見せつけられてはのぅ……」
（（何があったかは知らんけど。光太ＧＪッ！！！！））

No．30：side・kota「初めての祝勝会」（後書き）

心配するな光太！　お前には、とびっきりのチート能力を用意する（予定）だから！　礼美にも同じような能力付くけど！

そんなわけでラブコメ回、今回は光太と礼美に焦点を……。

当ててみたはいいけど、こいつらが付き合ってないとか嘘じゃね？　書いてて自分の正気を疑う事態に。どうしてこうなる。

次回は二次会に移動。そして隆司は地獄を見る……。

No．31：side・ryuzi「よっぱらいたちの二次会」

宴もたけなわ、といった感じで祝賀会はつつがなく終了。

とはいえ、半ば貴族たちに光太と礼美、そしておまけ二人といった勇者の存在をアピールするために用意されたようなもの……らしい。少なくとも真子の奴はそういってた。

光太と礼美は終始貴族たちに絡まれっぱなしで、少し俺と真子で相手をしていたが、結局最後まで見合いやら許嫁やら恋人やらそういう話で持ちきりだった。

そこまでして勇者が欲しいんかおまいら。クーリングオフは効かないから、気がついたら一族郎党丸ごとハリウッドアクション映画みたいな大事件に巻き込まれても知らないよ？

まあ、それはともかくとして。結局飯も少ししか食えなかった光太と礼美のため、飛び入りで騎士団の打ち上げに参加させてもらうことにした。

こっちの方が気安いだろうし、飯も普通のものが豊富にありそうだという真子の判断だ。っていうかまだ続いてんのな。確か祝勝会が始まる前から飯だの酒だの詰め所に持ち込んでるのは見てたけど。

騎士団の詰め所には、騎士団のメンツはもとより、なぜか神官や魔導師まで詰め寄って大騒ぎとなってる。そういえば、祝勝会には貴族しか参加してなかったな。あぶれた連中がこっちに流れ込んだんかな。

詰め所の宴会は、俺たちの存在を快く受け入れてくれた。まあ、今回の勝利の立役者である真子が強引に輪の中心につれていかれたりしたが、その辺はご愛嬌だろう。

光太も礼美も明るく迎え入れられ、ようやっとまともな食事にありついている。祝勝会に出てきた料理に比べれば安っぽい気もするが、二人ともおいしいおいしいといってパクパク食べている。こういう宴会とかに出てくる料理って、質に関わらずうまく感じるもん

だしなぁ。
そして俺はといえば、詰め所の中にこれでもかと高く積まれた酒瓶片手に、初酒へとチャレンジしていた。
とりあえず、駆け付け一杯。ぐびー。

「っかー！」
「おお！　いける口だな、お前！」

もうすっかり出来上がってる騎士のおっさんが、バシバシ俺の肩を叩いてくる。
ちょっと痛いが、初めて飲んだ酒がそんなことを忘れさせてくれるくらいうまいのでよし！
いわゆる果実酒だろうか。果物の甘味の中に、アルコールの独特の風味が相まって何とも言えない味わいとなってる！　度数がどんなもんかは知らないけれど、これなら一杯とは言わず、一瓶でも行けそうだ！
……と、調子に乗ってパカパカ飲んでいたのは初めのうちだけだった。
なぜか？
……これは後で聞いた話だったんだけど、この宴会場に持ち込まれていたのはそのほとんどが酒だったらしい。
一応水もあったようだが、コップに注がれていたのはみんな酒なんだとか。
こっちの世界の飲酒ルールは知らないが、少なくとも向こうの世界じゃ俺も真子も、当然光太も礼美も酒なんか飲んだことはない。
つまり。
ほかの連中が酒を飲んだらどうなるか、全くの予想がつかなかったわけで。

「あっはははははは、あはっはははははははは！！！！」

「うぉ！？　なんだなんだ！？　いきなりおぶさるなよ光太！？　飯食ってたんじゃ」
「見てみて隆司！　あっはははははは！！！！」
「ん？　なんか面白いもんでもあったのか？」
「コップが逆立ちしてる！　あはははあっはははっはあっはははは！」
「え、どこにツボった！？　それのどこにツボったんだよ！？　ただコップが逆さにおいてあるだけじゃん！？」
「隆司の顔変だねー！　あっはははははははははははっはは！！」
「うるせぇ！！　どうせ目つきも顔つきも不良だよ！」
「アルルさんかわいいー！」
「脈絡なさすぎる上、なんでそういう思考に到達した！？」
「すぴー……」
「肝心のアルルさんは寝こけてるし！？」
「あはははははっはははははははっはー！！！」
「ぐえっ！？　ちょ、くび、しまっ……！？」

笑い上戸な上絡み魔な光太にひたすら抱き着かれ。

「えぇい、離れろ引っ付き虫がぁぁぁぁぁ！！」
「あついです～……」
「あぁ！？　って、礼美か。そりゃこんだけ人がいｒｙ」
「あつい～……」
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？？　バカバカ脱ぐな脱ぐな！？　ただでさえお前女神とか崇められてんのに、公開ストリップとかマジ勘弁！！」
「「「女神様ーの、ちょっといいとこ見てみたいー！！」」」
「「「ハイハイハイハイ、ハイハイハイ、キャー！！」」」
「煽るな酔っ払いどもぉっ！！　女性陣も……って、え！？　アス

カさんまで！？　満面の笑みでぇ！？　ちくしょう、ヨハン！　そいつらを締め上げろ！」
「レミ様！　レミ様が御脱ぎになるなら私も！！」
「何故脱ぐ！？　なぜお前まで脱ぐ！？」
「あ～つ～い～！！」
「脱ぐなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

脱衣癖があったらしい礼美を必死になだめ。

「真子ー！　真子ぉー！！　こいつなんとかしてー！！」
「……」
「なにお前、なんで今日の主役がそんな暗い顔で」
「……おうちかえゆ」
「あい？」
「おうちかえゆぅぅぅぅぅぅ！！！　もうやらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
「何がですか軍師様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？？」
「わんわんこわいいい

「びえええええええええええええんんんん！！！！！」
「え、マコ様！？　だ、だいじょぶでありますよ？　怖いのも、痛いのもないでありますよー」
泣き上戸かつダウナーな方向にスイッチが入ったらしい真子をサンシターに預け。
「あははははっははははっははははー！！！　礼美ちゃん可愛いー！　もっと脱いでー！」
「お前っ……！　そういうことは素で言ってくれよぉ！？　むしろ密室に二人っきりで放り込むぞ！」
「光太君に言われたのでー！　春日礼美、脱ぎますっ！」
「脱ぐな！　脱ぐなぁ！　今ここで脱ぐなぁ！　まだＲ－１８には早いだろうがぁぁぁ！！」
「びゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！　りゅうじこわいいいいいいいいいいい！！！！！」
「リュウ様！　あまり怒鳴らないでほしいであります！　マコ様がおびえているであります！」
「うすらやかましいわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！？？？？？」
ひたすら仲間たちの痴態をなだめさすって抑え込み。
気が付けば、月はとっくり傾いて、宴会場は死屍累々の地獄絵図と化していた。
俺は光太に引っ張られたり礼美に突き飛ばされたり真子に鼻水つけられたりした着物の片腕脱いで……というか肌蹴た状態でぐったりしていた。
「くー……すー……」
「むにゃ……」

そんな俺の目の前では、幸せそうな顔して光太と礼美が抱き合うように眠りこけている。
悪魔どもが……！　もう二度とこいつらには酒を飲まさねぇ……！

「無事でありますか？　リュウ様」
「サンシターか……」

この二人をどうしてくれようか、ほの暗い思考で考えていると、横合いからサンシターが声をかけてきた。
さっきまでずっとかまっていた真子の姿が見えないが……。

「マコ様でしたら、奥の仮眠室へお連れしたであります」
「そうか……」

詰め所だし、仮眠室くらいあるか……。じゃあついでにこいつらも放り込んでおくか。
サンシターの案内で、仮眠室まで光太と礼美とを担いで行き、せっかくなので一つのベッドに二人一緒に放り込んでおいた。
翌朝起きて、朝一に異性の顔を見て腰を抜かすがいいわ。

「リュウ様、大丈夫でありますか？」
「ああ……？」

クツクツ笑いながら詰め所の中へと戻った。ほかの連中は……このまま雑魚寝でいいか。ヨハンが全裸だったり、その下にジョージがいたり、アスカさんが酒瓶かかえて部屋の隅っこで丸まってたりするけど、もう知らん。

「いえ、今回の宴会にはお酒しか持ち込まれていないはずであります

すから……」
「ああ、そうだったん？　最初に一瓶空けてから、全然飲んでねぇな、そういえば……」
さあ次の酒を、と手を伸ばしたところで光太に抱きつかれたんでな。
俺の言葉に、サンシターが目を丸くした。
「そうなのでありますか？　てっきり、ほとんど飲んでないものと思ったでありますが。ご様子も、普段と変わられないようでありますし」
「飲んだように見えねぇってんならお前もだろ？」
「いえ自分、幼い頃はお医者様にお世話になりっぱなしだったでありますから、アルコールには慣れているであります」
「アルコールってそんな慣らし方だっけ……？」
そもそも消毒用と酒とじゃずいぶん物が違う気がするんだけど……。
まあいいや。
「確かに言われてみりゃぁ、全然酔った気分がしねぇなぁ。果実酒って、そんなに強くなかったっけか」
「いえ、結構強いお酒のはずでありますが……。向こうでも、よく飲んでいたでありますか？」
「んにゃ、初めて」
「初めて!?　とてもそういう風には……」
酒瓶を逆さに振って中身を確かめる俺に、サンシターが驚いたような声を上げる。
つっても、一応普通に家に育ったから、その辺キッチリしてたん

だよなぁ。
　しかし見事に空瓶しか残ってねぇな……。もう少し飲みたかったんだけど……。

「くそ、何も残ってねぇな……。おい、サンシター。この時間って、どこか店やってるかなぁ」
「え、えええぇ！？　まだ飲むのでありますか！？」
「まだも何も一瓶しか飲んでないうえ、酔っぱらいの相手で時間があっという間に過ぎたじゃねぇか」

　ぐったり肩を落とす俺に、サンシターはひきつった笑みを浮かべた。

「た、確かに……」
「最後の労をねぎらう一杯くらい飲みたい。つーわけで、どこかいい店を紹介するのだサンシター」
「そう言われましても、さすがにこの時間では……」

　すっかり月も落ちた暗い夜空を窓の中から見上げるサンシター。
　言われてみりゃそうか……。飲み屋もとっくに閉店してる時間だよなぁ。
　うむむ。そうなると、このまま寝るくらいしかないのか？　飯は食ったけど、なんだか物足りないぞ……。

「そういうことなら、一杯やるか？」
「「はい？」」

　突然横合いから声をかけられ、俺とサンシターは声をハモらせそちらを振り返る。
　そこには大きめの酒瓶を片手に持った、騎士団長さんが出入り口

に立っていた。

「団長さん？　こんな時間にどうしたんだよ？」

「どうしたも何もねぇよ。初勝利だっつーから、秘蔵の酒を持ってきたんだよ」

「そういえば、非番でありましたよね、確か」

「ああ。ちくしょう、飲み屋のはしごなんかするもんじゃねぇな……。すっかり出遅れちまったぜ……」

団長さんは、足の踏み場もない詰め所の惨状を見て、悔しそうな声を上げた。

っていうか、あんた飲み屋をはしごしてたんかい。そこはまっすぐこっちに来るべきところじゃねぇの？

俺がそういうと、団長さんはばつが悪そうに視線を逸らした。

「そうはいうがな？　昼過ぎまでぐっすり寝て、そのあと二度寝して。月が上がった頃に起きて、飲み屋を何軒かはしごして。行きつけのバーでお姉ちゃんにやっと教えてもらったんだから仕方ねぇだろ？」

「それは仕方なくないと思うであります」

サンシターが呆れたような眼差しで、団長さんを見つめている。

こいつ意外と遠慮ないな。

「まあ、それはともかく、だ。どうだ？　飲むか？」

「飲む飲む。ちょうど飲み足りなかったんだよ」

高そうな酒瓶を掲げる団長さんに駆け寄る。

中身は透明な琥珀色の液体……ブランデーとかウィスキーの類だろう。

アルコールはさっきの果実酒より強そうだけど、大丈夫だろたぶん。

「よし、サンシター。お前、厨房でなんか簡単なつまみ作れ」
「え、自分がでありますか！？　自分、もう寝たいであります……」
「いいじゃねぇか。お前にも分けてやるからさ」
「うう……」

団長さんに命じられ、仕方なくというようにサンシターが詰め所奥に設置されている簡易厨房へと向かう。
っていうかサンシターが料理？　大丈夫なのかそれ。

「ああ。あいつの料理の腕は、うちの騎士団一でな。凝ったものは作れないっていうが、その味はレーテのお墨付きさ」
「レーテ？　誰それ」
「この城のメイド長だよ」
「ああ、あの人……」

疑問の答えは意外なものだった。いや、意外でもないのか、ある意味？　この間、料理本読んでたしな。
とはいえ、メイド長さんが認めるほどか……。ちょっと楽しみだな。酒の肴とはいえ。

「じゃ、俺たちも厨房に行くぞ。こんな、酔っぱらいの巣窟より、よほどましだろ」
「だな」

団長さんに促され、俺は酔っぱらいの隙間を縫うように歩を進める。
死体みたいに動かねぇけど、アル中で死んでる人とかいねぇよな。

「ああ、そうそう。――すまなかったな、リュウジ」

そんな俺の背中に、物のついでというような軽い感じでそんな言葉がかけられた。

思わず振り返ると、団長さんが真剣な顔でこちらを見つめていた。

「……？　なにが？」

「今回の会戦、俺は非番だったろう？」

「ああ」

「ほとんどお前ら任せにしちまったからな。時間切れで引き分け位を願ってたんだが……まさか勝ってくれるとはな」

そういって、団長さんが俺の隣に並ぶ。

まあ、俺も勝てるとは思わなかったし……でも、なんですまなかった？

「――元々お前らは、普通に暮らしてたんだろ？」

「ああ、うん。こういう世界じゃなかったからなー」

「そんなお前らを巻きこんじまった。あまつさえ、魔族と戦っても勝てるくらいに、引きこんじまった」

「……だから？」

すまなかった、と？

「本当なら、俺たちがしっかりしなきゃならねぇのにな。まったく、騎士団とか笑わせるぜ」

自嘲するような、団長さんの言葉。

……責任を感じてるってことか？　団長さんはヴァルトとタメ張

るくらい強いけど、ほかの連中はそこまででもないことに。

「……まあ、頼りねえ騎士団だけど、これからも頼むぜ、勇者様」

そういって、団長さんが俺の肩を叩く。

俺は叩かれた肩をそっと撫でた。

俺を追い越して厨房へと向かう団長さんの背中が、少し小さく見える。

何を思ってるのかわからねぇけど、自分たちのことを情けなく感じてるんかな、話の内容から察するに。

……俺的には、ソフィアに会えたしそれで帳消しでいいんだけどなぁ。

「ほかの連中は、どう思ってんのかね。この異世界旅行のこと」

団長さんに聞こえないように小さくつぶやいて、俺は肩をすくめた。

まあ、なるようにならぁね。

No．31：side・ryuzi「よっぱらいたちの二次会」（後書き）

そんなわけで、酒癖の悪い勇者様たちの巻でしたー。
今後間違いなく隆司の手によって禁酒令が出されるでしょう。特に礼美。公共の場で脱がれちゃかなわん。
次はそんな礼美ちゃんの視点ですー。

No．32：side・remi「翁の祈り」

「うぅ～……？」

なんだか気だるい気分を感じながら、私は目を覚ましました。
朝日が窓から差して、それが顔にかかったから目を覚ましたみたいです。
にしても、なんだか頭が重いよ～……。

「「う～……」」

うめき声を上げながら、布団を肌蹴て体を起こします。
隣に眠っていた、光太君も一緒に。

「「……」」

しばらく、その状況がのみこみ切れなくて、ぼんやりとお互いの顔を見つめていました。
光太君も、なんだか気分がよくないのか、やぶにらみで私の顔を見つめています。

「「……おはようございます」」

とりあえず、朝の挨拶です。
何事も挨拶が重要ですよね……。

「起きて互いの姿を見ての第一声がそれでありますか……」

なんだか呆れたような声が聞こえてきたので、そちらの方を向き

ました。
そこには、唸り声を上げて眠る真子ちゃんの額の汗をぬれタオルで拭いてあげているサンシターさんの姿がありました。

「さんしたーさん……？　おはようございます……」
「おはようございます。よく眠れたでありますか？」
「あまりです……。ふぁ……」

サンシターさんの言葉に、小さく欠伸。
ええっと、昨日は何があったんだっけ……？

「さんしたーさん……」
「はい、なんでありますか？」
「昨日は何があったんでしたっけ……？」
「……ああ、忘れてるでありますか」

サンシターさんは何かを納得したようにうなずいてから、昨日あったことを説明してくれました。
二回目の魔族との戦い。それに勝ったので祝勝会。それが終わった後に、二次会に参加。
サンシターさんの説明を聞きながら、だんだん思い出してきました。
そういえば、真子ちゃんががんばってくれたから勝てたんだよね……。
そのあと、きれいなドレスを着ていろんな人とお話しして……。
祝勝会が終わった後、せっかくだから騎士さんたちの打ち上げにも参加したんだよね。
祝勝会で食べられなかったお料理をたくさん食べて……それで……。
あれ？　それから先のことが思い出せません。

「サンシターさん。そのあと、何がありました？」
「そのあととは、なんでありますか？」
「私たちが、騎士さんたちの打ち上げに参加した後です。そこからの記憶がないんですけど……」
「あ、真子ちゃんも？　僕も何があったのか思い出せなくて……」
「光太君も？」

隣で静かにサンシターさんの説明を聞いていた光太君が、私と同じことを言いました。
光太君も覚えてないなんて……。
サンシターさんは、記憶がなくてちょっと困っている私たちの顔をなんだか微笑ましいものを見る目で見つめてから、ゆっくり口を開きました。

「特別何もなかったでありますよ？」
「あ、そうなんですか？」
「はい。ただ、あの宴会にはお酒がたくさん出ていたでありますから、それを飲んですぐにレミ様たちは眠ってしまわれたのであります」
「ええ！？　お酒があったんですか！？」

光太君がびっくりしたような声を上げましたが、私もびっくりしました。
お酒なんて飲んだことがなかったので、全然気が付かなかったです……。

「はいであります。あ、心配しなくてもいいでありますよ。この国には飲酒制限というものはないでありますから」
「え、そうなんですか？」

「はいであります」

サンシターさんの説明にまたびっくり。

なんでも、お酒というのは女神様からの知識で作られたものなので、すべての国民に平等にふるまわれるべきなんだとか。

でも、子供にアルコールはダメなんじゃなかったかなぁ？

「そこはご安心ください。制限がないだけで、暗黙の了解として十五を数えるまでは飲酒を避けるべきだとされているであります」

「あ、そうなんですか」

「ただ、そういったものを踏み破る方はどこにでもいるでありますが……」

ム、それは聞き捨てならないなぁ。

嫌がる子に無理やり飲ませたりとかしているのでしょうか。

「ところで、具合はどうでありますか？　リュウ様からお聞きしましたが、レミ様もコウタ様も初めてお酒を飲まれたとかで」

「あ、大丈夫です。ちょっと、頭が重いけど、痛いとかはありませんから」

「僕もです。体も少しだるいかな……？」

「あれだけ飲んで、たったそれだけでありますか……」

サンシターさんが何か小さくつぶやいていましたけど、よく聞こえませんでした。

サンシターさんは苦しそうな真子ちゃんを見下ろして小さくため息をつくと、部屋の外につながるドアの方を見ました。

「ちょうど今、オーゼ様が宴会跡地で倒れている人たちを介抱なさっているところです。もしご気分がすぐれないようでありますれば、

見てもらうといいであります」
「あ、はい。わかりました」

オーゼ様、そんなこともできるんだ。
私も、教えてもらうかなぁ。
モソモソとベッドの上から降りる私に続いて、光太君も起きました。
隣に並ぶと、やっぱり光太君の方が大きいです。
と、光太君が何かに気が付いたようにサンシターさんの方を向きました。

「サンシターさんは？　昨日の宴会にも、参加してましたよね？」
「ご心配なく。あまり飲んでないでありますし、自分、アルコールには慣れているでありますから」

そう微笑んで返しながら、サンシターさんは真子ちゃんの額に濡れタオルを置きました。
冷たいタオルで頭を冷やされて、一瞬呻いた真子ちゃんの顔が、少し和らぎました。

「それに、マコ様も若干深酒をなさったようですので、もう少しここにいるであります」
「はい、わかりました」
「真子ちゃんのこと、よろしくお願いします」

私と光太君は、サンシターさんに頭を下げて部屋を出ていきました。
詰め所の少し狭い廊下を抜けて、作戦会議を行う広い部屋に出ると、たくさんの人が毛布にくるまって呻き声を上げていました。
あわやどこかの避難所のような光景です……。あ、ジョージ君も

いる。呻いてるけど、お酒飲んだのかな……？
そんな中をゆっくりと歩き回り、適宜眠っている人たちの顔色を診て回っている白髪の老人の姿もありました。
オーゼ様です。
オーゼ様は、ちょっと顔色が悪い人のそばによると小さく呪文を唱えます。
オーゼ様が騎士らしいその人の額にかざした手がかすかに輝くと、騎士さんの顔色が少し良くなりました。

「オーゼ様」
「ん？　おお、レミ様にコウタ様。おはようございます」

周りの人を起こさないようにゆっくりと近づいて声をかけると、オーゼ様が皺だらけの顔を、もっと皺だらけにして微笑んでくれました。

「お加減はいかがですかな？　もしすぐれませんようなら、解酒の魔法をおかけしますが」
「私たちは大丈夫です。ね、光太君」
「うん、大丈夫。それにしても、解酒の魔法なんてあるんですね」
「ええ、まあ……」

驚きの中に尊敬を込めたような光太君の言葉に、オーゼ様は少し複雑そうなお顔をなされました。
どうしたのかな？

「元々は酒好きの旧友にせかされて開発したものですので、あまり褒められたものではないのですが……」

懺悔するような響きのオーゼ様の言葉。

友達のために開発したなんて、素敵なことだと思うんだけど、何か悪いことがあるんでしょうか？

「ああ、いえ、なんでもないのですよ？」

オーゼ様は、何かをごまかすように手を振ってこの話題を打ち切りました。

むぅ。少し気になりますけど、あまり根掘り葉掘りも失礼ですよね。

「ところで、何か私たちに手伝えることはありますか？」

「昨日はすぐ寝ちゃったみたいですから、後片付けもまだですよね？　手伝いますよ」

気を取り直して、私たちはオーゼ様のお手伝いをしようと声をかけました。

すぐ寝ちゃったから何もできなかったけど、今日はお手伝いしますよ！

するとオーゼ様は少し驚かれたような顔になりましたけど、すぐに柔らかく微笑んで私たちの申し出を断りました。

「いいえ、大丈夫です。レミ様もコウタ様も、昨日の戦いの疲れが抜けてはおりませんでしょう。この爺の手伝いよりも、お体をおやすめください」

「でも……」

私がそれでも食い下がると、思ったより大きな手で私の頭をそっと撫でてくれました。

「よいのですよ、レミ様。レミ様たちは、我々にたくさんのものを

くださりました。これ以上頂いては、爺の行く先がなくなってしまいます」

「オーゼ様……」

オーゼ様の言葉に、私は言う言葉を見失ってしまいました。

私だってオーゼ様にたくさんのものを頂いているのに……。

「オーゼ様。僕たちは勇者ですが、やはりそれだけではいけないと思うんです」

そんな風に思い悩んでいると、光太君が一歩前に出てそう言いました。

「魔王軍と戦って勝つのは、勇者の仕事です。でも、それだけじゃいけない気がするんです」

「コウタ様……」

「勇者に求められるのは、戦って勝つことばかりじゃなくて、この国に平和をもたらすことですよね？　なら、どんな小さなことだって行うべきだと思うんです」

光太君は力強くそう言い切りました。

そう、だよね。私たち、勇者なんだもんね。

戦って勝つだけじゃない、もっとたくさんのことを、するべきなんだよね。

そんな光太君の言葉に、オーゼ様は小さく微笑みを作りました。

「コウタ様は、本当に思慮深きお方ですな……」

「そんな、僕なんて……」

光太君が照れたように謙遜します。

「ですが、やはり体をおやすめください。この場は、爺に任せて」
「何故です？」

オーゼ様の言葉に、光太君が少し語気を荒げました。
焦れているようにも見えます。どうしたんだろう……？
そんな光太君の強い視線をまっすぐ受け止めながらも、やっぱり強い意志の光を灯したオーゼ様が言葉を紡ぎます。

「コウタ様。昨日の魔王軍との戦い、どう思われましたかな？」
「どう、ですか？」

光太君が突然の質問に戸惑いながらも、口を開きます。

「どう、と言われましても。ほとんどがむしゃらに剣を振っていただけですから……」
「なるほど。では前回の、四天王との戦いと比べられましたらいかがでしょう？」
「四天王との……」

四天王、ヴァルト将軍との戦い。
その時のことを思いだしたのか、光太君の顔が少し青くなります。
私も、少し顔から血の気が引くのを感じました。

「……比べることは叶いません。途方もない緊張を感じましたから……」
「その緊張は、昨日にもお持ちになられましたか？」
「い、いいえ」

オーゼさんの言葉に首を振る光太君。

「つまり、コウタ様は昨日の戦い、四天王との戦いほど真剣に取り組まれなかったと」
「そ、そんなことは！　昨日の戦いも、真剣に……！」

オーゼ様の言葉に声を荒げそうになる光太君。
そんな光太君の口を、オーゼ様は素早くふさぎました。
そして口元に人差し指を当てます。
そ、そうです。ここにはまだたくさんの人が寝ていたんです。
光太君もそれを思い出して、あわてて息をのみました。

「……失礼いたしました。どうも、年を取ると底意地が悪くなっていけませんな」

オーゼ様はすまなさそうにそう言って、しかし瞳の光を少しも弱くすることなく光太君を見据えました。

「確かに、コウタ様にとっては真剣勝負だったのでしょう。ですがそれは相手にとっても同じでしょうか？」
「相手……ですか？」

光太君はいぶかしげにそうつぶやきます。
相手……魔族の人たちのことだよね？
つまり、魔族の人たちは……？

「我々にとっては、奪われる寸前の戦いでも、魔王軍にとっては児戯に等しいのかもしれませんぞ？」
「そ、そんな……」

オーゼ様の言葉に、光太君がショックを受けたようによろめきま

す。
そ、そうなのかな？　昨日の、ガオウ君とかは真剣なように見えたけど……。
「ど、どうしてそんなことおっしゃるんですか？」
「どうして、ですか……」
私の言葉に、オーゼ様は少し考えるような顔になりました。
「……今のところは爺の勘、としか言いようがありません。ですが、当たらずとも遠からずと思っております」
「何故でしょう……？」
「魔王軍が、ルールを持って闘争に臨んでいるというのもあります。ですが、一番の理由はヴァルト将軍のような猛者がいながらも、王都侵攻よりも戦争継続を望んでいる節があるからでしょうか……」
オーゼ様の言葉に、私も考えます。
確かに、戦争というには少しおかしい気がしてきました。
時間を空けての襲撃もそうですし、ソフィアちゃんもヴァルト将軍も、どこか時代掛ったような、悪く言えばお芝居のような感覚でこちらに臨んでいる気が……。
……いや、違うかなぁ？　隆司君と戦ってるときはすごい真剣に見えるし……。
うーんと悩み始める私に、オーゼ様は言葉をつづけました。
「それだけではなく、命を奪える場面においてもそれを行わない。こちらの負傷兵が増えるとサッと撤退を始めるなど、明らかにこちらのことを軽視した行動も一因ですな」
「……確かに、そういうお話も伺っています」

光太君が頷きました。
そういえば、領地を奪っても無為に命を奪うどころか、畑仕事を手伝ってるなんて話もあるんだよね。

「おそらく、彼らにとっては暇つぶしに近いのでしょう。ですが、我々にとっては大きな問題なのです」

オーゼ様は、そういって私たちを見つめました。

「コウタ様、レミ様。お二人は魔族との和平を望まれています」
「はい……」
「ですが、今のままでは聞き入れてもらえますまい。こちらのことなどお構いなしに、彼らは攻めてくるでしょう」

オーゼ様が、真子ちゃんと同じことを言います。
交渉は、対等な関係を持っているからこそ行えることだって……。

「我々だけではなしえない勝利。彼らにとっても痛手と思いたいですが、たった一勝では響きますまい」
「そう、ですね」

光太君がつらそうな表情で、うつむきました。
そっか、私たち、まだ一回しか勝ててないんだよね……。
オーゼ様の表情が、また一段と辛そうに歪みます。

「酷なことを、身勝手なことをほざいているのは承知しております。それでも、爺は言葉にします。……どうか、強くなってください、勇者様。いずれ、魔王軍を退けるほどに。そのために、今日はお休みください。より強くなるための、明日へつなぐために」
「「……」」

オーゼ様の言葉に、私たちは沈黙します。
オーゼ様もつらいのか、最後には目を伏せて私たちから顔をそらしました。
私たちはいたたまれなくなって、オーゼ様に頭を下げて騎士団詰め所を出ていきました。
……自分よりずっと年下の子供に、頭を下げて強くなってほしいと願うオーゼ様は、どれほど心を痛めてらっしゃるんだろう……。
何も知らない人は、オーゼ様のことを尊厳がないと罵るかもしれません。でも、それ以外に選択肢がないのかもしれないんです。
そのことを思うと、胸が張り裂けそうになります。
昨日、光太君がつぶやいた言葉の意味が、少しだけ理解できました。

「……強く、なろうね」
「……うん」

私は、ギュッと手を握って誓いを新たにします。
きっと、この国の……オーゼ様をはじめとした人たちが、心の底から本当に笑えるように、強くなろうと。

No.32：side・remi「翁の祈り」（後書き）

ちなみに隆司は朝方まで団長さんと飲んで、今まさに寝こけてるところです。

もうちょっとラブコメした話にしたかったのですが……無念……！

次回は真子ちゃん。深酒した結果はどうなってることやら。

No．33：side・mako「小さな小さな、女の子」

最悪の気分でおはようございます。
窓から覗く太陽はもうだいぶ高いけれど、そんなのあたしに関係ない。
頭は割れるように痛むし、その痛みは頭蓋骨の中で反響するように響いている。
視点もまるで度の強い眼鏡をかけたように、ひどく歪んで見える。
血管の中の血がみんな鉛か何かに変わってしまったように、ひどく全身が重い。
しかし、何よりも最悪なのは。

「ああ、マコ様。起きられたでありますか」

ベッドで仰向けのまま天井を睨んでいたあたしの横から声がかけられる。
声の主はサンシターっぽかった。

「気分はどうでありますか？」
「……最悪」
「起きられるでありますか？　お薬があるでありますよ？」

サンシターは言いながら、吸い飲みか何かに粉薬を溶かしてくれたらしい。
あたしの視界に透明なポットを差し出してくれた。
あたしが何も言わず小さく口を開けると、サンシターはゆっくりとポットをあたしの口に当てて傾ける。
口の中に苦みの強い透明な液体が流し込まれるが、今の気分に比べればとってもましな味だ。

むしろ意識がはっきりしてくる。おかげで余計に最悪になったけど。

「ではしばらくしたら、また見に来るであります。ゆっくりしていってほしいであります」

サンシターは耳心地のいい優しい声をあたしにかけてから、背中を向けて部屋を出ようとした。

あたしは倦怠感と痛みをなんとか我慢して、今にも部屋を出ていきそうなその背中に声をかけた。

「……サンシター」

「なんでありますか？」

サンシターはすぐに振り向いて、あたしに顔を向けた。

とても優しい笑顔だ。何を聞いてもきっと答えてくれる。

「――うぅん、なんでもない。ありがとう」

あたしはそれだけ言って、布団をかぶる。

サンシターは何も言わずに、そのまま部屋を出ていってくれた……。

「……がっでむ」

何が「おうちかえゆ」！？　なにが「わんわんこわい」だぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？？

あたしはサンシターの忠告を完全無視で、ベッドの上をごろごろ転がりまわった。

あたしの最悪の気分の原因で、さっき思わずサンシターに確認し

そうになったこと。
昨晩のあたしの醜態。酒の酔いとともに抜けてくれればよいものを、ばっちり残っていやがったマイ脳みそに……！！
ちくしょおおおおおおおおおおおお！！？？　隆司とかしっかり覚えてんだろうなぁ、あいつ酔って無いっぽかったしぃ！？
くぉおおおお！！と全身を覆う激痛も無視して転がっていると、部屋の扉がまた開かれた。

「……なにやってんだ、嬢ちゃん？」

入ってきたのは、相変わらず常時前髪覆面のギルベルトさんだった。

「……ギルベルトさん。記憶を消す魔法ってないのかなぁ……？」
「……なにがあったか聞かんが、あまりお勧めはせんぞ」

何しろ生まれたままの記憶に戻る魔法だからな、と豪快に笑い声をあげるギルベルトさん。
チクショウ、笑うな。その声すら頭に響く。

「で、何の用よ……？」

あたしが布団から顔だけ出してやぶにらみしてやると、たいして堪えた様子もないギルベルトさんが何かに気づいたように頭に手をやった。

「ああ、そうだそうだ。この間、お前さんに解析依頼された例の鉱物。ある程度結果が出たんだよ」
「……もう？　いくらなんでも早すぎない？」
「ある程度、さ。なんであの分析機で分析できなかったのか、その

理由がわかったんだ。その結果報告に来たんだが……」

そこまで言って、ギルベルトさんが肩をすくめた。

「嬢ちゃんがこんな様子じゃ、また今度かね？　宴会に参加してたって聞いてたお嬢もどっか行ったらしいし」

「聞くわよ。聞くに決まってるじゃない……」

あたしはそういって、何とかベッドの中から這い出す。

この間の鉄板。あれをもとにして何か作れれば、そしてあわよくば量産できれば騎士団のパワーアップもできるかもしれないし……。

「おいおい、無理するなよ？　お前さん、今の顔色まるでゾンビだぞ？」

「大丈夫じゃないけど、何とかするわよ……」

ふらふらと歩くあたしの肩を支えてくれるギルベルトさん。

ありがたいんだけど、それすらもなんか鈍い痛みに変わるんですけど。

「もう、金輪際お酒は飲まないわ……」

「こんな調子じゃ、そうした方がいいな」

同意してくれたギルベルトさんに連れられ、あたしはフィーネを探すために外へ出た。

途中、死屍累々の惨状となっていた騎士団詰め所の中で、酔っぱらいどもを介抱していたオーゼさんに解酒の魔法とやらをかけてもらった。

なんでも酒が大好きだけど酔いやすかった友人が、いくらでも酒を飲むためにオーゼさんに開発させた魔法らしく、あたしの気分も

だいぶ良くなった。
　っていうか、そこまでして酒を飲みたいって……。聞くところによると、先代の宮廷魔導師らしいんだけど、大丈夫なのそれは……？
　あたしは、宮廷魔導師の質をいろいろ懸念しつつ、フィーネの姿を探した。
　いつもの魔導師団詰め所にはいない。こっそりつまみ食いしているらしい厨房にも姿がない。当然、城を一望できる見張り台にもいないし、そこから見られる城一の花壇にもいなかった。

「どこにもいないわね……。ギルベルトさん、フィーネってどこに住んでるの？」
「ああ。城の中だ。基本的に魔導師はみんな城住まいだからな。フィーネはこの展望台から見えるあの塔の頂上に住んでる」

　ギルベルトさんが指差したのは、城を四角く覆う城壁、その四隅に立っている塔のうちの一つ。
　仮にも魔導師団の長である宮廷魔導師が住む場所には似つかわしくない気がするんだけど……？

「元々先生……先代の宮廷魔導師があそこに住んでいてな。フィーネもあそこで暮らしてた関係で、そのまま暮らしてるんだ」
「ふーん。ジョージは？　ジョージもあそこで暮らしてるの？」
「前はそうだったみたいだが、今は騎士団の寮の一室を借りてるらしい。難しい年頃なんだろ」

　ギルベルトさんのどこかおっさんくさい感想を聞き流しつつ、あたしたちはフィーネが暮らしている塔へと向かう。
　螺旋階段を上って一番上、それなりの採光窓やろうそくもたっているので暗くはない塔のてっぺんへと到達。
　このろうそくは誰がつけて回ってんのかしら……？

「お嬢！　お嬢！　中にいるのか！？　それとも眠ってるのか！？」

ギルベルトさんがドンドンと木の扉を壊す勢いで容赦なく叩く。

フィーネも二日酔いになってたら、怒鳴り声を上げそうだ。っていうかあたしなら上げる。

けど、中から響いたのは。

「ギル……？」

何とも弱弱しい、ともすれば聞き逃してしまいそうなフィーネの声だった。

「「……？」」

いぶかしげな顔をするギルベルトさんと顔を見合わせる。

きっと今の私も似たような顔をしてるんだろう。

だってそうでしょ？　騎士団が勝利して宴会までして、フィーネもそれに参加して。

だっていうのに、今にも消え入りそうな声を上げてるんだもの。

「……お嬢！　入るぞ！？」

ギルベルトさんはそういって、返事も聞かずに扉を開けた。

もし鍵がかかってたら、蹴破ってそうね。

あたしはそんなギルベルトさんの陰に隠れるようにフィーネの部屋に入った。

なんとなく、そうした方がいい気がしたのだ。ホントに、なんとなく。

でも、隠れる必要はなかったかもしれない。

何しろ部屋の窓という窓にはカーテンが引かれていて、その隙間から漏れる光が唯一の光源だ。

ちょっと動くと何かにつまずきそうになる。そんな中で、ギルベルトさんが来ている白衣が妙に浮いて見えた。

「ギル……」

外から見るよりずっと大きな部屋の中、その中央に堂々と鎮座する天涯付ベッド。

その上にペタンと力なく座っていたフィーネが、今にも泣きそうな声でギルベルトさんの名を呼んだ。珍しく、ローブは脱いでいるようだ。シャツとズボンという新鮮なスタイルだ。

その目の前においてあるのは……魔導書に、燃え尽きたろうそく？　目の前のものにある以外にも、結構な量の魔導書がベッドの上に読み散らかされていた。

「どうしたんだお嬢。こんないい日に、窓閉めきって……。子供は外で遊ぶ時間だぞ？」

何やら爺くさいことを言いながら、ギルベルトさんが大股でフィーネに近づく。あたしもそれに合わせてこっそり近寄った。

幸い、足元に何かが散乱していることはなく、追いかけるのは容易だった。

フィーネの様子がおかしいのも、一役買ってるっぽいわね……。

ギルベルトさんがベッドのふちまで近づくと、フィーネはうつむいたままギルベルトさんに名をまた呼んだ。

「ギル……」

「ん、なんだ？」

「どうしよう……」

どうしよう？

「あん？　なにが？」

「マコ……マコが……」

あたしが？

「かえり、ったいってっ……」

……。

「どうし、わたし、が、みたからっ……！」

フィーネはえづくように声を途切れさせ、ぽたぽたとベッドのシーツを湿らせる。

ギルベルトさんは無言でそんなフィーネを見下ろしていた。

「マコ、かえりたがって、でもわたし、かえせないっ……」

「そりゃ、そうだろ。あれは召喚の陣であって、送還は門外漢だって、先生も言ってたろう？」

「わたし、みたから、マコ、よんで……！　でも、かえせっ、ない……！」

ギルベルトさんが言っていることを耳にも入れず、ひたすら壊れたラジオのように同じような言葉を繰り返す。

フィーネ、昨日のあたしの言葉を覚えてたのね……。

いや、あたしの発言を聞いた後、すぐに部屋に戻ってあたしたちを元の世界に戻す方法を探し始めたって考えたほうがいいのかしら。

読み散らかされた本に書かれた魔術言語（カオシック・ルーン）を見るに、召喚や転移に

関する魔導書のようだ。

「……確かにお前さんが未来を見た。だから、あいつらを呼んだ」

ギルベルトさんは、あたしに対する説明なのか、断片的なフィーネの言葉を拾い上げてそう口にした。

そうか、フィーネの占いの結果であたしたちは呼ばれたんだ……。

「だが、還せないのはお前のせいじゃないだろう？」

「でも、わたし、きゅ、てい、まどーし、だから……」

「だから？」

ギルベルトさんの後ろから聞こえたあたしの声に、フィーネは体を跳ねて萎縮した。

「マ、マコ……？」

「あんたは、確かに宮廷魔導師よ。でも、だからなんなのよ？」

あたしはそういいながらギルベルトさんの背中から姿を現し、ベッドの上に乗りあがって、フィーネの頭をぎゅっと抱きしめた。

そしてフィーネをなだめるように、その長い髪をゆっくりと撫でる。

「あんたは確かに未来を見て、あたしたちを呼んだ。でも、それは弱い騎士団のせいであって、あんたのせいじゃないでしょう」

「マ、コォ……」

あたしの服をぎゅっと握りしめて、静かに声を上げずに泣き始めるフィーネのつむじを見下ろす。

我ながら、らしくないと思う。

いつものあたしなら、原因となりそうな存在があったら、それに怒りをぶつけるくらいはすると思う。基本的に短気だしね。

でも、さすがにフィーネにそんな気は起きなかった。

こうして、責任感じてわざわざあたしたちが帰れる方法を探してくれてるからかしらね？

普通なら、用意してから呼べとツッコミくらい入れるかなぁ……。

でも、こうしてフィーネの様子を見るに、あたしたちが帰る方法は見つからなかったってことかしら……。

「マコ……ごめん、なさ……」

ゆっくりと、フィーネの頭を撫でてやっていると、やがてあたしの服を握りしめていた手がゆっくりと力をなくし、あたしの方へ体重がかかる。

小さく寝息が聞こえてくるのを確認して、あたしは小さく息を吐いてからフィーネの体をそっとベッドの上に横たえた。

しかし、落ちる寸前の一言が「ごめんなさい」か……。

「ねえ、ギルベルトさん」

「なんだ？」

あたしはフィーネの頭を撫でてやりながら、ギルベルトさんの顔を見ないようにして質問した。

「フィーネが宮廷魔導師になったのって、なんで？」

「……先代の指名だよ」

ギルベルトさんは、感情を抑えたような声であたしの質問に答えてくれた。

「先代は、半年くらい前に病で亡くなったんだが、その今際の言葉がフィーネを宮廷魔導師にするように、だったんだ」
「で、魔導師たちは納得したんだ？　こんな小さな、ただの女の子が、自分たちのトップになるのを」
一つ一つ区切るように、責めるように言葉を紡ぐあたしに、ギルベルトさんは声の調子を変えないまま返答した。
「もちろん、反対意見は出た。だが、魔王軍と戦争中だったし、オーゼ爺の後押しもあって、フィーネが宮廷魔導師になるのはすぐに決まっちまったんだ」
「半年……ギルベルトさんがこもる前ってことよね？」
「ああ。その後のことは、よく知らん。レーテは、あまりそういうことを聞かせてくれんかった」
あたしはそこでギルベルトさんをやっと見た。
今のあたしは、怒りのせいで相当なやぶにらみになっている。目尻が凶悪に吊り上っているのが自分でもわかる。
「なんで、地下にこもった？　あんたがいれば、もう少しましだったんじゃないの？」
低く、フィーネを起こさないように声を抑え、だが響く声は自分でも驚くほど嚇怒を込められたもの。
対するギルベルトさんは、前髪のせいで見えない視線であたしをまっすぐに見つめ返した。
「レーテにも、同じことを聞かれたな」
「……」
「だが、先生の言いだしたことだ。意味があるんだろうよ。俺には

俺で、やることがあったしな」

ギルベルトさんの言葉は到底納得のできるようなものではなかった。

だが、有無を言わさぬ力強さも込められていた。

先生……先代宮廷魔導師に対する崇拝だけではない、絶対の信頼。

先代の宮廷魔導師……何者なの？　オーゼさんもその言葉を後押ししたってことは、彼も信頼してたってことよね。

「……フィーネ……」

改めて、フィーネの体を見下ろす。

普段はぶかぶかのローブに包まれているその体は、今にも折れてしまいそうなほどに細い。

杖を持つには小さすぎるその手には、タコのようなものも見え隠れする。きっと普段から魔法の練習を欠かしていないんだろう。

昨日からほとんど眠らずに考えていてくれたのか、目の下にはクマのようなものも見える。

ほんの、小さな女の子が。十歳くらいの、小さな女の子が。

「……ギルベルトさん」

「なんだ？」

「鉱物が解析出来たって言ったわよね？」

「ああ」

「その結果、ここで聞かせて頂戴」

あたしはそういって、ギルベルトさんを見つめる。

さっきまでの怒りに満ちた瞳ではなく、強い意志を称えた瞳で。

「了解だ。……頼むぜ、嬢ちゃん」

ギルベルトさんの、願うような言葉にあたしは無言でうなずいた。
涙を枯らしてしまいそうな、小さな女の子を守るために。
あたしは、あたしにできることをやろう。
今、そう決めた。

No．33：side・mako「小さな小さな、女の子」（後書き）

そんなわけで、真子ちゃんの酒乱のツケ。結構重い形でやってきてしまいました。

そして深まる先代に対する疑念。何がしたかったんでしょうね、先代。

次回以降、平常運転に戻りますー。

No．34：side・ryuzi「喫茶“アメリアの泉”」

あの悪夢の宴会から、四日ほど経った。
前回の戦いのときに、何か思うことでもあったのか、光太や礼美、さらには真子まで今まで以上に修練や学習に力を入れるようになった。
体力限界まで剣を振り、俺と戦おうとする光太を団長さんが後ろから当身かましてたり。
そんな光太を新開発したらしい体力回復の祈りで癒しつつ、周囲の人の強化を試みようと顔面蒼白になるまで気張る礼美がいたり。
メイド長さんにいわれて、錬金術師のギルベルトとやらと一緒に魔導具の開発にのめり込む真子の首根っこ引っ掴んで飯を食わせるべく引きずりあげたりとなかなか忙しい日々だった。
え？　俺？
もちろん、修練はしたよ？　城壁を素手で登ったり、速いスピードで伸びる木の上をギリギリの高度で飛び越えたり。
……こうしてみると、忍者みたいな修行しかしてないな俺。ほかにはひたすら反復横跳びを繰り返したりとかだし。
まあ、そんなことですっかり日も経ち、そういえば一週間前に受けた依頼の結果どうなったかなー？とハンターズギルドを訪ねることにした俺。
あんまりにもしつこく、魔族対策として俺と戦おうとする光太に若干辟易したってのもある。何も俺ばっかりと戦ってないでさ。剣の修練を担当してたアスカさんがこっちをさびしそうな目で見てくるからやめてくんない？
そんなわけで、ハンターズギルドまで足を運んだ俺をギルド長さんは素敵な笑顔で出迎えてくれた。
「お待ちしておりましたよ、リュウ君」

「どもっす」

以前の閑散な様子から少し変わり、ちらほらとではあるが人の姿が見られるようになったハンターズギルド。

ギルド長さんの笑顔も納得だな。これはつまり。

「ええ。あなたに依頼した、原因の調査。どうやらリュウ君の言っていた亀とやらが原因だったようです」

ギルド長さんの案内で入った、ギルド長さんの執務室。

長の執務室としては驚くほど簡素なそこで語られた内容は、依頼の成功を意味するものだった。

「ということは、アイティスは元々のテリトリーに戻ったってことっすか？」

「ええ。少なくとも、ハンターたちの主な狩場となっていた入り口周辺からアイティスの姿がすっかりいなくなっています」

そのあたりの調査は、ギルド長さん自ら行ったりしたらしい。苦労してんなぁ……。

しかし森の入り口周辺からアイティスがいなくなったか……。主な収入源だったのになぁ。

「それではこちらが、今回の依頼の報酬の五百万アメリオンです」

「あい」

ギルド長さんが差し出した札束を手に持ち、一枚一枚数えはじめる俺。

こういう計算はキッチリしておかないと、ボラれても文句は言えない……ってのは軍師様の言葉だ。

っつっても、さすがに五百枚も一々数えてらんねぇよなぁ……数えるけどさぁ……。

「もし、次がございましたらお願いいたしますね？　勇者様」

「ああ、はいはい、もしあったら……ん？」

さしあたって十枚ずつの束をそろえていく俺にかけられた言葉に、思わず計算を止めて顔を上げた。

ギルド長さんは柔和な笑みを崩さぬままに、俺を見つめていた。

……何とも底の見えない笑顔だ。

俺は肩をすくめた。

「……ばれてましたか？」

「いえいえ。たった一日であの結果報告を頂いたので、個人的に情報収集させていただいたのですよ」

個人的な情報収集で身分ばれか……。つっても、そのうち明かさなきゃいけない話だろう。今までは騎士団の人たちの陰に隠れて行動してたからなぁ。

アルトに、勇者お披露目ってことでなんかやってもらうか。もちろん光太と礼美主導で。

「今後、もし大型狩猟系の依頼がありましたら、リュウ君を通したらよろしいですかね？」

「王国専属の窓口に指定されても、若干困るけど、なんで大型？」

俺の疑問に、ギルド長さんはなんてことないようにこういった。

「ハンターズギルドはあくまで狩猟組織であって、大型のモンスタークラスの生物を討伐できる人間がいないのですよ。なので、そう

いった生物の狩猟は騎士団の仕事なのですよ」
「なるほどねー」

無事五百枚の一万アメリオン札を数え終わり、俺は札束を懐に収めた。

「それじゃ、今回はこれで」
「ええ。今後も、ハンターズギルドをよろしくお願いいたしますね」

立ち上がって俺に握手を求めるギルド長さん。
俺はそれに応じつつ、意外と底の知れないギルド長さんを油断ない目で見つめていた。
こういう人こそ一番注意しないといけないのかもなー。

俺はそのあと、カレンの姿を探すためギルド長さんが教えてくれた喫茶店とやらを探していた。
今回の報酬は五人で割って支払うべきだと考えて、とりあえずカレンに百万渡そうと思ったのだ。
でも、今日はギルドに来ていないらしく、依頼も受けていないっぽかったので、ギルド長さんに頼んでどこで暮らしているのか聞いたのだ。
……個人情報の管理とか、やっぱり甘いよなぁ。
そして聞いたのが実家が喫茶店という話だったというわけだ。
しかし喫茶店暮らしなのに、わざわざハンターズギルド所属ねぇ……。流行ってないんかね？
などと思いつつ目的の喫茶店を発見。「アメリアの泉」という看板が掲げられている。
最近何とか読めるようになりつつある公用語を何度も確認しつつ、

俺は扉を開けて喫茶店の中に入っていった。

「あ！　いらっしゃ、い、ませー……」

そしたらカレンが出迎えてくれた。

素敵な笑顔で。フリフリエプロンドレスで。

「……」

「……」

思わず見つめあう俺とカレン。

しばらくの沈黙の後、なんとなくいたたまれなくなった俺は。

「空いてる席にお願いします」

と口走っていた。

カレンは、そのまま崩れ落ちた。

「な、なんで……なんで今日に限って……！」

呪詛のような口調で、カレンが何事かつぶやいている。

見られたのがそんなに恥ずかしかったんだろうか。

いやまあ、普段知ってる雰囲気にはきわめて似合わないんだけどさ。

顔立ちとさっき見せてくれた笑顔のことを考えればばっちり似合ってるから困る。

しかしなんで今日に限って？

「なにどうしたのお前。いつハンターからメイドさんにジョブチェンジしたの？」

「ジョブチェンジしてねぇよ!?　あたしは根っからのハンターだよ!」
「何言ってんだ、まだケツの青さも取れないガキの分際で」
店の奥、カウンター席の向こうで木でできたコップを磨いていたいかめしい風貌のおっさんがため息交じりに言葉を飛ばした。
何とも喫茶店という言葉に似合わない男だ。むしろ山賊といった方がまだ似合うかもしれない。
おっさんは、カレンを睨むと顎をしゃくって自分の目の前の席を示してみせた。
「そんなところで油売ってる暇があったら、さっさと客を席に案内しろ」
「うっせー!　こいつは客じゃなくて、ハンターの後輩だよ!」
「あ、この果実を絞った旬のジュースひとつお願いします」
「客になるんじゃねー!!」
いい感じに腰の入ったローキックを喰らいながら、俺はおっさんの目の前のカウンター席に案内された。
目の前に到着するのと同時に、コップ一杯のジュースが差し出された。
「果実を絞った旬のジュースだ。今朝絞ったばかりだから、新鮮だぞ?」
にっこり、というよりはニヤリというべき笑顔のおっさんに礼を言いつつジュースを飲む。
うまーい。こっちに来てから基本的にミルクか水かくらいしか飲んでないから、こういうのには縁がなかったんだよねー。
とか思っていると、なぜか隣にカレンがドカッと座った。

「ちょっとメイドさん？　仕事中じゃないんですか？」
「客がいないんだよ。別にいいだろ？」
「よかぁねぇよ。働け」

おっさんに向かって舌を見せつつ、カレンが何やら怖い顔でこっちを見つめてきた。
んー、なになに？　今はジュースを飲むのに忙しいんだけど？

「で？　何の用だ？」
「何の用って……」
「あんたにここ教えてないじゃないかい！　わざわざギルドの方で聞いてまで、いったい何の用なんだよ！？」
「お前、一週間前の依頼忘れたのか？　あれ、成功したから依頼料を山分けに来たんだよ」

俺はそういって、袖の下から百万アメリオンを取り出してカレンの目の前に置いた。一回やってみたかったのだ。

「え？　この間って……」
「デカい亀を討伐した時の。あれ、報酬が五百万だろ？　俺とコウと、アスカさんとアルル、でお前で五人だから、ちょうど百万な」
「あ、ああ」

思っても見なかった、という顔で百万アメリオンを受け取るカレン。
なんだよ？　あの時ちゃんと活躍してたろうに。

「いや、あれで依頼終了とは思わなかったからさ……」
「ああ、それは俺も思った。まさか亀一頭殺して終了とはなぁ」

ジュースがおいしかったので追加注文しつつ、俺はうーむと唸り声を上げる。

確かにあの移動要塞は驚異的だったけど、アイティスがおびえる要因としてはいまいちな気もするんだよなぁ……。

あの広場をわざわざこしらえたり、あそこにおいたのが原因みたいに見えたけど、あくまであそこにいるだけじゃ脅威にはならねぇよなぁ……。

「んん？　なんだお前さん。キルトの言ってた依頼を請け負ったのか？」

「え？　キルト？」

「今のギルド長の名前だよ。ともあれ、あんな怪しい依頼請けたのか？」

おっさんの驚いたような声に驚く俺。

いや確かに怪しい依頼だったけど、そんな驚くようなことか？

「アイティス大移動の原因調査なんざ、いつ終わるかわからねぇ様な依頼じゃねぇか。五百万なんて、完全に割が合わんぜ」

「ああ、そういう意味ね……」

「ただでさえ今の森にゃ悪い噂が絶えねぇってのに、物好きな奴だぜ」

「悪い噂？」

俺の疑問に、おっさんはしたり顔で頷いた。

「ああ。黒い馬に乗った姉ちゃんに森に入ったら殺すと脅されたり、胡坐掻きながら宙を飛んでるジジイにけたたましい笑い声を上げながら追い掛け回されたとか、そんな噂ばっかりなのさ」

黒い馬に乗った姉ちゃんはともかく、ジジイの方は初耳だな……。
人間を森の中に入れようとしなかったのは、間違いなく移動要塞を見られないようにするためだよな？
存在を知られないようにするなら、危険であると脅したほうが効率がいい気はするな。
アイティスが森の入り口周辺に移動しちまったから、実際に被害が出たり城の方に依頼が来たりするほど被害は出してないみたいだけど……。

「ハン。そんなの、アイティス大移動したせいで逃げてきた腰抜けの嘘だろう？　気にする方がどうかしてるんだよ」
「そういうけどな、カレン。お前だってあの亀が爆発した現場に来た女騎士の姿みたろう？」
「う、そりゃそうだけど……。あれが一々人間を追いかけまわしたっていうのかい？」
「うわさに聞く外見とは一致してるよな」

そうなれば、人間を追いまわしたジジイとやらも魔王軍関係者ってことになるよな……。

「なあ、おっさん？」
「なんだ？」
「なんかこのジュースに合う食い物ってない？」
「そうだな、揚げポテトに塩振りかけたのならすぐできるが」
「じゃあ、それひとつ。それから、胡坐ジジイに関する噂って他にもないかね？」

魔法か何かで、あっという間にぱちぱち音をたてはじめる油鍋の中に薄切りポテトを放り込みつつ、おっさんは首を傾げた。

「さあなぁ。アイティスが森の入り口辺りに出てくるようになったっていう前に聞いた話だからな。それ以来、森の奥に踏み込む奴もいないから、ほとんど話を聞かなくなっちまったんだよ」
「そうか……」
もし情報があれば、持って帰りたかったんだけど、仕方ねぇか……。
高温でさっと揚げたおかげでサクサクなポテトを食べつつぼんやりする俺に、なぜかカレンがせっつくように声をかけてきた。
「で？　あんたはいつ帰るんだい？」
「んー？　さしあたって飯を食うまで？」
「今何時だと思っているんだい！？　さっさと帰れ！」
「バカ野郎。客に向かって帰れなんて言うやつがあるか」
「いいこと言うなー、おっさん」
「おう。ぜひ今後もご贔屓にしてくれよ？」
「ぜひ贔屓にさせてもらうよ。今度はコウたちもつれて」
「やめろバカー！？」
何を嫌がってるのかは知らんけれど、今後もこの喫茶店を利用することにしよう。
何事も、情報の最先端は噂だしな。

No.34：side・ryuzi「喫茶“アメリアの泉”」（後書き）

カレンさん的にはフリフリエプロンドレスは黒歴史なご様子。
何やら怪しげな新キャラ登場の伏線を張りつつ、次回の内容どうしようと悩む今日この頃。
次回はまた魔族が来るかもしれません。

No．35：side・remi「宮廷魔導師への想い」

「だから、魔法の詠唱ってのはその魔法がどういうもので、こういう効果だっていうものを宣言してから、その魔法の名前を宣言して発動するんだよ」

「うん。じゃあ、真子ちゃんとかがやってる詠唱破棄ってどうやるの？」

「人間、立って歩いたりするときは特別意識しないだろ？　詠唱破棄はそれに似てるんだよ。普通、詠唱破棄は熟達した魔法でしかできねーのに、なんであのねーちゃんはできんのかな……」

魔法を教えてくれていたジョージ君が、めんどくさそうにポリポリ頭を掻きました。

今日、私はジョージ君に魔法のいろんなことを教えてもらっています。

祈りのバリエーションを増やすのも大事だけれど、こういう地道なこともきっと大切だと思ったからです。

ジョージ君も初めはいやいやという感じでしたが、講義に熱が入ってくるとそれも忘れて一生懸命教えてくれます。

私はジョージ君の言葉を一言一句聞き逃さないように、集中しました。

「詠唱破棄は、本来口で行う詠唱部分を頭の中で終わらせなきゃならねぇから、十分その魔法の内容を理解してなきゃ詠唱破棄なんてそもそも無理なんだよ」

「つまり……暗算みたいなものなのかな？」

「難易度は相当開きあるけど、そんなもんだよ。だから、いきなりやろうとしてもできるもんじゃねぇはずなのに……」

やっぱり、真子ちゃんはすごいみたいです。普通の魔法使いはそう簡単にできない詠唱破棄を、いきなり使えるようになってるわけですし。

「でも、ジョージ君も詠唱破棄できるよね？」

「そりゃそうだよ。俺はばあさんに拾われてから、ずっと魔法漬けの生活だったんだ。お前とは年季が違うっつーの」

ジョージ君が誇らしげに胸を張ります。

ジョージ君も、やっぱり苦労してきてるんだね……。

「ともかく、今のお前には詠唱破棄は無理だよ。っていうか、お前の祈りも十分詠唱破棄に入るじゃねぇか」

「うん、そうなんだけど……自衛のための祈りが、防御できる盾を呼び出すのしかないから……」

そういって私は一枚透明の盾を呼び出しました。

ここ最近の訓練で、これくらいなら特別意識しないでも出せるようになってきました。

でも、これはリラックスできてる今だから出せるわけで、本当に危ないときに出せる自信はまだありません。

ジョージ君は私が呼び出した盾を見て、ため息をつきました。

「名称宣言もなしに盾呼んどいて……」

「身を守るには、これで十分かもしれないけど、いつもみんなが周りにいてくれるとは限らないもの。私も、一人でなんとかできるくらいの力をつけておかないと……」

今の私の目標は、私一人だけでも十分戦えるだけの力をつけることです。

将軍さんとの戦いのときは、真子ちゃんと。この間の戦いのときは光太君と行動していました。

足手まといには、たぶん、ならなかったと思うけれど、やっぱり私がいないほうが気兼ねしないで力が振るえると思うんです。

「だったら、盾で殴るなりなんなりすれば簡単じゃねーの？」

「うぅん、隆司君にも同じこと言われたんだけど……」

ジョージ君の言葉に、私は盾に手を当てて動かそうとします。でも、空中に浮いた盾はピクリとも動きませんでした。

「こんな感じで、私が呼ぶ盾は空中に固定されちゃうみたいで……。隆司君でも動かなかったから、たぶん動かないんじゃないかなぁ？」

「めんどくせー……」

ジョージ君は私が盾を消した辺りをじっとりとした眼差しで見つめてから、傍らに積んであった本を一冊手に取りました。

「とりあえず、詠唱が短くて簡単な魔法（ヤツ）からやってみるか……」

「それって、火球とか鎌鼬（ファイヤーボールウィンドカッター）みたいな奴かな？　できれば、あまり危なくないのがいいんだけど……」

「はい？　危なくない？」

「うん。使っても、相手が傷つかないくらいの……」

私の言葉に、ジョージ君がひときわ大きなため息をつきました。な、何かおかしなこと言ったかな？

「お前、やっぱりバカだろ？　戦いで相手のことを気遣って戦うやつが普通いるかよ？」

「だ、だって、私は魔王軍の人たちを傷つけたいわけじゃなくて…

…」

ジョージ君の言葉に、私はしどろもどろになりながら反論しました。

もちろん、オーゼさんをはじめとする神官の人たちや、騎士団の人たちが魔王軍の人たちをあまりよく思ってないのは知っています。騎士団の人なんかは、傷ついてる人もいますし。

でも、だからといってやり返すのはダメだと思うんです。

理想論かも知れないけれど……、お互いに言葉だけで解決できればそれが一番いいと思うから。

「それに、私は魔王軍と和平を結びたくて、こうして力を身に付けようとしてるんだもの。だから、そういうのじゃない魔法を覚えたいんだ」

「さすがです、レミ様。例え敵対している関係にあるものに対しても、慈悲のお心を忘れない……」

横から、入れたての紅茶が差し入れられました。

驚いてそちらの方を見るとヨハンさんがやさしく微笑んでこちらを見つめていました。

「そしてその慈悲のお心を貫かれるために、自らの力を磨くその御姿……。我々神官一同、励みとし、そして指針といたしております」

「ヨハンさん……ありがとうございます」

私は紅茶のお礼と、私の意見に賛成してくれたお礼、二つ分の感謝をこめて頭を下げました。

私が紅茶を頂くと、ヨハンさんはジョージ君が積み上げていた本のうちの一冊を手に取りました。

「そういうことでしたら、こちらの方がよろしいかと思われます」
「おいおい、そっちは捕縛系の魔法が載ってるやつじゃねぇか」
「ええ。これでしたら、レミ様の御希望に添えるはずです」
「魔法習って一ヶ月もしねぇ素人が覚えられる魔法じゃねぇぞ……」
「いいえ、大丈夫です。レミ様でしたらきっと覚えられますとも！」
「あ、ありがとうございます」

力強く、そう断言してくれるヨハンさんの言葉に照れながら、私はその魔導書を手に取りました。
中を開いてみると、まだ私には読めない魔術言語（カオシックルーン）がたくさん書かれていました。
ううん、私まだ基本のルーンしか覚えてないから……。
でも、これを覚えられれば、私が複数の魔族の人を足止めできるようになるかもしれない……。

「ジョージ君。この本が読めるように、教えてもらっていいかな？」
「……別にいいけどさ」

ジョージ君はやっぱり少しいやそうではありましたけど、頷いてくれました。
ううん。やっぱり、普通じゃないよねこういう学習方法……。
それでも、自分の意志を貫きたいなら、回り道でも進んでいかなきゃいけません。
だって、自分には、絶対に嘘をつけないんですから。

「それにしても、フィーネ様ではなくジョージ君が教えているとは、意外ですね」
「なんだよ。悪いのかよ？」

ヨハンさんが、ジョージ君の分の紅茶も入れながら、そんなこと

を言いました。
ジョージ君はなんだか苛立たしそうに眉根を吊り上げましたけど、私がすぐに説明しました。

「あ、今日はフィーネ様の姿が見えなかったので、私がお願いしたんです」
「ああ、そうでしたか。確かに今日はまだお姿を見ていませんでしたね」
「なんか、召喚魔法陣の部屋でうんうん唸ってたぜ。あいつ、何やってんだか」

フィーネ様は、あの宴会の日から召喚魔法陣の部屋に訪れて、いろいろと考え事をすることが多くなったようです。
真子ちゃんに聞いたら、今は放っておいてあげて欲しいって。
なんだかすごくつらそうに悩んでいるから、声をかけてあげたいんですけど……。

「それにしても」

昨日見た、憔悴した様子のフィーネ様を思い出して陰鬱な気分で息を吐き出すと、ジョージ君がこちらの方を不機嫌に見つめているのに気が付きました。
？　なんだろう？

「お前も、フィーネのことは様付なんだな」
「え？」

私は質問の意味が解らずに首を傾げます。
どういう意味だろう？

「フィーネの奴、俺と同い年で、お前より確実に年下だぜ？」
「え、そうなの？」
「ええ、そうらしいですね。記憶する限り、私が王城仕えになった年に御先代が二人の赤子を拾ってきたとうわさを聞きましたので……。今年で十を数えるほどでしょうか」
「そうなんですか！？」

私はびっくりして大声を上げてしまいました。
十歳……。そんな若さで宮廷魔導師なんだ！
あのしゃべり方だし、てっきりもっと年上なのかと思ってただけに、ちょっとショックです。

「知らなくても、あの見た目じゃねぇか。あのねーちゃんは呼び捨てなのに、なんでお前は様付なんだよ」
「えーっと」

ジョージ君の再度の質問に、ようやく私はその意味を理解しました。
見た目相応なら、確かに様付するのは違和感があるかもです。
でも、私の場合フィーネ様は年上だって思っていましたし、それに……。

「宮廷魔導師なら、やっぱり様付するべきだと思うよ？」
「なんで」

詰め寄るようなジョージ君の言葉に、私は紅茶を一口すすってから答えます。

「フィーネ様が魔導師団の長の、宮廷魔導師だったら、様付はとても大切なことだよ。たとえば、王様の名前を国民の人みんなが呼び

捨てにしちゃったら、ほかの国から王様扱いしてもらえないかもしれないんだよ？」

「そうか？　そいつが王様だったら、そんなこと思わねぇと思うけど……」

「ううん、違うよ。王様を王様としてるのは王冠や玉座じゃなくて、周りの人の態度なんだよ」

これは民主主義の基本的な考え方。

つまり、周りの人がその人を王様と認めているからこそ、その人は王様なのであって、周りの人が認めていなければその人に王様としての実力や資格はないのと同じこと。

それでなくても、呼び捨てや親しいあだ名というのは、その人の品格や権威というものを柔らかくしてしまうけれど、大勢の人のトップとして立つ人間にそういう状態は決してふさわしいものじゃない。

「どこかの団体のトップに立つなら、敬意を払わなきゃいけない。私は、もともとこの国の人じゃないから余計にね。だから、たとえフィーネ様が私より年下だとしても、私はフィーネ“様”って呼ぶよ」

「……」

「権威を形作るのは称号ではなく、その人間がどう呼ばれるかということです」

ジョージ君が納得できないっていう顔でうつむくと、ヨハンさんが補足で説明してくれました。

「たとえジョージ君にとって、フィーネ様が幼馴染の“フィーネ”であったとしても、対外的にはこの国の筆頭魔導師なのです。レミ様は、その筆頭魔導師フィーネ様に敬意を払われているというわけ

ですよ」
「……フン。そーいわれてもねぇ」
ヨハンさんの言葉に小さく鼻を鳴らしたジョージ君は両手を後ろ頭憎みました。
「ほんの一年前まで寝ションベン垂れてた泣き虫フィーネがこの国のトップ魔導師だなんて、誰が想像したんだよ?」
「さて? 少なくとも、私の目にはフィーネ様は優れた魔導師に見えましたが」
ヨハンさんの言葉に、ジョージ君が歯茎をむき出しにして唸りました。
「俺の力がまるで宮廷魔導師足りないっていいてぇみたいだな……」
「まさか。ジョージ君も、十分に宮廷魔導師の器だと思っていましたよ」
ヨハンさんが笑顔でそう答えましたけど、ジョージ君は納得がいっていないようです。
「ジョージ君もフィーネ様も、すごい魔導師なんですね」
「ええ、本当に。……それだけに、御先代の早逝が悔やまれましたよ」
ヨハンさんの顔が曇りました。
先代の宮廷魔導師様……。フィーネ様とジョージ君の育ての親だったそうですが、半年ほど前に亡くなったと聞きました。
病気が原因だったそうで、その時にフィーネ様を宮廷魔導師として指名したのだとか。

「戦時中というのもありましたが、フィーネ様もジョージ君もこれからというときでしたからね……」
「……ジョージ君」
「……なんだよ」
不機嫌さを隠そうともしないジョージ君に、私は聞いてみます。
不躾な質問だとは思いましたけど、聞かずにはいられませんでした。
「ジョージ君は……宮廷魔導師に選ばれなくて悔しかった？」
「――――当たり前じゃねぇか。俺の方が、フィーネよりずっとすげぇんだぜ！？」
そういって立ち上がるジョージ君の顔に浮かんでいるのは、悔しさではなく……。
私は一つ頷いて、ジョージ君の両肩に手を置きました。
「それじゃあ、頑張って証明しよう？　フィーネ様が、宮廷魔導師でいられないくらい頑張って。みんなに認めてもらおう？」
私はジョージ君の目をまっすぐに見てそう言いました。ジョージ君の心の奥底にあるのは、フィーネ様……ううん、フィーネちゃんへの想いです。
彼がやさしさからこんな物言いになるのであれば、それを解決するために尽力するのはきっと悪いことじゃないはずです。
ジョージ君は私の言葉に、少し驚いたように目を見開きましたが、すぐに目をそらしてしまいます。
「……そんなこと言ったって、どうすればいいんだよ」

ジョージ君の言葉に、私は小さく頷きます。
普通はそうです。万言尽くしたところで、フィーネちゃんの宮廷魔導師の資格が消えるわけじゃないです。
何しろ先代様の指名な上、その先代様はもうこの世にいないんです。
でも、覆す方法はいくらでもあります。あるはずなんです。
たとえば……世界を救う勇者を育てるとか。

「さしあたっては、私に魔法を教えてくれること」
「は？」
「そして、私がこの国を、世界を救えば……それは魔法を教えてくれたジョージ君の功績になるよ。私がそういうよ」

私の言葉に、ヨハンさんが笑みを深めました。

「なるほど。レミ様の御威光を、ジョージ君が育てるわけですね。それならば、きっと誰からも文句は出ますまい」
「ヨハンさんも、そう思いますか？」
「はい、もちろんでございますとも！」

ヨハンさんが膝をついて、頭を垂れます。
うーん、最近はオーバーリアクションが減ってきたけど、こういう恭しい態度が板についてきたような……。
ヨハンさんの態度に苦笑する私のそばで、ジョージ君が少しだけ悩んで、顔を上げました。

「おい、レミ」
「うん？　なに？」

私が首を傾げると、ジョージ君が真剣な表情で宣言しました。

「俺はフィーネみたいに甘くねぇぞ。ちゃんとついてこいよ」

「……うん、わかったよ」

ジョージ君の言葉に、私は強く頷きました。

ジョージ君にも、フィーネちゃんにも、ちゃんと笑顔を取り戻してほしいもんね。

No．35：side・remi「宮廷魔導師への想い」（後書き）

そんなわけでイベント：師弟の契りが発生しました。真子がフィーネとのイベント：帰れないを消化していることが発生条件です（違可能ならこっからジョージ君イベントをひねり込んでいきたいです。っていうか今想定している範囲内でも、結構複雑でめんどくさいなジョージ君。

結果として魔族が来ませんでしたねー。嫁の出番はもう少し先だよ、隆司君。

No．36：side・mako「必要は発明の母？」

パーン！

騎士団修練場に、乾いた音が響き渡った。

あたしは長い棒状のものを構えて十メルトほど先に並べた的を狙うサンシターの姿を難しい顔で眺めていた。

サンシターはそんなあたしの視線を気にしてか、こめかみから冷や汗を流しつつ棒状のものを操作する。

パーン！

また乾いた音が響き渡る。

「おー。何それ、ライフル銃？」

響いた音を聞きつけたのか、隆司の奴が顔を出す。

昨日はデカい依頼を成功させたとかで、アスカやアルルがぶっ魂消る報酬を持ち帰ってきた。それと、気になる情報も。

馬に乗った騎士は聞いてたけど、胡坐をかいたジジイね……。噂話によれば、森の中へ進もうとする人間を追い掛け回したって話だけど、アイティスとやらの移動に伴ってその姿を見なくなったとか。

つまり、森の中にいた魔王軍は最低でも三人。少人数で行動している以上、四天王とその直下ってところかしら……。

行方が知れないっていう点じゃ、魔王軍の侵攻部隊よりずっと厄介ね。森に作った拠点が潰された次の行動……さて、どう動くのかしらね。

「……うん、まあそんなとこ」

あたしは内心の疑問を押し殺し、さしあたっては目の前の問題に対処することにする。

隆司のいうとおり、サンシターが今構えているのはライフル銃……といっても、あたしの記憶の中にある猟銃を、ギルベルトさんの協力のもと何とか形にしたっていうものだけど。

そのため、見た目はかなり粗削りだ。子供に火縄銃を描かせたようなフォルムになっており、弾丸を込める位置には光輝石（マナクリスタル）を組み込んでいる。

今回の光輝石（マナクリスタル）には簡単な魔力弾を撃ちだす魔法を組み込んであり、持ち手の魔力を吸収し、トリガーを引くことでその魔力を弾として撃ちだす、という機構を採用している。

この銃の話をしたとき、ギルベルトさんは効果のほどをずいぶん危惧していたけれど……なるほどね。その理由も納得だわ。

「俺も撃てる？　撃てるなら撃たせてくれよ」

「残念ながら、身体から出る魔力を吸収して撃つタイプよ。あんたじゃ使えないわ」

「なんだつまらねぇ」

「……まあ、それを抜きにしても、普通に使えないんだけどね」

「んん？　どうしてだよ？」

試射の様子を見ていなかった隆司にはわからない話よね……。

「サンシター、どう？」

「ダメでありますね……。どうしても狙った位置に飛んでいかないであります……」

サンシターが首を振って、あたしの方に銃を差し出す。

そう。今の銃では弾道が安定せず、まっすぐに弾が飛んでくれな

いのだ。
まさか魔法の弾がまっすぐ飛んで行かないとは思わなかったから、結構適当な作りにしちゃったんだけど……。ちゃんと考えないと駄目ね、やっぱり……。
あたしは銃を受け取る。と、隆司が横から手を出してあたしから銃を奪い取った。
そして、銃口から銃身の中を覗き込む。
「んー。ライフリングとかはねぇのか？」
「うん。まさか魔力弾がまっすぐ飛ばないなんて思わなかったから……。そもそも刻んだところで弾道が安定するとは思えないし」
「確かになぁ。ＢＢ弾をはじくみたいな感じでまっすぐとばねぇもんかね」
「あんた、そういうのに詳しい方？」
「んにゃ」
首を振って、銃を放ってよこす隆司。
もしこいつがそういうのに長じてるなら、この手の武器の開発に一役買ってもらうつもりだったのになぁ……。
「ところで、マコ様」
「んー？　なにー？」
銃をいじって光輝石（マナクリスタル）を取り出そうとするあたしに、サンシターが声をかけてきた。
「その武器は、いったい何のために開発されたものでありますか？」
「一応使ってたんだから、用途はわかるでしょう……？」
余りといえば余りな質問に、思わず半目になってサンシターを睨

むあたし。
　サンシターはごまかすように笑顔を浮かべた。
「いえ、使いはしたでありますが、もし想像と違ったらと思ったでありますので……」
「はぁ……。これは、騎士団に使わせるための武器よ。用途は遠距離用の武器。光輝石（マナクリスタル）を組み込んで、誰でも発動できる光矢弾（ライトボウ）を発動できるようにしたんだけど……」
「いまいち弾道が安定しないと」
「そういうことよ……はぁ……」
　もしこれが量産できれば、遠くから敵を撃つだけでよくなるんだけどなぁ……。
　あ、いや、まてよ？
「ちょっと隆司、そこに立っててもらえる」
「あん？」
　隆司に一言断ってから、あたしは五メルトくらい隆司から離れる。そして怪訝な顔してこっちを見つめる隆司の顔を狙って銃を構えて素早く引き金を引いた。
　パーン！
「うぉおおお！！？？」
　隆司は慌てて回避行動を取る。
　スウェーバックって奴かしら？　上半身をそらすように左に傾けた。ってことは、あたしから見て左の方に弾丸は逸れたのかしら？
　冷静に観察してるあたしに、隆司がとんでもないものを見る目で

こっちを見た。

「どうしたんだ真子!?　ついにストレスが頂点に達して俺を亡き者に!?」

「自覚があるなら直せバカ野郎。……あんた、今の弾見えた?」

隆司の戯言を軽くスルーしつつ、目的の質問を行う。

隆司はあたしからの二撃目を恐れてか徐々にサンシターの方に近寄りながら答えてくれた。

「ああ、一応。かなり速かったけど、避けられないほどじゃなかったぜ?　魔力ケチったか?」

「まさか。全力で込めたわよ」

「ヲイ」

「まあともかく、これではっきりしたわね。この銃、このままじゃ魔族には通用しないわ」

ジト目でこっちを見つめてくる隆司を無視しつつ、あたしは手に持ったライフル銃を見下ろした。

隆司に見切れる、ということはおそらく魔族にはこの銃の弾道が見えるのだろう。

かなりアバウトな診断方法かもしれないが、隆司の身体能力がすべて魔族並みなのは騎士団長さんも認めるところだ。この男が見えるなら、おそらくソフィアは当然として、その親衛隊も見切ることができるはずだ。

下位魔族に関してはさすがにわからないけど、たぶん遠くから撃ったら余裕で避けられるわね……。

コンセプトに対して能力が完全に追いついてないわけだ……。これじゃ、量産しても使えないわね……。

「はぁ、また一から練り直しかぁ……」

あたしは陰鬱にため息をついた。

あの日、できる限りのことをすると誓ったあの瞬間に、真っ先に思い浮かんだのが騎士団の全体的な強化で、そのために使用する兵器が銃だったのだ。

元々、こういう形でこの世界に干渉するつもりはあまりなかった。特に銃器のような武器は、戦場の様相を一変させたことからわかるように、対人戦闘において強力すぎる。これが量産されて、どの家にも置かれるような有様になってしまえば、この国がどんなふうに変わってしまうか想像もつかない。

でも、騎士団の強化はあたしたちにとっては急務といえた。ヴァルト将軍のようなチートはともかく、現在の侵攻軍において要となっているのはソフィアとその親衛隊、そして一般兵卒魔族たちだ。

確かに隆司はソフィアと互角だし、光太や礼美、あたしだって親衛隊と互角かそれ以上の力を持っていると思う。でもそれは逆に言うと、そいつらの相手を必然的にあたしたちがするということになるのだ。

それ以外の一般兵卒魔族たちの相手は、騎士団の人たちにやってもらうわけだが、一部の人以外は完全に戦力外だ。平和ボケにもほどがある。

いや、この騎士団の基本任務が、強力な動物退治らしいから、仕方ないといえば仕方ないのだ。一頭の獣を倒すのと、一人の人間を倒すのでは基本的な戦術が異なる。

とはいえ、対人戦闘が弱すぎるのは大きすぎるウィークポイントには違いない。急いで補強する必要があった。あたしだって、前の戦いのように毎回無双できるわけじゃないしね。

で、その足掛かりとして銃を配備しようと思ったわけだが……。

「弾はまっすぐ飛ばない、そもそも魔族には通用しそうにない……。

こんなに使えない武器だとは思わなかったわ……」
「火薬で飛ばすなら結果も違ったろうになぁ」

隆司の言葉に余計へこむあたし。
まあ、確かに光矢弾（ライトボウ）の弾速は、人間にも飛んでいく軌跡が見える程度の速度しか出ない。そもそも光矢弾（ライトボウ）が魔族に当たるなら、前線に魔導師を大量配備すればいいだけだしね……。
しかしこうなると、次に作る兵器はどうしたものか……。
なるべくなら全般的に均等に強化できるものがいいんだけど……。

「サンシター、ちょっといい？」
「はい？　なんでありますか？」

的を片付けていたサンシターに声をかける。
やっぱりこういうときは、使用する予定のある人に聞くのが一番よね。
まあ、サンシターの実力を考えると、装備するだけ無駄かもだけど……。

「サンシターならさ。装備するとしたらどんな武器がいい？」
「武器、でありますか？」
「そう。騎士団全体を強化するための武器の原案考えてるんだけどさ、サンシターはどんな武器があったらいいと思う？」

サンシターはしばらくあたしの言葉に悩んでから、顔を上げた。

「それでしたら、自分盾が欲しいであります」
「盾？　なんで？」
「自分、剣の腕も体術の技術も槍術にも自信がないであります。でも、盾で身が護れれば少しでもみんなの役に立てるかと思うであり

ますから」
「……考えとく」

何とも涙ぐましい話に、あたしは思わずうなずいていた。
この間の戦闘見てるとねぇ……。何度やられても立ち上がる姿に涙が禁じえなかったわ……。まあ、最後辺りは相手も泣いてたみたいだけど。
しかし盾かぁ……。騎士団標準装備の武器にするなら、どんな効果を持つ盾がいいのかしら……。
魔力を込めると大きく魔力シールドを張るみたいな奴？　それとも手から飛んで行って、敵を斬り裂いて戻ってくるような奴？

「しかし、量産とは言うけどお前、そんな簡単にいくのか？」
「ああ、それは大丈夫」

あたしの考えを途中で寸断して、懸念を口に出す隆司。
物を作るうえでは当然の懸念だけど、隆司。あたしが何も考えずに量産とか言いだすと思った？

「光輝石（マナクリスタル）に魔法を込めるのは、あたしの能力でなんとでもなるみたいだから、あとは出来合いの盾やら剣やらにその光輝石（マナクリスタル）をはめるだけで、簡単にできちゃうのよ」
「なんというチート……」
「あんたに言われたくないわ」

いやあたしも若干そう思うけどさ。まさか光輝石（マナクリスタル）に魔法を込めるのがこんなに簡単にうまくいくとは思わなかったのよ。
実際、今回の銃に魔法込めるのにも十秒かからなかったしね。一日で相当数魔法入り光輝石（マナクリスタル）が作れるんじゃないかしら。
あとは……ギルベルトさんに頼んでるあの謎の鉄片の解析結果待

ちかしら。

「しかしこの銃はもったいないよなぁ……。どうにかして使えるようにならねぇもんかね」

「そんなに欲しいなら上げるわよ？」

隆司が何やらあたしの手の銃を見て唸っていたので、渡してやる。

そもそも見た目は銃だが、ほとんどハリボテなのだ。壊そうが折ろうが好きにしたらいいだろう。

隆司はあたしから銃を受け取ってしばらくあれやこれやいじくっていたが、いきなり何を思ったのか銃を真ん中あたりからへし折った。

いや、折ろうと好きにしろとは思ったけど！　ホントに折るとは思わんかったわ！

そして半分くらいの長さになってしまった銃を見て満足そうにうなずくと、サンシターに手渡した。

「ちょっとサンシター、これ使ってみ？」

「はぁ……」

サンシターは隆司から銃を受け取ると、まだ片付け終わっていない的に向けて銃を向ける。

そして響く銃声。

パーン！

今度の弾は、的の中心からかなり外れていたが、しっかり的へと命中していた。

「ってなんで！？　なんで当たった今！？」

「す、すごいであります！　リュウ様、これはいったい！？」
「いや、単に銃身短くしただけだけど……変わるもんだなぁ」
「だから何でよ！？」

あたしがガーッと吠えて詰め寄ると、隆司はポリポリと頬を掻いて答えた。

「いや、よく考えたらエアガンにしろガスガンにしろ、猟銃みたいに銃身長くないだろ。だから短くしたら案外うまくいくかなーって」
「そんなばかな！？」

そんな適当理論で弾道が安定するもんなの！？
サンシターはうまく当たるようになって嬉しくなったのか、さらに二、三発銃を撃っていた。
いずれも的の中心こそ射抜くことはなかったけど、しっかり的には当たるようになっていた。

「でもこれはすごい進歩でありますよ！　ひどいときには三つ隣の的に当たったこともあるでありますから、狙ったらまともに飛ぶというのは十分使えるであります！」
「弾速的には、魔族に当たらんらしいがなぁ。まあ、至近距離で撃てばさすがに当たると思うけど」

素直に喜ぶサンシターに、隆司が首を傾けながら応じる。
いやしかしこれは僥倖かもしれない。銃身を短くすれば、ある程度弾道が安定する効果があるのは確かなのだ。ひょっとしたら銃の根元に光輝石（マナクリスタル）を設置したせいで、銃身の中で弾が暴れて弾道自体が捻じ曲がっていたのかもしれない。
つまり、短い銃身の銃……拳銃位の代物なら武器として作る価値があるということだ。

隆司のいうとおり、さすがに至近距離なら当たるだろう。剣や槍と違って構える動作さえこなせれば、引き金を引くだけでまっすぐ飛ぶ拳銃は接近戦でも十分な脅威となれる。銃につきものの反動も、魔力を飛ばすから関係ないし。

弾切れに関しても、使用者の魔力を吸収するタイプにすれば、気にする必要はないし。

よしよしよし、ダメかと思った銃武装案が、一気に現実味を帯びてきたじゃない！

「よし、ならこれから図案を詰めていこう！　いくつか作って、騎士団の人に持たせて……！」

こうしちゃいらんないわ、さっそくギルベルトさんに頼んで図案設計に協力してもらわないと……！

あたしは男二人で何やら盛り上がり始めている隆司とサンシターを置いて、ギルベルトさんがこもっている錬金研究室へと駆け出すのであった。

Ｎｏ．３６：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「必要は発明の母？」（後書き）

こっちでの真子ちゃんのポジションに「発明家」が加わりました。ネタ帳にいろんなネタを詰めて、魔法の道具を作るのがお仕事。今はハリボテに光輝石（マナクリスタル）を組み込むので精いっぱいですけど、将来的には……？

なんていろいろ引っ張りつつも、使えすぎる設定にしないように苦労するのが見え見えですよね拳銃。これが通用するなら、苦労しないという。

さて、今度は光太君のお話といきましょうか。ラブコメラブコメー。

No．37：side・kota「意志の力、マナ」

「はっ！　せいぃ！」

掛け声と一緒に勢いよくアスカさんに斬りかかる。
アスカさんは危なげなく僕の一撃を受け止め、軽くいなした。
そして僕のがら空きの脇に木剣の一撃を叩きこんでくる。

「くっ！？」

慌てて剣を引き、アスカさんの一撃を受け止める。
想像以上の一撃に、体勢が崩れた。
そこへ、アスカさんの鋭い蹴りが僕のお腹に決まった。

「ぐほっ！？」

そのまま後方へ吹き飛ぶ。剣こそ手から離さなかったけれど、あまりの痛みにしばらく地面を転がってしまう。
アスカさんの次の一撃に備えて、何とか立ち上がろうとするけれど、身体に力が入らない。
朝から立て続けに訓練を続けていたせいかもしれないけど。
それでも何とか立ち上がって、アスカさんに木剣を向ける。
でも、アスカさんはもう木剣を下げていた。

「コウタ様、今日はここまでにしておきましょう」
「まだ、やれますよ……！」

僕は何とか声を絞り出すけど、アスカさんは首を横に振った。

「焦るお気持ちはわかります。ですが、焦って身に付けた力はコウタ様の身を滅ぼしかねません。正しく休息を刻むのも、剣士として正しい修練なのです」

行き過ぎた行動を諫めるようなアスカさんの言葉に、しばらく荒い息で呼吸していた僕はゆっくりと剣を下に下げた。

確かに、アスカさんの言う通りなんだよね……。焦って剣を振っても、隆司やアスカさんに追いつけるわけじゃないんだよね……。

僕はゆっくりと地面に腰を下ろし、呼吸を落ち着けるように深く息を吸い込んだ。

「どうぞ、お水です」

「ありがとうございます……」

アスカさんが差し出してくれたコップの中身を、少しずつ口に含む。

魔法か何かでしっかり冷やされた水が、火照った体を冷やしてくれる。

水を急がずゆっくり、でも一息で飲み干して、僕は一息ついた。

そんな僕の隣に、アスカさんが腰を掛けた。

「はぁ……」

「コウタ様、ここ最近は熱心……いえ、急ぐように剣を振られていますが、何かあったのですか？」

覗き込むようなアスカさんの視線。真摯な眼差しに耐えられなくなって少し視線をそらしてしまう。

「いえ……。周りのみんなに比べて、僕はあまり力になれていない気がして……」

隆司は、こちらに来てから前よりずっと力や速さが強くなってる。
礼美ちゃんは、その祈りの力でみんなを癒せるようになっている。
真子ちゃんは、魔法をうまく扱えるだけじゃなくて最近じゃそれを利用していろんなものが作れるようになっている。
みんな、それぞれに力をうまく使いこなせるようになってきてる。
でも、僕は今のところ魔力の消費効率が上がってるだけだ。
エア・キャリバーは確かに強いけど、使いどころが難しい。竜巻の力も鎌鼬のような刃も、相手を傷つけずに……ううん、相手を殺さずに制するには力が強すぎる。
ヴァルト将軍のように本物の達人になら、遠慮することなく使うことができる。
でも、この間のガオウ君くらいの人が相手では、どのくらいの加減で打ち込めばいいのかわからなくなってしまう。
前に読んだ漫画で「敵を必要以上に傷つけず、大切な人を必ず守り抜く力というものは、史上最強クラスである」って言葉を、今、身を持って感じている。
今の僕には、とても無理だ。今の僕は、敵を殺すだけの力しか持っていない……。

「コウタ様……」

そんな僕にかける言葉が見つからないのか、アスカさんが迷うように僕の方を見つめていた。
ああ、そんな顔をさせるつもりはないのになぁ……。

「コウタ様～」

そんな僕たちのところに、アルルさんが駆け寄ってきた。
その手にはバスケットが握られていた。

「訓練は終わりですか～？」
「あ、いえ。今ちょっと休憩中で……」
僕は首を振るけど、アルルさんは聞いていないのか無視しちゃったのか、僕の目の前に女の子座りで腰かけた
「今日も～、差し入れにサンドイッチ作ってきたんですよ～」
アルルさんが僕の目にも見えるように、バスケットを開けて中身を見せてくれる。
中にはフルーツや生クリームを挟んだ食パンのサンドイッチがたくさん詰まっていた。
朝から訓練を続けていたせいで、すっかり空いていたお腹が今更になって大きな音を立てて自己主張を始めた。
アスカさんは目を丸くするし、アルルさんはおかしそうにクスリと笑うし、恥ずかしいなぁ……。
でも、正直照れるだけの余裕もなかったから、何とか笑顔を作って「いただきます」といってサンドイッチを手に取った。
口に含むと、サンドイッチの具になっているフルーツの甘味が体の疲れを癒してくれるようだった。
「おいしいです……。いつもありがとうございます、アルルさん」
「いいえ～。このくらいのことで、コウタ様のお役にたてるならこのくらい、お安いご用ですよ～」
アルルさんがほわんとほほ笑む。僕も何となく笑顔になった。
すると、隣からすごい勢いで手を伸ばしたアスカさんが、アルルさんの持っているバスケットの中からサンドイッチを二、三個まとめて掴んで、自分の口の中にツッコんだ。

「ああ～。ちょっとアスカ～、はしたないわよ～」
「フムッ！　フング、フグ！」

アルルさんが、たくさんサンドイッチを持って行っちゃったアスカさんに文句を言うけど、アスカさんは無言でサンドイッチを租借してる。

うわぁ、まるでリスみたいになってる……。そんなにお腹空いてたのかな。なんとなく目つきも悪いし。

もしそうなら、悪いことしたなぁ……。騎士団で唯一の剣の使い手だったから、ついいつも剣の練習に付き合ってもらってたけど……。

この後の訓練は自主練にしようかな。隆司は、またハンターズギルドの方に行っちゃったし。

「ン、ッグム！　……コウタ様、まだ訓練を続けようとお考えですね？」
「え？」

サンドイッチを無事に飲み干したアスカさんの言葉に、僕は首を傾げる。

もちろん、そのつもりだったけど……。

「今日はもう訓練は中止いたしましょう」
「え！？　大丈夫です、まだやれますよ！」
「いえ～。私もアスカの意見に同意ですよ～？」
「アルルさんまで……」

そんなに疲れてるのかな……。いや、体力はまだあると思うんだけど。向こうでだって、今だってランニングは欠かしてないのに。

「コウタ様は気づいておられないようですが……意志力（マナ）が減衰しております」
「え……？　意志力（マナ）……？」
「はい～」
意志力（マナ）ってなんだろう……？　魔力とは違うんだろうし、体力とも違うんだよね？
「あの、意志力（マナ）ってなんです？　まだ僕、体力は残ってますけど……」
「意志力（マナ）とは意志の力。魔力や体力を行使するための意志を燃やすための力とでも言いましょうか」
アスカさんの言葉の意味が少しわからなくなってきた。意志を燃やす、力……？
「体力や～、魔力は～、それ単体では意味をなさないんですよ～」
「え!?　そうなんですか？」
「はい～。ここに意志力（マナ）を加えることで～、初めて魔法や～、騎士団長さんなんかが使う～、覇気になるんですよ～」
ええっと……。
「混乱しておられますか？」
「は、はい……。体力や魔力を使うのに、また別の力がいるなんて思いもしませんでした……」
「そうですか～？　この世界じゃ～、常識ですよ～？」
じょ、常識だったんだ……。

「常識ではありますが、完全に解明されている力でもないのです。これらの説明の大部分は、過去に女神様より賜ったものと聞いておりますゆえ」
「女神様から？」
「はい～。時の女神様が～、神官たちの問いかけに答えたり～、必要に応じて授けたと聞き及んでるんです～」

つまり意志力（マナ）は……女神様の力なのかな？
僕の質問に、アルルさんが首を横に振った。

「いいえ～。女神様曰く、これは誰もが等しく持つ普遍的な力なんだそうな～」
「女神はただその力の顕現を見守り支える存在であるとも伝え聞いています」
「女神様はあくまで意志力（マナ）の象徴……ってことなのかな」

うぅん、難しいなぁ……。

「それで、結局意志力（マナ）って具体的にはどんな力なんですか？」
「簡単に言えば、意志を現実にする力とでもいうのでしょうか？体力を使うにしろ魔力を使うにしろ、何かを成功させたいがために起こす行動ですね？　それを行うための起爆剤になる力……とでもいうのでしょうか？」
「実のところ～、魔術言語（カオシックルーン）は～、魔法効果という法則を確実に確立させるための～、世界に対する宣言で～、実際にありえない事象を発生させているのは～、魔力の混ざった意志力（マナ）なんですよ～」

そうなんだ……。あ！　だから真子ちゃんみたいにほとんど無詠唱（カオシッ）で魔法を発動させることができる人がいるんだ！　あくまで魔術（クルーン）

言語は法則であって、その法則を確立させるためのエネルギーは別にあるから！

「そして、神官たちが“祈り”と呼ぶ現象の根源にある力でもあります」

「え、そうなんですか！？」

「はい。もちろん、意志力（マナ）単体では効果をなしません。ですが、自身の意志力（マナ）を他者や世界に分け与えて意志を伝えることで、ほかの人間の体を癒したり、身を護るための壁を呼び出したりするのです」

なるほど……。あれ？　それじゃあ？

「強く願うことで、自分の願いを顕現することができるってことですか……？」

「ええ、まあ」

「もちろん～、なんでも叶うなんて～、ご都合的な力じゃありませんよ～？」

それはそうだよね。でも……。

僕は素早く立ち上がって、エア・キャリバーに駆け寄った。素振りのために木に立てかけてたんだ。

そしてエア・キャリバーを抜き払って、両手で持って構える。

「コウタ様？」

アスカさんが怪訝そうにこちらを見つめてくるけれど、それを無視して僕は集中する。

魔力を込めるのではなく、自分の意志の力で風の刃を形成する……！

ゴウッ！

エア・キャリバーが唸りを上げて、竜巻をその身に纏う。
でも違う、これじゃない……！　僕のイメージしたのは……！

「コウタ様～！　無理はいけませんよ～！」

アルルさんがあわてたように僕を制止しようとするけれど、それにさえかまわず僕はさらに強くイメージする。
もっと、もっとだ……！　もっとイメージするんだ……！
イメージするのは、宙に舞う鋭い刃。でも風だけじゃだめだ。
風は無形。形がないゆえに、自由に形を変えてしまう。
なら今の僕のイメージを確立できるのは……魔力か！？
途端、僕の体から光輝くの煙のようなものが立ち上り始める。

「なにこれ～！？　光太様～！？」
「これは……覇気！？　いや、この感覚は魔力……！！」

光の、魔力……！　ならばこの光を……！

「鋭い……剣に！！」

僕は叫んで、エア・キャリバーを勢いよく天に突き上げる！
同時に、巻き起こる旋風。
そして、その旋風の中に無数の刃が乱れ飛ぶ！

「光破（ライトニング）……旋風刃（ストームエッジ）！！」

名を呼ぶと同時に、エア・キャリバーの刀身を模した光の刃たちが僕の意志に従い空を飛ぶ。

渦巻く風に乗り、鋭い刃で空を裂く！

「で、できた……！」

「こ、コウタ様！！」

興奮のあまり、思わず顔がほころぶ僕に飛ぶ、アスカさんの叫び。

視線を向けると、旋風に足を取られて転んだアルルさんを、アスカさんが乱れ飛ぶ刃から守っていた。

しまった、技を成功させるのに夢中で……！？

「す、すいません！？」

僕は慌てて旋風と乱れ飛ぶ刃を打ち消し、アルルさんに駆け寄ろうとする。

けど、それが叶わずグラリとその体が倒れた。

「あ、れ？」

「コウタ様！？」

「おっと」

アスカさんの悲鳴より先に、僕の首根っこを誰かが掴む。

「だ、団長！」

「なんかさっきから叫んでばかりだな、アスカ」

僕の頭上から聞こえてきたのは、団長さんの呆れたような声だった。

「だ、ん長、さん？」

「おう。見てたぞ、コウタ。見事な技じゃねぇか」

「あ、りがとう、ございます」

なんだか全身に力が入らず、声もとぎれとぎれになってしまう。

おかしい、な。まだ、体力はあるはずなのに……。

「ぼく、どうし、て？」

「意志力（マナ）も少ねぇのに、あんな無茶するからだ。アスカ、お前がきちんと監督しないからこうなるんだろうが」

「も、申し訳ありません！」

アスカさんが勢いよく頭を下げるのが見えた。

い、いや、でも悪いのは無理をした僕なんじゃ……。

「意志力（マナ）っつーのはな、とてつもなくめんどくさい力なんだよ。魔力や体力と違って明確に観測する方法がなく、しかも自分でもわからねぇ。ある程度魔法や覇気に通じてるやつなら、他人の意志力（マナ）を計ることはできるがな」

「そして、意志力（マナ）が少なくなると、身体を動かしたり言葉を発する意志を顕現することができなくなるんです……！」

ああ、だから僕、今体力はあるけど言葉を発するのも億劫なんだ……。

「申し訳ありません、コウタ様！　本来なら、こうなるより前に御止めするべきだったものを……！」

「い、え。わる、いのは、ぼく、で……」

「まあ、回復する方法がないわけじゃないだろ」

僕とアスカさんが互い違いに頭を下げるそばで、僕の首根っこを持ったままの団長さんがそんなことを言い出した。

意志力（マナ）を回復する方法もあるんだ……。でも、隆司が悪いこと考えてるときみたいな声の感じなのが気になるんですけど。

「では、アスカ」
「は、はい！」
「そこに座る」
「はい！」

団長さんが鋭い声でそう命じると、アスカさんが素早くその場に正座した。僕の状態を気にしてか、ひどく緊張しているように見えた。

そして団長さんが、そんなアスカさんの膝の上に僕の頭を置いた。

って、ちょ、この体勢は。

「あ～！　アスカずるい～！」
「じゃあ、アルルには、コウタの手をぎゅっと握りしめる権利をやろう」
「わ～い♪」

団長さんの言葉に従って、アルルさんが僕のそばにしゃがみ込んで両手で僕の右手を包み込んだ。

っていうかなにこれ、どういう状況なの？

「で、意志力（マナ）を回復する方法だけどな？　こうして誰かと体を触れ合わせるのが一番早く回復する方法なのさ」
「そう、なん、ですか」
「そういうわけで、あとは若い者同士ご自由に～」

そんなことを言いながら、団長さんがヒラヒラ手を振りながら僕の視界からフェードアウトしていった。

こうして体を触れ合わせることで、アスカさんやアルルさんから意志力（マナ）を分けてもらってるのかな？　でも、この体勢の意味は……？

僕はそんなことを考えながら、心配そうな顔で僕の頭を撫でるアスカさんの顔と、幸せそうな顔で僕の右手をぎゅっと抱きしめるアルルさんの顔を見つめるのだった。

No.37：side・kota「意志の力、マナ」（後書き）

光太君、新必殺技を開発したようです。そして新解釈の登場。例えとしては、魔力や体力が水彩絵具で、意志力（マナ）が水です。絵を描くには、基本的に水で溶かないといけないわけですね。もちろん例外もあるでしょうが。

ちなみに団長さんは、割と最初の方からずっと光太の様子を観察してました。団長仕事しろ。

次はようやく魔族の再登場です。やったね、隆司！

No．38：side・ryuzi「石剣奥義」

例によって前日予告狼煙を上げられ、俺たちは騎士団の面々とともに前線哨戒基地までやってきていた。

装備はほぼいつも通り。

しかし真子はあの後試作したらしい魔力式拳銃（木製）を二丁ほど携え、光太の奴は何か必殺技を身に付け、礼美はジョージにいろいろ魔法を教わっていたらしい。

各々パワーアップは順次行ってるってことだな。よきかなよきかな。

ん？　俺？

嫁とのバトルのために妄想（イメージトレーニング）は欠かしていないぜ！

その事話したら、真子の奴にキャメルクラッチ喰らったわけですが。絶対素手の方が強いってこいつ。

まあ、そんなわけで準備万端の俺たちを出迎えたのは、騎士団の1．5倍くらいの人数の魔王軍だった。ただしソフィアも親衛隊も、そして四天王もいない。

「……今日はほかの連中は？」

「今回は我々だけで相手をしよう！」

どうやら隊長らしい熊耳の生えたおっさんに真子が声をかけると、なかなか腹に力の入った大声で返答された。

我々だけって……。

「この人数で、俺たちの相手を？」

「左様！　前回の会戦においての我々は、魔術師殿の力を侮った故に敗北を喫した！　故に今回は手を抜かぬ！」

大声で宣言した熊おっさんは、真子を指差す。

「魔術師殿！　そなたのあの魔法、詠唱に膨大な時間がかかるとラミレス様が見立てられた！」

「真子ー？」

軍師殿に聞いてみると、軽く肩を竦められた。

「まあ、隠す意味もないしね。その通りよ。あれひとつ唱え切るのに、口に出しても三分は最低でもかかるわ」

「口に出さなかったら？」

「最速で四分ぐらいかしら」

「やはり！　なれば我ら、数にてそなたらを押しつぶす！」

熊おっさんの声に応えて、後ろに立っていた魔王軍の戦士たちが鬨の声を上げる。

よく見ると、血の気の多そうな連中だ。前回の会戦にはいた俺たちと同い年くらいの魔族がいないところを見ると、ひょっとしたらヴァルトの直属の騎士たちなのかもしれない。

「真子ちゃん、どうしよう……」

「確かに、騎士団のメンツを数で抑えられて、あたしたちに集中攻撃されちゃ敵わないわね……」

不安そうな礼美の声に、真子が深刻そうに答えた。

今回のこちらのメンツは騎士団長も副団長もアスカさんもいる、フルメンバーともいうべき面子だ。

だがその一方でしっかりサンシターもいたりする。そういう意味でもフルメンバーだ。

騎士団の面々は一人一人の力が魔族以下なので、実質的に足止め

くらいの戦力しか期待できない。数で勝っていたのが唯一の優位だったのに、その優位すら覆されているわけなのだが。
深刻そうな声を出す一方で、真子の顔は涼しげだ。
そしてそんな顔をしたまま、俺の顔を見てクイッと顎を魔王軍に向けて動かした。
ヤレ、と。
サーイエッサー。

「では、いざ参ら」
「あー、気合入ってるところ悪いんだけどさ」

今にも突撃を駆けそうな熊おっさんにストップを駆ける俺。
その後ろでは、真子が礼美に指示を出し、光太に何らかの魔法をかけている。

「何か？」
「いや、真子対策に人数で押してきたのはわかった」

そこで俺は地面に石剣を突き立て、軽く首を傾げてこう聞いてみた。

「じゃあ、俺や光太対策に何か考えてはきてるんよな？」
「なに？」

言うが早いか俺は地面を蹴って熊おっさんの顔面に拳を突き立て、光太は礼美によって加護か何かかけられた体を駆って、光の剣をいくつも魔族に叩きつけ。

間。

だいたい十分ちょっとくらいで今回の魔族軍団は地面に生える奇妙なオブジェと化していた。

「しかし光太。その光の剣、相手に傷がつかないんだなぁ」

「あ、うん。うまい具合に、意志力（マナ）だけ傷つけるようになってるみたいで」

「なにそれすごい。っていうか意志力（マナ）ってなんだよ」

そんな風に世間話みたいな空気を醸し出す俺たちの周囲には逆さに突き立てられた魔族たちの体が生えている。

その周りには俺に顔面ぶっ飛ばされたり光太に光の剣を突き刺された魔族たちがピクピク痙攣しながら倒れている。

そんな様子を見ながら、真子が何やら呆れたような声を上げた。

「あんたたち、某無双ゲームじゃないんだから、雑兵一撃必殺はないでしょう……」

「二人ともすごい……」

礼美も驚きの表情でこっちを見つめている。光太の強化分は礼美の手柄だと思うんだけどなー。

サンシターやアスカさんに他の騎士団員たちもこっちを驚愕の眼で見つめているが、団長さんと副団長さんだけは涼しげな顔でこっちを見ている。

団長さんが軽く肩に棒を担ぎながら、こちらに近づいてきた。

「コウタ。その剣、やっぱ意志力（マナ）を使いすぎるな。実戦で使うのは

今回だけにしとけ。使うなら、もう少し発現に慣れてからだな」
「あ、はい。わかりました」
「リュウジ。お前、剣よりも素手で戦うほうが得意ならそう言え。お前の身体を活かすんなら、そっちのほうが断然いい」
「いや素手で鎧とか吹っ飛ばすのは勘弁だし、嫁の趣味には合わせるべきじゃね？」
「ふ・ざ・け・る・なぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

団長さんの寸評を聞いて素直にそういうと、突然の怒号が響き渡った。
びっくりして声のする方に顔を向けると、なんかよくわからんけどそこに何かいるように見えた。
いや、羽の輪郭とか尻尾の輪郭みたいなものがじったんばったん動いてる……！

「ソフィア（嫁）！　見てたの！？」
「嫁と呼ぶなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

轟！と吠えると同時に魔力の暴風がソフィアを中心に吹きあふれ、一緒に姿を隠していたらしい親衛隊たちの身体も見えるようになった。
あー、姿隠し（インビジブル）って、魔力の影響でも解けるんだなぁ。
ソフィアの太ももに必死と抱きついて諌めようとする狐っ娘と、その前に跪いてひたすらなだめる犬男がなんとなく哀れだ。猫娘は余裕綽々の表情で嫁の後ろに立ってるんだけど。

「お、落ち着いてください、ソフィア様ぁ！」
「そうです！　あの男がソフィア様の伴侶にふさわしくないのは、我ら親衛隊一同賛同する次第であります！」
「私は一押しなんだけどにゃー。一途にゃん？　きっと浮気とかし

ないにゃーよ？」
「浮気とかなにそれこわい。俺の体は嫁専用だ！」
「意味が解らんわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

俺の言葉に顔を真っ赤に怒らせて吠えるソフィア。
フフフ、ここで羞恥ではなく怒りだと思い込むのがポイント。
あとで思い出話をするときに、しつこく聞いて本心を聞き出すのだ！

「貴様今何か変なこと考えてるだろう！？」
「なに！？」

ソフィアが俺の考えを言い当てた……！？
もはや以心伝心すら可能なほどだというのか、俺の想いは！？

「いや、そんな暗黒微笑浮かべられたら、誰でも怪しむにゃん」
「ああ、うん。援護しようがないくらい悪い顔してたよ隆司」
「え？　まじ？」

思わず顔に掌を当ててしまう。
そうかー。顔に出てたかー。少し残念。

「まあ、そんなコントはこっちにおいて」

と、俺たちの隣までやってきていた真子が箱を脇にのけるような動作をする。
うむ、さすが俺たちのツッコミ担当。見事な流れの切りっぷりだ。

「あんたたち、結局なんで姿隠し（インビジブル）してたわけ？」
「私の提案にゃん。二回連続で私たち、結構みじめな敗走してるに

ゃん？」
「ああ、ソフィア様！」
「大丈夫です！　ソフィア様のせいじゃありません！」
敗走、の言葉にソフィアがこっちに背中を向けて体育座りを始めた。
その背中には哀愁が見え隠れする。ああ、抱きしめたい。あまつさえ、翼の付け根をコネコネしたい。
「だから今回は一回間を置く……振りをして、勇者たちの観察をしようと思ったにゃん」
「つまり、今回のこの連中は当て馬か？」
「まあ、言い方悪いけどそういうことにゃん」
俺が地面のオブジェと化している魔族たちを指差すと、猫娘が一つ頷いた。
あー、そりゃかわいそうなことしたなぁ。問答無用で埋めちまったよ。
そろそろピクピクがビクンビクンに変わり始めてるので、カブを抜く要領で体を引っこ抜いてやることにする。熊おっさんが苦しそうに息を吸い始めた。
そんな感じで一人ひとり抜いてやっている俺をよそに、ソフィアが立ち直ったのか勢い良く立ち上がった。
「そうしてお前たちの戦い方を研究し、次の戦に備えるつもりだったのだ！　だというのに……！」
全員の体を抜き終えた俺を指差し、ソフィアが怒り眼で思いっきり吠えた。

「貴様、素手の方が強いとはどういうことだ!?　私を愚弄するのか!?」
「いやいや違うんよソフィたん。さすがの俺も素手で剣の相手をするのは嫌だから剣を使っただけなんよ？」
「誰がソフィたんじゃぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
「お、落ち着いてくださいソフィア様!?　鎮静（マインドクール）!」

狐っ娘が何やら呪文を唱えるのと同時に、真っ赤だったソフィアの顔色がスーッといい感じに冷えていった。なんだろう、血の気が引いてるようにしか見えねぇ。

「……まあ、そういうわけだ!　私と今から勝負しろ!」

どうやら冷静になる系の魔法だったらしい。ソフィアが堂々そう言い放ち、腰に下げていたレイピアを狐っ娘に預けた。

「……素手で？」
「そうだ!　貴様とは、一度真剣にケリをつけるべきだと思うからな!」
「……わかった」

もうすでに石剣も遠いし、仕方ないよね？
そう思って、軽く拳を鳴らしつつ前に出ようとすると真子が俺の行く手を遮った。
なになになんなのー？

「ソフィア」
「なんだ、魔術師。邪魔立てするなら……」
「いいの？　本当に」
「なに？」

真子が、ソフィアの顔を見つめる。
いつになく真剣な表情だ。まるで、目の前に死が待ち構えているような……。

「本当に、いいの？」
「……何がだ？」
「こいつと、素手で戦うのが」
「……？　どういう意味だ？」
「だから、素手よ？　フリーハンド。しかもあんたも素手。つまり格闘戦よ？」

真子にそう言われ、ソフィアがゆっくり俺の方を向いた。
俺はゆっくり微笑んで、ワキィッ！って感じで何かをつかむ動作をしてみせた。
ソフィアが、怯えるように体を震わせた。

「……忠告、感謝する」
「わかってくれたらいいのよ」

ソフィアが狐っ娘からレイピアを受け取るとき、なぜか深い後悔を抱いているように見えた。
何を戸惑う必要があるんだか。ただちょっとアクシデントが起こるかもしれない格闘戦を全力でやるだけじゃないか！
と考えていたら、真子に向う脛を思い切り蹴飛ばされた。イテェ。

「ふん！　貴様ごとき、ソフィア様がお相手なさる必要はない！　このガオウが相手だ！」

地味な痛さに耐えかねて脛を押さえている俺の前の、犬男が立ち

ふさがった。
すでに準備万端、腰の双剣は抜き放たれており、今にも斬りかかってきそうだ。
どうでもいいけど、無駄に暑苦しい男だな。毛皮的な意味でも性格的な意味でも。眉毛もなんか濃いし。
俺がゆっくり立ち上がると、ガオウが双剣を構える。

「我はガオウ！　ソフィア様親衛隊の切り込み隊長なり！　さあ、神妙に参られよ！」
「フン！　勇ましいじゃねぇか！　だが、その勇ましさどこまで続くかな……！？」

俺は体をひるがえし、一足飛びに石剣を突き立てた場所まで跳ぶ。
そして突き刺しっぱなしだった石剣を引き抜き、片手で持ち上げるような形で構えた。

「来い、犬男！　我が石剣奥義にて、相手をしてやろう！」
「ならばその奥義ごと、打ち砕く！」
「おいちょっとまて！　奥義なんてあるなら、私との戦いで使え！」

ソフィアが何か言っているが、今は目の前の犬男に集中する。
光太があわてて俺と犬男の視界から消え、狐っ娘がはらはらした表情で犬男の背中を見つめる。
俺と犬男の間に、緊張の糸が張り詰める。
一瞬か。永遠か。
どちらともいえそうな時間を打ち破ったのは、つまらなさそうにあくびをした猫娘の声だった。

「でぃやぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

犬男が勢いよく駆け出し、右手に持った爪のような剣を振りかぶる。
対する俺は石剣奥義を繰り出した！
「必殺！　石剣キィ～ック！」
どごぉっ！！！
壮絶な音を立てて、俺の十六文キックが犬男のがら空きの胴体に決まる。
脱力して軽く下げられた両の手。その手の中で放置された石剣。
気の抜ける表情。軽く開けられた口。
それらに反して、力強く打ち込まれた右足。
我ながら完璧な石剣キック……！
ソフィアと狐っ娘が唖然とした表情でこちらを見つめ、猫娘が思いっきり吹き出している。
おそらく俺の背後の仲間たちも似たり寄ったりの表情だろう。
犬男が石剣キックを喰らって吹っ飛ぶ。
その体が横を抜けて地面に転がる音を聞いて、ソフィアと狐っ娘が我を取り戻した。
「が、ガオウ君！？」
「ガオウ！？　無事か！？」
「あーっはっはっはっは！！　あひゃひゃひゃひゃひゃ！！」
何やらツボに入ったらしい猫娘が犬男を指差して大笑いしている。
ゲホガホせき込みながら、犬男が勢いよく顔を上げた。
「きぃさぁまぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！　石剣関係ないでわないかぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「何を言う、関係あったろう」

犬男の言いがかりに、俺が反論してやる。
だが納得いかないらしい犬男はもとより、ソフィアまで詐欺師を見る目でこっちを見てきた。

「いや、関係なかったろう実際」
「いや関係あるよ？」
「どこがだ！？　説明してみろ！」
「なら聞くけど、石剣奥義と聞いて何を連想した？」

俺の質問にソフィアと犬男が顔を見合わせて、それから俺の方を見て異口同音にこう言った。

「「石剣を使っての攻撃」」
「そう。その盲点を突く技こそ今の石剣キック！　相手の注意を石剣に向けておき、その不意を衝く蹴撃奥義……！」

俺の言葉にソフィアと犬男がハッと何かに気が付いた顔になった。

「そ、そうか……！」
「確かに我々は貴様の石剣にばかり気を取られ……！」
「戦いとは二手三手先を呼んで行うもの……。始まる前の会話から、すでに戦いは始まっていたのだ！」
「え、えええぇ～……？」

愕然とした顔になるソフィアと犬男の隣で、狐っ娘が納得いかない顔で俺と二人の顔を見比べている。

「く、私はまだ未熟ということか……！」

「私もだ……。あやつの言葉に惑わされ、その真髄を見極められなかった……！」
「え、えーっと……」
「じゃあ、今日はこんなところで撤収ってことでー。みなさーん、帰りますよー」

自らの未熟さをかみしめ、自責の念にとらわれている二人に戸惑う狐っ娘を置いて、猫娘が何とか回復し始めた魔族の皆さんにそう声をかける。
弱弱しい声を上げながらも、撤収を開始する魔王軍の背中に、俺は夕日を投げつけてやった……。

「今回、自分たち出番無いでありますね……」
「まあ、消耗しないならそれに越したことはないでしょ？」
「そうでありますが、釈然としないであります……」

No.38：side・ryuzi「石剣奥義」（後書き）

ちなみに最後の会話はサンシターと真子です。サンシターまで突っ込み始めると正直収拾つかないんだ。ごめんね。

魔族たちとの絡みを書いてるとき、隆司のキャラが異様に輝きます。勝手に動いてしゃべります。止まりません。止める気もないです。

次回は、少し新しい展開を入れていきたいと思います。

No．39：side・mako「貴族領の奪還」

危なげなく魔王軍に勝利できるようになってきたわね……。
隆司にしろ、光太にしろ、こちらに来てから手に入れた力に慣れてきたってことね。
あとは騎士団が使えるようになれば、この国の防衛を騎士団任せにしてあたしたちとほか数人で魔王軍を押し返せるようになるかも。
そんなことを考えつつ、いつものように錬金研究室にこもっていたあたしであったが。

「マコ様。アルト王子がお呼びです」

メイド長さんに言われてアルトに会いに行くことになった。
チクショウ、結局昨日の戦闘じゃ拳銃試せなかったから、うっぷん晴らしにいろいろ作るつもりだったのに……。
ぶつぶつ文句を言いながらも、アルトが指定した大広間まで行ってみると、円卓には隆司たち三人に騎士団長さん、宮廷魔導師のフィーネに神官長のオーゼさん、さらにアルトやアンナに見知らぬおっさんまでそこにいた。

「珍しいわね、ここまで揃えるなんて。なんかいいことでもあったの？」
「二度連続での魔王軍撃退。これをいいことといわずになんと言いましょう」

あたしが軽口をたたくと、見知らぬおっさんが口を開いた。
誰だろう、このおっさん？　見たことないんだけど……。まあ、いいか。
あたしは肩をすくめながら礼美の隣の席に着いた。

あたしたちが全員そろったのを確認してから、ここに呼びつけた本人であるアルトが口を開いた。

「まずはみなさん、先週に引き続き昨日の戦闘での魔王軍撃退、ご苦労様です」

「今度はリュウジ様とコウタ様が活躍なさったんですよね！」

「いや、ほとんど隆司のお手柄だよ」

興奮気味のアンナを諫めるように、光太が微笑んだ。

そんな光太の言葉に、隆司が若干嫌そうな顔になった。

「お前もきっちり半分倒してたろうが。手柄を押し付けんな。むしろお前一人で取れ」

「いや、隆司は本当に一人で戦ってたじゃないか。僕は、礼美ちゃんがいなきゃまともに」

「はいはい、そこまでにしときなさいよ？　話が進まないでしょうが」

あたしがパンパンと手を叩いて、不毛な手柄の押し付け合いを中断させる。

まったく。謙虚な光太も光太だけど、隆司だって光太の性格知ってるでしょうに。

「ハハハ……。いつも思うのですが、皆様は仲がよろしいですね」

「そう？　なんなら混じる？」

アルトが若干羨ましそうにこちらを見つめていたので、そういってみる。

するとアルトは少し驚いたように目を見開いたけど、すぐに首を横に振った。

「いえ……。私では力不足でしょう。遠慮させていただきます」
「いや、別に一緒に闘えとは言ってないけど……」
さすがに一国の王子に最前線に立てとは言わないわよ。
「ですが、皆様のお力は本当にすごいですわ！　たった三週間の間に四天王撃退に、魔王軍二連勝なんて！」
「いえ、そんな……」
アンナの言葉に、礼美が照れたように微笑んだ。
しかしたった三週間でこれかー。考えてみれば、ありえない戦歴よねぇ。
「そして、そんな皆様に新たなお願いがあるのです」
物思いにふけりかけたあたしの思考を現実に戻す見知らぬおっさん。
何やら偉そうだけど……。
「ところで、そっちのおっさん誰？　見たことないんだけど」
ちょっと気になっていると、隆司がズバッと聞いてくれた。
いやー、こういうときは便利な奴よねぇ。遠慮も呵責もなく普通にツッコんでいくから。
するとおっさんはかなりショックを受けたような顔になった。
いやそんな顔されても。
アルトとアンナも驚いたような顔になるけど、すぐに納得したような顔をして頷いたアンナがおっさんの紹介を始めた。

「紹介が遅れました。こちら、アメリア王国の大臣の、トランドですわ」
「「……ああ、大臣なんだ」」
期せずして、あたしと隆司の声がハモッた。
言われてみりゃ、大臣くらいいるわよね普通……。
でも、今まで欠片も姿を見せなかったけど……なんで？
「トランドは普段、私の補佐を務めてくれていますから、あまり皆さんにお姿を見せることはありませんので」
「じゃあ、あたしたちが召喚された日は？　どこにいたの？」
「あの日は、勇者様たちを迎えられるアルト王子に変わりまして、政務を行っておりましたので」
ショックから立ち直ったらしいおっさん改めトランドさんがそういった。
なるほど。王様が没してから一年ちょっとだものね。アルトに代わって主な政務を取り仕切ってるわけだ。それじゃ、普段ほとんど姿を見ないわけだわ。
「ええっと、すいませんトランド大臣。あたしたち、ほとんど修行ばっかりだったもんで……」
「申し訳ありません、大臣。お姿をこちらから拝見に伺えば……」
「ああ、いえ。よろしいのです。私に会うより、皆様が力をつけられる方がずっと大切ですから」
あたしと光太が代わる代わる頭を下げると、トランドさんは申し訳なさそうに返してくれた。
礼美と隆司も頭を下げて謝ると、改めてトランドさんが新たなお願いというのを口にした。

「それで、新たなお願いというものですが……。実はここから最も近い位置にある貴族領を奪還していただきたいのです」
「はあ？」
こっからいちばん近い貴族領の奪還？
「ちょっと経緯を話してもらえませんか？」
「経緯とおっしゃられても、大したことはないのですが……」
と前置きをしてからアルトが説明した内容は、本当に大したことがなかった。
極めて単純化すると、あたしたちが二回連続で魔王軍を撃退したのを耳にした一部の貴族が、早く自分の領地を奪還してくれと大挙してアルトのもとに押し掛けたのが発端だとか。
「今までであれば、皆様の修業を理由にそういった貴族の嘆願を押し返してきたのですが……」
「あたしたちが調子に乗って二連勝しちゃったから、貴族たちも強引に押し込んできたと」
「そういうことになります」
トランドさんの説明が終わると、礼美と光太が慌てたように立ち上がり、アルトの近くまで駆け寄った。
「ごめんなさい、アルト王子！」
「まさか、そんなことになってるなんて……！」
「いやいや、あんたらがそこで謝るのはおかしいから」
勝つのが仕事なのに、なんで勝って謝らないといかんのよ。

「でも、真子ちゃん！」
「よいのです、レミ様」

礼美がこっちに反論しようとすると、アルトが立ち上がって礼美の肩に手を置いた。
そして疲れたように微笑んで、礼美と光太の顔を交互に見つめた。

「アルト王子……」
「皆様の勝利に、貴族たちが気運を取り戻し始めたのは事実なのです。それによって増長が生じるのも致し方ないこと」
「それに、そういった事柄は私たち王族の範疇ですわ！　皆様が気に病むことはありません！」
「アンナちゃん……」

アルトとアンナにそう言われ、若干納得はしていないようではあったけど礼美と光太は自分の席に戻っていった。
筆頭勇者たちが落ち着いたのを確認して、あたしはトランドさんに向き直る。

「でも、なんで急に？　奪還というなら、前回の会戦で勝利した時に起き上がってもおかしくないんじゃ？」
「前回はまだ一勝だったというのもありますが、今回は国民たちに勇者様のお披露目を行おうという企画を考えていたタイミングでしたから」
「ああ、それならついでに“貴族の領地を取り返す”ってパフォーマンスをしたらどうかと貴族側に言われちゃったと」
「おっしゃる通りです」

なかなか抜け目ない貴族もいたものねぇ。っていうか勇者のお披

露目なんて必要なのかしら？　少なくとも城下町に不安めいたものが見えるとは思えないんだけど……。

「いや、それが意外とそうでもねぇらしくてなぁ」

「ん？　隆司、なんか知ってんの？」

ここでまさかの隆司が発言。

あたしの言葉に、隆司が肩をすくめてみせた。

「毎週毎週、決まった時間に狼煙が上がって、なおかつボロボロになった騎士団が帰ってくるってんで、いつ自分たちが同じ目に合うのか不安がってる町人って結構いるみたいだぜ？」

「ああ、そうなんだ……」

隆司曰く、町で贔屓にしている喫茶店で聞いた話だそうだが、そういう場所で流布している噂である以上無視するわけにもいかないだろう。

人の出入りが激しいのであれば、真偽はともかく話は流れる。

話が流れるならそれは噂になり、そして人の不安を煽るには十分な威力を持って国を席巻することになる。

今の魔王軍を見る限り、そういう部分をついてくるとは思えないけど……対策を取っておくに越したことはないわね。

「なら、その貴族領を取り戻して、凱旋パレードでもしながら帰ってくればいいのかしら？」

「申し訳ありません、マコ様」

「いいのよ別に。パレードの主役はどうせ光太と礼美だし」

「ちょっと真子ちゃん！？」

「なんで僕たちなの！？」

あたしのナイスな提案に、なぜか反論してくる筆頭勇者たち。
何言ってんのよ天然アイドル。こういう場で正面に立たないでどうすんのよ。

「あんたたちは素材がいいって前から言ってるじゃない。こういう時はあんたたちが前面に立つのよ！」
「そ、そんなぁ！　私が人前苦手って、真子ちゃん知ってるじゃない！」
「それでもよ！　あと光太。パレードの時はいつも来てる野暮ったい奴じゃなくて、貴族騎士が着るみたいなキラキラメラメの服着なさいよ！」
「え！？　僕もあんまり目立つのは……」
「男ならグダグダいうな！」

あたしは一喝しながら持っていた紙に素早くパレードの時に礼美たちに何を着せるか書きつけて、メイド長さんに手渡した。
どこからともなく表れたメイド長さんはサッと内容を確認すると恭しく頭にあたしを下げてそのまま部屋を出ていった。
あたしは満足げに鼻を鳴らすと、涙目になっている光太と礼美に向き直る。

「いい？　パレードの主役はあんたたちだからね？」
「真子ちゃ～ん……」
「ううう……」

がっくり肩を下げる二人だけど、こういう場であんたたちの容姿を活用しなくてどうするんだか。

「それで、その貴族領ってのはどのくらいの距離なわけ？」
「移動の際には馬車を利用いたしますが、片道六日ほどかと」

「六日ぁ！？」

ほぼ一週間かかるんじゃないの！？　どんだけ遠いのよ！

「っていうか、魔王軍の駐留基地に突貫しろとかそういうことじゃないでしょうね？」

「その点は大丈夫かと。方角的には違う場所にあるはずですので」

「なんでそんな場所がとられたのよ……」

「王都に侵攻する以前は、貴族領を中心に魔王軍は攻めてたんだよ。一応無事な領地もあるが、無事な領地は王都の背後にあるやつばかりだな」

騎士団長さんの説明が入る。

つまり魔王軍はアメリア王国の領土半分を支配下においてる計算でいいの？

たった一年でそこまで行くものなの……？

「まあ、騎士団やら自衛戦力なんてあってないが如しだったからなぁ。貴族領っつっても、奪われた領地も両手両足で数えられる程度だしな」

あたしのうんざりしたような顔を見て、団長さんが慰めるように声をかけてくれるが、慰めにもならない。

つまり最大二十箇所近い領地を取り戻さないといけないわけ……？

しかも最も近い場所で六日掛るとか……。頭痛い……。

「じゃあ俺は残るから！　光太、頑張ってくれ！」

「え、隆司！？」

あたしが頭を抱えていると、隆司が急にそんなことを言い始めた。

なによきゅうにー……。

「なんじゃ、隆司？　貴族領を取り戻してはくれぬのか？」

「いや、俺たち全員が抜けるわけにはいかねぇだろ？　片道六日じゃ、魔王軍が攻めてきちまう。なら最低でも誰か一人は残るべきだと思ってよ！」

隆司が何やら歯が輝きだしそうなさわやかな笑顔を浮かべながらフィーネに答えた。

何やら光太と礼美が感動に瞳を輝かせているけれど、本心は別にあるな？

「という建前で、ホントは？」

「嫁に二週間近く会えんとか拷問か貴様ら！　縊り殺すぞ！！」

バキィ！となかなかいい音を立てて壊れた椅子をそのあたりに放り出して、あたしはアルトたちに確認することにした。

「このバカの発言はともかくとして、実際問題、二週間近く王都を開けるのは問題よね。その辺はどうするの？」

「その間の防衛は、騎士団でなんとか……」

「一回くらいなら何とかなるさ。もちろん、誰か残ってくれるならそれに越したことはねぇが」

机の上に突っ伏したままピクリとも動かない隆司の姿を慄きながら見つめるアルト王子の言葉を受けて、団長さんが肩をすくめる。

うーん、向こうはなんか勇者に興味津々みたいだったし、誰か残るべきよね……。

このバカを増長させるみたいでいやだけど、こいつが残るのが一番かしら……。

「じゃあ、隆司は置いていくとして……。その貴族領の奪還はあたしたちだけでやるの？」
「いえいえ。まさか皆様だけを危険な場に赴かせることは致しませぬよ」
「騎士団、魔術師団、そして神官たちの中で、何名か供につける予定じゃ」

オーゼさんとフィーネの言葉に、この円卓にそれぞれの団体の長が勢ぞろいしていた理由が分かった。
つまり従者選定会なわけね。

「もし希望があるなら聞くが、どうする？」
「そうねぇ」

団長さんの言葉に少し悩む。
従者かぁ……。出来れば魔王軍と比較しても遜色ない腕の人がいいんだけどなぁ……。

「レミ様が奪われた領地奪還に赴かれると聞いて参上いたしました！！」

とか悩んでいると、扉を蹴破る勢いでヨハンさんが現れた。
どこで聞いてたのよ……。
オーゼさんはそんなヨハンさんの姿を見て、頭痛を抑えるように眉間のしわを抑えた。

「ヨハン……。今は礼拝の時間であるはずだが……」
「礼拝中に神託を受けました！　ぜひ私を従者の一人に！」

それはもはや電波の領域じゃないの？
あたしの疑問をよそに、勢いよく跪くヨハンさんの姿を礼美は戸惑ったように見つめていた。

「え、えーっと……？」
「その人に関してはあんたに任せるわ……」
「え、真子ちゃん！？」
「魔術師団のお勧めは誰ー？」

フィーネに問いかけると、フィーネは指先で口元を押さえながら首を傾げた。

「ふーむ。戦闘力という意味ではジョージじゃし、旅をするという意味ではアルルかのぅ。あの娘、生活力があるタイプじゃし」
「そういう意味じゃ、サンシターあたりなんかちょうどいいかもな。戦闘力は皆無だが、馬番としちゃ有能だ。あまり大勢連れて行くわけにもいかねぇだろうし、アスカもついでに連れてってやってくれよ」

ふーむ。そこそこ人数も上がってきたかしら？　団長さんのいうとおり、そんなに大人数で行動するわけにもいかないだろうし……。

「じゃあ、あとは本人たちの意思確認して、明日から行動開始って感じかしら？」
「もしそうしていただけるのであれば、幸いです」

あたしの言葉にうなずくトランドさん。
さて、明日から忙しくなるのかしらね……？

Ｎｏ．３９：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「貴族領の奪還」（後書き）

そんなわけで貴族領奪還編でございます。
まあ、編といいつつそんなに長くなる予定はございませんが。今回は隆司がぼっちです。
次回はそんなぼっち隆司の視点……じゃなかったりするんだなぁこれが。

No．40：side・kota「異世界の車窓から」

ゴトゴトと、木の車輪と石とが立てる大きな音を聞きながら、僕は窓の外に見える光景をぼんやり眺めていた。

今日で王都を出てから二日。順調にいけばあと四日ほどで占領されたという貴族領に到着する。

結局貴族領奪還のためのメンバーは、僕に礼美ちゃん、真子ちゃんの三人に、アスカさんとサンシターさんの騎士団メンバー。アルルさんにジョージ君の魔導師団メンバー。最後に神官のヨハンさんと今回奪還に向かう領地の領主様であるカウルさんの計九人となった。

今使っている馬車は八人乗りのかなり大きなものだけど、御者としてサンシターさん、見張りとしてアスカさんが外に出ている。

僕らが貴族領を奪還に向かうといって王都を出るとき、王都の人だかりは思っていたほど大したことはなかった。

みんな興味本位でこちらを見ていた感じだ。僕たちは外を見て目が合えば笑って手を振るくらいだった。

ああやって僕たちを見送ってくれた人たちは、不安に思うときがあったんだろうかと考えるときがある。

なんというか面白いもの見たさという雰囲気がありありと伝わってきたのだ。

あんなふうな王都の人たちの様子を見ると、やっぱり魔王軍の人たちが悪い人には思えなくなってくる。

今回送り出してくれた神官の人の中には「ぜひ貴族領の魔族たちを滅ぼしてやってください！」なんて過激なことを言う人がいたけれど……

僕はそんなこと、できればしたくない。

話し合いで、済めばいいんだけどなぁ。

「……」

ゴトゴトと、また馬車が小さな音を立てて揺れ、しばらくするとぴたりと停止した。

またかぁ、と僕が思ういとまがあればこそ、真子ちゃんが勢いよく馬車を飛び出した。

「馬車を止めんなっつってんでしょーがぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「あああ、申し訳ないであります真子様ぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

真子ちゃんの怒号とサンシターさんの悲鳴が響き渡った。

「草を食わす暇があるなら、さっさと走らせろ！　っていうか馬車というからそれなりのスピードかと思ったら、歩いたほうが早いってどういうことよ！？」

「すいませんすいません！　元々この遅馬（スロウホース）は農耕作業用の馬でありますから、パワーはあるでありますが、いかんせんスピードは――」

「またやってるよ。あの姉ちゃんもいい加減あきらめたらいいのに」

魔導書を読んでいたジョージ君が呆れたようにつぶやいた。

確かに馬車がなんとなく停止して真子ちゃんが飛び出すのは、今日だけで三回目だけど、止まりすぎじゃないかなぁ？

「まーまー。さすがにこの人数ともなりますと普通の馬では馬車を引けませんからなー。早馬も貴重。となると後は遅馬（スロウホース）くらいしかおらんわけで」

そんな僕の疑問に答えてくれたのはカウルさんだ。

貴族というよりは商人といった方が似合いそうな風貌で、実際王都と辺境貴族領との交易を専門に行ってる人なんだとか。

「それに遅馬（スロウホース）にも利点はあるのです。ほぼ丸一日一切の休息無しに歩けるのは遅馬（スロウホース）だけですからなー」
「はぁ」

確かにそれはすごいけど、こうちょくちょく停止してるんじゃ説得力ないなぁ。

「じゃあ、なんでこんなに良く止まるんですか？」
「遅馬（スロウホース）は食欲旺盛ですから。道端に食欲をそそる草が生えているとそちらに気が言ってしまうのですよ」

礼美ちゃんの疑問に答えてくれたのはヨハンさん。なるほど、気になるものに目が行っちゃうのか……。

「そのあたりを制御するのが～、御者の腕前になるのですよ～？」
「だからあの兄ちゃんの腕が悪いんじゃねぇの？」
「そうなのかなぁ……？」

ジョージ君の言葉に思わず首を傾げる。
外から見える光景は、幅の広い街道だ。
土が露出し申し訳程度に整えられた道の周りは、一面青々とした草地になってる。遅馬（スロウホース）が食欲旺盛なら、この草地に一目散に進んじゃうんじゃないかなぁ？

「まーまー。街道も整備がされなくなって期間が開いておりますからなー。道の真ん中に草が生えていたら、さすがに遅馬（スロウホース）も草を食べるでしょー」

カウルさんの言葉に、それもそうかと頷いた。

カウルさんが領地を奪われたのはだいたい二ヶ月くらい前。その間、人の行き来は全くなかったというから、その間に草の一本や二本は生えちゃうよね。

「つまりあれね!?　六日ってのはこの微停止も含めての時間だったってわけね!?　早馬なら何日か言ってみろサンシタァァァァァァ!!」

「調子が良ければ～。四日位で往復できるかもですね～」

外から聞こえてきた真子ちゃんの声に、アルルちゃんが大して気にした風でもないように答えた。

四日かぁ……。でも仮にも貴族領を取り戻そうって一団が移動してるわけだから、普通よりも時間がかかるのは当たり前じゃ……。

「マコ様も、さすがにゆっくりと移動する風景をご覧になられては、ストレスもたまるのではないでしょうか?」

「やっぱりそうですかね?」

ヨハンさんの言葉に、僕は何となく納得して頷いた。

ゆっくりとした遅馬（スロウホース）の移動スピード自体は嫌いじゃないけれど、馬車の外から見える光景が本当にゆっくり移動するもんだからすごい退屈するんだよね……。

ちょっと外に出ようかな。

僕はそう決めると、扉を開けて外に出た。

「すいませんすいません!」

「マコ様、もうそのくらいで……」

「わかってるわよ!　わかってるけど、暇でしょうがないのよぉ……」

すると、ひたすら謝ってるサンシターさんに向かって、自己嫌悪してるらしい真子ちゃんが頭を垂れていた。
ああ、八つ当たりしてる自覚はあるんだ……。
牛車席の前には、二頭の大柄な馬がつながって、片方の馬がムシャムシャと草を食んでいる。
僕たちの世界での馬に比べると、本当に体が大きい。足も太くて、一目見た時には牛と見間違えたくらいだ。
真子ちゃんを諫めていたアスカさんが、僕に気づいて慌てて振り返った。

「あ、コウタ様。申し訳ありません、すぐに歩かせますので」
「いや、無理強いしてこの子が暴れだす方が怖いですよ」

そういって、僕は草を食んでいる遅馬（スロウホース）の首筋を撫でた。

「急がなきゃいけないのは確かだけど、行程的には遅れがないんでしょう？　なら、僕としては文句はないかな」
「いくらか休憩は削っていますが……そういっていただけると、ありがたいです」

アスカさんが申し訳なさそうな顔で頭を下げた。
悪いことをしてるわけじゃないんだから、もっと胸を張ってもいいと思うんだけどなぁ。
と、遅馬（スロウホース）が草を食べ終わったのか、顔を上げて一声ぼえーと鳴いた。

「あ。マコ様、コウタ様！　馬車を動かしますので中へ戻ってほしいのであります！」
「あ、僕このまま一緒に歩いていいですか？」

遅馬（スロウホース）の様子に気づいたサンシターさんに、僕はそう聞いてみた。
せっかくの異世界だし、もう少しいろんなものを見てみたいんだよね。

「コウタ様？　確かに遅馬（スロウホース）のスピードはさほど早くないでありますから、並んで歩けるでありますが……」
「何を言う、サンシター！　いけません、コウタ様。あまり早くないとはいえ、六日の行軍です。疲れを残されては……」
「疲れたら、すぐに戻りますから」
「……あたしも一緒に歩こうかしら……」

アスカさんに反論する僕の言葉を聞いて、真子ちゃんもそんなことを言い出した。
やっぱり馬車に詰めっぱなしじゃ気が滅入るよね。

「マコ様まで？　……もし疲れたなら、すぐに言ってほしいでありますよ？」
「サンシター！」

アスカさんが厳しい表情でサンシターさんを咎めるけれど、サンシターさんはさして気にした風でもなく、手綱を操って遅馬（スロウホース）を歩かせ始める。
サンシターさんって時々すごい強かになるんだよね。聞けば、アスカさんより年上で、僕たちと比べると一回りか二回り位上らしいんだけど、だからかなぁ。
ともあれ、ゆっくり動き出した馬車の隣を僕も一緒になって歩きはじめる。
なんて言うか、気を付けないと僕の方がずんずん先に進んじゃいそうなスピードだ。平安時代くらいの牛車ってこんな感じだったのかなぁ、ってスピード。

サンシターさんはまっすぐ前を見据えて軽く手綱を握っている。
そしてたびたび進路からすれそうになる遅馬（スロウホース）の頭を進路に向けて戻している。やっぱり、サンシターさんの腕が悪いわけじゃないんだね。
アスカさんは、やっぱり僕が外で歩いていることに不満があるみたいだ。むっつりした顔で僕のことを横目に見ていた。

「真子ちゃーん？　馬車に戻らないの？」
「あー。ちょっと気分転換に歩くわー」
「あ、じゃあ、私もー」「レミ様が歩かれるなら私も！」
「あんたは中にいなさい……。勢い余って全員外に出たら、さすがに馬車の意味がないから……」

馬車が動いても僕たちが戻らないことに気が付いた礼美ちゃんが外に出たがるけど、それは真子ちゃんが押しとどめた。
でも、礼美ちゃんにも気分転換はいるよね。あとで、交代する感じならいいんじゃないかな？
そうやって、しばらく僕らは貴族領への道を歩いた。
これが魔王軍から貴族領を奪還するって目的がなければ、とてものんびりとして気持ちがいいピクニックだっただろうなぁ。
空は青く広がって、その中を白い雲がゆっくり流れてる。
平和だなぁ……。

「あ、湖」

しばらく歩いていると、目の前に大きめの湖が現れた。
深い蒼に染まった湖面の中に魚が泳いでいるのが見える。
真子ちゃんが駆け足でその湖に駆け寄った。
喉が渇いたのかな？
そんな真子ちゃんの姿を見て、サンシターさんが慌てたように声

を上げた。

「あ、マコ様、何を!?」
「ちょっとのどが渇いたのー」

あ、やっぱり。
そういって真子ちゃんは両手で湖の水を掬い取ったんだけど。

「いけません、マコ様！　水なら、こちらの水筒から――！」

なぜかアスカさんまで、大慌てで御者席に備え付けておいた水筒を手に取った。
？　なんでそんなに慌てて。

「ブゥウゥウゥウゥウゥウゥウゥウゥ！！！？？？」

と、いきなり真子ちゃんが口の中の水を吹き出した。
え、なに、どうしたの!?

「ななな、なにこれ!?　めっちゃ辛い！　っていうか塩水!」
「え、湖なのに!?」
「それはそうでありますよ……。そちらは海湖（ソルト・レイク）でありますから」
「「ソルトレイクゥ!?」」

なにそれ!?

「この国……といいますか、この世界は大きな楕円状の大陸で形成されているのですが、海へ向かうには険しい山岳を超えないといけないのです」

びっくりして思わず動きが止まる僕たちに、アスカさんが説明を始めてくれた。

「そのため、通常であれば海産物の類はほとんど入手する手段がない……と思われていたのですが」

「この海湖（ソルト・レイク）が発見されたであります。マコ様、海湖（ソルト・レイク）の底をご覧ください」

「底……？」

真子ちゃんと一緒に、僕も湖の底を覗いてみる。

普通なら水草や水苔の生えた石が見えそうなものだけど、海湖（ソルト・レイク）の底は見えず暗い暗い穴がぽっかり広がっているばかりだった。

「……なにこれ」

「海湖（ソルト・レイク）は外洋とつながっているといわれており、底の方から海洋生物がやってくるとされているのであります」

「なるほど……」

言われてみれば、海湖（ソルト・レイク）の大きさは普通の湖よりもはるかに大きな規模だった。

この海湖（ソルト・レイク）一か所で、小さな生態系ができてるのかもしれないなぁ。

「こうした海湖（ソルト・レイク）はいくつか存在していまして、いずれ奪還に向かうであろう貴族領の中にも海湖（ソルト・レイク）を中心とした街もあります」

「さすが異世界……。わけのわからない構造してるわね……」

「ホント……」

戦慄したような真子ちゃんに、僕も同意するように頷いた。

僕たちの世界にもこうした塩分濃度が高い湖はあるし、実際それが名前の由来となった街も存在するけれど、こんな風に外洋とつな

がっているのはないからなぁ……。
この世界の大陸はどうなってるんだろう？　まさか、海の上にぽっかり浮いた島なのかなぁ。

「にしても、こんなのが存在するんじゃうかつに飲み水補給もできゃしないわね……」

真子ちゃんがそんなことを言いながら、サンシターさんの隣に並んだ。
ああ、言われてみればそうだなぁ。喉が渇いて、何も知らないままうかつに湖に顔を突っ込んだら海水でした、なんてシャレにもならない。

「おっしゃるとおりでありますが、さすがに街道周辺は調べつくされて地図も作られているでありますから、誤って海湖（ソルト・レイク）の水を口に含むことはないでありますよ？」
「ついでに言えば、水を補給する手段は水源ばかりではありませんから」
「？　どういうことですか？」

アスカさんの言葉に僕が首を傾げるのと同時に、街道のそばの草むらからガサリと何かが飛び出した。

「っ！」

僕は素早く腰の剣を抜く。
抜いたんだけど……。

「……スライム……？」

思わず、という感じで真子ちゃんが首を傾げた。
うん。なんとなくわかるよその気持ち。
目の前に現れたのは、たぶんスライム系のモンスターだと思うんだけど……。
半透明のビニール袋みたいな感触の、半軟体生物って感じだった。
なんだろう。言ってよくわからないけど、そんな表現しかできない。

「ああ、ちょうどいいところに」

呆然とする僕らをよそに、アスカさんが素早く御者席から飛び降りて、プルプルしてるその生き物を引っ掴んだ。
そして後ろの荷台から木でできた壺を持ち出して、その上でスライム?を。

ぎゅーっ!

と上からしごくように絞った。
途端、スライム?の身体から大量の水がジャバー!っと出てきた。

「この生き物は、ボトルスライムと言うであります。体内に真水を蓄える性質を持つ生き物なのでありますよ」

びっくりして固まる真子ちゃんをよそに、サンシターさんは若干減っていたらしい水筒に、ボトルスライムから絞り出した液体を汲み始めた。

「あの……飲んで平気なんですか……?」
「ええ、平気でありますよ?」
「うそぉ!?　スライムの体液でしょー!?」

おっかなびっくり問いかけると、何を当たり前というように答えが返ってきた。
アスカさんが絞り切ったスライムをそっと地面においてやると、しばらく動かなかったスライムが尺取虫みたいな動きでしわくちゃの体を草むらの中へと隠していった。

「むしろ平原の生き物にとっては数少ない給水生物になりますので、全体の生態系として見ても保護されているという研究結果もあります」
「この水も、人が飲んでも平気という研究結果が出ているであります。なので、安心してほしいのであります」
「でもなんか気分的にいやー！？」

真子ちゃんの魂の叫びに、僕は無言でうなずいて同意した。
なんていうか、良くも悪くも異世界なんだなぁ……。

No.40:side・kota「異世界の車窓から」（後書き）

この小説は、サイモンの提供で、お送りしました。（例のナレーション風味）

こういう点が自由に書けるのは異世界の特権ですねぇ。まあ、ここまで現実と乖離しているのは一応理由がありますが。物語の最後辺りで解説入れますね。忘れてなかったら。

次回の中継は王都へとつないでおりますー。

No．41：side・ryuzi「謎の肉体」

「やっぱり、女性の愛らしさというのは何らかのパーツが付加されることによって相乗効果で上昇するわけですよ」
「そこに猫耳に尻尾にモフ手でしょう？　これに心を揺り動かされない人間はいませんね！」
「もちろんかわいい男の娘でも可！　可愛いというのはそれだけで正義なのですよ！」

通りすがりにちょいと質問した三人組に、熱く語られた俺は軽い既視感を覚えていた。
こいつら、顔は一人ひとり微妙に違うけど……。

「お前ら、実は兄弟？」
「何をおっしゃいますか」
「我々、全員バラバラの出身なのですけど」
「まあ、行動似てるせいでいつもセット扱いなのは否定しませんが」

ああ、やっぱりセット扱いなのか。
なんか身振り手振り見る限り、トリオとして行動すること前提みたいなキャラしてるからなぁ。
覆面とかに合いそうだ。目の部分だけ開いてる忍者タイプの奴。

「お前ら、そんなのでよく我慢できたな、いままで」
「それこそ何をおっしゃいますやら」
「我々、リュウジさんのおかげで真の道に目覚めることができたのですよ？」
「一心に嫁に対して愛を叫ぶ……それこそ我々のあるべき姿だと！」
「ああ、そうなの……」

キラキラと輝く瞳でそう語られ、俺は一瞬自分を省みそうになった。

まさかこっちで俺と似たような属性を開花する要因を生み出しちまうとは……。しかも俺以上に全般的に濃い感じだ。

「じゃあ、聞くけどメイド長さんは？」

「天使です」

「制服着た女性神官は？」

「女神です」

「最後にアンナ王女は？」

「聖域です」

もうだめかもしれんなこいつらー。

「……んー、ありがと。なんかあったら呼ぶかもしれんのでよろしく」

「もちろんですとも！」

「我々、リュウジさんのために身命賭して働くつもりです！」

「むしろ兄貴と呼ばせてください」

「やめて」

俺を兄貴と崇めそうになる三人組に制止を呼びかけつつ、俺は手に持った騎士団名簿に印をしようとして……。

そういえばこいつら名前なんだっけ？

「わり、名前なんだっけお前ら？」

「アルベルトです」

「ベルモンドです」

「チャーリーです」

ＡＢＣかよ。
俺は目的の名前に丸印をつけた。
「じゃあ、ありがとうな」
「いえいえ、とんでもない！」
「こちらこそありがとうございます！」
「それでは、我々はこれで！」
シュタッと敬礼してくれた騎士団三人組に敬礼返しつつ、俺は手に持った名簿を見下ろした。
さて、騎士団はもう主だった連中はだいたい会ったな……。あとは半分ずつくらい残ってる魔導師団と神官連中か。
「おやフィーネ様！　こんにちは！」
「今日も愛らしいですね！」
「明日もきっと可愛らしいんですね！」
「う、うむ……？　ありが、とう？」
さてどうやって会うか、などと考えるといましがた三人組が曲がった角の方から戸惑ったような声が聞こえてきた。
というか、あの三人組、何ぼ何でもド直球過ぎやしないか……？
げんなりと曲がり角を見つめていると、少し赤くなりながらも怪訝そうな顔をしたフィーネが顔を出した。
「な、なんなのじゃ一体……？」
「よう、フィーネ」
「あ、リュージ！」
俺が軽く片手を上げてあいさつすると、フィーネがようやく目的

の人を見つけたという風にパタパタこちらに駆けてきた。
うーむ。真子の奴から見た目相応の歳だと聞かされた時はびっくりしたもんだが、こうしてみると確かに見た目相応の仕草をするよな、こいつ。

「どこにおったのじゃ！　おぬしを探して、城の中を歩き回る羽目になったぞ！」
「いや、悪い悪い。しかし、フィーネが俺を探すなんてなぁ。真子も礼美もいなくてさびしいんかい？」
「そ、そんなことは！　……少しはあるが」

あるのかよ。

「いや、そんなことは些末なことじゃ。リュージ！　この機会に、おぬしの体質を解明したいと思うのじゃが、どうじゃろう？」
「俺の体質？　っていうと？」

俺の質問に、フィーネはこう答えた。

「おぬしの魔力が体に出とらん理由を解明するのじゃ！」
「一応解決策として、団長さんが俺の魔力は全部強化に回ってるんじゃ？って話をしてるけど？」

俺の言葉に、フィーネは難しい顔をして首を横に振った。

「いや、それはないじゃろ。魔力とはいうなれば法則の力。何の法則も打ち立てんと、魔力が消費されることはありえん」
「ふーん」

ほうそくのちから、とやらがよくわからんけど、フィーネにとっ

て団長さんの導き出した回答は納得のいくものじゃないってことか。

「それはともかくとして、魔導師団詰め所へ行くぞ！　そこにオーゼも待っとる！」

「オーゼさんも？　なして？」

「いや、おぬし、前にヴァルト将軍と遣り合った時、全身メタメタにやられたんじゃろ？　一回、診てもらった方がよいじゃろ」

ああ、言われてみれば……。

あの時、死ぬほど痛いってのは気絶もできねぇんだなぁ、って学んだんだよな……。

遠い目でなんかもう懐かしいってことにしたい思い出を思い返しつつ、フィーネに着物の裾を引っ張られながら俺は魔導師団詰め所へと向かった。

そこにはフィーネの言葉通りオーゼさんと何人かの魔導師が待っていた。

「お待ちしておりましたよ、リュウジ様」

「チッス、オーゼさん」

オーゼさんに軽く頭を下げつつ、俺は用意された椅子に座った。

「……で、具体的には何すんの？」

「うむ。まあ、さしあたってはオーゼの検査魔法からかの」

「では、参りますよ」

神官が魔法使うのかよ、という疑問を挟む間もなくオーゼさんの掌が俺の額に当てられる。

オーゼさんの口元がもごもごと動くと、俺の体が謎の発光現象を起こす。

たぶん、検査魔法とやらが使われたのだろう。
しばらく俺の体が何度か明滅を繰り返し、そのあと光がオーゼさんの掌に集まってゆく。
オーゼさんはその光が水のようにこぼれださないように慎重に俺の額から掌を離し、机の上にあらかじめ用意されていた水晶球のようなものの上に置いた。
光はゆっくり水晶球の中へと吸い込まれていくと、今度は水晶球が淡く輝きだした。
……今ので終わりなのか？
「……でー。俺の身体の具合はどうなんですか？」
「私が見た限りでは、特別異常は見られませんな。健康そのものです」
オーゼさんがやさしく微笑んでくれるけれど、それはそれで困る。いや異常が出て欲しいわけじゃなくて、ヴァルトにメタメタにやられたのに異常がないのが異常って意味で。
実際、骨やら内臓やら神経やらが確かに両断された感覚はあるのに、今はすっかり治っているのだ。今更思い出して身震いするぜ。普通なら明らかにあそこで死んでるっつーの。
「うーん。オーゼのいうとおり、目立ってどこか悪いというわけではないようじゃのぅ……」
水晶球を覗き込んでいたフィーネも首を傾げつつ不思議そうに俺と水晶球を見比べる。
俺も水晶球を覗き込んでみるが、無数の魔術言語（カオシックルーン）が乱れ飛ぶばかりで、素人には一切何のことだかわからない。真子辺りが見たら読み取れるんだろうなぁ。

「じゃあ、俺の体って人間なの？　正直そっちの方が怖いんだけど」
「ご安心ください。リュウジ様の御体は、まぎれもなく人間ですよ」

俺の質問に、オーゼさんが答えてくれた。
しかし納得がいかない。
そこで俺はてっとり早く試すことにした。

「えーっと、そこのしょぼくれた面の魔導師さん」
「ほっとかんかい！　なんだよ！？」
「ちょっと一発、俺に殺傷力高めの魔法でもぶち込んでみてくれね？」
「え？」
「リュウジ様！？」

俺の発言にぽかんとしたフィーネと慌てるオーゼさん。
オーゼさんは魔導師を制止しようとするけど。

「おうよやらいでか！　裂風刃（ウィンドブレード）！！」

喧嘩っ早かったらしい魔導師が呪文を唱え終わる方が早かった。
俺は素早く肩肌を脱ぎ、着物が破れないように注意しながら素肌で鋭い風の刃を受け止める。
瞬間、鮮血が舞い、あたりに血が飛び散った。
肉が爆ぜ、骨まで刃が食い込む感触が俺の脳髄を駆け巡る。

「なっ！？　フォルカ！　何をしておるか！？」
「……ハッ！？　つい、売り言葉に買い言葉で！？」
「リュウジ様！」

事態を理解したフィーネの言葉に、フォルカと呼ばれた魔導師が

顔を蒼くする。
たぶん、普通に放てば人間一人をたやすく両断する程度の威力があるんだろう。
だが。
「ああ、心配しなくていいよ。もう治ったから」
俺は真っ赤に染まった肩を軽く拭ってみる。
血の赤色が取り払われると、そこには傷一つない真っ白な肌が存在していた。
……魔法で形成された風の刃が消滅すると同時に、俺の体は即座に修復していた。
しかも魔法的な何かによって補充されるのではなく、傷口に新しい肉が盛り上がってくるという感じで。
何とも形容しがたい感覚だったけど、たぶん傷が治るのを早回しにしたらこんな感じになるんじゃないかと軽く思った。
「なんと……」
もう傷が治った俺の体を見て、オーゼさんが恐れ戦いた様な声を上げる。
オーゼさんが腰の袋から取り出した布切れで俺の血を残らず拭い取るが、そこにいましがた風の刃を叩きつけたような証拠は一切なかった。
「……オーゼさん。もう一度、同じ質問しますね？」
俺は少し笑いながら、オーゼさんに質問を繰り返した。
「俺の身体って、人間なんすか？」

「……」

オーゼさんは俺の質問に窮した。

そりゃそうだ。いましがた、人間ではありえないほどの回復力を目の前で見せられて、俺が人間だと即答できる方がおかしい。

「ぬう。これならヴァルト将軍の攻撃を受けて無事なのも納得か」

一方で、フィーネは目の前の出来事をそのまま受け入れていた。

この辺は子供だよな。見たままそのまま受け入れられるってのは。

「……女神様の御意志による、我々への加護にも限界があります」

しばらくして、オーゼさんは慎重に言葉を選ぶように口を開いた。

「その中には体を強くするもの、傷の治りを早くするものも当然あります。ですが、これほど劇的なものとなると……」

オーゼさんは首を横に振る。

そっか。やっぱり女神の力ではないわけだ。

「じゃあ、俺のこれは？　魔法の力か何か？」

「いや、魔力を感じることはできんかった。そもそも、魔術言語（カオシックルーン）による肉体改造など聞いたこともない」

俺の疑問に、フィーネも首を横に振る。

聞けば、フィーネも真子ほどではないにしろ魔術言語（カオシックルーン）の有る無しを視覚的に捉えることができるのだとか。

だが、俺の傷口にも俺の身体にも、それらしい跡は見られないという。

「まったくもって訳が分からぬ……。おぬし、いったいどんな生まれなんじゃ？」
「普通の人間家庭に生まれたはずなんだけどなぁ……」
呆れたようなフィーネの言葉に、俺は後ろ頭を掻きながら答えた。
間違いなく普通の家のはずなんだよなぁ。親父は変態でお袋がツンデレって点を除けば。
「じゃあ……意志力（マナ）って奴は？　あれ、相当便利って聞くけど」
「便利は便利じゃが……おぬし、今攻撃を受けるとき意識したかの？」
「いや、特別」
「それでは意志力（マナ）によるものかどうかはわからぬのぅ。意志力（マナ）は意志の力。無意識も意識のうちじゃろうが……、おぬしのように強烈な効果を及ぼすとなるとのぅ」
フィーネは首を傾げた。
うーむ、やっぱり俺の体は謎のままか……。多少は期待したんだけどなぁ。
「……少なくとも、魔法による検査では人と出ました。ならば、人間でよろしいのではないでしょうか」
「相変わらず魔力は出とらんがの……」
しばらく考え事をしていたらしいオーゼさんが、なんというか、申し訳なさそうな顔で笑いながらそう締めくくった。
疑問が晴れたわけではない。でも、明確な結果が魔法によって出ているのだからそれで納得しておこう、ってわけか。
とはいえまわりがそれを納得するかどうかは別問題だよな。

俺が軽く周りの魔導師の姿を見まわすと、俺のことを恐怖の眼差しで見つめたり、興味津々の顔でこっちを見たりしている。
正常といえば正常かね。まあ、いいや。ちょうどここにいる連中には会ったことないし。
俺はフォルカと呼ばれた魔導師に向かい合って、残った袖の下から一枚の写真を取り出した。
元の世界から持ち込むことになった、真子の鞄から拝借したものだがちょっとした加工がしてある。

「な、なんだよ？」
「ところでこいつを見て欲しい。これをどう思う？」
「はい？」

フォルカが覗き込んだ写真は、何の変哲もないただの写真だ。写っているのは礼美。満面の笑みでこちらに手を振っているものだ。
ちょっと染料で、猫耳とモフ手と尻尾を描き加えてあるが。
フォルカは写真を見て、驚いたように仰け反る。

「な、なんだこれ！？」
「なにって、礼美の写真……いや絵だな。礼美の鮮明な絵ですが」
「鮮明過ぎるだろ！？」
「そんなことはどうでもいい。重要なことじゃないんだ。この写真、どう思う？」
「ど、どうって……」

フォルカは少し躊躇はしたが、俺に対する負い目もあるのかあるいは別の感情か写真を食い入るように見つめる。
しばらくしてから、俺の顔を見て首を振った。

「わ、わざわざこんな風に描くことないんじゃないか？」

「だな。というわけでこっちも見てくれ」

そして新しい写真を取り出す。こっちはポーズは違えどやっぱりレミの写真で、こちらには何の手も加えていない。

「これはどう見える」

「どうって……レミ様の絵だろ」

「だな」

一瞬ちらっと見てから即答するフォルカに満足して、俺は持ってきていた魔導師団名簿のフォルカの名前に丸を付けた。

そんな俺の様子を見て、フィーネが怪訝そうな顔になった。

「……気になっておったのじゃが、おぬし最近何をしとるのじゃ？」

「あれ？　言わなかったっけか？」

「聞いとらん」

そういうのは、名簿渡す時に聞いとけってツッコミを喉の奥にしまい込み、俺は次の標的に写真を見せながら答えた。

「実は今度の会戦の時のメンバー決め、俺に一任されることになってなー」

「なんでおぬしが？」

「いや、真子が騎士団の頼りなさに頭悩ませてたから、俺なりに協力しようかと思って」

二枚目の写真を食い入るように見る奴の名前を聞いてその欄にバツを加えつつ、次の少女魔導師には光太の写真を見せた。もちろん犬耳モフ手つきの。

「……それとおぬしの行動の関連性が分からぬのじゃが」
「フィーネにはまだ早い」
「なんじゃとー！」

俺がそう言い切ると、フィーネが顔を真っ赤にして突っ込んできた。

俺はそれを片手で制しながら、印をつけた名簿を見直す。

やっぱり全体でみると数がすくねぇなぁ……。神官連中にもそれなりに数がいたのは僥倖だったけど。

この案がうまくいくかは……会戦までの俺の腕次第かねぇ。

No.41：side・ryuzi「謎の肉体」（後書き）

いまいち真面目になりきれない。それが隆司クオリティ……。
そしてガンガン怪しくなっていく隆司の正体。何より一番ヤバいのは、魔法で調べても人間、としか出ない点だと思われ。
次は真子ちゃん視点で進みますよー。

No．42：side・mako「交易の町、レスト」

あの後、現住生物のデカい動物を撃退したり、サンシターの意外なほどの料理の腕前に女として涙流したりしながら、目的の貴族領に到着したあたしたち。

サンシターが大通りのど真ん中で馬車を止めたので、あたしたちは道に降りる。

こんな大通りに馬車なんて止めていいのかしら、と思わなくはないけれど道に並んでいる店はほとんど開いていない。

どうしたのかしら一体。

「そう言えば、この町って名前とかあるんですか？」

「おや、言ってませんでしたかなー？」

「ええ」

「レストと申します。以前言いましたように、交易が盛んな町だったのですよー」

「へえ……」

カウルさんの言葉に、あたしは馬車を乗り入れた大通りを眺める。

確かに交易が盛んな町だけあって、大通りを中心に町が発展しているようだ。というよりは、大通りの途中に町が生まれたというべきだろうか。

カウルさん曰く、初めは水源近くの中継地点だったものが、必要に迫られて宿泊施設や周辺から物資を補充するための組織などを備えていった結果、このレストという町が生まれたんだとか。

「しかし、過去形で語るだけあって今じゃ閑散としてますね」

「いやー、お恥ずかしい限りです」

ちっとも恥ずかしがっていない様子のカウルさんであるが、その顔は深刻そのものだ。

そりゃ、交易を盛んに行う町が敵軍の手に落ちてるんじゃ閑散とするのも致し方なしって感じだけど……。

「どこにも人がいないのかな……？」

「いえ、そんなはずは……」

不安そうな光太に答えたアスカが、手近な店に近づいて声をかける。

「もし！　誰かいませんか！　我々はアメリア王国騎士団より派遣されたものなのですが！」

「あー、はいはい！　ちょっと待っておくれよー！」

アスカの大声に反応したのか、店の奥の方からダカダカと音を立てながら大柄なおばさんが顔を出した。

「いやー、ごめんなさいねー！　ここの所荷馬車も通らないもんだから、店の倉庫もからっぽでねー！　交易の街なのに、店がみんな閉じててびっくりしただろ？」

「あ、いえ、はい……」

おばさんは人柄のよさそうな笑みを浮かべながら、勢いよく捲し立てた。

その勢いに押されるように、アスカはあいまいにうなずくばかりだ。

まあ、この手のおばさんの勢いって恐ろしいものがあるもんね。

とはいえ、押されっぱなしじゃ話も進まないし、状況もわかんないわね。

「それで？　必要なのはなんだい？　空っぽではあるけど、何とか融通できるものがあったら――」
「あー、すいません。実はあたしたち、物を買いに来たんじゃないんですよ」
「ん？　どういうことだい？」

アスカの横から顔を出して、無理やり話題を遮るあたしの顔をおばさんは不思議そうな顔で見つめた。
アスカはあたしの横やりにほっとしたようにため息をつき、改めて襟首を正した。

「我々はアメリア王国騎士団より派遣され、この貴族領を魔王軍より解放する任務を帯びているのです」
「まあ！？　あんたたちが！？」
「はい、なので――」
「それならそうと、早く御言いよ！　うちらも、結構待ったんだから！」
「も、申し訳ありません！」

おばさんの怒ってるような言葉に、生真面目に頭を下げるアスカ。
ああ、もう、また話が進まないし……。

「それで、いつあいつらを追っ払ってくれるんだい！？　早いとこ交易再開してもらわないと、うちらみんな干上がっちまうよ！」
「あ、それはすぐにでも――」
「すぐっていつさ！？　いますぐ！？」
「そ、それは――」
「まーまー、落ち着いてください」

何やら言いがかりめいてきたおばさんに一々応対を始めるアスカを遮るようにカウルさんが前に出る。
その姿を見て、おばさんが目を見開いた。

「カウルさん!?　一緒に戻ってきてたのかい!?」
「えー、まー。救援を呼びに戻ったものの、魔王軍が王都の目前まで迫ってまして、今日までかかってしまいましたが」
「まあ、そうなのかい!?」

カウルさんの言葉に、アスカが恐縮したのか縮こまって首を垂れる。
でも、おばさんも状況を理解したのか、すまなさそうに柳眉を下げてアスカに謝罪の声をかける。

「そうとも知らずにごめんねぇ。そりゃ、あなたも王都防衛の方が大事だものねぇ」
「あ、はい、申し訳ないです……」
「謝るんじゃないよ!　国王様あっての、レストだもの!」

カラカラと快活に笑うおばさん。
……ひょっとして、国王様が没してるのを知らないのかしら?
まあ、今は重要じゃないわね。
あたしはおばさんが落ち着いたのを確認してから、また口を開いた。

「まあ、今は王都もある程度防衛力が上がりましたんで、こうして領地奪還に動いてるんです。なので、現地の方に魔王軍の動向を伺いたかったんですけど」
「ああ、はいはい!　うちなんかでよけりゃ、いくらでも話すよ!」

そういって笑顔を見せるおばさん。

「じゃあ、基本的に魔王軍が何をしてるか教えてもらってもいいですか？」

「なにを……かい？　たとえば？」

「いや、それが知りたいから聞いてるんですけど……」

あたしの言葉を聞いて、おばさんは困ったように首を傾げた。

「といってもねぇ。あたしらもここに来た連中のことはよくわからないからねぇ」

「わからない……ってことは、町そのものにはそんなに手出ししてないってことですか？」

「いやぁ、前にえらいさんが一度見回りに来て、この町がどういう町なのか聞いて回ったことはあるけど、それだけだねぇ」

それだけって……。侵略価値はないわけないと思うんだけど……。

確かにこの町は交易の町だから、固有の資源があるわけじゃないけど、さまざまな物資が集まる町でもあるはず。

戦略的に見れば、王都への物資の遮断もできるしかなり重要だと思うんだけど……。実際、この町からの物資の供給は完全に遮断されてたわけだし。

「ああ！　そういえば、侵略されてからはほかの町から荷馬車は来なくなったねぇ」

付け足すようなおばさんの言葉に、あたしは顔をしかめる。

そりゃそうでしょ。侵略された町に物資を運ぶアホはさすがにいない。

「だからなのか、週一くらいのペースで魔王軍の下っ端が食料を届けに来るようになってねぇ」
「は？　食料？」
「ああ、そうだよ。なんでも、町の周辺で狩れる動物の肉だとかでね。ここ最近はそんなものばっかり食べてたよ」
　困ったような笑顔を浮かべるおばさんを、あたしはさらに顔をしかめつつ見つめた。
　まさかの魔王軍からの食糧供給とか……。確かに前にそういう話は聞いていたけれど、実際に現地の人から聞かされると戸惑うっていうか……。
　何のための侵略なのよ？
「……じゃあ、それ以外で魔王軍の連中が目立った行動を取ったことは？」
「特別はないねぇ。ここを占領されてから初めの一週間くらいは、いろんな店をもの珍しそうに下っ端の子たちが見て回って、たまに物々交換できないかって交渉はしてたけどね」
　観光までしてるし。わけがわからない。
　得られる情報もこれ以上なさそうだったので、あたしはおばさんにお礼を言って会話を切り上げる。
　アスカとカウルさんは、そのままわりの様子を見に行った光太について行った。下手に魔王軍に接触しやしないか気になったが、おばさんの言葉を信じるなら、週一くらいのペースでしか顔を見せないし、そもそもあたしらのメンツで一番強い二人が連れ立ってるんだ。心配いらないだろう。
「真子ちゃん、どう？」
「どうって言われてもねー……」

いつの間にか馬車から降りてた礼美の言葉に、あたしは首を傾げる。

おばさんから聞いた話を総合すると、魔王軍はこの町を占拠こそすれ特別手出しはせず、物資の供給を遮断した後はこの町が植えたりしないように気を付けてることが分かったくらいかしら。

侵略者としてみたらはなはだ疑問よね。やる気があるのかないのか……。

でも、本隊がやってくる方向からだいぶずれてることを考えるに、この町を占拠したのは別働隊のはず。

それを考えれば、占拠以上のことはできなかったって考えることも……。

……いや、物資の供給場所と考えれば、ここから本隊に物資を送れるように手筈してもおかしくないわよね。

肝心の魔王軍もこの町の中にいるんだかいないんだか。

「マコ様ー!?」

「んー?」

何やら慌てたように駆けてくるサンシター。

どうしたのかしら。というよりはどこに行ってたのかしら?

「サンシター、あんたどこ行ってたのよ?」

「あ、はい。馬車を宿屋に預けていたであります」

ああ、馬車移動させてたのね。まあ、目的地にはついたし、あんな馬鹿でかい馬車、邪魔にしかならないわよね。

「で、なんかあったの?」

「あ、そうでありました!」

サンシターは懐に手を突っ込んで、その中から一通の封筒を取り出した。

「こ、これを！」

「なにこれ」

「先ほど、魔王軍の使者を名乗るものに出会いまして、渡されたでありります！」

「え！？」

礼美が驚いたような声を上げる。

驚きもするだろう。まさか魔王軍の方から接触してくるとは……。

でもあたしは別の意味でも驚いた。

「サンシター。あんた、よく無事だったわね……」

「自分も捕まるかと思ったでありますが“タイプじゃないにゃ”と言われまして……」

なんか腑に落ちない顔をするサンシター。

にしても語尾に“にゃ”って……。まさかとは思うけど……。

「あ、それから、マコ様に伝言が……」

「なに？」

「“今回は負けないにゃ♪　ばーい、キャットシスター♪”とのことであります」

わざわざ語尾まで再現しなくてよろしい、気持ち悪い。

肝心の封筒の中身は一枚の紙で、こっちにもわかるようにか魔術（カオシック）言語（クルーン）で書かれており、この町の外側……私たちが入ってきた側とは逆の大通りにやって来いという指定がされていた。

王都でやってるように、戦闘しようってことかしら？　しかし……。

「まずいわね、こっちにソフィアの親衛隊が来てるわよ……？」
「うん……。ちょっと、厳しくなってきたかもだね……」

確かに、こちらに親衛隊をはじめとする魔王軍主力上位陣がやってきているのも問題だけど、最大の問題は別のところにある。

「……アルル。ちょっと確認するわよ？」
「はい～？」
「今回の遠征、基本的に王城から城下町に、情報って開示されてるわよね？」
「はい～。そのはずですよ～？　ね～、ヨハンさん～？」

小首を傾げながらの質問に、ヨハンさんも小さくうなずいた。

「ええ。レミ様たちのご活躍を、いち早く伝えられるように通信係の魔導師も王都の方でスタンバイしているはずです」
「勝って帰って、出迎えられるまでが今回の遠征だろ？」

何をいまさらという顔をするジョージの言葉に、あたしは頷いてみせた。
うん、ここまではあたしも知ってる内容だ。作戦会議の時、自分で進言したんだから。

「その情報ってさ。王都以外の町にも伝聞されてる？」
「う～ん？　そんな予定はありませんが～？」
「いえ！　もっと多くの町に、レミ様の御威光を広めるべきです！　そう、それはすべて民の安寧のために！」

「いい加減、レミ関係で興奮するのどうにかなんねーのかてめーは……」

あたしとしてもその意見には賛成だわ、でも……。

「いや、それ自体はいいのよ。問題は、現時点での話なのよ」

「？　現時点～？」

「だからさ。王都から外にあたしたちがこの町に来るって情報が洩れてるのかどうかなのよ」

「っ！」

「あん？」

あたしの言葉に、ヨハンさんの顔が厳しく締まる。

あたしの言いたいことの趣旨が伝わったみたいね。

「……現時点で、王都より外にレミ様たちをはじめとする御三方がこちらへやってくるという情報は、出ていないはずです」

「ああ、やっぱり？」

なんとなく納得しつつ、あたしはうなずいた。

これで確定かしらね。

「マコ様、これは……」

「まあ、前から怪しかったんだけどね」

「真子ちゃん……？」

深刻な顔になるヨハンさんにため息をつき、あたしはいまいち理解していないらしい礼美の顔を見る。

「あたしが言いたいのはね、どうしてかこっちの情報が向こうに筒

抜けになってるってことよ」
「え……！？」
礼美の顔が驚愕に染まる。
「それ、どういう意味！？」
「落ち着きなさい、礼美」
「でも……！」
あの礼美が焦るのも無理はない。何しろ、こちらの情報が筒抜けになってるってことは、イコールで裏切り者がいる可能性があるってことだ。
「あれか？　城の中に、裏切者がいるってことか？」
「ジョージ君！」
そのものずばりを言ってしまうジョージを咎める礼美。
まあ、不安になるのもわかる。でも、今回はその可能性は薄そうね。
「心配しなくていいわ。その可能性はたぶんないから」
「え？」
「だって、向こうにはこっちの魔法を無効化できる魔導師がいるのよ？　その魔法の腕で直接覗いたほうが、よっぽど早いじゃない」
「あ、そっか……」
「は？　お前、何言ｔ」
「しー」
「むぐっ」
あたしの言葉に安心したような言葉になる礼美。ジョージが怪訝

そうに顔をしかめるけど、あたしは睨んでそれ以上しゃべらせない。
それでもしゃべろうとするが、空気を読んだサンシターによってその口をふさがれる。ナイスフォロー、サンシター。
もちろん、あたしの言葉はこの子を安心させるための気休めだ。いくらなんでも、敵本陣を覗き見れるほど高度な探察魔法が使えるとは思えないし、そもそも王城には先代宮廷魔導師が施したそういった魔法を妨害する結界が施されているのだ。何かが覗き見れば、それを管理している今代の宮廷魔導師……フィーネが気が付く。
だが、裏切り者がいないという言葉自体は何の根拠もないわけではない。
そもそも魔王軍は竜の谷と呼ばれる渓谷を超えてこちらにやってきた。
普通裏切り者、というかスパイを仕込むのであれば、何年も時間をかけて信頼を勝ち取るものだ。それをするには、この国と魔族の国は遠すぎる。
もちろん魔王軍が初めからこの国に侵略戦を仕掛けるつもりで、何年も前から準備していた可能性はあるだろうけど、ならさっさと王都を攻め落とせばいい。
長い時間、仕込までしておいてわざわざ戦争を長引かせる理由はない。そもそもスパイを利用するということは、さっさと敵対国を滅ぼしたいという行動の表れ。自国の情報を持ったスパイを敵国に置くというのは、それだけでリスクなのだから。

「それで、どうするでありますか、マコ様？」
「そうね……」

ジョージの口をふさぎつつ、あたしの顔色を伺うサンシター。
相手からこんな形で誘われるとは思わなかった。とはいえ、こっちとしてもどう攻めるか迷っていたところだ。
乗ってみるのもいいだろう。

「光太たちと合流してから、この手紙に書いてある場所に行ってみましょう」

あたしの言葉に、ジョージを除く全員が頷く。

うまくいけば、ここを占拠してる連中の居場所も割れるかもしれない……。

人数が少ない以上、無理はできないけどね……。

あたしはこの後起こるであろう激戦を予感して、乾いた唇をなめた。

Ｎｏ．４２：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「交易の町、レスト」（後書き）

そんなわけで到着でございます。

次回あたり、この地での魔王軍占拠部隊と戦闘になるわけですが……。

珍しく連続で同一の人物視点になります。引き続き真子ちゃんよろー。

Ｎｏ．４３：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「魔竜姫ソフィア、その実力」

お店の人に何か話を聞いていたらしい光太と無事合流し、相手が指定した場所に向かうあたしたち。
そこで待ち構えていたのは、想像通りの猫耳と予想外のドラゴン娘だった。
黒い翼と背をこちらに向けたドラゴン娘は、高らかに声を張り上げる。

「よく来たな貴様ら！　領地を少数精鋭で奪い返しに来た、その心意気は認めるがそれをたやすく許す我々じゃ――」

そこで黒い鱗を持つドラゴンはいったん言葉を切り、振り向いて見事なドヤ顔で一言。

「だから嫁というなと言っているだろう！？」

決まった！と言わんばかりの顔だが、こっちとしては反応に困る。だいたいそのセリフをのたまうやつがいないのだから。
そのことに気が付いたらしいソフィアが、右と左と顔を向けて呆然とした顔であたしの方を向いた。

「……なあ、魔導師。あの男はどこだ？」
「隆司なら、今回は王都で留守番よ？」

あたしの一言にがっくり膝を落として両手に大地をつくソフィア。
ああ、こうしてみるとｏｒｚって確かにうなだれた人間に見えるのね。よくわかるわ。
ソフィアの隣で、アチャーというように額に手を当てていた猫娘

……ミミルがその背中を慰めるように叩いた。

「まあまあ、しかたないにゃー。確認もせずしてやったり顔であんなこっぱずかしいセリフを放っちゃったソフィア様の自爆にゃー」

「貴様、慰める気がないだろう!?」

ミミルのあまりの言い草に、ソフィアがガオーと顔を上げて吠える。

なんというか、変な主従ね。ミミルが主を立てる気がなさそうなのは猫だから良しとして、ソフィアの方もそれを当然みたいな感じで受け入れてるっぽいし。

ミミルは楽しそうなニヤケ面ではあるものの、それでも一応主を慰める気はあったのか光太を指差した。

「そんなことよりも、今回はガオちんもリュー君もいないんだから、コッたんと遊んでみるいい機会じゃにゃーかねー?」

「は! そ、そうだ! 勇者は何もあの男だけではないのだ!」

何やらよくわからない愛称を口にするミミルに、いいように操られるソフィア。

リュー君は隆司のことだとして……コッたんって光太のこと?

どこをどういじったらそんな愛称が飛び出すのよ……。

だが、そんな奇抜な愛称などどうでもいいのか、あっという間に立ち直ったソフィアは腰のレイピアを引き抜いて光太に突き付けた。

「フフフ、今まではあの男とばかり戦っていたが、貴様の剣の腕も見事と見た! 一手相手を願おうじゃないか!」

「御指名よ、光太」

「うん」

光太は緊張したような顔をして、腰の長剣を引き抜いた。
今の隆司とほぼ互角の奴が相手か……。光太がどこまで通用するか、見物ね。

「お気を付けください、コウタ様……」
「コウタ様、ファイト～！」
「ありがとう、アスカさん、アルルさん」

二人の声援に笑って答えながら、光太は剣を青眼に構える。
対するソフィアは不敵に笑いながらも型を取らない。無行の位、って奴かしら……？
対峙する両者は、しばらく言葉もなく互いににらみ合う。
光太がすり足で少し前進する。

「――ハァァァァァァ！！」
「ヤァァァァァァ！！」

それを合図に、互いに勢いよく飛び出す！
その両足で駆ける光太に対し、ソフィアは背中の翼で空を飛んでいる。
そして両者の武器が鍔迫り合いを起こし、一瞬拮抗し。
ソフィアが両の足で地面に踏ん張ったと見えた瞬間、勢いよく光太の体がすっ飛ばされた。

「「は？」」

間の抜けた声が上がる。あとで気づいたんだけど、これ一つはあたしの声でもう一つはソフィアの声だったのよね。
呆然とするあたしの視界からすっ飛んで後方に消えた光太は二度三度とバウンドを繰り返したような音を立てる。

「ご！？　が、がはっ！」

慌てて振り返ると、豆粒みたいに小さくなった光太が、激しく咳き込みながら立ち上がるところだった。

幸い吐血の類はしてないし、怪我もないみたいだけど。

「光太君！？」

「コウタ様～！」

礼美とアルルが慌てたように駆けだした。そのまま光太のそばに近寄ると、お互いにその体を治療し始める。

一方、あっさり光太に勝利したソフィアはびっくりしたような表情のまま自分の剣を見つめ、そのまま青眼の構えで何度か素振り。

そして横を向いて誰もいないのを確認してから、地面に向けて勢い良く刃を振るった。

ズバンッ！

そんな音を立てて、地面には深い斬撃跡が現れた。

「……私が、特別強くなってるわけじゃないんだよな？」

「いや、ソフィア様の突進を真正面から受け止められる人間なんかいるわけにゃいでしょうがよ」

「いや、しかしあの男はしっかり受け止めたぞ？」

「それも謎よにゃー？　リュー君、どんな体してるにゃよ」

「ちょ、ちょ、ちょいまち」

腑に落ちない顔で臣下に問いかけるソフィアに待ったをかけるあたし。

いやほんと待ってほしい。なんで鍔迫り合いしただけで光太が吹っ飛ぶのよ!?

「む？　なんだ？」

存外あっさり振り返ってくれるソフィアに、あたしは慎重に質問した。

「あんた……今の体重はいくつ？」

「む？　今の体重か？」

ソフィアはしばらく考えてから、こう答えた。

「確か５００カロンは超えてないと思うが……いくつくらいだったか？」

「だいたい４５０カロンくらいじゃにゃかったかにゃ？」

「な……！？」

相手が使用した単位はアメリア王国の重量単位だったのだが今はそんなことはどうでもいい。

カロンとは、だいたいあたしたちの世界でキロに相当する単位だ。すなわち４５０カロンとは、あたしたちの世界での４５０キロに相当するということだ。

あたしは慌てて礼美に支えられながら戻ってきた光太に聞く。

「こ、光太！　光太！」

「ごほ……！　な、何、真子ちゃん？」

「あんた、今の体重は！？」

「え？　今は……７０キロくらいだったと思うけど」

つまり体重差六倍超!?　そんなのにぶちかまし喰らったら吹っ飛んで当然じゃない！

つまり光太はたった今、同じだけのスピードで走るバイクに真正面からぶつかっていったようなものなのだ。正直、腕やら足やらの骨が折れてもおかしくはない。

っていうか、そんなのと真正面からぶつかれる隆司って、今どんな体してんのよ!?

「は!?　まさか、魔族って平均的に体重が重いの!?」

「しつれーにゃ！　私は５０キロくらいだし、体重４００カロン越えなんてメガトン級はソフィア様だけにゃ！」

「失礼ってどういう意味だ貴様」

ミミルの言葉に、ほっと溜息をつく。

よかった……。魔族がみんな超体重とかだったら、もう遠くから魔法で殲滅するくらいしか手段が選べなくなるところだった……。

「ところで参考までに聞いてみたいんだけど、あのヴァルト将軍って、何カロンくらいなの？」

「だいたい３５０カロンくらいかにゃー」

「何者よあんた……」

「魔竜姫だが、なにか？」

明らかに高身長の筋肉ダルマ狼将軍よりはるかに重い、目の前のドラゴン娘を半目で睨んでやると妙に自信満々な答えが返ってきた。

その仕草が、今は王都で悔しがっていそうなあのバカ（隆司）の姿を思い起こさせてなんか腹が立つ。

「もう隆司と結婚しちゃえば？　お似合いよあんたたち」

「断る！　似合う似合わない以前に、何かに負ける気がする！」

あたしの言葉に、毅然と返すソフィア。
っていうか、何かに負ける気がするって何よ。何に負けるっていうのよまったく……。

「そういうこと言ってると、婚期逃すんじゃない？　何年生きてるか知らないけどさ」
「まだ十六年ちょっとくらいしか生きとらんわい！　竜族の婚期はこれからよ！」

そんな無駄に胸張られても困るし腹立たしいだけなんだけど。体重のほとんどはその胸じゃねぇのかよ。

「まあ、そんなのあたしの知ったこっちゃないんだけどね集え天星（サテライト・スターズ）！」
「ぬお！？」

あたしは会話を紡いで稼いだ時間で練り上げた天星の魔法を解き放つ。
続けざま、息も吐かせぬように天星に命令を送る。

「討て天ぼ（ストライク・ス）……」
「にゃぁーん！」

だが、それより早くミミルがあたしの間合いまで接近してくる。
って、ちょ！？　ソフィアの隣にいたはずなのにいつの間に！？

「「光矢（ライトボウ）弾！」」

だが、ミミルが両手に携えたナイフをあたしの体に叩きつける寸

前、後ろから礼美とジョージが魔法を唱える声がする。
ミミルが声もなく後退すると、今までミミルがいた場所に光の矢が通り過ぎていく。

「くっ！？」
「にゃん？」

その隙を逃さず、あたしは腰の後ろに差し込んでいた魔導式銃を取り出して引き金を引く。
照準を合わせる間もないし、引いてくれれば御の字！

パパパパパパパン！！！

「にゃぉぉぉ！！？？」

乾いた音が連続で鳴り響き、ミミルがいたあたりを連続で光矢弾（ライトボウ）が貫いていく。
今回持ってきたのは、引き金を引き続ける限り連続で光矢弾（ライトボウ）を放てる、マシンガンタイプだ。
光矢弾（ライトボウ）が発射される衝撃で照準がひどくぶれるが、牽制には十分！
踊るように、慌てて体をひねるミミルから飛びのきあたしは新しい構成を練る。

「隔て天星（サテライト・シールド）！　光太！　アスカ！　ヨハンさん！」
「わかった！」
「参ります！」
「心得ました！」

自らの身を守ってくれる防壁を張り、今回の前衛組に声をかける。
光太がまっすぐに敵の一軍に突撃し、その両脇をアスカとヨハン

さんが固める。

「む！　者ども、かかれ！」

「「「「おおー！！」」」」

その姿を見てソフィアが後退し、代わりに結構な人数の獣耳軍団が襲い掛かってくる。

あたしは素早く後ろに下がって後方支援組に並んで光太たちの援護を始める。

「みんな適当にぶっ放せ！　撃ちゃ当たるわよ強風撃（ブラスト・ウィンド）！」

「光太君たちに当たったらどうするの！？」

「そんときゃ、そん時だろ！　光槍撃（スピア・スマッシャー）！」

「コウタ様ならきっと大丈夫です～！　土隆撃（アース・グレイブ）～！」

鋭い強風が魔王軍兵士の足を止め、そこに光の槍と地面の杭が襲い掛かる。

どちらも一応、殺さない程度の手加減はしてあるけれど痛そうねぇ。

そしてひるんだ兵士たちを、光太たちが当身などの手段を持って気絶させていく。

光太は渦巻く風の剣を棒のようにして殴り、アスカは柄尻を使っている。

ヨハンさんは素手だ。ここに来る途中の、戦力確認の時に聞いたときは半信半疑だったけど、手際よく魔族たちを気絶させてる姿を見ると頼れるわねー。

今回の作戦は大将首一つを一気に狙い撃つもの。

普通の人間と体重六倍以上の差があるのは予想外にもほどがあったけど、さすがに数人がかりで掛れば……。

「複数でかかるか……！」
「大将首を狙う……。戦の常套ではあるけど、ソフィア様を舐めすぎにゃー……？」

前方で盾になっている兵士たちが次々と気絶させられるのを見せられ、しかしなおあたしたちにちょっかいかけるミミルは余裕の表情を崩さない。
あたしは天星の一つを手掌で操りながら、声を張り上げる。

「どういう、意味よ！？」
「すぐわかるにゃーん？」

ひらりと避けて、一番小さなジョージに襲い掛かるが、礼美の盾に阻まれる。

「ジョージ君はやらせません！」
「ナイス、レミ！　光波掌（ブラスト・ウェイブ）！」
「にゃーん。私ってばちょっと変態チックー？」

ジョージの掌から放たれた衝撃波を猫のような動きで回避するミミル。
ロリコンは死滅しろ！というツッコミとともに天星をその体に叩きつけようとあたしは手を振りかぶる。

「――やはり今回の戦の要は貴様だな、魔導師」
「ッ！？」

すぐそばから聞こえてきた声に、目を剥いた。
慌ててそちらを向くと、いつの間にかこちらにソフィアが接近していた。

「天星ッ！」

思わず魔術言語（カオシックルーン）による命令も忘れ、生み出していた天星達をソフィアに向けて飛ばす。

だが、眉一つ動かす、それどころか腕の軌跡すら見切らせず、ソフィアはそのすべてをたった一瞬で斬り裂いた。

「な……！？」

「真子ちゃん！」

「ソフィア様は、魔王軍で最も速いお方にゃーん？　鈍な魔導師で対抗できるかにゃーん？」

礼美たちがあたしの方に援護に来ようとするが、ミミルがその間に立って動きを遮る。

前に突出した光太たちも、今度は周囲の魔族たちが壁となってこちらまで来ることができない。

まずった、今回の向こうはイの一番にあたしをつぶしに来た……！　てっきりミミルがその役だと思って油断した……！

っていうか重いくせに一番速いとか、チートにもほどがあんでしょうが……！

「せめて痛みなく、しばし眠るがいい。魔導師」

「ぐっ……！？」

ソフィアは剣を握らぬ方の手を握りしめ、あたしに向かって振りかぶる。

一瞬天星で防御することを考えるけど、生み出す瞬間と防御までの間のラグが……！

そんなあたしの迷いをぶち壊すように、ソフィアの拳は無情に振

り下ろされ。

「マコ様あぶなぁぁぁぁぁぁいいいいい！！」

あたしの体をサンシターが突き飛ばした。

って、あんた逃げてろって言っておいたでしょうが！？

文句を言ういとまもあればこそ、ソフィアの拳がサンシターの頭を捕らえ、エライ痛そうな音ともにサンシターの体が大地に沈む。

「む。邪魔が入ったか」

ソフィアはサンシター撃破に大した感慨も見せずつぶやいて、あたしに向き直る。

その間に魔法の構成は練れたけど、ソフィアの動きが止まらなきゃ当てられない……！

「まだまだぁ！」

「ぬ！？」

瞬間、サンシターがソフィアの体に後ろから飛びかかった。

腰にすがりつくような形だ。情けないといえば情けないが……。

今しかない！

「光槍連弾（ディバイン・ファランクス）！！」

さっきジョージが撃った奴が、十数本もの密度でソフィアに襲い掛かる。

だが、ソフィアは尻尾でサンシターの体を巻き取るとそのまま槍の群れにその体を投げつけた。

「ぎにゃー！？」

サンシターは精神だけを疲弊させる光の槍に貫かれ、そのまま墜ちた。

えーっと、一応あの槍一本だけでも気絶するくらいの威力があるんだけど……。は、廃人になったりしないわよね？

「光武連弾（ディバイン・アームズ）！」

悠々あたしの一撃を回避しきったソフィアの頭上に、今度はジョージが呼び出した光の武器が降り注ぐ。

ソフィアは素早く宙に浮き、回避して見せた。

滑るようなその動きは、ホバークラフトを連想させた。その体からは湯水のように魔力が出ているのがわかる。

そうか、あの体重を魔力で支えてるのか……！　そして魔力を浮力代わりにして空中を移動してる……！

「フフフ、なかなかだ！　だが、あと一歩足りないぞ？」

わかってるわよそんなこたぁ！

あとは何！？　何があればソフィアを落とせる……！？

と、その時。

「光破旋風刃（ライトニングストームエッジ）！」

魔族たちの壁を突破しようとしていた光太が叫び、強風と光の刃が彼を中心に乱れ飛ぶ。

あれは……この間見た光の剣！　元々はこの形で発動するの！？

「む！？」

「いけぇぇぇぇぇ！！！」

周囲の魔族を吹き飛ばした光太は、刃を伴った旋風をソフィアに向かって叩きつけた。

ソフィアは慌ててそれを回避する。

「こんな隠し玉すらあるとは……！　やはり侮れんなぁ！」

ソフィアは心の底から楽しそうな笑みを浮かべるが、その体を着地させた地点に駆け寄ったミミルがそれに水を差す。

「もう今日はこんなもんにゃー」

「む！？　何故だ！」

「いつも通り、周りがもう全滅したからにゃ。さすがにあたしら二人じゃ無理にゃー」

「ぬ……」

そういってソフィアが周りを睥睨する。

先ほどの光太の一撃、アスカとヨハンさんは都合よく避けたけれど、それ以外の魔族達にはクリティカルヒットしたらしい。もうほとんど立っていない。

その代わり、こっちのエースアタッカーは息も絶え絶えでソフィアを睨みつけているけど。

そんな光太の姿や、周りの臣下達を目に収めたソフィアは、ミミルの進言を受け入れた。

「確かにな……。魔導師よ！　今回は引こう！」

「今回も、でしょうが……！」

「お約束って奴にゃ。またねー♪」

ミミルがそういって何事かつぶやくと、その場に轟！と轟音を立てて竜巻が出現する。

「うわっ！？」

あたしたちが慌てて目をつむり、そして開けた時にはもうそこに魔王軍の姿はなかった。

「私たち……勝てたのかな……？」

「……さあね」

小さくつぶやく礼美に、あたしは答えるが、完全に見逃された形だろう。

ミミルはああいっていたが、ソフィアの体重とあのスピードで来れられては普通の人間では歯が立たない。

ドラゴンという以上、並みの魔法も通用しないだろう。あれに対抗するには、隆司の存在が必要になる。理屈はどうあれ、真正面からあれと堂々ぶつかりあえる隆司が。

「くそ……！」

サンシターを復活させるために彼に駆け寄る礼美の背中を見つめつつ、あたしは地面を蹴っ飛ばした。

今回隆司抜きで行動したのは、王都防衛の意味もあるけれどそれ以上にあたしたちだけでもなんとかできるように訓練するためだ。

現時点で、最も戦力になるのがあいつ。魔族と比べても高い身体能力を持ち、絶対ともいえる生命力を持つあいつが、だ。

だから、あいつ抜きでも多少何とかできるようにしておきたかったのに、ソフィアが出られるだけでこの様……！？

「なに……？　何が足りないっていうの……！？」

言いようのない焦りが、あたしの心の中に芽生える。

何が……何があればいいのよ……！？

Ｎｏ．４３：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「魔竜姫ソフィア、その実力」（後書き）

そんなわけで、やや詰め込みすぎた感もあるけれど魔王軍との戦闘でおま。

びっくりの６０００字オーバー！　いや、あまり長引かせるのもあれだったんで……。しかも半分で分けるのも、切りどころが分からんという……。たまにあるスペシャルっぽい感じで、一つ……。

次回は少し時間を戻して王都の方に中継を飛ばしてみたいと思います。果たして隆司の思惑はうまくいくのか！？

No．44：side・ryuzi「新部隊、設立」

無事にメンバーの選抜を終えた俺は、次の魔王軍襲撃に備え選抜したメンツを集めて講習会もとい修行を開始した。

適性があるっぽい連中を集めただけなので、この時点で半分ほどリタイアとなった。やはり付け焼刃じゃうまくいかないよなぁ。

だが、ここであのＡＢＣ三兄弟が思いのほか役に立ってくれた。

すでに俺と同じレベルだったため、周囲の洗脳もとい講習改め修行をつけてくれるようになったのだ。

俺一人だとおそらくほとんど残らなかったろうけど、四人でやれば何とか十分な人数を育て上げることができた。

騎士だけじゃなく魔導師や神官も混ぜ合わせた混合部隊……。ある意味で正しい部隊の姿だろう。一回の戦闘に出せる最低限の人数が残ったのみだが……今後は普通の部隊に少数参加させて多少の穴を埋める計画である。

まあ、素人考えで立ち上げた部隊だ。多少は使えればいいなぁ、程度の期待度である。騎士団ばかりじゃなくて、魔導師や神官もいるのは純粋に頭数が足りないからだ。おかげで魔導師の数が若干多い気がする。遠距離攻撃が豊富と思うことにしておく。

さらに言うなら男女混合である。騎士団にはほとんどいなかった女性の姿がかなり見て取れる。割合としては半々くらいか。

そういえば、今回の戦争に魔導師や神官がほとんど参加していないのが気になったので、それぞれの長に理由を聞いてみた。

曰く。

「魔導師は座学中心で、体力が持たんからのぅ……」

「神官も同じ理由で、戦いには不向きなのです。申し訳ない」

という理由だった。

それなら鍛えたらいいんじゃねぇのと思わなくはないけど、一ヶ月とか普通に時間かかりそうだからなぁ……。

今回は脳内麻薬（アドレナリン）のブーストに期待するか……、ということで魔王軍が狼煙を上げたのを確認してから、貫徹で最後の仕上げを行う。

明くる日。例によって気色悪いデンギュウに揺られ、俺をはじめとする実験部隊は魔王軍が待つ前線本部へと向かった。

「お待ちしておりました、リュウジ様！」

「あい。魔王軍は？」

前線の見張り兵に尋ねるまでもなく、目の前に見えてはいるけど一応儀礼として聞いておく。

「いつも通り、皆様の到着を待っております！」

「いつも通り、か。こっちゃ、いつもと違うんだけどな」

「むむむ……。うまくいくかのぅ……」

見張りの報告に、団長さんが不安そうな声音で答えた。

まあ、付け焼刃的部隊での戦闘だからなぁ。不安なのも仕方ない。

あと今回はフィーネにも出てきてもらった。一応、真子の代わりだけど、ほとんど戦闘は期待していない。本人が来たがったというのが一番大きな理由だ。

「大丈夫です、フィーネ様！」

「フィーネ様ならきっと大丈夫です！」

「大丈夫だから大丈夫なんです！　ＯＫ！？」

「お、おーけー……？」

「お前ら、勢いだけで幼子を言いくるめるなよ」

っていうか大丈夫しか言ってねぇじゃねぇか。根拠ゼロかよ。

ＡＢＣ三兄弟は、今回はフィーネの護衛である。一応、騎士としては平均的な実力の持ち主たちらしいので、任せても問題ないだろう。

「あんまり待たせても悪いし、そろそろ始めるか」
「そっすねー」

さーて、一週間ぶりの嫁成分補給タイムだー。

「あのー、ところで」
「んー？」

と、見張り兵が不安そうな顔をして俺を呼び止めた。
なんだよ、早く嫁に会いたいのに。

「いえ、その、そちらの一団はいったい……？」

見張り兵の言葉に、俺は背後を振り返る。
そこにいたのは騎士に魔導師、神官といった皆々様がビシッと一糸乱れず直立不動で立っていた。
両手は後ろに控え、胸を張って背筋を伸ばしてはいるが、こわばった顔の目元はクマで真っ黒。
だというのに瞳の輝きだけは生気を滾らせ、不気味なほど爛々と輝いている。
ここに連れてくるまでに、アンナにみられてエライ勢いでビビられたのを思い出す。
ちょっとやりすぎたなー、と反省しつつも見張り兵には何でもないように答えた。

「今回の主力？　まあ、気にしないで？」

「いや、気になります……。あと、人数が足りない気もしますが」

意外と細かいことを気にする見張り兵だが、その言葉は事実かも知れない。

今回連れてこれたのは、だいたい普段の魔王軍の兵士の数と同じ位なのである。

いつも通りなら、間違いなく押し負ける。

ただまあ、もし押し負けても最悪団長さんと俺とフィーネで周りごと吹っ飛ばす方向で作戦を決めてある。そのための護衛ＡＢＣなのだ。

「今回の部隊は、リュウジが編成した部隊だ。なんかあったら、こいつが責任取るさ」

「リュ、リュウジ様が直々に！？」

団長さんが俺の頭にポムと頭を置きながら説明すると、見張り兵はすごい勢いで驚いた。

そして俺の顔をまじまじ見てから、ビシッと敬礼を決めた。

「失礼いたしました！　不敬をお許しください！」

「あ、はい。許します」

こんな風にかしこまられると、対応にすごい困る。どうしたらいいの？

「どうもせんでいいさ。さっさと行こうぜ」

「オイッス」

団長さんの言葉にうなずきつつ、俺は後ろに向かって指示をした。

「行くぞ、ニワカども！　続け！」
「「「「「サー、イエッサー！」」」」」
俺の言葉に一斉に答え、そのまま俺たちの後ろについてザッカザッカと軍靴を鳴らす。
そんな光景に見張り兵が尊敬のまなざしを向けるけど……。
「いろいろまなざし間違えてるよね彼」
「間違いなく間違えてんな……。っていうかお前のせいだろ」
「テヘッ♪」
この部隊の実情を知ってる団長さんの言葉に、俺は可愛らしく返事をした。
団長さんから顔面パンチで返信をもらった。イテェ。
「間違えてるって……何を間違っとるんじゃ？」
「「「フィーネ様は何も心配しなくてよいのです！」」」
「う、うむ……？」
不思議そうなフィーネには、ＡＢＣがうまいことごまかしてくれる。
勢いって大事だなー。
そして見張り兵がいたテントを超えて、魔王軍の目前まで歩みを進める。
「やっと来たねぇ。待ちくたびれたよ」
「今回は後れを取らぬ！」
そこにいたのは四天王の一人、ラミレス。
そしていつものように犬男とその後ろ辺りでこちらを睨む狐っ娘。

そして我が麗しの……。

「……」

……魔竜姫様がおらんなぁ……？

「あのー。つかぬ事をお伺いいたしますが」

「なんだい？」

「嫁（ソフィア）はいずこに？」

俺の質問に、ラミレスは触手を一本持ち上げて、あらぬ方向を指差した。

「いや、あんたたちが貴族領の奪還に動くって報告があったから、そっちの防衛に回ったよ？」

「ガッデェェェェェェェェムッッッ！！！！」

膝から崩れ落ちた俺は、地面を砕く勢いで両手を叩きつけた。そして実際に砕ける地面。

ちくしょおおおおおおおおおお！！！！　まさかそっちに動くとは思わんかったわぁ！　辰之宮隆司、一生の不覚っ！！

「“貴族領を取り戻すのであれば、あの男も全力を出さずにはいられまい！”って意気揚々と出かけていったんだけどねぇ」

「ちくしょう！　俺の背中今すぐ羽生えろ！」

「いや、さすがにそれは無理だろう」

バタバタと両手を振り回してジャンプを繰り返す俺の耳に、団長さんの冷静なツッコミが突き刺さる。

いやいけるいける！　人間やる気になれば羽の一対や二対生えて

くるって！
だから！　今俺に！　ソフィア成分をおおお

フィーネがなんか驚いたような声を上げてます。
っていうかさすがに避けないとまずいか。痛いだろうし。
俺は右手を素早く犬男の剣の側面に入れて、勢いよく横に振り飛ばした。

バチィン！

「ぬあっ！？」

犬男の悲鳴とともに、剣が遠くへと吹き飛んでいく。
おお、結構飛んだなぁ。

「おやおや」
「ガオウ君！」

ラミレスの呆れたような溜息と、狐っ娘の悲鳴が耳に届く。

「ぐっ……！」

犬男がこちらを睨んで体を硬直させるが、こっちから何かする気はない。
手を出さない俺を不審に思って、眉根を寄せる犬男。

「……？」

しばらくお互いににらみ合う。
動く気配がない犬男に俺は業を煮やして、こう言ってやった。

「剣拾いに行っていいよ？」

「なっ！？」

犬男は愕然とした表情になり、だがすぐにその顔を怒りに染める。
そのまま素早く俺と距離を取り、剣を拾いに行った。

「貴様、後悔するなよ！？」
「後悔ならもうしとるわぁぁぁぁ！！！！」

嫁が向こうに行ってるなら、素直に貴族領奪還に動いたわい！
俺の魂の叫びを聞いて犬男が若干鼻白んだ。

「な、何なのだ貴様……」

毒気を抜かれたのか、ペタリと耳を伏せ、その尻尾をしょんぼりとしおらせた。

ざわっ……！

そんな犬男の姿を見て、俺の背後の一団が一瞬ざわめくが一睨みで黙らせる。
まったく気の早い……。

「ところで、今回はてっきり決闘方式を選ぶと思ったんだけどねぇ……」

俺たちの一連のやり取りをもの珍しそうに観察していたラミレスが、俺の背後に目をやりながら口を開いた。

「そっちは団体戦をお望みかい？」
「ん？　ああ」

俺が素直にうなずくと、狐っ娘がうーと犬歯を見せながら唸り声を上げた。

「その人数でですか……？　もしそうなら、それは侮辱と判断します……！」

「然り！」

その背後から姿を現したのはクマ耳のおっさん。この間顔面ぶっ飛ばしたのを根に持っているのか、何やら俺の方を恨みがましいまなざしで見つめている。

「貴公の武勇は認めよう！　だが、そこな騎士たちには覇気が足りん！　実力も足りん！　三倍の数を用意するならともかく、我々と同等の数で対等にやりあえると思っているのであれば、覚悟をもって臨んでもらうぞ！？」

クマおっさんの言葉を受け、その背後の魔族たちがそうだそうだとシュプレヒコールを始めた。

今回は前回と違って年若いのも結構いるな。少女やら妙齢の女戦士の姿も見える。

みんな肉食系の動物なのかね。草食っぽい魔族の姿は見えない。ただ、リザードマンらしい爬虫類系の魔族の姿も見える。

ふむふむ……。まあ、今回は試しだし、種類に関しては後で相談かねぇ。

「まあ、なんと言われようともこの人数しか今回は用意してないしなぁ」

「なんだと！？」

「それに」

クマおっさんが叫ぶより早く。
俺は片目を眇めて不敵な表情を作り、自分の背後を指差してみせた。

「こいつらは、おっさんの眼鏡には適わないかね？」
「なにぃ……？」

唸り声を上げたおっさんが背後の一団に目を向けるのに合わせて、俺も後ろを振り返る。

「「「「「……」」」」」

そこには不気味に沈黙を保った一団があった。
先ほどのシュプレヒコールにひるんだ様子どころか反応ひとつ見せず、ただただじっと眼前の魔族たちを見つめている。
迸るほどの生気。爛々と輝く眼。
そこにいるのは、一見すれば騎士と魔導師と神官の混合部隊。
だが、その気配は一騎当千の古兵（ふるつわもの）を思わせる。

「……ッ」

俺が視線を戻すと、クマおっさんが小さく身震いしているところだった。
俺はわざと嘲るように声を上げてやる。

「どうした？　ビビってんのか？」
「ぬかせ小童……。だが、貴公らの本気は理解した。存分に参られるが良い！」

クマおっさんが声を張り上げ一歩下がる。
それに合わせて魔王軍の下士官たちが闘気を登らせる。どうやらクマおっさんの言葉を受けて残りの魔族たちもやる気になったようだ。
……言質は頂きましたよ？　存分に参りますよ？
俺は心の奥底でニヤァとほくそ笑みながら、ラミレスに向き直る。

「で？　何か不満はあるかな？」
「あたしは特にないさ。むしろ歓迎だよ。あんまり体動かしたくないからねぇ」
「私も同じだ！　人数など関係ない！　戦いとは、人数で有利不利が変わるわけではない！」

俺の質問に、ラミレスとガオウは即答。
最後に残った狐っ娘は難しそうな顔をしていたが、ほか二人の同意を受けて頷いた。

「あなたたちがそう来るのであれば……その傲慢ごと吹き飛ばします……！」
「怖いねぇ……。だが、同意はこれで得られたわけだ」

俺は三人の返事に満足して、後ろを振り返る。
そしてそのまま歩いて混合部隊の前まで歩くと、その前を右へ左へと行き来を始める。
さあ、戦いの前の最後の仕上げだ。

「今この時を持って、お前らはニワカを卒業する。お前らはケモノ属性愛好家（モナー）だ」
「「「「サー、イエッサー！」」」」

一斉に混合部隊の全員が腹の底から声を上げる。
その爆音にフィーネがびっくりしたように飛び上がり、団長さんはつまらなさそうにあくびをして、魔族たちがこれからの戦いに備えて体をこわばらせる。
ただラミレスだけが、俺の言葉に眉根をひそめる。

「そして貴様らはこれより最大の試練に立ち向かう。逃げ場などない。ありはしない。すべてを得るか、地獄に落ちるか……。どうだ、嬉しいか？」
「「「「「サー、イエッサー！」」」」」

うむ。十分な覇気だ。
俺は満足げにうなずいて、混合部隊の前に立ち、一拍置いて、声を張り上げた。

「野郎ども！　俺たちの特技はなんだ！？」
「「「「「モフれ！！　モフれ！！　モフれ！！」」」」」
「この戦いの目的はなんだ！」
「「「「「モフれ！！　モフれ！！　モフれ！！」」」」」
「お前たちはケモノ属性を愛しているか！？　目の前の存在が愛おしいか！？　クソ野郎ども！！」
「「「「「ガンホー！！　ガンホー！！　ガンホー！！」」」」」

ケモナー
ケモノ属性愛好家たちの大音声。それは普通であることの決別。
高らかに宣言されたそれを受け止め、俺は改めて魔王軍に向き直る。
明らかに引いていた。ガン引きだった。だがもう遅いよ？　言質はとったかんね？

「ならば！　アメリア王国ケモナー小隊ケモノ属性愛好家団体行くぞぉぉぉぉぉ

お！！！！」

「「「「「うおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」」」」」

男も女も一緒になって鬨の声を上げ、目の前の魔王軍（エモノたち）に向かって突進していった。

「これはひどい……」

「あ。ダメですよ、団長！」

「たとえホントのことでも心の奥底に秘めるのが、真の紳士でしょう！」

「ホントのことって？　なにがひどいんじゃ？」

「フィーネ様は気にしなくていいんですよー？」

No．44：side・ryuzi「新部隊、設立」（後書き）

そんなわけでみなさんご一緒に。これはひどい……。
もはや何がしたいのかすらわからない隆司の行動。ちなみにケモナー小隊の面々のセリフの「「「「「」」」」」↑このカギかっこ五つ、これはたくさんの人がしゃべっているということの比喩として使用させてもらっております。今更ですね！
次回は地獄絵図となります。おもに魔王軍側にとっての。

No．45：side・ryuzi「ケモナーたちの狂宴」

そこかしこに散ったケモノ属性愛好家たちは、思い思いに自分たちの好みのケモノ属性を愛で始めていた。

「クマ耳のおじさま！　抱いて！　むしろ抱かせてぇぇぇぇぇぇ！」

「ぬあぁぁぁぁぁぁ！？」

あ、クマ耳のおっさんがさっそく女騎士に抱き付かれてる。テディベアにしちゃ、ちょっと強面な気がするんだが。

「わんちゃぁぁぁぁぁぁんんんん！！　その尻尾モフモフさせてぇぇぇぇぇぇ！！」

「きゃーん！？　きゃいんきゃいん！！」

向こうでは魔導師の少年が全力ダッシュで子犬みたいな少女を追っかけていた。スゲェダッシュだな。真子辺りが見たら全身を魔術言語で覆われてたりするんだろうか。

「御ぬこ様ァァァァァ！！　その肉球ぷにぷにさせてくださいいいいいいいいい！！」

「いいわよ！　しからば肉球パンチ！」

「ありがとうございまぐはぁぁぁぁん♪」

その反対側では神官の男が猫耳少女に肉球パンチ喰らって幸せそうな顔して吹っ飛んでいる。っていうかノリがいいなぁ、あの子。

続けざまに迫ってきたケモナーたちを「それー♪」とか言いながら肉球張り手で吹っ飛ばしている。

と。

「ちぃぃぃくぅぅぅしょおおおお！！！！」

いきなりＡが変な絶叫を上げた。

「なに叫んでんだよいきなり」

「我々だけ何故この祭りに参加できないのか！？」

「実に遺憾です！　抗議の意を表明いたします！」

などと言いながら、フィーネを護衛しているＡＢＣが文句を言い始める。

すると、フィーネがしょんぼりした顔でうつむいた。

「すまぬ……。私が役立たずなばかりに……」

「ＮＯ！　フィーネ様が役立たず？　そんなことはあり得ません！」

「向こうが祭りならこちらはカーニバル！　さあ、祭り上げましょう！」

「バカバカ、俺のバカ！　抗議どころか感謝の意を表明する場面だよここは！」

途端に掌返してフィーネを慰めはじめるＡＢＣ。とても分かりやすい連中である。さすがの俺もこの変わり身は引くわー。

と、視界の端にソフィア親衛隊の狐っ娘が逃げ惑っている姿が見えた。

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

「待って！　その尻尾モフモフさせてぇぇぇぇぇぇ！！」

女神官……俺たちと同い年くらいか。鬼気迫る表情で狐っ娘を追

いかける姿は鬼女を想像させる。
しかし狐っ娘、意外と足遅いなぁ。狐って確か狩りをして生きる生き物だった気がするけど。

「きゃあっ！」

しかも蹴躓いてコケたし。

「さあ、追い詰めたわよ！　観念して尻尾モフモフぅ！」
「い、いや……！」

じりじりと手をわき湧きさせながら迫る女神官は軽いホラーだが、それ以上に狐っ娘の様子がおかしい。
周りの魔族が現在の状況に対応しきれない困惑の表情とするならば、狐っ娘は強姦一歩手前の怯えた表情である。
ぬぅ。これはもしや……。

「モォフモフゥウゥウゥウゥ！！」
「いやぁぁぁぁぁ！！？？　助けて、ガオ――」
「レイプ、ダメ、ゼッタイ！！」
「ひでぶっ！？」

女神官が全身を屈伸させ狐っ娘に飛びかかる寸前、俺は女神官の側頭部に蹴りを叩きこんでやった。
貴重なモフモフタイムを邪魔された女神官は、顔を抑えながらこちらの方を険しい表情で見た。

「何をするのよ隊長！？　ケモノ属性を愛でろといったのはあなたじゃない！」
「ほんの数日前まで「魔族滅ぶべし！」なんて叫んでたやつが何を

……。いや、それはどうでもいいか」

女神官の恐るべき順応性にため息をつきつつ、俺は腕を組んでその目の前で仁王立ちになった。

「貴様！　今、ケモナーにあるまじき行為に及ぼうとしたな！？」
「え、どういうこと！？」

俺は後ろを振り返って、ＡＢＣに声を張り上げる。

「Ａ！　Ｂ！　Ｃ！　紳士淑女三協定を言ってみろ！！」
「「「ハッ！　引かぬ！　媚びる！　省みる！　です！！」」」

よろしい。

「確かに引かぬその意思は尊重しよう！　だが、その少女を見てみろ！」
「え……」

俺が指差す先には、体を丸めて小さくふるふる震える少女がいた。その瞳に輝くのは……小さな、涙の粒。

「あ……」
「わかるな？　我々はケモノ属性を愛する。だがそれゆえに、怯えさせては本末転倒！　己を省み、真にケモノ属性を愛せるようになるのだ！」
「そう……そうね！　その通りだわ！　愛は合意あってこそ！」

俺の言葉にうんうんうなずいた女神官はグリンと首をまわして次の標的を探す。

視線の先には、ショタからちょっと成長しかけてる狐少年が。

「そこの僕！　モフモフさせてぇぇぇぇぇぇ！！」

「う、うわぁ！？　こっち来たぁぁぁぁぁ！！」

いや、あんまり変わってねぇ気がするんだけど？

そのままガンダッシュで近づくと、横から狐少年の姉らしい狐娘が飛び出した。

「貴様ぁ！　私の弟を襲わせると――！」

「ならお義姉さま！　一緒にモフりましょう！」

「ならばよし！」

「え、ちょ、ねえうわぁぁぁぁ……――！」

そしてそのままモフられ始める狐少年。南無。っていうか、魔族って順応速いな。

一部のお堅い性格っぽい魔族以外はもうこの状況を楽しみ始めてるのがいるし。

「にゃ～ん♪　ほらほら、つかまえてごらんなさーい♪」

「ＨＡＨＡＨＡ、待てよこいつ～♪」

だいぶ遠くの方で、どっかの砂浜のような追っかけっこを繰り広げてる騎士と猫少女。ただし速度が半端ないな。どっちも本気か。

……あんな感じで猫属性を持つ魔族はほとんどが、この状況を楽しんでいる。自由奔放な性格が多いのかね。

逆に犬系の魔族はだいたい押し倒されるかモフり倒されてるな。

状況に適応しきれず、本来の力を出し切れていないようだ。

「いやぁ、まさかこういう手で来るとはねぇ……」

ニュルニュルと触手がぬめる音を立てながら、ラミレスがケモナーたちの中から姿を現した。
その顔は苦笑でゆがめられているが、さっきから触手がせわしなく動き回っている。

「姐さん踏んでください！」
「お姉さま縛ってください！」

なんて叫びながら爬虫類、特にヘビスキーな連中が飛びかかっている。ラミレスは飛びかかっている連中を、ほとんど見ずに迎撃している。さすが四天王。この程度の戦闘なら、片手間に行えるのか。
そういえば、ラミア系の魔族はほとんど姿みてねぇなぁ。

「なあ、ラミレス姐さん。下半身が蛇の魔族はいねぇのか？」
「姐さんって呼ぶんじゃないよ……。それはともかく、ラミア種かい？　いないことはないけど、あまり連れてきてないからねぇ」

ラミレスの言葉にフムと頷く。
あまり、ということは少しは連れてきてるってことか。ラミレスの姿を考えると、こっちで言う魔導師団みたいな立ち位置なのかもしれない。

「じゃあ、ハーピー系。姿一回も見てねぇけど」
「占領した領地との連絡役に使ってるからねぇ。こっちに回す余裕がないのさ」

なるほど。空を飛べるハーピー系なら、連絡役にうってつけか。
なら今は忙しく飛び回るよなぁ。

「隊長！　婿（ヘビ系）がいません！」
「嫁（ハーピー系）も！」
「そんな血の涙流しながら言わんでも。悪いんだけど、たまにでいいから連れてきてくんない？　会えないのはさすがに忍びねぇからさぁ」
「まさか敵にそんな要求されるとは思わなかったよ」
苦笑の中に脂汗を混ぜながら、ラミレスは頷いた。
「いつになるとは確約しないけど、キッチリ連れてくるさ。あんたたちが、あの子たちを使わなきゃ勝てないくらい強くなったらね」
「隊長何してるんですか！」
「早く嫁（ハーピー系）に会わせてくださいよ！」
「うすらやかましいわぁぁぁぁぁ！　会えると思った嫁に会えんかった俺の立場はどうなるんだコラァァァァァァァ！！」
さすがの物言いに叫び声を上げると、ドカンという音とともに女魔導師が吹っ飛んできた。
「ん？」
「きゃふん！　……フ、フフフ……無念……」
「マナァァァァ！！　無事かぁぁぁぁぁぁ！！」
「ガ、ガオウ君……！」
何やらいい笑顔で息絶える女魔導師。同時に上がる暑苦しい叫び声。
さっきまで涙目だった狐っ娘……マナの顔がパッと明るくなる。
ぜいぜいと荒い息をつきながらマナの体を自分の身体でかくしてかばった犬男……ガオウが、右手に握りしめた剣をこちらに突き付けた。

「よもやこのような手でこようとはな……！　まったくもって予想しなかったぞ！」
「フゥハハァハー！　戦場とは常に敵の意表を突くことから」
「それはもういい！」
石剣奥義がよほどトラウマなのか、がなるように俺の言葉を遮り、剣を構える。
「だがここまでだ！　我が双剣術とマナの魔導術……たやすく敗れるものと思うな！」
「うー……！」
マナがガオウの背中に隠れながらこちらを睨んでいる。反対側からはハリセンボンみたいにブワッ……！と広がった尻尾が激しい自己主張をしている。
「つーか狐っ娘よ。あんな啖呵切っといて、結局逃げるだけかよ？」
「お、大きなお世話です！」
俺の言葉に、マナがべーっと舌を出して抗議する。
そんなマナの姿を、ラミレスはなんか生暖かいまなざしで見つめていた。
「そもそもマナは運動音痴だから魔導師になった変わり種だからねぇ」
「ラ、ラミレス様！？　そんなこと、今言わなくても！？」
「運動音痴……！　魔族にもおるのか……！」
なんか運動音痴に食いついたフィーネが瞳をキラキラさせながら

マナを見つめている。なんだろう、何か心の琴線に触れる部分があったのだろうか。
何とも生ぬるい空気が流れていく。マナはアワアワ慌て、フィーネは期待を込めた眼差しでマナを見つめ、ガオウは油断なくこちらを睨み、俺はどうでもよさそうに脱力している。
あ、そうだ。

「そういや、前から気になってたんだけどさー」
「ぬ。なんだ？」
「魔族って、お互いの姿っていうか毛並みとかってどういう風に見えんの？」

俺の質問にガオウはしばらく考えてから、マナのしっぽを見てから答えた。

「マナの毛並みは柔らかく気持ちがよさそうだと思うが、それがどうかしたか？」
「え、えええぇっ！？」

ぼふん！？と大きな音がしたかと思うほど、マナの顔が一瞬で真っ赤になった。
ふーん、やっぱり魔族でもこっちと感覚は似てるんだなぁ。
そしてマナはガオウにホの字か。ふーん、ほー。
向こうでもこの手の感情というか感覚には敏感だったのだ。何しろ全自動機織機がそばにいたからな！　周りホの字だらけだよ！
もう見飽きたよ！
でもさすがにこれは新鮮だなー。ガオウも鈍感系みたいだけど、光太みたいにやんわり褒めてフラグ立てるタイプじゃなくて、そんな当たり前のことで何騒いでんの？って平然と言ってのけるタイプか。

よし、イジろう。

「ほー。それはさぞ抱き心地がいいんだろうなぁ。枕とかによさそうだ」

「言われてみればそうだな。たまにミミルも枕にしたがっていた」

「ぴっ！？」

俺の誘導にガオウが素直に乗ってくる。

マナが珍妙な声を上げてガオウの口をふさごうとするが、なんかいい笑顔をしたラミレスがその口を塞いでしまう。

俺はラミレスにサムズアップしながら、会話を続ける。

「お前はそう思わんの？」

「考えたこともないな」

「さっき気持ちよさそうだって言ってたじゃん。なあ」

「ええ、聞いてましたとも！」

「やわらかそうだとも聞きました！」

「きっと最高の寝心地を提供してくれるに違いありません！」

俺が水を向けると、意図を察しているのかはたまた普通にマナをほめたいだけなのかＡＢＣが的確な援護射撃をしてくれる。

ＡＢＣの言葉に、言われてみればという顔をして悩み始める。

「む、確かに……」

「ならちょっと聞いてみたら？　何、今この場でっていうわけじゃない。この戦いが終わった後にでも、やってもらえばいいさ。話を聞く程度の間を待つくらいの度量は俺にもあるぜ？」

「ふむ……」

俺の後押しを聞いて、小さくうなずいたガオウはバカ正直にマナ

の方に向き直る。
　ラミレスから素早く解放されたマナは、赤い顔をしたまま足りない酸素を補給するようにぜーはーと息をつく。

「と、言うわけなのだがマナ」
「な、なにが！？」
「いや、だから。尻尾を一度枕にさせてもらっていいだろうか？」

　ガオウのその質問を聞き、これ以上赤くならないだろうと思っていたマナの顔がさらに一段と赤くなる。
　熟れたトマトのような顔、という表現はよく聞くけど現実で見るのは初めてだなぁ。
　しばらくパクパクと酸素の足りない金魚のように口を開閉していたマナは。

「て……」
「て？」
「転移術式（テレポート）！？」

　転移魔法で逃げてしまった。
　うーむ、惜しい。こっちじゃ魔法でパッと逃げられるのを忘れてたなぁ。

「マナ！？」
「ありゃりゃ、ちょっとイジり過ぎたかねぇ」

　マナの突然の逃亡に、ガオウが驚愕の声を上げラミレスが失敗したという顔で首を振った。

「と、いうわけで、今回はここまででいいかい？　逃げたあの子を

追っかけなきゃいけないからねぇ」
「別にいいよー」
「悪いね」

俺が片手を上げて戦いの終了に同意すると、同じようにラミレスが片手を上げて何か呪文を唱える。
同時に魔族にだけ光の粒子のようなものがまとわりつき、数瞬の後には姿が消えてしまっていた。
むう。空間そのものじゃなくて、魔族だけを転移したのか。やっぱり四天王は俺たちと比べて一段も二段も上の存在だな。
ともあれ、今回も無事に切り抜けることができたな。

「お疲れリュウジ」
「あ、団長さん。どこ行ってたんすか？」
「一歩引いてみてたんだよ……。あれに混じる気にはなれなかったからな……」

そういって団長さんが示す先には、がっくり肩を落とすケモナーたちの姿が。
まあ、目の前でいきなりモフっていた子たちがいなくなりゃ、がっくりくるよなぁ。
俺はやれやれと首を振りながら、右手を天に突き上げて声を張り上げた。

「ケモノ属性愛好家団体（ケモナー小隊）、初勝利！　勝鬨を上げろー！」
「「「「「もっとモフりたいー！！」」」」」
「我慢しろぃ！」

魔族たちに逃げられて不満たらたらの隊員たちに檄を飛ばしつつ、俺は今回の部隊の成功を噛みしめていた。

No．45：side・ryuzi「ケモナーたちの狂宴」（後書き）

書き終えて気が付く。フォルカが猫耳少女の耳元をコリコリするシーン入れ忘れた！？　どうでもいいですね、はい。

相変わらず隆司が絡むとグダグダに終わります。こいつが絡んでまともに終わった戦闘って、ヴァルト戦だけじゃねぇか……？

次回は一気に時間が飛んで、遠征から帰ってきた真子たちの様子となります。

あ、業務連絡、業務連絡。感想コメにてマナちゃんの尻尾モフモフしたいお、といっていた方々。当のマナちゃんが涙目で、頭上にでっかい炎の塊を構えて待ってますんで、早く行ってあげてください。以上、業務連絡終了ー。

No.46：side・remi「勇者たちの凱旋」

レストから無事魔王軍を撤退させた私たちは、領主であるカウルさんを残して王都への帰途につきました。

途中、レスト防衛のために派遣された騎士の皆さんとすれ違った時、王都の方では隆司君が新しく編成した部隊が魔王軍の襲撃を退けたって聞きました。

私と光太君はびっくりして、それから喜んだんだけど真子ちゃんはすごく複雑そうな顔をしてました。

どうしたんだろう？って思って聞いたんだけど。

「いや……。あのバカが編成した部隊って、いやな予感しかしなくて……」

って言って言葉を濁しました。

本当にどうしたんだろう……？

真子ちゃんとは長いお付き合いになるけど、こんな風にごまかす時は本当は別のことを考えてるときです。

いつもなら「はぁっ！？　あのバカの部隊！？　いやな予感しかしないんだけど……」って言う感じになるのに……。

そして騎士の皆さんとすれ違った後も、真子ちゃんは何かを考えるような顔でため息ばかりついていました。

私が声をかけても、なんだか上の空。

どうしちゃったんだろう……？

そして、私がその答えを知る前に、私たちを乗せた馬車は王都へと到着しました。

「レスト奪還を終え、勇者コウタ及び勇者レミを乗せた馬車が帰った！　門を開けよ！」

御者席からアスカさんが大きな声を上げると、門番の騎士さんの返事が聞こえて、それから王都の中へ通じる大きな門が音を立てて開きはじめました。

馬車がその中へと乗り込んでいくと、門の前で待ち構えていたみたいな王都の市民の人たちが馬車を囲いました。

ど、どうしたんだろう……？

不思議に思って窓から外を見るけど、そこから見える市民の人たちの顔は好奇心に溢れていました。

「何用だ！　こちらの方々は、いましがた遠征からご帰還なされた勇者様たちだぞ！」

アスカさんが声を上げます。

すると、野太い男の人の声が聞こえました。

「そこなんだがよ。今回レストを取り戻してきたって聞いたんだが、本当か？」

「ああ、事実だ」

あ。そういえば、こっちに戻ってくるときジョージ君が連絡用の魔法で王都の魔導師さんに連絡を入れていたっけ。

その真偽を確かめるために、待ってたのかなぁ？

「なんと！？　それは驚きましたな！」

「魔王軍をたった八人で退けるなんて！」

「少数で魔王軍を退けた勇者様の顔が見てみたいです！」

アスカさんの言葉を聞いてなのか、そんな声が聞こえてきました。

え、え？　顔を……？

すると私の隣に座っていたヨハンさんが活き活きとした顔で立ち上がって、馬車の天井を払い除けました。
この馬車、天井はずれちゃうんだ！？

「ならば皆様！　ご照覧ください！　このたび召喚されました、可憐にして高貴なる勇者、レミ様のお姿を！」
「「「イエー！！」」」

ヨハンさんの声に合わせて、さっきの男の人たちの声がまるで周りを煽るように聞こえてきました。
ちょ、ちょっとヨハンさん！？
すると周りもさっきまでじっと黙っていたのに、ガヤガヤとニワカに騒がしくなってきました。

「可憐にして高貴……。ちょっと興味あるなー」
「出がけは馬車の中にこもりっきりだから、全然顔見えなかったもんねー」
「なんでも聞くところによると、勇者コウタと勇者レミは良い仲って噂なんだぜー？」
「えー、それマジかよー。あたい、ちょっとショックー」

あれ、今なんだかとっても聞き覚えのある声が聞こえてきたよ！？
隆司君、外に絶対いるよね！？

「ど、どうしよう……？」
「え、ええっと」
「どうもこうもないでしょうが……」

光太君と顔を見合わせると、窓の外を眺めていた真子ちゃんが、ため息交じりに口を開きました。

「元々この遠征は、あたしらが勝利した結果とあんたたちのお披露目が目的なんだから、さっさと顔だしときなさいよ……」
「え、じゃあ、真子ちゃんも一緒に……」
私が真子ちゃんの袖を引っ張ると、真子ちゃんはめんどくさそうな顔で私の顔を見ました。
「なんであたしまで」
「だって真子ちゃんも勇者じゃ……」
「あたしは裏方勇者だからいいのよ」
「そんなぁ」
「ささ、マコ様」
私が泣きそうな声で真子ちゃんにすがりつこうとすると、ヨハンさんが私の肩に手をかけて立ち上がらせました。
「あ、ヨハンさん!?」
「さ～、コウタ様も～」
「ちょ、アルルさん!?」
さらに光太君も一緒になって立ち上がらせられてます。あうう……。
私と光太君が、少し困った顔で馬車の上に立つと、周りの人たちがピタッと黙りました。
「あれが……」
「勇者、さま……」
ううう、緊張するよぅ……。

ガチガチになってしまった私の代わりに、光太君がコホンと一息つきました。

「みなさん、初めまして！　こうしてご挨拶するのは、初めてになります！　アメリア王国に召喚された勇者、光太といいます！」

「れ、礼美です！」

光太君のあいさつに合わせて、何とか頭を下げるので精いっぱいです。

「勇者様ー。レストが無事に解放されたって本当ですかー？」

群衆の中から、髪の毛が短い勝気そうな女の子がまた同じことを聞きます。

「はい！　同領地を収められているカウル氏も、すでに現地の再興を開始しております！　早ければ、一週間後にも新たな荷を王都に向けて送ってこられるとのことです」

光太君の言葉に、周りの人たちが一瞬呼吸を止めたように黙ってから。

「「「「「おおぉぉぉーーーー！！？？」」」」」

驚いたように、大きな声を上げました。

え、え、なんだろう？

「レストからまた荷が来るようになるのか！」

「よかったよー！　あっちの方面の果物がそろそろ尽きちゃいそうだったんだよ！」

「ありがとう勇者様ー！」

周りの人から歓声が上がりました。

お、思ってた以上……。こっちから出てくるときはそんなに気にしてない風だったのに……。

「その調子で、他の場所も頼むよー！」

「よろしくなぁ、勇者様ー！」

「はい！　心の限り、この国のために尽くしたいと思います！」

強面のおじさんとさっきの女の子が並んで光太君に声をかけ、光太君がそれに応えました。

そっか……。やっぱりこの国の人たちは、魔王軍に領地がとられちゃって不安だったんだ……。

「さすが勇者様ー！」

「よく見るとレミ様超かわいくね！？」

「バッカお前、コウタ様のイケメンぶりも天井知らずだろうが！」

さらにそんな風に私たちを囃し立てる声まで聞こえてきました。

うう……恥ずかしいよぅ……。

「というか、貴様ら。そこでいったい何をしてるんだ？」

「Ｏｈ！　何のことアルネ？」

「私たち、あなたのこと知らないヨー？」

「アルベルトにベルモンドにチャーリーでありますよね。なんで群衆に混じってるでありますか？」

「く、まずい、身分がばれた！　散れ！　撤退！」

するとアスカさんとサンシターさんがその三人の人たちに声をか

けました。
知り合いの人たちみたいだったけど、さらに追及するより先に三人ともどこかに姿を消しちゃいました。
誰だったんだろう……？

「でも確かにレミ様、お可愛らしい……」
「お人形さんみたいだよな……」
「コウタ様も、なんか凛々しいっていうか愛らしいっていうか……」
「ズバリ勇者様、って感じよねー」

でもまわりの人たちの興味が、だんだん私たちそのものに移り始めました。

「そうでしょう、そうでしょう！　レミ様の美しさは天地を止まるところを知りません！」
「コウタ様も～、今回、すっごくかっこよかったんですよ～♪」

さらにそれらを肯定するようにヨハンさんとアルルさんが声を上げます。
ちょっとちょっと、二人とも～！？

「キャーユウシャサマー！！」
「ちょっと隆司、なんでそんなとこで黄色い声上げてるの！？」
「チッ」

と、光太君が隆司君を見つけたみたいです。
私も急いでそちらに顔を向けますが、もうその姿は見えなくなっていました。

「もう、隆司ってば……」

「隆司君、なにしてたの？」
「わかんないよ……。舌打ちして、すぐ姿くらましちゃったし……」
はあ、っとため息を吐く光太君。
でもその顔はなんだか嬉しそう。
そういえば、二週間ぶりくらいだもんね。会えたら、嬉しいよね。

「それでは、そろそろ戻りたいでありますので、道を開けて欲しいであります！」
「おお、悪かったな」

サンシターさんが手綱を持ってそういうと、強面のおじさんが率先して群衆に道を開けるように指示します。
サンシターさんがお礼を言って、馬車を進めましたけど、人の列はぐんぐん繋がってなかなか途切れませんでした。
結局、私と光太君は御城に入るまで、馬車の上で群衆の皆さんに向かって手を振り続けることになったのです。

「お疲れー！　パレード、大成功だったみたいじゃねぇか！」
「隆司……」

お城に戻ると、にこやかな笑顔で隆司君が出迎えてくれましたけど、光太君はぐったり疲れたような顔で隆司君を睨みます。
かくいう私も、そっくりな表情になってると思います。うう、立ちっぱなしで腕も振りっぱなし。すごく疲れたよぅ……。

「あの群衆の中にいたよね？　なんで声かけてくれなかったのさ！？」
「なんのことかおれわかんなーい」
光太君の言葉に、隆司君は両手で耳を塞いでわざとらしく首を横に振りました。
うーん、でもなんでわざわざ群衆の中にいたんだろう？　私もそれは気になるなぁ。
「あたしが頼んどいたのよ」
「真子ちゃん？」
と、メイド長さんから飲み物を受け取っていた真子ちゃんがそういいました。
「いくらあたしたちが貴族領を解放したからって、いきなり市民の注目の的になるとは思えなかったから、サクラを仕込んどくように隆司に言っておいたのよ」
「ナハハ。煽る側が煽られる側とつながってるってばれるのはまずいだろ？　だから無視したのさ」
「な、なるほど……」
隆司君の言葉に、光太君も納得したように頷きました。
言われてみればそうだね。サクラの役をしてる隆司君たちが煽ってるなんてばれちゃったら、気まずいものね。
「にしても、思ってたより人数多かったけど、どうしてよ？」
「ああ、贔屓にしてる喫茶店の店主に頼んでみたら、人を集めてくれてよ。なんでもレスト方面から、結構うまい果物が運ばれてくるとかで備蓄尽きかけてる店が結構あったんだとよ」

「へぇ……」

そうなんだ。だから、レストから荷物が運ばれてくるって知って、あんなに活気づいてたんだ……。

あ、それなら……。

「真子ちゃん、真子ちゃん」

「なに？」

「他の貴族領を解放すれば、みんなもっと喜んでくれるかな？」

「……さあ？　これから解放していく貴族領が、必ずしも貿易の町とは限らないし……」

私の疑問に、真子ちゃんが難しそうに首を振りました。

「そのあたりは、アンナかアルトに……」

「皆様！　お疲れ様でした！」

真子ちゃんの言葉と同時に、アンナ王女がこちらに駆けよってきました。

私たちの帰りを聞いて、飛んできたのかハアハアと息をついています。

「レスト解放、ありがとうございます！　これで魔王軍反撃に一歩近づきましたね！」

「そうとは限らないわよ？　守らなきゃいけない個所が一か所増えたんだし、そもそもレストをまた奪還されないとは限らないもの」

レスト解放を喜ぶアンナ王女に水を差すように、真子ちゃんが現実的な意見を口にします。

こちらに戻ってくるときも、真子ちゃんはそれを少し気にしてい

ました。
確かにまた取られたら取り返さないといけないから、いたちごっこになっちゃうんだよね……。
でもアンナ王女は首を横に振りました。
「確かにそれは危惧すべき事態ですが、今はレストを取り戻したという事実が大事なのですわ！　魔王軍も、皆様がそれだけの実力を持っておられると知って、警戒を強めるはずです！」
「警戒、ねぇ……」
アンナ王女の言葉に、真子ちゃんの顔が少し暗くなります。
でもアンナ王女はそのことに気が付かずに、声を張り上げます。
「さあ！　今日は凱旋記念にパーティを開きますの！　楽しんでくださいね！」
「あ、記念といえば、アルト王子はどうされたんです？」
光太君の言葉に、私は周りを見回しますがアルト王子の姿がありません。
光太君の言葉に、アンナ王女は気まずそうに眉尻を下げました。
どうしたんだろう……。
「あ、お兄様は……、その、貴族たちの応対をしていますの……」
「貴族たちの……」
「応対？」
私たちがおうむ返しに答えると、メイド長さんから飲み物をもらった隆司君が頷きました。
「ああ。お前らがレストを取り戻したって知らせを受けてから、次

はうちの領地をって貴族が毎日アルトのところに押し寄せてるらしいぜ？」

「おかげで、お兄様がお休みになられる時間がほとんどなくて、政務もトランド大臣にまかせっきりになってしまって……」

「アルト王子は、実直であらせられますからな……。あの方に頼めば、次は自分のところが解放されると思い込んでいるものが多いのでしょう」

「嘆かわしい！　頼るのではなく、頼られるのが貴族でしょうに！」

アンナ王女の後ろから姿を現したトランド大臣の言葉に、アンナ王女が憤慨します。

アルト王子、大変なんだ……。

「……なら、すぐにでも次の領地開放に動かないといけませんね」

「うん、そうだね」

光太君の言葉に、私も頷きます。

トランド大臣は驚いたように目を見開きました。

「そこまでしていただかずとも……。此度の遠征でお疲れでしょう？　しばし期間を開けてから……」

「いいえ！　この国で困っているのは臣民や貴族ばかりではありません！　王族の方々もまた同じでしょう！」

「なら、それを助けるのが勇者の役目です！」

「コウタ様、レミ様……！」

私たちの言葉に、アンナ王女が感極まったように涙ぐみます。

アンナ王女だって、ホントならアルト王子に甘えたい年頃のはずです。

今日の凱旋で、貴族領の解放がこの国のみんなのためになるとわ

かったんです。
なら、休んでいる暇はありません……！
「頑張ろうね、真子ちゃん、隆司君！」
「おー」
「せめて、次の魔王軍の襲撃を凌いでからね……」
私の掛け声に、隆司君も真子ちゃんも話半分という感じで答えました。
むう。
「もー！　二人とも、ちゃんと聞いてよ！」
「「おー」」
「声が小さい！」
「「おー！」」
もう！　二人とも、頑張ってよね！
「レミ様、なんていうか、元気いっぱいですね？」
「うん。礼美ちゃん、今日のパレードでいろいろ元気貰ったのかも」
「我々としては、ありがたいのですが、あまり無理はなさらぬようにお願いしますよ？」
「はい。礼美ちゃんは、僕たちが守りますから」

Ｎｏ．４６：ｓｉｄｅ・ｒｅｍｉ「勇者たちの凱旋」（後書き）

そんなわけで凱旋編。サクラの皆さんは隆司編にて顔見知った人々です。

次も遠征に行く予定のようですが、日数的にはあと二日か三日ほどで魔族襲撃の予定ですねぇ。どうなるやら。

次回はそんな魔族側の事情をちらりとのぞいてみませう。

「おかえり、姫様」
「うむ、今戻ったぞラミレス」

レストと呼ばれる領土からの遠征から戻った私を出迎えてくれたのは、エールか何かを仰いでいたラミレスと、なぜか頭から毛布をかぶって尻と尻尾だけ出しているマナの姿だった。

「ッー！　ッー！」
「ねー、ラミレス様？　マナっちどうしたにゃ？」
「ああ、これかい？」

私の後ろから顔を出したミミルの質問に、ラミレスは苦笑する。

「もうそこそこ日数が経つってのに、まだガオウの顔が見れないんだとさ」
「ガオちんの？」

ラミレスの回答の意味が解らず、首を傾げるミミル。
かくいう私も意味が解らなかった。
ガオウとは先ほど顔を合わせたが、特に変わった様子はなかったのだが。

「踏込が軽い！　重心を押し込むように、全身でぶつかってこい！」
「はい！！」

今、聞こえてきた元気のいい掛け声からもいつも通りであることがうかがえる。

ラミレスはエールを一杯仰ぐと、触手の一本でツンツンとマナが被った毛布を突っついた。

「まあ、なんてことないんだけどねぇ。単に、マナがガオウのことを好いてるってことを知ったタツノミヤにいろいろ弄られただけさね」

「……あー」

ラミレスの言葉に何かを悟ったらしいミミルが深く何度か頷いた。

だが私はますます訳が分からなくなった。

弄るって……なにを？

「そもそも、マナがガオウのことを好いているなど、別段秘密でもなんでもないだろう？」

常日頃から、ガオウの気を引こうといろいろ努力するマナの姿は見ていて微笑ましいほどだ。

ただ、ガオウはそういう感情に疎いのか、だいたいはマナの空回りで終わっているわけだが。

だが私がそういうと、マナのしっぽが一瞬ビクン！と跳ねてからしおしおとしおれた。

「ソフィア様？　そういうことは、わかってても言わないのがやさしさにゃ？」

「む？　そうなのか？」

ミミルが同情するような顔でマナの尻尾を見てから、私の肩を叩いた。

まあ、ミミルがそういうのであれば、今後は気安く口にするのはやめよう。

「だが、あの男、私ばかりでなく、マナにまでその毒牙にかけようとしたのか？」

私は自分で言いながら、怖気を振り払うように頭を振った。

あやつ、人に向かって浮気はしないとかいいながら……。

だが、私の様子を見てカラカラとラミレスは笑い声をあげた。

「いやいや、そんなこたぁないよ。むしろ毒牙にかけようとしたのはガオウの方さね」

「なに？　どういうことだ？」

ガオウが？　だが、ガオウにそんな甲斐性があるなら、とっくに進展してそうなものだが。

「タツノミヤの奴、ガオウを口車に乗せて、マナの尻尾を枕にさせようとしたのさね」

「尻尾を枕にぃ？」

ラミレスの言葉に、私は思わず素っ頓狂な声を上げた。

いやなんなのだそれは。確かにたまにミミルがマナの尻尾を枕にしたがっていたが……。

と、枕の言葉に反応したミミルがマナの尻尾をムギュッと抱きしめた。

「ひどいにゃ、マナっち！　私より先にガオちんに尻尾枕を堪能させようなどとはー！」

「ひゃぁぁぁぁぁ！？」

敏感な尻尾を突然全身で抱きしめられて、あられもない悲鳴を上

げるマナ。

「どうしたマナァァァァァ！！？？」

「きゃぁぁぁぁぁ！？」

その声を聞いたのか、ガオウが訓練もそっちのけでテントの中に突っ込んできた。

その姿を見て、マナの顔がまた一段と赤くなる。

「って、ミミル！　いつも言っているだろう！　マナはお前と違って繊細なのだから……」

「だ、だいじょうぶ！　だいじょうぶだよ！？」

ガオウがミミルの体を引っぺがそうとすると、マナは尻尾に抱き付いたミミルごとがたがたと後ろに後退する。

そんなマナの姿を見て、ガオウがペタンと耳を伏せてしまう。

「だが、マナ……」

「ひ、久しぶりだから、ミミルちゃんも興奮してるんだよ！？　だから、ね！？」

「そうか……」

マナにそう言われ、ガオウはおとなしく引き下がった。

ただし尻尾はしょんぼりと垂れ下がっており、背筋こそ伸びているもの全身からさびしそうなオーラが漂っていた。

まさかとは思うが……。

「マナの奴、ここ数日ガオウのことを避けているのか？」

「恥ずかしくって、顔を合わせられないらしくてねぇ」

ラミレスがやれやれと肩をすくめるが、私としては看過できない事態だ。
私に理解できない羞恥ではあるが、だからといって避けるような行動を取ってもらっては困る。
それが原因で軍団の士気が下がることは避けねば。
私はマナからミミルを引きはがすついでに、一言声をかけようと、ガオウを追い出してしまい自己嫌悪に陥っているミミルに近づく。
そんな私の背中に、ラミレスが声をかけた。

「そういう姫様はどうなんだい？」
「む、何がだ？」

私が振り返ると、なんてことはないというようにラミレスはコップにエールを注ぎなおしながら私の顔を見た。

「今回、タツノミヤとは会えなかったわけじゃないかい。今回の遠征は満足できたのかと思ってさ」
「なんだ、そんなことか」

ラミレスの言葉に、私はため息をついて腕を組んだ。

「ラミレス、私は何者だ？　言ってみろ」
「魔王軍、指揮官、魔竜姫ソフィアその人だね」
「そうだ。私は魔王軍の指揮官、そして魔竜姫の名を持つものだ。その私が、勇者の一人と戦えなかった程度で不平を漏らす、そんな狭量な戦士だと貴様は思うのか？」

はっきりと言ってやると、ラミレスは何も言わずに肩をすくめた。
まったく……。私は魔竜姫だぞ。
確かに全力を振るうにはいささか足らない戦ではあったが、奴ら

の力は決して侮れぬものであると再確認できた。それで十分すぎるほどだ。

だが、マナの尻尾を存分に堪能したらしいミミルが立ち上がって私の方をいやらしい笑みで見つめた。

「強がっちゃってぇー。リュー君がいないのに「嫁というなと言っているだろう！？」なんてドヤ顔で言っちゃうほど意識してるくせにぃ」

「黙れぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

私の尾撃をさらっと回避して、手の届かない位置でニャホホホなどとわけのわからない笑い声を上げるミミル。

くぅ、相変わらずテントの中では分が悪い……！

「そもそもー、あの戦いが終わった後、リュー君と戦えなかったせいか、元気なく尻尾を引きずっちゃうくらい気落ちしてたくせにぃ」

「うそつけぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

何が元気なく尻尾を引きずっただ！　そんな記憶は……！

「いや、これ嘘じゃにゃいし。なんならだれか呼んで聞いてみる？」

だがミミルはまじめな顔になるとそんな提案をしてきた。

思わずグッと言葉を詰まらせる。

いや、そんな記憶は存在しないのだが、だがしかし万が一ということも……？

「い、いや……やめておく」

思わず拒否すると、ミミルはにやりと笑った。

く、完全に奴のペースだ……！

「まあ、その辺はおいおい追求するとして、そっちはどうだったんだい？」

そんな私たちのやり取りをエールを舐めつつ眺めていたラミレスが、ぱんぱんと掌を叩いて軌道修正を試みた。

う、うむ。そんな追求より報告の方が先だな、うん。

「コホン。……結果から言えば、我々はレスト方面からは撤退することとなった」

「ふぅん？　そんなにあっさり負けたのかい？」

「まあな。大半は勇者コウタの一撃によるものだ。奴は意志力（マナ）をコントロールするすべに長けているようだな。これは、前々回の会戦ですでに分かっていたことだが、本来の形は奴が持つ魔力剣に光の刃を組み合わせるもののようだ」

私は腕を組みながら、その時の情景を思い出す。

天を突くような巨大な風の渦の中に乱舞する光の刃。それらを私へと飛ばすだけではなく、周囲に群がっていた兵士たちへ飛ばすのも忘れていなかった。

意志力（マナ）を中心に形成された魔力の刃は、物質を傷つけることなく、精神だけを疲弊させる。鎧を透過して、心を斬り裂く刃といったところか。

「ラミレス。意志力（マナ）によって生み出された刃を防ぐ方法はあるか？」

ラミレスは私の質問に、少し考えるようなそぶりを見せた。

「……一番簡単なのは、同じ意志力（マナ）で形成された盾で防ぐ方法だね。

それ以外だと、絶対の効果とは言い難いよ」
「むう」

ラミレスの言葉に、私は唸り声を上げざるを得なかった。
意志力（マナ）の力は、女神によって人間たちに授けられた技術と聞く。
そちらの方面において、我々魔王軍は後塵を拝しているといっても良い。
そうなると、コウタの刃は回避する以外に手段はないということか……。

「それで、そっちはどうだったんですニャ？」
「ああ、こっちかい？」

悩む私をよそに、ミミルがラミレスへと問いかける。
時期的には、ほぼ同時にこちらと向こうで戦闘を行ってみたわけだが……。おそらくあやつや騎士団長が矢面に立ったのではないか？
という私の予想は、大きく外れることになった。

「タツノミヤとやらが、新しい部隊を立ち上げてね。それに追い返されちまったよ」
「新しい部隊だと！？」

どういうことだ！？　は！？　もしや奴は人を束ねて育て上げる才能が……！？

「確かケモナー小隊とか言ってたね。尻尾やら耳やら手やら足やらモフられて、ほとんどの連中が腰砕けさ」
「……」

思わずどろんとした眼差しでラミレスを睨んでしまう。

なんなのだそれは……。しかもモフられて腰砕けって……。
モフる、という言葉にミミルが体を震わせる。

「にゃんて楽しそうな部隊……！　やっぱりあの男、見所があるにゃ！」
「どこだそれは」

思わず平手でミミルの肩をペシッと叩いてしまう。
どうもこやつあの男のことを高く買っているようだが、どこがいいんだあんな奴。

「さっきの尻尾枕はその流れで出てきた話でね。そもそも撤退する要因になったのはマナが逃げ出したからなんだよ」
「それはいわないでください～……」

また毛布をかぶったマナが、くぐもった声で抗議する。若干涙ぐんでいるように聞こえるのは、きっと気のせいではあるまい。

「あの男、本当にまじめにやる気はないのだな……」
「まあまあ」

ぐったり肩を落とすと、ミミルが慰めるように私の肩を叩いた。

「確かに部隊の実態はなんていうか愉快すぎるにゃ。でも、そんな部隊を一週間かそこらで立ち上げてみせる手腕自体は褒めるべきじゃにゃーかね？」
「む……」

ミミルの言葉に、思わずうなずきかける。
いや、確かにミミルのいうとおり……。常識で考えるならば一週

間程度で立ち上げたような部隊が、我々魔王軍の精鋭部隊を追い返すなどと考えられない状況だ。
だが。
「その、ケモナー小隊とやら……我々のその、特定部位を愛でる部隊なのだろう……？」
ラミレスに問うと、彼女は首肯した。
「そうだねぇ。今回出ていかれなかったラミア種や、ハーピー種なんかもその内寄越してくれとも言ってきたね」
「敵の種類を要求する部隊など聞いたことがないのだが……」
「常識にとらわれてばかりじゃいけにゃーよ！？」
奴の活躍は疑わしい、と考えた私に喝を入れるようにミミルが叫び声を上げた。
といってもお前……。
「お前は迫られたことないだろうからわからんのだろうが……。真っ正直に嫁などと呼ばれて平然としていられるのか……？」
私の言葉に、ミミルは少し考えてから。
「好みのタイプにゃらむしろウェルカム！　好みじゃにゃくても、素直にうれしーにゃーよ？」
「たまにお前が羨ましいよ……」
堂々と言ってのけるミミルに、私はため息を吐いた。
私はとてもじゃないがそんな風に割り切れんよ……。
と、ヴァルトとガオウが一緒になってテントに入ってきた。

「あたしは、ヴァルトにそう呼ばれる日が来るのを待ちわびてるんだけどねぇ」
「何の話だ」
それを待っていたといわんばかりに、ラミレスが流し目でヴァルトを誘うように見つめる。
その視線を受けて、ヴァルトは居心地が悪そうに顔をそらした。
「お疲れ様です、ソフィア様」
「うむ。ヴァルトも、ごくろう」
「それで、今後はいかがいたしましょう」
お互いに労い合ってから、ヴァルトが今後の予定を問う。
うーむ……。ここに戻って来る途中にも多少は考えたのだが……。
遠征から戻り、疲れているであろう勇者たちと戦うのも業腹だな。
「しばし間を開けて、勇者たちがどう動くかを見てから行動しよう」
「では、リアラからの連絡を待つと致しましょう」
「うむ」
私の言葉にうなずくヴァルト。
今度はラミレスの方に向いて、指示を出す。
「ラミレス。可能であれば、兵卒たちに意志力剣（マナブレード）対策を施してもらえるか？　現状、勇者コウタの一撃を喰らって耐えられるものがおらん」
「わかったよ」
ラミレスは頷いて、テントに備えてあった魔導書を手に取った。

最後に私は、テントに集結した親衛隊のみんなの方を振り向いた。
「次の会戦まで間が開く。その間、鍛錬を欠かさぬようにしよう」
「ハッ！」
「了解にゃー」
「……マナは、次までにはガオウとちゃんと顔を合わせられるようにしておくこと」
「が、頑張ります……」

指示を出し終え、さあ解散というところになって私は一つのことを思いだした。

「ああ、そうだ。ラミレスよ」
「ん？　なんだい？」
「リアラとの連絡役に伝えておいてくれ。今度は正確に向こうの動向を知らせてくれるようにと」

今回は「勇者が領地奪還に動く」と聞いたから出向いたが……結果としていらぬ恥をかくことになったのだ。
だが、きちんとした情報さえあれば、余計な恥をかく必要もあるまい。

「そんなに一人芝居が恥ずかしかったのかい？」
「やかましいわい」

ケラケラと笑い声を上げるラミレスを、やや赤い顔で睨みつけてやる。
相変わらず、人を喰ったような女だ……。
ラミレスはひとしきり笑うと、しっかりと頷いた。

「心配しなくとも、しっかり伝えておくよ。今度はちゃんとした情報をよこせってね」
「頼んだぞ？」
「はいはい」

私はラミレスに念押しし、テントを出ていく。
だが振り返る一瞬前、ラミレスは険しい表情で水晶球に向き合っていた。

No.47：side・Sophia「その頃の魔竜姫　Part2」（後書き）

さて、魔王軍軍営の様子でしたー。無駄に露骨な伏線張るの好きだよな俺。

まあ、こちらさんは裏方に相当するんで、ある意味やむないっちゃやむない。

次回は一回猶予ができたんで、多少なりラブコメいてまいりたいところです。おもに光太と礼美のイベントを……やれたらいいなぁ……。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ：キャラクターファイルその二（前書き）

せっかくの魔王軍フェイズ第二回目になるので、魔竜姫様とゆかいな仲間たちに関してちょろっと簡易にまとめてみます。現状開示されている情報を軽くまとめる感じで。

ネタバレ注意ですぞー。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ：キャラクターファイルその二

Ｎａｍｅ：魔竜姫ソフィア
Ａｇｅ：自称１６
Ｐｏｓｔ：魔竜姫兼魔王軍指揮官
Ｅｑｕｉｐ：細剣（レイピア）
Ｓｋｉｌｌ：４５０カロンの重量を支える高速移動
Ｏｔｈｅｒｓ：巨乳であることを気にしている。種族的にはブラックドラゴンに分類されると思われる。
作者一言メモ：隆司の嫁担当。今後も隆司の自重しない　セクハラ発言にツッコみを入れていくことになるでしょう。そろそろ拳も飛び出すはず。
竜ということで基本的に傲慢。ただし戦うものに対する敬意を忘れません。ややバトルマニアな傾向あり。
本人曰くロマンチックな出会いがよいとのことですが、具体的なイメージはないと思われます。まさか竜の姫が白馬の王子を望むとも思えませんし。
ショートヘアに黒い鱗のボインちゃん。基本的にはさらしで巨乳を隠していますが。キツめの眼差しを持ってますが、真子と違って勇ましいイメージですね。

Ｎａｍｅ：ミミル
Ａｇｅ：１６
Ｐｏｓｔ：ソフィア親衛隊兼隠密（ハイシーフ）
Ｅｑｕｉｐ：不明
Ｓｋｉｌｌ：隠密行動
Ｏｔｈｅｒｓ：隆司のことをいたく気に入っている。　種族的には

ワーキャットと思われる。
作者一言メモ：ソフィア親衛隊の確信ボケ。わかっていてボケるタイプ。そして面白そうな空気には、遠慮なく乗っかるタイプ。
猫だけあって気分屋。その場のノリで行動する一方、戦闘においては後ろから相手を指すような行動を取る冷静な部分も。おそらく親衛隊のブレインでもあると思われます。
作者的には何と言いますか、一生独身なイメージが。いやなんでかなぁ。いつまでも飄々と周囲をからかってるうちに、婚期が遠のいてるのかもしれません。
いつもニコニコ笑顔の女の子。糸目キャラかもしれねぇ。毛並みは……たぶん三毛？　メス三毛とかスゲェレア。

Ｎａｍｅ：ガオウ
Ａｇｅ：１６
Ｐｏｓｔ：ソフィア親衛隊兼双剣士（ブレイド）
Ｅｑｕｉｐ：三爪剣『ガオウ』×２
Ｓｋｉｌｌ：特になし
Ｏｔｈｅｒｓ：他人の気持ちに鈍感なところあり。種族的にはワードッグと思われる。
作者一言メモ：魔王軍の特攻隊長兼弄られ担当その一。ノリと勢いで行動するミミルに対し、勢いのみで突撃する脳筋。
強者との戦いを至上とし、ヴァルトを師として仰ぐ一方、隆司のノリを受け止めきれない堅い一面も。ただそういう部分が、ソフィアを含める面々を引っ張っていける……かも？
忠誠心的な意味でソフィアｌｏｖｅな野郎だったりしますが、周りから自分へのそういう感情にひどく鈍感。おかげで弄られ路線確定。ありがとう。
種族としては狼ではなく犬。イメージとしては凛々しいんだけど、

なんか小さい、というか小柄な感じ？　種類的には……柴犬？

Ｎａｍｅ：マナ
Ａｇｅ：１６
Ｐｏｓｔ：ソフィア親衛隊兼呪術師（エンチャンター）
Ｅｑｕｉｐ：特になし
Ｓｋｉｌｌ：魔導符術（エンチャントマジック）
Ｏｔｈｅｒｓ：ガオウのことが好き。種族的にはワーフォックスと思われる。

作者一言メモ：魔王軍の和み担当兼弄られ担当その二。一歩引いたところに立つブレーキ役です。アクセル担当が過激すぎて止められませんが。

今回の会戦において、隆司たちを挑発するような言動が多少目立ちましたが、仲間に対する侮辱や敵意に敏感な子で、隆司のふざけた態度とかにも結構腹を立てていたのだと思われます。根がすごくまじめなのです。

そのせいで、隆司にガオウへの想いを弄られる羽目になるわけですが。振り向いてもらおうときっと毎日が戦争なのです。彼はご主人様ｌｏｖｅなわけですが。

狐っ娘なので、基本金髪。耳の毛先はきっと真っ白です。そして和装です。尻尾はお日様の匂いがすると思われます。全魔王軍憧れの毛並みと思われます。モッフモッフ。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ：キャラクターファイルその二（後書き）

いらんことも多々語ってる気がしますが、重大なネタバレは特に書かれていません。ちなみにワードッグとワーフォックスは、今作にのみ登場すると思われる魔物です。普通ならワーウルフとか妖狐って表現すると思われます。

こちらもほぼ書いてある通りですが、一部キャラクターが終盤に……。これ以上は言えないっ。

No．48：side・ryuzi「勇者たちの憂鬱」

「来なかった……」

がっくりきてますごきげんよう。辰之宮隆司でございます。
もはやだれに言ってるのかもわかりませんが、聞いてください。
机に突っ伏しながらではありますが。
仲間たちが帰還してしばらく。
時期的に言えば、やってくるはずの嫁率いる魔王軍が来ませんでした。
理由は定かではありません。少なくとも、俺が編成したケモナー小隊に恐れをなしたって理由ではありえないはず。たぶん。
ですがそんなこたぁどうでもいいのです。余禄です。
問題は、これで嫁に会えない期間二週間目突入記念☆ということなのです……。
死ぬ。きっと明日には嫁成分が欠乏して死ぬ。

「いや死なねぇだろ。あんたが嫁残して死ぬところとか想像もできねぇ」
「おー、ふぉるかかー……」

どうやら、脳内の考えが口から垂れ流しになっていたのか、いつの間にか俺の脇に立っていた魔導師の男……フォルカが俺を胡乱げな眼差しで見下ろしていた。
確かフォルカには、ケモナー小隊の魔導師や神官連中の体力づくりを命じてたはずなんだけどなー……。

「いや、もう終わりましたから」
「あれ、そうなん、なーじゃ……」

その隣に立っているのは、狐っ子モフり隊のリーダー格のナージャ。フォルカと体力づくりをやってもらっていた神官の少女だ。

「とりあえず、メニューに関しての修正案を書いておきましたので、確認をお願いします隊長」

「あい」

ナージャが差し出す書類を手に取り、軽く目を通す。

そこに書かれていたのは、思わずお遊戯か何かかとツッコミを入れたくなるぬるいメニューであった。

メニューがマラソン1ケルメルテ(km)のみて。何ぼなんでもしょっぱすぎるだろう……。

「そういうけどなぁ、隊長。元々魔導師も神官も学者ってんで、ほとんど動かねぇ奴らばっかなんだ。今日の訓練だって、終わったんじゃなくて誰も立てなくなったってのが正しいんだよ」

「マジで？　どの時点でダウンだったんだよ？」

「ですから、その1ｋｍマラソンの時点でです。最後のあたりなんて、ほとんどの人が歩くどころか這いずり回るので精いっぱいでした」

「どんだけモヤシっ子が多いんだ、この国……」

思わずダレるのも忘れてぼやく。

まさかここまでひどいとは思わんかった。この間の会戦、貫徹で脳内麻薬(アドレナリン)ブーストしておいてよかった……。

「体力って、魔法で回復できたっけか？」

「魔法薬は飲ませておいたけど、あくまで自己回復を早める効果だかんなぁ」

「本人たちのやる気の問題もありますしね。今週、なんだかんだで結局……」

そこまでつぶやいて、ナージャががっくりうなだれる。

「あの、モッフモッフな尻尾……モフれませんでしたし……！」

「そこじゃねぇだろ重要なのはよ……」

「なによ！　あなただって、猫耳……とか切なそうにつぶやいてるくせに！」

「なんだとコノヤロ！？　テメェ、どこで聞いてやがった！？」

「廊下でこっそり一人で歩いてる時よ！　この猫耳スキーが！」

「うるせぇショタっ狐スキーが！　細切れにするぞ！」

「やかましいんじゃオドレラァ！！　こちとら嫁絶たれてもう二週間目になるんだぞ！　お前らのやる気が擦り切れてるんだったら、もう俺を指し示す言葉ねぇんだっつぅの！！！」

不毛な言い争いを始めるナージャとフォルカの間に立って、怒鳴り声を上げる俺。

チクショウ、あのスベスベの鱗にもう二週間も会えてないかと思うと……！

するとナージャもフォルカもハッと目を見開いて、言い争いをやめた。

「そ、そうよね。隊長なんて、もう二週間も……」

「すまねぇ、ナージャ。俺もちいせぇ男だよな……」

「いえ、私こそごめんなさい。短慮に過ぎたわ……」

お互いに手を握り合って、謝り合う二人。

うむ。同好の士で争うなど、愚か以前の問題だしな。

とりあえずの仲直りが終わったのを見計らって、俺は訓練メニュ

ーを再び見る。

「やる気に関しちゃ「お前ら、嫁ｏｒ婿と砂浜で追いかけっことかロマンが駄々漏れだろう」って感じで、いつも通りＡＢＣに煽ってもらうことにするか」

「そうですね。それが一番確実ですよね」

「モフり隊の連中なら、エサに食いつく勢いだよな」

三人で頷き合いながら、今後の予定に関して煮詰めていく。

と、そこへアンナが顔を見せた。

「リュウジ様。ちょっとよろしいでしょうか」

「おう、アンナか。どうした？」

書類の余白にある程度に詰めた予定を書き込みつつ、俺はアンナの方へと体を向ける。

アンナは敬礼を始めたナージャとフォルカに笑顔であいさつしつつ、俺の方を困ったような顔で見つめた。

「いえ、次の貴族領の奪還についてなのですが……」

「あー、今週のうちに出発するんだよな。なんか問題でも？」

俺が首を傾げて問いかけると、途端にアンナの顔が真っ赤に染まる。

よくわからんけど、眉がつりあがってるのを見ると、相当怒ってんな。

「問題も問題ですわ！　貴族たちが、次々とお兄様のところへやってくるせいで、行き先が一向に決まりませんのよ……」

と、今度はしょんぼりと肩を落とした。
やっぱりこの頃の子供って、情緒不安定だよなー。

「いや、茶化せる雰囲気じゃねぇだろ、これ」
「王子への嘆願、ひどいとは聞いていましたが……」

俺の思考を呼んでいるかのごときフォルカのツッコミと、貴族たちへの嫌悪感をあらわにするナージャ。
敬愛する王子に詰め寄って、政務を滞らせてるってのもマイナスポイントかね。

「まあ、自分ちをさっさと取り返してくれってのはわかるがねぇ」

俺は俺で、顔をしかめる。
俺たちがアッサリ領地を取り戻したから、期待が増し増しになってんのはわかるんだが、結果として渋滞起こして次につながらねぇんじゃ世話ねぇだろうがよ。
やれやれと頭を掻いて、俺は立ち上がった。
しかたねぇ。ここは勇者の一人として、ビシッとメてやりますかね。言葉で。

「とりあえず、アルトんとこに案内してもらっていいか？」
「！　はい、こちらですわ！」

俺が立ち上がるのを見て、パッと顔を明るくするアンナ。
とにかく誰かにどうにかしてもらいたかったのだろう。健気やなぁ……。
俺と、なぜか俺にくっついてきたフォルカとナージャはアルトの執務室へと向かった。

アルトの執務室は、元々は王様が使っていたというだけあってなかなかの広さを誇る。
壁際には様々な本が収められ、アルトの教養の高さがうかがえる。
何しろほとんどの本に手垢がついて、読み込まれた様子が伺えるんだ。こいつぁ、スゲェ。
部屋の片隅には、小さな棚の上に小洒落た花瓶が置いてあり、生き生きとした花が飾られている。きっとメイド長が毎日水をやっているに違いない。
別の隅には植木鉢なんかも備えられていて、見るものを和ませる。観葉植物の文化って、この世界にもあるんだなぁ。
……なんでここまでアルトの部屋を観察する余裕……というか暇があるのかといえば、それは部屋の中の惨状が原因に他ならない。

「アルト王子！　次はぜひ我がフォルクス領を！」
「いいえ、次は我がサンスク領の奪還を！」
「皆の者、落ち着いて……」

アルトの執務机越しに、ひたすら自分の領地を取り戻してくれと嘆願する貴族たち。何やら飴に群がるアリを思わせる光景だ。
……もちろん、この程度の光景なら想定済みだし、押し分けてアルトのところまで行くのに戸惑うわけがない。
原因は……。

「コウタ様！　もちろん次は我がネーガイ領を奪還してくださいますよね！？」
「いいや、コウタ様には我がルモア領の奪還を！」
「あ、あの」
「レミ様、我がアガンダ領には良質の果物が」

「物で釣るなど恥を知るが良い！　閨にレミ様、我がサンゲン領には美容に最適な」
「え、ちょっと、ま」

なんでかわからんけど、アルトと一緒に貴族たちにたかられている光太と礼美の存在である。
いやマジでなんでいるの君ら？　アルト一人ならまだ一方の集まり具合が三方に別れてるせいで、なんかカオスな状況よ？

「実は今日のうちに、次奪還に赴く領地を決めてしまおうと、コウタ様とレミ様にもご意見を募っていたのですわ……」
「なるほど……」

あまりの事態に呆然とアルトの部屋を観察する俺に、説明してくれるアンナ。
光太も礼美も、貴族領の奪還に大いにやる気だったからなぁ……。きっと喜び勇んでアルトに協力しにきたに違いない。
結果として、アリ（貴族）どもにたかられてるわけだがな……。

「これはひでぇ……」
「なんていうか、浅ましいです……」

部屋の中にあまりの惨状に、物見遊山でついてきていたと思われるフォルカとナージャもあきれ顔……どころか引いている。
正直俺も引いている。何しろ十数人に近い人間が、我も我もと自分より年下の少年少女に詰め寄っている光景だ。ここが異世界でなければ迷わず携帯を取り出して通報している。
だが、ここは国家権力も携帯電話もない異世界だ。なんとかしたきゃ、自力でやらにゃ。

「……とりあえず、アンナに後ろの二人。耳塞いどけ」
「？　耳、ですか？」
アンナは不思議そうに首を傾げながら、素直に耳をふさぐ。
後ろの二人の確認はしない。一々振り返るのもあれだし、忠告はしたしな。
アンナが耳をふさぐのを確認してから、俺は大きく息を吸い込んだ。
こう見えて俺は肺活量にも声の大きさにもそこそこの自信ありだ。
中学の頃には応援団に抜擢されたこともある。抜擢っつってもクジ引きで負けただけだけど。
大きく胸をそらすほどに息を吸い込み、一瞬息を止める。
貴族どももアルトたちもこちらに気が付いていないのをしっかり確認してから、大きく息を吐き出すように空気を震わせ――。

轟っ！！！！

……今、人の声とは思えないほどの轟音が鳴り響きませんでした？
思わず「ワオッ！」と叫んだまま停止する俺。
目の前では、たった今聞こえてきた爆音にビビるどころか、身体ごと吹っ飛ばされた貴族たちが面白い形で地面に倒れ伏している。
アルトも当然射程圏内にいたせいで、両手を上げて仰け反ったままこちらを凝視している。その顔は突然の衝撃のせいでひどく歪んで見える。
光太と礼美も、似たような体勢だ。ただ、立っていたため、地面に体を横たえるような感じになっているが。

よく見ると、部屋の窓ガラスがみんなヒビ割れていた。ガラスが割れるって……。

「りゅ、隆司……？　い、いまの、なに……？」

「なにっていわれても……」

目をまわしている光太の質問に、俺は首を傾げて答えた。

「大声？」

「いや、声じゃねぇし！　今の明らかに声とはよべねぇし！」

俺の答えに納得がいかないのか、いまだ両耳をふさいだままの体勢で前に回ってきたフォルカが大声で反論してきた。

「耳塞いでても響いてきたし！　というか耳がキーンてなってる！」

「隊長がいろいろ規格外なのは承知でしたが、こんな部分までとは思いませんでした……」

おそらく耐えられなかったのだろう。ぺたりと地面に座り込んだまま、ナージャが弱弱しくそんなことを言った。

「できれば我々を呼ぶときは、音量を押さえてください……。日常的にこんな力発揮されては、耳が持ちません……」

「発揮したくねぇし、俺も」

俺はナージャの言葉に首を横に振って、今更ながら身震いを起こす。

全力で声張り上げただけでこれかよオイ。最終的には火が吹けるようになったりしねぇだろうな……？

ともあれ、貴族どもを黙らせるのには成功したな。俺はナージャ

に目をまわして気絶しているアンナを回収するように言ってから、アルトに近づいた。

「おいアルト。ちょっとでいいから、ツラ貸してくれよ」
「は…は……？」
「いいから来いって。貴族どもが起きると面倒だからよ」

いまいち状況がのみこめていないらしいアルトの首根っこ引っ掴んで、無理やりにでも引きずっていく。放心状態の礼美の回収は、光太にやらせておく。貴族たちは当然放置。

そして別室へと移動した俺たちは、次に奪還する貴族領の話を始める。

「まあ、とりあえずは近い場所になるんだよな？」
「ええ。レストとほぼ同じ距離にある領地が、まだかなりありますので」

まあ、近いっつってもあのカメ馬車で六日もかかるような場所なんだよな……。

いっそ、乗り物なしの方が早く着くんじゃねぇのか？

「そうですか……。でも、それ以外にも奪われた領地はあるんですよね？」
「ですが、それ以外の場所となりますと、往復で二週間以上かかる場所もございますから……」
「あまり、王城も空けられないですもんね……」

極めて残念そうな光太と礼美。こいつら、ほかの領地も奪還する気満々か。

できなくはないんだろうけど、そうなると王都の防衛力強化がキ

モだよな。

「その辺は、真子ががんばって開発しようとしてる魔道具に期待かね。あいつ、騎士団の戦力の底上げを狙ってるらしいから」

「そうだね……」

俺の言葉に、心配そうな顔をする礼美。

帰ってきてからこっち、ほとんど顔を見せない真子のことを心配してるんだろう。

なんか鬼気迫る勢いでいろんな道具の設計図を書いてるってサンシターが言ってたが、大丈夫なんだろうな？

今ここにいない魔法少女の姿を脳裏に浮かべつつ、俺は次の奪還領に関する話し合いを進めることにした。

Ｎｏ．４８：ｓｉｄｅ・ｒｙｕｚｉ「勇者たちの憂鬱」（後書き）

魔法少女というには歳を（ｒｙ　まあ、真子さんは元々そっち方面は似合わなさそうですが。

そして例によって人外化が進む隆司。今度は声だけで遠距離攻撃が成立しそうです。つっても、部屋の中だからできる芸当なのであって、屋外じゃひるませる程度しか期待できないでしょうけどねー。

そんなわけで次は真子ちゃん。若干荒れ気味かな？

No．49：side・mako「錬金研究室にて」

魔法による明かりはあるとはいえ、地下にあるせいで薄暗い錬金研究室の中。

そこであたしは無言で無数の紙にペンを走らせる。

そこに書かれているのは、魔術言語（カオシックルーン）による兵器開発案だ。

図は一切廃し、とにかくアイデアだけを紙に書きとめる。

この間の戦いで、やっぱりあたしは直接対決には向きそうにないのが分かった。

天星は構成を組むまで時間がかかるけど、それなりに強力だという自負はあった。初めての発動で、敵兵の一団を丸ごと相手取って勝利できたというのも大きい。

でも、ソフィアはそれをあっさり打ち破った。しかも一瞬で、全部打ち砕いてくれた。

誰もが同じことができるわけじゃないって、頭ではわかってる。それでも、天星自体を破壊されたら何もできなくなるのは同じだ。

補充するための魔法も作ってはあるけれど、魔力の消耗が激しい。ただでさえ、天星を一回呼び出すのに魔力がかかるのに、そう何度も魔力を使ってはいられない。

必要なのは、質か数か。ここに帰ってくるまでに考えたけれど、結局答えは出てこない。

なら、とにかく作るしかない。質でもいい。数でもいい。とにかく、物を作らないことには答えが出ないと思った。

だからこうして紙に向き合って、とにかく思いついたことを片っ端から紙面に写す。

実際に作れるかどうかじゃない。頭の中を全部引きずり出すつもりで、ひたすら紙に文字を綴り続ける。

「嬢ちゃん、そろそろ一息入れないか？」

と、この部屋の本来の主であるギルベルトさんが声をかけてきた。
その両手には、お茶の入ったコップを持っている。たぶん、メイド長さんが入れてくれたんだろう。

「パス」

あたしは短くそう言って、ペンを動かし続ける。

「そういうなって。お嬢も心配してるんだぞ？」
「マコ、その、一緒に茶菓子でもつままぬか？」

そういって、フィーネがあたしの目の前にクッキーの盛られた皿を置いた。
小麦色の小さな茶菓子が、星や花の形になって目の前に現れ、あたしの鼻腔を甘い匂いで満たす。

「……」

あたしはフィーネの顔を見る。
遠慮がちではあったが、その顔には強い不安が現れていた。

「……わかった」

あたしはそういって、目の前のクッキーを一枚つまんだ。
この子を悲しませないって、この間決めたものね。
クッキーを手に取ったあたしを見て、フィーネがパッと顔を明るくした。

「そ、そうか！　ほれ、ギル！　マコにお茶を渡さぬか！」

「へーへー、わかりました」

明るく命令されたギルベルトさんが、あたしが書き留めた計画書をまとめて机の片隅に置き、あたしとフィーネの前にコップを置いた。

「レーテ！　俺の分もついでに頼む！」

「わかりました」

そして部屋に備えられた簡易キッチンでお湯を沸かしていたメイド長に自分の分のお茶を頼み、あたしの対面に腰を落ち着けた。

「こんなことはいちいち言わんでもわかるだろうが、あまり根を詰め過ぎるなよ？　お嬢が涙声になってかなわん」

「ど、どういう意味じゃ！」

ギルベルトさんの言葉に、フィーネが顔を赤くして吠える。

やっぱり、まだこの間の一件が尾を引いているのかしら……。

「大丈夫よ。今はとにかく頭の中にあるアイデアをまとめたいだけなの。こういうの、思いついた端から書き留めていかないと、思い出せなくなっちゃうでしょ？」

「……確かにな」

あたしが淡く微笑んでそういうと、ギルベルトさんは頷いて、メイド長さんが用意してくれたお茶を口に含む。

「すごい数じゃのぅ……。これ、全部マコが？」

そういって、フィーネが机の片隅に積み上げられた企画書を見る。

ちょっとした小山くらい重ね上げられているそれを見て、あたしは頷いた。

「一応ね。ラフどころか、妄想の域も出ないものがほとんどだけど」

「がとりんぐがんとか、ぐれねーどとか、難しい言葉で書いてあるのぅ……」

一枚一枚手に取って確認するフィーネが難しい顔をした。

その辺は特に適当に書いてる節があるから、あまり見てもらいたくないんだけど……。

「しかし鉄で作るって書いてあるが、無理じゃないのかのぅ。なあ、ギル？」

「戦時中というのもあるが、それを差し引いてもこの国じゃ鉄がほとんど取れないからな。そこは別のもので代用してもらうしかないだろう」

「そうは言うんだけどね……」

ギルベルトさんの言葉にうなずきながらも、あたしはいつも腰につけていたマシンガンを取り出した。

今回の遠征に行く前に試作した物のうちの一丁だが、銃身が見る影もなくぼろぼろに崩れていた。

「そいつは確か、光矢弾（ライトボウ）が連射できるように作っておいたマシンガンとやらだったか？」

「ずいぶんボロボロじゃのぅ。よほど激しい戦闘じゃったのか？」

「それが……一回連射しただけなのよ、それ」

「え？」

あたしの言葉に、フィーネが信じられないという顔になった。

あたしだって、信じたくないわよ。でも、本当に一回使っただけなのよ……。

「どうも、一発二発はともかく、連続で光矢弾（ライトボウ）を発射すると、その時の振動やら光矢弾（ライトボウ）そのものの攻撃力に木じゃ耐えられないみたいなのよ」

「なるほどねぇ」

ギルベルトさんが、マシンガンを手にとってまじまじと見つめる。

そんなギルベルトさんの顔を見て、あたしは真剣に聞いた。

「単発式のハンドガンなら、別に木でもいいと思うけど、連射式のものは別の素材が使いたいんだけど、何か良いのある？」

「そうだな……」

ギルベルトさんは少し考えるようなそぶりを見せる。

「鉄は石やら何やらに含まれてるってんで、適当な地面から鉄に似た性質の物質が作れないか、研究したことはあるんだが、あまり結果が芳しくないんだよな。やっぱりこの辺の土じゃだめなのかね？」

「いや、そりゃ駄目でしょう……」

いくらなんでも、人が住むような平地に鉄に準ずる鉱石が含まれてるわきゃないでしょうが……。真面目にやってよね……。

「鉄を採取する鉱山とか、どこになるの？」

「一番近いのはスカンジウムじゃな。この間、マコたちが行ったレストと同じくらいの距離じゃ」

「ただ、スカンジウムはほとんど鉄を採取しつくしちまって、今は炭焼き小屋の方が多く立ってるくらいだ」

「そう……」

その後もめぼしい鉱山はないかと聞いたが、ほとんど存在しない……というより山自体がアメリア王国の末端にしか存在しないとかで、そこに集落を作るという発想自体がないのだとか。

今から掘りに行くにしても、時間がかかりすぎるわよね……。さすがに十年も二十年もこの世界にいる気はないし……。

「そうなると、木に別の何かを混ぜ合わせて強度を上げるくらいかしら……。ギルベルトさん、錬金術にはそういう研究も含まれるの？」

「一応な。魔法薬の研究なんかも手掛けるぞ」

うなずくギルベルトさん。なら、その研究結果待ちってところかしら……。

「ああ、そうそう。研究結果待ちっていえば、例の鉱物な。さしあたって解析が終わったぞ」

「え、本当？」

ギルベルトさんの言葉に、あたしは目を丸くした。

例の鉱物っていうと、以前隆司たちが持ち帰ってきた亀メカの装甲よね。

ギルベルトさんは一度立ち上がり、装甲の欠片を持ってきた。

確か、前に聞いた段階だと……。

「それ、魔力を吸収する性質があるのよね？　だから、ギルベルトさんの作った分析器じゃ分析できなかった」

「ああ、そうだ」

前回、この装甲の欠片が分析器で分析できなかった理由。
それはこの装甲が、どういう理由かはともあれ、魔力を吸収する性質を持っていたからしい。
あの分析器は、光輝石（マナクリスタル）を使う関係上、微弱な魔力の波動を照射する。
どうにもその微弱な魔力が装甲に吸収されてしまったから、分析が不可能だったということらしい、というのが前回の報告だった。

「で、だ。まずはどれだけの魔力を吸収できるかだが、量自体はさほど多くない。人間が意識して放出できる限界領程度だな」
「つまり、攻撃魔法を吸収する、みたいな使い方はできないと？」
「その通りだ」

つまり、魔力を吸収することで、敵の攻撃を防ぐようなものじゃないってことか……。

「それと、魔力を吸収すると、堅くなる性質があるな」
「堅くなる？　どういうことじゃ？」
「見てろよ」

フィーネの言葉に、ギルベルトさんは意識して魔力を遮断する。
そして装甲の欠片を手に持って、曲げる。
すると、飴細工か何かのように装甲の欠片はグニャリと曲がった。

「なんと！」
「さて、これを踏まえたうえで……。お嬢、魔力を込めて曲げてみな」
「う、うむ」

ギルベルトさんに装甲を手渡され、フィーネは魔力を装甲に込め

ながら曲げようと試みる。

「ふっ！」

プクッとほっぺたが膨れるほどに力が込められるけど、装甲はわずかに湾曲したのみでそれ以上曲がろうとしない。

「〜〜〜ッ！　ダメじゃ、曲がらん！」

結局根負けして投げ出すフィーネ。装甲板はフィーネの手元から離れ、小さな音を立てて机の上に落ちた。

「っていうか、これは人選ミスじゃないの？　フィーネの力で、鉄板が曲がるとも思えないけど？」

「そんなこたぁない。女神の加護は、フィーネにもきちんとある。魔力を込めりゃ、自然と力も上がるさ」

「ふーん」

ハーハーと荒い息を吐くフィーネを見ながら、あたしはつぶやいた。

忘れてたけど、この国の人間は女神の加護とやらで、自己の能力の強化ができるのよね。

まあ、それも数百年前に比べたら雀の涙なんだろうけど。

「しかし魔力を込めると固くなる装甲ね……。魔力さえ込めなければ柔らかいってことは、加工は容易。魔力を流す手段さえあれば一定以上の防御力は確保できる……。かなり便利なもの使ってるわね、魔族って」

「ああ、そうだな。この鉱物、とりあえず魔鉱石（カオスメタル）と仮に呼ぶことにした」

ギルベルトさんは装甲……魔鉱石（カオスメタル）を手に取った。
魔鉱石（カオスメタル）ね……。悪くないんじゃないの？
「他に、何か分かったことは？」
「使われてる元の材質は、どうやらこの国でも普遍的に使われている鉄だな。どうやら向こうじゃ、鉄は豊富に存在するらしい」
「羨ましいことこの上ないわね」
「まったくだ」

あたしの言葉に同意するように、ギルベルトさんが頷いた。
よく考えれば、ソフィアの鎧もヴァルトの斧もガオウの双剣も、みんなふんだんに鉄が使われた製品よね。
隆司が言っていた通り、リアラとやらがドワーフなら、ただの鉄をこんな変な性質を持つ物質へ変化させるのもたやすいか……。

「何らかの魔導公式が加工の過程で使われた結果だろうな。そこが分かれば、こっちでも量産できるかもしれん」
「魔導公式が使われた結果、ねぇ」

あたしは首を傾げながら、ギルベルトさんから魔鉱石（カオスメタル）を受け取る。
両の目でその表面をじっくり眺めるが、特別魔術言語（カオシックルーン）が込められているようには見受けられない。
つまりこの物質自体が魔力を込められるように作られてるということだ。
顕微鏡みたいなものがあれば、あるいはもっと解析が進むのかもしれないけど、ないものねだりはしょうがない。

「じゃあ、引き続き解析よろしくね」
「ああ」

あたしはギルベルトさんの返事を聞いて、クッキーを手に取ろうとするが、気が付けば皿の中に盛られていたお菓子はなくなっていた。

あらやだ、いつの間に。ほとんど無意識につまんでたからなぁ。

「えーっと、メイド長さん。クッキーのお代わりある？」

「残念ながら、ございません。フィーネ様が作られたクッキーはそれで終わりですから」

「え」

思わずフィーネの方を向く。

するとフィーネは、メイド長さんにクッキーを作ったことをばらされたのが恥ずかしいのか、顔を赤くしながらワタワタと手を振った。

「い、いや、その……レーテ！　そんなこと、言わずとも良いじゃろうが！？」

「フィーネ様は、こちらに帰還してから何も語らずに研究室にこもられるマコ様をひどく心配なさっていたのです」

「だからレーテェ！」

恥ずかしさのあまり拳を握ってポカポカとメイド長を叩き始めるフィーネだけど、メイド長は涼しい顔でその拳を受けている。

あたしは目を丸くし、そして苦笑した。

まったく……。

立ち上がって、フィーネを背後から抱きしめてあげる。

「ひゃ！　マ、マコ？」

「フィーネ、ありがとね。心配してくれて」

「う、うむ……」

耳元でそう言ってあげると、恥ずかしそうに、だけど嬉しそうに頷いてくれた。

ホント、この子は優しい子ね……。

異世界からいきなりやってきた、ただの女子高生をこんなに気遣ってくれるなんて……。

あたしはフィーネの頭を撫でてあげながら、上を見上げる。

あたしの体内時計が狂っていなければ、そろそろ次の奪還領地が決定される頃合いだろう。

「マコ様！　次に奪還する領地が決まったであります！　至急、会議室まで来てほしいのであります！」

そう思っていると、ちょうど良いタイミングでサンシターが報告に来てくれた。

「わかった。すぐ行くわ」

サンシターにそう答え、フィーネの頭を一撫で。

「じゃあ、ちょっと行ってくるわね」

「うむ……」

フィーネに微笑んで、あたしは錬金研究室を後にするのだった。

No．49：side・mako「錬金研究室にて」（後書き）

発明ガール真子ちゃん！　一昔前、似たようなタイトルのアニメありましたよね。カニパンだっけ。

さしあたって連射系武器に木は向かないということが判明。まあ、火縄銃だって中身はしっかり鉄の筒だったんです。全部木で作るということ自体がいろいろ間違っていたのでしょう。

さて、次に行く領地に関して決めておかねぇと……。

No．50：side・ryuzi「次なる領地へ」

「おまたせ」
「いえ、突然お呼びたてして、申し訳ありませんでした」
サンシターが呼びに行った真子が、円卓へとやってきた。
これで全員だな。
真子が礼美の隣の空いている席に座り、アルトの方を向きながら口を開いた。

「それで、次に取り返す領地が決まったってことなんだけどさ」
「ええ、今度は南にある領地でして……」
「ああ、そうじゃなくて」

アルトが今度の領地について説明しようとすると、真子が片手を上げてそれを制した。
そしてその場にいる全員を見回し、バツが悪そうに頬を掻き始める。

「今回、あたしはこっちに残りたいんだけど」
「え！？　何故ですの！？」
「いや、発明っていうか道具作りに専念したいからだけど」

真子の言葉に驚愕したのはアンナ。
まあ、前回普通に戦いに行ってくれたのに、今回はダメっていわれたらそうも言いたくなるわな。
ただ、真子の言葉に驚いたのは、アンナだけじゃなかった。

「真子ちゃん、今回は来てくれないの……？」

「ごめんね礼美」

礼美が悲しそうな表情を浮かべると、真子がウィンクしながら申し訳なさそうに謝った。

そして礼美に続いて、光太も難しそうな顔になった。

「でも、真子ちゃんが来てくれないとなると、魔法関係の攻撃力が少し不安になるかも」

「ああ、じゃあ俺が今度は行くわ」

「えっ！？」

俺が手を上げてそういうと光太が驚いたような顔になった。

なんだ、そんなに意外か。

「意外っていうか……いいの？　またソフィアさんに会えなくなるかも……」

俺の言葉に、そう気遣う光太。

フ、確かにまたニアミスを起こす可能性はある……。

だがしかし！

「心配すんな。向こうも領地を何度も奪い返されるわけにゃいかねぇだろ？　なら、こっちが動けば必ず戦力が動く。向こうがこっちの動きをある程度把握してるなら、なおさらな」

「な、なるほど……」

自信満々に言い放った俺の言葉に、納得したように頷く光太。

まあ、光太の指摘は当然っちゃ当然だけどな。こっちが動いたからと言って、向こうが動いてくれるとは限らねぇ。

だが行くか行かないかの二択。つまり二分の一の確率……。そし

て、嫁に連続で会えない確率は二分の一の二乗、四分の一！　そうそう外れやしねぇ！　パーセントで言うなら２５％だろうって意見は聞かない。

「リュウジ様が動いてくださるなら、確かに攻撃力の不足は心配しなくてよいと思いますが……本当によろしいので？」

「作ったばかりの部隊を置いて遠征などして、よろしいのですの？」

今度はアルトとアンナが心配そうな顔でこちらを見つめてくる。

俺はそんな二人に向かって自信満々に頷いて見せた。

「一応大丈夫だろ。騎士ＡＢＣを代理の隊長にしとくから。必要があったら動かしてもらっていいぜ」

「騎士ＡＢＣ……？」

俺の言葉に眉根を寄せるアンナ。あ、ＡＢＣじゃ通じねぇか。まあ、いいや。

「他のメンツは変動なしでいいんだよな？」

「あ、はい。今回も騎士団からはサンシター四等衛兵、アスカ二等騎士。魔導師団より速術師（スピードスペル）ジョージ、属性術師（エレメンツ）アルル。女神教団よりヨハン司祭となります」

なんのかんのと名前がついちゃいるが、要するにいつものメンツってことか。

っていうか、前の会議の時も思ったんだけど四等衛兵ってなんだサンシター。確か騎士団の一番下のランクって、三等衛兵からじゃないのか？

「つまり自分、見習い以下というわけなのであります……」

「もうちょっと頑張れよお前は……」

しょんぼり肩を落とすサンシターであるが、逆にすごいと考えられなくもない。見習い以下の能力しかないと、公式に認められているのにまだ騎士団にいられるとか。

実はこいつ、スゲェ身分の生まれだったりしねぇだろうな？

「あ、それはご心配なく。自分、寒村の農民の子でありますから」

「謎が深まるなぁ、オイ」

「あの……話を進めてもよろしいでしょうか……？」

「「あ、はい」」

アルトの言葉に、サンシターと一緒になって頷く。

やべぇ。今、会議中だって素で忘れてた。

「それで……今度、皆様に取り戻していただきたいのは、王都より南に存在しますヨークです」

「ヨーク？」

「はい。巨大な海湖（ソルト・レイク）を中心に発展した町で、アメリア王国の主な海産資源を生産している町になるんですの」

海湖（ソルト・レイク）って確か、そこが見えないほど深い、海みたいに塩っ辛い湖だっけか？

今度はそこを取り戻しに行くのか……。最近、ウッピー肉にも飽きてきたし、ここいらで魚を食べるのも悪くなさそうだな……。

「なあ。そこの名産の魚ってどんなのがいるんだ？」

「え？　ヨークのですか……？」

「確か、プチホエールの肉が美味と聞きますの」

「っていうか、隆司。行く前から食べる気満々なの……？」

「え？　なんか悪いか？」

俺の質問を聞いて、光太が苦笑する。

むしろ異世界に来たんだから、向こうじゃ食べられないものを腹いっぱい食べるくらいの気概はあってしかるべきじゃねぇの？

「しかしプチホエールねぇ。どんな魚なのよ？」

「プチっていうくらいだし、小さなクジラなのかな？」

「クジラというのがどういう生き物かは存じませんが、プチホエールは通常は掌くらいの大きさの魚なんですが、ごくまれに家を超えるほどの大きさに成長する個体が存在するんです」

「そしてその個体が卵を産んで、増える生き物なのですのよ」

「「へー」」

真子と礼美の質問に、アルトとアンナが答える。

しかし、プチなのは幼魚なのか……。でも、話の感じからすると、食うのはその幼魚っぽいな。

あんまり食うところなさそうだ。

と、俺がまだ見ぬプチホエールに思いをはせていると、バン！と大きな音を立てて会議室の扉がいきなり開かれた。

「フォルクス公爵！　まだ会議中で……！」

「その会議に関係あることだ！　アルト王子！」

部屋に入ってきたのは、貧相なりの貴族風味のヒゲ面男だ。ヒゲの手入れは整っているみたいだけど、正直カイゼル髭よりチョビ髭の方が似合ってる気がしてならねぇ風貌だ。

そいつの姿を見たアルトが、いやなものを見た顔になる。

ガムを踏んづけた後、靴の裏を見たときみたいな顔だなー。

「フォルクス公爵……。今は領地奪還のための会議中なのですが……」
「その領地奪還のことでお話があってまいりました！」
貴族風味の男がふんぞり返りながら、鼻息荒くアルトに近寄っていく。
「何故我がフォルクス領ではなく、ヨークなどというどうでもよい場所を指定されているのです！？　まずは歴史ある、我がフォルクス領をこそ取り戻すべきなのではないのですか！？」
「……前にも説明しましたように、まずは王都周辺の領地を取り戻すことこそが最優先と判断したのです」
「最優先！？　その優先すべき事項はいったいなんなのです！？　古くから王国に使える我が一族を蔑ろにするほどの優先事項が、ヨークにはあるのですか！？」
つばやらヨダレやらを飛沫のように飛ばしながら、アルトに詰め寄るヒゲ公爵。
そういや、王都に近い領地から取り戻すってのは聞いてるが、どういう優先順位なのかはよく知らんな俺。
「その辺どうなん、サンシター」
「何故自分に聞くのでありますか。優先されている順位は、王都において不足しがちな物資であります」
ボソボソとサンシターに問いかけると、こっそり答えてくれた。
えーっと前回のレストは貿易の町か。となると、とにかく補給線を復活させるために取り戻したってことか？
じゃあ、今回のヨークは海産物が不足してるってことか？

「そんなところであります。明かりに使う魚脂が不足しがちなのであります」
「へー」
魚の油って、明かりにも使えんのか。
「で、あのおっさんが叫んでるフォルクス領ってどんな領地なん？」
「ええっと、あまり大きな声では言えないのでありますが……」
サンシターはちらりとおっさんの方を見る。
おっさんはひたすらアルトに文句を言うばかりでこちらのことなど欠片も気にしている様子がない。
そのことを確認してから、サンシターはさらに声を低くして俺に耳打ちした。
「貴族としての歴史は古く、アメリア王国生誕時から仕えているでありますが、レストのように交易をおこなっているわけでも、ヨークのように何らかの資源が豊富にあるわけでもないので……」
「いてもいなくても同じってこと？」
「貴様！　今なんといった！？」
おっさんが何やらこっちにいちゃもんをつけ始めた。
あんな大声でわめいてたのに、何でこっちの小声の会話が聞こえるんだ。耳ざといにもほどがあんぞ。
「我がフォルクス領が、いてもいなくても同じだと！？　訂正せよ！」
「フォルクス公爵！」
今度はこちらに標的を変えたおっさんが、肩をいからせながら詰

め寄ってくる。
思ってもいなかった事態に、俺の隣でサンシターが委縮した。
「貴様のような貧民に、我がフォルクス領の価値がわかるのか！？」
「い、いえ、それは……」
おっさんの言葉に、サンシターが声を詰まらせる。
それに気を良くしたのかあるいは勢いづいたのか、おっさんは口から泡を飛ばしまくる。
「この私が、いったいどれほどの想いで、我がフォルクス領の奪還を待ちわびているのかわかっているのか！？　こうして話をしているのさえ一分一秒さえ惜しいというときに、いてもいなくても同じなどと、よく言えるものだな！？」
「は、ははぁ！　申し訳ないであります！」
「申し訳ないですむか、バカモノがぁ！！」
サンシターが敬礼で謝罪する。
っていうか、そのいてもいなくても同じっていったのは俺なんだけど？　なんでこのおっさんサンシターに食いついてるわけ？
「おっさん、おっさん」
「む！？　な、何だ貴様！？」
俺が声をかけると、途端におっさんは怯えたように後ずさりする。
？　何このおっさん。人の顔を見てビビるとか、失礼じゃない？
まあ、そんなことはどうでもいいか。
「いつまでもうっとうしいんで、帰ってくんない？　あんたの領地奪還はまた今度ってことで」

「なっ！？」

ヒラヒラと片手を振って追い返す仕草をしてやると、おっさんの顔が一瞬蒼くなってから一気に赤くなった。

「ま、また今度とは何事だァァァァァァ！！！」

そのままブルブル震えはじめ、臨界点に突入したのか、大口空けて怒鳴り声を上げた。

うるせー。

「我がフォルクス領の奪還より最優先すべき事項などないと先ほどから言っておるのに、なぜそれを理解せんのだ！！！」

「いやだって、あんたそれしか言ってねぇし」

自領の奪還が最優先、と声高に主張するのはいいけど、なんでそれが最優先なのかさっぱりわからんからなー。

「それしか言ってない！？　それ以上に口にすべきことがあるとでもいうのか！？」

「あるわよ？」

俺が口を開こうとするより早く、真子が頬杖を突きながら、うっとうしそうにおっさんを見た。

おっさんは血走った目でギョロリと真子を睨む。

「なにぃ！？」

「たとえばレストの場合なら、貿易を行っているからアメリア王国の物資を補充できるし、ヨークの場合なら、海産物の補充ができるわけじゃない。どっちも生命線っていっても良いわよ？」

「それがどうした！　そんなもの、我がフォルクス領を取り戻した後にでも考えればよい事柄ではないか！」

真子の言葉に、おっさんは鼻を鳴らして反論……いや、反論ですらねぇなぁ。

もはや何を言ってるのかすらわからねぇ。

おっさんの反論を聞き、もうかける言葉も見つからないという風に首を横に振る真子。

そんな真子の態度がまた頭に来るのか、おっさんが顔をさらに赤くする。

が、そんなおっさんが大声を張り上げるより早く、光太が立ち上がった。

「フォルクス公爵」

「な！　……何かな、勇者殿……？」

おっさんは光太に声をかけられ、反射的に怒鳴り声をあげかけるが、目の前の光太の立場を思い出したのか何とか声を抑えた。

さすがに勇者に怒鳴り声を上げるほど、アホじゃないか。

光太はにっこりと笑いながら、口を開いた。

「お話は伺わせていただきました。大変痛ましく思います」

「そ、そうだろう！　だから――」

「なので、いずれの機会にフォルクス領を奪還させていただきます。今は、御引取ください」

おっさんが何か言うより早く、光太がそう答える。

その言葉を聞いて、おっさんが顔を明るくする。

「ほ、本当か！」

「ええ、お約束します。なので、今回は……」
「わ、わかった！　確かに聞いたぞ！　必ず、我がフォルクス領を奪還してくれ！」
光太の言葉に満足そうに頷くと、おっさんはそのまま足早に会議場を出ていった。
「……なあ、サンシター？」
「は、はい。なんでありますか？」
俺はおっさんの背中を見送りながら、軽く首を傾げた。
「あのおっさん、ちゃんと教育受けてんのかなぁ」
「は、は？　どういう意味でありますか？」
「いやだって、光太の奴、今いずれとしか言ってねぇぞ？」
いずれ奪還するとは言った。だがいずれだ。そのいずれは明日かも知れないし、十年後になることだってあり得るわけだ。
なんで時期の指定を確約しねぇんだろうか。
俺の言葉に、光太は苦笑した。
「そう言わないと、帰ってくれそうになかったからさ……」
「にしたって、あれはねぇだろ、常識的に考えて……」
俺は疲れたようにため息を吐いた。
いや食って掛かられたのはアルトにサンシターだから、俺が疲れるのはお門違いなんだけどさぁ。
すると、アルトが申し訳なさそうに頭を下げた。
「申し訳ありません、リュウジ様……。二度も、御見苦しい所をお

見せして」
「いいよ気にすんな……」
まさかあんなアホ貴族が一々乗り込んでくるなんて、思いもしねぇもんよ。
俺はまたため息をついて、頭をガリガリ掻いた。
あのアホ貴族、なんか変なことしでかさねぇだろうなぁ……？

No.50：side・ryuzi「次なる領地へ」（後書き）

そんなわけで作戦会議編。今回は真子ちゃんがお留守番のようです。

しかしこのフォルクス、二度目の登場になりますが……どうしようこいつ。書いてて全然面白くない。マジどうしてくれよう。

次回、少し時間を飛ばしてー、旅の途中ですよー？

No．51：side・remi「強い祈りを力に」

がたがたゴトゴトと、馬車が音を立てて揺れています。
会議の後、私たちはまっすぐにヨークへと向かうことになりました。
ただ、この前の遠征とは少し違う点が一つだけ。

「しかし、あの兄ちゃんが、まさかハンターズギルドから馬車借りてくるとはなぁ」

ジョージ君が、勢いよく後ろへと跳んでいく光景を見て、驚いたような声を上げています。
前見た窓から外の光景と違って、かなりのスピードが出ているのが分かります。
少しだけ開いている窓からは、爽やかな風が出たり入ったりを繰り返しています。
そう、今回は前の遅馬（スロウホース）じゃなくて、普通の馬による普通の馬車なのです。
何故遅馬（スロウホース）じゃないのかといえば、六日間かかる長旅にかかる原因が遅馬（スロウホース）によるものだって聞いた隆司君が嫌がって。

「ちょっと待ってろ！」

の一言でハンターズギルドまで走っていって、借りてきたのです。
隆司君によれば、ハンターズギルドは各領地に支部がある関係で、依頼を受けたハンターを派遣するときに使うものの中から一馬車借りてきたんだとか。
そういうことができるんなら、どうして初めからやらないのか騎士団長さんに聞いてみたんですけど。

「ギルド、というかキルトのおっさんに貸を作るのがいやでな……」

ってつぶやいた後言葉を濁していました。

キルトさん、っていう人と何かあったのかなぁ？

まあ、それはともかく、普通の二頭立ての馬車なんですけど、馬のための休憩の時間を含めても、遅馬（スロウホース）で六日かかるところが四日でヨークに着けるようになるとのことなんです！

やっぱり馬は速いというか、遅馬（スロウホース）がとても遅いというか……。

とにかく、そういうわけで今回の旅はもう少し快適なものになりそうです。

ただ……。

「う～……」

「アルルさん。そのような顔をなさってはいけませんよ」

「でも～……」

不満そうな顔で、アルルさんが唸り声を上げています。

ヨハンさんがそんなアルルさんを窘めていますが、居心地が悪そうに体をゆすりました。

「私が馬車の席で～、コウタ様が天井なんて～……」

「私としても大変遺憾ですが、今回用意できた馬車の大きさを考えるとやむを得ないでしょう」

ヨハンさんはそう言いますが、アルルさんはまだ不満そうです。

かくいう私も、少しだけ居心地が悪いです。

そう、今回の馬車の最大乗員は、御者席も含めて六人まで。

あぶれた二人が今どこにいるのかといえば……。

私は窓を大きく開けて、身を乗り出して天井の二人に声をかけま

した。

「光太君、隆司君！　大丈夫ー！？」
「平気平気ー」
「大丈夫だよ！　マントもあるし、風も気持ちいいしね！」

天井からは、隆司君ののんびりした声と、光太君の楽しそうな声が帰ってきました。
そう。残った二人は天井にしがみつくことになってしまったんです……。
天井には、荷物を置くスペースがあったので、しがみつくこと自体は難しくないそうなんですけど……。
なんだか悪いです……。

「後で替わるよー！？」
「バカ言ってないで、おとなしく座席にいろよー」
「女の子を、こんなところに座らせる方が居心地悪いよ！」

私の提案は、男の子二人に一蹴されてしまいました……。
むう。隆司君、バカはないんじゃないかなぁ……。
私が不満に頬を膨らませていると、ヨハンさんが勢いよく片手を上げました。

「ご安心ください、レミ様！　後程、この私めがお二人に代わり、天井へと移動いたしましょう！」
「え？　それは、ありがたいんですけど……」

でも、それだとヨハンさんに悪い気がするし……。

「でも私なら、祈りの盾で風も凌げますし……」

「バカ、やめろって。祈りの盾だって、いつまでも張り続けられるわけじゃねーじゃねーか」

私の意見は、ジョージ君によって却下されました。

ううん。いい案だと思ったのになぁ……。

「そもそもあれ、意志力（マナ）を消費するタイプだろ？　張り続けて、意志力（マナ）が切れて、こっちが気が付かねぇうちに馬車から落とされるなんてことになったら、シャレにならねーだろーが」

「あう……」

ジョージ君のもっともな言葉に、私はうなだれます。

そもそもあの祈りの盾の持続時間は、今のところは十分を超えるか超えないかくらいです。

これなら、普通にマントを羽織ってる方が防寒効果は高いよね……。

「うーん……。祈りの盾の持続時間、うまく伸ばせないかなぁ……」

私はつぶやいて指でくるりと円を描いて、一枚のガラスのような盾を呼び出しました。

私はじっとその盾に集中して、なるべく長く保てるように頑張りますけど、盾はすぐにシャンと鈴が鳴るような音を立てて消えてしまいました。

特別意識しないで出す盾は、やっぱりすぐに消えちゃうなぁ……。

「ねえ、ジョージ君」

「んだよ？」

「こういう、意志力（マナ）を多く使う能力の持続時間をうまく伸ばす方法はないかなぁ？」

私の質問に、ジョージ君は唸り声を上げました。

「一応魔導師団でも、そっち方面の研究はしてるんだけど、効果的な訓練方法は見つかってねーんだよなー……」

「そうなの？」

「おーよ。その辺の分野は、むしろ女神教団の方が秀でてるんじゃねーの？」

「ええ。女神様より賜ったこの技術、けして腐らせぬよう、日々研鑽を重ねております」

ジョージ君の言葉に、ヨハンさんが小さく頷いて微笑みました。

じゃあ、と私はヨハンさんに向き直りました。

「ヨハンさん。こういう祈りの盾を持続させる方法ってないんでしょうか？」

「ならばやはり、日々の礼拝が効果的でしょう」

「日々の礼拝……」

私はヨハンさんの言葉に、難しい顔になってしまいました。

うう。私、日本の生まれだから神様みたいな存在を一心に信じたことはないんです……。不信心な子でごめんなさい……。

「ああ、申し訳ありません、レミ様！」

と、私の顔を見たヨハンさんが慌てたように頭を下げました。

「あ、ごめんなさい！　別に、ヨハンさんが悪いわけじゃ……」

「いえ！　女神の再顕現であらせられるレミ様に、己に祈れなどと蒙昧なことを申し上げてしまいました……！」

……ええっと。

ヨハンさんの言葉に固まる私の隣で、ジョージ君が大げさにため息をつきました。

「あんた、そのオーゲサなとこどうにかならない？」

「信仰心を捨てよと君はいうのかね？」

真面目な顔をしてジョージ君に反論するヨハンさんの瞳には、欠片の迷いもありませんでした。

反応に困る私の耳に、苦笑するアルルさんの声が聞こえてきました。

「まあ～、ヨハンさんの信仰心は～、いつものことということで～」

「は、はい」

「実際～、ヨハンさんのいう～毎日祈るというのは～効果的な方法なんですよ～？」

「え？　そうなんですか？」

私が驚くと、アルルさんは楽しそうに一つ頷きました。

「はい～。毎日～意識を集中する～習慣をつけるんです～。そうすることで～意志力（マナ）を使う能力が～強化されたという例が～、聞かれているんですよ～？」

「そうなんですか……」

私はアルルさんの言葉に小さく頷きました。

なるほど。そういえば意志力（マナ）は意識の力。意識を集中できる癖をつければ、意志力（マナ）を使う能力が強化できるよね。

「というわけなんだけど」
「唐突過ぎねぇか、相談内容」

馬車の休憩時間、天井から降りてきた光太君と隆司君に、アルルさんから聞いた話をしました。
そして、意識を集中する方法に関して意見を聞こうと思ったんですけど、隆司君からそんな言葉をもらいました。
もう！　こっちは真剣なんだよ！

「いや、真剣なのはわかってるけど、それをいきなり聞かされてどうしろってのよ……」

私の言葉に、腕を組んだ隆司君は唸り声を上げました。
いろいろ言いながらも、ちゃんと考えてくれてるみたいです。

「うーん、意識を集中する方法かぁ……」

光太君も首をひねりながら考えていましたが、何か思いついたようです。

「あ。礼美ちゃん。あの盾だけど……」
「あの盾って、この盾？」
「そうそれ」
「お前、息を吐くように盾出すなよ……」

光太君に言われて、空中に盾を呼び出しました。
隆司君が何かを呟いていますが、それを気にするより先に光太君が口を開きます。

「それを出す時に、何か仕草を付け加えてみるとか、呪文を唱えてみるとかしてみれば？」
「え？　どういうこと？」
呪文も仕草もいらないのが私の盾の強みなのに、それをなくすような提案です。
でも、光太君は真剣な顔で続けました。
「いや、緊急の時はそういうのはなくてもいいんだよ。でも、威力を強化したいなら、こういうのは結構大事なんだよ」
「そ、そうなの？」
「うん」
光太君は一つ頷いて、立ち上がりました。
そして、腰の剣を抜いて青眼の構えを取ります。
「ゴルフとか野球とか、ボールを打つ前に何かの形でパフォーマンスするでしょ？　ああいうのをプリショット・ルーチンっていうんだけど、あれを行うことで集中力が上がったり、成功率が上がったりするんだ」
光太君はそのまま二度三度と繰り返し面打ちを繰り返します。
「成功するたびに同じ行動を繰り返すことで、必ず成功するイメージを自分の中に刷り込むんだ」
「一つのゲン担ぎみてェなもんか？」
「そういう言い方もある……ねッ！」
そして光太君は最後に鋭い一撃を打ち下ろしました。

その一撃は今までの軽い素振りと比べ、明らかに重さも速さも違いました。
光太君にとってのプリショット・ルーチンがなんだったのかはわかりませんが、きっと光太君にもそういうのがあるんでしょう。
素振りを終えた光太君は、にっこりと笑ってまた座りました。

「魔法の呪文や、祈りの動作なんかにも同じことが言えると思うんだけど、どうかな？」
「でも、そんなもん一朝一夕にできたりしねぇんじゃねぇの？」

光太君はこの案に自信があるみたいですけど、隆司君は難しい顔になりました。
正直、私も同じような顔になってる気がします。

「え？　そ、そうかな？」
「普通はそうだろ」

隆司君の言葉に、なぜか光太君がひどく狼狽し始めました。
？　どうしたんだろう？

「で、でもさ？　普通は何か思いついた一言とか、ちょっとかっこいい言葉とかメモ帳に」
「まとめないし」
「まとめない！？　まとめないかな！？」

隆司君の冷静なひと言に、光太君がショックを受けたような顔になりました。

「わ、私もまとめない、かなぁ……」
「そ、そっかぁ……」

私も隆司君の意見に賛成すると、光太君はガックリと肩を落としました。
ああああ、なんだかひどいことをした気分になってきました！
「で、でも！　その案はすごい良いと思うよ！　ね、ねえ隆司君！？」
「まあな。思いつきの一言や、かっこいい言葉をメモにまとめる癖のねぇ人間には厳しいかもしれんが、悪くはない気がするなー」
「りゅ、隆司君！！」
ニヤニヤと意地悪く笑いながら隆司君が口にした言葉に、光太君がガクンと頭を殴られたみたいに揺らして私たちに背中を向けて、体育座りを始めてしまいました。
ああああ、なんだかとっても哀愁が漂ってるよー！？
「そっか、普通じゃないんだー……」
「ううぅぅぅ……！　じゃ、じゃあ！　隆司君には何か案があるの！？」
「え？　俺？」
私は何とか光太君を元気づけようと、隆司君を指差します！
ほ、本当はこういうの良くないと思うけど、隆司君がいい案を出せなければ、光太君も元気が出るはず！
でも、隆司君は至極あっさりと私に答えました。
「えーっと、ちょっと考えただけだと、きつめにバンダナ巻くとか？」
「ば、バンダナ？」
「おう」

隆司君は一つ頷いて、荷物の中から一枚のバンダナと、懐からお財布を取り出しました。
そしてお財布の中から十円玉を取り出すとバンダナで包んで……。
「こんな感じでバンダナになんか堅いもん仕込んで……」
「う、うん……って、いたいいたい！？」
そのバンダナを私の頭にギュッと巻きつけました！？
イタイイタイ、十円玉が当たって痛いよ！？
「痛いよー！？」
「がまんしろぃ！　……とまあ、こんなもんだな」
「どんなもんなのー！？」
きつめに縛られたバンダナは、絶えず私の額を十円玉で刺激します。
ホントにきつく縛ってあるから、私じゃとれません。うわーん！？
「額は痛いか？」
「痛いよー……」
私が恨みがましいまなざしで睨んでも、隆司君は涼しい顔をして頷きました。
「それでいいんだよ。これは漫画で呼んだ方法なんだが」
「ううん、漫画の方法実行してほしくありません……」
「いいから聞けよ。その額の痛い部分、要するに痛点に意識を集中するんだ。痛いんだから、いやでも意識はそこに向くだろ？」

言われて私は額に巻かれたバンダナに手を当てます。
そして瞳を閉じて、痛みが集中してる部分……十円玉あたりに意識を向けてみます。
……確かに、何もしていない時に比べると意識を集中しやすいかもしれません。

「うん、意識は集中できるかも……」
「だろ？」
「でもさ、隆司。いつもバンダナ巻いてたら、その内痛みに慣れたりしない？」

いつの間にか復活していた光太君が、私も少し考えた懸念を口にしますが、隆司君は軽く肩を竦めました。

「それでも十円玉は常に額を圧迫するわけだろ？　そこを意識の集中点にすればいいんじゃね？　さもなきゃ、何度でも巻き直せばいいだろ」
「い、痛いのはいやかも……」
「なら、光太先生監修の元、祈りの盾の呪文と動作を完成させねぇとな」
「なんでわざわざ僕が！？　っていうか先生って！」

私がおびえたように後ずさると、隆司君はしたり顔で頷きます。
光太君は驚いたように声を上げますが、私としてはなるべくそっちの方がいいです。

「光太先生！　よろしくおねがいします！」
「礼美ちゃんもノらないでよぉ！？」

光太君が悲鳴じみた声を上げました。

でも、少しだけ嬉しそうです。やっぱり、思いついたことは、実行してみたいもんね？

Ｎｏ．５１：ｓｉｄｅ・ｒｅｍｉ「強い祈りを力に」（後書き）

光太君の厨二スキルは生来のもののようです。だから光破旋風刃（ライトニングストームエッジ）なんて即席で出てくるんですねわ（ｒｙ。

ちなみに今回の意識集中方法、特にプリショット・ルーチンの方ですが、実際に存在する方法です。本来はゴルフ用語なんですよね、これ。

次回は光太視点で旅の続きをー。

No．52：side・kota「夜陰の帳にて」

ヨークへの旅は、一応順調に進んでいった。

途中、野生の動物に何度か襲われたりもしたけれど、そのたびに隆司と一緒になって追い返したり、馬車の中からジョージ君が魔法を放って追い返したりして難を逃れた。

そして今は街道のすぐ脇の雑木林の中に簡単な野営を作って野宿の準備を行っているところだ。

女性用のテントと男性用のテントを立てているヨハンさんと隆司の横で、アルルさんとサンシターさんが今日の御飯の準備をしている。

礼美ちゃんとジョージ君は、今日つかった魔法に関して復習していて、僕は今アスカさんと剣の訓練を行っている。

こういう旅の中でも修練を怠らないほうがいい、というのはアスカさんの言葉だ。一日怠った訓練の遅れを取り戻すには、一週間近い時間がかかるって身をもって知っている僕は、特に異論もなくアスカさんとの訓練に打ち込んでいた。

「やはり、コウタ様は上達が早いですね」

「え？　そうですか？」

そして一通り打ち合いが終わった後、アスカさんが不意にそんなことを言ってくれた。

「ええ。当初こそ、剣の扱いに苦心している様子が見てとれましたが、ここ最近はそんな様子も見られず、手足のように操っていられる。見知らぬ武器に慣れるまでは半年はかかるものが大半ですから、かなりのペースです」

そういわれて、僕は螺風剣（エアキャリバー）を軽く振ってみる。
確かに、これを握ったばかりの時は竹刀を操るようにいかなくて、どうしても剣そのものに振り回される感覚が抜けなかったけど、最近はそんなこともなくなってきた。
細かくは覚えてないけど、こちらに来て一か月以上経ってる。それを考えれば、元々の技能があったとはいえ早いほう、なのかな？

「とはいえ、アスカさんにはまだまだ劣りますよ」
「それはそうです。こう見えて十年近い時間を剣とともに過ごしてきたのです。そうやすやすと追い抜かせたりはしませんよ」

アスカさんは得意げに胸を張った。

「十年！　さすがですね！」
「ええ、ありがとうございます」

僕の賞賛に、アスカさんは照れ臭そうに微笑んだ。
と、僕の背中にいきなり誰かがのしかかってきた。

「わっ！？　だ、誰ですか？」
「私も～、魔導を志して～十年くらいなんですよ～？」
「なにをしているんだアルル……」

背中にのしかかったアルルさんが、顔を乗り出して僕の頬に自分の頬をこすり付けるようなしぐさをし始めた。

「あ、アルルさん。くすぐったいですよ」
「私も～褒めてください～」
「何やってるんだ貴様ー！」
「ぎゅ～ッ」

途端に、アスカさんが顔を真っ赤にしながらアルルさんの顔を平手で押し出した。
アルルさんが苦しそうな声を上げながら、僕の背中から離れていった。

「アルル！　前から思っていたが、どうして貴様はそう破廉恥なのだ！　もう少し淑女としての嗜みをだな！？」
「え～。そんなの気にして、おば様みたいに～いかず後家なんて～言われるのはいやよ～」
「あはは……」

また始まった……。
アスカさんとアルルさんは、幼馴染というだけあってすごい気安い関係なんだよね。
いつもは騎士としての規範を意識して行動するアスカさんも、アルルさんと一緒にいると砕けた様子になる。
アルルさんも、アスカさんが一緒にいないと魔導師としての冷静な一面が強く出ている気がするんだよね。
僕はそんな二人の関係がすごく羨ましい。僕と隆司の関係は、小学校の中学年くらいだけど、たまに隆司は僕にすごいよそよそしいときがあるんだよね。
「お前、このタイミングで俺んとこに来るの……？」って信じられないものを見るような、例えるなら宇宙人が目の前に降りてきたときみたいな表情で見られたときは、正直ショックだったよ……。
でも、三月十四日なんて、一通りお返し終えたらあとはどこに行こうが僕の勝手じゃないかなぁ。

「あ～ん、コウタ様～。アスカがいじめる～」
「っと！？　アルルさん！？」

「誰がいじめとるかっ！？」

物思いにふけっていると、アルルさんがいきなり僕の胸に向かって飛び込んできた。

慌てて受け止めるけど、すぐにアスカさんが首根っこをつかんで引きはがしてくれる。

アルルさんはこういうボディスキンシップが好きみたいなんだけど、反応に困るんだよなぁ。一応僕も男の子だし……。

「いや、お前、二度も女に飛びかかられてびっくりする以外のリアクション返さねぇ奴が、反応に困るはねぇよ……」

「うわっ！？　隆司？」

いきなり背後からかけられた声にびっくりして飛びのいて振り返ると、そこには半目になった隆司が立っていた。

今のは本当にびっくりしたぁ……。ほとんど気配もないうえ、人の心を読むんだもん。

「いや、そこそこ付き合い長いからな？　お前の考えくらい、顔見たらわかるわ」

「それにしたって、その言いぐさはないんじゃない？」

隆司の言葉に少しムッとした僕は、反論を試みる。

と、隆司はじっとりとした眼差しをしてアルルさんを指差した。

「じゃあお前、アルルに抱き付かれてどうだったよ？」

「どうって……」

隆司の指を追って、アルルさんの方を見る。

アルルさんは何故かこちらを期待の眼差しで見つめ、アスカさん

はいつも以上に険しい、何かに焦っているような目でこっちを睨んでいた。
そんな二人を目に収めてから、僕は隆司に向き直って、こういった。

「いきなり抱き付かれるのは困るなぁって」
「それで？」
「それでって……それだけだけど」

隆司はため息をついて、眉間のしわを揉み始める。

「じゃあ、なんで困るんだよ？」
「いや、体勢崩れて倒れちゃったら、怪我するかもしれないでしょ？」
「さよか」

隆司は一つ何かをあきらめるように頷いてからサンシターさんの方に歩いて行った。
うーん。隆司って、たまにああいう質問するんだけど何か意味があるのかな？
と、そんな隆司の背中を追うようになんだかがっくり肩を落としたアルルさんが歩いていき、アスカさんが少しだけ嬉しそうな顔をしながらそれに追従していった。

「ほれ見ろ。慎ましやかな淑女こそがコウタ様にはふさわしいのだよ♪」
「うう～……。ちょっと自信～なくなっちゃうわ～……」

何の自信がなくなるんだろう？
とはいえ、そういうことを気軽に聞くのも失礼な気がするから、

僕は何も言わずにその背中を追いかけた。
ちょうどごはんができたらしく、サンシターさんが礼美ちゃんとジョージ君を呼んでいる。
香草を加えて香ばしく焼けたお肉を見て、僕は自然と笑みを浮かべていた。

慎ましやかにご飯を終えた僕たちは、夜陰も深くなってきたので早々に休むことになった。
一応ジョージ君とヨハンさんが獣除けの結界を張ってくれているとのことだけど、絶対ではないらしい。

「ヨハンさん。代わりますよ」
「ああ、ありがとうございます」

火の番をヨハンさんと交代した僕は、こちらに来る時に一緒に持ち込んだ手帳を取り出してページをめくる。
そこには日頃思いついた、ちょっとした言葉やかっこいい名前なんかを書き溜めてあった。いわゆるネタ帳って奴かなぁ。
でも、隆司も礼美ちゃんもこういうことやってないんだよね……。
やってないといわれたとき、正直ショックだった。
みんな結構やってると思ってたんだけどなぁ……。

「はあ……」

っと、ため息ばっかりもついてられない。礼美ちゃんの祈りの盾のための呪文に使えそうな言葉探さないと……。
こちらに来てからは、必殺技に使えそうな言葉しか書いてないから、前のページの方に書いてないかな……。

前の方のページをめくっていると、かさりと背後から足音が聞こえてきた。
振り返ると、毛布を羽織った礼美ちゃんが僕の背後に立っていた。
「礼美ちゃん？　どうしたの？」
「うん。火の番、代わろうかと思って」
礼美ちゃんはそう言って微笑んだ。
やっぱり礼美ちゃんは優しいな。人が嫌がることを進んでやろうとするっていうか。
でも、さすがに徹夜で火の番はさせられないよ。
「ありがとう。でも、大丈夫だよ？　だから、ゆっくり休んでね」
僕も笑って、礼美ちゃんにそういった。
火の番の順番は、初めから男性のみローテーションで組まれている。
礼美ちゃんが無理をする必要はないよ、という意味で言ったんだけど、礼美ちゃんはそうとらなかったみたいで、頬をぷっくりふくらませてこういった。
「じゃあ、光太君がさびしくないように一緒にいる」
「いや、さびしくは……」
僕が反論するより先に、礼美ちゃんは反論を許さない素早さで僕の隣に座った。
そして僕の手元を興味深そうに覗き込んできた。
「これ、今日のお昼に言ってた？」
「あ、うん。礼美ちゃんの祈りの盾に合いそうな言葉が書いてあっ

たかどうか、今ちょっと確認してて」

僕は頷いて、少しページをめくった。

そこには適当極まりない感じで「極光の輝きとともに～」とか「紅蓮を吹き上げ～」と書かれている。

それを見て、礼美ちゃんがなんとなく僕を気遣うような笑顔を浮かべた。

「えっと……こんな感じの詠唱になるのかな……？」

「いや、さすがにこれは！？」

この辺りは、攻撃魔法とか考えてる時の奴だったよ！

慌ててもう少し前のページをめくる。

「えーっと“来よ、鋼の守り。妙なる祈りとともに”……」

「ああ、そうそうこんな感じ」

どう？という気持ちを込めて礼美ちゃんを見つめると、礼美ちゃんはまた僕を気遣うような笑顔を浮かべた。

「も、もうちょっとわかりやすい感じにしてくれると、嬉しい、かなぁ……？」

「えー」

僕は礼美ちゃんの言葉に難しい顔になる。

これよりわかりやすい感じかぁ……。かなり簡単な感じだと思うんだけどなぁ。難しい漢字なんて使ってないし。

「ご、ごめんね？　私も、自分で考えてみるから……」

「そう？」

すまなさそうにいう礼美ちゃんの顔を見ながら、僕は少し残念に思った。

うーん、やっぱり自分で考えた言葉の方がしっくりくるよね。でも少しさびしい気もするなぁ……。

そうして、礼美ちゃんとの間に会話が途切れた。

パチパチと、獣除けの焚き木が爆ぜる音だけがしばらく響き渡った。

「……ふふ」

「？　礼美ちゃん？」

礼美ちゃんが、何かを思い出したように笑い声をあげた。

不思議に思って声をかけると、礼美ちゃんは笑顔のまま首を横に振った。

「ごめんなさい。……なんだか、こんな風に生活してるのが信じられなくて」

「そう？　前の時も、似たような感じだったじゃない」

「そうなんだけど、真子ちゃんがいたから」

そういって、礼美ちゃんが少しだけさびしそうに笑った。

そういえば、前の時は真子ちゃんが強制的に礼美ちゃんを眠らせてたっけ。睡魔（スリーピング）って魔法で。

「魔法の練習とかしている時以外は、ずっと真子ちゃんといたから、向こうにいる時の感覚とそんなに変わらなかったんだけど……」

つぶやいて、礼美ちゃんはじっと焚き火を見つめる。

「こうして真子ちゃんがいないと、いやでもここが異世界で、私たちが暮らしている世界じゃないんだなって、意識しちゃって……」

「礼美ちゃん……」

僕は礼美ちゃんにかける言葉を考えた。

きっと礼美ちゃんにとっては、真子ちゃんと一緒にいるということが日常の象徴だったんだ。

真子ちゃんと一緒にいるから、突然異世界に飛ばされても慌てずに順応できたんだと思う。

でも、今は……真子ちゃんがいない。だから、今いる場所を異世界だと強く意識してしまい、不安になっているんだろう。

「礼美ちゃん」

僕は彼女の名前を呼んで、小さなその頭を胸の中にギュッと抱いた。

腕の中で驚いたように礼美ちゃんが体を堅くする。

「こ、光太君？」

「大丈夫。僕や隆司じゃ、不安だろうけど……。きっと元の世界に戻れるよ」

僕の言葉に、礼美ちゃんが小さく体を震わせて、それから少しずつ力を抜いて行った。

「戻れる……よね？　また、みんな一緒に、向こうで暮らせるよね？」

「うん。きっと真子ちゃんや、フィーネ様が何とかしてくれるよ。だから、そんな顔をしないで」

「……うん」

礼美ちゃんが小さく頷いて、僕の体をぎゅっと抱きしめてくる。
僕もぎゅっと抱きしめて、しばらくしてからお互いに体を離した。
それから顔を見合わせて、ほんの少し照れくさくなって笑った。

「ごめんね、光太君」
「ううん。こっちこそ、ごめんね？」
「ううん、ありがと。……私、もう寝るね」
「うん、御休み」
「うん」

礼美ちゃんはそういうと、ずり落ちた毛布を肩にかけ直して、そのままテントの中へと戻っていった。
と、それに入れ代わりになるように隆司がテントの中から姿を見せた。
なんか壮絶な顔をしてるけど、何だろう？

「隆司？　どうかし――」
「抱きしめといてそのまま解放するとかないわー」

隆司はそんなことを呟きながら、なぜか僕の額にチョップを決めた。ビシリと。

「いたっ！？　な、何、隆司！？」

隆司に問いかけるけど、その答えはなくそのままテントの中へ戻っていった。

「……？」

隆司の奇行に訝しむ僕だけど、きっと寝ぼけてたんだろうと思って、焚き火の番に戻ることにした。
少し勢いの弱まった木の中に、折った枝を放り込むと、ぱちりと音を立ててまた木が爆ぜるのだった。

「や、やはりコウタ様とレミ様は……」
「いやいや～、まだわからないわ～。あれだけやって～、愛のささやきの～一つもないなんて～、恋人としては～おかしいでしょ～？」
「そ、そうか？　だが」
「つけ入る隙は～あるはずだわ～。あきらめず～、がんばりましょ～」
「お、おー……」

No．52：side・kota「夜陰の帳にて」（後書き）

たぶん隆司は起きていたと思われます。こういった行動を平然とするのが光太で、それを受け入れるのが礼美です。これがデフォルトです。おかしすぎるだろうお前ら……。

そしてこちら側のフラグは割とまともに機能中。この差はなんなの一体。

次回は王都へとカメラを戻してみたいと思います。

No．53：side・mako「魔法少女と自動小銃」

「ベイベー！　逃げる魔王軍はただの魔王軍だ！」
「逃げない魔王軍はよく訓練された魔王軍だ！」
「ホント、魔王軍との戦いは地獄だぜ！」
「「フゥハハーハー！」」

意味の解らないセリフを吐きながら、ひたすら腰だめに構えたマシンガンを乱射する騎士ＡＢＣをぼんやり眺めるあたし。
まあ、セリフ仕込んだのはあたしなんだけどさ。
でも……。

「ねえ、あんたたち。なんでそんなに違和感なくそのセリフが言えるわけ？」
「「さあ？」」

あたしの質問に、三人そろって首を傾げるＡＢＣ。
こいつら、血は繋がってないはずなのに、なんでこんなに行動がシンクロするのよ。思考もだいたい同じみたいだし。楽っちゃ楽だけど。

「まあ、いいわ。とりあえず、そのくらいで射撃やめー」
「「ラジャー！」」

あたしは無益な思考を切り上げると、ＡＢＣに射撃停止を命じる。
ＡＢＣは素直にトリガーから指を離すと、各自手に持ったマシンガンを調べ始める。
今日このＡＢＣにマシンガンを撃たせているのは、別に冒頭のセリフを吐かせたかったからじゃない。いくらなんでもそこまで酔狂

じゃないわよ。
　ギルベルトさんが作ってくれた、マシンガン用素材を使って三種類のマシンガンを作ったの。それぞれ特徴が違う素材で、どれが一番マシンガンに使うのに適しているのか検査したかったから、このＡＢＣに協力を仰いだんだけど……。

「マコ様！　銃口がささくれてます！」
「マコ様！　銃身にひびが入ってます！」
「マコ様！　引き金がなんかこう、緩くなってます！」

　ＡＢＣの報告を聞いて、あたしはため息を吐いた。
　かれこれ、一時間くらい休憩をはさみながら射撃した結果なわけだけど、十丁ずつ作ってみんなどこかしら壊れるのよね……。
　あたしはＡが持っていた銃を手に持って、ささくれ立った銃口を見てまたため息を吐いた。
　やっぱり木は素材としてはダメなのかしら……。

「どんなもんだ、嬢ちゃん」
「ギルベルトさん……」

　あたしの後ろから、のっそりとギルベルトさんが現れた。
　あたしは手に持ったマシンガンを、ギルベルトさんに手渡した。

「ダメみたい……。どの素材も、マシンガンの連射速度に耐えきれないわ……」
「うぅむ」

　唸り声を上げたギルベルトさんは、無精ひげを撫でながら銃口を見つめる。

「まあ、木ってのは元々柔軟な素材だからな。変化を受け入れる余裕があるってことは、衝撃そのものに弱いってことだ」

木を元にしてるってことは、木の特徴をそのまま受け継ぐってことかぁ。竹刀とか見てる限り、そんなに柔いイメージないんだけどなぁ。

まああたしもそこんとこは理解してるつもりだったけど……。ダメもとであたしはギルベルトさんに無茶を言ってみる。

「魔法薬で、その辺の欠点を補えるようにできない？」

「できないとは言わんが、かなり時間がかかるだろうなぁ」

あたしの質問に、ギルベルトさんは指折り、何かを数えはじめる。

「そうさな。新薬の実験や素材の採取、それから薬品効果そのものの検証なんかも考えて、ざっと一年は最低でも見てもらわんと」

「い、いちねん……」

さすがにそんなには待てないわねェ……。既存の魔法薬を混ぜ合わせて、って感じでどうにかならないもんかしら……。

「おいおい、無茶を言いなさんな。そんなことして、研究室やら、お嬢やらが吹っ飛んじまったら目も当てられんだろうが」

「吹っ飛んだりするわけ？　魔法薬同士を混ぜ合わせて？」

「やったことないからわからんが、込められた魔法効果によっちゃ吹っ飛ぶかもな」

なんともいい加減なことだ。とはいえ、適当に魔法薬を混ぜる程度では新しい魔法薬を作れるわけじゃないのね……。

新しい鉱山もだめ、魔法薬による素材強化もだめ。マシンガンの

大量配備による騎士団戦力の強化案が早くも暗礁に乗り上げたわね……。

魔族連中が光矢弾（ライトボウ）を見て避けられるほどに早く動かなけりゃ、単発式のハンドガンたくさん作るんだけど……。

あー、くそ！　そもそも銃って発想がダメだったのかしら……。

あたしはガシガシと乱暴に頭を掻いた。何しろ前回書きまくった兵器開発案の大半は、銃器かそれに類するものだ。特に連射式のものは半分ほどになるだろうか。

その半分が丸々無駄になったわけなんだから、頭だって掻きたくなるわよ。はぁ……。

肩を落としてため息を吐くと、慰めるようにギルベルトさんが叩いてくれた。

「まあ、そう気を落としなさんな。なんかの偶然で、木に鉄みたいな性質を持たせられる魔法薬ができるかもしれん。そっち方面の研究は続けてみるから、期待しないで待っててくれ」

「そーする……」

ギルベルトさんの言葉に、力なく頷くあたし。

そんな偶然に期待して行動できるほど、あたしは楽観的にはなれないわよ……。

「マコ様、元気出してください！」

「このマシンガン撃ってるとき、我々何かに目覚めそうになりましたもの！」

「タリホー！」

「ああ、はいはいありがとうー」

騎士ＡＢＣがあたしを慰めようと、声をかけてくれる。

その好意自体はありがたいけど、行動が伴わないわねー……。

あたしは適当に返事をしながら、城の中へと戻っていく。
あー、なんか暗い気分になってきた……。とりあえず、なんか気分転換しよう……。

「お、マコさんじゃねーか」
「うん？　あんたは……」

厨房にでも行って、何か食べるものでも貰おうかと思って歩いていると、通りすがりの魔導師に声をかけられた。
えーっと、顔に見覚えはあるけど……誰だっけ？

「おいおい、隊長が出てく時、一応紹介してくれたじゃねーか！？　フォルカだよ！」
「……ああ、ケモナー小隊の」

魔導師……フォルカが憤慨しながら自己紹介してくれた。
その両手には、たくさんの果物が抱え込まれていた。
あたしはリンゴによく似た青い果物を掴み取る。
ちなみに比喩じゃないわよ？　ホントに青いの。これで、リンゴにそっくりな味なんだから困る。

「これどうしたの？　一個貰っていい？」
「言いながら持ってくなよ！？　厨房でもらってきたんだよ。今日のトレーニングが終わったんで、休憩用にな」

トレーニングと聞いて、あたしはＡＢＣの銃試験の前の光景を思い出す。
確か、一時間くらいかけて１ｋｍ走るんだっけか。
それってトレーニングとして成立するのかしら？

「あたしも半分持つから、ついて行っていい？　あとこれ食べていい？」
「ああ、助かるぜ。でも、ついてきても面白いもんはないぜ？　それはやるよ」
「あんがと」

気分転換にはなるかしらね。
あたしはフォルカから半分くらい果物を受け取って、そのあとについていく。
しばらく歩くと、城の外にまた出た。
ちょうど城の裏手につながっていたらしく、そこそこの広さの雑木林と、その向こうの街道に続く道が見える。
そしてその手前には、死屍累々と言った風情で数十人の男女が倒れていた。
みんなひどく荒い息を吐いているけど、まさか１ｋｍ走っただけでこの様なわけ……？

「オラ、お前ら！　これでも食って元気出せ！」

フォルカが喝を入れながら、倒れているケモナー小隊の連中に果物を配り歩いていく。
あたしも彼に倣って一人ひとりに果物を配っていく。
とりあえず一人一個ずつ渡していくと、それぞれに回復魔法をかけて回っている女神官と目があった。

「これはマコ様！」
「あーっと……」

確かこの人も隆司が出がけに紹介してくれたと思うんだけど……。
パッと名前が出てこないあたしの様子を察してか、女神官が苦笑

して自己紹介してくれた。

「ナージャですわ、マコ様」

「ああ、はいはい。ナージャね」

何度も頷くあたしを見て、ナージャが満足そうに頷いた。

「それにしても、マコ様までこのようなことをなさることはありませんのに」

「いいのいいの。ちょっと気分転換したいとこだったし」

ナージャの言葉に、あたしは首を振って見せる。

さしあたって果物を配り終え、今度はナージャに倣って回復魔法をかけていく。

えーっと、この場合、筋肉痛を回復させる魔法なのかしら。体力回復の魔法なのかしら。

「ありがとうございます、マコ様」

「お礼なんていいってば」

律儀に頭を下げるナージャに、あたしは手を振る。

ちょっとした気まぐれに礼なんか言われたら、なんかむずがゆくて仕方ない。

するとナージャがクスクスと笑い声をあげた。

「マコ様は謙虚ですね」

「そうかなー……」

ナージャの言葉に、あたしは首を傾げる。

この程度で謙虚とか言われたら、正直礼美を指す言葉がなくなる

と思うんだけど。
あの子、何かあってお礼がしたいっていわれたら、何も言わずに笑って立ち去るっていう、どこぞのヒーローのようなことを繰り返すような子だし。

「こっちも終わったぞー」
「ああ、はい。ありがとうフォルカ」

残った果物を手渡すフォルカに頷いて、ナージャも果物を食べ始めた。
ついでにあたしも残った青リンゴをかじる。
しゃくっと瑞々しい音を立ててあたしの口の中に果物特有のさわやかな甘みが広がっていく。
あー、癒される……。

「ああ、おいしい……。ところで、ケモナー小隊は次の防衛戦に出られそう？」

あたしは青リンゴに舌鼓を打ちながら、フォルカとナージャに問いかける。
隆司の紹介では、確かこの二人は騎士ＡＢＣに次ぐ立場だったと思う。なんでも魔導師と神官の中では一番体力があるんだとか。
体力があるやつが立場があるってどうなの、って首を傾げたけど、他の連中のこの体力のなさを見ると納得ね……。

「その事なのですが、次の戦いに出るには少し厳しいかもしれません」

あたしの質問に、ナージャが難しい顔をして答えた。
もう一口しゃりっとリンゴをかじってからあたしは口を開いた。

「なんで？」
「見てもらえりゃわかると思うけど、魔導師や神官連中がこの様だからなぁ」
フォルカが困ったような顔をして、ぐったりと倒れながらもシャクシャク果物を租借する連中を見る。
確かにこの様子を見るに、動きの激しい魔王軍との戦闘に耐えられるようには見えないけど……。
でも前回は、魔王軍を追い返すほどの働きをしたって聞いたけど？
「あんときゃ、隊長と騎士ＡＢＣが徹夜で気分盛り上げてたからなぁ……」
「洗脳分込みでの働きですので、また同じことをやれといわれると……」
「ああ、そうなの……」
洗脳の一言を聞いて、あたしはげんなりと肩を落とした。
あのバカ、異世界で一体何やってんのよ……。
それに順応してるあの騎士ＡＢＣもいったい何者なのよ……。
「とはいえ、あくまで魔導師や神官は出られないだけで、ケモナー小隊の騎士は出られると思います」
「なんで次があるなら、一部を引き受けられるだけになっちまうな」
「それでも正直十分だわ」
一部でも参加できる、と聞いてあたしは安堵の息をつく。
隆司はともかく、あたしは光太や礼美の穴を埋められるだけの能力がない。
団長さんがいるとはいえ、全部の役割を押し付けるわけにもいか

ない。
だがケモナー小隊が一部でも引き受けてくれるというのであれば、その引き受けてもらった分浮いた騎士たちを余分に他の戦力に充てられる。
それだけでもう、ケモナー小隊の存在意義は――。
「それに先週は魔王軍と戦えなくて、狐っ子成分が尽きかけですし。私も奮闘させていただきますよ！」
「おうよ！　猫耳に会うためなら親を質に入れてでも駆けつける覚悟だぜ！？」
「鱗！　鱗少女はまだですか！？　蛇でも可！」
「クマ耳のおじ様！　今花嫁が参ります！」
「犬！」「狐！」「ぬこー！」
ナージャさんの血迷ったような発言を皮切りにフォルカが叫び、ケモナー小隊の連中が亡者のように起き上った。
連鎖反応の様に復活していき、最後には立ち上がって腕を天に突き上げての大合唱へと変わっていく。
「「「「「モフれ！　モフれ！」」」」」
「「アメリア王国ケモノ属性愛好家団体（ケモナー小隊）！　ファイトぉ！」」
「「「「「いっぱぁつ！」」」」」
「やだ……なにこれ……」
思わず口からそんな言葉がこぼれる。
一応、隆司からこの部隊の属性というか選考理由は聞いていたけれど、いざ目にしてみると非常にいわく言い難い……。
なんていうか、その。頼りたくないし、そもそも近づきたくない。
でも、こういうのに頼らないとやってられないのよね……。
高らかに自分が愛する属性とやらについて語り始める目の前の変（ケモナー）

態たちを前に、あたしはがっくりと肩を落とすしかなかった。

Ｎｏ．５３：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「魔法少女と自動小銃」（後書き）

さしあたって真子さん苦労するの巻。どうやらマシンガン量産計画は暗礁に乗り上げたようです……！

一方のケモナー小隊。今回は騎士を中心とした面々になる模様。いっそ、団体ごとに属性特化させるか。神官は犬で魔導師は猫って具合に。騎士？　爬虫類辺りで行きますか？

次回はヨークよりお送りいたしますー。

No.54：side・ryuzi「沿岸の町、ヨーク」

「確か前回は、外に魔王軍はいなかったんだよな？」
「うん」

ヨーク近郊。
わずか四日ほどでそこまで到達した俺たち勇者一行は、そこで馬車を止めヨークの様子をうかがっていた。
遠間に見るヨークの姿は、圧巻というよりほかはない。
それは町の姿によるものではなく、ヨークの生活を支える海湖（ソルト・レイク）だった。
町を支える海産資源生産所の名は伊達ではなく、町よりもはるかに大きい、湖というよりはもう沿岸と言い切った方がいいのではないかと思えるほどの大きさなのだ。ちらほらと大きめの漁船の姿も見える。きっとたくさんの魚が取れるに違いない。
ヨークの町は、そんな海湖（ソルト・レイク）の傍らにぽつりと存在していた。
もちろん貴族が治める町というだけあってかなりの大きさであるが、海湖（ソルト・レイク）に比べてしまうと豆粒か何かに見えてくるから不思議だ。

「ちなみに、ヨークの海湖（ソルト・レイク）の外周を一周しようと思ったら徒歩で一週間以上はかかるとのうわさであります」
「マジか」
「もはや海だねー」

サンシターの解説に俺と礼美が感心したような声を上げる。
徒歩で一週間か……。相当でかいな。一般的な大きさの湖だってそんなに時間はかかったりしねぇだろ。水源はあるし、飯も釣ればよさそうだから一周すること自体は難しくなさそうではあるけど。

「で、そんなヨークだけどよ……」
「明らかに様子が～おかしいというか～」
ジョージとアルルが馬車の窓から顔をのぞかせながら、不安げに言葉を紡ぐ。
そのあとをつなぐように、アスカさんが口を開いた。
「明らかに、その、骨が動いて町を占拠していますね……」
「うん……」
光太が肯定するように頷いた。
そう、俺たちがさっさとヨークに馬車を乗り入れないのは遠間でもはっきりわかる、骨の姿のせいである。
全身の骨がばっちりそろった骨格標本そのものの骨が、剣を片手に街中を闊歩していやがる。
しかも一体や二体ではない。遠目に見ても、十体以上の骨が街中を練り歩いていた。ここから見えるいっぺんでそれだけの数の骨の姿が確認できるのだ。おそらく町全体で見ればもっと多くの骨がいるだろう。
「魔王軍に、あんなシュールな奴らいたのか？」
「いえ、今のところ確認できません」
俺の言葉に、アスカさんが首を横に振る。
うーん、長いこと魔王軍と戦ってるはずのアスカさんが見たことないということは、こういうところを護る専属のガーディアンか何かかね？
骨……スケルトンっていうのは魔導師に呼び出されて、そういう簡単な命令をこなすって相場が決まってるしなぁ。

「で、どうしようか隆司」
「俺に聞くなよ……」

何故か不安そうな顔をした光太が俺に指示を仰ごうとするが、そんな顔されたって困る。
俺たちは元々ヨークの町を取り戻しに来たのだ。当然選択肢なんてあるはずがない。
とはいえ、堂々馬車で乗り入れるのはまずいよなぁ……。

「馬車はここに置いておくか。サンシター、頼めるか？」
「はい、わかったであります」
「一応誰かを守りにおいておきたいところだけど……誰か残る？」

俺の問いかけに、誰も答えようとしない。
まあ、正直このメンツで一人残るなんて自主性を期待した俺が間違ってるんだけどな……。

「じゃあ、僕が」
「ううん、私が」
「お前らはお黙んなさい、主力勇者」

率先して手を上げてくれんのはうれしいけど、お前らがおらんと話にならんからな？

「しゃあない。サンシター、お前男の子だから一人で大丈夫だよな？」
「その理屈を出されてしまうと、反論できないであります……」

がっくりうなだれるサンシターであった。
まあ、ここにある馬車を一々魔王軍が占領しに来るとは思えんけ

どな。正直野生動物の方が問題だし。

サンシターに馬車を預けてヨークへと近づいて行った俺たちを出迎えたのは、予想通り大量のスケルトン。

「お？　なんや己ら！　ワイらが魔王軍、死霊団の一員ってわかってんのやろうな！？」
「いてこますぞ、こら！？」
「おっ！？　やんのかこら！？」

ただしやたら滑舌も口も悪い、そこいらのチンピラのようなスケルトンだったが。
っていうか声帯もなしにしゃべるなお前ら。

「「「「「……」」」」」

あんまりといえば余りの光景に、喋るという選択肢を忘れる俺たち。
ただのガーディアンと思って近づいた結果がこれである。呆然としたくもなる。

「なんやこいつら。ビビって動けんようになっとるやないか」

スケルトンのうち一人が嘲るように言うと、周りのスケルトンたちもそれに同意するようにけたけたと笑い声をあげる。
こえー。笑いながら歯を鳴らす骨軍団こえー。
あんまりの状況に、ジョージなんかは露骨に顔が引きつってるし。
アスカさんもＵＭＡにでも遭遇したように硬直してるし。

「おう、ビビってんなら帰り。ほしたら怪我もせんで？」

スケルトンの一人が前に出て、俺の胸をついて追い返そうとする。おそらくにやにやと笑ってるんだろう。声も余裕を感じさせるものだ。

っていうか表情筋がないからわかりづれぇんだよチクショウ。

とはいえ、この余裕面はむかつくな。

俺は無言で拳を固めると、いい感じの右ストレートを目の前のスケルトンに叩きこむ。

「ほぶっ！？」

悲鳴を上げて、スケルトンが吹き飛んだ。だが、身体の骨はバラバラにならない。どうやってつながってんだ。

「ああっ！？」

「なんやワレ！」

「やんのかこらぁ！？」

突然の出来事に、スケルトンたちが声を上げてこちらを威嚇し始める。ちなみに最初のスケルトンの発音は語尾が上がるアレだった。

俺はやっぱり無言で拳を鳴らしてスケルトンたちへと近づいていく。

「りゅ、隆司！？」

光太が後ろで制止を呼びかけるが、一々止まってたら日が暮れるわ。

「「「「「野郎、ぶっころしてやるぅあ！！」」」」」

スケルトンたちが一致団結して何か叫んでいるが、もはや語る言葉も持たず、俺はスケルトンの群れに突っ込んでいった。

「で？　なんかいうことは？」

「「「「「調子こいてすんませんでしたー！！」」」」」

数分後。スケルトンの群れを撃破した俺たちは、大量のスケルトンの土下座という、大変にレアな光景を目にすることとなった。

最初こそ俺一人でスケルトンの群れを蹴散らしていたが、しばらくしてからヨハンや光太も参戦してくれたから時間はさほどかからなかった。アスカさんは最後まで目の前の光景を受け入れきれずに硬直してたけど。

「いや、ホンマすんませんでした……」

「自分ら調子こいてました……」

「なんでこないなことになったか、自分らもわかりまへんねん……」

「なんでお前ら一々関西弁なんだよ……」

なんつーか、古いヤクザ映画みたいなしゃべり方だよな……。まあ、それはどうでもいいか。

「それで、あなたたちはこのヨークを占拠している魔王軍なんですよね？」

「へえ、そうです」

「じゃあ、外をうろうろしていたのは何でですか？」

「そらもう、この町の警護に決まってますわ」

光太と礼美の質問に答えるスケルトン。まあ、この辺までは予想通りか。

「では、あなた方を率いている人物の名は？」

「死霊魔導師（ネクロマンサー）のガルガンド様です」

「ガルガンド～？」

聞いたことのない名前に首を傾げるアルル。

やべぇ、新しい四天王の名前か？　ヴァルト、ラミレス、リアラ、そしてガルガンドって感じなんだろうか？

「そいつは四天王か？」

「へ？　いやいやいや！　そないなこと！」

「さよう。我は四天王に非ず。ただ其に仕えるものぞ」

俺の質問に答えたのは、スケルトンではなかった。

「っ！」

弾かれたように俺は声がした方に振り返る。

「我が主は、四天王の参謀マルコ様ぞ。このお名前、ゆめゆめ忘れることないよう」

どこかこちらを見下したような調子で響く声の主は、少なくとも人間ではなかった。

胡坐をかいて座布団かゴザのようなものに座ったまま空を飛ぶ、老齢の男性に見える。

だが、その肌は土気色で生気はなく、皺だらけになって乾燥して

おり、節くれだった指は枯れ木の枝か何かの様に見える。
だが、それだけなら体の悪いただのジジイだ。
特筆すべきは……。

「ひっ……！？」

その顔を見た礼美が、小さく悲鳴を上げる。
その男の顔は、ひどくしわがれており、鼻はそぎ落とされたように存在していない。両の眼は虚のようにぽっかりとした穴が開くばかりで目玉が見えない。
まるで死霊そのものだ。そんなものが動いて笑って、こちらに話しかけているのだ。シュールを通り越して、もはや恐怖である。
だが、俺はその姿に覚えがあった。
少し前、王都の喫茶店で聞いた一つの噂。

「お前か。アイティスが移動を始める前に、森に入ろうとする連中を追い掛け回した胡坐ジジイってのは」
「ほう？　いつのことかは存ぜぬが、確かにしばし前森の中に入ろうとする不届き物を追いまわした覚えはあるな」

俺の質問に、胡坐ジジイ……ガルガンドはとぼけた調子で答えた。

「アイティス大移動の前にって……」
「前に話たろう？　四天王のリアラとやらが、森の中に居座ったって。それに前後して、魔王軍関係者っぽいのが、森に入ろうとする人間を追い払ってたんだよ」
「それじゃあ……！」

俺の言葉に、だがガルガンドは不気味に微笑んで何も言おうとしない。肯定も否定もしようとせず、ただこちらを見つめるのみだ。

そんなガルガンドの様子を見て、ヨハンとアスカさんが一歩前に出た。

「目的はともあれ、こちらに害意があるのは間違いないようですな」

「かつて王都の人間に害をなしたというのであれば、この場で……！」

どうやらアスカさんにとって骨はアウトでも、しわがれた外見のジジイの死体はセーフらしい。ラインはどこにあるのだろうか。

「やれやれ。血の気の多いことよ」

前に出た二人の姿を見て、ガルガンドが仕方がないというように首を横に振った。

そして宙を舞い、海湖（ソルト・レイク）の方に向かい始めた。

「お前たち、しばし足止めを頼むぞ？」

「「「「「へぇ、了解です！　ガルガンド様！」」」」」

一糸乱れぬ動作で敬礼したスケルトンどもが、俺たちの行く手を遮るように立ちふさがった。

「こっから先はいかせへんでぇ！？」

「もし通りたかったら、ワイらを倒して」

「一回負けてんのに、なんでお前らそんなに自信満々なんだよ」

「あ、ちょ！？　やめて、そこ耳やから握らんとってウボァ！？」

アイアンクローで握りしめたスケルトンの一人を使って、そのまま複数のスケルトンたちを薙ぎ払っていく。

光太たちも俺の後に続いて、スケルトンたちを吹き飛ばしていく。

「火炎球（ファイヤーボール）！」
「ごめんなさい！　光矢弾（ライトボウ）！」
「強風撃（ブラスト・ウィンド）～！」
「「「「「ぎゃー！？」」」」」

三人の魔法で開いた穴に、光太を先頭に近接戦闘要員が強引に穴をあけていく。

「ううう、こんな骨を相手にすることになるなんて……」
「アスカさん！　無理はしないで！」
「あ、い、いえ！　大丈夫です！」

光太に心配されるアスカさんだが、剣はしっかり振るってスケルトンたちを吹き飛ばしていく。
まあ、元々が肉も鎧もついていないようなただの骨格標本どもだ。剣を握ってはいるものの、ただの威嚇用なのか太刀筋も何もなくただ振りかぶっているだけである。
が。

「こっちやで！　ガルガンド様がゆうてた勇者たちがおるんわ！」
「いてこましたるわ！」
「ワイらに喧嘩撃ったこと、後悔させたるで！」

叫び声が聞こえてきたかと思ったら、路地の陰からまたスケルトンの一団が姿を現す。

「おいおいまたかよ……」
「まだまだいるでぇ！？」
「そない簡単に通れると思うんやないで！？」

「げぇ！？」

うんざりしてつぶやくと、今度は反対の路地から別の一団が姿を現した。

「まさか、この町に来てるスケルトンが、全員俺たちのところに近づいてきてるのか！？」

「そのとーり！」

「ワイらは弱くとも、数はおんねん！　あまぁ、見とったらあかんど！」

「うへぇあ」

さらに別の路地からスケルトンが固まって出てくるのを見て、俺は顔を蒼くする。

さすがにこんな数を一々相手してらんねぇぞ！？

「スケルトンのしかかり！」

「スケルトン掴みかかり！」

「いやー！？」

「貴様らレミ様に触れるな外道がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

礼美にのしかかったり掴みかかったスケルトンを、ヨハンさんが迫撃砲の勢いで粉砕する。

だが、礼美だけではなくアスカさんやアルル、光太にジョージにまでスケルトンがまとわりついている。

「いや～！」

「く、離せ！」

「ちくしょう、重いんだよ！」

「だ、だめだ！？　隆司！」

「文字通り人海戦術かよ！？」

気が付けば周囲一眼スケルトンだらけ。もはやスケルトンの河である。

俺の身体にもスケルトンはまとわりついているが、こっちに来てから手に入れた力のおかげで負担はさほどない。これなら俺一人だけでも追いかけたほうが早いか！？

でも、一人でガルガンド追撃しても返り討ちに合ったんじゃ……。

と、その時。

「リュウ様ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「ん！？　その声は……」

悲鳴のような叫び声を聞き、今まで俺たちが来た道を振り返る。

砂煙を上げながら、こちらに向かって爆走してくるその姿は……。

「サンシター！？」

「捕まるでありますぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」

スケルトンたちを蹴散らし、すごい勢いで迫る馬車。他の連中もその存在に気が付き、何とかスケルトンを引きはがす。

そして、サンシターが馬車を止めるのと同時に怒涛に勢いで乗り込んでいく。

「レミ様！」

「は、はい！」

「アルル、掴まれ！」

「ううう～！」

「ジョージ！　お前は上でスケルトンどもを迎撃だ！」

「うわっ！？」

「僕も行くよ！」

俺はジョージの体を引っ掴むとそのまま天井に飛び乗る。光太も一緒に飛び乗り、全員が馬車に乗り込んだのを確認してサンシターに合図する。

「サンシター！」

「はいであります！」

「いかせると」「邪魔させるかボケがぁ！」「ブベら！？」

御者席に乗り込み、サンシターに掴みかかろうとするスケルトンを蹴り飛ばし、俺はサンシターの隣に腰かける。

「暴風結界（タイフント・ストーム）！！」

ジョージの唱えた魔法が、馬車に群がるケルトンを吹き飛ばし、その隙をついてサンシターが馬車を走らせた！

高速で動く馬車がスケルトンを蹴散らす中、ようやく一心地付いた俺は、サンシターの肩を叩いた。

「助かった、サンシター……。しかし、なんでここまで来たんだ？」

「望遠鏡で、リュウ様たちがピンチなのを見ていてもたってもいられなかったであります」

なんてこと無いようにサンシターは告げる。しかしこの状況に馬車ごと突っ込むのは容易じゃ無かったろうに……。

ホントにこいつは良い奴だよ……。

ほろりとサンシターの心意気に涙する俺に、馬車の上から風を飛ばしてスケルトンをはじいていた光太が声を張り上げた。

「隆司！　海湖（ソルト・レイク）のそばに何かいる！」
「何か！？　何かってなんだよ！」
慌てて俺も海湖（ソルト・レイク）の方を見る。そこには、確かに何かがいた。
「こりゃ、ガルガンドに追いついても一悶着か……？」
激しい戦いの予感に、俺は乾いた唇を舐める。
一筋縄じゃいかねぇな、オイ……！

No.54：side・ryuzi「沿岸の町、ヨーク」（後書き）

そんなわけで、ヨークでの戦いです。また増える魔王軍の人たち。
しかしスケルトンの人海戦術とかいやすぎる……。骨そのものは軽いでしょうけど。
次回、引き続きヨーク編です。

No．55：side・ryuzi「海岸線の機械獣」

馬車が街中を超え、勢いよく砂浜へと飛び出していく。
ヨーク近郊の巨大な海湖（ソルト・レイク）は、近くで見るとまるで南海のような美しさだった。
サンゴのようなものは見当たらないが、太陽の加減かこの世界の水の性質なのか、まるで七色に輝いているようだ。その中に小さな魚が気持ちよさそうに泳いでいるのも見える。きっと、ここで泳いだら気持ちがいいんだろうな。
だが、そんな場所にそぐわないものが二つ。
一つは干からびた老人の様な容貌のガルガンド。相変わらずゴザか座布団かわからない物に胡坐をかいて座りながらこちらをニヤニヤこちらを見つめている。
ガルガンドは町中からも見えた“何か”の隣で浮いていた。

「おや。もう来やったか。相変わらず役に立たぬ」

セリフの内容こそ呆れたようなものだが、口調は特別驚いてもいない。それで当然、と思っているのだろう。
サンシターが馬車を止め、俺はジョージを抱えながら馬車の上から降りる。

「おい、下ろせベブ！」

手から離したジョージがなんか言ってるけど無視だ。
何しろ、そんな細かいことを気にしていられるほど余裕はなさそうだからだ。

「なにあれ……？」

いまだ馬車上の光太が呆然とした声を上げる。
サンシターも馬の手綱を握ったまま硬直しているし、順次降りてきた連中も意味不明な存在に目を丸くしていた。
ガルガンドの隣に鎮座しているそれは、丸々一軒の家ほどもの大きさがあった。
巨大で刺々しい外観を持ち、おそらく外の様子を探るためのカメラアイが二つ付いている。外観は、巨大なサザエの貝柄にも見える。
それだけならただの家だが、その巨体に見合う巨大な足を四本備えている。太さは電柱ほど。関節の数は一つだけのせいで、今はまげてその巨体を地面に横たえている状態だというのに、足の高さはその体をはるかに上回っているのだ。
そして前に当たる部分にカニのような鋏を二本携えている。これの大きさは足ほどではないがかなり巨大だ。人間一人程度なら、おそらく一瞬で挟み斬れるだろうほどの力強さを携えている。

「か、カニかな……？　それとも、虫なのかなぁ……？」

礼美が困ったように笑いながらこちらに聞いてくるが、正直そんな既存の生物じゃないと思う。

「「……シェン○レオン？」」
「ふえ？」

期せずして、俺と光太の声が被った。
あのゲームをやったことない礼美だけが、不思議そうな声を上げるが、今目の前にいるものの姿に一致しそうな生物は、それくらいしかいなかった。
っていうか何の用途でこんなバカデカい物作ってるんだよ！？
意味が解らん！

あれか、これも移動用拠点か！　にしたって、もっと機動性の高いフォルムにすべきだろう！

「こ、コウタ様の世界には、あのような異形の怪物がいるのですか！？」

「あ、いや、ごめん。想像上、っていうか創作上の生き物で……」

つぶやいた名前を聞いたアスカさんが驚きと畏怖の声を上げるのを聞いて、光太が慌てて訂正し始めた。

俺の隣に立ったヨハンさんが、事の真偽を伺うように俺の方を見る。

「リュウジ様？」

「あんな愉快な生き物はいねぇよさすがに」

俺は顔をしかめてあれの存在を否定する。

いたらいたで面白そうではあるがな。

「……では、あの手の生き物に抗する手段はわかりませんか」

ヨハンが残念そうに溜息をついた。

ああ、気になってたのはそっちか。

その事なら心配しなくてもいい。いやってほど戦ってるからな。

「いや、わからなくもないぜ」

「おお！　本当ですか！」

「たぶんだが……」

『あー！！？？』

と、シェン○オレンの中から聞き覚えのある声が響き渡る。

ん？と思って顔を向けると、シェン◯オレンの目と目の間がパカリと開いて中から一人のガキが顔を出した。
っていうかそこがコックピットハッチになるのかよ。極めて乗り込みづらそうだな。

「あんたたち！　前に私のキッコウちゃんを辱めてくれたハンターたち！」
「光太君……？」
「いやいや、機械！　機械のことだよ！？」

ガキのセリフに、礼美が信じられないというような顔になって後ずさりを始める。
光太が慌てて否定にかかるが、とりあえず放置。
存分にラブコメるが良いわ。
俺は一歩前に出て、軽く指を鳴らした。

「テメーは、前にアイティス大移動の原因になったガキだな？　名前は忘れたが」
「四天王のリアラ様だよ！　あんなばっちり名乗ったのに忘れるかー！？」

俺の言葉にガキ……リアラが憤慨したようにこっちを指差して手をぶんぶんと上下運動させ始めた。
まあ、そんなこたぁどうでもいいんだ。

「この領地を占領してんのは、お前を中心とした部隊でいいのか？」
「そだよ！　リアラちゃん率いる死霊団がこの町を占拠しているのだ！」

えへんと偉そうにない胸を張るリアラとやら。

しかし……死霊団？　魔王軍のうちの一部隊でいいと思うんだが、目の前にいるガキとイメージが一致しねぇな。むしろガルガンドの見た目の方が、死霊団にふさわしいと思うんだが……。

「じゃあ、さしあたってお前は死刑でいいな」

「ほえ？」

俺はそういってにやりと笑い、横に移動する。

「光槍撃（スピア・スマッシャー）！」

「風槍撃（エア・スマッシャー）～！」

「ぎゃわー！？」

同時に俺の後ろで魔法を準備していたジョージとアルルが掌から光と風の槍を撃ち放つ。

いきなり攻撃されたリアラはびっくりしたのか、はたまた回避しようとしたのか、後頭部をハッチのふちに打ち付けつつ、転がるようにシェン○オレンの中へと非難した。

二つの魔法の槍は、ハッチのすぐそばに着弾。風と光をまき散らしながら消滅したが、装甲には微々たる傷もなかった。

この光景を見るに、相当防御力が高いのか……。

『うぐぐ～！　いきなり攻撃してくるような卑怯者は、このギャオンちゃんで吹っ飛ばしてやるー！』

「ネーミングセンスねぇなオイ」

コックピットに収まったらしいリアラがマイクに向かって叫び、シェン○オレン改めギャオンちゃんの操作を始める。

自動ドアかなんかだったのか、ハッチが勝手に閉まる。同時に、ギャオンちゃんの両目がビカーン！と怪しく光り、モーターの駆動

音を響かせながら立ち上がる。
立ち上がったギャオンちゃんの全長は家などはるかに上回り、もはや見上げるのも疲れる高さだ。

「リュウジ様！　先ほどの続きを！」
「見たまんまだよ！　あんなふうに立ち上がるから、足を攻撃するしかねぇんだ！　サンシター！」
「はいでありますー！？」

ヨハンにさっきの話の続きをしてやり、サンシターに指示を飛ばす。
サンシターは光太が馬車から降りるのを待ってから、素早く馬車を操って距離を取る。あれの攻撃に巻き込まれようもんなら、馬もろとも馬車が粉砕されちまう。そうなったら、ギルド長さんに何言われるか分かったもんじゃねぇ。

「隆司！」
「ああ！」

光太の呼びかけに、俺は拳を打ち鳴らして答える。
例の石剣だが、馬車に積んだら馬が動かせなくなりそうだから今回は置いてきたのだ。
……って。

「やべぇ！？　俺、あれに対する有効打がねぇぞ！？」
「ええ！？」

何ぼ何でも魔法を弾く装甲に、素手でダメージを与えられるとは思えん……。
鉄の剣でどこまでダメージを与えられるか謎だけど、まだ光太と

アスカさんには武器があるし、ジョージとアルルは魔法による遠距離攻撃がある。
たぶん、礼美とヨハンさんも魔法が使えるし、最悪補助に徹してもらえれば問題はないだろう。
つまりこの中で、装甲に対する有効打が存在せず遠距離攻撃もできない俺だけが……。

「そうそう、リアラ様に手を出させると思うてか？」

などと考えていると、ふわりとガルガンドが移動してきた。
その両手の間には、魔力によって形成されたらしい光の玉が生み出されている。
その光の玉をこちらに向け、その口が呪文を紡ぐ。

「光斬撃（レイ・スラッシュ）」
「っと！？」

慌てて避けると、光の斬撃が砂浜に一直線に斬撃跡を残す。
ぞっとしねぇ威力だな。

「ち！　光太！　こいつはまかせろ！　あいつは任せた！」
「わ、わかった！　みんな！　行こう！」

俺の言葉に光太が頷き、他の連中を率いてギャオンちゃんを破壊しに向かう。

「だから行かせぬと」
「おっと、させねぇよ！？」

再び光の玉を生み出すガルガンドの前に立ちふさがり、左腕を着

物から抜いて盾のように掲げ上げた。

「光斬撃（レイ・スラッシュ）」

「ぐっ！？」

ガルガンドの呪文とともに、左腕に鋭い痛みと衝撃が走る。

肉はたやすき引き裂かれ、骨に刀を叩きつけられたような痛みが脳天に突き刺さる。

だが、魔法の衝撃が晴れると同時に俺の肉体は素早く修復を開始する。

俺は完全修復を待たず、ガルガンドに向かって突っ込む！

「む？」

「だらぁ！」

勢い良く叩きつけた右腕は、たやすく回避されてしまうが元々当たると思っちゃいない。

相手の注意をこちらに引き付けるのが目的だ。

俺の拳を避けたガルガンドは、眉をひそめて俺を見つめる。

その瞳の中に渦巻くのは懐疑の色。

「……これは異なこと。裂いたはずの肉が盛り上がり、再び埋まりおった」

「若いし元気なもんでねー」

ふざけた調子で答えながら、俺は治った左手をヒラヒラ振って見せる。

ねっとりとした感触の血液が気持ち悪いが、拭えるものは持ってないし拭ってる暇もなさそうだ。

何しろ目の前でガルガンドが、複数の光の玉を空中に生み出し始

めたのだ。
　さっきの魔法を見るに、真子が使う天星とやらと同じ、魔法使用のための準備動作なのだろう。

「なれば、次はこうよ」
「させるか！」

　地面を蹴ってガルガンドに蹴りかかる。
　だが再び軽い動作で避けられてしまい。

「棘杭架（クロス・パイル）」
「くっ！？」

　無数の杭を叩きつけられる。
　空中にいるせいで、まともに避けられねぇ……！
　俺は手足を使って飛んでくる杭を弾き飛ばすが、うち一本が脇腹に突き刺さる。

「ぐっ！」

　突き刺さった杭から、焼けるような痛みが全身に響き渡り、同時に杭が伸びて地面に突き刺さった。
　二度目の衝撃に歯を食いしばるが、この体勢はまずい……！

「こうして……」

　続く動作でガルガンドは頭上に炎の塊を生み出した。その直径は一メートルを超えている。
　渦巻く炎は周囲を焼くばかりか、地面に縫い止められた俺のいる場所にまで熱気が届いた。

「残らず灰にしてしまおう。さすれば二度と蘇るまい」
「こなくそぉぉぉぉぉ！！！」

その炎が解放されるより先に、その射線から逃げるために、全身の筋肉を躍動させる。
地面と俺の体に突き刺さった杭を両手で支え、勢いよく体をひねる。
ミシリといやな音を立て、俺の筋肉がブチブチと引きちぎれる音が体の中に響き、魔力でできた杭にヒビが入る。
同時に、炎の塊がひときわ強い光を放ち、ガルガンドがニヤリといやらしい笑みを浮かべた。

「ほうれ」
「ぬぁあああああ！！！」

ガルガンドが頭上の炎の塊を俺に向かって投げつけるのと同時に、俺は魔力の杭をへし折った。

「ぬぅ！？」
「だっしゃー！！」

そのまま勢いよく炎の塊の射線から飛びのく。
地面の砂を焦がし、地面に叩きつけられた炎の塊が爆発した。
炎が波のように地面に広がり、何とか飛びのいた俺のところにまで炎がやってきた。
あ。裾に炎が引火した。

「って、あっちぃ！？」

のんびり眺めてる場合じゃねぇ！？
慌てて俺は炎を消そうと海湖（ソルト・レイク）に飛び込もうとする俺に、ガルガンドの追撃が入る。
「火炎球（ファイヤーボール）！」
「おうあっ！？」

聞こえてきた声に、あわてて左手で防御。
肉が焼け、指が炭に変わる感覚を味わいながら、身体が勢いよく吹き飛び、海湖（ソルト・レイク）に体を叩きこまれる。

（ぎゃぁぁぁぁ！？　傷に！　傷に塩水がぁぁぁぁぁぁ！！？？）

いまだに杭が刺さりっぱなしの脇腹に海水が浸入し、じりじりとした痛みが響く。
慌てて海底に膝をつき、杭を引き抜く。
海水を押し出すように体に開いた穴はふさがり、さらに焦げた左腕も回復する。

（くっそー……）

わかっちゃいたが、魔法使い相手に素手で立ち回るのは厳しいな……。
とはいえ、あれとギャオンちゃんとを一緒に相手するのは厳しいよな。
俺は一つ頷くと、勢いよく海底を蹴り、海水を巻き込みながら外へと飛び出していく。

「おらっしゃー！　まだ終わりじゃないぜー！」
「……」

勢いよく海湖（ソルト・レイク）から飛び出してきた俺を、ガルガンドが無言で見つめる。

さっきから流れていた血は、海水浴のおかげできれいさっぱり流れ落ちたが、今度は海水のせいで全身がべたべただ……。

「くっそー……」

着物の裾やら腕やらから海水を絞り出す。これで、多少はましになったか？

「っし！　さあ、続きだ！」

「……」

軽く拳を構える俺に対し、ガルガンドは無言で光の玉を生み出す。

俺を光の玉を見据えながら、唇を舐めた。

さあて、頼むぜ光太。とっとと狩猟目標の討伐を完遂してくれよな……？

No.55：side・ryuzi「海岸線の機械獣」（後書き）

さあ、バトルですよ！　とはいえ、巨大なメカとファイトという、ファンタジーにあるまじき展開ですが。大丈夫なのコレ。一応ファンタジータグ付けてる身として。

一方の隆司はしわくちゃのおじいさんとのバトルです。ほぼ一方的な立ち回りを展開されていますが。遠距離攻撃がない場合、特殊な防御システムがないと不利ですよね。（？）

次回は光太視点でシェン〇オレン討伐戦です。龍属性もちがいないのが難点ですね！（マテ

No．56：side・kota「迫り来る機械獣」

「みんな！　とりあえず足もとに集中攻撃！」
「ハッ！」
僕が檄を飛ばすのと同時にアスカさんが鋭く返事をし、剣を構える。
僕もスピードを落とさないまま、一気にギャオンちゃんの足元まで駆け抜けていき。
「「ハァッ！！」」
キィン！
アスカさんに合わせてギャオンちゃんの足に刃を叩きつける。
甲高い金属音が響き渡るけれど、ギャオンちゃんの足に傷がついた気配はない。
わかっていたけど、相当堅いな……。
「光太君！」
礼美ちゃんの声に、僕とアスカさんは同時に飛び退く。
すると、ジョージ君とアルルさんの呪文が聞こえてきた。
「召雷撃（ライトニング・ボルト）！」
「弧炎撃（ムーン・フレア）～！」
鋭い稲妻の一撃と、弧を描く炎の斬撃が同時にギャオンちゃんの

足にぶつかる。
　でも、今度の魔法も装甲にぶつかるや否やあっさり砕け散ってしまう。

『あーっはっはっはっ！　むーだーだーよーだ！　このギャオンちゃんはキッコウちゃんと違って、水陸両用移動要塞！　当然その装甲はキッコウちゃんを上回るのだー！』
「よ、要塞!?」

　リアラちゃんの思わぬカミングアウトに、驚きの声を上げる僕。
　まさかの要塞だよ!?　こんなものを僕たちだけでなんとかしないといけないのか……！

『ギャオンちゃんふらーっしゅ！』

　リアラちゃんの叫びと同時に、ギャオンちゃんの前脚?に当たる部分についたハサミがパカリと開き、その中に何らかの光がともる。

「うわ!?　みんな逃げて!」
『ふぁいやー！』

　僕の言葉に散り散りに散っていくみんながいた場所に、魔力と思しき光弾が着弾し、弾ける。
　たぶん、当たったら一発でダウンなんだろう。当たったらどうなるかなんて、試してみたくもない。

『あーっはっはっはっ！　打つ手なしかなー!?』

　リアラちゃんはそう叫びながら、前方に向かって連続で光弾を叩きこんでいく。

誰もそこにはいないけれど、うかつに近づけない。
僕はギャオンちゃんを遠回りに迂回して、ジョージ君のそばに駆け寄った。

「ジョージ君！　何か、ギャオンちゃんの装甲に打ち勝てそうな魔法ってない！？」

僕の質問に、ジョージ君は顔をしかめながら口を開いた。

「……ないことは、ない」
「ホント！？　じゃあ、それを……」

使って、という僕の言葉を遮るように、ジョージ君は首を振った。

「でも、俺には使えねー」
「え！？　な、なんで！？」
「その魔法は～、詠唱だけで～三十分近くかかる～キワモノ魔法なんですよ～」
「さ、三十分！？」

アルルさんの補足説明に思わず仰け反る僕。
まさか、三十分もかかるなんて……。
で、でもジョージ君は呪文の効率化とかが得意なんじゃないのかな？
そんな僕の言葉に、ジョージ君が苦い顔になった。

「その魔法、ババアが作った魔法なんだけど、どうあがいてもその長さにしかできなかったってババアも言ってたんだよ。俺も試しに短くしてみようと研究してみたんだけど……」
「できなかったんだ……」

僕の言葉に、苦い顔をしたままジョージ君は頷いた。

「俺はそんななげー魔法覚えるのもいやだったからな……。使えるとしたら、フィーネの奴か……真子くらいじゃねーか？」

「そっか……」

どんな魔法か知らないけど、真子ちゃんかフィーネ様にしか使えない……。となると、それ以外の方法でギャオンちゃんを倒さないといけないんだけど……。

「アスカさん。鉄が斬れたりとかは……」

「鋼断ちですか……。出来なくはありませんが、あの太さとなりますと……」

アスカさんはギャオンちゃんの足元を見て、厳しい顔で唸る。

斬れなくはないんだ……。でも、さすがに電柱の太さとなると、斬ることはできないか……。

「じゃあ、アルルさん。前にキッコウちゃんを転ばせた隆起岩掌（アースハンド）でギャオンちゃんを転ばせられませんか？」

「う～ん～。無理かもしれません～」

アルルさんは難しそうな顔をして、地面の砂を掬い取った。

「あの魔法は～地面が石の混じる～土でないと～使えないんです～。こういう砂だと～十分な硬さが～確保できませんから～……」

「うーん……」

言われてみれば、あのときは石みたいな素材でできてたように見

えたからなぁ……。もし現地の素材を利用するタイプの魔法だとすれば、こういう砂状じゃ、あの魔法も使えないか……。
でもどうしよう、そうなるとほとんど八方ふさがりになっちゃったな……。

『ふっふーん！　どうだどうだ手も足も出ないだろー！？』
「くそぅ……」

悔しいけれど、ギャオンちゃんに乗るリアラちゃんのいうとおりだ。
せめて隆司があの石剣を持ってきていたら……。

『そんな風に隅っこにいないでおとなしく出てこいー！　そんなんじゃ卑怯者呼ばわりしちゃうぞー！』

そんな風に叫びながら、ひたすらさっきから同じ場所に光弾を撃ち込むリアラちゃん。
……って、なんで同じ場所にばっかり？

「……」
「あ、光太君！？」

ちょっと確認のために僕は少しずつギャオンちゃんに近づいていく。

『ほらほらどしたー！？』

リアラちゃんは相変わらずこっちを挑発するように叫んでいるけど、近づく僕には反応せず、同じ場所にばかり光弾を撃ち込んでいる。

僕はギャオンちゃんの四本の脚のうちの一つ、右後ろ脚に到着する。

「……」

『どうしたのー!?　まさか逃げちゃったとかー?』

相変わらず叫ぶリアラちゃん。

彼女に呼びかけるように、右後ろ脚をに三度叩く。

『どこいっちゃったのー?　まさかほんとに逃げたー?』

反応なし。さらに動く気配もなし。

よく見れば、ギャオンちゃんの足は結構深く砂地の中に埋まり込んでいるように見える。

これは……。

『でも、あのリュウジって奴はまだガルガンドさんと戦ってるし、うーん……』

「みんな!　このギャオンちゃん、砂地が不安定なせいで動けないのかもしれない!」

『にゃにゃ!?』

僕が鋭く叫ぶと、驚いたようなリアラちゃんの声が響き渡る。ああ、こっちの音は聞こえるんだ。

わざわざ黙ったまま移動したのはその可能性もあったからなんだよね。でも、カメラが付いていれば、そんな必要もないと思うんだけど、どうやら前面についてる大きなカメラアイだけみたいだ。

僕の叫びを聞いて、みんなが僕のいる右後ろ脚の方に移動してくる。

『ちょ、どこに行ってるのさ！？』

その姿を捕らえたのか、ギャオンちゃんがハサミをこちらに向けようとするけど、ガツンと自分の体に当たってそれ以上動けなくなってしまう。

どうやら、関節の可動範囲も結構狭いらしい。

『むきー！　乙女の恥ずかしい所に潜り込むなんてー！』

「なんでそんな言い方になるのかな……」

リアラちゃんの物言いに後ろ頭を掻きつつ、僕はジョージ君とアルルさんに向き直る。

「二人とも、この下の砂を丸々刳り抜いたりってできないかな？」

「できなくは～ないですけど～、どうするんですか～？」

「たぶんだけど、このギャオンちゃん、砂地じゃほとんど安定して動けないんだと思う」

そういって僕はギャオンちゃんの足を叩く。

「だから、どんな方法でもいいからバランスを崩せば勝手に倒れるんじゃないかと思って」

「なるほど～。そういうことでしたら～」

アルルさんは僕の説明に納得したように頷いて、両手を砂の地面について呪文を唱え始める。

「洞穴掘（アースブレイカー）～」

呪文を唱えると同時に。ギャオンちゃんの両後ろ足がズボン！と

勢いよく砂の地面の中に埋め込まれた。
同時にギャオンちゃんの巨体が少しずつ斜めに傾いでいく。
『な、なに!?　なんなの!?』
「みんな、逃げるよ!」
僕の言葉に一も二もなく頷いて、みんなギャオンちゃんから離れていく。
ギャオンちゃんはその巨大なハサミを振り回しながら、何とか姿勢を制御しようとするけど、結局うまくいかずに、関節がきしむ音を立てながら倒れて……。
「って、あのままじゃ波止場とか町の方に被害がいっちゃう!?」
「ああ、ホントだ!?」
ギャオンちゃんの全長を忘れてた!　あの体の長さじゃ、どうあがいても町の方に……!
「来よ、鋼の守り……」
と、風に乗ってそんな呪文が聞こえてきた。
これは……僕が礼美ちゃんの教えた……!?
視線をギャオンちゃんの倒れる方に向けると、いつの間にか町を守るようにヨハンさんと礼美ちゃんがギャオンちゃんの影が差す場所に立っていた。
「って、おい!　あぶねーぞ!?」
「いけません、レミ様!」
ジョージ君とアスカさんが悲鳴を上げるけど、礼美ちゃんの身体

から光輝くオーラが立ち上るのを見て、息を呑む。
すごい……！　僕にもわかる。あれは意志力（マナ）だ！

「妙なる祈りとともに！！」

呪文の完成とともに、礼美ちゃんが両手を天に向かって掲げる。
同時に、町を守る巨大な光の盾が出現。
そして倒れ来るギャオンちゃんと光の盾が接触する！

バチィッ！

ギャオンちゃんの身体と光の盾の拮抗は、一瞬。
次の瞬間には、ギャオンちゃんの体は勢いよく海湖（ソルト・レイク）の方に弾き飛ばされた。

『にゃー！？』

ギャオンちゃんの体はそのまま巨大な水の柱を上げ、海湖（ソルト・レイク）の中に沈んでいった。
光の盾はしばらく空中に浮遊していたけれど、ギャオンちゃんが海湖（ソルト・レイク）の中に沈んでいくのを確認したように、消えていく。
同時に、礼美ちゃんの体がカクンと崩れ落ちた。
隣に立っていたヨハンさんが、倒れかけた礼美ちゃんの体を受け止めてくれた。

「礼美ちゃん！」

僕は慌てて礼美ちゃんに駆け寄った。
ヨハンさんに抱えられている礼美ちゃんの顔には、おびただしい量の汗が浮かび、呼吸も荒い。

さっきの盾を出すのに、相当の無理を行ったのは想像に難くない。
僕の後ろから追いついてきたジョージ君が、顔を真っ赤にして声を荒げた。

「バッカ！　なんであんな無茶するんだよ！」
「町を……守らなきゃ……いけなかったから……」

息も絶え絶えに、礼美ちゃんが言葉を口にする。
意識を手放しそうになりながらも、何とかすまなさそうに顔に笑顔を浮かべている。
まるで、心配しないでくれというように。

「……礼美ちゃん、ありがとう。もう、大丈夫だから、少し休んでね？」

僕はそういって、礼美ちゃんの額に張り付いた髪を少し掻き揚げた。
礼美ちゃんは少しくすぐったそうに体を動かしたけど、小さく頷くとすぐに寝息を立て始めた。

「今回は、礼美ちゃんがいなかったらまずかったね……」
「まったくよ」
「！？」

すぐそばから聞こえてきた声に、弾けたように振り返るとそこに、いつの間にかガルガンドが浮いていた。
隣には、いつ回収したのかリアラちゃんが輝きながらふわふわ浮いている。
ギャオンちゃんが倒れる際の衝撃で、どこかを打ったのか、目をまわしながら気絶している。

「きゅ～……」
「その娘がいなければ、この町が使えぬほどの打撃を与えられたというに、惜しいことよ……」
「なんだと……!?」
ガルガンドの言葉に、アスカさんが激昂したように声を荒げる。
でも、そんなアスカさんの様子を意に介することもなく、ガルガンドは小さく肩をすくめた。
「されど、やむなきことよ。今ひとたび、策を練り直すとしよう……――」
その言葉を最後に、ガルガンドは僕たちの目の前から姿を消した。
詠唱破棄でのテレポート……。やっぱり、ガルガンドも高位の魔族には違いないみたいだな……。
「おーい……」
「ああ、りゅう、じっ!?」
疲れたような親友の声に振り返ると、そこには……。
「またなんかエライゴツイ盾が出てたな……。あれ、礼美か……?」
全身真っ赤に血に染まり、顔を真っ青に染め上げた隆司の姿があった。
着ている着物はもうボロ布になりかかっており、どれだけ激しい攻撃を受けたか想像もできない。
慌てて礼美ちゃんのことをヨハンさんに任せて隆司に駆け寄った。

「ちょっと隆司、大丈夫!?」
「あー、だめかもわからん……。血が足りなくてフラフラする……」
言葉のとおり、少し体が前後してる……。立ってるのがやっとのようだ。
「な、何があったのさ……?」
「さあ……? あのジジイ、なんか人の急所を目の敵みたいに攻撃してきやがったから……」
なんでも、普通なら数十回は死ぬような目にあわされたんだとか。よ、よく無事だったね……?
「フ。嫁がいる限り俺は不死……アーーーっ!!??」
「ど、どうしたの!?」
「今日の戦い、また嫁がいねぇ!?」
「……あ、言われてみれば」
もう向こうに情報が筒抜けなのは確定してたから、てっきりこっちに誰かがいるものだと思ったんだけど、結局死霊団の人たちしかいなかった。
情報の行き来自体が完璧じゃないのかな? それとも、別の要因か……。
「ちくしょう、戦い損か!? また嫁に会えない時間が続くのか!?」
「え、えーっと……ドンマイ?」
「ちぃぃぃくしょぉぉぉぉぉぉ!!!」
隆司はそう叫ぶと同時に、電池が切れたようにバッタリ倒れた。

……たぶん、体力が限界になったか、ホントに血が足りなくなったかのどっちかなんだろうなぁ……。

「アスカさん、とりあえず、今日の宿を確保しにいこっか？」

「……そ、そうですね」

隆司を曰く言い難い顔で見つめていたアスカさんを誘って、僕は町の中へと進んでいく。

適当な宿が見つかるといいんだけどなぁ……。

No．56：side・kota「迫り来る機械獣」（後書き）

そんなわけで、ギャオンちゃん戦終了！　不整地においての運用は難があるようです。水陸両用なのにね……。

礼美ちゃんは例の呪文をそのまま採用した模様。まあ、急いでたってのもあるんでしょうが。隆司は、まあ、いつも通りでしたね。

次は、真子ちゃん危機一髪ですよー。

No．57：side・mako「狐耳の呪術師」

狼煙が上がった翌日に、いつもの場所に向かったあたしたち。
それを出迎えたのはいつもの魔王軍に、一人欠けたソフィア親衛隊と、ソフィア本人。そしてヴァルト将軍の姿だった。
ソフィアはどことなく困ったように眉根を下げながら、あたしたちの姿をきょろきょろと見まわした。
そしてあたしの方を見ると、控えめに口を開いた。

「……なあ、魔導師。一つ聞きたいのだが……」
「なによ？」

あたしが短く答えると、ソフィアは少し逡巡する。
そして意を決したようにその名を口にした。

「……タツノミヤリュウジはどこにいるんだ？」
「隆司なら、まだヨークの奪還から帰ってないけど？」

ソフィアの口から隆司の名が出てきたことに若干驚きつつ、素直に答えてやると、ソフィアの顔がますます弱ったような表情になった。しょぼーんって感じ。ＡＡだとこう？↓（´・ω・、）

「いや、そんな顔してこっち見つめられても」
「また会えなかった……」

がっくり肩を落として小さくつぶやいた言葉は、本当にささやかなものだった。たぶん、あたしに聞かせるつもりはなかったんだろうけど……。
また？

「あら？　てっきり、こっちの動きはお見通しだと思ったんだけど？」

あたしが挑発するようにそういうと、ソフィアはムッとしたような顔で口を開きかけ。

「閣下」

すんでのところでぽんとヴァルトに肩を叩かれて、ハッとなってあわてて口を噤んだ。

チッ、惜しい。

「……答える義理はない」

「そ。じゃあいいわ」

こちらを警戒するような硬い表情を作るソフィアに、あたしは肩をすくめた。

ヴァルトがいなきゃ、口を滑らせてくれてたかもしれないけれど、わかることもある。

どうやら、向こうもこちらの情報を完ぺきにつかんでいるわけではないようだ。

情報伝達にミスがあるのか、あるいは情報収集の方法そのものに問題があるのか……。

どちらにせよ、こちらにとってはうれしい話だ。少しでも情報の流出は押さえたい所なんだから。

まあ、ソフィアが警戒しちゃった以上、今は口を開かせられないでしょうけど。

あたしは仕切り直すように、ソフィアの顔を見つめた。

「で？　今回はどうすんの？　みんなで殴りあい？　それとも……」
「決闘です……！」

そういって一歩前に出てきたのは、毛並みのよろしい狐っ娘だった。
緊張か興奮か、その表情は妙に堅いが、全身からは迸るような熱意が伝わってきた。尻尾もこちらを警戒するようにブワッと広がっている。

「ヤーン、狐ちゃん！　尻尾モフモフ――」
「A」
「ハッ！　Aラリアット！」
「おごぉっ！？」

今回はついてきたナージャが狐っ娘の姿を見て興奮しかけるのを聞いて、あたしは指パッチンと同時にAを呼ぶ。
後ろの方で、Aの叫びとカエルがつぶれるような声が聞こえてきた。無事、鎮圧できたようだ。

「……で、決闘だっけ？」
「何事もなかったかのように進めようとしているだと……！？」

ガオウがなんか言ってるけどスルー。
あたしの言葉に狐っ娘は強く頷いた。

「はい……！　今回は魔王軍を代表して、私が戦います……！」
「……っていってるけど、いいの？」

力み過ぎて顔が赤くなってきてる狐っ娘の後ろに控えるソフィアとヴァルトに確認を取る。

ソフィアは仕方ないという風に、そしてヴァルトは若干苦笑しながら、それぞれ頷いた。

「まあ、今回は本人たっての希望だ。叶えるのはやぶさかではない」
「できれば、受けてやってもらいたい」
「はあ」

なんか含みがある言い方ね？
と、ガオウが一歩前に出て、大きく息を吸い込んだ。
バカ声の気配にあたしが耳をふさぐのと同時に、ガオウはやっぱりでかい声を張り上げた。

「マナァァァァ！　がんばれぇぇぇぇぇぇ！！」

大して離れてないってのに、なんでそんなデカい声出すのよ。
耳を塞いでいても頭に響くバカ声に顔をしかめるあたし。
目の前に立つ狐っ娘のマナも、ビクン！と体を震わせて……。

「う、ううううん！！！　ががが、ががんがんばるよ！？」
「よしっ！」

顔を真っ赤にしながら振り返ってブンブンとガオウに頷いてみせた。
そんなマナの様子にガオウは満足したように頷き返し。
ソフィアは片手で顔を覆ってため息をつき、ヴァルトは苦笑の度合いを深めた。
……これは、まさか？

「スゥーハァー……。……で、では！　そちらの代表者を――」
「ところで、ガオウ君との仲は進展したのかしら？」

「決めぇあばばばばばばば！！？？」

深呼吸して口を開いたマナを遮るように、そう問いかけてやると目に見えて狼狽し始めた。

やっぱ、まだ前回の会戦の結果が尾を引いてるのねぇ。

これは利用しない手はないわね。

「な、仲！？　し、進展！？」

「ええ」

あたしはここぞとばかりにとっておきの笑顔を浮かべながら、マナの言葉を肯定するように頷いた。

顔を赤くして手を振り回すマナの姿はいっそ滑稽なほどだ。

こうして動揺を誘っておけば、いざというときに戦いを有利に進めることができよう。

そう！　これは立派な戦術であり、必勝の策なのよ！

決して光太と礼美をくっつける計画が思うように運ばなくて、ストレスをここで発散しようと考えているとかそういう余計な心づもりはないのよ！　……ないのよ？

誰にともなく言い訳を完了したあたしは、ここぞとばかりに畳み掛けた。

「同じ親衛隊で、寝食を共にする仲ですもの。きっとすぐに仲良くなれるんでしょうね？」

「ひ、ひえ！？　け、けしてそのようなことは！？」

あたしの言葉を否定するように手と顔を横に振り回すマナ。

この子……奥手すぎて自分から一歩踏み出せないタイプか。

今の関係を壊したくない……そう考えて踏み止まっちゃうのね。

いいから一歩踏んづけちゃえばいいのに……。

「マナ！？　どうした！？」
「にゃ、にゃんでもにゃいよ！？」

こっちの声が聞こえているのかいないのか、心配そうな顔をしたガオウがまたでかい声を張り上げる。

「だが……！」
「にゃんでもにゃい！　にゃんでもにゃいからぁ！」

心配そうにこちらに駆け寄ろうとしているが、マナはそれを拒否してひたすら何でもないを繰り返す。
どうでもいいけど、発音がミミル的よそれ。
ガオウは納得はいっていないようではあるが、マナの必死な様子を見て渋々という様子でおとなしく下がった。
あの顔は……下心なしに、真剣に目の前の仲間を心配している顔ね。

「マナとか言ったかしら？」
「ひゃ、ひゃい！？」

ビクンと体を跳ねて返事をしたマナに、ガオウの方を指差しながらあたしは忠告してやった。

「あたしが言うことじゃないんだけどさ。アレに気づいてもらうっていうのは、五十年かかっても無理よ？」
「ひゃう……」

あたしの言葉に、マナは意気消沈したようにがっくりと肩を落とした。

今目の前で、これほどわかりやすく取り乱しているというのに、全く気が付いていない様子のガオウ。鈍感具合では光太といい勝負かしら。

だって、これほど露骨に顔を赤くしたり、声をかけたら緊張したりしてんのに気付かないどころか、勘ぐったりしないのはどうなのよ？

「勘弁してやってほしい、魔導師よ」

「あん？」

あたしの表情から何を読み取ったのか、なぜかヴァルトが苦笑しながら声を上げた。

そしてガオウの隣に立つと、彼の肩をポンとたたいた。

「この者は、今まで剣一筋に生きてきた。ゆえに、それ以外の道に迷うことはないのだ」

「？　左様！　我が剣はひとえにソフィア様のためにあり！　それ以外など迷う必要もない！」

ヴァルトの言葉をどう解釈したのか、一瞬疑問符を顔に浮かべたものの、すぐに大きく胸を張って宣言するガオウ。

その宣言を聞いて、マナがひときわ大きく肩を落としたのは言うまでもない。

つまりアレか。こいつはお人好しゆえの鈍感じゃなくて剣術バカゆえの鈍感か。

しかも剣を捧げる先は決まっているときてる。

その剣を捧げられたソフィアは、ガオウの宣言を聞いて、またため息を吐いた。

「ガオウよ……。たまにで構わんから、それ以外の道にも目を向け

よ……」
「ハッ！　鋭意努力いたします！」
敬愛する閣下のお言葉に、そう返事をするガオウ。
でもそれは何もしないと同義語になりゃしない？
「ねえ、マナ。もういっそ既成事実なりなんなり刻んじゃえば？」
「き、きせっ！？」
あたしの言葉に、マナの顔がボフンと音を立ててひときわ赤くなる。
「ほら。あの男、誠実さはありそうだから、子供でもできたら絶対責任取るって……」
「そ、そ、そ……！」
追い打ちをかけるようにささやいてあげた言葉を聞いて、マナは目をぐるぐると回しながら後退を始め……。
クワッと怒り顔になって、あたしに向かって一枚の細長い紙を向けた。
「そ、そんな破廉恥なことは致しません！　わ、わ、わた、私は！」
「そんなこと言ってたら、還暦迎えてもお友達止まりよ？」
「う、うるさいです！　ハァッ！」
気合の掛け声とともに、手に持っていた細長い紙があたしに向かって投げつけられる。
紙の表面には魔術言語（カオシックルーン）と思しき言語が書かれている。
となると、この紙の目的は……。
あたしが予想をつけるのと同時に、マナが片手で印を組んだ。

それを見て、あたしはとっさに後ろに向かって飛んだ。

「破ッ！」

さらに掛け声と同時に、紙の中にわずかに込められていた魔力が膨張し、弾ける。

パァンッ！

たった今、あたしの頭があったあたりで破裂音と衝撃をまき散らして消える紙。

その様を見て、ガオウが誇るように、高らかに声を張り上げた。

「見たか魔導師よ！　これぞ、マナが得意とする魔導符術（エンチャントマジック）！　貴様も詠唱破棄による魔導を操るようだが、マナの魔導はそれを上回るぞ！」

「は、はうぅぅぅ……！」

ガオウの説明を聞き、マナの身体から腑抜けたように力が抜ける。

顔はだらしなく笑み崩れ、耳はへにゃりと折れ曲がり、しっぽはうれしさのあまり分身でもしてるんじゃないかというくらいの勢いで右に左に振り回された。

「はぅーん！　狐っ娘、おもちかえ――」

「B」

「ハッ！　Bソバット！」

「ゴボォッ！？」

また暴走しかけるナージャさんを、Bによって鎮圧。

草原に人が倒れる音が響くのを聞いてから、あたしは行動を開始

する。

「いくら愛しの人に褒められたからって、目の前の敵から気を抜くのは感心しないわね？」

「ハッ！？」

あたしの言葉に目を覚ましたように慌てて体に力を入れ直すマナだが、もう射程距離だ。

「強風撃（ブラスト・ウィンド）！」

「きゃっ！？」

強風に煽られ、体勢が崩れる。

あたしはマナの足元に向かって蹴りを繰り出した。

「きゃ、きゃぁ！？」

マナはそれを慌てた様子で回避する。ただ、どこかその仕草はどんくさい。

魔族の身体能力なら、跳んで避けるなり、さらに踏み込んでくるなりすると思ったのだが、あたしの蹴りを見るなり大急ぎで反転してダッシュで距離を取った。

「……？」

そんなマナの様子にあたしは首を傾げる。

はて。魔族って、運動神経がいいんじゃないのかしら？

そんなあたしの疑問をよそに、マナは袖の中から大量の紙……符を取り出して、空中にばら撒いた。

「いでよ！」

マナの呼びかけと同時に、空中に浮いた符はそれぞれが大量の光の矢へと変わる。

中空に支えもなく出現した矢の数は、もはや壁と呼んでも差し支えないほどの量だ。

うわ。一人で呼び出す限界量をはるかに超えてるわよ？

マナは勢い良く腕を振りかぶり、あたしの方を指差し矢に指示を出す。

「いけっ！」

マナの言葉を受け、大量の矢が一斉にあたしに向かって飛んでくる。

スピードが速い。走って避けるのは無理ね。

間に潜り込もうにも、数が多すぎるせいで、避けきれる自信がない。

勝利を確信したマナが力強い笑みを浮かべる。

が、甘い。

「転移術式（テレポート）」

「！？」

あたしの唱えた呪文に、マナの顔が驚愕の色に染まる。

詠唱破棄で唱えた魔法は、見事にあたしの姿を矢の軌道から飛ばしてくれた。

「く！？　どこに……！？」

マナはそのまま周囲を索敵し始める。

転移術式（テレポート）で飛んだあたしの姿を探してるんでしょうけど……。
だから甘いのよ。

「集え、天星（サテライト・スターズ）」

「！？」

……さっきまでいた場所から聞こえてきたあたしの声に、マナは弾かれたようにこっちに顔を向けた。

そう。先ほどの転移術式（テレポート）、単に大量の矢から避けるために使ったもので、どこかに飛ぶために使ったわけじゃない。立っていた場所から立っていた場所に転移しただけなのだ。

構成を編む労力を考えれば無駄としか言えない使い方だが、その構成を編む労力を無視できるあたしには、問題なく行使できる使用法。

「さて？　始めましょうか、マナ」

「……ッ！」

周囲を回る八つの天星のうち一つを手に取りながら微笑むあたしを見て、悔しそうに歯を喰いしばるマナ。

まだまだ戦いは始まったばかり……。退屈はさせないわよ？

Ｎｏ．５７：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「狐耳の呪術師」（後書き）

久しぶりの真子ちゃん無双の予感！　果たしてマナちゃんは、前回の汚名を挽回できるのか！？（挽回してどうする

そしてまた隆司に会えずに欲求不満な姫様！　次回まで我慢できるのか！？

後半へ続くー！

No．58：side・mako「呪術師は叫ぶ」

「ハッ！」

鋭い呼気とともに、マナが手に持っていた符をあたしに向かって投げつけてくる。

爆発か、あるいは光矢弾（ライトアロー）か。

どちらにせよ、その発動を待つ気はないわ。

「裂け天星（スラッシュ・スター）」

あたしの呪文に呼応して、天星が淡く輝く。

それを確認して、あたしは空を舞う符に向かって天星を投擲し。

「斬り裂けっ！」

手掌で素早く天星をコントロールし、マナの符をすべて斬り裂いた。

「なっ！？」

そのスピードに、マナが驚きの声を上げる。

フフン。対ソフィア用に組み上げた魔法の一つ、裂け天星（スラッシュ・スター）。

実際に天星が斬属性効果を得るんじゃなくて、高速で対象を擦る際の摩擦エネルギーで対象を破壊するための魔法よ。

この程度の加速でソフィアに対抗できるとは思わないけど……空中に浮いてる紙を引き裂く程度はわけないわ。

あたしは人差し指で天を指し、その先に天星を呼び寄せる。

そして魔力を込め、新たな指示を天星に下した。

「討て天星ッ！（ストライク・スター）」

腕を振りおろし、天星をマナに対して叩きつけるように飛ばす。
マナは素早く懐に手を突っ込んで、一枚の符を取り出す。
それを自分の前面に張り付けるように投げ、両手で印を組んだ。

「壁ッ！」

マナの鋭い叫びと同時に透明な壁が出現し、それに天星がぶつかって火花を散らす。
それを見て、あたしは両手を再度振り上げる。
そして両手を思いっきり天星に向かって叩きつけるように振り下ろし、同時に天星に魔力を叩きこんだ。

「シッ！」
「くっ！？」

衝突による火花が一際強くなる。
マナは脂汗を流してこらえ、一瞬の空白を置いて。

「喝ッ！」

喝破によって壁を破壊。その衝撃で、天星も砕け散った。

「まずは一つ……！」

マナは確信を得たようにつぶやいて、再び両手いっぱいに符を持った。
対するあたしは、中空に浮く七つの天星を操る。

ふむ。ソフィアから聞いたのかしら？　あたしの天星は破壊できるって。

確かに天星が壊されるのは痛いけれど……。一個の破壊にこれだけ時間がかかってるんじゃね。

そう考えながら、あたしはゆっくり次に使う魔法を組み上げる。

が、それよりマナの行動の方が早かった。

素早く地面に向かって符をばら撒くと、両手で印を組んだ。

「破ッ！」

マナの詠唱と同時に破裂する符。上がる土煙は、マナの姿を隠した。

土煙で自分の姿を隠して、何かする気かしら？

天星の一つを全面まで持ってきて、新たな魔法を唱える。

「強風撃（ブラスト・ウィンド）！」

天星から放たれた強風は、普段の数倍の威力を持って目の前の土煙を吹き飛ばす。

が、もうマナの姿はどこかへと消えていた。

「ちっ……」

【どうです？　見えないでしょう――】

舌打ちと同時に聞こえてくるマナの声は、どこかくぐもって聞こえてきた。

【まずはあなたの視覚を奪います。そして――】

マナの言葉と同時に、宙に浮いていた天星の一つがビシリと真っ

二つに割れた。
あたしは素早くその天星が割れたほうに振り向き、詠唱完全破棄で光矢弾を放つ。
が、感じていた気配はすでになく、また別の天星が割れる。
「ッ！」
【少しずつ、あなたの手足を奪います――】
「マナは呪術師（エンチャンター）……。呪うがごとき、兵法を得意とする、魔王軍屈指の魔導師よ」
「姿を見失った貴様に勝機はないぞ！」
二つの天星を砕かれたのを見てか、勝ち誇ったようにソフィア外ガオウ野が声を張り上げる。
が、やっぱり甘い。
残った五つの天星が、あたしを護るように周囲を回り始める。
「フン。人の手足を砕くってんなら、一息にやんなさいよ。例えば――」
そして少しずつ輝き始める天星を見てから、あたしは思い切り足を振り上げ。
「こんな風にね！　爆心地（アース・ウェイブ）撃ッ！！」
地面にめり込むほどに叩きつける。
同時に、あたしの周囲一帯が衝撃によって揺れ、めくりあがり、土や潜り込んでいた岩石を勢いよく上空へと巻き上げた。
「ぬぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？」
「な、何だとぉっ！？」

土煙の向こうで、ソフィア（外野）とガオウの悲鳴が聞こえる。
たぶん、騎士団を巻き込む恐れがあるような範囲攻撃を行ってこないと踏んでいたのだろう。
だがお生憎様。プロの騎士たちに遠慮するような仏心を、あたしは持ち合わせちゃいないのよ。
一応、巻き込むかもしれないとこの戦いが始まる前に言い含めてある。それを聞かずに怪我をするようなら、それはその人の責任よ。
そしてあたしは素早く上空に視線を向け、こちらに向かって落ちてくる狐っ娘の姿を捕らえる。

「お疲れ。モグラの真似事は楽しかったかしら？」
「くぅっ！」

マナは歯を食いしばり、浮遊感覚に耐えながらも健気に攻撃を続けようと符を構えた。
先ほど姿が見えなくなったのはなんてことはない。今あたしがやって見せた奴のずっと規模の小さいことをやって地面に穴をあけ、そこに潜り込んだだけだ。説明するのも馬鹿馬鹿しい。
あとは洞穴堀（アースブレイカー）なりなんなりで通り道を作れば、あたしを攻撃し放題。
まあ、こうやって地面ごと吹き飛ばせば、関係ないわけだけどね。

「雷ッ！」

マナの掌の符が一瞬輝き、あたしに向かって雷閃が伸びる。
が、それは空中に舞うあたしの天星が弾き返す。
あたしはその光景をのんびり眺めながら、手に持った天星をマナに投げつける。
避ける手段のないマナは、まっすぐ飛ぶ天星になすすべがないよ

うに見えた。

「爆ッ！」

けど、天星が当たる寸前、マナの体側面が爆ぜる。

爆発の勢いに押されて動いたマナの身体すれすれに天星が飛んでいく。

まさか符を爆発して、天星の軌道から逃れるとはね。天星は、中に残っていた魔力が今の飛行で尽きて、そのまま砕け散った。

そしてマナは地面に危なげなく着地。若干身体が焦げていたり、着物が土だらけだが闘志は失っていないようだ。

地面は、たった今あたしが爆砕した影響でひどくでこぼこしている。動いたり、走り回ったりするのにはひどく向かないだろう。

周囲に目をやれば、爆砕に巻き込まれたらしい魔王軍一同がひどく咳き込んだり、身体を抑えたりしている。一方のアメリア王国騎士団の面々は、何とか効果範囲に逃げているのかだいぶ遠くでこちらを見つめていた。

まあ、一応予告の効果はあったってことかしら？

そんな風に周囲を見回すあたしを見て、何か癪が触ったのかマナの目つきが鋭くなった。

「……そんな風によそ見をして……！　私なんか、余裕で倒せるってことですか……！」

「ん？」

そんなマナの物言いに、思わず首を傾げるあたし。

いや、よそ見がイコール余裕ってのはちょっとおかしくない？

戦場における周囲の把握は重要だと思うんだけど。

だが、そんなあたしの様子にかまわず、マナは尽きることがないのかまた大量の符を両手に構えた。

「あの男と言い、あなたといい……！　何故真面目に戦おうとしないのですか……！」
「隆司はともかく、あたしはいつももマジメよ？」
「ならばなぜ眼前の敵から目をそらすのです……！」
憤怒、といった様子で激昂するマナ。
そんな彼女の姿を見て、思わず頬を掻くあたし。
なるほど。この子、生真面目すぎて損をするタイプか。
あたしは残った四つの天星を手掌で操り、前面に円を描くように展開する。
「信じる信じないはあんたの勝手だけどさ。そんな風に肩肘張っちゃ、いろいろ損よ？」
「大きなお世話です……！　あなたたちみたいに、不真面目よりはよほどいい……！」
じり……とこちらに向かって足を動かすマナ。
対し、微動だにしないあたし。
「私だって、ソフィア様親衛隊の一人……！　この戦いに、かける想いはあります……！　それを、侮辱させません……！」
「不真面目な態度を侮蔑ととるのは勝手だけど、そんなに余裕がないんじゃ、大事なものを見落とすわよ」
そこであたしはちらりと視線を横に動かす。
こちらをじっと見つめ、今にも飛び出しそうに身構えている、ガオウに向けて。
「――でなきゃ、恋も戦いも、勝てないわよ？」

「なっ……！？」

あたしの視線、そして言葉を聞き、まともに狼狽するマナ。
その隙に、素早く天星を地面に埋め込む。

「土隆撃（アース・グレイブ）！」

そして天星から放たれる、数倍に増幅された大地の杭。
鋭いアギトとなってマナに向かって突き進んでいった。
地面が隆起する音を聞き、ハッと気が付いたマナは顔を真っ赤に染め上げた。

「またそうやって人の隙を突く……！」

素早く左に避け、こちらに向かって駆け出す。
対してあたしはその反対側に体を躍らせる。
杭の向こうから符が投げつけられ、掛け声とともに光矢の雨と変わる。

「その態度が侮蔑と何故気が付きません！」
「そりゃ、侮蔑の意志がないからよ」

言ってあたしは天星を中心に盾を生み出す。天星の盾は、降り注ぐ屋の雨からあたしを護り、そして砕け散る。

「嘘をおっしゃい！　そうして私をからかって……！　遊んでいるんでしょう！」

今度は杭を打ち抜く鋭い風の牙があたしを襲う。
それは狙い違わず、天星を一つ打ち砕いた。

「遊んでいるのは否定しないけど、からかってはいないわ」

お返しとばかりに、あたしは天星を投げ返す。

開いた穴を通って向こうに飛んだ天星は、特に手応えもなく突き抜けた。

そしてあたしは残った天星を手に取る。

「遊んでいるのであれば、結局は同じでしょう……！」

天星には、背中を向けたマナが符で魔法陣を描き、こちらに向かって莫大な魔力を叩きつけようとかまえている姿が映っている。

「そういう態度……！」

魔力の高まりが最高潮になる寸前、マナは勢いよく両手を振り上げる。

「大っ嫌いですっ！！！！」

その叫びと同時に、地面の杭もろともあたしがいた場所は吹き飛ばされた。

爆発的な魔力の波動は容赦なく大地を抉り、溝を穿つ。

「はっ……はっ……はっ……！！」

抉れた平原を前に、マナは荒く息をつく。

残った魔力を全部叩きつけた一撃、って奴ね。

こっちを遠慮も呵責もなく吹き飛ばすつもりだったわけか。

とはいえ、純粋な魔力は衝撃は生んでも実際に何かを破壊するだ

けのエネルギーはないから、最後の良心は残ってたのかしら。
ただまあ、やっぱり甘いわね。
あたしは思わず出そうになるため息を飲み込んで、マナの背中を容赦なく蹴り飛ばした。

「っきゃぁ！？」

まさか攻撃されるとは思わなかったらしいマナが、可愛らしい悲鳴とともに地面にうつぶせに倒れ込む。
あたしはその背中を座布団に、ゆっくり腰を下ろした。

「ぎゅぶっ！？」
「重力枷（グラビティ・ウェイト）ー」

魔族は身体能力に長けてるから、一応重力の枷であたし自身を重くして、マナを地面に張り付ける。

「はい、お疲れ様」
「な、なんで……！？」

あたしという重石を背中に乗せながらも、何とかあたしの方を振り向くマナ。
あたしはピーンと伸びきった尻尾をさわさわとさわりながら、説明してあげる。

「なんでも何も、転移術式（テレポート）で逃げただけよ？」
「呪文は聞こえませんでした……！」
「天星が二つあれば、天星から天星へと跳ぶ分には呪文なしで行けるのよ、あたし。……この尻尾、気持ちいいわね」
「ひゃうん！？」

あたしが髪の毛に櫛を入れるように指を差し込むと、マナが変な声を上げる。
ああ、やっぱりこういう部分は敏感なのかしら？　にしても、本気でモッフモッフで気持ちがいいわね……。こういう部位がある人間が好きになるって属性、ちょっと理解しかけたかも。

「ひゃぁ！　がまんできませ」
「C」
「ハッ！　Cバックドロップ！」

ズゴォン！

あたしの呼び声と同時に、騎士陣営の方から地面に何かが埋まる凄絶な音が響き渡るけど、無視。
あたしは地面に顔を伏せて悔しそうに震えている、マナの頭を撫でてやった。

「まあ、今回は運がなかったってことで」
「く、ふっ、うぐぅ……！」

あらら、マジ泣き？　しょうがないわねー。
あたしはため息を吐くと、魔法を解除してからマナの上から立ち上がり、今にもこっちの喉笛噛み千切りそうな勢いのガオウに視線を向けた。

「いつまでもそこにいないで、助けに来てあげたら？」
「言われずともぉ！」

勢いよくこちらに駆けつけるガオウ。

あたしはそのままその場を離れてあげる。
ガオウは素早くマナに駆け寄ると、うつ伏せだったマナをやさしく抱き起した。
マナは涙でぐしゃぐしゃに汚れた顔で、ガオウの顔をまっすぐに見つめた。

「マナ！　しっかりせよ！」
「ガオウ君……！」
「お前はよく戦った！　ソフィア様を守護するものとして、恥じない働きだったぞ！」
「ガオ、君……！　ガオウくぅぅぅん！！」

感極まったように、ガオウの胸に飛び込んで、ワンワン泣き声を上げるマナ。
ガオウももらい泣きで男泣きに泣き始めるし……。
これで、ただの仲間ってのが別の意味で泣かせる話よねぇ……。

「……じゃあ、今回はこっちの勝ちでいいわね？」
「異論はない」

いつの間にかこちらに近づいていたヴァルトに確認すると、ヴァルトは孫を見つめる温かい視線でガオウとマナのやり取りを見つめながら、小さく頷いた。
マナの攻撃に巻き込まれないように魔王軍を誘導していたらしいソフィアが、足早にこちらに駆けてきた。

「ではヴァルト、今回はこれで撤退しよう」
「ハッ」
「それから……魔導師よ」
「なによ？」

ヴァルトに撤退を命じたソフィアが、真剣な表情でこちらを見つめる。
そんなソフィアの様子をいぶかしげに見ていたあたしだけど、急にその頭を下げられて狼狽する羽目になった。

「今回は、すまなかった」
「な、何よいきなり？」
「いや、危うくお前を殺すところであった。マナにはあとで、厳しく言い含めておく」
「こ、殺すって……」

ソフィアの言葉に思わず脱力しながら、あたしは胡乱な眼差しでその美貌を見つめる。
いや、あの……。あたしたちが今何をしてるかわかってる？
あたしがそう、言葉にするより先に、ソフィアはその黒い翼を大きく広げて少し飛び上がった。

「ではさらばだ！　また戦おう、勇者よ！」

大きな声でそう宣言し、身体をひねってその翼で、暴風とも呼べそうな旋風を起こす。
思わず目を瞑り、そして再び開けた時にはいつものように魔王軍の姿はなくなっていた。
あたしは魔王軍がいなくなった後の地平線を眺めながら、今日最大のため息を吐いた。
なんか、調子狂うわねぇ……。

Ｎｏ．５８：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「呪術師は叫ぶ」（後書き）

そんなわけで、手玉に取られたマナちゃんであった。狐っ娘の泣き顔イエー（　。д。）ｂ

しかしもうちょっと肩の力抜いてもいい気がするなぁ。こんな真剣に戦いに挑んでるのって、この子だけじゃなかろうか。

ではまた次回ー。出来れば礼美かなぁ？

No．59：side・remi「王都の中で、小さな…」

私たちがヨークから戻ってしばらく。

真子ちゃんが殺されかけて、そのことをソフィアさんが謝ったというのを聞いて、私と光太君が魔王軍との和解に希望を見出したり、その話を聞いた隆司君が部屋の隅っこで体育座りを始めてみんなで一生懸命慰めたりしました。

隆司君も、なかなかソフィアさんに会えなくてかわいそうです…。真子ちゃんに言わせれば「間と運が悪いほうが悪い」なんだけど、それはあんまりじゃないかなぁ。

ともあれ私たちは、次の魔族の襲撃や領地奪還に備えてそれぞれ準備を始めました。

光太君は剣の修業を。真子ちゃんは道具の発明を。

私は、以前アルルさんが言っていた、祈りの習慣化を始めました。

あまりお祈りする習慣がなかったから、馴染むまで時間がかかりそうだけど頑張りたいです。

そんなある日のこと。

お祈りの時間が終わった私は、アルト王子の執務室に向かって歩いていました。

いつもなら、オーゼ様にお話を聞いたり、ヨハンさんに女神教団の教義を聞いたり、ジョージ君に魔法の練習を手伝ってもらったりするんですけど、皆さん今日はそれぞれに忙しいようだったので、アルト王子のお手伝いをすることにしたんです。

私はアルト王子の執務室の前に立つと、控えめにそのドアをノックしました。

「失礼します」

「はい、どうぞ」

返事で聞こえてきたのは、アルト王子の声ではなく、トランドさんの声でした。
あれ？と首を傾げてドアを開けると、いつものアルト王子の執務室でしたけど、アルト王子の執務机に向かっているのはトランドさんでした。

「トランドさん？」
「はい。王子に御用でしたか？」
「あ、はい。執務のお手伝いをと思ったんですけど……」

私は後ろ手にドアを閉めながら部屋の中に入り、執務室の中を見回します。
壁際の本棚も、花瓶に刺さった花も、植木鉢もみんなアルト王子のものでした。
うん、ここはアルト王子の執務室だよね。

「あのー。なんでトランドさんがここに？」
「王子の執務の代理を務めているからですが？」
「そ、そうなんですか？」

でも、トランドさんにも執務室はあったような……？
そう思った私の疑問を表情から読み取ったのか、トランドさんは小さく苦笑しました。

「もちろん、私にも執務室はありますが、ここにあります決裁書類を一々自分の部屋に運ぶより、こうして王子の部屋で仕事をした方が効率が良いので」
「な、なるほど」

机の上に積みあがった書類の束を見て、私は納得しました。

この大量の書類を運ぶのは一苦労そうです。
ともあれ疑問は解決しました。私は一つ頷いて、トランドさんに近づきました。

「なら、私にも手伝うことはありませんか？」
「ありがとうございます、レミ様」

トランドさんは優しく微笑んでくれましたけど、そのまま首を横に振りました。

「お気持ちだけ頂いておきます。レミ様は、今日も修行でお疲れでしょう？　ゆっくりお休みください」
「は、はい」

年を経た人相応の迫力でそう言われ、私は頷くしかありませんでした。
ううー……。でも、決裁書類のお手伝いとか何をすればいいのかわからなかったので、仕方ないといえば仕方ないかも……。
なら、アルト王子のお手伝いをしよう、と思い、私はトランドさんにお伺いしました。

「あのー、でしたらアルト王子はどちらでお仕事を？」
「どちらで、とおっしゃると？」
「はい、そちらの方のご様子を伺おうかと思いまして」

私がそういうと、トランドさんは小さく首を傾げました。

「さあ？　私もどちらに行かれるかうかがっておりませんから」
「そうですか……。ありがとうございます」

私はトランドさんにお礼を言って、そのまま執務室を後にしました。

そしてそのあと、簡単にお城の中を見て回りましたが、お城のどこにもアルト王子の姿はありませんでした。

むう、どこに行っちゃったんだろう。

ここまで探していないと、少し心配になります。途中で出会ったアンナ王女も見ていないっていうし……。

「それで、城下町まで探しに来たってわけか？」

「うん。ごめんね隆司君」

「いやそれはいいけどよ」

久しぶりにやってきた城下町。隣には隆司君がいます。

礼拝堂で一生懸命お祈りしていたところを、無理を言ってついてきてもらったんです。

そんな隆司君はいつもの格好で、後ろ頭をポリポリと掻いています。

「どうせなら光太とか真子の方がよかったんじゃねぇのか？」

「光太君も真子ちゃんも、一生懸命頑張ってるから邪魔しちゃ悪いもん」

「そういうもんかねぇ」

隆司君はそういうと、城下町の中を見回しました。

「で、アルトの奴を探すって話だが……。具体的にアテはあるのか？」

「それが全然」

「マジかよ」

私がひきつったような笑顔を浮かべると、隆司君の顔も引きつりました。

それもそのはず、このアメリア王国の王都は、王城を中心にその周囲に町が広がっているという構造なんですけど……その広さがかなり広大です。

町は東西南北の四つの区画に別れているのですが、その区画間の移動のために小さな馬車が利用されることがあるくらいなんです。しかもそれぞれの地区に人の住む居住区と商店街のようなものも存在するので、それらすべてを見て回るとなると一日では足りなくなりそうになるほどです。もちろん、それぞれの国は特徴といえるものはありますけど……。

例えば隆司君が所属するハンターズギルドは森のある北区にある関係で、御肉屋さんやそれを加工する職人さんが多く住んでいるとか。

そして私たちがいるのは魔王軍が侵略している方面の南区です。こちらの方面は貿易の出入り口として利用されることが多いみたいで、かなり大きな街道があるのが特徴になります。

「ここ全部しらみつぶしとか、シャレにならねぇぞ」

「そう、だよねぇ……」

隆司君の言葉に、私はがっくりと肩を落とします。

たった二人でこの王都全部を探すなんて、無理だよね……。

とはいえ、そこで諦めたら捜索は終わってしまうんです！

意を決した私は、すぐそばに立っていた区画間馬車駅の駅員さんに駆け寄りました。

「あの、すいません」

「はい？　なんでしょう」
「アルト王子を見かけませんでしたか？」
「ええ、見ましたよ」
「えっ！？」

駅員さんはなんてこと無いように頷くと、東区の方を指差しました。

「早足に、人目に付かないように駆けてきて、素早く東区行きの馬車に乗りましたよ」
「そ、そうですか！　ありがとうございます！」
「いえいえー」

駅員さんにお礼を言って、私は隆司君に駆け寄りました。

「隆司君！　手掛かりが見つかったよ！」
「マジかよ……」

いきなり手掛かりが見つかって興奮気味の私を見て、隆司君は唖然としながらつぶやきました。
確かに信じられないかもしれないけど、本当に見つかったんだもの！

「アルト王子は、東区に行ったみたい」
「東区ね。じゃあ、さっさと行くか」
「うん！」

私は頷いて、切符を買ってくれる隆司君の後を追います。
一応、御給金の形でトランドさんからお金は貰ってるんですけど、ハンターズギルドの副業がある隆司君や光太君の方がお金持ちなの

です。ううー……。

そしてちょうどやってきた馬車に乗り込んで、東区へと向かう私たち。

この東区は、こちら側の方面に布の素材となる植物が大量にとれる領地が多いということで、服屋さんや製布業の工場が多いのが特徴になります。

今私たちが着ている服を買った、テイクオフがあるのもこの区になります。

停留所に到着した私たちは、さっそく情報収集を開始します。

すると、アルト王子はテイクオフに向かったという情報が得られました。

「テイクオフに行ってどうするんだろう？」

「さあ？　この国じゃ、服を集めるのがトレンドみたいな感じだし、流行に敏感なんじゃねぇの？」

隆司君の言葉に、そういうこともあるかもと頷く私。

アルト王子は私たちと同い年らしいんですけれど、今は王様の代わりに政務を執り行う立場です。たまには息を抜かないと大変ですよね。

そして向かったテイクオフ。ちょっと久しぶりです。

「お、この柄の着物いいかも」

隆司君が新しい着物を手に取っている間に、私はレジの店員さんに話を聞きます。

「あのー、すいません」

「はい、なんでしょう？　何か、お探しの品が？」

「あ、いえ。人を探してまして……」

笑顔で答えてくれた店員さんに申し訳なく思いながらも、私はアルト王子の行方を伺いました。

「こちらにアルト王子が伺ったと聞いたんですけれど、今はどちらに向かったかご存知ですか？」

「アルト王子ですか？　こちらで一着だけ古着を買って、その場で着替えて出ていかれましたが？」

「ええ？」

一着、だけ？

その言葉に首を傾げてしまいます。

もし流行に敏感なら、もっとたくさん……最低でも二、三着くらいは買うんじゃないかなぁ？

一着だけ買って、しかもその場で着替えて出ていったって……。

私がその意味に悩んでいると、またたくさんの着物を抱えた隆司君がレジにやってきます。

「これだけおくれ」

「はい、ありがとうございます！」

「で、アルト王子の話の続きだけど、服以外に何か買っていかなかったか？」

着物を購入した隆司君の言葉に、店員さんは気前よく答えてくれました。

「ええ、買っていかれましたよ」

「物は？」

「布の鞄と、無地のバンダナですね」

「ふーん。ありがとう」

会計を終えた隆司君は、紙袋に詰めてもらった着物を肩に下げて、私を連れて外に出ました。

「お買い上げ、ありがとうございましたー」

店員さんの元気な声に後押しされて、テイクオフの外に出ます。

あ、そういえば。私も何か買えばよかったかも……。

「で、どういうことだと思う？」

「どうもこうも、お忍びかなんかじゃねぇの？　服を買えたのは、身分を隠すためで、バンダナは髪型を簡単に変えるためかなんかだろう」

隆司君の確信めいた言葉に、私は小さく頷きました。

それなら、古着を一着だけ買ったのも頷けます。

必要以上に買っちゃうと、行動に支障が出ちゃうもんね。

でも、そうなるとひとつだけ問題が出てきます。

「ここから先の捜索どうしよう……」

「さあ？」

私の言葉に、隆司君が無情に止めをさしちゃいました。ううー……。

ここまで私たちがアルト王子の足跡を終えたのは、アルト王子が着ている服が王族専用のものだったからです。

華美な礼装があったり、特徴的な形をしているわけではありませんが、王族であるならばこれを着ているという制服のようなものらしいのですが、それがあったからアルト王子の姿を駅員さんや店員さんが覚えていたわけで……。

それを脱がれてしまうと、私たちには探す手段がありません。

さらに言えば、もしアルト王子がお忍びで城下町まで来ているというのであれば、それはプライベートということです。無理に探して、その邪魔をするのも悪いですよね……。

「店員さんに、どんな服着ている聞いておけばよかったかなぁ」
「一々覚えてないんじゃねぇの？」
「そうかなぁ……」

小さく肩を落とす私の背中を、隆司君がポンと叩きました。

「まあ、所在自体が分かったわけじゃねぇけど、誘拐みたいな話じゃないからいいじゃねぇか」
「うーん……。そうだよね」
「それより、この地区にはうまいパンを出す店があるって噂だぜ。ちょっと寄っていこうぜ」

隆司君のその言葉に、私の気持ちはちょっと浮上しました。
そうだよね。誘拐じゃないわけだし、これ以上は無理に探す必要ないよね。
私は隆司君が贔屓の喫茶店で聞いたという噂のパン屋さんに向かいます。
そのパン屋さんに近づくにつれ、小麦粉の焼けるいい匂いがしてきます。
うわぁ、おいしそうな匂いが漂ってくるよ～。
真子ちゃんと光太君のお土産にもいっぱい買っていこうっと！
そう決意する私の目の前に、件のパン屋さんの姿が現れました。
小さなお店ですけど、小洒落た名店っていう感じでなんだか素敵なお店です。

「うわぁ……！」

そして前面ガラス張りのお店の中には、色とりどりのパンがたくさん並んでいます。
果物や惣菜を盛り込んだたくさんのパンの山が！
私が思わずふらりと一歩踏み出そうとすると、その肩を隆司君が強く掴みました。

「きゃっ！　りゅ、隆司君」
「ちょ、下がれ下がれ」
「？？？」

そういって私をそのまま反対側のお店とお店の隙間まで引きずっていきます。
な、なんだろう？
隙間の間から、じっとお店の中を観察する隆司君の袖を引いて、私はその様子を伺いました。

「ど、どうしたの隆司君？」
「アルトがいる」
「ええっ！？」

隆司君の言葉に、私は慌ててお店の中を観察しなおします。
ガラスの向こう側に見えるお店の中には、たくさんのパンが並べられた台の向こうに、店員さんと思われる女の子の姿と、その女の子の対面に立って楽しそうに話をしている男の子の姿が見えます。
どちらも背格好から私たちと同い年くらいなんですけど、男の子は頭にバンダナを巻いて手には布製の鞄。着ている服は目立たない感じの古着に見えなくはないです。
そしてちらりと見える横顔は……確かにアルト王子に見えました。

「あ、ホントだ！」
「お忍びでパン屋にとかマジかよ」

隆司君が少し面白そうにつぶやきます。
確かにそれも意外ですけど、もっと意外なのが……。
アルト王子の表情です。
パン屋の店員の女の子は、私から見ても可愛らしい女の子です。
真子ちゃんみたいな美人さんっていう印象はないんですけど、笑った時の表情がとても愛らしい感じです。
それを見て、アルト王子も笑顔になってます。そして、その頬はほんのりと赤いです。
それを見て、思わず私は興奮してしまいました。

「アルト王子、あの子のことが好きなのかなー？」
「十中八九そうだｒ、え？」

私の言葉に、それこそ意外といった表情で、隆司君がこちらを向きました。
？？？　どうしたんだろう。アルト王子のことに関しては、同意してくれてるみたいだけど。

「お前……」
「な、なに？」
「恋愛感情（そんなもん）持ってたのか！？」
「どういう意味ー！？」

あんまりといえばあんまりの言葉に、私は思わず悲鳴を上げました。
私だって、恋に憧れる女の子だよ！？

「いや、それはないわ」

その後、アルト王子がいなくなった頃合いを見計らって入ったパン屋さんで買ったお土産のパンを真子ちゃんに渡したときに、この時の会話の話をするとこういわれてしまいました。

くすん。ひどいよぅ……。

No．59：side・remi「王都の中で、小さな…」（後書き）

まあ、隆司の言うことにも一理あると思われ。しかし隆司と礼美のコンビは珍しいな。

そんなわけで、王子様の癒しスポットの紹介。町の中のパン屋の看板娘とか、贅沢やな王子！

しばらくはこんな感じのネタが続く……のかしら。気分次第です、うん。

No.60：side・ryuzi「次に残るのは？」

アルトの意外な一面を見た翌日、俺は光太と久しぶりに修行をしていた。
光太は木剣装備で、俺は素手。まあ、これはいつも通りなんだが。

「お前、本気かよ？」
「うん、本気だよ？」

修行中の軽い組手の中、世間話のついでに光太の口から放たれた言葉に、俺は呆れる。
光太は、何を当たり前のことを、という感じでこっちを見ているが……。
俺はため息をついて光太に接近する。
蹴りを放つと、光太は軽いバックステップで避けた。

「しかしお前、今度は自分が残るってなぁ……」
「隆司も真子ちゃんも残ったんだから、今度は僕が残るがの筋だと思うんだけど……」

袈裟斬りの放たれた一撃を左手でブロックし、正拳突きの要領で右拳を叩きこむ。
光太はサイドステップで躱し、左足を軸に回転斬りを叩きこむ。
俺は軽く屈みこんでそれを避けた。

「しかしいくらなんでもお前一人でなんとかなるとは思えんのだが……」
「そこはみんなに協力してもらって、っと！？」

屈むのと同時に下段回し蹴りを放つ。
光太は跳んで避けるが、同時に裏拳の要領でアッパーを放つ。
光太は木剣でなんとか受けるが、着地に十分な体勢を保ちきれずに、尻餅をついた。
俺は追い討ちに踵落としを見舞い――。
「そこまで！」
アスカさんの鋭い制止の声を聞いて、光太の肩に踵を乗せるに止めた。
俺はまたため息を吐いた。
「確かに周りに協力してもらえりゃ、何とかなるだろうけど、間違いなく制圧メンツが減るだろうに」
「それはまあ……」
光太も困ったように笑い、アスカさんの方を見る。
見られたアスカさんも、なんだか困ったように笑った。
「まあ……コウタ様が残られるのであれば、私も残らせていただきますが……」
「お前がいなくなるだけで前線メンバーが二人、あとはアルルも残るとか言い出しそうだから後衛のメンツも一人いなくなるぞ？　どうすんだよコレ」
「うーん……」
俺の言葉に、光太が腕を組んで考え始める。
真子辺りが聞いたら憤慨しそうなアスカさんのセリフだけど、無理に引き離して光太のことを気にしすぎるのも困る。フラグは順調に立ってるっぽいし……。怪我でもしたら光太が見舞いに行ってフ

ラグがさらに倍だ……。残っても一緒かもしれんが、可能性で考えれば低いほうだと思う。

さて、この問題の解決方法は、単純に欠けた三人に相当する戦力を同数で補うことだ。

制圧領地の奪還は、王都防衛をおろそかにしないためにも短期間で行わなければならないというのが真子の主張だ。まあ、長々居城を開けてたら魔王軍に制圧されました、じゃ笑い話にもならねぇしなぁ。

そのためなるべくはスピードに優れる馬車で任務を達成したい。真子的には遅馬（スロウホース）はもう黒歴史扱いにしたいらしい。

だが、通常の馬車は乗員数に欠ける。馬車そのものに四人。業者席に詰めて二人。そして馬車の上にさらに二人の計八人が限界だ。

そのため、三人欠けたから同じだけの戦力を補うのに、人数を連れていくという方法は使えない。

ので、できれば同じだけの戦力を持つ人間についてきてもらいたいわけなのだが……。

「隆司が作った部隊にいるあの三人の騎士さんは？」

「あ？　ダメダメ。あの連中、体力は無駄にあるみたいだけど、単純な戦闘力は普通の騎士とそんなに変わんねぇんだよ」

光太の提案に、俺は首を振る。

ケモナー小隊の騎士隊隊長に任命しているＡＢＣの三人組は、ただいま魔導師隊と神官隊の体力育成に専念してもらっている。

騎士全体と比較しても相当体力がある方らしいのはありがたいんだけど、なぜか戦闘力は通常騎士とほぼ同じらしいんだよな……。

まあ、怖いくらいに息ぴったりだから、連携とかとり始めたら案外怖い戦力になってくれそうだけど、試してもいねぇ戦力を登用するのもあれだよな。

「それに、なるべくならケモナー（うちの部隊）小隊の体力増強に専念してもらいたいからな。連れてくにしても、魔導師隊か神官隊の体力が安定してからだなぁ」
「うーん、そっかぁ……」
アスカさんが持ってきてくれた水筒から水を飲みつつ、光太が残念そうにつぶやいた。
まあ、体力って面じゃ、ここ数週間でだいぶついてきてるみたいなんだが……。あれだけだと魔族（嫁や婿）を追いかけるのに不安があるからな。
「でも、また真子ちゃんに留守番を頼むのも悪いしなぁ」
「リュウジ様が残られては？　前回の会戦では、魔竜姫ソフィア（嫁）が出たという話ですし……」
「いや、それで残って、また向こうに嫁（ソフィア）が出たとか言われたら今度こそ立ち直れんし……」
「はあ」
アスカさんの言葉に身震いする俺。
もうすでに嫁成分が断ち切られて一ヶ月目に突入しようとしている。
だいたい四日後くらいが、魔族到来の予定日時ということになっちゃいるが、前々回の会戦後を考えると、またやってこない可能性が高い……。
ブルリと体を震わせる俺。
ああ、このままじゃ干からびて死にそうだ……。
「じゃあ、アスカさん。単純にアスカさんと同じくらい個人戦に強い騎士の人っているんですか？」
「私と同じくらい、ですか……」

俺があり得るかもしれない未来に怯えていると、光太がアスカさんに質問をした。
光太の質問に、アスカさんは難しそうな顔になる。
「……元々、我が騎士団は強力な猛獣との戦闘を主眼に置いた訓練を行ってきましたから、集団戦が主なのです。魔王軍到来からは、一応個人戦を視野に入れた訓練を行っておりますが、やはり一朝一夕に身に付くものではないらしく……」
「いくらなんでも一年近くやってりゃ、ある程度は戦えるようになると思うんだけど……」
「はい。人間レベルで見ればそれなりの技能の持ち主はいるのですが、魔族との身体能力差を埋められるだけの技量持ちは……」
俺の指摘に、アスカさんが申し訳なさそうな顔になる。
ああ、言われてみりゃそうか。単純な身体能力差を埋めるにゃ、それこそ血のにじむような努力と長い年月がいるんだよなぁ……。
そう考えると、俺は一朝一夕にゃ得られねぇ、貴重な力を身に付けたってことに何のかね。
「ですので、私と同じだけのレベルで一対一の戦いが行えるものはほとんどいないのです……」
「そっかぁ……」
そうアスカさんが締めると、光太が残念そうな顔になった。
まさかとは思うが、残ってみたかったとかじゃあるまいな？
俺がそう疑っていると、光太の後ろに見覚えのある人影が現れた。
「じゃあ、俺が付いていこうか？」
「え？」

そういって光太の肩を叩いたのは、誰であろうこの騎士団の団長さんだった。
いや、確かに団長さんが一緒に来てくれるなら、光太たちが抜けて余りある戦力補強になるんだけどさ……。
「団長さんが、この国ほっぽり出して領地奪還に動いて良いわけ？」
「当然よくありません」
俺の当然の疑問に答えてくれたのは副団長さんだった。
副団長さんは団長さんの耳を引っ張りながら、厳しい表情でその耳元に説教を始める。
「団長。いつも言っておりますが、職務を放棄してそこら辺をほっつき歩かないでください。団長に決済してもらわないといけない書類が、毎日溜まっていくんですよ？」
「い、いや、そうは言うがなリーク？　ああいうのは文官の仕事であって、武官の仕事じゃないと思うんだが……」
「おっしゃることも理解できますが、一日に発生する量は、一時間もあれば終わる程度です。それを毎日放り出すので、机の上に山のように積みあがってしまうのですよ？」
一時間あれば終わる仕事を放っておくのかよ……。それは騎士団のトップとしていいのか？
それとも、夏休みの日の最後まで宿題をやらねぇ学生みたいな気分なのかね……。
俺がどうでもいいことに悩む間に、副団長さんの説教は続く。
「この上、八日間も席を外すとなってしまえば、ただでさえ滞っている仕事がさらに滞ってしまいます。そのようなことはやめてくだ

さい」
「ん？　そういえば、騎士団長の書類仕事ってどんなの何だ？」
ふと疑問に思い、口に出すと、副団長さんがこちらを見て説明してくれた。
「主だったものは、消耗品の補充に関係する仕事や、通常任務の関係で方々との折衝ですね。担当する専門の団員からの報告書を確認し、それが正当なものかどうか判断するのが仕事になります」
「へー……」
「ですが、団長は特に消耗品関係の書類は放置しがちなので、消耗品がなかなか補充されなくて困るのです」
「あー……」
そりゃ困る……。
細かい消耗品って、意外と早くなくなっちまうから、常に倉庫にあるくらいがちょうどいいんだよなぁ……。
こりゃ、団長さんを応援するってわけにゃいかなくなったなぁ……。
「うん。あんたが悪い。仕事しろ、団長」
「おいおい。お前までそんなこと言うこたぁ、ないだろうが」
副団長さんを援護する俺の言葉に、団長さんがいやそうに顔をしかめた。
つっても、消耗品の不足ってのは、結構切実なんだぜ？
アメリアの泉の店主のおっさんも、領地が奪還されるようになってからは、消耗品が補充できるようになったって喜んでたからな。
今度はできれば、旬の果物が取れる地方でよろしくとも言われちまったし……。

「でも、それなら次はだれが残るの？　二回連続で真子ちゃんはかわいそうだよ？」
「あー……」

困ったように眉尻を下げる光太に、似たような表情を返す俺。
いやまあ、確かにそうなんだけどよ……。
でも真子なら喜んで残りそうな気はするんだよなぁ。最近は発明に凝ってるみたいだし。
と、そこで副団長さんが片手を上げた。

「なら、私が参りましょうか？」
「「「えっ？」」」

思わず声を上げる俺と光太とアスカさん。
まさかの立候補である。
俺はアスカさんの方を見て、確認する。

「これ確認していいのかわからんけど、アスカさんとの実力差は……？」
「も、もちろん副団長の方が強いですよ！　リークさん、よろしいんですか！？」

驚いたようなアスカさんの言葉に、副団長さんは小さく頷いた。

「もちろん構いませんとも。団長の監視は、レーテ姉さんに任せるとしましょう」
「監視って、お前……」

副団長さんの言葉に、ゲンナリと顔をゆがめる団長さん。

しかしレーテって誰ぞ？

「レーテ姉さんは、メイド長を務めてますよ？」
「え？　ああ、メイド長のことだったのか」

俺の表情を見てか、少しおかしそうに笑った副団長さんがそう説明してくれる。
なるほど、あのメイド長さんならしっかり団長さんを監視してくれそうだ。
しかし、副団長とメイド長さん姉妹だったのね……。よく見りゃ、顔もそっくりだわ。

「団長さんは、いいんですか？」
「え？　まあ、本人が行きたがってるならいいんじゃねぇか？」

光太が団長さんに確認すると、団長さんは後ろ頭を掻きながら何やら微妙な表情でそう肯定した。
なんつーか、煮え切らねぇ顔だなオイ。拍子抜けしたみたいな物足りねぇみたいな顔だこと。
まあ、それは置いとこう。

「じゃあ、前線は副団長さんにもやってもらうとして……」
「あとは後方支援？」
「だなぁ」

連れて行くならジョージの穴が埋まる攻撃型かね……。なら……。

「フォルカでも連れてくかね」
「フォルカ？　っていうと……」
「ケモナー小隊のネコ耳（ウチ）担当。確かそこそこ威力高くて、短めの詠

唱が得意だったはず」
「ね、ネコ耳？」

俺の言葉に目を白黒させる光太。そういや光太って、うちの部隊の性質知ってたっけか？
まあ、いいや。とりあえずの戦力補強はできた感じか？
と、アスカさんが何かに気が付いたように声を上げた。

「足りない残り一人はどうするんです？」
「あ、そういえば。どうしよっか、隆司？」
「俺に言われてもなぁ……」

正直、副団長さんが付いてきてくれるなら、あと一人もいらん気がするんだが。

「まあ、その時のノリでいいんじゃねぇの？」
「の、ノリって……」
「それはともかくとして、今回は頼むぜ光太」
「あ、うん。任せてよ」

俺の言葉に、光太は力強く頷いた。
あとは我らが軍師殿の了承が得られるかどうかだが……。
まあ、その辺の交渉は自分でやってくれよな？

Ｎｏ．６０：ｓｉｄｅ・ｒｙｕｚｉ「次に残るのは？」（後書き）

実は女性だったらしい副団長さんです！　不思議！　……ごめんなさい、描写すっかり忘れてました。まあ、書いてるうちにパッと思いついた設定なんですが……。

そんなわけで、今回は光太君が残ることになりそうです。問題は真子ちゃんが許すかどうかですが……。まあ、何とかなるでしょう。

次回もゆるく参りたい感じでありますー。

No．61：side・mako「花園のお茶会」

「と、言うことらしいのじゃが」
「あのアホどもは……」

フィーネ経由で告げられた次回の領地奪還メンバー編成に、思わず頭を抱えるあたし。
今いるのは王城の中に作られた中庭、その中心に据えられた白い円卓だ。
王城の中でも、庭師が特に力を入れて手入れを行っているというだけあって、なかなか華やかな場所ね。匂いもそんなに強くないし、なんだか落ち着く場所だわ。
そんな場所で、あたしは久方ぶりに日光を浴びつつ礼美たちとお茶会をしていた。
メンバーはあたしに礼美、アンナ王女にナージャ。そして飛び入りでやってきたフィーネだ。
フィーネの分のお茶をメイド長に頼みつつ、あたしはフィーネにアホどもの伝言のお礼を言った。

「悪かったわね、フィーネ。アホどもの伝言をわざわざ伝えに来てもらって」
「構わぬよ。我はあまり、皆の役には立ててはおらぬからな……」

あたしの言葉に、フィーネは自嘲するように首を横に振った。
そんなフィーネに、アンナがとんでもないというように声を荒げた。

「何を言ってるんですの！　フィーネがいなければ、この城を護る結界の補強や、魔法薬生成のための結界生成など誰がやるんですの

！」

「じゃが……」

「まあまあ、アンナ様。フィーネ様は、直接勇者様たちのお力に慣れないことを気に病んでおられるんですよ」

フィーネがアンナの言葉に反論しようと口を開いた瞬間、絶妙なタイミングでナージャが二人を押し止めた。

反論しようとしたフィーネも、フィーネの表情を見てまた顔を赤くしたアンナも、グッと息を詰まらせた。

うまいわね。機先を制して、相手の出鼻をくじく。戦いでも話術でも、重要なテクニックね。

あたしは二人を止めようと腰を浮かせかけていた礼美の服の裾を引いて座らせつつ、あたしはフィーネの方を見た。

「とりあえず、メンバーに関しては了解したわ」

「ぬ？　良いのか？」

あたしの言葉に、フィーネが不思議そうな顔になった。

ここ最近、あたしは錬金研究所に篭って新しい魔法道具を作ろうと躍起になってる。それを知ってるから、外に出ても大丈夫なのか？って言いたいのね。

そんなフィーネに、あたしは顔をしかめつつ後ろ頭を掻いてみせた。

「いや、まあ……。正直、今、煮詰まっててさ……。気分転換に外に出てみようとも思ってるから……」

「気分転換って、真子ちゃん……」

あたしの言葉に、礼美が絶句したような声色を上げた。

まあ、普通は領地奪還で気分転換とか、やらないわよね……。

とはいえ、ケモナー小隊（変態ども）と一緒に走る気にはなれないし、あたしはハンターズギルドに登録する気はないから、他に気分を変える方法がないのよね……。

はあ、と陰鬱なため息を吐くと、アンナ王女が心配そうな顔をしてあたしのことを見た。

「大丈夫ですの、マコ様？」

「え？」

「いえ、ここ最近、御顔がすぐれませんですの。もし、何か手伝えることがあるのなら、言って欲しいですのよ？」

「あ、うん。ありがと」

アンナ王女の気遣いに、思わず顔を綻ばせながら、あたしは腕を伸ばしてその頭を軽く撫でた。

アンナは小さく声を上げたけれど、すぐにくすぐったそうに小さく笑い声を上げた。

フィーネと同い年くらいなのに、ずいぶんできた子だわー。

フィーネといいアンナといい、周りがもっとしっかりしてりゃ……。

あたしはのど元まで出かかったため息をグッと飲み込んでから、ナージャに顔を向けた。

「フォルカが領地奪還に出ていくけど、ケモナー小隊（あんたんとこ）の出来上がり具合はどんなもんなの？」

「多少、個人差は出てきていますが、計画通りといったところでしょうか」

ナージャは小さく頷きながら、王都の外を見つめる。

景気のいい声と、複数の男女の掛け声が聞こえてくる。

ここ最近のケモナー小隊の日課である、王城周回マラソンの声だ。

最初の頃こそ、ほとんど声も上がらなかったが、最近では終了の掛け声がかかるまで、しっかり声が上がっている。

「マコ様に考案いただきました、体力回復促進の魔法もあって、かなり効率よく体力が上がっています。その節は、本当にありがとうございました」

「ああ、いいのよ別に。あたしとしても、戦力は多いほうがいいしね」

頭を下げてくるナージャを、あたしは片手を振って遮った。

あたしがナージャに考案してやった魔法は、元々フィーネが研究していた術を少し弄っただけのものだ。

フィーネとしても体力低下の一途をたどる魔導師たちの惨状をどうにかしたかったらしく、それをどうにかするために開発していたんだけれど、身体を動かさないと意味がないと気が付いて途中で放り出してたんだとか。

今回ケモナー小隊が、マラソンで体力増強していると聞いて、フィーネが引っ張り出してあたしが簡単に完成させたわけだ。こういう時は、魔術言語（カオシック・ルーン）に精通しているこの能力は便利ね。

「で、実際に使えるようになるまでは、どのくらいかかりそう？」

「早い隊員なら、次の会戦には出られるかもしれません」

「すごい……」

ナージャの言葉を聞いて、礼美が驚いたような声を上げた。

「隆司君が立ち上げた部隊、もう戦ってくれるんだ……！」

「まだ、一部のみではありますけれどね」

礼美に苦笑して見せるナージャ。まだ彼女の求める完璧には程遠

いってことかしら。
まあ、最終目標が魔族（嫁や婿）と砂浜で追いかけっこ、って聞いたら礼美も目を丸くするだろうなぁ……。
あたしはこっそりため息をつきつつ、アンナの方に顔を向けた。
「でさ。次はどの領地を奪還するか決まった？」
「……いえ。実はまだなんですの……」
アンナは力なく首を横に振った。
はて。前回の奪還は結構早く決まったのに、今回は時間かかってるわね？
あたしは首を傾げて、質問してみた。
「どうかしたの？」
「いえ、その……」
アンナは若干言いづらそうに口をもごもごさせていたけど、意を決したのかあたしの目を見てはっきり告げた。
「実は、フォルクス公爵が」
その名前を聞いて、あたしは思わず半目になった。
まさか、余計な横槍入れてるせいで議会が纏まらないわけ？
「なに？　あのバカ公爵、まだなんか喚いてるわけ？」
「ええ……。次こそは自分の領地を奪還させようと、とにかく難癖つけて次の奪還領地の決定を遅らせているんですの……」
あのバカ公爵は……。そんなに自分の領地を奪還してほしいわけ？
思わず目頭を押さえるあたしの向かいで、礼美がアンナにおずお

ずと問いかけた。
あんたまさか……。
「あの……フォルクス公爵の領地って、どこにあるんです？」
「ちょっと、礼美？」
予想通りの言葉を聞いて、礼美を睨みつけるあたし。
そんなあたしに弁解するように、礼美はややひきつった笑顔を浮かべた。
「だ、だって、すぐに領地を取り戻せば、その、フォルクスさんも少しはおとなしくなるかなーって……」
「あんたねぇ……」
あたしは呆れたような声を上げるけど、悪くはない案よね。
一々やかましいなら、とりあえず黙らせるために願いを叶えてやるのは。
まあ、そのあと一々要求してくる場合もあるけど、物が領地ならそういうことはないでしょうし。
アンナの方を伺うと、アンナは首を横に振った。
「レミ様のお心づかいはうれしいのですけれど……フォルクス公爵の領地は、魔王軍の本営の向こう側にあるんですの」
「ああ、そりゃ無理だわ」
あたしは速攻で頷いた。
いくらなんでも、魔王軍本営を突破して貴族領奪還なんてやってらんないわ。
それができるなら、とっくの昔に魔王軍を真っ向から叩き潰してるわよ。

迂回するってのもなし。話によれば、ハーピーっていう、鳥の魔族もいるみたいだから、監視網に引っ掛かったら、領地奪還メンバーだけで魔王軍本営の戦力を相手する羽目になる。
いつものソフィア親衛隊＋αならともかく、ヴァルトとラミレスを一度に相手してまともに戦える気がしないし。
どうあがいても、最後の方に回されそうねぇ。

「とはいえ、他の貴族たちもフォルクス公爵の粘着にうんざりしてきているので、あと二、三日もしたら議会は決定するですの」
「二、三日後かぁ……」

アンナの言葉に、あたしは腕を組む。
それまでに、なんかひとつくらいは魔法道具作っとくかなぁ。
……にしても。

「なんであのフォルクスとか言うのはそんなに自分の領地を取り戻したがってんのよ？」
「言われてみれば、そうだね」

あたしの言葉にうんうんと頷く礼美。
確かフォルクス領って、大した資源も確たる交易路が確保できているわけでもないのよね？
となれば、その収入は基本的に領民たちから治められる税ってことよね。
今まで占領されていた領地を見るに、交易とかは停止させられてるけど、普通に生活する分には問題ないわけで。
ならいつ奪還しようとも問題ないと思うんだけど？
そんなあたしの言葉に、フンと小ばかにしたように鼻を鳴らしたのはアンナだ。

「何のことはありませんわ！　要するに、フォルクス公爵に誇れるものがそれしかないというだけですの！」
「アンナ、言い過ぎではないのか？」
アンナの言葉を窘めるように、フィーネが声をかけるが、ナージャも同意するように頷いていた。
「確かに、現フォルクス公爵からは、いいお話を伺いませんからね」
「ナージャ殿まで……」
フィーネが困ったように右左と、アンナとナージャの顔を見回し、最後に助けを求めるようにあたしの方を見た。
いや、あたしの顔を見られても。
「あの、いい話を聞かないって、どういうことなんですか？」
あたしがフィーネに見つめられて困っている間に、礼美が聞きたかったことを聞いてくれる。
礼美の質問に、アンナが力強く頷いた。
「単純な話ですの。例えばレスト領のカウル子爵。彼は、代々レストからの交易を管理する立場にあるのですが、それ以外にも交易先の領地に赴いて、さらなる商品の開発に余念がないのですわ」
「カウル子爵の代になってから、レスト方面からやってくる交易品の質も上がってます。他にも、ヨーク領の貴族様は海湖（ソルト・レイク）で、数種類の新種の海産物を発見しているんです」
「新種の発見とはまたすごいわね」
海湖（ソルト・レイク）はその性質上、生育環境がほとんど変わらないはず。なら、その海湖（ソルト・レイク）の中に生息している魚類は自然と限られてくる。この国が

建国されて何年立ってるか知らないけれど、百年もあれば主だった種類は発見できるはず。

そんな中から、新種を発見するのは、かなり難しいはずだ。設備があたしたちの世界並みに整っているならともかく、ろくな潜水道具もなくそれをこなすだけの才覚か、あるいは運か。ともあれ、さすがは領地を治める貴族ってところね。

そこまで語ってから、アンナはまた鼻をフンと鳴らした。

「しかしフォルクス公爵は、代替えを行ってからもうそろそろ十年を超えるというのに、特別何か新しいことを行おうとはしていないのですわ」

「貴族というのは、跡を継ぐだけではなく、次代に継がせなければならないというのに……」

ナージャの続く言葉に、あたしはなるほどとうなずいた。

つまり貴族は代替わりを行う度に、何かしら新しいことを行って次代に継がせないといけないわけね？　そうすることで、自らが治める領地をさらにより良いものへと変えていくわけだ。

もちろん、その代の貴族が行ったことが善政とは限らないけど、なら次の代でそれを変えていけばいい。効率がいいとは言えないけれど、悪くはないんじゃない？

で、フォルクス公爵はそんな貴族としての責務を怠っていると。

「期待を裏切らないボンクラぶりねー」

「ま、真子ちゃん……」

あたしのはっきりとした物言いに、礼美が戸惑ったような声を上げる。

なによ？　事実でしょう？

と思ったのだが、どうやら礼美の反応は、あたしの言葉そのもの

じゃなかったらしい。
見れば、いつの間にかフィーネがうつむいていた。
なになに？　どしたの？
「ちょっと、フィーネ？」
「……我は……」
あたしが声をかけると、フィーネが小さくつぶやいた。
「ん？」
「……我は……私は……何か残せるのかな……？」
いつものキャラ作りすら忘れて、フィーネが小さくつぶやいた。
そのあと、消え入るような声で、おばあ様みたいに……、と続く声も聞こえた。
ああ、貴族領の話で変なスイッチ入っちゃったみたいね……。
あたしはため息をついて、フィーネの小さな肩を抱いてあげた。
「そんなこと気にしないの！　あんたはまだまだ小さいんだから、残すだの残さないだのって話は気にしなくていいの！」
「でも……」
「そうです、フィーネ様。今は、魔王軍との戦争をどうにかするのが先決ですよ？」
沈んだフィーネを慰めるように、礼美もその両手を握って励ます。
フィーネの様子に慌てたアンナが、席を立ってその隣に駆け寄った。
「そうですわよ、フィーネ！　それに、ジョージと違ってフィーネが何も残せないなんてことはありませんの！」

「アンナぁ……」

アンナの言葉に、フィーネが湿っぽい声を上げる。

そしてフィーネの前に、そっと湯気の立ち上る紅茶が差し出された。

「どうぞ、フィーネ様。入れたての紅茶です」

「飲んで、落ち着いてくださいね」

「うん……」

メイド長とナージャに言われて、フィーネは小さく頷いて、紅茶を手に取った。

何とか浮上してきたフィーネを見下ろして、あたしはこっそりため息を吐いた。

宮廷魔導師の肩書、やっぱりフィーネには重たいみたいね……。

Ｎｏ．６１：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「花園のお茶会」（後書き）

女の子だけの秘密のお茶会！　にしては会話内容に色気もそっけもないですけど。

そして荒ぶるフォルクス公爵。こういうのが一人でもいると議会がてんやわんやで進まんのですよ。

次回までには次取り戻す領地が決まっていますようにー。

No. 62 : side・kota「Fry High」

フォルクス公爵の妨害もあったけれど、何とか次に奪還する領地が決まって、魔王軍侵攻の合図の狼煙が上がらなかったのを確認して、隆司たちはハンターズギルドから借りた馬車に乗って出発していった。

今回奪還に向かった領地はカルタ。おもに紙の原材料の植物を育てている町なんだそうだ。

魔導で発達しているこの国では、魔導を記すための紙を大量に使用する関係で、その生産に特化した領地はかなり重要度が高いらしい。

王都でもいくらかの量は生産しているらしいんだけど、奪われた領地に比べれば微々たる生産量で、備蓄なんかもそろそろ底をつきかけていたんだとか。

それから今回の奪還領地発表で初めて知ったんだけれど、一般の市場には火打石代わりの、簡単な発火魔法が使える呪符とかが流布しているんだとか。一回使いきりのものらしいんだけれど、そういう呪符が魔導師団にとっての主な収入源でもあるらしい。

それだけに、隆司たちには結構重たい期待がのしかかってる。もし紙が尽きれば、魔導師団の主な収入源が絶たれるのと同じだからだ。

でも、きっと隆司たちなら領地を取り戻してくれる。隆司は、確かに普段はどこか抜けてるし、ふざけたような態度で人に接することもあるけれど、やらなきゃならない時は人一倍頑張る男だから。

もちろん、真子ちゃんや礼美ちゃん、そしてこのアメリア王国のみんなも忘れちゃいけない。これだけのメンバーがそろってるなら、必ず取り戻してくれるさ。

だから僕は、そんなみんなに負けないように努力しなきゃいけない。特に隆司には追いつかなきゃ。

僕だって男なんだ。親友であり、ライバルでもある隆司には負けたくないよ！
そんな思いを込めて、僕は木剣を振るう腕に力を入れる。

「はぁっ！」
「ハイッ！」

カァーン！と騎士団の修練場に、乾いた音が響き渡る。
木剣と棒がぶつかり合い、ミシリと小さな音を立てた。
僕はそのまま、全体重を押し込むように一歩踏み込んだ。

「くっ！」

今回の訓練に付き合ってくれている、騎士の人がうめき声を上げて一歩下がる。
騎士の人が全身を力ませて、僕に対抗するように一歩踏み込もうとした。
僕はそれを見て、わざと力を抜いて横へ重心を移動させる。
僕と鍔迫り合いを行おうとしていた騎士の人の全力が、僕の横へと抜けて前へと突き抜けてしまう。

「うおっ！？」

競り合うべき相手を無くした棒ごと前へとつんのめった騎士の人の後ろへと素早く回り込み、その後頭部へ僕は木剣を突きつけた。
騎士の人は、倒れそうになりながらも踏み止まったけれど、後頭部に触れる木剣の感触に小さく息を呑み、そして諦めたように声を上げた。

「……参りました」

「……ありがとうございます」

その声を聞いて、僕は剣を引き、騎士の人に一礼した。

同時に、僕と騎士の人の試合を見ていた女性騎士たちが歓声を上げた。

僕はそちらを振り向いて、お礼代わりに手を振る。少し歓声が増えた気がした。

そんな皆の様子に僕が首を傾げていると、僕と騎士の人の試合結果を見て、満足そうに頷いたアスカさんがこちらに近づいてきた。

「お見事です、コウタ様」

「ありがとうございます、アスカさん」

肩を落としながら下がっていく騎士の人の背中を見送ってから、僕はアスカさんの方へと振り向いた。

「やはりコウタ様は、力を込めて一撃を叩きこむよりは、相手の力をいなすか、逆に利用する技術の方が向いているようですね……」

「やっぱり、そうですかね？」

アスカさんの言葉に、僕は首を傾げる。

でも、さっきなんかは全力で打ち込んだ感じなんだけどなぁ。

そんな僕の言葉に、アスカさんは首を振った。

「全体重を利用した攻撃術は、私のような女にも可能です。私が言いたいのは、腕力に頼った一撃のことです」

「腕力……ですか」

アスカさんに言われて、僕は自分の腕を見下ろす。

子供の頃から剣道は続けてるから、それなりに腕力に自信はあっ

た。
　けれど、やっぱりきちんと鍛えた男の騎士の人の腕に比べたら、少し細い感じがするんだよね……。
「やっぱり、鍛えたほうがいいんですかね……」
「鋼や鎧を貫くというのであれば、あるに越したことはないですが、コウタ様は魔王軍を殺さずに制するおつもりですよね？」
「ええ」
　僕が頷くと、アスカさんは小さく微笑んだ。
「であれば問題ありません。腕力を鍛える分を、相手の力を制する技術を学ぶのに注ぎ込みましょう」
「相手の力を制する……」
　そうか。良く考えれば、腕力があれば余計な破壊力が生まれて、相手を殺しちゃう可能性もあるんだ。
　僕が持つ螺風剣（エア・キャリバー）は、鋼の刃を持つ魔法剣。普段は風の渦で刃を保護してるけど、常にそれが使えるわけじゃない。
　なら、求めるべきは力じゃない。その力を制する技術だ。
　そう完結すると、僕はアスカさんに、力強く頷いてみせた。
「はい、わかりました！」
「良い返事ですな！」
「しからばその決意のほど！」
「我々が確かめて御覧に入れましょう！」
　僕の返事を聞いて、飛び出してきたのは、アルベルトさんにベルモンドさんにチャーリーさんだった。

「えーっと、アルベルトさんにベルモンドさんに、チャーリーさんですよね？　次は、御三方が相手してくださるんですか？」
「今すごい久しぶりに名前を呼んでもらえた気がする！」
「リュウジさんにＡＢＣとワンセットで呼ばれるようになってから、みんながＡＢＣって呼ぶようになったからなぁ……」
「徐々に魔導師やら神官やらにも広まってて、そのうち名前さえ忘れ去られてしまうんじゃないかと、戦々恐々としていたところです！」

僕が三人の名前を呼ぶと、なんだか涙を流して喜ばれた。
りゅ、隆司……。あだ名をつけてあげるのは良いと思うんだけど、ＡＢＣはどうなの……。

「す、すいません……。隆司が、変なあだ名つけちゃって……」
「いえいえ、構いませんとも！」
「リュウジさんは我々に道を示してくださった恩人です！」
「むしろ名付けてくださって感謝感激！」
「はぁ」

嫌がってはいないんだよね？
僕はちょっと反応に困って、アスカさんの方を向く。
アスカさんは頭を痛めたようにこめかみを抑えつつ、三人に指示を出し始めた。

「リュウジ様に忠誠を誓うのは構わんが……わかっているな？」
「「「もちろんですとも！」」」

三人は一様に頷くと、腰の後ろの方から一本の棒を取り出した。
どれも作りは同じで、ＲＰＧの初期装備によくあるヒノキの棒をそのまま形にしたみたいな感じだ。あとで説明してもらったんだけ

れど、巡回騎士の正規装備の警棒なんだとか。

「えーっと、それで誰から……」

「「「我々が相手です」」」

「え？」

「「「ですから、我々が相手なのです！」」」

三人にハモりながら言われて困惑する僕に、アスカさんが説明してくれた。

「次はこの三人を一度に相手していただきます」

「さ、三人を一度にですか！？」

その言葉に、僕はびっくりして思わず大きな声を出す。

アスカさんは厳しい顔で小さく頷いて、さっきの言葉が聞き間違いじゃないことを肯定する。

「はい。魔王軍の者たちは、ほとんどが我々に身体能力で勝ります。ですので、それに対する訓練として、こうして複数人を一度に相手にするというものがあるのです」

「な、なるほど……」

単純に二倍三倍、ってわけじゃないんだろうけど、魔王軍の人たちはかなり身体能力が高い。

ヴァルト将軍はいうに及ばず、ソフィアさんだって僕よりずっと速いんだ。

だから魔族と相対した時の状況を少しでも再現しようとこんな訓練が考え出されたんだろうな……。

僕は気を引き締めて、木剣を構えた。

「わかりました！　いつでもどうぞ！」
「その意気です、コウタ様」

アスカさんは満足そうな声を出して、相対する僕たちから十分距離を取る。
そして両者の準備が整ったのを確認すると、軽く手を上げ……。

「……はじめっ！」

勢いよく振り下ろす！
同時に、目の前の三人が縦に並んで一直線にこちらに向かってきた。
正面から見ると、ひとりだけにしか見えない。
僕はまっすぐ進んでくる三人をじっと待ち構えた。

「コウタ様御覚悟ー！」
「っ！」

上段から振り下ろされる警棒を捌き、横へと抜ける。
そんな僕の顔に向かって、後ろの人の警棒がまっすぐに突きいれられた。

「！？」
「抜けさせませんよー！」

僕は慌ててしゃがんで回避。
すると三人目の騎士の人が、僕に覆いかぶさるように組みかかってきた。

「そこでしゃがむのは死亡フラグ！」

「うっ！？」

一瞬で地面に組み伏せられ、僕は全身で抵抗する。

「立ち上がらせない、Ａボディプレス！」

「足掻かせない、Ｂプレッシャー！」

でも、続けざまに残った二人が上から覆いかぶさってきた。

そのまま僕は何とか抵抗を試みるけれど、上に乗った三人の騎士を動かすことはままならず……。

「……そこまで！」

結局その状況を脱出できずに、アスカさんが試合の終了を告げる。

アスカさんの声を聞いて、三人ともすぐに降りてくれた。

「コウタ様に乱暴するなー！」

「訓練だろうがこれは！」

「変態がー！」

「やかましいわ！」

「いいぞもっとやれー！」

「それは、何を求めてるんだ！？」

なぜか上がる野次に三人の騎士が答えている間に、アスカさんが僕に近づいてきて注意してくれる。

「コウタ様。今のように、一気呵成に責められては、どんな技術も無為に終わります」

「はい……」

「なるべく、相手の優位を活かさないよう、自らの優位を活かせる

ように立ち回ってみてください」
「わかりました」

アスカさんの注意を胸に刻み、僕はもう一度木剣を握る。

「アルベルトさん！　ベルモンドさん！　チャーリーさん！　もう一本お願いします！」
「「「了解です！」」」

僕の言葉に、三人とも快く答えてくれて、素早くさっきと同じ体勢に戻った。
三対一の優位を活かさないような戦い方……。

「……はじめっ！」

アスカさんの合図と同時に、また三人が一度にこちらに向かって駆けてくる。
対して僕は、迎え撃つように三人に向かって駆けだした。

「コウタ様！」

アスカさんの厳しい声が上がる。
確かに待って普通にやられたんだから、こうして近づくのはいい策とは言えない。
でも、この状況を崩すには……！

「万策尽きましたかなー！？」

自身の優位を確信しているアルベルトさんの声とともに、また警棒が振り下ろされる。

けれど僕はそれをいなすのではなく、振り下ろされる前に地面を蹴って飛び上がる。
そして、地面に向かって警棒を振り下ろしたことで体勢がやや低くなっていたアルベルトさんの肩を踏み台にして、三人の体を一気に飛び越える。

「なんと!?」

ベルモンドさんの驚いたような声を背に、チャーリーさんの背後に着地し、振り向きざまに木剣を叩きつける。
状況に対応しきれなかったチャーリーさんは、木剣を受け止めきれずに横向けに吹き飛んでいく。

「ひでぶっ!」
「ぬう見事! だが、ただではやられんよ!」

チャーリーさんが吹き飛んだ間にこちらへと振り返っていたベルモンドさんのみぞおちに、僕は木剣を叩きこむ。
そのままもんどりうって倒れるベルモンドさん。

「うわらば!」
「フフフ、BCの二人を倒したか、だがその程度では!」

ベルモンドさんの横を抜けてきたアルベルトさんの額に、素早く木剣を振り下ろした。

「ちにゃ!」
「……それまで!」

三人が目をまわして倒れたのを確認して、アスカさんが声を上げ

る。

途端、さっきよりも数倍大きな歓声が上がって、女性の騎士さんたちが一気に僕のそばに駆け寄ってきた。

「う、うわ！？」

「すごいです、コウタ様！」

「あんな風に飛び上がれるなんて素敵！」

「まるで、英雄譚（サーガ）に出てくる、初代アメリア国王様の様でしたよ！」

「そ、そうですか。ありがとうございます」

状況についていけずに困惑する僕。

「……オッホン！！」

そんな僕を助けてくれたのは、アスカさんだった。

いつの間にか僕の後ろに回ってきていたアスカさんがわざとらしく息をついて、周りの注意を引いてくれる。

その間に、僕はアスカさんの方を振り向いた。

「あ、アスカさん」

「コウタ様。先ほどの戦い、見事でした」

「あ、ありがとうございます」

「しかし！」

アスカさんがいきなり大きな声を上げるから、僕は思わず委縮してしまう。

「あのように、相手の不意を衝くために、逃げ場のない空中に身を躍らせるのはいけません。あの時ベルモンドかチャーリーがコウタ様の御体に触れていれば、そのまま頭から落ちる可能性もありまし

た」

「あ、はい……」

アスカさんの指摘に、僕はうなだれる。

実際、その通りだった。僕の奇襲に驚いてくれたからよかったものの、すぐに理性を取り戻していたら、着地際を狙われていたかもしれない。

第一、魔王軍の人と相対するときは一対一なんだから、今みたいな奇襲は使えないよね……。

空中を飛ぶときの動きはうまくいったかもって思ったんだけどなぁ……。

「……ただ、まあ」

うなだれる僕に、アスカさんが遠慮がちに声をかけてくれる。

僕が顔を上げると、アスカさんがぎこちない笑みを浮かべていた。

「宙を舞っていた時の動きは称賛に値しました。奇襲としてではなく、一つの技術として昇華してみるのも良いかもしれません」

「本当ですか!?」

思わぬ言葉に僕が笑顔を浮かべてアスカさんに詰め寄ると、アスカさんはなぜか顔を赤くしながら身を引いた。

「え、ええ！　ただ、危険が伴いますから、団長と話し合って決めましょう！」

「はい……！」

新しい必殺技が誕生するかもしれない予感に、僕は両の拳を握りしめた。

うまく行ったら、新しい名前を考えなくちゃ……！

No.62：side・kota「Fry High」（後書き）

こうして厨二病的必殺技を増やす光太君なのでしたｗ　たぶん昇竜拳的な何かになるんじゃなかろうかと。

せっかく光太一人で残ったんだし、ラブコメいた感じの話を書きたかったんです……。フラグの増産ともいう。

次はアルルとの話になりますかな？

No.63：side・kota「彼女たちのスキンシップ」

騎士団長さんに空中での動きの練習をお願いした次の日。
僕は魔導師団の詰め所で魔導書を読んでいた。
団長さんによると、そもそもそんな動きの練習をしたことなんかないとのこと。
それもそうだよね、とがっくり肩を落とす僕に、団長さんは魔導師団で空を飛ぶ魔法を練習してみてはどうかと勧められたんだ。

「あんまり燃費は良くないらしいが、お前ならそんな問題にならないだろう？」

団長さんの言葉を受けて、僕は大きく頷いて魔導師団の詰め所へやってきたというわけだ。
ちょっと忘れかけてたけど、僕の元々の力は魔力の効率が普通の人に比べてかなり良いってことなんだよね。

「空を飛ぶ～魔法は～、確かに～研究されてますけど～、あまり～効率は～良くないんですよね～」

勉強に付き合ってくれているアルルさんが選別してくれた魔導書を僕の隣に置いてくれた。
僕は今読んでいる本から顔を上げて、アルルさんの方に向き直った。

「団長さんもそういってましたけど……、具体的にはどういうことなんですか？」
「う～ん～。簡単に言えば～、何を～浮力に～するかなんですよね～」

アルルさんはそう答えて、僕の目の前で軽く呪文を唱える。

「空運力（エア・クラフト）～」

アルルさんの呪文とともに、軽く風を纏いながら、僕の目の前で魔導書が何冊か宙に浮いた。

「こんな感じで～風を浮力にするか～、魔王軍のソフィアさんみたいに～魔力を浮力にするかの～問題なんですよ～」

「うーん。どっちの方が効率いいんですか？」

僕の質問に、魔導書を元のように戻しながらアルルさんは考える。

「う～ん～。現状～完成している術式で～考えると～、やっぱり～魔力の方が～効率はいいんですよ～」

「それなら……」

「ただ～、魔力の場合～かなりの～魔力量が～必要になってくるんですよ～」

魔力で飛べば、と顔を輝かせる僕にアルルさんが釘をさす。

「かなりって……どのくらいでしょう？」

「人一人を～飛ばすのに～、だいたい～二十人くらいの～魔力ですかね～？」

「二、二十……」

その数に絶句する僕。

つまり、僕が空を飛ぼうと考えたら、二十人くらいの魔導師の人たちに協力してもらわないといけないわけなんだ……。

「じゃ、じゃあ風の方はどうなんですか？」

とりあえず魔力の方はあきらめて、風の魔法で空を飛ぶ方法を聞いてみる。

こっちは属性系魔法だし、アルルさんの得意分野のはずだ。

うまくすれば……という僕の期待は、アルルさんの難しげな表情で打ち砕かれる。

「う～ん～。一応～人一人で～飛べるだけの術式は～あるんですけど～、あまり～お勧めは～できないんですよね～」

「な、なんでですか？」

僕の質問に、アルルさんはさっき飛ばしてみせた魔導書を指差した。

「この本を～飛ばすくらいなら～影響はないんですけど～、人一人の～体重を支える風って～かなり強いんですよね～」

「あ、ああ。なるほど……」

言われてみればそうか。反作用に風を利用するってことは、当然地面に対して風を吹き付けるってことだ。

地面に吹き付けられた風がそのままおとなしく散ってくれるはずもない。僕の体を飛ばしたのと同じだけの勢いで、周りに風を吹き散らすはずだ。

「つまり、周りへの被害がひどいんですね？」

「はい～。その被害を～抑える術式も～あるんですけど～、併用しようとすると～構成だけで～手一杯になっちゃって～、戦闘どころじゃないと～思うんですよ～」

「そうですか……」

つまり風を使って空を飛ぼうとすると、それ専門の術者でもない限り戦闘は非現実的ってことかぁ……。せっかく空を飛んでかっこよく戦えるかなって思ったのになぁ……。

うつむいていると、アルルさんが背後から抱き付いてきた。

「もぉ～。そんなお顔～なさらないでください～」

「え、あ？　す、すいません」

アルルさんの言葉を聞いて、思わず顔をぺたぺたと触る。

そんなに暗い顔してたかな？

アルルさんは僕の背中に抱き付いたまま、僕の顔を覗き込むように乗り出してきた。

「空を飛ぶための～術式は～効率悪いですけど、～身体を軽くするだけなら～簡単ですから～、それで～我慢してくださいな～」

「え、ホントですか！？」

「はい～♪」

アルルさんの言葉に思わず声を上げると、アルルさんが嬉しそうな笑顔になった。

そっか、体重を軽くすれば、僕の脚力でも隆司みたいに高く跳べるようになるかも！　それだけじゃなくて、走るスピードを速くできたり、いろいろ応用できるかも知れない！

「じゃあ、さっそくその術式を教えてください！」

「はい～。喜んで～♪」

「なにしとるんじゃおぬしら……」

身体を軽くできる魔法を教えてもらうように、アルルさんにお願いしているとフィーネ様がこちらに近づいてきた。
フィーネ様の方を振り向いてみると、なぜだか若干顔が赤い。

「え？　アルルさんに、魔法を教えてもらおうと……」
「いや、そうじゃなくて」

僕がありのまま応えようとすると、フィーネ様はそんな僕を遮って改めて指を差す。

「おぬしらなんでそんな体勢になっとるんじゃ……？」
「え？」

フィーネ様に言われて、改めて自分の体勢を見下ろす。
なんだか機嫌がよさそうなアルルさんの顔はいつの間にか前に来ており、椅子に座っている僕の膝の上に腰を下ろしている。
さらにアルルさんの腕は僕の首に回されており、背中は僕の負担にならないようにか机にもたれかかっていた。
いわゆる、御姫様抱っこといわれる体勢だった。

「って、アルルさん。そんな風に背中付けてたら痛いでしょう？降りてください」
「は～い～」

僕が軽く体を抱えて促すと、アルルさんは少しだけ不機嫌そうな顔になりながらも素直に降りてくれた。
そんな僕を見て、フィーネ様がなんだか慄くような声色でつぶやいた。

「いや、その反応はおかしいんじゃなかろうか……？」

「え？　そうですか？」

アルルさんがちゃんと両足で立ったのを確認してから、僕はフィーネ様に向き直る。

フィーネ様の顔はやっぱり少し赤かった。

「前から少し思うとったんじゃが……おぬし少しにょた……その……。……お、おなごに慣れ過ぎておらぬかのぅ？」

フィーネ様が少し言いよどみながら、そんなことを聞いてきた。

あー、そういえば前にも隆司に似たようなこと言われたっけか？

「ああ、はい。人より慣れている自覚は……」

「えええ～っ！？　どういうことですか～！？」

「うわっ！？」

僕の言葉を聞いて、いきなりアルルさんが両肩に手を置いて僕の体を前後に揺さぶり始めた。

「コウタ様は～！　てっきり～！　女性との～！　お付き合いが～！　ないものだと～！　思っていたのに～！」

「おち、おち、おちちっついてくだっさい！？」

「ちょ、アルルが乱心してるぞオイ！？」

「やめろ、アルル！」

がくがく揺さぶられているせいで、うまく舌が回らない僕。

そんな僕を助けるために、周りにいた魔導師の人たちがアルルさんを取り押さえてくれた。

初めこそ、周りに取りつかれても僕を揺さぶっていたアルルさんだけど、男の人が数人がかりで腕を押さえたらさすがに動きも取れ

なくなっていって、何とか僕から引きはがされていった。

「何をいきなりエキサイトしてるんだお前は！」

「は～な～し～て～！」

「はあ……はあ……」

周りの人たちに抑えられながらもジタバタ暴れるアルルさん。

僕は何とか息を整えつつ、アルルさんに説明を始めた。

「いや、お付き合いはありませんよ……？」

「じゃ、じゃあ、さっきのセリフはどういう意味じゃ？」

アルルさんの暴走を見て、びっくりしたような固まっていたフィーネ様の言葉に、僕は小さく頷きながら答える。

「歳が少し離れた姉が二人いるんですよ。それで、下の姉さんはともかく、上の姉さんがボディスキンシップの好きな人で……」

僕は苦笑しながら、向こうでの生活を思い出す。

僕の家は、僕が小さいころに両親が事故で亡くなっている。

本当に小さなころだったから、ほとんど両親のことは覚えていない。物心ついた時から覚えているのは、バリバリのキャリアウーマンとして活躍する上の姉さんと、バイトで少しでも家計を助けようとしていた下の姉さんのことだった。

どっちの姉さんも、僕を立派に育てようと頑張ってくれて、おかげで僕はこんなにすくすくと成長できた。

ただ、下の姉さんはともかく、上の姉さんはとにかく僕に抱き付いたりとか頬ずりしたりといったスキンシップが大好きな人で……。

僕の赤ん坊の頃を知っているせいか、可愛さがひとしおなんだとか。

物心ついた時から、そんな風にスキンシップを受けてきたせいで、一時期はそういう風に接するのがごくあたりまえなんだと思っていたくらいだ。

隆司に指摘されたおかげで、それは間違いだって気が付けたんだけどね。

「よく僕に抱き付いたりしてたんですよ。そのせいか、女性に抱き付かれたりしても大丈夫っていうか……」

少し懐かしい気分になりながら、僕はそう続けた。

そういえば、姉さんたち心配してるかな……。してるよね、あんなに僕のこと可愛がってくれてるんだもの……。

感傷的な気分に浸っていると、フィーネ様の表情が少し暗くなった。

「姉上がおるのか……？」

「はい。上の姉は僕と二十違って、下の姉は僕より十違います」

「ずいぶん年齢、離れてますね……」

アルルさんを取り押さえている魔導師の人が小さくつぶやいた。

確かに、かなり離れてるよね。普通なら、もう少し歳が近いものだと思うけど。

僕が苦笑していると、フィーネ様は暗い表情を振りはらうように何回か頭を振った。

「？　フィーネ様？」

「な、なんでもない！　それはともかく、だからおなごに慣れておるのか？」

「あ、はい。たぶん、そうなんじゃないかと自分で勝手に思ってるだけなんですけどね」

僕がそう締めくくると、フィーネ様が納得したように頷いた。

「なら、納得かのぅ。今までのアルルの奇行を受けてもほとんど平静を保っていられるのは」

「へ？　奇行……ですか？」

フィーネ様の言葉に、僕が気が抜けたような返事をすると、アルルさんを取り押さえている魔導師の人たちが口々に語り始めた。

「ある時は、コウタ様の背中に胸を押し付けるように抱き付き」

「ある時は、コウタ様に足を見せつけるように椅子に座り」

「ある時は、コウタ様の胸の中に思いっきり飛び込んでみたり」

「そんなことされとったのに、全く素のままに対応しとったから、ずっと不思議だったんじゃよ」

うんうんと頷くフィーネ様と魔導師の人たち。

ああ、言われてみればそういうこともされてた様な……。上の姉さんの行動とよく似てたから、あんまり気にしなかったけど。

僕はぐるりと周りの人たちの顔を見回してから、アルルさんの方に視線を落とした。

いつの間にか、アルルさんはうつむいていた。前髪に隠れて、その表情はうかがえない。

「えーっと、とりあえずそういうわけなんです。だから、そろそろアルルさんを離してあげてください」

「ああ、はいはい」

僕の言葉にうなずいて、魔導師の皆さんがアルルさんからどいていく。

うつむいたままのアルルさんは、小さく震えているようにも見えた。

「あの、アルルさん……？」

「……コウタ様」

うつむいたままのアルルさんが、少しだけ興奮したような声を上げた。

「はい？　なんです」

「これからは～！　私のことを～！　お姉さまと呼んでください～！」

アルルさんはそう叫びながら顔を上げた。

その顔は、驚くほど興奮しており、鼻の穴が少し膨らんで見えるほどだった。

「……はい？」

思わず目が点になりながら答える僕に、アルルさんは勢いよく抱き付いてきた。

「私の行動が～！　コウタ様の～！　お姉さまと～！　同じであるならば～！　向こうでの～！　生活を～！　忘れぬように～！　私が～！　コウタ様の～！　お姉さまになります～！」

「は、はあ……」

アルルさんの体を危なげなく受け止めながら曖昧に頷く僕。

えーっと……。一応、僕のことを心配してくれているのかなぁ？

困って周りを見回すけれど、周りの人たちはあいまいな笑みを浮

かべながら肩をすくめるばかりだった。
フンスフンスと鼻息も荒いアルルさんは、僕の顔を見上げながらやっぱり興奮したように叫んだ。

「さあ～！　私のことを～！　お姉さまと～！　呼んでください～！　さあ～！」
「……」

困り果てて口を噤んだ僕は、天を見上げて今ここにはいない親友の名前を呼んだ。
隆司、できれば今すぐここにきてアルルさんにツッコみを入れてあげて……。

「だが断る」
「なんでありますか急に」
「いや、光太になんか言われた気がして……」

No．63：side・kota「彼女たちのスキンシップ」（後書き）

テレパシーはキッチリ隆司に届いた模様です。そして拒絶されたわけですが。

そんなわけで実は両親が不在だったらしい光太君。その分、上のお姉さんから過剰な愛情を受け取っていたようですが……。まあ、末弟が美少年だったら仕方ないわな！

次も光太君のお話！　あれかなぁ！　メイドさんとか来ちゃうかもなぁ！

No．64：side・kota「軽い午後のティータイム」

魔導師団で作ってもらった、身体を軽くするための魔導式が書かれた紙を手に、僕は王城の中で僕と隆司に与えられた部屋にいた。

次の会戦に向けて、この魔法を完全に覚えるためだ。

魔法を発動する際、一番重要なのは魔術言語（カオシック・ルーン）の形を正しく覚えることなのだとか。呪文の詠唱とは、魔術言語（カオシック・ルーン）の形を正確に覚えるためのものであり、呪文自体がなくても魔法が発動する理由の一つなんだとか。

でもそうなると、真子ちゃんの魔法発動には疑問が多い。

つまり真子ちゃんは見たことのない図形を、こちらに来るのと同時に覚えていたということになる。どのタイミングでそれを習得したのか、と言われれば間違いなくこの世界に渡ってきたときっていうことになる。

でも、僕たちが潜ってきたのは光に満ち溢れたトンネルのような場所だった。少なくとも、魔術言語（カオシック・ルーン）を与えられてもらえるような場所には思えなかった。

まあ、これは僕の勝手なイメージだから、実際は違ったのかもしれない。そんな風に考えながら、紙に書かれた魔法式を頭の中に詰め込んでいくと、部屋の扉を小さくノックされた。

「はい、どうぞ」

「失礼いたします」

僕の返事を聞いてから、扉が開いてメイドさんが台車を押しながら入ってきた。

僕と同い年くらいかな。台車の上にはティーセットが乗せられている。

「紅茶をお持ちしました。コウタ様、いかがでしょうか」
「あ、はい。ありがとうございます」
僕はお礼を言って、頭を下げる。
メイドさんが小さく微笑んで、僕のすぐそばにあった小さな机の上に紅茶と、この世界のクッキーを乗せてくれる。
メイドさんが、砂糖壺の中のスプーンに手をかけて僕に問いかける。
「お砂糖はいくつ？」
「えーっと……今日は良いです」
「はい」
僕は砂糖を断って、まだ湯気の立つ紅茶に口をつける。
隆司や礼美ちゃんは、あまり紅茶のストレートは好きじゃないみたいだけど、僕はこっちの方が好きかなぁ。
そんなことを考えていると、メイドさんは扉付近まで台車を押し、そして一度僕の方に振り向いて頭を下げてくる。
「それでは、何か御用がありましたらお呼びください」
「はい、わかりました」
僕は微笑んでお礼を言う。
こんな感じで、結構メイドさんが部屋に来てくれるから、みんながいなくても結構さびしくはない。
隆司や真子ちゃんが一人だけ残った時も結構心配だったんだけど、これなら大丈夫だったね。
メイドさんは少し頬を赤くしながら、僕に微笑み返してそのまま退出していった。
外が何やらにわかに騒がしくなったみたいだけど、僕は気にせず

魔法式が書かれた紙に目を落とす。
魔術言語（カオシック・ルーン）の発音自体はそんなに難しくはない。発音を間違えた程度で、魔法の発動を失敗することはないってフィーネ様も言ってたし……。
問題は形だ。これを一つでも間違えると、魔法は発動しなくなるらしい。
もちろん、今回僕が覚えようとしている魔法を一つ覚えているだけならきっと誰にでもできる。でも、魔導師の人たちは千差万別の魔術言語（カオシック・ルーン）を一言一句覚え、新しい魔法を日々研究している。
この世界で魔導師になる才能があるというのは、この魔術言語（カオシック・ルーン）を覚えることができるかどうかが重要らしい。実際フィーネ様は、魔導師団が保管している魔術言語（カオシック・ルーン）の教本に書かれている文字をほとんど記憶しているとのことだ。
本が好きか、勉強が好きでないと、この世界の魔導師は務まらないんだなぁ、と魔法式の書かれた紙を伏せて、目を瞑って魔術言語（カオシック・ルーン）の内容を覚えているか確認。
すると、またノックされた。今度はなんだろう？

「はい？」
「失礼します」

僕が返事をすると、やっぱり台車を押しながらメイドさんが入ってきた。
その台車の上には、たくさんのしわくちゃのシーツが乗せられていた。
メイドさんは僕の目の前に行儀よく立つと、小さくお辞儀した。

「ベッドのシーツの交換に参りました」
「あ、はい」

ああ、ベッドのシーツの交換かぁ。よく見れば、台車の下の段にはきれいに畳まれたシーツが乗せられていた。
メイドさんは、手慣れた様子で二つのベッドからシーツを取り外し、きれいなシーツと取り換えている。
この部屋は僕と隆司とで使っている。でも、今は隆司がいないからベッドは片方しか使っていない。
それでも両方のベッドのシーツを交換するのは、さすが王城だね。いつでも清潔に保ってるんだ。
ベッドのシーツを交換し終えたメイドさんは、台車を押しながら外に出ていき、扉の付近で僕に一礼した。

「失礼いたしました」
「いえ、ありがとうございます。お仕事がんばってくださいね」
「あ……はい！」

僕がそういうと、メイドさんは嬉しそうに頷いて扉を閉めた。
仕事を頑張っている人には、お礼の言葉は欠かせないよね。
またなんだか部屋の外が騒がしくなったけれど、僕は気にしないで魔法式の暗記を続ける。
魔法式の暗記は、とりあえず終わった。
あとはきちんと発動するかどうか……。
僕は目を瞑って魔術言語（カオシック・ルーン）を一つずつ、確認するようにつぶやいていく。
そして、最後にキーワードとなる、魔法の名前を口にする。

「……軽身法（ボディ・ライト）」

魔法の発動と同時に、僕の体が軽く発光する。
確か、こんな感じで体が光っている間は体が軽くなるんだよね。
確認するために軽くジャンプ。

「……」

うん、よくわからない。

とはいえ、部屋の中じゃ大きくジャンプするわけにもいかないよね……。

僕は部屋をぐるりと見回す。

目に入ったのは、両開きの大きな窓。

僕は小さく頷いて窓に近づき、鍵を開けて窓を開く。

ここは確か二階くらいだったよね。なら……。

窓から体を乗り出して、下を見下ろす。

下に見えるのは雑木林ばかり。人影らしいものは見えない。

僕はもう一度頷いて、窓のふちに足をかけ。

「……ハッ！」

そのまま空中に身を乗り出す。

今僕が使っているこの魔法、空中に高くジャンプするために開発された魔法で、身体が軽くなる代わりに身体も高高度のジャンプに耐えられるように頑丈になるらしい。

この高さから落ちて何ともなければ……！

果たして僕の体は空中をまっすぐ落ちていき、地面に着地。

ストン、と軽い音を立てて僕の体は地面に無事に降り立った。

普通に落ちたらもっと大きな音が出そうなものだよね……。

僕は足首を確かめるように、つま先で地面を叩く。

「うん、足首も大丈夫かな……」

小さくつぶやき、まだ体が光っているのを確認して、まだ開きっぱなしの窓を見上げる。

そして屈伸し、大きくジャンプ！
僕の体はいつも以上の軽やかさで上昇し、あっさりと開きっぱなしだった窓に手が届く。
よし！　魔法はきちんと発動してる！
魔法の成功を確信し、僕は軽くなった体を部屋に引き上げる。
すると、部屋の中にいつの間にか立っていたメイドさんが驚いて尻餅をついてしまった。

「キャッ！？」
「えっ！？」

まさか部屋に人が入っているとは思わなかった僕は、あわてて尻餅をついたメイドさんに駆け寄った。

「大丈夫ですか！？」
「あ、はい、大丈夫です！」

メイドさんは僕の言葉に大きく頷いてくれた。
ああ、よかった。怪我とかさせたら申し訳ないし……。
にしてもこのメイドさんどこかで……。

「って、あ。メアちゃん？」
「え、はい！？　そ、そうです、メアです！」

僕の言葉に、びっくりしたように何度も頷くメアちゃん。
ああ、やっぱりそうか。前に一緒にトランプで遊んだメイドさんだ。
この王城で働くメイドさんは結構人数がいて、その上王城も広い関係でなかなか会えなかったんだよね。

「久しぶりだね。元気だった……って聞くのは変かな？」
「い、いえ！　そんなことは！」

自分の言い草に苦笑する僕に、メアちゃんはブンブンと首を横に振って否定した。
そして、そのまま小さく二度三度深呼吸を繰り返した。

「スーハー……。え、ええっと。最近は研修を繰り返していましたので、こうしてコウタ様のもとへとやってくる機会がありませんでしたから……」
「へー、研修受けてたの？　どんな研修だったか、聞いていい？」
「は、はい。主に、こうした部屋のお掃除に関して、その、いろいろ」

メアちゃんは、目を輝かせて詰め寄る僕に目を白黒させながら、仰け反るように答えてくれた。
っと、こんな風に詰め寄っちゃ悪いよね。

「あ、ごめんね。急に」
「い、いえ！　そんなことは！」

僕が謝って身を引くと、メアちゃんは慌てて手を振り乱し、僕の手を引っ張った。
いきなりでびっくりした僕は、首を傾げてメアちゃんの方を見る。

「メアちゃん？」
「ふえ？」

メアちゃんはしばらく握った僕の手と、僕の顔と見比べ。

「あ、ひゃ！？　も、申し訳ありまひぇん！」

弾かれたように僕から手を離した。

いや、それは良いんだけど、なんだか挙動不審だなぁ。

顔も赤いし……。

「メアちゃん、ひょっとして風邪をひいてるんじゃないの？」

「ひゃ！？」

僕はメアちゃんの前髪を掻き揚げるように額に手を当てる。

メアちゃんの顔はますます赤くなっていった。

うーん……。やっぱり少し熱いかなぁ。

「メアちゃん。無理とかしてない？　少し熱いよ？」

「ひ、ひえ！　大丈夫です！　私はとても元気です！」

ブンブンと首を振って否定するけど、顔の赤みは引かない。

うーん、メアちゃんは頑張り屋っぽいし、頑張りすぎてるのかも。

ちょっとごめんね？

僕は尻餅をついたままのメアちゃんの背中と膝の下に手を差し込んで、そのまま持ち上げる。

いわゆる、御姫様抱っこだ。

「よっと」

「ひゃぁ！？」

メアちゃんが驚いて手を振り乱すけれど、僕はそのままメアちゃんをベッドの上に運んでしまう。

そしてベッドの上にメアちゃんを寝かせ、その上に掛布団を掛けてあげる。

「少しでいいから、眠るといいよ。風邪は引きはじめが肝心だし」
「い、いえ!?　決して風邪なんかじゃ……！」

メアちゃんがより一層顔を赤くして首を振る。
うーん、なんか症状が悪化してるような……。
と悩んでいると、急に扉が大きな音を立てて開いた。

「え!?」

驚いてそっちを振り返ると、メイドさんが何やら団子になって詰め寄っていた。
ちょ、なになに!?

「ちょっとメア！　抜け駆けはずるいわよ！」
「ひえ!?　い、いえ!?　決して抜け駆けなんかじゃ……」
「じゃあ、なんでコウタ様のベッドで寝てるのよ！」
「ひえええ!?　こ、これコウタ様が寝てらっしゃるベッドなんですか!?」
「え?　うん、そうだけど……」

突然のことに面喰いながらも、僕は聞かれたことに答える。
隆司のベッドは、隆司に悪いかと思って……。

「ひえええ!?　もう大丈夫です！　元気になりましたー!?」
「あ、だめだって！」

突然飛び上がったメアちゃんの両肩を抱いて抑える。
もう、身体の調子が悪いのに無理したら……。
すると、メイドさんたちがメアちゃんの体をベッドの上から下ろ

した。

「大丈夫ですコウタ様！　メアの面倒は私たちが見ておきますから！」

「ほら、大丈夫!?　というか、あなた仕事はしたの!?」

「はい、大丈夫です！　すいません、仕事はまだです！」

「って、ちょ……」

反論する間もない動きだ。

っていうかメアちゃんは、風邪ひいてるっぽいんだから無理させたら……。

なんて僕が思っていると。

「なにをしているんですか。皆さん」

部屋の空気を凍らせる、絶対零度の声が部屋の入り口から聞こえてきた。

メイドさんたちだけでなく、思わず僕も身を凍らせる。

声が聞こえてきた方に顔を向けると、そこにはメイド長さんが立っていた。

メイド長さんは、感情を感じさせない眼差しでメイドさんたちの群れを見据えて口を開いた。

「仕事はきちんと終わらせているんですか？」

「「「「「……い、今すぐ終わらせます！」」」」」

メイドさんたちは口をそろえてそう叫び、パタパタと音を立てながら部屋から出ていった。

かなり慌ててるみたいだったけど、それでも騒々しい音を立てないのは職業訓練のたまものかなぁ……。

メアちゃんも大急ぎで部屋の中央に置かれたバケツを手に取って、この部屋の水拭きを始める。
メイド長さんはそんなメアちゃんの姿を見てため息をつき、僕の方を見た。

「コウタ様」
「あ、はい？」
「人に対して優しいのはよいことですが、感情の機微に疎いのはいかがなものかと思いますよ」
「……？　はあ……」

メイド長さんの言っていることの意味がよくわからず僕が首を傾げると、メイド長さんはまた一つため息をついてメアちゃんの掃除の手伝いを始めた。

「？？？」

僕は再三首を傾げながらも、掃除の邪魔をしないように部屋を出た。
ふと、外を見つめると太陽が落ちていくところだった。
そういえば、隆司たちが城を出てから三日か……。順調にいけば明日にはカルタに着くんだよね。
僕はグッと拳を握って城の外へと駆け出す。
領地を取り戻してくる隆司たちに、負けないように頑張らないと……！

Ｎｏ．６４：ｓｉｄｅ・ｋｏｔａ「軽い午後のティータイム」（後書き）

メイドさんたちには、半ばアイドルのような扱いを受けているようですね光太君。

頑張って、その地位を打ち崩してもらいたいものです。隆司と真子には。主にフラグ的な意味で。

次回は久しぶりに隆司たちの視点ですよー。

No．65：side・ryuzi「農耕の町、カルタ」

「ここが？」
「はい！　カルタであります！」

王城を出発して、四日。ほぼ定刻通りに今度奪還する予定の領地であるカルタへと到着した俺たち。
俺は屋根の上から飛び降りながら、カルタの様子を伺ってみる。
パッと見は穏やかな農村という感じだ。王都と違い、木造のＲＰＧとかでよく見かける一戸建ての家が立ち並び、村のはずれの方には葦によく似た植物がたくさん生えている。
確かカルタは紙の原料になる植物を生産している領地だったはず。となれば、あれが例の紙の元か。
なんてことをぼんやり考えていると、一人のおっさんが俺たちの方に近づいてきた。

「も、もしや王都の騎士団の方ですか？」
「ええ、そうですが」

サンシターと一緒に御者席に座っていた副団長さんが頷いた。
おっさんはその言葉を聞いてほっとしたように頷いた。

「よかった～。実は、この町を占領している魔王軍の連中から伝言を預かっているんです」
「伝言ですか？」
「はい。畑の向こう側の平野で待つ、と伝えろと言われてたんです」

畑の向こう……。件の畑ってのは、こっから見える葦似の植物畑の向こう側ってことかね？

「わかりました。ありがとうございます」
「ええ、よろしくお願いしますね」

副団長さんのお礼に頷いて、おっさんは立ち去った。
馬車の中からぞろぞろ出てきた連中の方を向き、俺はコキリと首を鳴らした。

「んじゃまあ、行くかね？」
「行くのかよ。ぜってー罠じゃん」

胡散臭そうにつぶやいたジョージ。わざわざ町の人間に伝言を伝えたのが気になってんのか？

「んなこと言ったって、今までとそう変わったもんじゃねぇだろ。レストの時なんかと、ちょうど似た状況だろ？」
「あのときは、サンシターに伝言を預けたのよねー」
「あのときは生きた心地がしなかったであります……」

俺の言葉に、サンシターがぶるりと身体を震わせた。
俺は光太から話を聞かされただけだが、このカルタとレストの状況は似通ってると思う。

「確かに、カルタの人たちは普通に生活できてるみたいだね」

礼美が少し嬉しそうにカルタの様子を見ながらつぶやいた。
そう。遠目から見ても、正直カルタが魔王軍に占領されているなんて信じられないくらい平和なのだ。
まあ、魔王軍の侵略のやる気のなさは今に始まった話じゃないが、光太から聞いたレストの状況も似たようなものだったらしい。

あそこは貿易の中継地点的な領地でもあったため、ほとんどの領民は家にこもっていたらしいが。

「少なくとも、ヨークの時よりは平和といえそうですね」

「そうでありますね」

ヨハンの言葉に、サンシターが同意する。

たしかに、ヤクザ骸骨がいたヨークよりは確かに平和だ。

だが、そんな二人の様子にフォルカが首を横に振った。

「っつっても、ジョージのいうことも無視できないだろ？」

「伝言を伝えた、ということは当然待ち伏せているでしょう。そのことは考慮しておくべきですね」

副団長さんも、少しこの状況を疑うように考え込んだ。

ふーむ、ヨークよりはクリアな状況だと思うんだがなぁ。

なんて思いつつ、俺は拳を握ったり開いたりする。

今回も、また石剣は置いてきた。

まあ、本当なら持ってきたかったんだが、思っていた通り石剣を積み込もうとすると、馬車の轍がミシリといやな音を立てたのだ。

どうも重さが一点集中しているせいで、馬車に対する負担も半端ないらしい。

つまり、今回も俺は素手なわけだ。前回みたいな巨大機械獣に出てきられたら、俺は役に立てねぇんだよなー。

「真子ちゃん、真子ちゃん。真子ちゃんは、どうしたらいいと思う？」

「そうねぇ……」

礼美が我らが軍師殿にお伺いを立てた。

真子は腕を組み難しい顔をしたが、すぐにポーズを解いてどうしようもないという風に肩をすくめた。

「まあ、いつも通りに正面からぶつかるしかないんじゃない？」
「いいのかよオイ」
「向こうが待ち受けてるんじゃ、今から不意を衝くのは無理でしょ？」

ジョージはそれでも不安そうに声を上げるが、真子は諦めたように首を横に振った。
ジョージ、ひょっとして前回のことがトラウマになってんのかね？　あの骸骨の群れは、確かにちょっと夢に出る勢いだったしな。

「では、軍師殿の同意も得られたことだし……早速いくかね」
「おー」

俺が全員を促すように歩きはじめると、礼美も同意するように掛け声をあげてついてきた。
真子がサンシターに、今晩の宿を確保するように指示するのを背中で聞きながら、俺はカルタの町並みに目を向ける。
牧歌的とでもいうのだろうか？　何ともゆっくりと時間が流れているように感じられる空気が流れている。

「はぁ……」

と、突然疲れたような溜息が聞こえてきた。
なんだなんだと振り返ると、すぐ後ろまで追いついてきていたフォルカの姿が。

「んだよ急にため息つきやがって」

「だってよ、隊長……」

フォルカは沈うつな表情で俺を見ると、何かを訴えるように俺の肩をつかんだ。

「前回の会戦にはなぜか猫耳がいなかったんだぜ！？　今回もいるかどうか！」

「んなもんテメェ、一ヶ月嫁に会えんかった俺の前では塵も同然だっつぅの！　悶絶して死ね！」

たかが二週間程度で根を上げるんじゃねぇよ！　こちとら、嫁とのニアミスが一か月続いてるんだっつーの！

と、俺の頭をいきなり真子の奴がはたいた。

「道のど真ん中で吠えんな」

「うちの隊員がヘタレたことぬかしやがるからだっつーの！」

「どっちにしろ、あんたが原因じゃない」

真子はうっとうしそうな顔で俺を一睨みしてから、指定された場所に向かって歩きはじめる。

くっそぅ。

「隆司君、大丈夫だよ！　今日は会えるよ！」

「根拠のない慰めありがとうよ」

俺を励ましてくれる礼美だが、俺には乾いた笑みしか浮かばない。

本当に会えるんなら恩の字なんだがねぇ。

俺は先を行く真子の背中を追うように歩く。

カルタの街並みを抜け、広々とした葦似畑へと出てきた。

全長は、人の身長と同じかそれ以上くらいか。結構デカいな。

おかげで畑の向こう側の平野とやらの様子が全く伺えない。
真子が、畑で働いていたおっさんに声をかける。

「この畑って、そのまんま突っ切っていいの？」
「ん？　ああ、いいよいいよ」
「大丈夫なんですか？」
「アシクサはその程度じゃ、いたまねぇから気にすんな！」

美少女に声をかけられて気が大きくなったのか、ずいぶんと気風のいい返事が返ってくる。
しかしありがたい。葦似……アシクサの畑はかなり広大だ。まわり込めと言われたら、それだけで体力を消耗しちまいそうだ。
俺たちはガサガサと音を立てながらアシクサの畑を突き進む。

「ジョージ君大丈夫ー？」
「なんで俺限定なんだよ！　平気に決まってんだろーが！」

道中、礼美の心配そうな声にジョージが怒鳴り声を上げたりしたが、何とかアシクサ畑を抜ける。
そしてその先に待っていたのは。

「来たか、アメリア王国騎士団諸君」

天使（嫁）でした。

「うおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！　嫁ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」
「嫁というなと言っているだろうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！♪」

その姿をサーチした瞬間に加速装置か何かを使ったように爆速ダッシュする俺を、嫁は華麗にクロスカウンターで迎撃。ありがとうございます！

「そう言えばこのアシクサって、紙以外にも使えるんですか？」
「紙以外にも、布にも加工できる万能植物ですよ」
「へー」
「ま、真子ちゃん……」

外野がなんか他人のふりしているが、俺にとってはどうでもいいことだった。

「フゥハハハァー！　ほんと久しぶりだなぁ！」
「貴様も変わらんようで何よりだ！」

嫁のクロスカウンターで吹っ飛ばされたままの距離を保ちつつ、胸を張る俺にソフィアは腰のレイピアを引き抜いて突き付けてきた。
ああ……全く変わらない！　このやり取りもずいぶん久しぶりなんだよなぁ！
と、そんな嫁の背中からぴょっこりと尻尾が見え隠れした。いや、ソフィアにも尻尾は生えてるけど、ネコっぽい尻尾が生えてきた。

「相変わらずのようで、にゃによりだにゃー」

そんなセリフとともに顔を出したのは、嫁の親衛隊の一人である……えーっと……。

「確かミミルだっけか？」
「その通りにゃーん」
「ネコ耳ぃー！！」

俺が名を当てるのと同時に、勢いよくフォルカが飛びかかっていった。

「ぬぁ！？」
「ぎゃおー！？」

その唐突さにびっくりした嫁が、横殴りにレイピアでフォルカを迎撃する。

斬撃が衝撃波にでもなったのか、中空で迎撃されたフォルカは哀れ、まっさかさまに撃沈する。

とびかかられたミミルはミミルで、嫁の背中に隠れたままびっくりして動かない。

ああ、ちょうど猫があんな感じで固まるよなー。

「負けるかぁー！」
「にゃー！？」

だが、迎撃されたはずのフォルカは、血反吐を吐きながら復活する。

うむ。素晴らしきバイタリティ。それでこそケモナー小隊の一員だ。

「こ、これがミーコの言っていた、ネコ耳男！」
「その通り！　どうかそのネコ耳モフモフさせてください！」

ミミルが何かに慄くように叫ぶと、フォルカは肯定と同時に勢いよく土下座の体勢に移行した。

と、そんな直球の姿勢にミミルは、顔を赤らめつつ身体をくねくねしてソフィアの肘を引っ張った。

「にゃ、にゃーん……。ど、どうしよ、ソフィア様ぁ」
「なんで私に言うんだ貴様」
「あぁん」

当のソフィアは、肘を引っ張るミミルの手を尻尾で弾いた。
そんなミミルに、フォルカは土下座姿勢のまま詰め寄るという器用さを見せる。

「モフモフがだめならせめて肉球だけでも！　それさえあれば、もう何もいらない！」
「にゃ～ん！　こんなに熱烈に求められるなんて……あ、あちし、落ちちゃうぅ！」

フォルカの猛攻に、ミミルは迷うように、さらに体をくねらせる。
フ。微笑ましいじゃないか。しからば俺も。

「うおー！　ソフィー！　うおー！」
「せめて人語ではなせぃ！」

両手を前に突き出して勢いよく迫るも、嫁の尻尾アタックで迎撃されてしまう。あぁん。

「フォルカに負けない勢いを表現したかった！　反省も後悔もしない！」
「後悔はともかく、反省はしてほしいのだが」

俺の姿勢に何か文句でもあるのか、ソフィアが半目でこちらを睨みつけてくる。
うーむ、嫁に言われると弱い。うむ、とりあえず考えて……。

「なにをしているのですか、あなたたちは」
「んー？」
そんな俺たちのスキンシップに、冷たい声が割って入ってきた。
ソフィアの背後からだ。
そちらに目を向けると、いつかのバイザー女騎士がそこに立っていた。
「む、クロエ……」
「ソフィア様、相手は敵でしょう。何を悠長に会話しているのです。敵であるなら、領地を奪わせぬように追い払ってください」
「む、すまん」
クロエと呼ばれた女騎士は、バイザーに隠れた視線をソフィアに向けながら、冷徹な声で鋭く指摘した。
ソフィアはそんな女騎士に頭を下げて謝罪し、俺はこっそり嫁の尻尾に近づいていく。
「貴様もだ！　敵に相対するのに、そのようなふざけた態度はなんだ！」
「ふざけてねーよ！　俺はいつだって真剣だよ！」
「やめんかばかたれ！？」
クロエの指摘が俺に向く。
俺は嫁の尻尾に頬ずりしながら反論するが、即座に嫁に尻尾を取り上げられた。あぁん。
「もうちょっと鱗の感触を堪能させて！　一ヶ月会えなかったんだよ！　我慢したんだよぉ！」

「やかましい！　鱗だって、感触あるんだぞ！？」
「……」
俺の言葉にちょっと顔を赤くする嫁。
ほほぅ、いいこと聞いた。今度は全身くまなく鱗を舐めつくし……。
などと思考する俺の視界の端で、クロエが腰のロングソードを引き抜いた。
そして、音も声もなく、俺の首をはねとばそうと刃を叩きつけてきた。
「ん？」
「クロエ！？」
嫁の驚いた声と、俺が刃を弾き返す音が重なる。
刃を弾かれたクロエは、ギリッと音が聞こえてくるほど歯を軋らせ、明確な怒りのこもった声を俺にぶつけてきた。
「貴様のふざけた態度が癪に障る……！　ここで始末してやる！」
「ほう……よかろう、やってみろ」
俺はそんなクロエに対し、片手で顔半分を覆い、身体を斜めに傾かせながらはっきりと応じた。
「この辰之宮隆司に対して！」

Ｎｏ．６５：ｓｉｄｅ・ｒｙｕｚｉ「農耕の町、カルタ」（後書き）

クマ吉になったりＤＩＯ様になったり、いろいろ忙しい隆司です。
もうニコ厨でいいかこいつは。
そして久しぶりに登場の、バイザー女騎士。今回はソフィアに付き合っているようですがはたして……。
次回は真子ちゃん視点。実は始まっていた戦い編です。

No．66：side・mako「アシクサ畑で戦って」

バカ二人が特攻し、前に出ていったら案の定、アシクサ畑の中からあたしたちを包囲するように魔王軍の連中が姿を現した。

「おい、やっぱり罠じゃねーか！？」

「そんなのわかってたことでしょうが」

ジョージの奴が慌てたように抗議の声を上げるけど、あたしはため息ひとつ吐いてすませる。

罠の奇襲も込みで、相手の指定に乗ったんだからこの程度は想定内だ。

さて、相手も結構な人数がいるわね。囲いを突破してバカ二人と合流するか、各個撃破するか。

「撃てー！」

あたしが迷っていると、リーダー格らしい男……ネズミかしら？ともあれリーダーが一声叫ぶ。

すると蛇の下半身を持つ少女……ラミア、っていうんだっけか？まあ、とにかくラミアの少女が前に出てきて、一斉に魔法を解き放った。

「盾よ！」

「防障壁（シールド）！」

あたしと礼美が両脇に立ち、魔法を防御する。

が、魔法は一発では終わらず、立ち代り入れ替わりでラミアたちは魔法を連発する。

「フハハハ！　貴様らを自由にはさせんぞ！」

ネズミのリーダーが偉そうな声を張り上げる。

「まずはソフィア様で、貴様らの主力であるあの男を分断し、我らが誇る魔導師たちで貴様らを封じる！　この囲い、突破できるものならしてみるがいい！」

聞きもせんのによう喋ること……。

「くっそ！　おい、どうすんだよ!?」

「落ち着きなさいよ」

相手側に包囲されるって状況になれないのか、ジョージがやたら慌てたような声を上げる。

前回の骸骨包囲と似たようなもんでしょうに。魔法を連打で撃たれてるってのが、精神的にきついのかしら？

とはいえ、いつまでもこの状況は維持できないわね。

「ヨハンさん、副団長さん！」

「「はい！」」

あたしは二人に呼びかけ、防御を解く。

「礼美！　こっちも防御！」

「わかった！」

振り向きざまに、礼美に指示し、あたしが解いた分の防御を敷かせる。

即応で、二枚目の盾を出した礼美にはあっぱれだけど、そう長々と持つわけでもない。
素早く構成を編み上げ、あたしは地面に両手をついた。
「隆起岩掌（アースハンド）！」
ややアレンジが加えられた魔法は、ヨハンさんと副団長さんの足元に発動し、その体を斜め上の方へと跳ばした。
空中を飛んでいく二人は、礼美が張った障壁も、魔王軍が撃つ魔法すらも飛び越えて、ラミアたちの群れの中へと飛び込んでいった。
「な、なんだとぉ！？」
ネズミリーダーの無様な叫び声と、ラミアたちの悲鳴が上がる。
副団長さんとヨハンさんは跳びこむだけではなく、手早く身近なラミアから当身なんかで気絶させて、魔導師たちを無力化していっている。
「ほら、陣が崩れたわよ！」
「お、おう！　光矢弾（ライトボウ）！」
あたしの指示に、やや戸惑いながらも魔法でラミアたちを撃つジョージ。
ラミアたちは跳んできた副団長さんや、魔法の矢を交わしながら散り散りに散っていく。
「くっそー！」
まあ、それでもあたしらに向かって魔法を放ってくる余裕があるやつもいるんだけどね。

「強風撃（ブラスト・ウィンド）！」

飛んできた風の刃を、同じ風の魔法で無力化する。

と、今度は剣やら鎧やらを身にまとった戦士タイプの魔族たちが出てくる。

「えぇい！　その程度で我らの包囲網を敗れると思うな！」

まだヨハンさんの手にかかっていないらしいネズミリーダーの声が聞こえてくる。

二段構えってわけ？　用意周到ね。

こっちの近接担当はみんな離れた場所にいる。ちょっち厳しいかしら？

「礼美！　副団長さんと合流するわよ！」

「ＯＫ！」

向かってきた魔王軍の奴を盾で弾き飛ばしながら、礼美が威勢よく返事をする。

合流する人はどちらでもいいといえばいいが、やはり近接戦闘で一番強いのは副団長さんだろう。なるべくなら、私たちを気にする余裕がある人に守ってもらいたい。

「ジョージ！」

「光槍連弾（ディバイン・ファランクス）！」

あたしの呼びかけに、ジョージが無数の光の槍を解き放って答える。

光の槍が、魔王軍の戦士たちを穿ち、副団長さんへの道を開く。

あたしたちはその道を駆けた。
駆けてくるあたしたちの姿に何をしたいのか察したのか、副団長さんは手槍を操りながら、あたしたちの方へと駆けてきてくれた。

「副団長さん！」
「はい、下がってください」

あたしの呼びかけに冷静に答え、副団長さんは素早く駆ける。
そして魔王軍の戦士たちに一撃を見舞い、あっさりと撃沈していく。
こうしてみると、魔族が人間より身体能力に勝るってのがウソのようだ。
でも、副団長さんの技量が連中の身体能力を上回ってるってことなのよね。
あたしは副団長さんが稼いでくれた時間で、何とか今まで練っていた構成を解き放つ。

「集え天星（サテライト・シールド）！」
「ぬあ、まずい！？」

あたしの唱えた呪文を聞いてか、ネズミリーダーが慌てたような声を上げる。
フン、こっちの魔法もそろそろ駄々漏れかしら？　とはいえ、あまり時間をかけるつもりも。
とあたしがつらつら考えていると、すごい音を立てて隆司が吹っ飛んできた。
しかもあたしに向かって。

「どぉうわっ！？」
「ちょ！？」

慌てて天星のうち一つを飛ばしてガード。
詠唱破棄で障壁を張るけど、飛んできた勢いが強すぎたせいで天星が砕け散ってしまう。

「げっほ！　……なかなかやるもんだぜぃ」
「渋く決めてんじゃねーわよ！」

腹を押さえながら不敵に笑う隆司の後頭部をあたしは叩いた。
なによ、さっきバイザーした騎士と戦い始めたはずだけど、何で吹っ飛んで来てんのよ！？
と、件のバイザー騎士がこちらに駆けてきていた。
表情はうかがえないけど……なんか鬼気迫る様子なんだけど。

「気ぃ付けろ！　あの騎士、結構やるぜ！？」
「ならあんたが相手なさい！」

あたしは隆司の背中を蹴っ飛ばしながら、慌てて下がる。
隆司は掌に拳を打ち合わせ、勢い良く立ち上がった。

「おっしゃ、こいやぁ！」
「――――！」

隆司の呼びかけには答えず、騎士は刃を叩きつける。
隆司は刃の側面に拳を入れて、その軌道をそらし、拳を突き入れる。
だが騎士は素早く剣を引いてそれを防御。

「ちっ！　やっぱりなかなか入らねぇなぁ！」

どこが楽しげな隆司の奴に対し、騎士はあくまで黙秘を貫く。
なんつーか……今までの魔王軍の連中とはどこか違うわね。
ソフィアやヴァルトあたりなら、隆司の存在を喜びそうなもんだけど……。
あたしは天星を操って適当に周辺の魔王軍をあしらいながら、隆司に問いかけた。

「そういやあんた、ソフィアはどうしたの！？」
「それがこの騎士ねーちゃんが邪魔してくれてな！　まだ一ヶ月分の充電終わってねぇのに！」
「充電ってなんだよ……」

隆司の言い草に呆れつつ、ソフィアの姿を探す。
あの子のスピードは、厄介だ。簡単に戦場をかき乱せるスペックなのだから、放置して何をされるか……。

「あ、いた」

思いのほか早く発見でき、なんだか間抜けな声を上げてしまう。
最初に隆司とド突き漫才していた場所から一切動いていない。
そして隆司と戦う騎士の背中をなんかさびしそうな眼差しで見つめていた。
なんであんな切なそうな眼差ししてんのよ……。

「にゃ～ん～♪　フォルカってば、てくにしゃ～ん～♪」
「もふもふー！」

そのすぐそばでなんか変態どもが乳繰り合ってたけど、そっちにはつつがなく光槍撃（スピア・スマッシャー）を叩きこんでおくとする。
ともあれ、ソフィアの方が動く気がないというのであれば、それ

で構わない。そもそも、隆司とのタイマンを望んでた節もあるし……。

……ああ、だからあんな顔してるのか。

「ちょっと隆司。嫁さんほっといて浮気は感心しないわよ？」

「バカ野郎お前、俺の心は嫁一筋だっつーの！」

あたしが茶化すように言ってやると、怒りの声とともに放たれた蹴りが、騎士の体を容赦なく吹き飛ばした。

「ぐぅっ……！？」

その思わぬ力強さにか、騎士はようやくうめき声を上げた。

「こんな堅物より、嫁の柔らかい鱗を堪能したいというのに、空気読まん奴め！」

「なに、ソフィアの鱗ってやわらかいの？」

その言葉にあたしが胡乱げな顔つきをすると、隆司は何を当然という顔でうんうん頷いた。

「そりゃお前、最高級羽毛枕にすら劣らぬ最高の抱き心地を約束してくれるぞ」

「へー」

聞いておいてどうでもよさそうに返事するあたし。

だが、そんなあたしらの会話を快く思わぬ奴がいた。

「――――」

さっき隆司の蹴りを喰らってうつむいたまま、押し黙っているバイザー騎士だ。
バイザー騎士はおもむろに手に持った剣を高く掲げると……。

ブォン！

と勢いよく振り下ろした。
同時に、衝撃波が斬撃と変わりそのまま地面を穿ち抉る。
そのままの勢いで、あたしが飛ばしていた天星が一つ真っ二つにされてしまう。

「うぉ！？」
「きゃっ！？」

そのあまりの唐突さに、あたしと隆司は思わず飛び退く。

「戦いにおいて、そのようなふざけた態度を取るとはな……」

唸り声のようなつぶやきが、風に乗ってあたしたちの元まで聞こえてくる。
って、コイツ、マナと似たようなタイプ？
騎士が顔を上げる。といっても、相変わらずバイザーのせいで表情を伺うことは難しい。
だけど、横一文字に結ばれた口元が、その怒りを如実に表していた。

「許しがたい連中だ……！　ガルガンド殿のお言葉はあるが、この場で処断する……！」
「ガルガンド？」

その名前に、隆司の眉がピクリと跳ね上がった。
ああ、確か前回取り戻した領地にいた骸骨じいさんだっけ？
隆司はひどく痛めつけられたらしいんだけど……。
隆司は一歩前に出て、騎士に問いかけた。

「お前、あいつの身内か？」
「答える義理はない？」

騎士はにべもなく言い切ると、剣を青眼に構える。
が、その剣は甲高い音ともにへし折れた。

「なっ！？」

慌てて騎士が振り返ると、拳を中段に振りきった隆司の姿がそこに。
って、いつ移動した！？　いつ突進した！？　冗談抜きに見えなかったわよ！？
隆司は振り返ると、騎士を嘲るように口元を歪めながら口を開いた。

「まじめにやったぞ？　これでも答える義理はねぇか？」
「ぐっ……！」

騎士が悔しそうに後ずさりする。
っていうか、ガチでやったら、ソフィア並みのスピードが出るとか……。
しかし、今回あいつ武器持ってきてないはずだけど、どうやって騎士の剣折ったのかしら……。

「まあ、そういじめてやるな」

と、そんな騎士を護るように、やっぱり気が付いた瞬間にはソフィアが隆司の前に立っていた。
遠くからさびしそうに見つめている作業に飽きたのかしら。

「ソフィア様……」
「変に語る必要はない。これよりは、私が相手をする」
「……はい」

威厳さえも伴ったソフィアの言葉に、バイザーの騎士は悔しそうに歯を食いしばりながら下がった。
って、あたしの方じゃない！　退避退避。
隆司とソフィアはしばらく何か話をしていたようだけど、そのまま対戦になだれ込み始めた。
こうしてみる限り、やっぱりソフィアと相対してまともに相手できるのは隆司だけっぽいわね……。
ヴァルト相手に四苦八苦していたころがウソのようだ。今なら、そこそこいい勝負できるんじゃないかしら？
あたしはそんなことを思いながら、ぐるりと戦場を見回す。
礼美やジョージは副団長さんが守ってくれていたおかげでまだ無事の様だ。今はヨハンさんとも合流し、各個撃破の形になっている。
んー……。この分なら、あとは隆司がソフィアを相手してくれれば終いかしらね。
あたしは自動迎撃にしておいた天星をいったん解除し、周囲を睥睨する。
周りには、あたしを攻めあぐねいていたらしい魔王軍の連中がたむろしている。

「さっさと終わらせたいのよ。だから……」

あたしはつぶやいて、軽く首を傾げてみせた。

「こっちから行くわね？」

あたしのセリフを聞いて、魔族連中の顔が明らかにひきつるのが見えた。

そんな顔しなくても……一発で終わるわよ？

Ｎｏ．６６：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「アシクサ畑で戦って」（後書き）

そんなわけでラミアが出ましたよ！　名前付けてあげようかしら、どうしようかしら。

そして、騎士クロエさんとガルガンドに接点が！　果たしてクロエさんの種族とは！？

次回、激闘隆司ＶＳソフィアとなります！　変態もでるよ！

No．67：side・ryuzi「似たもの二人」

「しかし一ヶ月か……。長かったなぁ」

ようやくお邪魔虫を排除し終え、嫁と相対した俺はしみじみとつぶやいた。

何しろ一ヶ月である。バイトかなんかしていれば、お給料がもらえちゃう期間である。

その間にも、そこそこいろいろあったけれど、今目の前の嫁に会えたことを思えば些末なことに感じてきてしまう。

「確かに……長かったな」

俺の言葉に同意するように、ソフィアも小さく頷いた。

「以前は領地奪還に向かうかと思って出向けばおらず、ならば防衛に専念しているかと思えば領地奪還に動く……」

「その件に関してはすいませんでした」

そして半目で呻くようにつぶやかれた言葉に、俺は素直に頷いた。

まさかソフィアが領地防衛に回るとは思わんかったし、ならばと領地奪還に動けば攻めてくるわけだしね。ことごとく読みが外れちまったわけだ。

だけど、三度目の正直だ。ようやく、会えた。

「まあ、心配しなくても、次も領地奪還に動くさ」

「ほう？」

俺の言葉にソフィアはピクンとまゆを跳ねあげ、ゆらりと尻尾を

くねらせた。
そして俺を嘲るかのように、にやりと唇をゆがめた。

「そのようなことを口走っていいのかな？　次は王都を攻め入るかもしれんぞ？」
「そうなればそうなっただな」

俺は肩をすくめて、斜に構えてソフィアの顔を見つめる。

「俺は、お前に会えりゃ満足なんだ」
「……フン」

俺の言葉に呆れたように息をつき、ソフィアはレイピアを構えた。

「つくづくアホな男だな」
「俺がアホなんじゃないさ。男がアホなのさ」

そういって、俺はちらりとフォルカの方を見つめる。

「肉球気持ちいい……」
「はふーん……。気に入ってもらえたようでニャによりにゃー……」

顔全体でミミルの肉球を堪能している。
さっき真子からなんかツッコミの一撃を喰らっていたようだが、速攻で復活している。
だが、領地奪還に動いた王都の魔導師とは思えない所業だよな。
俺が言うことじゃないが。
後ろをちらりと見やれば、礼美を中心としたメンバーが、魔王軍を各個撃破していた。
あの真面目な光景を見れば、なおさらそう思わざるを得ない。

だがまあ、己に正直になるのは重要なことだな。
俺はクスリと笑ってソフィアに再度向き合った。

「たまには、アホになってみるのも悪くはないかもだぜ？」
「御免こうむる」

ソフィアは一つつぶやいてレイピアをくるりと回し。

「お前のようになるのは御免だからな！」

俺を縦一文字に斬り裂こうと、一瞬で間合いを詰めてきた。
俺は白羽取りの要領でレイピアをつかみ、至近距離でソフィアとにらみ合う。

「まじめだねぇ！　お前も、戦いはまじめにとかいうタイプか！？」
「無論！」

俺の指を引き裂くようにレイピアを引くソフィア。
俺は素早く刃から手を離し、引きざまに放たれた刺突の一撃を回避した。

「戦いは神聖なものだ！　それを侮辱するような真似は許せんな！」
「の割にゃ、怒らねぇんだな！」

回避、から胴回し蹴りを放つが、翼で飛んで避けられる。
そのまま踏み潰すように両足が迫り、俺は前転で回避。
凄まじい轟音と共に、地面が楔のようにめくれ上がった。

「フン！　常に怒り心頭さ！」

言葉に反し笑顔なままのソフィアは勢いよく俺に向かって回転斬りを放つ。
俺はしゃがんだままそれをやり過ごし、そのままソフィアの足元を狙って蹴りを放つ。
やはり飛んで回避される。
「だからこそ……こうしてお前に全力で当たる！」
空中で叫んだソフィアはそのまま目の前から消えるようにいなくなり、次の瞬間には俺の背後に現れていた。
俺は慌てず騒がず、右手でガード。
「っ！」
「ぬっ！？」
鈍い音ともに、肉に刃が食い込むが、骨で止まった。
そして俺の体はソフィアのレイピアを体内に残したまま傷を修復してしまう。
そのまま、俺はにやりと笑って見せた。
「だりゃっ！」
「ちぃ！」
腕をひねり、骨でレイピアを絡め取り、ソフィアの手から奪い取った。
ソフィアは即座に後方へ回避。
ソフィアが下がるのをおとなしく見つめながら、俺はレイピアを手に取りへばり付いた腕の肉ごと引き抜いた。
肉が引き裂かれる痛みに顔をしかめるが、いい加減慣れたもんだ。

「全力……っつー割には殺しには来ないんだよな」
「なに？」
豪華絢爛ではあるが、決して過剰ではない礼装を眺めつつレイピアを弄ぶ。
「初めての領地奪還の時も、殺せるタイミングの真子を殺さなかったって言うじゃないか」
「あのときは、一兵卒に邪魔をされた」
ソフィアの言葉に一つ頷く。
確かに、その時はサンシターのおかげで事なきを得たらしい。
だが、ソフィアのスピードを考えれば、遅すぎるほどだ。
「その次の時は、殺しかけた真子に謝罪したって聞いたが？」
「あのときはマナが暴走気味だったからな。その謝罪をしたまで」
つまり部下の尻拭いをしたまで、と。
俺は小さく笑って、ソフィアにレイピアを投げる。
「優しいな、お前は」
「常に部下に慕われる上司でありたいと思っているのでな」
投げられたレイピアを受け取り、血を振り払うソフィア。
セリフは立派だけど、若干染まった頬とそらされた視線とで、恥ずかしがってるのは丸わかりだ。
まったく、可愛いじゃねぇか。
そんなことを思いつつニヤニヤ笑っていると、それを見咎めたのかムッとしたような表情でソフィアが睨みつけてきた。

「そういう貴様はどうなのだ？」
「あ？　なにが？」
首を傾げてみせると、ソフィアは軽く後ろを向いた。
「クロエの剣をへし折るなど……。今までとは比べ物にならない動きではないか」
先ほど剣をへし折って見せた時のことか。
ソフィアの視線を追いかけると、半ばから折れた剣を振るいながら、クロエとやらが他の魔族の援護をしていた。
だが、ほとんど多勢に無勢の様子で押され気味だな。
そんなクロエの様子を見ながら、俺はぽつりとつぶやいた。
「まあ、やっておいてなんだができるとは思わんかったしな」
「なに？」
怪訝そうな顔で振り返るソフィアに、肩をすくめてみせる。
「剣を狙ったのは認めるけど、弾き飛ばすつもりだったんだよ」
「ではなぜ武器が壊れた？」
「そこだよな」
睨みつけてくるソフィアの言葉に、俺は自分の拳を見下ろした。
クロエの剣をへし折る一瞬前。
俺は本当にクロエの剣を弾き飛ばすつもりだった。
だからこそ、全力を持って腕を、拳を振るった。
だが、その瞬間、わずかに拳表面……皮膚が堅くなったように感じ取れたのだ。
全力で拳を握り、剣に叩きつける瞬間だ。その時は違和感を覚え

るよりも、剣が折れる方が早かった。

「いまいちわからねぇことが多いんだ、俺の身体。見てくれこそ人間だが、傷の治りは速すぎるし、身体の力は人間の比じゃねぇし」

先ほどの動きもそうだが、普通の人間にはできない動きが多すぎる。

普段は気にしないことにしているけど……。やっぱりふと、疑問が首をもたげる。

俺は、本当に人間なのか？と。

「向こうじゃ人間だったんだけどなぁ」

思わず苦笑が口から洩れる。

と。

「……私も」

「ん？」

「私も、自分が何者かわからんときがある」

ソフィアが、囁くようにつぶやいた。

その言葉に目を丸くする。

「何者って……魔竜姫じゃないのか？」

「確かにな」

俺の言葉にうなずき、自らの羽根と尻尾をゆっくり撫でるソフィア。

その仕草は、どこか大切な宝物を扱うようであり、わからない何かに畏怖を覚えているようにも見えた。

「だが、竜は今この世に私以外一匹もいない……」
「？　竜の谷とか言うのがあるんだろ？」
俺の言葉に、ソフィアが首を傾げた。
「谷？」
「こっちとそっちの国の間にあるとかいう深い……」
それだけ言って、ソフィアは得心言ったように頷いた。
「ああ、竜の墓場のことか」
「……墓？」
「ああ」
ソフィアは頷いて、どこか遠くを見つめた。
その方向は、王都の方向ではない。おそらく、竜の谷と呼ばれる場所だ。
「古竜（エンシェントドラゴン）がその最後を過ごしたとされる渓谷だ。そして、その崩れ落ちる身から生まれたとされる竜人たちがこぞって身を投じたとされる場所でもある」
「竜人？」
さらに出てきた新しい単語に眉をひそめる。
こっちの国じゃ聞かなかった言葉だな……。
俺の言葉に、ソフィアは首を横に振った。
「私も詳しいわけじゃない。だが、魔王国の黎明期にふらりと姿を現し、そしてまた姿を消したといわれている」

そりゃぁまた……よくわからん生き物だな。
ソフィアも伝え聞いただけっぽいし、もうちょっと詳しい奴がいれば話が聞けるかもしれんが……。

「なら、お前さんはその竜人じゃないのか？」
「いや。竜人の顔はみなトカゲの様であったと聞く」

俺が口にした疑問を否定し、ソフィアは首を横に振った。
つまり……ヴァルトみたいな存在だったわけだ。

「結局お父様も、何も言ってくださらなかった……。いったい私が何者なのか」
「お父様？」
「ああ」

ソフィアは空を見つめ、その名を告げた。

「我らが父、すべての魔族の王……魔王陛下だ」

名というか、称号ではあったが。
思わず眉をひそめる俺。

「魔王の名前も知らないのか？」
「知らない、というより必要ないというべきだな。陛下は我々と違い、一人一種の魔族。識別に必要な名を持たないというべきだ」

ソフィアの言葉に、俺は眉をひそめたまま唸り声を上げた。
アメリア王国の連中もそうだけど、名前に識別以上の意味を持ってないんだよな。

家族名をほとんど持たないのもそうだ。いわゆる戸籍謄本なんかがないせいで、みんなが勝手に名前を名乗ったりつけたりしている。だが、魔王の場合はまた意味合いが違うみたいだな。娘であるソフィアにすら魔王と呼ばせていたとは……。

「じゃあ、母親は？」

「母親？」

名前に関しては考えていても仕方ないと思い、違う質問をしてみる。

ソフィアは首を傾げたが、すぐに俺の言葉の意味を悟り、首を横に振った。

「いや。私はお父様から直接生み出された」

「生命創造とか……」

「私以外にも、四天王たちもそうだぞ？」

魔王の力の大きさに恐れ戦く俺に、何を当然という様子でソフィアは首を傾げながら衝撃の事実を騙る。

なにそれこわい。つまり四天王は、魔王の力を直接分け与えられた規格外の存在ってことか？

目の前のソフィアもしかりだが、ソフィアの場合はまた一段と意味が違うっぽい。

「故に、私には明確な意味での同族はいない」

少しうつむくソフィアの言葉に、俺は合点がいったように頷いた。

そりゃ、自分が何者か不安だよな。

魔王にわざわざ竜として生み出された以上、何か意味はあるんだろう。だが、魔王は何も伝えていないらしい。

あったら一発ぶん殴ってやると決意を固めつつ、俺はソフィアを元気づけるように強い笑いを浮かべてみせた。

「自分が何者なのか……それを解決する答えが一つあるぜ」

「え？」

俺の言葉に驚いたように顔を上げるソフィア。

俺は彼女に見せつけるように親指をグッと立て、いい笑顔でこう告げた。

「俺の嫁になること☆」

「……」

俺の言葉にしばらく硬直し、顔を赤くしていき。

「よ、嫁というなと言ってるだろうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？？」

照れ隠しなのか怒りによるものなのか、俺の腹に向けてその尻尾を力いっぱい叩きつけてきた。ウボァー。

「そんなこと言わずに！　ソフィたんが嫁になってくれたら、俺もソフィたんの婿ってことで解決するから！」

「せんわ！　というかさっきまでのマジメなお前はどこに消えた！？」

「目の前に！」

「嘘つけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

がっしと尻尾をつかんだ俺の体を右へ左へ振り回そうと、嫁が必死に体を振り回す。

が、そのたびに尻尾はピーンと糸を張ったように突っ張り、俺の体は微動だにしない。

「なんでお前はこんなに重いんだ！？」

「愛の重さです！」

「その愛がつらい！？」

もはや半泣きになる嫁。泣き顔もグー。

と、嫁がボソボソと何かを呟いた

「・・・、（くそう）・・・・・・・・・・・・・・・（せっかくいい雰囲気だったのに）・・・・・・！」

「ん？　なんか言った？」

「言ってない！　尻尾離せ！」

良く聞こえなかったけど、聞こえなかったのがすごく残念なような。

とりあえず両手で持って必死に自分の尻尾を引っ張る嫁の姿に燃えていると、後頭部に誰かの両足が突き刺さった。

「だぉあっ！？」

「きゃっ！？」

「いつまでやってんのよ、バカたれ」

振り返ると、真子が不審者を見る目で俺を見下ろしてきた。

「あんたもよ。もう全員逃げる準備始めてるわよ」

「ええっ！？」

真子の言葉にソフィアが周囲を見回すと、魔王軍が大急ぎで撤退していくところだった。

「また会えるよにゃ……？」
「きっと、必ず！」

などと名残惜しそうにフォルカの手を握りしめるミミル以外は、全員地平線の彼方へと走って行っている。

「ソフィア様！　いつまで遊んでいるのです！　撤退しますよ！」
「あ、遊んでなど……！」

殿を務めているらしいクロエに怒鳴られ、顔を赤くしながら反論したソフィアは振り返って俺に怒りをぶつけてきた。

「お、お前のせいだからな！」
「ＯＫ！　お詫びにハグしてあげよう！」
「いらん！」

輝く笑顔で慰めようとしたけれど、すげなく断られ、プイッと逃げられてしまった。あぁん。

「ミミル！　行くぞ！」
「はいにゃ～。またねフォルカ！」

ソフィアに呼ばれたミミルが名残惜しそうにフォルカの手をぎゅっと握りしめ、そのまま逃げる魔王軍を追いかけていった。
俺は逃げていく魔王軍たちに手を振ってやりながら、真子の方を振り返った。

「勝因は？」
「過半数の撃退」

短く答えた真子はフンスと鼻を鳴らした。
暗に何を遊んでやがるといわれた気がしたので目をそらすと、視線の先にフォルカがドアップで映った。

「隊長……」
「なんだよキモいから迫ってくるな！」

ぐいーっとフォルカの顔を押しやってやると、そのままフォルカはハラハラと涙を流した。

「嫁と別れるのがこんなにつらいとは思いませんでした……！」
「なに、またすぐに会えるさ……」
「隊長ぉ……！」

慰めるように肩をたたいてやると、フォルカが男泣きに泣きはじめる。
ようやくお前にも、この辛さが伝わってくれたか……。

「バカばっか……」

冷めた眼差しで真子が何かつぶやいたが、俺たちは気にしない。
また再び嫁に会える日を想って、ただ男泣きに泣いていた……。

No.67：side・ryuzi「似たもの二人」（後書き）

そんなわけで、マジメな戦闘……は前半しか持たなかったなぁ……。

その一方で、魔竜姫ソフィアにも謎が。魔王は何故彼女を……？

次回はその頃一方的に、王都へと視点を移したいと思います。

No．68：side・kota「勇者VS狼犬」

予定では、明日にみんなが帰ってくる日。
上がった狼煙を確認し、僕はアメリア王国の前線哨戒基地までやってきていた。
……今日、騎士団に協力できる勇者は僕一人だけ、か……。

「コウタ様。今回は皆様がいらっしゃいません。あまり、無理をなさらないように……」
「わたしも～がんばりますよ～！　だから～コウタ様は～安心してくださいね～！」
「はい。ありがとうございます」

アスカさんとアルルさんが、僕の緊張を見てとってか、励ますように声をかけてくれた。
僕はそれに笑顔で応じながら、螺風剣（エア・キャリバー）の柄をギュッとつかんだ。
隆司も真子ちゃんも、すごい力を持ってるから何とかなったけど、僕にはまだそれだけの力はない……。
騎士団のみんなと協力して、何とか魔王軍の人たちには帰ってもらわないと。
決意を新たにしながら、僕たちは魔王軍と相対する。

「来たな！」
「今回は、負けません……！」

そこに立っていたのはいつも通りの魔王軍の人たちと、ガオウ君とマナちゃんの二人だけ。
つまりソフィアさんとミミルちゃんは隆司たちの方に行ってるのか……。

それから、四天王の人たちもいないな。これだけで、だいぶ気が楽になった気がする。

「ここ最近は負け続きで、戦線を押し込めていない！　今日こそは、王都へと前進させてもらうぞ！」

「そうはいかないよ。これ以上、王都には近づかせない！」

ガオウ君の宣誓に対し、僕も吠える。

ただでさえ王都に近いんだ。これ以上前に来られたら、せっかく復活した交易線がまた滞ってしまう……！

僕とガオウ君は同時に剣を引き抜く。

それに呼応して、魔王軍と騎士団がそれぞれの武器を構えた。

「今回は～団体戦なのですね～？」

「アルル！　お前は、あの魔導師を押さえておけ！」

「おっけ～。アルルにお任せ～♪」

「そう何度も遅れはとりません……！」

僕の隣に並んだアルルさんが楽しそうにつぶやきながら呪文を唱え始め、マナちゃんも符と呼ばれる紙を構えた。

それぞれが臨戦態勢に入り、ほんの一瞬緊張したような空気が流れた。

不意に、戦場の上を飛んでいた鳥が、一声鳴いた。

「「「「「――うおぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」」」」」

その声を合図に、騎士団と魔王軍の双方の戦士たちが一斉に駆け出した！

それに負けないように、僕もガオウ君に向かって駆ける。

「ハァッ！」
「なんのぉ！」

上段から切り下した刃はあっさり受け止められ、ガオウ君の刃が迫る。
僕は刃を引いて、剣に風を纏わせて防御。
その風ごと刃を押し返す。

「せぇい！」
「ぬぅ！」

ガオウ君は呻くけど、体勢を崩すには至らなかった。
同時に、マナちゃんが腕を振り、僕に符を飛ばしてきた。

「させませんよ～！　強風撃（ブラスト・ウィンド）～！」

だけどその符は、アルルさんが放った魔法で吹き散らされてしまう。

「アルルさん、ありが――」
「お礼を言うには早いです……！　爆ッ！」

僕がアルルさんの援護に感謝しようとした瞬間、マナちゃんが印を組んで呪文を唱えた。
同時に上空で何かが破裂するような音が響き、光矢弾（ライトボウ）にもよく似た光の矢が飴のように降り注いだ。

「きゃあ～！？」
「アルルさん！？」
「よそ見とは余裕だな！」

聞こえてきた悲鳴に思わず振り返ると、ガオウ君の蹴りが腹部に決まった。

「ぐっ！？」

「このまま押し切ってやる！」

思わず体勢を崩し後ろへ少し飛んでしまう。

ガオウ君がそのまま追撃を駆けようとした瞬間、僕をかばうように一人の神官の女性が前に出た。

「ナージャさん！」

「させませんよ！　ハァっ！」

ナージャさんは気合とともに、拳を突き出し、ガオウ君の体を吹き飛ばした。

「ぬぐ！？」

「ガ、ガオウ君！？」

「何の、大事ない！」

その思わぬ強さにかガオウ君がうめき声をあげ、マナちゃんが慌てた様子で彼に駆け寄った。

その隙に僕は立ち上がって、剣を構え直した。

「すいません、ナージャさん！」

「構いませんとも、ええ。狐っ子がいない恨みは狐彼女がいるこの男に晴らします！」

「何の話だ！？」

「か、彼女じゃないです！？」

ナージャさんの言葉に声を上げるガオウ君とマナちゃん。
いった意味が分からずに周りを見回してみると、確かに狐っぽい魔族の人はいなかった。
それから、ケモナー小隊の人たちの一部は魔族の人とお話してたり、逆に魔族をすごい勢いで蹴散らしたりしていた。

「素敵な毛並みですね……。お手入れ、大変でしょう？」
「そ、そんなことは……」
「やーん！　ふさふさー！　ねね、抱っこしていい！？」
「え、ええ！？　こ、困ります！」
「ぐぉおおお！　なぜ犬やオオカミはいてもネコ耳はいないんだ！」
「リザ君を！　リザ君を出しなさい！」
「もしくは連れて来いあと三十秒で！」
「そんな無茶苦茶なごばっ！？」

あ、きれいな蹴りが決まった。
と、とにかく、向こうの方は大丈夫そうだね……。っていうか、ケモナー小隊の人たちは神官だったり魔導師さんも混ざってるのに、普通の騎士の人たちより動き回ってるなぁ……。
僕が思わず呆然と眺めていると、僕の隣まで駆けてきていたアルルさんがナージャさんに向かって抗議の声を上げ始めた。

「あ～ん、ナージャ～！　コウタ様を～護るのは～私の役目～！」
「だったらハキハキしゃべりなさい！　呪文もそのスピードで唱えてるから対応が遅れるんです！」
「え～」

ナージャさんが油断なく構えながらアルルさんに檄を飛ばす。
え、呪文もいつもの口調で唱えてたんですか！？　そ、それは遅

くなるんじゃ……。

「チィ！　そこをどけ神官！」
「言わずともどきましょう。……狐ちゃん！　私と戦いましょう！」
「い、いやです！」

ガオウ君の言葉にすんなり頷いたナージャさんはそのまま鼻息も荒く、マナちゃんの迫っていった。
マナちゃんは尻尾をかばいながらじりじり下がってるけど、そのままじゃ捕まるんじゃ……。

「行くぞコウタ！」
「え。う、うん」

ガオウ君の言葉に何とか頷きながら応戦する僕。ほ、ほっといていいのかなあっちは……。
とはいえ、今は彼に集中しないとやられちゃう。僕は意識を切り替えて、目の前のガオウ君に集中する。

「しかし、貴様の剣術は随分と洗練されてるじゃないか！　我が連撃を、こうもたやすく受け流すとはな……！」
「武器がいいからだよ！」

渦巻く風が、ガオウ君の巨大な双剣を受け流してくれる。下手に受けたら、そのまま刃が削げてしまいそうな連続攻撃を何とかしのいでいけるのは、螺風剣（エア・キャリバー）の風があってこそだ。
僕はガオウ君の連撃の隙間を何とか見つけようと躍起になる。

「そういう君こそ、片手でそれだけの威力が出せるなんて、少しずるいと思うよ！」

「何を言うか！　これこそ魔王軍四天王、最強の将！　ヴァルト様のご指導あればこそ！」

何とか見つけた隙間に一撃をねじ込むけれど、ガオウ君はたやすくはじいてまた連続で斬りつけてくる。

まずいな、基本的な身体能力に差がありすぎる……！

「どうしたぁ！？　ずいぶん焦ってみえるぞ！」

「君のせいだよ！」

口調に余裕をにじませるガオウ君に対して、僕は彼の指摘通りに焦る。

弱ったな……！　この状況を覆す方法は……！

僕は数瞬迷った後、口の中で呪文を唱え始める。

途端、ガオウ君の耳がピクピクと動いた。

「ぬ！？　させんぞ！」

どうやら僕の唱えた呪文が聞こえたみたいだ。連撃の威力が増す。

僕は呪文を唱えながら慌てて下がる。けど、ガオウ君が僕に迫る速度の方が……！

「土流壁（アース・ウォール）～！」

「ぬあ！？」

ガオウ君が僕に追いつく一瞬前、アルルさんが唱えてくれた呪文で僕とガオウ君の間に一枚の土壁が現れる。

助かった！

「何の、この程度ぉ！」

「軽身法（ボディ・ライト）！」

ガオウ君の言葉と同時に呪文が完成し、僕はそのまま勢いよくジャンプする。

同時に、僕のいた場所ごと土壁が斬り裂かれた。

「ぬ！？　どこだ、コウタ！」

先ほどまでいたはずの僕の姿を探してガオウ君が視線を右往左往させる。

僕はそんな彼の体を踏みつぶすように上から急襲をかけた。

「ここだぁ！」

「な！？　ぐぁっ！？」

僕の声にか映った影にか反応したガオウ君は、大慌てで回避しようとするけど間に合わず肩を僕に踏みつけられる。

僕はそのまま彼を踏み台にまた飛ぼうとするけれど、一瞬早くガオウ君は僕の足をつかんだ。

「ちぃ！」

そのまま僕の足を持ったまま大きく手を振りかぶり、勢いよく投げつける。

普通なら地面に叩きつけられるところだけれど、今の僕の体はかなり軽い。

ガオウ君が予想したよりもはるかに大きな軌道を描きながら、僕は危なげなく地面に着地。

「なに！？」

「まだだよ！」

驚愕する彼に対し、僕は地面を蹴って、水平に飛ぶ。
軽くなった体では、ガオウ君に健だけで致命傷を与えられないだろうけど……。
僕は螺風剣（エア・キャリバー）を地面に対して斜めに構え、勢いよく魔力を流し込む。

「ストーム・ブリンガー！」

僕の叫びと同時に、勢いよく発生した竜巻は、暴風の勢いで僕の体を前進させた。

「く！？　来い、コウタァ！」

ガオウ君は一瞬戸惑いながらも素早く双剣を構え、僕と相対する。
僕は肩に担ぐように剣を構え、渦巻いた風ごとその刃をガオウ君に叩きつけた！

「テンペスト……ブリンガァァァァ！！」
「チェストォォォォォォォ！」

交差は一瞬。
甲高い音が響き渡り、ガオウ君の身体が後ろへとすっ飛ぶのと同時に僕の体は地面に叩きつけられた。
あの一瞬で、二つの斬撃を重ねてくるなんて……！
おかげで来ていた鎧はざっくり斬り裂かれ、念のために下に着ていた防刃素材のベストが露わになってしまった。

「コウタ様！！」

アルルさんの心配そうな声が聞こえてきたけれど、それに構っている暇はない……！

僕は痛む体に鞭を打ち、体を起こしてガオウ君の方に向けた。

「ご、がはっ……！」

「ガオウ君！」

「大事ない……！」

視界に移ったのは、螺風剣（エア・キャリバー）の暴風の一撃をそのまま身に受けたガオウ君の姿だった。着ていた鎧は僕と同じようにずたずたに引き裂かれ、顔にも裂傷のようなものが見える。

駆け寄ったマナちゃんは涙目だ。でもガオウ君はマナちゃんを振り払うように腕を振り、僕の方に向き直った。

僕は剣を構えた。ガオウ君もそれに応えるように構えるけれど、どちらも戦えるような姿ではない。

「……相打ち、か」

「みたい、だね……」

悔しそうなガオウ君に、僕はニッと笑って答えた。

そんな僕らのもとに、魔王軍の一人が駆け寄ってきた。

ガオウ君と同じイヌ科に見える男の人は、ガオウ君のそばに膝をついた。

「ガオウ！　今回はここまでだ！」

「なに……？」

「お前の負傷もそうだが、こちらも大概だ！　というか、ケモナー小隊の連中がおっかない！」

ブルリと身を震わせる魔族の人の言葉に、思わず首をめぐらせる

と、なんか怖い顔をしたケモナー小隊の人たちが魔王軍の人たちを追い回してた。

「「「「「キシャー！」」」」」

「もう帰る！　もう帰るし、次はちゃんと連れてくるからー！？」

なんかひどい目にあったらしい魔族の人が泣きながら悲鳴を上げてるよ……。

ちゃんと仲良く話してる人もいるのに、なんであんなことになってるの……？

それはともかく、駆け寄ってきたイヌ科の魔族の人に肩を借りながら立ち上がったガオウ君は、僕をキッと睨みつけた。

「次はこうはいかんぞ、勇者コウタよ……。首を洗って待っているがいい！」

「僕だって、今のままじゃない……。次は、勝つよ」

「フッ……」

ゆらりと立ち上がって言い放った僕の言葉に、ガオウ君は小さく笑った。

そしてマナちゃんの方に顔を向けて、彼女に声をかけた。

「マナ！　撤退だ！」

「う、うん！」

泣きそうだったマナちゃんは、ガオウ君の命令にハッとなってすぐに印を結んだ。

「転移！」

そして彼女の掛け声と同時に、その場にいた魔王軍の人たちが一瞬でいなくなる。
転移専用の符をみんなが持ってたのだろうか？　鮮やかな手並みだ……。
そして僕は、ガオウ君たちがいなくなるのと同時に地面にへたり込んだ。

「コウタ様！」
「コウタ様～！」

それを見てか、アスカさんとアルルさんが慌てたように駆け寄ってきてくれた。

「無理をしすぎです……！」
「そうですよ～！　あんなふうに～体を叩き付けたら～、骨が折れちゃいます～！」
「ハハハ……。すいません……」

怖い顔で詰め寄ってくる二人に、ごまかすような笑い声を上げる。
とっさとはいえ、確かにあれは痛かったなぁ……。
そんな僕のそばに、なぜかあちこちが黒焦げのナージャさんがしゃがみ込んだ。

「では、治療しますね」
「ありがとうございます……。それはそれとして、どうしたんです……？」
「焦って尻尾モフモフを堪能しようとした罰が下ったんです……」
「はあ」

気まずそうに顔をそらしながら僕の治療を始めるナージャさん。

身体を包み込む治癒魔法の暖かさに、瞼が重くなってきた僕の体を、アルルさんがつかんで引き倒した。

「あう？」

「あ、こらアルル！？」

「んふふ～。こういうのは～早い者勝ちよ～♪」

悔しそうな顔をしたアスカさんと得意げな顔をしたアルルさんの顔が空に移る。

このアングルについて僕が何かを思いつくより先に、アルルさんが僕の頭を撫でながら口を開いた。

「後片付けは～やっておきますから～、コウタ様は～ゆっくり～休んでくださいね～？」

「あ、はい……」

優しげなアルルさんの言葉に甘え、僕はゆっくりと睡魔に身をゆだねた。

今度は、もっとうまくやらないとね……。

「……コウタ様の寝顔、かわい～♪」

「くぅ……！」

「悔しがっていないで、アスカは撤退の準備をなさい」

「ずるいぞアルル！　コウタ様に、ひ、ひひ、膝枕など……！」

「あなたは前にやったでしょ～♪　今度は私の番～♪」

「ううう……！」

「いや、だから……はぁ……」

No.68：side・kota「勇者VS狼犬」（後書き）

そんなわけでさっくり戦闘編。光太一人だと、こんなあっさり終わるのね……。

しかし、実力伯仲って感じでしょうかねぇ、この二人。いいライバルになってほしいです。

次回はさっくり戻ってきた連中との会話ですかねー。

No．69：side・mako「また、奪還へ」

もはや予定調和となりつつある、勇者様凱旋パレードをこなし王城へ帰還したあたしたち。

あ、もちろん主役は礼美よ？　今回はほとんど何もしてない気がするけれど……。見た目が大事なのよ、見た目が。

ともあれ、パレードを終えて王城へ帰還したあたしたちを出迎えたのは、光太とアルト王子、そして従者の皆々様の姿だった。

「御帰り、みんな！」

「いつもありがとうございます、皆さん」

満面の笑みで帰還を祝ってくれる光太と、やや影を落としながらも嬉しそうなアルト王子の対比が何とも素敵なコントラストを醸し出していた。

光太は元より、アルト王子も結構イケメンよね。光太と並んでも見劣りしない程度には。

何も知らない子が見たら、速攻恋に落ちかねないわねー。

「うん！　ただいま、光太君！」

そして久しぶりに友達に会えてうれしいのか、礼美も満面の笑みだった。

あー、後ろの方に立っている名前も知らない従者の皆々様の顔が赤くなってく赤くなってく……。

なんていうか、ねぇ……。

「隊長！　なんでそんなにツヤツヤなんですか！？　フォルカまで！　私、狐っ子にモフモフさせてもらえなかったのに」

「運がなかったなー」
「ッスねー」
「キーッ！」

視界の端で変態どもがケモナー小隊なんか言ってるけど、とりあえずスルー。

「というわけで、ただいま。で、アルト。例の件は？」
「無事決定しています。すぐにでも、出立いただけるかと」
「よし」
「え？」

あたしとアルトの会話を聞いて、光太が不思議そうな顔になった。
あたしは光太の顔を見ると、小さく頷いてみせる。

「次の領地奪還は、明日にでも行くわよ」
「え、ええ！？　そんなすぐに！？」

あたしの言葉に光太が隆司と礼美の顔を見比べるけど、二人とも各々頷いてみせた。
この二人には、帰ってくる道すがら今回の作戦を説明しておいた。
まあ、そこで残る残らないの論争に発展したんだけど、その辺は余禄よね。

「大丈夫だよ！　次は私が残るから！」
「いや、光太が心配してんのはそこじゃねぇだろ？」
「そ、そうだよ！　いや、それだけじゃないけど、そんなすぐに出て大丈夫なの！？」

あたしの言葉を聞いて不安そうな顔になる光太。
まあ、光太の不安もわかるわよ。確かに半月も連続で旅を続ける

なんて、体力的に不安だし……。
とはいえ、長くとどまってるわけにもいかないのよねー。

「まあ、落ち着いて聞いてちょうだい」
「う、うん」

あたしの言葉に光太がしっかり頷いたのを確認して、さらに周りに貴族連中がいないのも確認してあたしは説明を始めた。

「今回の奪還に動くのに、なかなか時間がかかったわよね？」
「うん。確か、貴族との会議が長引いたんだよね」
「ええ、そう」

会議というか、約一名が駄々をこねたせいで時間がかかったわけよね。

「今回もそんな会議待ってたら時間がかかるのは明白よ。そんなの一々待ってらんないわ」
「なので、今回は私の独断で次の奪還領を決定させていただいたのです」

あたしの説明を引き継ぐように、アルトが次の領地の場所を書いた地図を広げてみせた。

「次の領地は、マコ様の希望に沿う形で、鉱石の町オリクトとなります」
「鉱石の町……？」
「なんでも、王都にいちばん近い鉱石が取れる町なんだと」
「真子ちゃん、今作ってる武器の関係で、どうしても一回そこに行っておきたいんだって」

隆司と礼美の補足に、あたしは頷く。
今回の領地に関しては、カルタ奪還に赴く前にアルトの頼んでおいた場所だ。
やっぱり銃の効率は無視できない。かつて剣が席巻していた戦争の歴史を、たった一種類の武器が塗り替えたのだ。
屈強な騎馬が、たった一丁の鉄砲によって打ち倒された。日本においても、織田信長が導入した種子島が、当時の戦争の様相を変えた。
だから、ここでも鉄砲を量産しておきたい。魔王軍との戦いを、少しでも優位にするために。

「で、アルトに頼んで貴族連中にも根回しして、あたしたちがカルタを取り返しているうちに、次の奪還領を決定しておいてもらったのよ」
「そうなんだ……」

納得したように頷いてくれる光太。とりあえずは納得してくれたようね……。
あたしはアルト王子に向き直ると、小さく頭を下げた。

「ごめんね、アルト王子。あたしのわがままで無理言って……」
「かまいません。皆様のおかげで、魔王軍の脅威を退けられているのです。この程度の労力では、むしろご恩に報いきれませんよ」

アルト王子は小さく微笑みながら、力強くそう言ってくれた。
……が、目の下には隠しようのないクマが見え隠れしている。議会は相当揉めたようだ。
ホントごめんね？

「じゃあ、明日には出立するとして……。礼美ちゃんが残るなら、次のメンバーは？」
「礼美が抜けるといなくなるのが、ヨハンさんとジョージね」
あたしが言ってその二人に視線を向けると、ジョージは顔をプイッとそむけ、ヨハンは堂々と頷いた。
「フン。俺はレミの魔法のセンセーだかんな。俺が残んなきゃ、レミの勉強がはかどんねーだろ」
その言い訳はもう聞き飽きたわよ？
「レミ様の従者たる私が残らずして、いったい誰がレミ様の身辺警護を務めるというのですか？」
いやいっそ清々しい笑顔だけど、もうちょっと建前で隠せ、あんたは。
「で、あんたが付いてくると戻ってくるのがアルルとアスカね」
「は～い～」
「そうですね」
名前を呼ばれた二人が、光太の後ろで頷いた。
「で、それに伴ってついでに抜けるのが副団長さんと」
「ええ。あまり長く席を抜けていると、団長が仕事をさぼりかねませんし」
副団長さんは頷いて、鋭いまなざしで騎士団兵舎の方を睨みつけた。

一応メイド長さんが見てるなら大丈夫……いや、あの人ギルベルトさんだけで案外手一杯かもしれない。

「えーっと……フォルカ君はそのまま続投なの？」

「一応ね」

抜ける人数は二人。前線のできるメンバーが増えるけど、その分後方支援が減る感じなのよね。

まあ、ヨハンさんは支援というより前線メンバーの気配が強いんだけど……。

「で、最後の補充要因としてナージャを突っ込む予定」

「なんですって！？」

隆司に肩を叩かれて、ナージャがなんか絶望したような表情で声を張り上げた。

「ちょっと待ってください隊長！　防衛組でも狐っ子に会えないのに、この上前線組なんて余計に会える率が減るじゃないですか！？」

「いやいやいけるって。今までもちらほら豊富な種類の魔族に出会えてるし」

重要なのはそこか。

半目になりつつも、とりあえずナージャは隆司に任せることにする。

ヨハンさん曰く、教団の中でもそこそこの信仰心と、かなり上位に位置する戦闘力の持ち主なんだとか。

まあ、教団の人間に戦闘力を求めるのがなんか間違いだと思うんだけどさ。

「で、今日一日明日の出立のための準備に費やして、速攻で出発って手筈よ」
「……うん、わかったよ」
あたしの説明を頭の中で反芻し、理解した光太は小さく頷いた。
「うまくすれば、王都に魔王軍が攻め込んでくる前に帰ってこれるかもしれないし、頑張らないとね」
「そうねぇ……」
光太の言葉に、あたしはあいまいに頷いた。
確かに最近の魔王軍の動向を考えれば、次の襲撃は二週間後くらいだけど……。
あいつらにあたしらの行動が筒抜けってことを考えれば、一週間後の襲撃もあり得るのよね。
その時に礼美を中心としたメンバーでなんとかなるか……。不安だけど、言ってもしょうがないわよね。
「じゃあ、僕は装備取ってくるね」
「わかったわ」
そういうと光太は、駆け足で自分の装備を取りに走っていった。
アルルとアスカにそれに続いていく。
「隆司ー？　そっちの方はまとまったの？」
「とりあえずは……」
声をかけると、ちょっと疲れた表情の隆司が振り返った。
その向こうには憤慨した表情のナージャ。
まだ納得はしてもらえてないみたいだけど、隆司にはやってもら

うことがあるのよねー。

「まとまったんなら、さっさとハンターズギルドに言って、馬車の貸出期間延長してきてよ」

「あーい……」

「ちょっと隊長！　私は納得してませんよ！？　だいたい――」

抗議の声を上げ続けるナージャを引き連れながら、隆司は王城の外へと出ていった。

奪還の速度を維持するためには、この馬車の存在が必要不可欠なのだ。どんな無理を要求されても、確実に伸ばして来いと言明してある。

まあ、隆司の存在はギルドでも重宝されてるらしいから大丈夫だろう。

「じゃあ、真子ちゃん。私はちょっと休むね」

「うん。しっかり休んどきなさい」

「うん、そうする。真子ちゃんも、無理しちゃだめだよ」

「わかってるわよー」

あたしがそう言いながら手を振ると、本当にわかってるのかなぁ……なんてつぶやきながら礼美が自分の部屋に帰っていった。

無理をすることに関しては一家言持ちのアンタにゃ、言われたかないわよ……？

そのほかの人たちも、持ち場に戻ったり奪還のための物資を取りに行ったりし始めた。

そんな様子を眺めながら、あたしはグッと背伸びをした。

さて、あたしはどうしようかなぁ……。

いろいろ考えてはいたのだが、あたしは自分がやることはあまり思いつかないのだ。

力仕事は男の仕事だし、周りとの折衝や交渉はアルト王子や団長さんみたいな偉い人の仕事だ。
速攻で奪還に動くとなると、基本的に物を作っていろいろ試しているあたしにはやることがなくなってしまうのだ。
一日どころか半日じゃ、何も作れないしね。
と、サンシターがバケツに水を組んで馬車のそばに戻ってきた。
暇を持て余したあたしはそんな彼に近づいた。

「サンシター、何してんの？」
「はい。長旅の馬を労おうかと思ったであります」

サンシターはそういうと、バケツの中の布をぎゅぅっと絞って、馬の体を拭き始めた。
冷たい水で絞られた布が気持ちいいのか、馬はサンシターが体を撫でるたびに気持ちよさそうに鳴き声を上げた。
そんな馬の様子に、サンシターは少しだけ嬉しそうな顔になった。

「馬にしろ人間にしろ、身体は綺麗な方がいいでありますからね」
「ふーん」

あたしはすぐそばにあった石の上に腰かけて、サンシターの様子を伺った。
馬の体を拭いていくサンシターは、なんというか、手慣れた様子だった。
手際よく馬を拭いていく姿は板についており、似たような作業を繰り返し行ってきたことを伺わせる。

「……なんか慣れてるっぽいわね。確か、あんた農家の出だっけ」
「はいであります。寒村の大家族の長男でありますよ」

サンシターは布を再びバケツに浸し、含んだ水をギュッと絞った。

「といっても自分、元々は病弱でありまして、こんな風に動物に接する機会はあまりなかったでありますが……」

「あんたが病弱とか何の冗談よ」

サンシターの言葉に、思わず顔をしかめるあたし。

いつかの会戦の時、倒れても倒れても起き上がった生命力があって病弱とかありえないでしょうが。

そういうと、サンシターは苦笑した。

「家族みんなが労わってくれたでありますから。こうしてしっかり立ち上がれるようになったのは、十五の時であります」

「ふーん……」

片方の馬を拭き終え、そのままもう片方の馬も吹き始めるサンシター。

そんな彼の姿には、彼が口にしたような苦労を思わせるものは感じられなかった。

そう見えるのは彼の生来の物なのか、それとも家族の賜物なのか……。

そんなことを徒然考えながら、あたしは馬の世話をする四等騎士の姿をぼんやり眺め続けるのであった。

No．69：side・mako「また、奪還へ」（後書き）

引き続き、領地奪還に動くようです。がんばれ！
で、ちょっとサンシターに焦点を当ててみんとす。結構お気に入りなんだけど、最近出番無かったので……。
次からはまたラブコメ強化ですよ！　おもに礼美関係の。

No．70：side・remi「女神への祈り」

荘厳な雰囲気を漂わせる、礼拝堂。
みんなが旅立った翌日、私はみんなの無事を祈るために女神教団の皆さんの礼拝のお時間に邪魔しました。

「天地におわす我らが神よ――」

オーゼさまが淡々と、でも力強く聖書に書かれた一文を読み上げていきます。
その言葉を聞きながら、私は両手を組んで、瞳を閉じ、じっとみんなの無事を祈ります。
……今回残るといったのは自分からです。隆司君も光太君も、そして真子ちゃんも残ったのなら、私も残るべきだと思ったから。
でも、みんながいなくなって、思っていた以上の寂しさが胸の中に去来しました。
……そういえば、この世界に来てから、みんなと離れるのはこれが初めてだな。

「日々、我らに糧を与えていただき、感謝いたします――」

私はギュッと、さっきより強く手を握りしめます。
魔法を学ぶ時なんかは、ジョージ君やヨハンさんと一緒で真子ちゃんたちがいないことはありました。
でも、会おうと思えばいつでも会えました。真子ちゃんはギルベルトさんのいる錬金研究室に行けば会えたし、光太君は騎士団の修練場にいることが多かったですし。隆司君は……フラフラと城下町に出かけることも多かったので、会えない時も多いんですけど。
だから、こんな風にみんなと会おうと思っても会えない、という

状況はなんだか心細いです……。

「神よ。我らの祈りを、見届けたまえ――」

祈りの言葉を言い終え、聖書を閉じたオーゼさま。

そしてオーゼさまが本を閉じたタイミングで、神官の人たちが一斉に祈りの言葉を唱えました。

内容は知っていたけど、タイミングが分からなくて、私だけは祈りの言葉を唱えそこなっちゃいましたけど……。

「……本日の礼拝は、これで終わりとします。各自、今日という日をよりよく過ごせるよう、各々努力なさい」

なんとなく気まずい思いを抱く私をよそに、オーゼさまは以上の言葉で礼拝を締めくくりました。

うぅん……。やっぱりいきなり参加するんじゃなくて、前もってヨハンさんに礼儀作法を聞いておけばよかったよぅ……。

神官の皆さんが席を立ち、それぞれの持ち場や行きたい場所へ動いていく中、私は一人席に着いたままぼんやりと礼拝堂に備えられていた像を見つめました。

実はこうして礼拝堂に来るのは初めてだったので、どんな像が置いてあるのかは知らなかったんです。だいたい、魔導師団詰め所で魔法の勉強をしているか、錬金研究所の真子ちゃんに差し入れを入れに行っているかだったので……。

礼拝堂の正面に設置された像は、いわゆる女神様を模したもののように見えました。

ただ、一つだけ気になる点が……。

「いかがしましたか、レミ様？」

「あ、オーゼさま」

女神像を見つめながら首を傾げている私に、オーゼさまが近づいてきて声をかけてくれました。
ちょうどよかったので、私はオーゼさまに聞いてみることにしました。

「あの、一つお伺いしたいことがあるんですけれど」
「なんなりと」

オーゼさまがやさしく微笑んでくれたのを確認してから、私は正面にある女神像を示しました。

「あちらは女神様……の像ですよね？」
「はい、その通りです」
「女神様の像なんですけれど……どうして、御顔が見えないですか？」

そう、目の前にある女神像……。たぶん大理石かそれに近い石で掘られたそれには顔が見えないようになっているんです。
頭に巻いたショールのようなもので細部がほとんど見えないようになっていて、ほとんどどんな顔なのかうかがうことができません。
信仰する女神様の像であるのであれば、細部まで再現するべきだと思うんですけれど。

「それは……」
「それは、女神様に対する敬意の現れですよ」
「あ、ヨハンさん」

オーゼ様が私の疑問に答えようとしたとき、私の後ろから姿を現したヨハンさんが先に答えてくれました。

オーゼ様を伺うと、小さく微笑んで頷かれたので、私はヨハンさんに向き直りました。

「敬意の表れ、と言うと……」

「はい。かつて、魔王に女神様をさらわれるより以前、女神様は我々とともにアメリア王国の王都に顕在されていたと伝えられています」

「そうなんですか！？」

この国に女神様がいた、という事実に私は思わず大声を上げてしまいます。

だって、普通なら神様みたいな存在はここじゃないどこか別の場所にいるという印象があるから……。

「驚かれましたか？」

「はい……。てっきり、天界みたいな場所があって、そういうところにいるものだと……」

「？　テンカイ？」

私の言葉に、ヨハンさんが首を傾げました。

あれ？　まさか……。

「えーっと……。私たちの世界では、神様は天界とかそういう場所にいるものだって、言われているんです。なので、この世界でもそういうものなのかなー、と……」

「なるほど……。レミ様の御世界では、女神様は別の場所で暮らしてらっしゃるのですね」

私の説明を、とても興味深そうに頷いて聞いてくれるヨハンさん。

やっぱり……。この世界の宗教は、私たちの世界と大きく異なる

みたいですね……。
でもそうなると……。

「じゃあ、女神様は、どこからおいでになったんですか？」
「？　どこから、とは？」
「えーと……」

私の質問に、不思議そうな顔になるヨハンさん。
私はどう説明しようか迷いながら、何とか言葉を紡ぎます。

「……女神様は、どうやってこの世界にいらしたんでしょうか？」
「女神様は、かつてこの世界が危機に瀕した時、古の竜とともにこの世界に顕現したと伝え聞いております」
「古の竜…、ですか？」
「はい。古の竜……すなわち、古竜（エンシェントドラゴン）。かの存在とともに顕現し、初代アメリア国王とともに、世界を危機に導いた存在と戦ったとされています」

初代アメリア国王様も、女神様の誕生というか顕現に関わってるんだ……。
礼拝堂が王城の一角に立っているのも納得です。
でも、それなら女神様はどこか別の場所からいらしたということになるわけで……。それならその場所に関して何か伝承があると思うんですけど……。

「そして、魔王が女神様をさらうまで、この国に顕在されていたという話です」

続くヨハンさんの言葉は、特別その場所に対して触れるようなことはありませんでした。

うーん……。あとで、聖書を読んでみようかな……。
ともあれ、女神様の由来に関しては、ある程度わかりました。そろそろ、閑話休題といきましょう。

「それで……女神様の像の御顔が見えないのは……」
「ああ、そうでしたね」

私の言葉に、ヨハンさんは申し訳なさそうな顔で微笑むと、女神様の方を見つめました。
つられて、私も女神様の像を見つめます。
朝日に照らされた女神様の像は、神々しく見えます。

「女神様が誘拐されてしばらくしてこの像が掘られたと聞きますが、当時の神官長が「女神様はいずれ奪還する。だというのに、代わりの像など掘るのはいかがなものか」と申したのだとか」
「それって……つまり、女神様は実在されるのに、偶像を掘るのは不敬に当たると判断されたということでしょうか？」

宗教における偶像とは、それ自体が信仰の対象になることが時々あります。
地球に存在するほとんどの宗教は、想像の産物だからなのですが……。
当時の神官長さんは、それを良しとしなかったということでしょうか？

「おそらくは……ですが。そして協議の末、像の女神様の御顔は見えないようにするということで落ち着いたようなのです」

ヨハンさんの言葉に、私はなるほどとうなずきました。
そういうことならば、御顔が見えないのも納得です。

女神様がおそばにいたというのであれば、偶像を不敬と感じる人がいてもおかしくないですけど、祈りを捧げる相手がいないと困るという想いも理解できます。

そのための折衷案だったわけですね……。

私はもう一度、女神様の像を見上げます。

長い年月を経た女神様の石像は、風化の色合いのようなものも若干みられましたが、それでも威風堂々としたお姿です。当時の職人さんの、魂がこもっているようにも思えます。

その御顔こそ見えませんが、わずかに微笑んでいるようにも見えました。

じっと女神様の像を見つめていると、囁くようなヨハンさんのつぶやきが耳に入ってきました。

「しかし、これもいずれ不要になるやもしれませんな……」

「え？」

その言葉に振り返ると、ヨハンさんは小さな微笑を称えながら、私を見つめていました。

「レミ様をはじめとした勇者様たちのご協力……。これがあれば、かの魔王から女神様を取り戻すことなど、造作もありませんでしょう」

「いえ、そんな……」

ヨハンさんの言葉に、私は首を横に振りました。

「ハハハ、ご謙遜を」

「謙遜じゃありませんよ。私たちだけの力じゃ、女神様を救い出すことなんてできません」

私は首を横に振って、ヨハンさんをじっと見つめます。
そう。私たちは確かにすごい力を持っています。でも、それだけじゃ決してこの国は救えない。

「私たちも全力を尽くしますが……何より、この国の皆さんのお力添えがなければ、女神様を救うことも、この国を救うこともできないんです」
「……！」

私の言葉に、ヨハンさんはかすかに目を見開き、そしてそばで聞いていたオーゼ様が息を呑みました。
……真子ちゃんも言っていましたけれど、たった四人で軍隊を相手にするのは無謀すぎます。
ソフィアちゃんやヴァルト将軍。さらに魔導師のラミレスさんや、ソフィアちゃんの親衛隊のみんな……。
これだけのすごい人たちを、私たちだけで相手にするのは無謀に過ぎます。
だからこそ。この国の人たちにも頑張ってもらわなければいけないんです。
そのための準備は、真子ちゃんが進めています。それまでの戦いは、光太君や隆司君が何とかしてくれます。
だから私は、その間に皆さんに伝えなきゃいけないことがあるんです。

「だから、改めてお願いします」

私はヨハンさんとオーゼ様に向き直って、頭を深く下げました。

「この国を救うために……力を、貸してください」

今日、教団の皆さんの礼拝にお邪魔したのは、みんなのために祈るだけじゃなく、こうしてお願いするためでもあったんです。
頼られるだけじゃなく、頼らせてもらえるようにお願いすること。
それが、今回残った私に真子ちゃんがお願いしてくれたことでした。

「……レミ様」

頭を下げたままでいると、ヨハンさんが私を呼ぶ声が聞こえてきました。
その声に顔を上げると、ヨハンさんが私の目の前に跪いていました。
そして、両の目から幾筋もの涙を浮かべていました。
私は慌ててヨハンさんに駆け寄りました。
泣かせるつもりはなかったんです！

「あ…！？　す、すいません！　私、何か、気に障ることを……！？」
「レミ様……ああ、レミ様……！」

でもヨハンさんはむしろ嬉しそうな声を上げ、私の両手をぎゅっと握りしめました。
え？　な、なに？

「こんな……こんな私でも、レミ様のお役にたつことができるのですか……！？」
「え？　え、はい、もちろんですよ！」

滂沱と涙を流し続けるヨハンさんに、私は頷きました。
むしろ、協力してもらえないと困るんですけど……。

「ああ……！　やはりレミ様は女神様の再顕現であらせられます……！　御身を救えなかった我々に恩赦を下さるばかりではなく、名誉を挽回する機会までいただけるなどとは……！」
「えーっと……」
感極まった様子のヨハンさんに困り果てて、私はオーゼ様の方を見つめます。
オーゼ様も困った様子でしたが、すぐにヨハンさんの肩を叩きました。
「ヨハン。レミ様が困惑しておられる。手を離しなさい」
「ハッ！？　申し訳ありません、レミ様！！」
「あ、いえ、いいんですよ！」
オーゼ様の言葉にヨハンさんは涙を止め、顔を蒼くして勢いよく頭を下げました。
でも、困ったのはいきなり涙を流されたことであって、両手を握られたことじゃ……。
と私が言おうとするより早く、ヨハンさんは立ち上がってオーゼ様の方を向きました。
「オーゼ様、やはりこの像は女神様への不敬にあたると思います。即刻取り壊しましょう」
「ええ！？」
なんでそんな話に！？
オーゼ様はヨハンさんの言葉にため息をついて、首を横に振りました。

「何を言っているのだ……。像がなければ、いったい我々にどうやって祈りを捧げろと……」
「それはもちろん」
ヨハンさんは輝くような微笑を浮かべて、ぽん、と私の肩を叩きました。
「こちらにおわすレミ様にです！」
「……えっ？」
ヨハンさんの言葉に、私は目が点になったように呆けてしまいました。
オーゼ様が、大きなため息をついています。呆れているのか、それとも……。
私、これからどうなってしまうんでしょうか……。

No.70：side・remi「女神への祈り」（後書き）

どうやら奉られてしまうようです、礼美ちゃん。やったね！
まあ、オーゼさんが全力阻止すると思いますけどね。
次は魔法のお勉強だよ！

No．71：side・remi「彼らの思い出」

「はふぅ……」
「なんか昨日は大変だったみてーだな……」
「言わないで……」

危うくヨハンさんに祭り上げられそうになった翌日、私は魔導師詰所の長机の上でぐったりと体を横たえていました。
ううう……。ヨハンさんってば、本気で私を女神像の代わりにしようとするんだもの……。木槌を持ち出したときはどうしようかと思ったよ……。
結局昨日は、何とかヨハンさんの説得に成功して女神像の破壊を思いとどまってもらいました……。
決め手になったのは、意外なことに隆司君の小隊の騎士さんたちでした。

「アルベルトさんたちがいなかったらどうなってたことか……」
「お役にたてたようで何よりですな！」
「ひゃぅ！？」

ぽつりとつぶやいた声に、当のアルベルトさんの返事が！
驚いた私が慌てて体を起こすと、なんだかいい笑顔をしたアルベルトさんたち三人が本を片手に立っていました。

「ごきげんよう、レミ様！　今日も麗しいですね！」
「あ、はい、ごきげんよう……。皆さん、今日はどうしたんですか？」

ベルモンドさんに返事をすると、チャーリーさんが爽やかな笑い

声を上げました。

「ハハハ。我々も騎士の端くれ。こうして時に勉学に励むときもあります！」

「そうなんですかー」

皆さんの勉学に対する姿勢は、とても大切なものです。やっぱり、騎士ともなるとそういった向上心は常に持ち合わせているものなんですね！

「・・・

ジョージ君にお願いしていたのは、私のオリジナル呪文の添削です。

魔導師の人は、魔術言語（カオシック・ルーン）の意味を組み合わせて、新しい魔法を開発するのがお仕事です。

簡単な呪文なら、ある程度はアドリブで完成することもありますけれど、戦闘にも耐えられるような複雑な呪文ともなると、やっぱり魔術言語（カオシック・ルーン）同士の干渉で不発に終わることも多いんです。

今私がジョージ君に採点してもらっているのは、簡単に説明すれば「相手の戦意を削ぐ魔法」です。

もし今後、魔王軍との交渉の場を持つのであれば、まずは相手の戦意を削ぐことが重要だと思って、相手に傷をつけずに、ただ戦意だけ削げるような魔法を組み立ててみました。

ジョージ君の勧めに従って、まずは呪文の長さなんかは考えないで、とにかく魔法が発動できるように組み立ててみたつもりなんですけど……。

「魔術言語（ルーン）同士が干渉する点が多すぎるぜ。もうちょっと、こう、すまーとに組めねーのか？」

「ううー……」

ジョージ君が問題点のある場所に、赤いインクで印をつけていきますが、瞬く間に紙が真っ赤に染まってしまいました……。

初めてとはいえ、これはひどすぎます……。

ジョージ君はそんな私の様子を見て、呆れたような溜息をつきました。

「っていうか、そもそも戦意を削ぐだけってのが無理すぎんだろ。光矢弾（ライトアロー）だって、無傷で制圧するには十分だろーが」

「うん、そうなんだけどね……」

光矢弾（ライトアロー）は、光り輝く矢が対象の魔力を削るという魔法。無傷で制圧するには確かにちょうどよさそうな魔法なんですけど……。

大量の矢をいっぺんに叩きつけると、ちょっとした木くらいはへし折れる威力になるんです。

気にしすぎかもしれないけれど、できる限り相手を傷つけたくはないから……。

「光矢弾（ライトアロー）でだめなら、光波掌（ブラスト・ウェイブ）でも光槍撃（スピア・スマッシャー）でもいいじゃねーか」

「あ、あんまり過激な魔法はちょっと……」

ジョージ君が次々列挙していく魔法に、私は思わず顔をひきつらせました。

光波掌（ブラスト・ウェイブ）は掌から光の衝撃波を放って、相手の魔力を吹き飛ばす魔法。光槍撃（スピア・スマッシャー）は、十本くらいの光矢弾（ライトアロー）を束ねて一本にして放つ魔法です。

どちらも、人間位なら一発で昏倒させられる威力があるんですけど、だからこそ逆に怖いんです……。

尻込みする私を、ジョージ君は厳しい目で睨みつけてきました。

「おめー、本気でやる気があるのかよ？　あれはダメこれはダメって、そんなんでこれから先やっていけんのか？」

「そ、それは……」

ジョージ君の言葉は、正鵠を射ていました。

確かに、彼のいうとおりです。

これから先、いつまでも私が出す盾や光矢弾（ライトアロー）が通用するとは限りません。

光矢弾（ライトアロー）以外にも、それなりの数の呪文を覚えていますけれど、ほとんど誰かを治療したり、身体を強化したりといった援護系の魔法ばかりです……。

真子ちゃんたちの足を引っ張らないためにも、少しでも攻撃系魔法を覚えていかないといけないって、わかっているんですけど……。

「……」

でも、やっぱり怖いです。

必要以上に、相手を傷つけて、それがもとで戦いが激しさを増して行ったりしたら……。

光太君が一人残った時、ガオウ君とはほとんど相打ちのような形で撃退に成功したらしいんですけど、その時ガオウ君の全身はひどく傷ついていたそうです。

きっと、魔王軍の本営に戻ったあと、マナちゃんが治療したんだろうけれど、それがもとでマナちゃんに恨まれていたりしたら？

そういうことを考えてしまうと、どうしても攻撃的な魔法を覚えるのに躊躇してしまうのです。

光太君なんかは、切磋琢磨できる相手ができて嬉しそうでしたけれど……。

それを後ろから見ている人のことは、きちんと考えてくれてるのかなぁ……？

「オメーが言うな」

「え？」

不意に聞こえてきたジョージ君の声。

びっくりして顔を上げると、ふてくされたような顔をしたジョージ君がそこにいました。

「な、なに？」

「なにも何も、オメー、後ろで見てたことなんか一回もねーじゃねーか」

「え？　え？」
「……さっきから、声が出てんだよ」
「えええぇぇぇぇぇぇ！！？？」

思わず赤くなった顔を押さえました。
というか、声でてたんだ！？　気づいてたなら、先に言ってよぉ！

「うう～……」
「……なあ」
「なーにー……？」

呻くように返事をすると、なんだか感情を抑えたようなジョージ君の声が聞こえてきました。

「コウタって……どんな奴なんだ？」
「……どんな？」

その質問に顔を上げると、ジョージ君は持ってきていた魔導書を読んでいました。
文字を呼んでいるジョージ君の表情はうかがえません。
どうしてそんなこと聞くんだろ？

「んー……」

ともあれ、聞かれたことには答えないと……。
私はゆっくりと光太君のことを考えます。

「出会ったのは、高校に上がってからだから……四ヶ月くらい前かなぁ？」
「そんなに短い付き合いなのかよ？」

「うん。言われてみれば、短いね」

思わず私は笑ってしまいました。

だって、光太君とはずいぶん前から知り合いだったような気分でしたから。

「最初は、真子ちゃんに誘われて一緒にお弁当を食べたんだよね」

「弁当を？」

「うん。光太君、男の子なのにお料理上手なんだよ？　毎日自分でお弁当作ってるんだ」

あれにはちょっと焦っちゃったなぁ。だって、私よりおいしいおかず作るときがあるんだもん。

「それから、隆司君とも知り合って……それからは、四人で一緒に行動するようになったんだよね」

暇さえあれば、ずっと一緒にいたんだよね。

お買い物行く時や、ゲームセンターで遊ぶ時。

光太君と隆司君が、対戦ゲームで遊んでいるのを後ろから眺めていたり、光太君にクレーンゲームで景品を取ってもらったり。

四人で、近くの山にハイキングに行ったりもしたっけ……。

なんだか懐かしい……。こっちに来てから、半年も経ってないはずなのに……。

「そんな中で思ったのは……光太君は優しくてすごくて……それでいて、どこか放っておけない感じがするってことかな？」

「放って……？」

私の言葉に、ジョージ君が顔を上げます。

どこか不安そうな表情です。

「うん。なんていうか、危なっかしい？　そんな感じがするの」
「どこがだよ……。この国じゃ、もう上から数えたほうが早い位、強いじゃねーか……」
「そうだね、おかしいよね……」

私の言葉に、再び魔導書に顔を伏せながら、ジョージ君がなぜか震える声で反論してきました。
私はそんなジョージ君の様子に首を傾げながら、何とか言葉を探します。
実際その通りで、光太君の実力の伸びは天井知らずで、もうまともに相手ができるのが剣の師匠であるアスカさんや副団長さん、そして隆司君と騎士団長さんしかいないんだとか。
でも……光太君から感じる危なっかしさは抜けていません。

「なんでだろうね……。私も、よくわからないんだ」

結局ジョージ君が納得いきそうな答えが見つけられず、ごまかすような笑顔を浮かべてしまいました。
でも、なんとなくはわかっています。
きっと、私と光太君は、よく似ているんです。
鏡の向こう側の自分を見ているようで……だから放っておけない。
そんな気が、するんです。
言葉にするには、あんまりにもよくわからない感覚ですから、今はまだ口にはしません。
きっと、説明してもわかってもらえないから。

「なんだよ、それ……」

ジョージ君が、やっぱり私の答えに納得してくれず身体を振るわせ始めました。
お、怒らせちゃったかな？

「じょ、ジョージ君？　ごめんね？　私も、自分でもよく……」
「――――！」
「あっ！？　ジョージ君！」

私が何か弁解するよりも先に、ジョージ君は勢いよく椅子を蹴倒して駆け出していきました。
何も言わずに駆け出して行ったせいで、その顔はよく見えません。
どうしたんだろう……。やっぱり、不真面目に答えたように思われちゃったのかな……。
私が不安でおろおろしていると、ジョージ君が出ていったドアからフィーネ様が顔を見せました。

「今ジョージが出てきおったが……いったい何があったのじゃ？」
「あ、フィーネ様」

やってきたフィーネ様に駆け寄ると、ぽつりと衝撃的な言葉を漏らしました。

「あ奴、泣いておるようじゃったが……」
「えっ」

思わず、息を呑みます。
泣いて、って……一体どうして……？

「っ！」
「あ、レミ！？」

急いで魔導師団の詰め所の外に出て辺りを見回しますが、もうジョージ君の姿はどこにも見当たりません。
慌てた様子の私を心配してか、フィーネ様がすぐに詰所から出てきました。

「どうしたのじゃ、レミ……」
「フィーネ様……」

私は不安そうなフィーネ様に先ほどの話をするか、一瞬迷います。
でも、結局……。

「……いえ、何でもありません」
「なんでもない？」
「はい。ちょっと、私のオリジナル魔法のことで、口論になっただけですから」

私は誤魔化すように笑顔を浮かべました。
もし、私の話がジョージ君を傷つけたのなら、気軽に他人に話すべきではないと思ったからです。
話にしても、きちんとジョージ君に謝ってからです……。
フィーネ様は、私の顔を怪訝そうに見つめていましたが、すぐに納得したように頷きました。

「そうか……。もし、何かあったら、すぐに教えてほしい。私も、主らの力になりたいのじゃからな」
「はい」

フィーネ様に嘘をついてしまったことに胸を痛めながら、私は今ここにいないジョージ君のことを考えます。

ジョージ君、どうしちゃったの……？

No.71：side・remi「彼らの思い出」（後書き）

おかしい……。ラブコメいた話にしたいはずだったのに……！

まあ、ジョージイベントが進んだ感じだからいいか。

女の子らしい直感で、少なくとも光太よりは前に進んでいる礼美ちゃん。結果として、まあ、周りが余計に悶々とするわけですが……。

次は礼美ちゃん信仰の進み具合をチェック！？

No．72：side・remi「メイド長さん、語る」

「はぁ……」

結局あの後、ジョージ君に会うことはできず、次の日に顔を合わせて謝っても「なんでもないから」と言われて拒絶されてしまいました……。

いったい何が悪かったんでしょうか……。

今私は、ぶらぶらとお城の中を散歩しています。

魔導師詰所にはジョージ君がいるので居心地が悪く、礼拝堂の方を覗いてみればヨハンさんが何やら私の像か何かを建設しようというお話をしているところで……。

下手に顔を見せたらそのまま、像の建設のお話に巻き込まれそうだったので逃げてきたんです……。

そんなわけで居場所が見つからず、お城を徘徊する羽目に……。

こういう時、真子ちゃんがいればまっすぐに真子ちゃんのところに行けるんだけどなぁ……。

そんな私の目の前に、メイド長さんを従えたアンナ王女が現れました。

「あら、レミ様ではありませんの」

「あ。アンナ王女」

「ごきげんよう。お顔がすぐれませんが……何かありましたの？」

アンナ王女が私の顔を覗き込むように、様子を伺ってきました。

「あ……大丈夫です、何もありませんよ？」

アンナ王女に気を使わせないように、私は笑ってごまかしました。

でも、アンナ王女は半目になって私を睨みつけます。
な、何かな？

「……嘘ですわね、レミ様」
「え、ええ！？」
「無理をしているときのお兄様と同じお顔をなさっていますわ！」

嘘を見破られて驚く私に、アンナ王女は胸を張ってどうだ！という感じの顔を見せつけます。
う、ううう……。顔に出てるなんて……。
思わず頬を抑えてしまいましたが、アンナ王女はそんな私に構わず、私の服の裾を引っ張ってどこかへと連れて行こうとします。

「何があったのか、聞かせてもらいますわ！　勇者の皆様のメンタルケアは、皆様を呼び出した王家の物として当然の責務ですもの！」
「え、ちょ、アンナ王女！？」

見た目の幼さ以上の力強さで私を連れていこうとするアンナ王女に戸惑って、一緒についていたメイド長さんの方に救援を求めるように目を向けました。
でも、メイド長さんは私を助けてくれず、むしろ苦笑しながら諦めろというように首を横に振るだけでした。

「さあ、参りますわよ、レミ様！」
「ふえ～ん！？」

「ジョージとですか？」
「はい……」

結局いつものお花畑に引きずられて、何があったのか洗いざらいしゃべる羽目になってしまいました……。

とはいえ、さすがに本当のことは言えません。今回も、「私のオリジナル魔法のことで、少し口論になった」とだけお伝えしました。

「ぬう……。ジョージの奴、フィーネに意地悪するだけではなく、レミ様にまで反抗するとは……！」

「い、いえ！　今回は、私が悪いわけですから……」

憤慨する王女を何とかなだめようとしましたけれど、アンナ王女はドンとテーブルを叩きました。

「いけませんわ、レミ様！　そうやって甘やかすから、ジョージの奴が付け上がるのですわ！」

「そ、そうでしょうか……？」

プンプン、という擬音が似合いそうなアンナ王女の様子に、思わず頬が緩みそうになってしまいますが、何とか引き締めます。

でも、今回の場合は、やっぱり私が原因なわけですし……。

と、私の前に入れたての紅茶を置いてくれたメイド長さんが、ぽつりと一言こぼしました。

「一概に、レミ様ばかりのせいとは言えないとは思いますが……」

「そ、そうですか？」

メイド長さんの方を見ると、少し思案気な顔をしていました。

「ジョージ様が誰かと口論すること自体はいつものことですし、それが原因で騒ぎになるのもいつものことです。それは、ジョージ様

自身の反骨心が原因。レミ様が気に病まれるほどのことではありません」

「そうですかね？　でも、私の魔法が原因なわけですし……」

じっとわたしを見つめてくるメイド長さんにどぎまぎしながら、何とか反論を試みます。

特別、感情が見えないメイド長さんのまっすぐな視線は、まるで私の内面を見透かそうとしているようで、なんだか落ち着きません。

うう、嘘をついてるなんてばれたらどうなるんだろう……。

「確かにレミ様の魔法が原因なのかもしれませんが、それならばただ添削を行うだけで済む話。必要以上に噛みつくのは、ジョージ様の悪い癖です」

「そうですわ！　レーテのいうとおり！　レミ様は何一つ、悪くありませんよ！」

「そ、そうでしょうか……」

主従から揃って、私は悪くないと後押しされて、私はだんだん良心が痛み始めるのを感じていました……。

ま、まさかここまで後押しされるなんて思わなかったよぅ……。

ど、どうしよう。いっそこのまま、本当のことを言っちゃおうか……。

で、でも、それで嘘をついていることがばれちゃったら、王女様怒るよね、きっと……。

いうべき言葉が見つからず、気まずさから思わずうつむいてしまう私。

「大丈夫ですわ、レミ様！　ジョージが何か言うようであれば、私が何とかいたします！」

そんな私にアンナ王女が元気づけるように、声をかけてくれます。
ううう……！

「だから――」
「アンナ！　少しいいかい！？」

さらに声をかけようとするアンナ王女に、アルト王子の声がかかりました。
思わずハッとなって顔を上げると、アルト王子とトランドさんの姿が見えました。

「お兄様！？　何か御用ですか！？」

アンナ王女は少しだけ驚いた顔になりましたが、それでも嬉しそうにアルト王子のそばに駆け寄っていきました。
そ、そういえば、アンナ王女、もっとアルト王子に頼ってほしいって言ってたっけ……。
なんにしろ、アンナ王女が立ち去って、思わず私は安堵のため息をついてしまいました。
あれ以上励まされてたら、洗いざらい話してしまうところで……。

「――それで、本当は何があったのです？」
「ふえ！？」

耳元で聞こえてきた囁くような声にびっくりします。
そうだ、メイド長さんがまだいたんだ！？
でも、かけられた声は励ましではなく、質問でした。
私が恐る恐る視線をめぐらせると、メイド長さんは安心させるように微笑んで頷きました。

「ご安心ください。アンナ様は、今のレミ様のお話が嘘だとは気付いてらっしゃいません」
「い、いえ、そういうことじゃ……」
「それに――」

メイド長さんが言葉を区切って、ちらりと視線だけをアンナ王女の方に向けました。
つられてそちらに顔を向けると、アンナ王女がこちらに駆けよってくるところでした。
なんだか申し訳なさそうな顔をしたアンナ王女は、私の両手を握って頭を下げてきました。

「すみません、レミ様！　これから貴族たちとの会議が始まるようで、私も参加させてもらうことになってしまいました」
「そ、そうですか……」
「私がお誘いしたお茶会だったのに、申し訳ありません……」
「い、いえ、そんな。気にしてませんよ！」

お茶会を適当な時間で切り上げてしまうことを気に病んでいるみたいで、本当に申し訳なさそうなアンナ王女。
私は気にしていないことをアピールしますが、その顔は曇ったままです。
どうしようかと悩んでいる間に、アンナ王女はてきぱきとメイド長さんに指示を飛ばしました。

「レーテ、申し訳ないのだけれど、レミ様がご満足いただけるまで、彼女に付き合ってあげてね？」
「はい、かしこまりました」

メイド長さんが恭しく頭を下げ、それに満足したようにアンナ王

女は一つ頷きました。

「それではレミ様、ごきげんよう！」

「あ、はい、ごきげんよう」

つられて私も頭を下げます。

アンナ王女はそんな私を見て微笑んで、踵を返して元気よく駆け出していきました。

「……これで、この場には私とレミ様だけになりました」

「あ……」

そんなアンナ王女の背中を見送ったメイド長さんが、さっき切った言葉の続きを口にしました。

言われてみれば、そうです。城内に人はたくさんいますけれど、このお花畑は半ばアンナ王女専用ということらしく、ほとんど人がやってきません。

メイド長さんが、ぬるくなった私の紅茶を下げ、新しい紅茶を入れてくれます。

「無理に、とは申しません。ですが、おひとりで考えているだけでは、答えが出ないこともございますよ？」

「……」

メイド長さんに言葉に、私はまたうつむきました。

確かに、その通りです……。

「マコ様のように……とは参りませんでしょうが、私もアンナ王女のように、皆様のお力になりたいのです」

かちゃりと、入れたての紅茶がまた私の目の前に置かれました。
湯気を立ち上らせる紅茶は本当においしそうです。そして水面には、私の顔が映っています。
キュッと唇を結んで、じっとこちらを見つめるその顔は、思っていた以上にひどく、憔悴しているようにも見えました。
そのまましばらく、私もメイド長さんも黙ったままでいました。
その沈黙に耐えきれなかったのか、あるいはメイド長さんの優しさに甘えたかったのか……私は思わず口を開いてしまいました。

「……実は――」

そして、ジョージ君との間にあったことを簡単に説明します。
ジョージ君に請われて、思い出話をしたこと。そしたらジョージ君が逃げ出したこと。
たどたどしく、それでも何とか聞いてもらおうと必死に言葉を選びます。

「……」

メイド長さんは、黙ったままじっと聞いてくれました。
私が全部語り終えると、メイド長さんは静かに頷きました。

「なるほど……。それで、レミ様は何とかジョージ様と仲直りしたいのですが、ジョージ様が拒絶なさっていると」
「はい……」

今日のことを思いだして、またうつむいてしまう私。
そんな私の両肩に手を置いて、メイド長さんは私の肩を揉み始めました。

「はぅ。め、メイド長さん？」
「少し、肩がこってらっしゃいますね。ほぐして差し上げましょう」
「そ、そんな必要は……あぅ」

メイド長さんのいきなりの肩もみにびっくりしてしまいますが、想像以上に気持ちがいいです。
凝り固まった筋肉を、優しく解してくれるその手つきに、なんだか病み付きになってしまいそうです……。
というより、こんなに肩がこってるなんて……。
メイド長さんの肩もみに、全身を預けていると、メイド長さんの静かな声が頭の上から聞こえてきました。

「……レミ様」
「は、はい？」
「レミ様は、ジョージ様の様子を見て、どうなさりたいですか？」
「え？　えーっと……」

ふわふわと浮くような気持ちよさの中で、何とか頭を働かせて答えを出します。

「できれば、今すぐにでも仲直りしたいなぁ……って……」
「そうですか……」

メイド長さんはそこで言葉を切って、ポンと肩を叩きました。

「はい、終わりです。レミ様が思ってらっしゃる以上に、緊張してらっしゃるようですね」
「あ、ありがとうございます」
「どういたしまして」

私がお礼を言うと、メイド長さんは小さく笑って、それから真剣な表情になりました。

「レミ様。ジョージ様との仲直りは、今すぐには参りません」
「え!?　な、なぜですか!?」
「問題が起こっているのは、レミ様とジョージ様の間ではなく、ジョージ様の中でだからです」
「ジョージ君の……？」
「はい」

メイド長さんは頷きます。
そしてわけがわからず混乱する私に諭すように、メイド長さんは優しく言葉を紡ぎます。

「人間というものは、案外自分の心に振り回されてしまいがちなものです」
「心に……ですか？」
「はい。かくいう私も、数年前までは随分……」

そこまで言って、メイド長さんは昔を懐かしむように微笑みました。

「そういう問題は、周りがなんと言っても、そうそう解決できるものではありません。ですから、しばらく時間を空けてから、接してみてあげてください」
「は、はい……」

メイド長さんに言われるままに、私は頷きます。
時間を空ける、かぁ……。
言われてみれば、そうすることで、解決する問題もあるよね……。

納得したように頷いた私は、目の前の紅茶を一息に飲み干しました。

少しぬるくなった紅茶は、少しだけ苦く感じました。

No.72：side・remi「メイド長さん、語る」（後書き）

そんなわけで、メイド長さんの恋愛?講座でした。いや、恋愛ではねーか。

なんというか、大人の女性のこういう時の包容力は以上。伊達に歳喰ってねーですよね。

次回は、奪還メンツのお時間です。さて、鉱山で何か見つけられるかなー?

No.73：side・ryuzi「鉱山の町、オリクト」

鉱山の町、オリクト。
アメリア王国が保有する、数少ない鉱山の一つであり、鉄製品生産を主な収入源としている、鍛冶の町でもある。
今回奪還する予定である領地でもあるのだが……。

「鉱山の町だと聞いてどんなもんかと思ってみりゃ……」

一拍置いて、俺はクワッと瞳を見開いて叫んだ。

「野原の中心にいきなり岩山が生えてるってどういうことなの！？」
「オーストラリアのエアーズロックみたいだったね……」

俺の隣で光太がフォローのようなものを入れている。
そう。鉱山の町というので、山脈の麓にでも町を構えているのかと思いきや、広い平原のど真ん中に岩山が生えていて、その麓に町ができているというシュール具合だったのだ。
まあ、そもそもこの国の山脈は末端にしかほとんど存在しないらしいし、それをたった八日間で行き来できるわけもねぇよな。
だが、青々とした草原に突然、地肌むき出しの岩山が出現しているという光景は、俺の想像を上回っていた。
っていうかありえねぇだろ……。海湖（ソルト・レイク）のことといい、俺たちの世界と一線を画し過ぎだろうこの世界……。
いつものように馬車をサンシターに預け、俺たちは町の中へと入っていく。
町の中はまさに平穏という感じで、ほとんどの人がせわしなく仕事をしている。
鍛冶師のおっさんの怒号が響き渡ったり、金槌で精錬された金属

を叩くような音も聞こえてくる。
今までの町と違い、はた目にはほとんど侵略されているようには見えない。

「ホントにここ侵略されてんのか……？　極めて平和な感じじゃねぇか」
「報告によれば、侵略を受けたという話ではありますが……」

目の前の光景が信じられないのか、アスカさんもまたいぶかしげな表情で町の中を見回した。

「依然訪れた時と、ほとんど様子が変わりません……」
「アスカさんがここに来たのは、いつの時ですか？」
「二年ほど前、剣を新調しに赴きました。その時と様子はほとんど変わっていません……」
「でも～、ここに～常駐していた～騎士さんたちは～王都に～逃げてきたわよね～？」
「確かに……」

アルルの言葉に、アスカさんが頷いてみせる。
むしろそのことがなけりゃ、この町が侵略されているなんて誰も信じねぇよ。

「で、隊長。今回はどうすんだ？」
「何が？」
「魔王軍との戦いだよ。今回は、別に使者みたいなのもいねぇっぽいけど」
「あー」

フォルカの言葉に、俺はあいまいなうめき声を上げる。

確かに、正面にわざわざ馬車で目立つように乗り入れたというのに、誰もこちらを気にしている様子がねぇ。
こりゃ、こっちで探すしかねぇか？
俺は真子に今後のことを聞くために、振り返る。

「おい、真子。どうす……アレ？」

だが、そこにいると思っていた軍師の姿はなかった。
思わず右左と周囲を見回すが、やっぱりどこにもいなかった。

「……おい、真子はどこ行ったんだ？」
「マコ様でしたら」

このたびの最中、終始ぶつぶつ言っていたナージャが、やっぱり不機嫌そうなまま馬車が走り去っていった方向を指差した。

「サンシターさんが預けに行った馬車に乗ったまま「あとは自由行動でよろしく」とおっしゃってましたが……」
「マジで……？」

俺は信じられないという表情で、真子が去っていったであろう方向を見つめた。
軍師様、まさかのフリーダム離脱である。
そんなにこの町に来たかったのアイツ……？　よほど武器の制作がうまくいってねぇんだな……。

「あーもー、しょーがねぇ……」

俺は乱暴に頭を掻き毟ると、光太の方に振り返った。

「とりあえず、手分けして魔王軍の連中を探すぞ。で、撃破できるならその場で撃破」
「それはいいけど……真子ちゃんはどうするの？」
「どうもこうも、邪魔したら切れるぞ……」
前に一回、発明してる時に遊びに行ったら鬼の勢いで切れたからな……。集中してる時に邪魔されたら切れるのはわかるんだけどさ……。
「というわけで、真子のことは放置。もし魔王軍に遭遇しても、何とかなるだろ……」
「わかった。隆司、気を付けてね」
「おう」
光太に一つ頷いて、俺は光太たちと別れる。
町の中を歩き始めた俺の後ろに、フォルカとナージャが付いてきた。まあ、いつものメンツだわな。
「で、どうするんです？」
「どうもこうも、適当に見て歩くしかねぇだろ……。何か心当たりがあるならともかく」
「ちげぇねぇ」
そもそも、本当に魔王軍が常駐してるのかすら怪しい平和具合だからな……。正直、いなくても驚かねぇぞ俺は。
そんなわけで、俺たち三人は適当に買い食いしながら町を見て回ることにした。
この町の特産は、鉱山に住むとかいうトカゲの姿焼きだった。丸々一匹そのまま焼いて出す辺りは豪快というかなんというか。
味付けは塩コショウのみで、かなりさっぱりしているが逆にそれ

がいい味出してやがるぜ……！

「このトカゲ、皮まで食べれるんですね」
「パリパリしててうめぇ！」
「トカゲの塩焼き最高！」

他にも、山で採れた果物を砂糖で漬けたものや、この町で作られた地酒なんかも味わうことにする。こういう時は、酔えない体質が便利極まりねぇ。一杯やっても問題ねぇからな。
そうして食堂楽に勤しんでいる俺たちの目の前に。

「っと、すみませ……」
「んお？」

一つの鍛冶屋から一人の少年が飛び出してきた。
いや、少年というのもおかしいか？　何しろそいつには……。

「狐っ子改め、狐少年キター！！」
「うわぁぁぁぁぁぁ！！？？」

狐の耳と尻尾がくっついていたのだから。
そいつを目視した瞬間、さっきまで手に持っていた果物の砂糖漬けも放り出して、音速の勢いでナージャが飛びかかった。
残像が見えるほどのスピードだ。いかな魔族でも逃げ切れまい。
ナージャは狐少年に飛びかかって押し倒すと、速攻で尻尾に抱き付き顔をうずめた。

「やーん！　モフモフモフモフモフモフモフ……！」
「ちょ、やめ、やめてください！？　なんなんですかあなたは！？」

鬼気迫る勢いのナージャに怯えぎみの少年が、何とかその体を引きはがそうとするが、まるでしばりつけたように動かない。
よほど狐っ子成分に飢えてたんだな……。いかん、ちょっと泣けてきた……。

「ソフィアに会えなかった俺も、こんな感じだったのかなぁ……」
「ミミルに会えなくなると、俺もこんな感じになっちまうのかなぁ……」
「モフモフモフモフモフモフモフモフ……！」
「見てないで助け……！？」

他人のふり見て我がふり直すわけじゃねぇが、なんとなくいたたまれなくなってきた俺の顔を見て、狐少年がびっくりしたような顔になった。
あん？　なんだ？

「あ、あなたは……！　ソフィア様がおっしゃっていた、タツノミヤリュウジ！？」
「いかにもソフィアの婿ですが何か？」
「いや、それは言ってませんでしたが……。ともあれなぜここに！？」

なんだ言ってないのかよぅ。
ちょっとしょんぼりする俺に対し、狐少年は何とか立ち上がって、腰に下げたサーベルを引き抜いた。

「こんなところまで来るだなんて……！　は！？　まさか、姉さんがこちらに来たのも……！？」
「え、お姉さまがいらっしゃるの！？　ぜひごあいさつさせて！」
「あなたはいい加減尻尾から離れてください！」

サーベルを構える少年だが、いまだ尻尾に抱き付きっぱなしのナージャのせいでいまいち格好がつかない。
というか目をキラキラさせてるがナージャさん？　お前、前にもいたいけな少年をモフってなかったかね？　あの子はいいのかい？

「あの子のことを忘れたわけではありません！　ですが、ご家族をモフらせていただくなら、やはりご挨拶は大事だと思うのです！」
「モフっていいなんて言った覚えはありません！」
「あぁん！？」

狐少年が、ナージャの顔をモフモフの手で思いっきり押し返した。
その隙を突き、何とか尻尾を取り戻すが、ナージャの次の動きの方が早かった。

「尻尾がだめなら耳をー！」
「そう簡単に触らせ、っな！？」

牽制の意味を込めてか、ナージャに向かってサーベルを斬りつける少年だったが、ナージャはそれを難なくかわすと、少年の背後を取った。
そしてギュッと子供を抱きかかえるように抱きしめると、おもむろに口で少年の耳を食み始めた。

「ひゃん！？　ちょ、手じゃないんですかぁ！？」
「ムフフ、手は君を抱えるので塞がってしまったのです」
「抱えなくていいですぅ！？」

いよいよ涙目になり始めた狐少年。
じたばたと暴れるが、ナージャの拘束が緩む気配は一切ない。

その間にも、ナージャは唇で狐少年の毛並みを堪能する。

「う～ん、お日様の香りとマシュマロの感触がしますぅ……」

「舐め、舐めないでください！？」

「舐めてませんよー。べたべたになりますし。ただ、唇で優しく食んでるだけです♪」

「うわーん！？　というかあなたたち、見てないでこの人どうにかしてくださいよぉ！？」

狐少年がこっちにヘルプを求め始めた。

俺とフォルカは無言で顔を合わせ、小さく頷き合ってからやさしい笑顔で狐少年の姿を見つめた。

「大丈夫だ少年。お姉さんには、君は立派に戦ったと伝えておくよ」

「戦死者扱いですか！？　というか、これから僕はどんな目に！？」

「大丈夫大丈夫。もしなんだったら、天井の染みでもみてりゃ、そいつがすぐ終わらせてくれるさ」

「だから何ー！？」

ハッハッハッ、と爽やかに笑い声を上げる俺とフォルカ。涙目になる狐少年。それらに頓着せず、ひたすら狐少年の毛並みを堪能するナージャ。

そんなある種和やかな、通りすがりも無視して通っていくほどに穏やかな光景を聞きつけたのか、一人の魔族がこの場に駆けつけた。

そして、ナージャに背後から抱きすくめられ、ひたすら耳を食まれている姿を見て、手に持っていた買い物袋をどさりと落とす。よほど衝撃的だったのだろう。

「マ、マオ君……？　あなた、いったい何を……！？」

「ま、マナ姉さん！？」

「そんな……！　こんな白昼の往来で女の人と……！？」
「ち、違うんだ姉さん！！」

着物にもよく似た服を着た狐娘……というかマナは、顔を真っ赤にしながら後ずさる。
目の前の痴態に耐えきれなくなったのか、くるりと振り返ってそのままダッシュで駆けだす。

「マオ君の不潔ぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」
「ねぇぇぇぇぇさぁぁぁぁぁぁぁん！！？？」

ドップラー効果すら伴って姿を消すマナ。かなりの俊足。狩猟動物の本領発揮といったところか。
というか、マナの奴なんでここに？　まさかガオウの奴もこっちきてんのか？

「ううう、姉さん……！」
「え、お姉さんがいらしたの！？　どこに！？」
「今しがたどっかいっちゃいましたよ！　おもにあなたのせいで！」
「ええっ、そんなぁ！」
「そんなはこっちのセリフですよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

マナの出現に全く気が付かなかったナージャが、狐少年……マオの言葉に残念そうな顔になるが、お前が言うなと言わんばかりに唾を飛ばすマオ。哀れな奴よ……。
まあ、それはそれとして。俺はマナが落としていった買い物袋を拾い、いまだナージャに抱きすくめられたままのマオの顔を覗き込む。

「さて、マオ君。ここいらで一つ交渉といこうじゃないか？」
「こ、交渉？」
俺の言葉に、マオが訝しげな表情になる。
このタイミングで交渉を持ちかけられるとは思わなかったんだろう。
「うむ。その引っ付き虫を引きはがす代わりに、このオリクトにある魔王軍の拠点まで案内してくれたまへ」
「な！？　そ、そんなことできませんよ！」
俺の言葉に、マオは慌てて首を横に振った。
まあ、自分たちの拠点を案内してちゃ軍人失格だわな。
だがマオ君や。君、今の自分の立場解ってるのかね。
「でなくば、今日の宿まで君の身柄を拘束するまで。オールでナージャにモフられる恐怖を味わうがいい」
「いいの隊長！？」
ナージャの瞳がひときわ輝き、マオの体を抱きしめる腕に力が入る。
そんなナージャの気合の入り様に、マオは怯えたように声を上げた。
「や、やめて！　それだけは！」
「ならば俺たちを魔王軍拠点に案内するのだ。今すぐに」
「う、うううぅぅぅ……！！」
恐喝の如き言葉に、マオが顔に脂汗を流しながら唸り始める。
とはいえ、耳はペタリと伏せられている。相当心が折れているは

ずだ。
　フォルカの方に目くばせすると、心得たという様子で頷いたフォルカはそのまま踵を返して駆け出した。
　これで、マオが折れたらすぐに光太たちと拠点に攻め込めるな。

「さあ、今すぐ首を縦に振るのだ。さもなくば、その引っ付き虫が君の全身の素敵な毛並みを余すことなく堪能することになるぞ」
「うわーん！？」

　哀れな狐少年の悲鳴がオリクトの町に響き渡る。
　かわいそうだが、今日でケリをつけるためにガッツリ協力してもらうぜ？

No．73：side・ryuzi「鉱山の町、オリクト」（後書き）

変態成分を書き始めると止まらないのはいつものことだけど、淑女バージョンは久しぶりかなぁ。ナージャさんの暴走具合がひでぇ。

そしてマナちゃんの弟、マオ君の登場です。苦労人属性を背負って背負ってそうな子ですね。可愛そうに……。

次回はチャンネルを真子ちゃんに切り替えてみたいと思ひます。

No．74：side・mako「鉱山の現状」

地肌に岩石がむき出しになっている岩山。
目の前にそびえたつそれの前に、あたしはじっと立ち尽くしていた。

「これは……」

あたしの視界に入る巨大な岩石の塊ともいえそうなその山には、それこそ無数の穴が開いていた。
おそらくほとんどが坑道だろう。今でも断続的に岩石を砕くピッケルの音は聞こえてくるが、音はかなり遠い。たぶん、地上に露出している部分はほとんど掘りつくしちゃったのね……。
オリクト……。王都付近じゃ数少ない、鉄鉱石が取れる場所だって聞いてたけれど、この分じゃ期待できないかな……。
落胆するあたしの耳に、近くの鉱夫達に聞き込みをお願いしていたサンシターが駆け寄ってきた。

「マコ様ー！」
「どうだった、サンシター？」
「やっぱりダメでありました……。今この鉱山から取れる素材はほとんどが石で、鉄やそれに類する素材は出てこないという話でありました」
「そう……」

残念そうなサンシターの顔を見て、あたしは落胆の度合いを強めた。
サンシターに聞きに行ってもらったのは、今この鉱山からは鉄が取れるのか？ということと、もし取れるなら王都へ優先的に回して

もらえるのか？ということの二つだ。
今設計図を書いている銃は、ライトアローが通る銃身部分に鉄製の丸い枠をはめ込んでおくというものだ。少ない鉄で、最小限の防備を行おうと考えた結果だけど……。
そもそも鉄そのものがなけりゃ、作ることもままならないのよね……。

「一応、石素材であれば回すことはできると言ってたでありますが……」
「さすがに石じゃね……。武器に使うには、ちょっと重すぎるわ」

石、の言葉にあたしは顔をしかめる。
この国は鉄こそあまり取れない物の、逆に石や木による道具の制作に長けていた。
基本的な道具類はたいてい木製だし、木と石を組み合わせた水車や歯車といった機械的機構を持つ道具も結構な数存在する。
足踏み式の機織機なんかがちょうどその最たるものだ。王都の製布業者のほとんどは、かなり性能のいい足踏み式の機織機を自社制作している。
それもこれも、鉄がほとんど取れないが故の方策なのだろうが……それにしては解せない点も多い。

「にしても……それなら、王城の武器庫の、あの大量の魔法剣はいったい何なのよ？」

あたしはぶっきらぼうに言って、頭を乱暴に掻き毟った。
そう。王城の武器庫の中を一度のぞかせてもらったことがあるのだが、そこにはふんだんに鉄が使われた魔法剣が大量に仕舞いこんであったのだ。
案内してくれた騎士の人の説明によれば、過去の魔導師団が開発

した魔法武器の類が仕舞いこまれているのだろうとのことであったが、フィーネによればここ数十年の間、魔法武器の関係の開発は行われていないということだ。

そもそも、今回の魔王軍の侵略以外では、王都の周りの森林で生まれる凶暴な動物以外に騎士団の力が発揮されることもなかったということ。魔法武器の開発が行われていなかったのも納得だ。

だが、あの武器庫の中に眠っていた武器の大半は、戦闘用に開発されていたものだ。あたしの目に見える魔術言語（カオシック・ルーン）はすべてそのように映った。

光太が持ち帰った螺風剣（エア・キャリバー）なんかもそうだが、使い方次第ではかなり強力な魔法武器が、ほとんど無造作に仕舞いこまれていたのだ。なんで使わないのよと吠えたのも記憶に新しい。

そした何より気になったのが、いくつかの武器に刻まれた文字は、あたしにも読むことができない物だったのだ。

倉庫の奥底で眠っていたその剣は、かなりの年数が経過していると見て取れるにもかかわらず、ほとんど劣化した様子もない。

刻まれている文字も、ほとんどが意味不明の言語であり、魔術言語（カオシック・ルーン）は申し訳程度に刻まれているだけだった。

そこから読み取れる限りでは、その剣はかなり広範囲に対して影響を及ぼすであろうということ。

……さすがに、光太辺りを引っ張ってきて試し撃ちと洒落こむ気にはなれなかった。

「……サンシター。この国、本当に一回も戦争をしたことはないのよね？」

「はいであります。魔王軍の侵略が始まる前は、本当に平和なものでありました」

ここ数日の間、何度も確認した事柄を、今一度確認するあたし。

サンシターもあきれることなく、律義に付き合ってくれる。

そんな彼の誠実さに申し訳なく思いつつも、あたしはこの国の不審な点への疑念を深める。

戦争をしたことがないはずなのに、広範囲への殲滅兵器としての武器が眠っている国。

もちろん、広範囲殲滅兵器なんてのはあたしの想像にすぎない。

だけど、その武器が持つ異様な雰囲気は、正直言ってただ広範囲に魔力を頒布するだけで終わってくれる気はしなかった。

光太がその武器に興味を持ってくれなかったことにひたすら感謝だ。あいつの魔力変換効率はけた外れだ。普通の魔法武器でも、常人よりはるかに高い威力が出せる。そんな奴があんな剣使った日には、どうなるか想像もつかない。

「っだー、わけがわかんない……。結局この鉱山に来たのも無駄足に終わりそうだし……」

「鉄は貴重でありますからねー……」

「そうなのよねぇ……」

しみじみとしたサンシターの言葉に、あたしは同意するように項垂れた。

現代社会に生まれちゃうとそうは感じないけど、元々鉄って貴重なのよね……。今でこそ……って言い方はこの世界にはおかしいけどさ。ともあれ、製鉄技術も加工技術も揃ってるからふんだんに使えるわけで……。

良く考えたら、銃身に仕えそうな細長い丸い筒なんて、この国で作れるかも怪しいわよね……。作れて大砲が限界かしら……。

「あーもー！！」

「マコ様、あまり髪をいじめてはダメでありますよ」

「ほっといてよ！」

再び頭を掻き毟り始めるあたしをなだめようとするサンシター。
あたしはそんな彼の手を乱暴に振り払う。
と、そんな光景を見たらしい誰かが、あたしたちに声をかけてきた。

「おやおや。そんな風に、自分を心配してくれた相手を邪険に扱うもんじゃないよ」
「アァン！？」

思わず悪態ついてそちらを睨みつける。
そして思わず体を硬直させる。
何しろそこには、異形の下半身を持つ絶世の美女が存在した。
その姿を見て、サンシターは悲鳴に近い声を上げた。

「し、四天王のラミレス！？」
「そうさ。ラミレス姐さんだよ」

サンシターの驚き具合が愉快なのか、ラミレスはコロコロと笑い声を上げる。
それに呼応するようにラミレスの下半身を構成する触手が唸りを上げた。
まず……！　こいつ、ほとんど戦ってないけど、戦闘力だけならヴァルトと同格に違いない……！
身構えるあたしの前に、ほとんどがむしゃらといっていい感じでサンシターがその体を投げ出した。
そして両手を大きく広げてラミレスの前に立ちはだかった。
だが足はがくがくと震え、明らかに無理をしているのが見え見えだった。

「ちょっとサンシター！？」

「じ、自分、普段役に立たないであります！　だからせめて盾としてくらいは……！」
「あんたね……！」

震える声で主張する彼の姿に悪態をつきかけるが、正直助かる。
例え一秒であろうと、長く時間を稼いでくれればその間に十分な構成が練れる……！
そんな風に臨戦態勢に入るあたしたちの様子を見て、ラミレスはまた楽しそうに笑い声を上げた。

「ハハハ、かっこいいじゃないか！　ヴァルトにも劣らない勇猛さだよ！」
「ど、どうも」
「敵に礼言ってんじゃないわよ……！」

思わず後ろからサンシターの頭をはたき倒したくなる。どこまで律儀なのよあんたは……！
唸り声を上げながらサンシターの後頭部を睨みつけるあたしに、ラミレスは安心させるような声音で語りかけてきた。

「フフ、そう身構えなくてもいいさね。別に今回は、あんたたちと遣り合う気はないんだからね」
「どうだか！」
「本当さ」

あくまで徹底抗戦の構えを崩さないあたしに、ラミレスは証拠を示すように腕を一振りした。
途端、無数の鎧がラミレスの隣に召喚された。
さまよう鎧か何かか！？と身構えるあたしに、ラミレスは触手を一本使って鎧を一つ持ち上げてみせた。

「ここんとこ、あんたたちと遣り合ったせいで、鎧にガタがきてるのさ。一応、鍛冶師もつれてきていたんだけど、数が数だからねぇ。こういう町で本式の修理を依頼しに来たというわけさ」
「鎧の修理……？」
思わず眉根を寄せるあたし。
ラミレスがためしに持ち上げてみせた鎧は、どう贔屓目に見ても修理が必要なようには見えなかった。
別に新品、というわけではない。だが、どこかが派手に請われているとか、目に見えて故障している部分が分からないのだ。
そんなものの修理を頼むってどういうことよ？
ラミレスはそんな私の疑問を察したのか、軽く肩をすくめてみせた。
「まあ、人間にはなかなかわからないと思うんだけどね。小さな留め具のずれとか、そういうのが結構気になるらしいんだよ。ウチの連中はよく動くからね」
……つまり、隆司や光太がバシバシ叩くもんだから、留め具にずれが出始めてるってこと？　そのずれが、身体を良く動かす魔族にとっては致命的になりかねないってことかしら……。
「もしそれが本当なら、修理なんてさせるわけがないでしょう……！」
「言うと思ったよ」
唸るように宣言するあたしに、ラミレスはやっぱり楽しそうに呟いた。
ド正面からの撃ち合いで勝てる相手かどうかわからないけど……

最速で最高の一撃を叩きこめれば！

「集え天星（サテライト・スターズ）！　撃ち滅ぼせ（シューティング）……！」

完成した天星呪文から連携して、一気に最大威力を放出する！

天星を飛ばし、サンシターの前面に魔法陣を描くように天星を配置……。

「ほいっと」

しようとした瞬間、いつの間にかサンシターの前面にまで迫っていたラミレスが、魔法陣に軽く触れるように触手を伸ばした。

途端、ガラスを砕くような音とともにすべての天星が砕け散った。

「なっ……！？」

「ふぅん。あんたたちが光輝石（マナクリスタル）って呼んでる石によく似た性質だね」

「っ……！！」

天星を砕かれただけじゃなく、その性質まで見抜かれたっ！？

「あんたの持つ魔力量でこれだけの純度の石を生み出すなんて大したもんだねぇ……。それも、あんたが持つ力のおかげかい？」

楽しそうにサンシター越しにあたしを見やるラミレス。

あたしはほぼ反射的に腰に差していたマシンガンを引き抜いた。

そしてラミレスの顔に狙いをつけて、即座に引き金を引いた。

軽い音と同時に、無数の光矢弾（ライトボウ）がラミレスへと叩きこまれる。

「おおっと！？」

「ぎゃぁぁぁぁぁぁ！！？？」

ラミレスは無詠唱で盾を呼び出しながら、後退。
そしてサンシターは耳元で響き渡る発砲音にビビって悲鳴を上げた。

「ビビってんじゃないわよ！　何度も聞いてるでしょうが！」
「こんな至近距離は初めてであります！　耳が、耳がぁ！？」

思わずといった風情で耳を抑えるサンシター。
ったく、軟弱なんだから……！

「いやはや、そんなもんまで作るとはねぇ……」

だが、至近距離からのマシンガン連射もさすがにラミレスを倒すには至らなかったようだ。
ラミレスの張った盾に、少々ひびが入った程度。詠唱完全破棄で出した盾に対しての効果としては、微妙なところね……。
あたしは片手にマシンガンを構えつつ、もう一度天星を召喚するための構成を編む。
といっても、天星全損＆マシンガンの連射だ。そんなに数は稼げないわね……。
脂汗のようなものを見せるラミレスに、あたしは再びマシンガンを向ける。

「そう何度も撃たせないよ！」

だが、今度はラミレスの方が早かった。
一本の触手から伸びた魔力光がマシンガンを貫き、中の光輝石（マナクリスタル）ごとあたしの手を破壊した。

「ぐっ！？」
「マコ様！？」

呻くあたしの前に、慌ててサンシターが体を躍らせる。
くっそ、あっさり打ち壊された……！

「フフン。まだまだだねぇ」
「うるさい……！」

得意げなラミレスを睨みつけるが、掌から伝わる激痛のせいで汗が止まらない。
ちらりと見やれば、砕けた木の破片が掌に突き刺さり、さらに魔力光のせいで穴まで開いている。

「――――ッ」

そんな傷跡を見て、一気に血の気が引いた。
大量の血が流れているせいかもしれない。
もっと大量の血や傷は、隆司の物を見たことがあるが、自分の物は初めてだ。
そんな冷静な脳みその中に反して、身体は動悸が止まらず、息は荒い。体も震えてきた。
と、視界が突然ぐらりと傾いた。

「あ、マコ様！？」

慌てたようなサンシターの声とともに、意外とがっしりとした手があたしの体を支えるのを感じた。
え、なに？　あたし、どうなって……？
うまく考えが纏まらない、視界が明滅し、意識も音も遠くなって

いく。

「ああ、しまったね……。やりすぎたかい」

遠くで誰かが呟いた。その声は、とても後悔しているように聞こえる。

「ちょ、ちかづかな――――」

「とりあえずきずはふさ――――」

誰かと誰かが言い合っていた。

その誰かがいったい誰なのか、思い至るより早く、あたしの意識は真っ黒になった。

Ｎｏ．７４：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「鉱山の現状」（後書き）

とりあえず、真子ちゃんは好戦的なようです。でも、やっぱり普通の女の子なんですね。

そんなわけで、オリクトでの鉄鉱石採取計画は暗礁に乗り上げたようです。まあ、しかたないね。

次回は魔王軍討伐ですよー。

No.75：side・ryuzi「魔王軍拠点、侵入」

無事にオリクトにある魔王軍拠点へとやってくることができた俺たち。

光太たちとも合流を終え、ナージャに怯えるマオをなだめながらの進軍であったが、終始ナージャは幸せそうだった。マオと手をつなぎながら歩いているからだろう。

本人は腕を組みながら歩きたがったんだが、約束としては引きはがさにゃならんかったので、手をつなぐくらいで妥協してもらったのだ。というか、途中で発情されてもアレだし。

手をつないだままでも幸せそうなナージャを見て、怯えるべきなのか困惑すべきなのかわからないのか、忙しそうに顔色を変えるマオの案内でやってきたのは町が背負う岩山の陰になる場所にヒッソリと据えられた魔王軍の拠点だった。

そんな拠点にやってきてまず、ナージャが動いた。

拠点の前で、恐らく弟が襲われたことを報告しているマナの姿を見るやダッシュで近づき、土下座の勢いで頭を下げてこう叫んだのだ。

「お姉さま！　マオ君との清い交際を認めてください！」

「えぇっ！？」

清い、と聞いてマオがそんな馬鹿なというような顔つきになるのが見える。

まあ、あんだけ全身モフられればなぁ。

マナは背後から聞こえてきたいきなりの大声にビクンと飛び跳ねて振り返り、頭を下げているナージャの姿を認めると、慌てたように首を横に振った。

「だ、ダメです！　マオ君を、あなたのような人には預けられません！」
「そんな！　大丈夫です！　大人になるまできちんと我慢しますから！」
何を我慢するんだよ……。というか、婚期を逃した女性みたいな口調だなオイ……。
「あ、アハハ……。ナージャさんって、その、情熱的なんだね……？」
「無理にこの状況を表現せんでもいいぞ」
表現に困ったらしい光太の言葉に、俺はため息をつきながら言ってやった。
っていうか俺がソフィアにやってることとそんなに違わないだろうに。なんでそんな戸惑ってるんだよ。
「いや、隆司は本人に迫ってるけど、家族には迫らないだろう？」
「家族って、魔王じゃねぇか。最終決戦までその辺はお預けか、そういえば……」
その事実に気づいた俺は、遠い目で魔王城が存在していそうな方向を見つめた。
お父様への御挨拶は、いったいいつになるんだろうな……？
などと思っていると、ニュルニュルという、少なくとも地上で聞くには湿っぽい音が聞こえてきた。
「これはいったいどういう状況なんだい……？」
「何この音、って、ラミレス姐さん？」

その音がする方を向いてみると、呆れたような眼差しでマオ君争奪戦を繰り広げるナージャとマナを見つめるラミレス姐さんがそこにいた。

そしてなぜか、気絶したままの真子を背負ったサンシターが一緒に。

俺の声を聞いてかそちらを向いた光太が、驚いたような顔になる。

「ま、真子ちゃん!?」

「なんで姐さんと一緒にいるんだよサンシター……。っていうか、真子の奴はどうしたんだ?」

「はあ、それが……」

サンシターは、横目でラミレス姐さんをチラ見しつつ、困惑したように真子が気絶した原因を話してくれた。

「先ほど、岩山の行動付近でこちらのラミレス殿と遭遇し、マコ様と戦闘になったのであります」

「せ、戦闘!?」

「一応釈明させてもらうと、仕掛けてきたのはこの子だからね」

ラミレス姐さんが、真子の頭を触手でツンツンと突く。

触手の感触が気持ち悪いのか、真子が何やらうめき声を上げた。

「だ、大丈夫だったの?」

「それが大丈夫ではなく……。マコ様が取り出しましたマシンガンを、ラミレス殿に破壊されてしまい、マコ様が怪我を負ってしまわれたのです」

サンシターの言葉によく見れば、真子の右手には包帯のようなものが巻かれていた。

なるほど。マシンガンごと手を怪我させられたってことか。

「怪我自体はラミレス殿に治療していただいたのでありますが……」

「この子は怪我そのものに耐えられなかったみたいでね。自覚したら、すぐに気絶しちまったってわけさ」

「なるへそー」

「だ、大丈夫かな、真子ちゃん」

ラミレス姐さんの補足を聞いて、俺は頷いた。

光太が心配そうに、真子が怪我をした手を取る。

パッと見、きつく巻かれているようには見えないし、血も染み出してはいない。傷自体はもう完全に塞がってるんだろう。

俺はアルルの方を振り返る。

「アルルー。心配はいらんと思うけど、一応真子の傷見てやってくれ」

「はい～」

アルルは存外素直に頷くと、駆け足で真子のそばに近づいて行った。

「それでは～コウタ様～。マコ様の具合を～見ますので～、手伝ってくださいまし～」

「ああ、うん。わかったよ。それじゃあ、サンシターさん」

「はいであります」

サンシターは光太の言葉にうなずいて、真子の身体を光太に引き渡した。

光太はいわゆるお姫様抱っこで真子を抱き上げると、アルルが引いた布の上に真子の身体を横たえた。

さて、あっちはこれでいいとして……。

「ではお姉さまもご一緒に我が家へご招待いたしますから！」

「余計にいりません！　私には、が、がが、ガオウ君がいますからなぁ！！」

あっちの方をどうにかせにゃならんかね……。

マナとナージャの言い合いは白熱を続け、もはやお互いに論点を見失っていそうな具合になっていた。

マナの発言を聞き、魔王軍側の少女たちが一気に沸き立つ。マナの顔を真っ赤にしながらの愛の告白に、少女たちが感化された感じかね。

「さーて、あれはどう治めるべきかねー」

「なぜそこまで他人事でいられるんですか、あなたは……」

「そんなこと言われても……」

アスカさんの厳しいツッコミに、俺は後ろ頭をぼりぼりと掻く。

実際他人事だしなぁ……。

「一番手っ取り早いのは、マオ君がはっきりと宣言しちゃうのがいいよな」

「「！！」」

「え！？」

ぼそりと、俺が呟いた言葉を聞きつけたらしいナージャとマナが、クワッと目を見開き、二人で一度にマオの方に詰め寄った。

その唐突さに怯えたマオが一歩二歩と下がるが、いつの間にかというかいきなり地面から生えた壁に背中を抑えられてしまう。誰か知らないけどいい仕事するね。

「マオ君！　私が性急すぎたのを認めるわ！　だから、これからはゆっくりと愛を育みましょう！？」

鼻息荒く、目も若干血走り気味のナージャの迫力はかなりのものだ。このチャンスを逃したら、次がいつになるかわからないから、ここで確実にマオをものにしたいのだろう。

「マオ君！？　こんな、変な人なんかに、ついて行ったり、しないよね！？」

一方のマナは、瞳に溜まった涙が今にもこぼれそうで、声も途切れ途切れだ。よほどナージャの奇行がトラウマになっていると見える。

「え、いや、その」

そしてそんな二人に詰め寄られたマオは、進退窮まったように両手を上げ、二人を押し止めようとする。だが残念ながら、彼の掌にくっついた肉球は二人を跳ね返すほどの弾力はないようだ。

「「マオ君！！」」

また一際強く、一歩二人が踏み込んだ。

マオの顔面の脂汗は加速度的に増えていき、誰もが固唾をのんでその進退を見定めようとする。

「いったいどのような状況ぞ、これは……」

と、そんな空気をぶち壊すように、しわがれた翁の声が響き渡っ

た。

「！　ガルガンド！」

ラミレス姐さんの顔が、一瞬で引き締まった。

って、あれ？　味方のはずなのに妙に緊張してるように見えるんだが……。

対してガルガンドは、呆れたような表情を崩すことなく、俺の方を指差した。

「ラミレス殿。此度は休暇と聞いて参ったが、何故、この者たちとともにいるのだ？」

「休暇、だったのさ。この子らが、間をおかずに領地の奪還に動いたんだよ」

「左様か」

自分で聞いておきながら大して興味もなかったのか、ガルガンドは即座に俺の方に視線を向けた。

対して俺は、牙を剥きながら獰猛に笑って見せる。

「この間の続きといくかい？」

確かに致命傷こそ数えきれねぇ程負わされたが、その程度なら俺は即座に治っちまう身体だ。追いつけりゃ、こっちが有利だぜ？

そんな俺の言葉に、ガルガンドは掌をこちらに向けて、俺を押し止めた。

「……やめておこう。不死者（イモータル）でもないのに死なぬお主を殺しきる自信がないわ」

「そうかい。ありがとよ」

不死者（イモータル）なる言葉に、若干首を傾げるが、まずはガルガンドとの戦闘回避できたことを喜ぶべきか。

こっちはもうすでに、真子がダウンしてるからな。あんまり無理は出来ねえぇ。

だがガルガンドはうっそりと目を細めると、ゆるゆると中空に文字を描き始めた。

「……しかし、こうして攻め入られているのは事実」

その文字はやがて光り、形になり始め、魔術言語（カオシック・ルーン）の姿を取り始める。

「なれば……」

ちらりと、マオを取り合っているマナとナージャの方を見た。

そしてにやりと笑った。

「反撃せぬわけにはいかぬのぅ？」

同時に中空の文字が弾けるように発光し、ナージャを中心とした上空に、光の刃が無数に出現した。

空中に固定されていた刃は一拍置いて、ナージャ達めがけて降り注ぐ！

「旋風刃（ストームエッジ）ッ！！」

だが、ナージャ達へと刃が突き刺さるより早く、螺風剣（エア・キャリバー）から放たれた竜巻が、それらすべてを吹き飛ばした。

突然現れた竜巻に、マナは悲鳴を上げ、マオは仰け反り、ナージ

ャは勢いを利用してマオに抱き付いた。お前ホントに転んでもただじゃ起きんのな。

そんな光景を見て、ガルガンドは小さく舌打ちをした。

「おしい……」

「何をするんだ!?　危うくマオ君たちまで怪我をするところじゃないか!?」

今の惨状一歩手前に対し、光太が声を荒げる。

ナージャに関してスルーしているのは、一応魔王軍と敵対している自覚はあるからな。

しかし、それでもマオたちの方を気にするのは光太らしいっていうかなんて言うか……。

ガルガンドは光太の抗議を聞いて、何とも皮肉げな笑みを浮かべた。

「おやおや？　まずは、味方の心配をするのが正しかろぅ？」

「質問に答えろッ！」

ガルガンドの皮肉も無視する光太。

珍しいな。こいつがこんなキレかたするなんて。

ガルガンドは、皮肉げな笑みを浮かべたまま、愉快そうに答えた。

「なに、他愛なきことよ。敵もろとも死したとあらば、それは美談であろぅ？」

「なんだって!?」

何とも外道なことだな。

光太の憤り具合が本当に愉快なのか、ガルガンドはついに声を上げて笑いながら光太を見下ろした。

光太はガルガンドに向けて、油断なく剣を構えた。

「ククハハハ。愉快な勇者だ。敵など放っておけばよかろぅ？　そなたは国を救うもの。敵を滅ぼすものぞ？」

「違う！　僕は、魔王軍の人たちを滅ぼすつもりなんかない！」

周囲に緊張が走る。

光太シンパのアスカやアルルは、光太の言葉に驚愕し、魔王軍は目を丸くする。

まあ、どう考えてもバカのセリフだよな。敵対している相手に対して殲滅の意志がないとかのたまうのは。

「ならばなぜ敵対する？　我らを滅ぼさぬというのであれば、滅びを待てばよかろぅ？　のぅ？」

「魔王軍の人たちを滅ぼすことと、この国を救うことは、同じじゃない！」

敵は滅ぼせというガルガンドに対し、滅ぼすことが勝利じゃないという光太。

対照的な二人だ。ああ、だからいつになく光太の奴はキレてるのか……。

ガルガンドの思想は、光太の思想の対極に位置するから。

「詭弁よなぁ……」

「詭弁はあなたの方だ……！」

光太の全身から、ゆらりと意志力（マナ）の輝きが立ち上り始める。

ガルガンドはそんな光太の姿を見て、瞳に警戒の色を混ぜた。

こりゃ……一戦やらかさなきゃ、収まりがつかないかね？

No.75：side・ryuzi「魔王軍拠点、侵入」（後書き）

そんなわけで空飛ぶ胡坐ジジイ再び。不穏な空気をばら撒くキャラです。出てこなきゃ、ギャグで終わっていたのに……。

それでは次回、光太君奮闘するの巻！　果たして勝てるのでしょうか……？

No.76：side・ryuzi「魔王軍拠点、撤退」

ガルガンドが動く。
胸の前で合わせた掌に、魔力の玉を生み、そこから衝撃波を解き放った。

「カァッ！」

まっすぐに進む衝撃波。
光太を狙ったそれは、螺風剣（エア・キャリバー）の風によって吹き散らされた。

「風よっ！」

光太は返す刀で、螺風剣（エア・キャリバー）から風を解き放ってガルガンドに向けて飛ばす。
だが、中空に浮いているガルガンドは危なげなくそれを回避した。

「酸撃散弾（アシッド・スプラッシュ）」

回避と同時に、ガルガンドの魔法が解き放たれる。
嫌な色をした液体が散弾銃のように、光太に向かって突き進む。
光太は再び螺風剣（エア・キャリバー）の風で攻撃を吹き散らす。
が、地面にぶつかった液体が、ジュゥと嫌な音を立てて土を溶かした。

「なっ！？」
「溶解液を飛ばす魔法よ。そう、驚くほどでもない」

解けた地面を見て驚愕する光太を見て、ガルガンドがにやりと笑

う。
そして再び先ほどと同じ色をした液体を、手掌の間に生み出した。
「再び行くぞ？　酸撃散弾（アシッド・スプラッシュ）」
「くっ！？」
ガルガンドから放たれた酸弾の姿を見て、光太は数瞬迷い、素早くマントをひるがえしてすべて受け止めた。
「コウタ様！？」
「あのアホ……」
それを見て、アスカさんが悲鳴を上げ、俺は思わず顔を掌で覆った。
大方、あの酸弾を吹き散らしたときのこちらへの流れ弾を警戒しての行為だろう。
が、恐らくガルガンドにとってはそれが狙い。
その証拠に、次に放とうとしている魔法もまた酸撃散弾（アシッド・スプラッシュ）だ。
「酸撃散弾（アシッド・スプラッシュ）」
「フッ！」
三度目の酸弾を、留め金から外したマントを振り回して防ぐ光太。
が、二度も酸弾を受け止めたせいで、すでにマンとはぼろぼろだ。
次の酸弾を受け止めるだけの面積はない。
どうするつもりだよ？
「酸撃散弾（アシッド・スプラッシュ）」
四度、同じ魔法が解き放たれる。

飛び掛かる酸の飛沫を前に、光太は一つの魔法を唱えた。

「軽身法（ボディ・ライト）！」

魔法を唱えると同時に、光太の身体が淡く輝く。

って、それは体を軽くする魔法だろうが、いったいどうするつもり――。

と俺が光太の行動を訝しむより早く、光太は地面に対して螺風剣（エア・キャリバー）を突き立て、竜巻を発生させる。

その反動で、光太の身体が空高く跳ね上げられた。

「ぬっ！？」

ガルガンドの放った酸弾は、光太がついさっきまで立っていた場所をむなしく叩く。

「ストーム・ブリンガー！！」

高く飛びあがった光太は、上空から再び竜巻をガルガンドに向けて放った。

ガルガンドは素早く回避。光太は放った竜巻の反動でまだ空中に浮いている。

そして光太の高度に合わせるように、ガルガンドも上空へと舞った。

それに合わせて俺たちは視線を上空に跳ね上げる。

「ただ人のみで空を飛ぶなど……摂理に反すること……！」

「でぇぇぃぃぃ！！」

光太の叫び声とともに、再び螺風剣（エア・キャリバー）から竜巻が解き放たれた。

それをギリギリのところで回避したガルガンドは、そのまま光太に身体ごとぶつかっていった。

「墜ちよ、人間！」

「うっ！？」

ガキィン！と甲高い音を立てて螺風剣（エア・キャリバー）とガルガンドが座っている莫蓙のようなものがぶつかり合う。

ガルガンドと違い、竜巻の反動で飛んでいる光太にそれに耐えるだけの力はなく、そのまま勢いよく落下する。

アスカさんとアルルが悲鳴を上げる。魔王軍の連中も息を呑む。

地面に叩きつけられれば絶命必至だが、光太は慌てず騒がず、螺風剣（エア・キャリバー）の力で衝撃を緩和。無事着地する。

場所は今魔王軍の連中と一緒に固まっている場所からそれなりに遠い。周りへの被害を気にしなくていい分、光太には良い方に傾いたかね。

「氷牙散弾（フロストレイン）」

光太が着地した場所に向かって、ガルガンドは上空から魔法を雨あられと叩きつける。

光太はそんなガルガンドの攻撃を、慌てず騒がず螺風剣（エア・キャリバー）の風で凌いだ。

そして、螺風剣（エア・キャリバー）が纏う風の中に意志力（マナ）で練り上げられた光剣の輝きが入り混じる。

「光破（ライトニング）……！」

「ぬ！」

大技の気配に、ガルガンドの周りに無数の光球が灯る。

が、光太の方が数瞬速い。

「旋風刃（ストームエッジ）！！」

大上段から解き放たれた、巨大な竜巻と無数の光刃は、まっすぐにガルガンドへと振り下ろされる。

ガルガンドは光球を解き放って幾本かの刃は防御するが、それもむなしく本人の元まで竜巻が振り下ろされる。

「ちぃ！」

呻いて素早く障壁を築くが、地面という支えを持たないガルガンドは抵抗むなしくそのまま地面へと叩きつけられた。

轟音と共に、土煙が上がる。

「はぁ……はぁ……！」

相変わらず意志力（マナ）の行使には極大の疲労が伴うのか、光太は息を荒げている。

油断なく、上がる土煙の方を見据える光太。やがて煙幕が晴れると、そこには変わらずふわふわと浮くガルガンドの姿があった。

光太は素早く、剣を青眼に構えた。

だが、ガルガンドはそんな光太を掌を向けて押し止めた。

「……？」

「負けを、認めよう」

いぶかしげに眉をひそめる光太に、ガルガンドはそう宣言した。

そんなガルガンドに対して、ラミレス姐さんがいささか嘲るような声色でこう口にした。

「坊やたちが仕掛けたわけだけど、あんたにしちゃ珍しいじゃないか？」
「此度はただ、主らへの定期報告に来ただけよ……。このような戦闘に巻き込まれるなど、ついぞ思わぬ」
首を横に振りながら、ガルガンドはふわふわとラミレス姐さんの方へと近づいていく。
すぐそばに寄ったガルガンドの姿を睨みつけつつ、ラミレス姐さんは俺の方へと体を向けた。
「さて、じゃあ今回はこっちの負けってことにしておくよ」
「そんなんでいいのかよ？」
まさかの言葉に、俺は眉根を寄せる。
まあ、向こうでの防衛戦でも一騎打ちで魔王軍を追い払えたわけだが、こっちでも同じことが通用するとか……。
怪しむ俺に対し、ラミレス姐さんはカラカラと笑い声を上げる。
「別にかまいやしないさ。負けたのはこっちなんだからね」
「まったく……恥ずべきことよのぅ。日誌に記して忘れぬこととしようぅ」
ラミレス姐さんの言葉に、ガルガンドも悔しそうな様子でそう呻いた。
同時に、魔族たちもラミレス姐さんを中心とするように集まり始めた。
どうやら本気で撤退するつもりらしい。
「どのみちそっちも、その子がそんな調子じゃ本気で戦えないだろ

う？」
「……まあな」

相変わらず気絶したままの真子を指差すラミレス姐さんに、俺はそう頷いてみせる。
さすがにあいつをかばいながらでこのメンツをいっぺんに相手にできる気はしない。
好都合といえば好都合なんだが……。

「それじゃあね、リュウジ。また会おうじゃないかい」

思い悩む俺を無視して、ラミレス姐さんは転移術式（テレポート）でその場から消えていなくなる。
拠点であるテントすら一度に転移してしまえるラミレス姐さんパネェな……。
魔王軍が消えたのを確認してから、俺はため息を吐いた。

「今回も、何とか奪還に成功……ってことでいいんかね？」
「じゃなねーかな」

俺の言葉に同意するように、フォルカが頷いてくれる。
やれやれ。ナージャの暴走が始まった時はどうなることかと思ったが、何とか一日で奪還に成功してよかったぜ……。
そのナージャであるが、いきなり目の前でマオが消えていなくなったせいで両手を地面についてがっくりうなだれている。
別れの挨拶もできなかったわけだからなぁ。そりゃがっくりくるわな。
光太の方には、アルルとアスカさんが駆け寄って両手を組むような感じで抱き付いている。
どうも身体を接触させるのが、意志力（マナ）を回復させる一番いい方法

らしいのだが……アスカさんはともかく、アルルにはご褒美にしかなってなくねぇか？

「う、うーん……」

とりあえずナージャの奴を慰めてやろうかと思い、一歩踏み出そうとした瞬間真子がうめき声を上げた。

おっと、軍師様のお目覚めか。

「あ、マコ様！　大丈夫でありますか？」

「あれ、サンシター……ラミレスッ！」

「あ、マコ様！」

ぼんやりとサンシターの顔を見つめていた真子は、何かに気が付いたように表情が引き締まり、ガバリと上体を跳ねあげた。

が、血の気が足りないのか、すぐにぐらりと身体を傾いだ。

サンシターが慌ててその身体を抱きとめた。

「ぐ、く……！？」

「まあ、落ち着けって」

「落ち着けって、ラミレスがこっちに……！」

「もう帰ったから大丈夫だって」

「はぁ……？」

俺の言葉にいぶかしげな表情になる真子。

俺は簡単にこれまでの状況を説明してやる。

「――ってわけでな。今回も、一応俺たちの勝ちってことらしい」

「――――」

俺の説明に、真子は考え込むような表情になった。
そんな真子の様子に、俺は首を傾げた。
ところどころ省いたけど、そんな考えるようなことあるのか？
しばらく考えていた真子は、顔を上げて俺の方を見る。

「……ガルガンドがいきなりあらわれたのよね？」
「？　ああ」

真子の確認に、俺は一つ頷いた。
ホントいきなりだったからな。たぶん、転移術式（テレポート）か何かだと思うんだけど。

「で、ラミレスたちは、ここには休暇で来ていたって言ってたのよね？」
「一応な」

もう一つ頷く。
俺の聞き間違いかもしれんけど、ガルガンドの確認にラミレス姐さんは休暇、と言っていた気がする。
従軍中に休暇も何もねぇ気はするけどさ。

「……じゃあ、ガルガンドはなんでここに来たのかしら？」
「ん？　なんでって？」
「ラミレスたちが休暇なのは、隊ごとに別れてるって考えればありでしょ？　でも、ガルガンド達も一緒に休暇ってことはあり得るの？　そうなると、ヴァルトの隊しか動けないってことになるじゃない」

真子が口にした疑問の言葉に、俺は首を傾げる。
言われてみりゃそうか。休暇を取らせるとすりゃ、一部だけだよ

な。
普通は大半が仕事してるよな。いや、仕事されても困るんだけどさ。

「あ」
「なによ」

と、そこまで考えて、俺はガルガンドが呟いていた言葉を思い出した。

「そういやガルガンドの奴、定期報告がどうとか……」
「定期、報告？」
「おう」

俺が頷くと、また真子は考え込むように、深くうつむき始めた。
ヒラヒラと目の前で手を振ってみるが、集中し過ぎてほとんど目に入っていないようだ。
なんだろうね、一体。
俺はぐるりと首をまわして、サンシターの方に向く。

「しかたねぇ。サンシター。俺ちょっと、町までいって宿取ってくるわ」
「あ、はい」

サンシターにその場のことを任せて、俺は町の方へと歩き出した。
さしあたって、これで取り戻した領地は四つか……。全部奪い返せるまで、あとどのくらいかかるやらねぇ。

No.76：side・ryuzi「魔王軍拠点、撤退」（後書き）

そんなわけで、光太君の勝利ですー。といっても、ガルガンドもどこまで本気だったやら。

そもそもにして、侵略にどこまで本気で取り掛かってるか疑問の多い魔王軍。その真意はどこに？

次回は王都へと帰りますよー。

No.77：side・remi「親友の悩み」

ガラガラと馬車が音を立てて、王城の中へと乗り込んできました。

「みんな、御帰りなさい！」

一週間ぶりにみんなに会えると思って、思わず浮かれて飛び出してしまいます。

でも、馬車からすぐに降りてきた真子ちゃんは、難しい顔をしながらぶつぶつとつぶやき、そのまま王城の中へと消えてしまいました。

「真子ちゃん？」

「ごめん、礼美。今ちょっと考え中だから……」

声をかけても上の空。何かあったのかな……？

振り返ろうとしたとき、私の肩を、誰かが叩きました。

びっくりして振り返ると、少し心配そうな顔をした光太君がそこにいました。

「光太君！」

「礼美ちゃん。真子ちゃんのことは、今はそっとしておいてあげて」

「え……？」

どういう、ことなんでしょうか？

オリクトで、何かあったのかな……。

私は光太君の手を取ると、どこかに行ったりしないように両手でぎゅっと握りしめました。

そんな私の様子に、光太君は首を傾げました。

「光太君……」
「うん、なに？」
「オリクトで、何かあったの？」

目をまっすぐに見て、光太君に問いかけると、光太君も真剣な表情で私の目を見つめ返してくれます。
そしてしばらくしてから、ゆっくりと口を開きました。

「……真子ちゃん、オリクトではあまりいいことがなかったから」
「いいことが……なかった？」
「うん」

光太君は一つ頷くと、真子ちゃんが去っていった方向に顔を向けました。
その顔は、真子ちゃんのことを心配している様子が伺えます。

「元々、オリクトへは真子ちゃんの希望で行ったでしょ？」
「うん。確か、今作ってる魔法武器のための素材が欲しいって……」

真子ちゃん、今は銃みたいな機能を持ってる魔法武器を作る関係で、頑丈な素材が欲しいって言ってました。
木じゃ、どうしても素材の強度が足りないとかで。
そのために、オリクトに行ったはずですけれど……。

「その素材集めがうまくいかなかったんだ」
「そうなの！？」
「うん。元々、鉱山は掘りつくされてたみたいで……。今は、ほとんど石切り場としてしか、機能してないんだって」
「そうなんだ……」

光太君の説明に、私もしょんぼりと肩を落とします。
真子ちゃんの作っている魔法武器は、この国の騎士団の人たちのためのものです。
それがうまくいかないと、魔王軍との戦いを有利に進められないかもしれないんです。
真子ちゃん……大丈夫かな……。
真子ちゃんのことを心配する私に追い打ちをかけるように、光太君はもっと衝撃的なことを口にしました。

「それだけじゃなくて、真子ちゃん、その鉱山で四天王のラミレスさんとも戦ったみたいで」
「ええっ！？」

ラミレスさんとも！？　四天王だよ！？
しかも光太君の口ぶりから察するに、一人でだよね！？
思わず私は光太君に詰め寄ります。

「だ、大丈夫だったの！？」
「そ、それが……手に穴が開くほどの大怪我を……」
「ええっ！？」

困ったように仰け反った光太君の口から、止めの一言が。
手に穴が開くなんて……真子ちゃん、本当に大丈夫なの！？

「ま、真子ちゃん！」
「ま、待った、礼美ちゃん！」

慌てて真子ちゃんのところに行こうとすると、光太君が私の手をギュッと掴みます。

「は、離して、光太君！　真子ちゃんのところにいかないと！」
「お、落ち着いてってば！？」

光太君の手を振りほどこうと暴れると、光太君は私の手を引いて、さらに身体を抱きしめました。
もう！　なんで邪魔するの！？
光太君の身体を振りほどこうと、さらに暴れます。

「離してってば！」
「だから落ち着いて！　真子ちゃんの手はもう治ってるから！」
「……え？」

暴れる私を抑えつけようとする光太君の言葉に、私は一瞬落ち着きを取り戻します。
手が治ってるって……穴が開くような大怪我したのに？
そんな私を見てほっと一息ついた光太君は、私を安心させるように微笑んで一つ頷きました。

「どうも、ラミレスさんが治療してくれたみたいで、僕たちのところに来た時にはもうほとんどふさがってたんだ」
「そ、そうなの？」
「うん。アルルさんが見た時には、もうふさがってたみたい」
「そうなんだ……」

ラミレスさんが治療してくれたと聞いて安心した私を見て、光太君は私の身体を離してくれました。
よかった……。真子ちゃん、女の子だもんね。傷跡が残るようになっちゃったら、大変だよ……。
ほっと一安心した私は、ちょっと気になって光太君に聞いてみま

す。

「それにしても、ラミレスさんが治療してくれたの？」
「うん。よくわからないけど、責任を感じて治してくれたみたい」
「そっか……。やっぱり、魔族の人は悪い人じゃないのかな？」

私は何となく安心して、笑顔になります。
もし本当に、魔族の人たちが悪い人なら、責任を感じて真子ちゃんを治療したりはしてくれませんよね。
でも、光太君の顔は少し曇ります。

「？　光太君、どうかしたの？」
「……えっ？　な、何が？」

私が聞くと、光太君は少し戸惑った様子になりました。

「だって、なんだか暗い顔になってたから……」
「あ」

顔のことを指摘すると、光太君はしまったという風に顔に手を当てました。
でも、すぐに観念したようにため息をついて、私に話してくれました。

「実は……向こうでガルガンドにあったんだけれど、そのガルガンドが魔王軍の人を巻き込んでナージャさんを攻撃しようとして……」
「え……ええっ！？」

ナージャさんを……攻撃！？
しかも魔王軍の人を巻き込んでって……！

「大丈夫だったの!?　えっと、その！」
「大丈夫。ナージャさんも、巻き込まれかけた魔王軍の人たちも無事だよ」
一応敵ということになっている魔王軍の人たちを露骨に心配するのもどうかと思って、言葉に迷う私を安心させるように、光太君は力強く頷いてくれます。
はぅぅ……。光太君の察しがよくてよかった……。
……でも。
「……でも、ガルガンドさんは、味方を巻き込んで攻撃しようとしたんだよね？」
「うん……」
私の言葉に、光太君は表情を暗くして頷きました。
光太君の暗い表情の意味が、私にもわかりました。
ガルガンドさんの行動が、非人道的な行いだからです。
味方を犠牲にしても、敵を滅ぼそうとする……。
それは、どんな戦争においても、悲しい手段でしかないです……。
どうして、ガルガンドさんはそんなことを行ったのでしょうか？
「その時は、魔王軍の人たちが不利だったの？」
「ううん。そもそも、戦いらしい戦いも始まってなかったんだ」
「そんな……！」
光太君の言葉に、私は絶句します。
戦ってすらいなかったのに、味方ごと攻撃しようとしていたなんて……！

「まあ、その時の僕たちは、魔王軍の拠点にいたわけなんだけど……」
「それでもひどいよ！　戦いが始まる前に、味方ごとだなんて……！」
信じられません！　そんなひどいことができるなんて……！
憤慨する私に同意するように、光太君が頷きます。
「僕もどうしても許せなくて……。そのあとガルガンドに挑んだんだけどね……」
「そうなの？」
「うん。結果的にガルガンドが負けを認めたんだけど……勝てた気はしなかったよ」
光太君は悔しそうに歯を食いしばります。
「ほとんどガルガンドが攻め通しでさ……。最後に大技をぶつけたんだけど、ほとんど大きなダメージを与えられなくて……」
「光太君……」
私は悔しそうな光太君の手を、そっと握ります。
なんて声をかけたらいいかわかりません……。
少しだけ迷って、私は笑顔になって光太君を励まします。
「でも……ガルガンドさんは負けを認めたんだよね？　なら、光太君の力に恐れをなしたんだよ！」
「礼美ちゃん……」
私は光太君の両手を持って、光太君の顔をじっと見つめます。

「大丈夫！　光太君は、ちゃんと勝ったんだから！　ね？」
「……うん、ありがとう」

私の励ましがちゃんと届いてくれたのか、光太君が暗さの抜けた笑顔を見せてくれました。
よかった……。
とりあえず、このお話はこれでおしまい！　私は改めて、今回何があったのか聞きます。

「それで、オリクトはちゃんと奪還できたんだよね？」
「うん、それは大丈夫。ただ……」
「ただ？」
「その時の魔王軍のやり取りで何か引っかかるものがあったのか……。真子ちゃん、奪還してからこっちずっと考え込んでるんだ」
「そうなんだ……」

光太君の言葉に、私はようやく真子ちゃんの様子の理由を悟ります。
真子ちゃん、昔から何か気になることがあると、自分の中に入っちゃうのか、声をかけてもほとんど反応しなくなるくらいに集中しちゃうんだよね。
でも、いったい何が気になってるんだろう？

「光太君。真子ちゃんが、何考えてるのかわかる？」
「うーん……。僕の気になって聞いてみたけど、ほとんど返事が返ってこなくてさ。隆司にも聞いてみたけど、隆司にもよくわからないみたいでさ……」
「うーん、そうなんだ……」

困った様子の光太君に、私も困ったように唸ります。

困ったなぁ。あの状態の真子ちゃん、気になることが解決しないと、こっちのいうこと聞いてくれなくなるからなぁ……。

手伝おうにも、ほとんどお返事がないせいで、何を考えてるのかも答えてくれないから……。

……しょうがない。ちゃんと話してくれるまで、待つしかないよね……。

私がため息を吐くと、光太君が申し訳なさそうな声を出しました。

「ごめんね、礼美ちゃん。僕が真子ちゃんの力になれなかったせいで、怪我までさせちゃったし……」

「あ、ううん！　そんなことないよ！」

慌てて私は光太君に手を振ります。

「光太君たちが、真子ちゃんと一緒に行ってくれたから、私は安心して待っていられたんだから！」

「でも……結局真子ちゃんがあんな風になっちゃったし……」

「……んもー、気にしないの！」

「わぷ」

私は、光太君の両頬を押さえつけます。

アハハ、変な顔。

これは、私が悩んでる時に真子ちゃんがよくやってくれることなんです。これをやられちゃうと、なんとなく悩んでいるのが馬鹿馬鹿しくなっちゃうんですよね。

それはともかく、私は怒ったような顔つきで光太君の変な顔を見つめます。

「真子ちゃんには真子ちゃんの考えがあるんだよ。だから、私たちはそれを信じて待っていてあげればいいの！　わかった？」

「う、うん」
「よろしい！」

光太君は変な表情のまま、コクコクと頷きました。
私は光太君の様子に満足すると、一つ頷いて手を離しました。
光太君は私に抑えられた両頬を自分の手で押さえます。

「うう、礼美ちゃん、ひどいよ……」

なんだか恨めしそうな表情で私の方を見ます。ちょっと涙目になっているような感じも……。
あ、あわわ、ひょっとしてやりすぎちゃった!?
え、ええっと、こういう時、真子ちゃんは私になんて言ってたっけ。
私は慌てて記憶を探り、真子ちゃんが私に言っていた言葉を思い出します。
少しだけ迷ってから、私は光太君にビシッと指を突きつけて――。

「……な、悩んでる、光太君が、その、悪いんだよ……？」

なんとか、セリフを、絞り出しました……。
……光太君、黙ってポカンとした表情でこっち見ないで……。

「「……」」

しばらく、痛い位の沈黙がその場を支配して……。

「「……プッ」」

私たちは、一緒に吹き出しました。

なんだか、お互いの姿が、とても滑稽です。
そのまま、しばらく二人で笑い合っていました。
そして私は、どんなにつらいことがあっても、最後にはこうして笑い合っていられるといいなって、その時心の底から思ったのでした――。

「……ところで、自分たちはいつまでこうして馬車の陰に隠れていればいいのでありますか？」
「雰囲気的にスゲー出づらくなっちまったしなー……」
「隊長的にはグッドな展開というやつでしょうか……」
「……やはり、コウタ様には、レミ様の方が……」
「む～！　む～！！」
「今回くらいは空気読め、アルル……。あの二人の邪魔はさせん……！」

No.77：side・remi「親友の悩み」（後書き）

さて、どうやら魔王軍の方はまだ動き出していないようです。さすがに予想外の動きだったのでしょうかー？

そしてたまには二人っきりで会話をさせてあげようという隆司の親心。今回の彼のセリフは、最後の一文のみとなります。

次回、魔王軍本営に視点移動！

No.78：side・Sophia「その頃の魔竜姫　Part3」

休暇ついでに鎧などの修理を依頼していたラミレスたちが、その領地を奪還されて戻ってきて一週間ほど。

そろそろ勇者たちも戻ってきているだろうと辺りをつけて、前線を押し進めるために今日も今日とて攻め込んだわけなのだが……。

「にゃ～ん……。今日もフォルカ君は情熱的だったにゃ～……♪」

「しっかりしろミミルっ！　敵に心を奪われるなぁぁぁぁぁぁ！！」

「姉さん……ごめん……。僕、もう……」

「マ、マオくぅぅぅぅぅぅぅぅうん！！？？」

「……」

本営まで戻ってきても続く惨状に、私はため息をつかざるを得ない。

何しろ今回、ケモナー小隊どもが前面に出て戦った（？）ため、一部の戦士たちは戦いを放棄してケモナー小隊の連中と話をする、他の者たちは逃げ惑うとさんざんだったのだ。

親衛隊内では、ミミルがやられているし、その身内ではマオがひどい目（？）に合わされている。まあ、マオの場合は一方的に撫でたり尻尾を触られたりといった様子だったが。

期待していたラミアの魔導師たちも……。

「私の鱗が素敵だなんて……」

「自分から巻かれたいだなんて……あんなやつ初めてだよ……」

「人間も悪くないかも……」

などと夢見る乙女の瞳でつぶやき始める始末……。

もちろん、まともな思考が残っている者たちもいるわけだが、そ

れ以上にこちら側の思考の浸食率がひどい……。
もうケモナー小隊が出てくる戦いだと、まともな戦は望めんなぁ……。

「はぁ……」
「おやおや？　ずいぶん疲れたみたいだね、姫様」
「ラミレスか……」

二度目のため息を吐くと、本営に残ってガルガンド達と連絡を取っていたラミレスがテントの中から出てきた。

「疲れるも何も散々だった……。ケモナー小隊の連中の、あのバイタリティはいったい何なのだ……」
「さあねぇ」

私の疑問に肩を竦めるラミレス。
確か我々の中では彼女が一番初めにケモナー小隊に遭遇したんだったか。
まあ、その時はあの男がマナのガオウに対する思いを利用して撤退まで追い込まれたわけなのだが……。

「何とかして、ケモナー小隊を抑える方便はないか？　ラミレス」
「難しいんじゃないかい？　一対一の決闘ならともかく、集団戦ともなるとねぇ」

魔王軍一の知将でもあるラミレスに意見を仰いでみるが、難しい顔をして首を横に振られてしまった。
うぅむ……。確かに彼女のいうとおりだ……。
まだ、決闘であれば、お互いの代表者が戦うのみだ。こちらは私や私の親衛隊の誰かを。そして向こう側からは勇者を代表に選ばせ

れば、少なくとも今日のような結果に終わることはあるま……いや、あの男の場合それもままならん可能性が無きにしも非ずなんだが……。

だが、団体戦の場合はダメだ。今日のようにケモナー小隊が大勢でてくると、もうこちらの陣形やら対策やら無視して、戦場をかき乱してくれる。

戦地のかく乱、という意味合いではこの上なく優秀な手合いだ。しかもこちらに害をなすのではなく、ただ単に愛をささやきに来るものだから始末が悪い。無手のものがほとんどなため、こちらから攻撃することが難しい……。

我々は牙をもち襲い掛かってくる者には容赦せんが、牙なくただそこにあるだけの者に敵意はむけられんのだ……。

「まあ連中、ただそこにあるんじゃなくて積極的にこっちに近づいてくるんだが……」

「なんにせよ、敵意じゃなくて好意を向けてくる連中に剣を叩きつけられる奴は、この軍にはいないさね」

「うむ……」

愚痴った言葉に返ってきた返事を聞いて、あきらめるように項垂れる私。

今後は、基本的に決闘の方向性で行こうかなぁ……。

「はぁ……。とりあえず、ラミレス。ガルガンド達との連絡は取れたのか？」

今後の方向性をとりあえず定めた私は、改めてラミレスと向き直る。

「ああ、その事なんだけどねぇ」

私の言葉にラミレスは、顔をしかめた。
……以前から、ガルガンド達から定期連絡が来ないということはあったが、まさか……。
「……まさか、繋がらんのか？」
「そのまさかさ。ガルガンドの奴、うんともすんともいいやしない」
憤慨するラミレスの顔を見て、私も顔をしかめた。
まさか本当につながらないとは……。
「リアラやクロエの方はどうなのだ？」
今はガルガンドと同じ死霊団に属している、四天王のリアラや、本来は王城の直衛の騎士であるクロエの名を出してみる。
ガルガンドは信用ならんが、あるいは彼女たちなら……。
と思ったのだが、ラミレスは首を横に振る。ダメなのか……？
「クロエの方は、そもそも長距離通信ができるほど魔導に精通してないんだよ」
「ではリアラの方は？」
「一応、長距離用の通信できる道具だって、こんなの預かってるんだけどさ……」
そういうとラミレスはどこからともかく一つの箱のようなものを取り出した。
手渡されたそれは、最大辺が十五センルほど。幅は五センルといったところか……？　箱とは言ったが若干薄い。厚さは、二、三センルか。
何やら画面のようなものと、スイッチに似た小さなものが合計で

十五、六個ついており、それらすべてに文字が刻まれている。
試しにスイッチの一つを押してみるが、特別反応らしいものは得られない。

「……これは？」
「さあ？　渡されたときの説明が長すぎて、肝心な部分の説明と名前は忘れちまってねぇ」

だから使い方もわからないんだよ、と悪びれる様子もなくいうラミレス。
まあ、リアラの生み出す技術は素晴らしいのだが、そのすべてを一度に説明しようとするせいで、ほとんど訳が分からない説明になってしまうのだよなぁ。
実際、この本営にもリアラが作った技術のたまものがかなりの数、寄贈されていたりするのだが、まともに使用されているのは大型の湯沸かし器くらいだ。
元々リアラは手先が器用だが、あまり魔法が得意な方ではないため、こういった機械分野を駆使することで、ほかの四天王たちとの差異を埋めようと努力しているのである。だが、あの長すぎる説明はどうにかならんのかな……。

「……ともあれ、使えぬのであれば仕方あるまい……。これは返すぞ」
「持っててくれても別にいいんだけどねぇ」

ラミレスに謎の機械を返すと、やっぱりどこへともなく仕舞い込んだ。
だがあいにく、使えぬ機械を持ち歩くほど偏狭ではないのでな……。

「他の方法で、ガルガンドらに連絡は取れぬのか？」
「当のガルガンドが連絡係だったからね……。こればかりは向こうからの連絡待ちさね」
「ぬう……」

弱ったな。ガルガンドからの定期連絡は、我々の侵攻の要の一つ。最後の連絡が、ラミレスが休暇を取った時のものだったからまだ問題はないが、この状態がこのまま続くと……。

と思い悩む私は一人の男の名を思い出した。

四天王の将にして、魔王国宰相。今は、王都で残り、民たちとともに我らの帰還を待つ、マルコの名前を。

「そうだラミレス。マルコへの連絡は取れぬのか？」
「マルコとのかい？」
「うむ。もし取れるのであれば、マルコを通じて、ガルガンドに定期連絡を入れてもらうように言って欲しいのだが……」

元々ガルガンド達死霊団は、マルコの私兵組織。王国が擁する騎士団以外の、手足となる人員を欲したマルコが、自ら生み出したのがきっかけだと聞いている。

ならば生みの親であるマルコの言葉なら、ガルガンドも聞かざるを得まい、と思ってのことだ。

だが、ラミレスは私の提案に難しい顔となった。

「……ダメか？」
「うーん、ダメじゃないけど、難しいんじゃないかねぇ？　そもそもこっから王都との距離が離れすぎてるから……。連絡を取るにしても完全に一方通行。いつ返事が返ってくるかもわからないし……マルコ側からガルガンド達の位置がわかるのかねぇ……」
「ああ、そうか……」

地理的な問題もあるのをすっかり忘れていた……。
いわゆる通信系の術式は、距離に比例してその難易度が上がるといわれている。
魔王国やアメリア王国内領土程度の距離であれば、専用の長距離術式を用いれば問題なく通信ができる。
だが、さすがにアメリア王国王都付近のこの本営と、魔王国王都に住むマルコとの距離は筆舌に尽くしがたい距離だ……。まともに通信できるかどうかも怪しいな。

「ぬぬぬ……」
「一応、ガルガンド達の身柄を探すよう、ハーピー達に命令はしているよ。今はそいつらの連絡待ちさね」
「そうか……」

ラミレスの言葉に、私は一応の安堵の息をつく。
何の手を打たぬよりはましだろう。問題は、ガルガンド達の現在位置もつかめぬ以上、ハーピー達の捜索時間によっては彼らとの連携をあきらめざるを得んということだが……。

「まあ、リアラの奴は目立つからな。そのうち見つかるだろう」
「そうだねぇ」

私の言い草に、ラミレスがプッと噴出した。
四天王リアラ。彼女の情熱は、常に巨大な機械を建造することにのみ向けられているといっても過言ではない。
こちらへと渡り来る際に持ち出したギャオンちゃんやキッコウちゃんなどがいい例だ。移動用の拠点だというのだが、何ぼ何でもデカすぎるだろう……。
実際、あれらも結構アッサリ発見されてしまい、勇者たちによっ

て撃破されてしまっている。どちらも戦闘力はあまりなかったようだ。
魔王国を取り巻く環境に置いては、絶大な威力を発揮するのだがなぁ。

「……そういえば、リアラがこちらに持ち込んだ機械が破壊され始めてからか。ガルガンドとの連絡が取り辛くなったのは」
「うん？　ああ、言われてみれば、そうだねぇ」

私の言葉に同意するように、ラミレスが数回頷いた。
一番初めに連絡が滞ったのが、王都付近の森の中に潜伏していたキッコウちゃんが撃破された時だ。
その時は、一応の拠点が破壊されてしまったせいで、続く場所を探すのに手間取っているのだろうと考えていたのだが、自身も一流の魔導師であるガルガンドであれば、場所を問わずに連絡を入れることもできるはずだ。
ならば、その後連絡が滞ったのは何故だ？
何か、我々との連絡以上にやるべきことがあるのか？
ならば、それはいったい……？
思い悩み私の肩を、ラミレスの掌が叩いた。
顔を上げると、やさしげな眼差しをしたラミレスが、私の顔を覗き込んでいた。

「ガルガンド関係は、あたしが何とかしとくさね。姫様は、アメリア王国との戦争に集中しておくれ」
「ラミレス……」
「そんな顔をしでないよ。姫様は、この軍団の指揮官なんだよ？シャンとしなきゃ、他の連中が不安になるじゃないか」
「ああ、そうだな……」

ラミレスの言葉に私は頷いて、頬を叩いて気合を入れ直した。
確かにラミレスのいうとおりだ。今は、アメリア王国との戦争中なのだ。
ただでさえ、ケモナー小隊どもとの戦闘に頭を悩ませているというのに、この上ガルガンドのことまで悩み始めては、敵につけ入るすきを与えるばかりだな……。

「……すまぬな、ラミレス。引き続き、ガルガンド達の捜索を頼む」
「はいよ。まかせておきな。地の果てにいても、引きずり出してやるよ」

笑ってラミレスは再びテントの中へと舞い戻る。
うむ。魔王軍……いや、王国すべてをひっくるめて、最も魔導に精通したラミレスが言うのだ。ガルガンドの行方は必ず見つかるに違いない。
私はラミレスを信じ、本営の中を見渡した。
本日の戦闘結果からいまいち抜け出せず、疲弊しきっている者や、あるいは睦言の余韻から抜け出せぬ者、多々存在する。
今はまず、こいつらの気合を入れ直す方が先決だな……。
私はそう考え、一息吸い込む。
私の怒鳴り声に驚き、跳ねあがる軍団の者たちの姿を見て、私は不覚にも愉快な気分に陥ってしまうのであった。

No.78：side・Sophia「その頃の魔竜姫　Part3」（後書き）

悩める姫様の悩みの種はいずこにー？　というわけで、露骨な暗躍フラグを立てるガルガンド。奴め一体どこに……？

その一方で、着実にケモナー小隊の連中に毒される魔王軍。このままでは軍団の危機が……？

さて次は……久しぶりにハンターとして仕事するみたいですよ？

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ：キャラクターファイルその三（前書き）

もうなんか章と章の間の緩和的な感じに使われている魔竜姫様のターン。

今回は、フラグ立てられた人たちの簡単な解説から。

相変わらずのネタバレ注意ですー。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ：キャラクターファイルその三

Ｎａｍｅ：アスカ
Ａｇｅ：２３
Ｐｏｓｔ：アメリア王国騎士団、第一部隊隊長
Ｅｑｕｉｐ：長剣（ロングソード）
Ｓｋｉｌｌ：一族に代々伝わる剣技
Ｏｔｈｅｒｓ：光太に惚れている。アルルとは幼馴染
作者一言メモ：光太のフラグ担当その一。真面目な女剣士兼光太の師匠担当。異世界ものとしてはお約束でしょうか。
騎士団内に置いては、数少ない魔王軍と対等に戦える戦力です。彼女以外だと副団長や団長とか、前線に出たらちょっとまずい立場の人ばかり。
そして騎士団内に置いては唯一の剣を使う騎士さん。元々鉄の産出量の関係で、剣自体が少な目なんですけどね。その腕前は達人に近い領域とか。
スレンダーな美人さんなイメージですね。身長も多分光太より高い。その分、胸とか御尻に肉は少なそうですが、本人は便利だと思って割り切ってそう。

Ｎａｍｅ：アルル
Ａｇｅ：２１
Ｐｏｓｔ：魔導師団所属、属性術師（エレメンツ）
Ｅｑｕｉｐ：特になし
Ｓｋｉｌｌ：多属性行使
Ｏｔｈｅｒｓ：光太に惚れている。アスカとは幼馴染
作者一言メモ：光太フラグ担当その二。天然入った小悪魔的な女の

子担当。ただし口調の関係で、非常にめんどくさいです。
魔導師団においては、属性魔法を中心に研究。多様な属性を操れる関係で、属性術師（エレメンツ）なんて特別な称号もいただいています。この辺、得意な術式関係から命名されます。
その一方で、魔王軍侵略地奪還とかに出しても問題なく機能する程度には腕が立つ魔導師です。体力的にも、問題なし。ほとんどの魔導師が戦闘に使えないことを考えると、初期からハイスペックですな。
いつもニコニコ笑ってますね。糸目系かなぁ。体格は出るとこは出てて引っ込むところは引っ込んでそうです。そんなのに抱き付かれても無反応な光太って一体……。

Ｎａｍｅ：ジョージ
Ａｇｅ：１０
Ｐｏｓｔ：魔導師団所属、速術師（スピードスペル）
Ｅｑｕｉｐ：特になし
Ｓｋｉｌｌ：呪文詠唱破棄、詠唱短縮
Ｏｔｈｅｒｓ：礼美に惚れている。魔導師団宮廷魔導師フィーネの幼馴染。

作者一言メモ：礼美のフラグ担当その一。出た順序としてはその二ですが。ショタ担当。
魔導師団において、詠唱短縮や詠唱破棄などの、術式発動の際の効率の最適化の関係を研究しており、彼の特筆技能としては真子以外で転移術式（テレポート）の詠唱破棄が可能という点でしょうか。
十歳という年齢相応の行動や言動が目立ち、戦地においても敵の奇襲に狼狽したり、大量の敵に対処しきれないと未熟な面が目立つ気がしますが、まあ仕方なし。十歳で世界滅ぼすようなラスボスを消し飛ばす方がどうかしているのであって（ｒｙ

いわゆるガキ大将とか悪がきのテンプレート的な容姿に魔導師の服を着ている感じですかね。激しく似合わねぇ。身長もきっと低め。フィーネと同じくらいだったりして。

Ｎａｍｅ：：ヨハン
Ａｇｅ：：２６
Ｐｏｓｔ：：女神教団所属、司祭
Ｅｑｕｉｐ：：特になし
Ｓｋｉｌｌ：：近接格闘技術
Ｏｔｈｅｒｓ：：礼美を崇拝している。女神教団においては、オーゼに次ぐ立場である。

作者一言メモ：：礼美のフラグ？担当その二。登場は一番手でありますが。いわゆる大人枠。

女神教団一の信仰心の持ち主で、二十六歳という若さで教団のナンバーツーの立場だったりする、地味にすごい人です。教団の描写がないせいで、ほとんどわかりませんが。

それ以外に、近接格闘技術に長けていたりしますが、女神様の加護が身体強化に特化しているため、それを十全に操るためだったり。まあ、ほとんどの教団員は祈るばかりなんですけどね。

長身の美形。切れ長の目で流し目とかしようもんなら、初心な少女を一撃で恋に落とす威力があるとかないとか。おそらく発揮されるときはないと思われますが。

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎ：キャラクターファイルその三（後書き）

とりあえずいつものようにまとめてみましたー。語ってない部分まで語ってるけど……。

こういう設定を語る場面じゃなくて、文章中ですべての設定を説明できるくらいには、精進したいものです……。

No.79：side・ryuzi「新しい依頼」

楽しい楽しい……というと不謹慎か？　まあ、ともあれ、いつもの魔王軍との戦いが終わってしばらく。

四つの領地を無事に奪還し終えたアメリア王国だけど、しばらくは領地の奪還を停止するらしい。

なんでだ？と聞いたところ、今まで侵略されていた領地の整備を行うためらしい。

まあ、位置的にはそんなに長い間奪われていたわけじゃないとはいえ、敵に居座られていた領地だ。今まで通り稼働するまではいささか時間がかかるだろう。

とはいえ、レストはもうほとんど整備が終わっているし、そもそもオリクトなんかは侵略されていたにもかかわらず普通に稼働していた。そう長いこと時間はかからないだろうという話だった。

さて、そうなるとしばらく勇者稼業は休業ということになる。もちろん、魔王軍が攻めてくれば迎えに行……もとい迎え撃つわけだが、ほぼ定期的にやってきている以上、攻めてこない間はどうしたって暇だ。

普段の日課にしている鍛錬を終えた後、俺は久しぶりにハンターズギルドへと足を運ぶことにしていた。

ここ最近は、馬車を借りに行くばっかりで、ほとんど仕事してなかったからなぁ。

いつもの通りハンターズギルドの扉を開くと、そこそこの賑わいが俺の身体を包み込む。

初めてここに来た時に比べれば、雲泥の差だぜ。聞けば、アイティスを単独で撃破できるようなハンターはほとんどいないとか。まあ、舌で人間の首の骨を一撃でへし折るような肉食カメレオンなんか、そうそう相手にできねぇよな……。

めぼしい仕事はないかと欲しい素材や討伐してもらいたい対象が

張り付けてあるコルクボードに近づいていくと、横合いから聞き覚えのある声がかけられた。

「お！　リュウじゃないか！　久しぶり！」

「お、カレンか。久しぶりだな」

そちらの方を振り向くと、アメリアの泉の看板娘兼ハンターのカレンが立っていた。

ここ最近は領地奪還に集中していたせいで顔を合わせる機会もなかったけど、元気そうで何よりだ。

カレンは俺の姿を認めると、ズイズイ近づいてきてバシバシと俺の肩を強めに叩いた。

「最近付き合い悪いんじゃないかい？　ほとんど顔を見ないじゃないかい！」

「ここんとこ、ずっと表の仕事の方が忙しかったからなぁ……」

力強く叩かれながら、俺は遠い目で王城の方を見つめる。

一応、カレンには俺が王城で働いていることまでは話した。

ただ、異世界から召喚された勇者であるということは話していない。

話したところでキ〇ガイ扱いされるのがオチだろうし。

カレンはなれなれしく俺と肩を組みながら、周囲に聞こえないように声を落とした。

「表っていうと、魔王軍関係かい？」

「ああ」

俺もそれに合わせて声を落とす。

カレンの中での俺は、サンシターや光太のコネで魔王軍との戦闘

に駆り出されている戦士ということで落ち着いた。
王城に出入りしていてもある程度怪しくなく、最初の自己紹介からもそんなに違和感のないポジションである。嘘を吐くコツは、ほんの少し真実を混ぜることなのだ。
俺の返事を聞いたカレンは、嬉しそうに顔を綻ばせた。

「結構領地も奪還できてるみたいだし、この調子で、魔王軍を追い返しておくれよ？」
「可能な限り努力はしとく」

カレンの期待の眼差しに苦笑しつつ、俺は肩をすくめた。
家が喫茶店なためか、結構王都の外からの物品の流出入に敏感なのだ、この娘。
初めて会ったときは、根っからのハンターだと思ってたんだけどなぁ。

「で、今日は休暇かい？」
「そんなところだ。なんか手頃な依頼（話）はないか？」
「そうだねぇ……」

俺の言葉に、カレンはコルクボードを睨みつける。
張り付けてある依頼は、薬草の採取やウッピーの狩猟なんかが主だ。まだ王都と領地間の交易が完全に機能していないせいか、一般家庭から出された依頼がほとんどだ。
この手の依頼は簡単なのはいいのだが、依頼料が雀の涙なのである。お小遣い稼ぎにはちょうどいいんだろうけれど、一日駆けずり回って服の一着も買えないとなると、さすがに考えざるを得ない。
カレンと肩を付き合わせて、俺もコルクボードを睨みつける。ここ最近、ようやくこの世界の公用語を読めるようになってきたからな……。

「なんかしょっぺぇ依頼ばっかだな……」
「ここ最近やっとこ物資が入ってくるようになったって言っても、まだまだ足りないからねぇ……。あ、ウッピー二十頭狩猟だって！　これにしない？」
「お前は良いだろうけど、俺のエモノ（石剣）じゃ、ウッピー残んねぇじゃねぇか？　こっちはどうよ。グリーンディア狩猟」
「グリーンディアかぁ……。体でかい割に、動きが早くて狙いづらいんだよなぁ……」

カレンと二人であーでもないこーでもないと唸り声を上げていると、今度は背後から声をかけられた。

「ああ、リュウさん。来てくださっていたんですね」
「うん？」

振り返ると、そこに立っていたのはハンターズギルドのギルド長さんだった。
相変わらずひょろっとしていて、叩いたら折れそうな風貌である。ちゃんと飯食ってんのかなぁ。
そんな感想を喉の奥にしまい込み、俺はギルド長さんに深々と頭を下げた。

「ギルド長さん。ギルドの馬車を貸してくれて、本当に感謝してます」
「気にしないでください。普段、王国へ依頼するのはこちら側なのです。あの程度であれば、喜んで協力させていただきますよ」

ギルド長さんは小さく微笑んでくれる。
ふむ。この様子なら、引き続き協力してもらえそうだな。

と思ったのもつかの間、ギルド長さんはすぐに顔を引き締めた。
おっと、この雰囲気は……。

「しかし、今日来ていただけて幸いでした。もしいらっしゃらなければ、こちらからお手紙を差し上げようかと思っていたところです」
「と、いうと？」
「実は、リュウさんの実力を見込んで依頼したいことがございまして……」

やっぱり依頼か。
俺の隣にいたカレンが、俺の方を実に羨ましそうな顔で見つめてきた。
どうやら、ギルド長さんから直々に依頼されるというのは、ハンターズギルド所属のハンターにとって、一種のステイタスらしい。

「リュウ、良いなー……」
「フフン、うらやましかろう。で、依頼って？」

俺が問いかけると、ギルド長さんは神妙な顔をして口を開いた。

「はい、実は森に馬が出まして……」
「……馬？」
「はい、馬です」

その言葉に、俺は思わず変な顔になった。
何しろ馬である。馬車があるように、この世界では割と一般的な生き物である。
中には遅馬（スロウホース）なんて珍種もいるが、おおむね俺たちの世界にいる馬とほぼ同様の生き物だ。
当然、森にだって馬の一頭くらいいるわけで……。

その程度でわざわざギルド長さんが？
俺の不審な表情から何を読み取ったのか、ギルド長さんも信じられないというような顔つきになって首を横に振った。

「いえ、私も報告を聞いたときはまさかと思ったんですけれど……。森の奥地の方に現れた馬に、ハンターが襲われたという話がありましてね」
「ハンターが？」
「はい」

馬がハンターを襲うって……。
思わず俺は隣に立っていたカレンの方を振り向いて確認した。

「なあ、カレン。王都の周りの馬って、草食だよな？」
「そもそも馬って肉を喰うのかい？」

カレンは俺の質問を聞いて顔をしかめる。
いやまあ確かにそうなんだけどよ……。

「その襲われたハンター、怪我をしたんですか？」
「ええ。腕の骨をポッキリ折られたとか……」
「腕の骨を？」

今度は顔をしかめる俺。
馬に轢かれて腕の骨を折る程度で済んでよかったというべきか、運が悪いというべきか……。
が、ギルド長さんは、思わぬ事実を口にした。

「しかも、踏みつけられたのではなく、噛みつかれて折れたんだとか」

「はぁっ？」

素っ頓狂な音が、俺の喉から聞こえてくる。
馬に噛みつかれて腕の骨を折るとか……どういうわけだよ？

「……それっていつの話です？」
「ここ一週間ほどでしょうか。初めに怪我をしたハンターの報告を聞いてから、何人か調査に送り込んだのですが、ほとんど怪我を負わされて帰ってきたんですよ」
「うーん……？」

ギルド長さんの話に腕を組む。
まあ、話は理解した。普通のハンターではまともに調査にならないんで、俺に出てもらいたいということだろう。
が、対象が馬であるってのがなんか引っ掛かるんだよなぁ。
ただの馬が人を襲うなんてまずないだろうし……。
あ、でも、この世界の馬にはそういう変な種類の馬がいるのかもしれねぇな。

「なあ、ギルド長さん。人を襲うような、そんな凶暴な馬なんて、この辺にいるのか？」
「この辺りどころか、アメリア王国周辺にそんな凶暴な種がいるなんて話も聞いたことがありません」
「むーん」

残念ながらいないらしい。
さらに考え込む俺に、ギルド長さんは依頼内容を話し始めた。

「今回依頼をお願いしたいのは、その馬の調査、あるいは捕縛、最悪は討伐でしょうか。可能な限り早期に解決をお願いしたいのです」

「？　なんで？」

可能な限り早くという条件に首を傾げると、ギルド長さんは周りに聞こえないように声を落とした。

「いえ、アイティスの大移動の時のように、ハンターたちが森に入りたくないと言い出す前に解決しておきたいのですよ」

「ああ……」

人を襲い、しかも骨を折るような凶暴な馬がいるなんて噂が広まったら、またハンターたちが引き籠り宣言しかねんよなぁ……。

だいたいの人間が、俺やカレンみたいに副業の金稼ぎに登録してるから、あまり危険なことに首を突っ込みたがらないのだ。

いや、一般人としては当然の思考なんだけどさ。

「今はまだ、ギルド職員のみの被害ですが、このまま時間がたてば登録ハンターにも被害が及ぶのは自明の理。どうかお願いできませんでしょうか……」

「うーん」

俺は迷う振りをして首を傾げるが、腹は決まっていた。

久しぶりに握った石剣……。使わずに帰るなんて、ありえねぇよな？

「依頼料は？」

「アイティス大移動の時と同じ、五百万アメリオン用意いたします」

「ふぅん……」

五百万か。ギルドも、それなりに重大な案件だって考えてるってことか……。

俺は少しだけもったいぶってから、首を縦に振った。

「オッケ。受けさせてもらいますよ」

「おお、ありがとうございます」

ギルド長さんは、俺の返事にホッと安心したように息を吐いた。

うーん、もったいぶったのはちょっと悪かったかね？

「では、可能であれば……」

「今すぐ行かせてもらいますよ。安心して、待っててください」

「ありがとうございます。それで場所なのですが――」

ギルド長さんが口にした場所を聞き、俺は目を丸くした。

おい、そこって……。

「それでは、よろしくお願いいたしますね」

「あ、ああ」

件の馬が出没する場所を聞いて固まる俺に何度か頷いてから、ギルド長さんはそのままギルドの奥へと引っ込んでいった。

きっと仕事があるのだろう。だが、そんなことより。

俺はカレンの方を振り返る。

横でギルド長さんの話を聞いていたカレンも、驚いたような顔になっていた。

「……なあ、リュウ」

「ああ」

「あの馬が出る場所ってさ……」

「……」

カレンにも、覚えがあったか。
なら当然、ギルド長さんも知ってるはずだ。
ギルド長さんが告げた場所。
件の馬が出没する場所は、かつて魔王軍四天王、リアラが居座った、例の広場であった。

No.79：side・ryuzi「新しい依頼」（後書き）

何やら凶暴な馬が、キッコウちゃんが自爆した場所に出たとか。
いったいその馬とは……？
次回、その正体が明らかにー。

No.80：side・ryuzi「黒曜の大馬」

俺はカレンとともに、件の馬が出るというポイントへと向かっていた。

森の中は案外複雑で、土地勘がないものが入れば間違いなく一時間とかからずに迷うだろう。っていうか実際一回迷いかけたし。前に一人で入ったら、危うく遭難するところだったし。

それ以来、必ず俺は誰かと一緒に森の中へ入ることにしている。よくここを狩場としているカレン曰く、慣れれば大したことはないとのことだが、いつ入っても慣れられる気がしねぇ……。毎日入ってねぇからか？

「にしても、どういうことだい？」

「さあなぁ」

馬が出る場所まであと少しというところで、カレンが疑問を口にした。

どういうこと、とは、以前魔王軍が出たポイントに凶暴な馬がいるという話だ。

単純につなげて考えるなら、まだ魔王軍の誰かが残っているということだろうが……。

「あそこ結構な広場だったからな。どっかの凶暴な生き物が住処にしても、特別不思議じゃねぇだろ？」

「にしても馬だよ？」

「だよなぁ……」

カレンの言葉に、俺は首を傾げる。

今回のギルドの依頼は、馬の調査である。

事前に人が派遣されている以上、馬であることに間違いはないだろう。
問題は、噛みついて人の腕の骨をへし折るほど凶暴であるという点であるわけだ。
……ふつう、馬って草食だから、野生でもそんなに凶暴じゃねぇよな？
確かにシカが人を襲ったなんて話も聞かなくもないけど、角で突くわけで……。

「ッと、そろそろだよ、リュウ」
「ん」

いつの間にか、もう広場の目前まで来ていたらしい。
カレンの合図と同時に、俺は姿勢と息をひそめる。
そのまま音を立てぬようにそっと広場の方を伺った。
依然来た時と変わらずに、広々とした草原が広がっている。
前来た時との相違点を上げるとすれば、中央を占領していたキッコウちゃんが不在であるということ。
そして、その代わりに黒い体毛を称えた巨大な馬が居座っているということだろうか。

「あれが……」
「例の凶暴な馬かい……」

俺と同じように息をひそめながら、カレンは弓に矢をつがえる。
こちらに対して背を向けているため、何をしているのかはいまいちわからない。
今は、草を食んでいるように見えるのだが、その体が巨大すぎるせいで、何を食んでいるのかはいまいち……あ、いや……。
よく見れば、馬の顔がある辺りの草は赤く染まり、その口元が動

いているあたりに何やら毛皮のようなものが見え隠れしている。
さらに、隠しようもないほどの血の匂いが、風に乗ってこちらにまで届いてきた。

「あいつ……肉を喰ってるのか……？」
「マジかよ……」

うげー、とカレンが舌を出す。ああいう、野生の動物の肉食シーンとかが苦手なんだとか。
耳を澄ませば、かすかにではあるが、ぐちゅりぐちゅりという、生々しい音までも聞こえてくる……。おそらくカレンには聞こえてねぇだろうけど。
ええっと、体高だっけ……。ともあれ、立った状態でも二メルトを超えそうな巨体だ。胴回りなんか電柱をはるかに上回るだろうし、後ろ脚の筋肉に至っちゃ、俺の胴体より太そうだ。
肉を喰うのも納得の大きさってとこだが……それにしたって馬だ。たてがみから体毛まで全部真っ黒であるが、節々の特徴は馬そのもの。そんな生き物が、でかいってだけで肉を喰うようになるのかね……？
だがまあ、そう言うのを考えるのは俺の仕事じゃねぇな。

「カレン、悪いが……」
「あいよ……」

俺の言葉に、カレンが弓につがえた矢を少しずつ引き絞っていく。
今回用意したのは、対巨獣用の麻酔薬をしこたま塗り付けた特性の矢だ。
捕縛するにしろ狩猟するにしろ、この手の道具は有効に使うべきだろう。
カレンが弓の狙いを馬に絞る。

そして徐々に徐々に弓の弦を引き絞り、矢に力をためていく。
弦が引き絞られるたび、小さく弓の死なる音が――。

――……――

瞬間、目の前の馬の耳がピクリと動く。
そしてゆっくりと、こちらの方を振り向いた。
とても草食動物とは思えない鋭い眼差しだ。

「げ、気づきやがったか？」
「マジで！？」

こちらを振り向いた馬の存在にカレンが焦るが、弓はぶれずに引き絞られていく。隠す必要がなくなったためか、絞られるスピードが上がる。
馬がゆっくりと顔を上げ、こちらに身体を向けた。
先ほどまで食事をしていた口元は、真っ赤に染まっている。間違いなく肉喰ってたなこいつ……。
馬はこちらを睨みつけると、二、三回地面をその蹄で削る。やる気満々だなオイ。
だが、馬が突撃しようとするより、カレンが弓を解き放つ方が早い。

「シッ！」

鋭い呼気とともにひときわ大きくしなった弓から、矢が解き放たれる。
風切り音とともに飛翔する矢は、その先端から麻酔薬を垂らしながらまっすぐに馬へと向かい。
草を擦るような耳障りな音ともに、馬に横に避けられてしまった。

「イイッ！？」

馬が横に向けて回避行動を取るという奇行に、カレンが思わずといった様子で目を剥いた。

そんなカレンを嘲るように、馬は天に向かって嘶きを上げた。

―ブルルァアアアアアア！！！！―

腹に響くド低音だ。とても馬の鳴き声とは思えねぇな……。

嘶きとともに振り上げていた両前脚を、そのまま勢いよく地面に向かって振り下ろす。

地面が砕ける轟音と共に、巨体が着地する振動がこちらにまで伝わってきた。

「う、うわ！？」

その馬の声にビビったのか、あるいは振動のせいか、カレンの体勢が崩れる。

同時に、馬が地面を蹴り飛ばす音が聞こえた。

その巨体に似合わぬ速度だ。カレンが体勢を直すのも、回避するのも間に合わねぇ！

「！」

俺は急いでカレンの腰を抱き寄せ、馬の背中を飛び越えるように回避する。

俺たちの下を馬が通り抜け、危なげなく着地するのと同時に、背後から木に馬が衝突する轟音が響き渡る。

振り返ると、馬自身の横幅よりも太い幹を持った巨木が芯から真

っ二つになっていた。
あれだけの木があの馬の高速頭突き喰らってあれかよ……。

「カレン、作戦変更！」
「お、おう！」

素早くカレンを放り出し、俺は左手に持っていた石剣を改めて右手に構え直す。
初撃に失敗した以上、正面からやりあうしかねぇ。とはいえ、長くやりあうつもりもない。
例の麻酔薬はまだ残ってる。うち一発でも入れば、こっちが優位になるだろう。
カレンが最良のポジションを取るまで、俺が馬の気を引く作戦だ。
カレンがそそくさと森の中へ消えるのを待っていたわけではないだろうが、馬がゆっくりとこちらを振り向いた。
正面から見ると、威圧的な見た目してんなこいつ……。なんつうか……黒〇号？
そんな世紀末覇者が跨っていそうな馬は、再び嘶くとこちらに向かって突撃してきた。
だが、先ほどよりも遅い。歯を剥いてこちらに向かってくる。
馬の首の射程に入った途端、馬が首をしならせ俺に噛みついてくる。

「ほっ！」

耳元でガチィ！と鋭い音を響かせる馬の顔面を横目で捕らえながら、俺は素早く横へと転がる。
低い体勢は若干まずいが、時間がかせげりゃいいんだ。無理にやり合うことも……。
と思った矢先。返す刀で首をしならせた馬の歯が、俺の左足を捉

えた。

「だぉあっ！？」

思ってたより動きがはえぇし！　まさか噛まれるとは思わんかった！

思わずビビって石剣を取り落す俺。だが馬は容赦なく俺の身体を振り上げる。

そしてそのまま勢いよく地面に叩きつけた！

「ぐぉ！？」

凄まじい轟音が、背中から響き渡る。

間違いなく地面の中にめり込む俺。きっしょう、背骨が折れたら治るんかね俺は！？

「だっ、くそがぁ！」

―！？―

地面にめり込んだまま、俺は残された右足で馬の側頭部に蹴りを叩きこむ。

確かな手ごたえとともに、馬が口を開き左足が解放された。

俺は急いで両肘を叩きこんで地面から体を起こし上げ、バックステップで馬と距離を取った。

そして噛まれた足を確認すると、涎と血で汚れた袴が目に入った。

「だー！　くそが！　足がヨダレでべたべたじゃねぇか……」

思わず目の前の馬をそのままに、左足を抱えるように足の裏を持った。

だが、汚れの原因は涎だけではない。馬に噛まれた場所から血が溢れている。
血自体はすぐに止まったが、汚れの大半は俺の血か……。
っていうか血が出るってどんな力だよ……。
俺はげんなりしつつ、顔を上げて馬を睨みつける。
相対した馬は、こちらの方を訝しむように見つめていた。
少しイラッとした俺は、中指をおったてながら睨み返してやる。

「なに変な生き物見る目で見てんだテメェ」
―……フン―

俺の声に反応するように、馬が鼻息を鳴らした。まるで俺のことを小馬鹿にするようなそれに、イラッとするより疑問を覚えた。

「なんだこいつ……？」

まるでこちらの言葉を理解しているかのような行動に、違和感を覚える。
馬って、そこまで利口な生き物だったか……？
だが、その疑問に対して答えを得るより早く、馬が勢いよく嘶きを上げる。

―ばるるるるぅぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！―
「っと！」

その威圧感に、思わずたたらを踏みかける。
同時に振りあげられる両前脚。それが勢いよく地面に叩きつけられた瞬間、何かを弾く音とともに、俺と馬の間に一本の矢が突き刺さった。

「なっ！？」

さほど離れていない木陰からこちらを狙っていたらしいカレンの驚愕した声が聞こえてくる。

どうやら、無事に位置取りが取れたので、隙を狙って矢を放ってくれたらしいが……。

無残に弾き返されてしまったのか？　っていうかどうやって？

いぶかしむ俺を置いたまま、馬がぐるりと視線をまわしてカレンの居場所を見つける。

俺から見て、右前の方。馬からすれば左後方。その木の上にカレンは身を縮ませるように腰かけていた。

馬とカレンの目が合う。

「ひっ……！？」

馬の威容に圧されたのか、カレンが怯えたような悲鳴を上げる。

その怯えを敏感に感じ取り、馬がカレンへと向かって一直線に駆けていった。

それを追うように、俺も駆け出す。カレンが必ず逃げ切れるとは思えねぇしな……！

「う、うわっ！？」

カレンが慌てて逃げようとするが、間に合わない！

「んなくそがぁ！」

吠えて俺は地面を砕く勢いで飛び上がる。馬が跳躍する寸前、カレンの身体を抱きしめ、その場から脱出する。

「きゃっ！？」
―ばるぁぁぁぁぁぁ！！―
カレンの小さな悲鳴と、馬の嘶きが同時に聞こえ、飛び立った木の枝が粉みじんに噛み砕かれるのが見えた。
「ヒュー、あぶねぇ」
「あ、ありがと……」
思わず額から汗を流す俺の耳に、カレンの礼が聞こえてくるが、今はそれにかまってやれるだけの余裕がない。
何しろ、馬の表情が先ほどと明らかに変わってきたからだ。
―……―
身体をぐるりとめぐらせた馬はまっすぐに俺を睨みつける。
先ほどまでの、こちらを馬鹿にする気配は消えうせ、こちらを完全に敵とみなしたらしく、圧倒的な敵意が叩きつけられる。
俺は、カレンの身体をすぐそばに木陰に下ろし、ゆっくりと広場の方へと歩いて行った。
「りゅ、リュウ！」
止めようとするカレンの手が空しく俺の袖を掴み損ねる。
俺は振り返ることはせず、ただ馬の方を睨みつけたまま広場の中央へと進む。
馬も、もうカレンのことなど眼中にないとでも言うように俺だけをまっすぐに睨みつける。
……やる気満々じゃねぇか。上等。

「――カレン！　もう手を出すなよ？　何度も助けられる気がしねぇからな！」
「え！？」

俺の言葉に、カレンがショックを受けたような声を上げる。

「ちょ、リュウ！　予定が違うじゃないか！？」
「前提が狂っちまったからな！」

馬から目を離さぬままに、俺は取り落した石剣を拾い直す。
そして肩に担ぎあげ、ニヤリと顔に笑みを作る。

「ただの馬狩りのつもりが、こんな化け物が相手だ！　予定どころの話じゃねぇさ！」
「リュウ……！」

不安そうなカレンの声が聞こえてくる。
俺は彼女の不安を吹き飛ばすように、なるたけ愉快そうな声色を上げた。

「そんな声上げんな！　ここんとこ、活きのいい獲物がいなかったんだ！　久しぶりに楽しませてもらうさ……！」
―……ヒヒッ！―

俺の言葉に呼応するように、馬も笑顔のようなものを浮かべた。
……そういや、元々笑顔ってのは攻撃的なものなんだっけか。

「こうして牙を見せ合うわけだからなぁ……！」

互いに笑顔を……牙を見せ合いながら、俺と馬が相対する。

俺のそんな姿を見て、カレンが息を呑むのが、いやに大きな音になって聞こえてきた。

No．80：side・ryuzi「黒曜の大馬」（後書き）

そんなわけで、隆司君久しぶりのマジモードです。たぶん、ヴァルト戦以来。え？　ソフィア戦？　あれもマジです。ベクトルが全く違いますが。

さてはて、肉食な馬が出てきたわけですが、こんなバカげた生き物に抗するすべが、今の隆司にはあるや否や？

次回へ続く！

No．81：side・ryuzi「私の愛馬は凶暴です」

「だらぁ！！」
―ヒヒィィィィンンン！！！―

気合の声とともに、石剣を振り上げて俺は馬へと突撃していく。
対する馬は嘶きとともに両前脚を振り上げる。
蹄というよりはもはや石斧、あるいはただの鈍器としか思えない馬の前脚が俺の頭上に迫る。

「シィァッ！」

それを迎え撃つように、俺は石剣を振るう。
金属同士を打ち付けあったような甲高い音が、広場中に響き渡った。
馬の横を素早く駆け抜ける俺。数瞬の後、俺が立っていた地面が砕け散った。
素早く振り返ると、馬も同じようにこちらへと振り向いていた。
確かな手ごたえはあったが、蹄が堅すぎるせいでその表面を削った程度のダメージしか与えられてねぇ……。
馬が削れた蹄の調子を確かめるように、地面を何度か抉った。

―……―

問題ないのか、一つ頷くと、まっすぐに俺の方を見つめる。
そしてまた何度か地面を蹴ると、勢いよく俺に向かって突進してきた。
その速度や、矢も真っ青。まさに閃光と呼ぶべき勢いだ。馬の姿が速度のせいで、縮んで見える。

「リュウ！」

そのあまりの速度に、カレンが悲鳴を上げるが、遅すぎる。

馬の体はとうの昔に俺の立っていた位置を通過しているし、俺は俺で馬の背中を高く飛び越えていた。

ムーンサルトを華麗に決めながら、俺は木がまた真っ二つになる光景を逆さまに眺めていた。

あのスピードとパワーが相手じゃ、長期戦は不利だなぁ。体力的に。

木一本では満足できないらしい馬が、勢いよく振り返って俺の着地点めがけて再び地面を蹴り飛ばす。

俺は地面にふわりと着地すると、背中に馬の迫る威圧感を受けつつ、慌てずに軸足を中心に体を回転させる。

交差は一瞬。闘牛士の舞のごとく、背中に迫った馬の頭を回避し、俺はその首に勢いよく石剣を滑り込ませた。

何度味わっても慣れることのない、血の詰まった肉と骨を斬り裂く嫌な感触が掌に伝わってくる。

〆た鶏とか裂くのは平気なんだけどなぁ……。

のん気にそんなことを思いつつ、馬が過ぎ去っていく前に石剣を振り抜いてしまう。

シャッ、と小気味いい音が聞こえ、石剣の先端からまっすぐに血の飛沫が飛んでゆく。

―……！？―

首を半ばほど切断された馬は、蛇行するように体をふらつかせた。

っていうか肉が厚すぎるぞオイ……。この石剣で半分しか斬れねぇとか……。

呆れつつ、俺は血振りするように石剣を振り、懐にいつも仕舞い

込んである血をぬぐう紙を取り出そうとして。

「リュウ！！　あぶないっ！！」

カレンの、信じられない物を見たという悲鳴を聞いた。
反射的に、地面を蹴って横滑りに飛ぶ。
今まで頭があった場所を、ガチィという甲高い音が通り過ぎた。

「んなっ！？」
―ぶるるらぁぁぁぁぁ！！―

果たして、馬は生きていた。
首を半ばから切断され、口から血泡を吹き出し、ダラダラと涎を垂らしながら。それでも生きていた。
いや……！

「さ、再生してる……！？」

カレンの言葉通り……。ジュウジュウという、何かが焦げるような、あるいは溶けるような音を立てながら、先ほど切断した馬の首が煙を上げ、再生していた……！
なろぅ、やっぱりただの馬じゃなかったなテメェ！？
そう、言葉を発するより早く、馬の蹄が俺の胸へと突き刺さる。

「ゴッ！？」

息といわず、血といわず、骨といわず、身体の外へと飛び出しそうになる。
そのまま勢いよく地面に叩きつけられ、肋骨と地面が砕け散る感触が身体じゅうに響き渡る。

「ぶ、ぐっ！？」
―るるるあぁぁぁぁぁ！！―
口から血が溢れだす。だが、馬は容赦なく、蹄を何度も俺に向かって叩き下ろす。
そのたびに、俺の体の中では骨が砕け、肉が裂け、身体が容赦なく埋まっていく。
やがて俺の身体が埋まり切り、手の先しか、地面から出ていない状態になる。
が、それでも馬は攻撃をやめない。
―ぶるひひひぃぃぃぃぃんんんん！！！―
止めとばかりに両足を振り上げ、俺の顔面に向かって振り下ろす！
「んなくぞがぁ！！」
が、さすがにそんな大ぶりの攻撃は喰らってやれねぇな！！
俺は両手を蹄に合わせるように繰り出し、馬の全体重を受け止める。
もう一段階埋まりそうになるが、それを背筋で支える。
―ぐるるる……！！―
「おおぉぉぉ……！！」
なおも俺を埋めようと力と体重を込める馬に対し、俺は全霊の力でそれを跳ね返そうとする。
ギシリと全身の骨がきしみを上げ、俺と馬の根競べに耐えられないというように、地面がまた少し砕ける。

瞬間、拮抗していた力のバランスが崩れる。
やや馬が前のめりに。そして俺の両腕が屈伸するように。
―!?―
「っだらぁ!?」
馬が体勢を崩しかけた一瞬を逃さぬように、俺は全身をバネのように弾いて馬の身体を横向きに吹き飛ばす。
そしてそのまま地面に埋まっていた自分の身体を、周りの地面を巻き込むように引っこ抜く。
背中やら脇腹に突き刺さっていた石や岩が抜け、また新たな傷が増えるが、それも即座に治ってしまう。
「っだぁ!　くそが!」
「リュ、リュウ!?　大丈夫なの!?」
「大丈夫だからそこ動くなよ、カレン!!」
もはや涙声のカレンの方を振り向かぬようにしながら、俺は馬と相対する。
正直、今の自分の異形っぷりを目の当たりにしたカレンを見るのが怖いというのもあったが、馬の方を見た俺は即座にそれを後悔する。
「な、なにそれぇ……!」
カレンの声に恐怖の色が混じり始めた。
まあ、そらビビるわな……。さっきまでただの馬だった生き物の全身から、鎧状の突起物が生えはじめれば……。
ちょうど、馬にフルプレートメイルを着せたらこんな感じになるだろうという、黒色の装甲を、いつの間にか目の前の馬?は纏って

いた。
が、通常金属なのかどうかは激しく謎だ。
まるで今しがた皮膚が変化したとでも言うように、装甲から煙が上がっているし、見た目がなんというか、昆虫の外骨格に近い気がする。
パワードスーツだな。馬用の。

「もうお前どういう生き物なんだよ、おい……」
―ぶるるぁぁぁぁぁぁ！！―

どんなツッコミを入れればいいのかわからず、途方に暮れる俺のことなど知ったことかと馬は嘶きを上げ、再び地面を蹴り飛ばす。
その速度は、さっきの数倍に比すように見える。この期に及んでパワーアップとか。
反応し損ねた俺が、勢いよく宙へと跳ね飛ばされる。

「リュウウウウウウウウ！！！？？」

絶望したようなカレンの悲鳴を聞くのと同時に、俺は地面へと叩きつけられる。
断続的に聞こえてくる木々がなぎ倒される音を聞くに、相手は木を破壊しながら、コーナリングしている模様。
……上等……。
俺はふらりと立ち上がる。さっき吹き飛ばされた分と、いましがた地面に叩きつけられた分は、もう治った。いつものことながら、反則的な身体能力だ。
と、同時に木を破壊しながらパワードスーツ馬の姿が眼前に現れる。
視界の端で、カレンが顔を覆うのが見える。さっき轢かれたんだ。また轢かれると思ったんだろう。

が、甘ぇ。

俺は馬が接触する寸前、右手でその鼻面に触れ、同時に左足を勢いよく地面に突き刺した。

馬の全力突進が掌を通じて全身に伝わってくる。それを押し止めるように、ほんのわずかに俺の身体も前へと押し出す。

ズン！という腹に響く重低音とともに、馬の突進が一瞬、完全停止する。

―！？―

止められるとは思わなかったらしい馬の困惑が、手に触れた鼻づらから伝わってくる。

が、これで終わりじゃねぇぞ？

俺は馬が停止した瞬間、身を一気に低くして馬の顔を横切り、股ぐらを抜け、まだやわらかそうな肉を露出していた腹部に、アッパーじみた拳を全力で叩きこんだ。

馬の肋骨かはたまた内臓か。確かな手ごたえとともに粉砕したそれとともに、馬の全身は軽く一メートルは上昇する。

―ぶもっ！？―

反応しきれなかった馬の悲鳴が聞こえてくる。

「おおぉぉらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

そして仕上げとばかりに、俺は天へ届けといわんばかりにまっすぐに、拳をまっすぐに馬の腹へと叩きこむ――。

同時に、俺の全身から力が立ち上る。

「――――！？」

いわく言い難い感覚。まるで、全身の熱が立ち上っていくような感じとともに、衝撃が馬の全身を吹き飛ばした。
一瞬の空白の後、馬の鎧を破壊する轟音が森中に響き渡る。

―!?!?!?―

「っく……!?」

馬はその巨体を地面に叩きつけながら、訳が分からないというようにもだえ苦しんだ。
砕けた鎧はやはり皮膚が変化したものだったのか、そこかしこに裂傷が見て取れる。それも泡のようなものが噴き出すのと同時に、治っているようだが。
馬を吹き飛ばした当の俺は、唐突に表れた感覚に翻弄され、膝をついた。
馬を吹き飛ばした衝撃が収まるとともに、全身から突然力が抜けてしまったのだ。
くそったれ、一体なんだよ……!?

「リュウッ！　リュウッ!!」

わけがわからず手をつく俺のそばに駆け寄ったカレンが、涙を流しながら抱き付いてきた。

「よかったぁ！　ホントに良かったよぉ!」
「おお、カレン……」

ワンワン泣き声を上げるカレンの思わぬ行動に驚きつつ、あやすようにその背中を叩いてやる。
意外と泣き虫だなこいつ……。

「大丈夫だったか……？」
「大丈夫に決まってるじゃないか！　あんたはどうなのさぁ！」
「俺？　俺はぁ……平気だぜ？」
「嘘つけぇ！！」

泣きながら耳元で叫ぶカレン。ああ、もう……。こういうときどうしたらいいのかわかんないの……。
などと悩んでいると、馬がゆっくりと立ち上がった。
ガサリという草がすれる音に、カレンがびくりと体を跳ねあげる。

「う、うそっ！？」
「カレン、下がってろ」

馬は弱弱しくはあったがしっかりとした足取りで地面を踏みしめ、まっすぐに俺のもとへと歩み寄ってくる。
動くはずがないと思っていた馬の動きに怯えるカレンを背中に庇い、俺も立ち上がり馬の前に立つ。
といっても、俺もフラフラだ。もう、馬を投げ飛ばす力もない。

「……」
――……――

俺と馬はしばしにらみ合う。
あたりは静寂に包まれ、一人と一頭の間に一陣の風が駆け抜けてゆく。
そして。

「ん？」
「はえ？」

俺の前で馬はひざを折り、まっすぐに頭を垂れた。
まるで、恭順を誓う騎士のように。
その瞳は、俺からの言葉を待つように閉じられている。

「……従うのか？　俺に？」

突然の行動を訝しみ、そう問いかける俺の目を、馬は瞼を開き、頭を垂れたまままっすぐに見つめた。
先ほどまであった怒りも殺意もなく、ただ静かな光がそこにはあった。
……どうも、本当に俺に従う気らしい。

「……えーっと……」
「……や、やったじゃないか、リュウ！」

突然といえば突然の展開に困惑する俺に変わって、カレンが諸手を上げて喜んだ。

「ギルドの依頼には馬の調査も含まれてたし……こいつがあんたに従うんなら、もうハンターが怪我をすることもないよ！　報酬も貰えるし、儲けもんじゃないか！」
「そりゃそうだけど……」

カレンのいうとおり、五百万もこの馬も総取りとなれば儲けもんではあるが……。
まさかこの馬、自分を倒せる強者を待ってこんな目立つ場所にいたんじゃあるまいな……？
なんて思いつつ、俺は馬の黒い毛並みを撫でる。
戦ってるときは気にしてる余裕はなかったけど、まるでシルクの

ような肌触りだ。
しかしまあ……。
「俺に従うというなら、馬と呼ぶわけにもいかねぇよな……」
「そうだね。いい名前付けてやりな」
馬の首筋を撫でてやりながら、俺はゆっくりとその名を考えてやる。
カレンの言葉通り、これからのことを考えれば長い付き合いになるだろう。なら、半端な名前はかわいそうだしな。
黒……、黒い馬かぁ……。
「……シュバルツ」
黒、という色に思い当たった言葉を口にする。
確か俺がガキの頃やっていたアニメで、一番好きだったキャラの名前が、ドイツ語で黒を意味する言葉だったんだよな。
「シュバルツ。今日から、お前はシュバルツだ」
――……――
俺がそう呼ぶと、馬……シュバルツの瞳に強い光が灯る。
自らの名を誇るように、そう呼ばれた黒曜の大馬はゆっくりとその身を立ち上げる。
その姿は、まさに威風堂々。おそらく大陸を探しても、シュバルツに肩を並べられる馬はそうはいまい。
「シュバルツか……。いい名前じゃないか」
カレンはそうつぶやいて、ゆっくりとシュバルツの毛並みを撫で

る。
そうして触れても、シュバルツは取り乱すことなくじっと立っていた。
俺はそんなシュバルツの姿に満足し、取り落していた石剣を拾い……。
ふと思いつく。
「シュバルツ、行くぞ！」
―！―
掛け声に気を入れたシュバルツの背に、俺は石剣を持ったままひらりと飛び乗った。
俺がシュバルツの背にまたがると同時に、ズシンとシュバルツの立つ地面から音がする。
だがシュバルツは背に俺など乗っていないように、決して体を崩さぬまま立っていた。
思った通りだ……。シュバルツと一緒なら、石剣を持って遠くまでいけるな！
思わぬ相棒の出現に俺は喜びつつ、シュバルツの背中をポンポンと叩いてやった。
「お前によく似合う鞍と轡を用意しねぇとな！」
―ヒヒィーン！！―
シュバルツは、俺の言葉に返事をするように空へ向かって嘶きを上げるのだった。

Ｎｏ．８１：ｓｉｄｅ・ｒｙｕｚｉ「私の愛馬は凶暴です」（後書き）

そんなわけで、おんまさんが仲間になりました！　いや、生物的に馬かどうかはかなり謎ですが。馬がベースのはずです。うん。

ようやく隆司もフル装備で遠くにお出かけできる手段ができたわけですな！　フルっつっても重すぎる石剣一本なんですけどね。

これで奪還のスピードも上がるかしら？　以下次回！

No．82：side・mako「とある領地の異変」

「……マジでどこ行ったのよあいつは……」

あたしは苛立たしげにテーブルを指で叩いた。

「ま、真子ちゃん、落ち着いてってば……」

「落ち着いてるわよ。ただ単にイライラしてるだけで」

「それは落ち着いてないよぅ……」

あたしの隣でお行儀よく座っていた礼美が、あたしをなだめるようとする。

が、そんな程度であたしのイライラは収まらない。

何しろ……。

「あのバカ一体どこまで行ったのよ？　かれこれ三日よ、三日！？」

「ホントにどこ行ったんだろうね、隆司」

あたしがバンとテーブルを叩くと、心配そうな顔で光太が天井を見上げた。

今あたしたちがいるのは、以前からたびたび利用している会議室。アルト王子に相談したいことがあると呼ばれたので、集まっているのだ。

だが、会議室の中に隆司の姿はない。

あいつ、つい最近自分の馬を手に入れたので、ちょっと遠く行ってくると騎士ＡＢＣどもに言づけて、そのまま姿をくらませたのだ。

そうしてあいつが姿を消してはや三日である。遠乗りってレベルじゃないわよ！

「そもそも、いくら馬を手に入れられたからといって、あまり時間がかかる場所におひとりで行かれてしまうのは……」
「あたしらに言われても困るわよ。あのバカに言ってちょうだい」
遠慮がちに口を開いたアルト王子の言葉を、あたしは一刀両断する。
そもそも今ここにいない奴に対する注意をあたしらにしてどうするんだっていうの。

「ま、マコ様。落ち着いてくださいまし。軍師たるマコ様がそんな調子では、軍団の士気に影響がいってしまいますわ！」
「わかってるわ……って誰が軍師よ、誰が」

アンナの言葉に思わず頷きかけるけど、そんなポジションについたつもりはないわよ？
あのバカ（隆司）はちょいちょい私をそう呼ぶけど。
そういうと、アンナは不思議そうに首を傾げた。なんでそんな顔をすんのよ。

「いえ、あの騎士ＡＢＣがマコ様のことをそうお呼びしていましたので」
「あいつら今度死ナス」
「ちょ、ダメだって真子ちゃん！」

騎士ＡＢＣの名前を心の中の復讐帳にしっかり書き留めるあたし。
あのアホども、今度会ったらこんがりローストしてくれる……。
そんな感じでしっかり週末の予定を立てたところで、あたしはため息を吐いた。

「しかし、こうして隆司の奴を待ち続けるのもバカみたいよね……。

あたしらだけでいいから、会議はじめない？」
「いえ、しかし……」
あたしの提案に口ごもるアルト王子。
らちが明かないと、話術で強引にねじ伏せようと考えたあたしを援護したのは意外なことに光太の奴だった。
「うん、仕方ないね。こうして僕らを集めたということは、何か火急の用事なのでしょう？」
「それはそうですけれども……」
「なら、せめて話だけでも聞かせてください。一刻を争うのであれば、一秒でも惜しむべきではありません」
光太はどうやら、隆司のことよりアルト王子に呼び出されたことの方が気がかりらしい。
ふーん。少し見直したわ。これが礼美だったら、いつまでもあたしが帰ってくるのを待ってるからね。少なくとも、光太は隆司がいるいないで、行動の指針を見失うことはないわけだ。
光太の真剣な眼差しを見て、アルト王子の瞳から迷いが晴れる。
どうやら話してくれる気になったみたいね。
あたしは、アルト王子の話を聞き洩らさないように、耳を澄ませた。
アルト王子が、ゆっくりと口を開いた。
「……そうですね。それでは、今回皆様をお呼びたてしたのは――」
「オーッス、アルト。なんか用があるんだって？」
瞬間、バカが大口開けてやってきた。まさしくいま話をしてくれそうになっていたアルト王子の、出鼻をくじくタイミングで。
思わずずっこける光太とアルト王子。音にびっくりして目を見開

く礼美とアンナ。
あたしは迷わず椅子を蹴っ飛ばして、隆司に向かって魔法を二、三発連打した。

「いったいどこほっつき歩いてたこのボケナスがぁァァァァァァァ！！！」
「ぬぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！？？？」

叫び声を上げながら、隆司は手に持った石剣であたしが放った魔法を蹴散らした。
ちぃ！　相変わらず無駄にスキル高い……！
アルト王子と一緒にずっこけた光太が、テーブルに手をついて何とか体を起こし上げた。王子はまだショックから抜け切ってないのか、身体を起こす気配すらないけど。

「りゅ、隆司……。ホントに今までどこ行ってたの……？」
「んー？　ちょっとお魚を食べにヨークまで。ほれ、土産のアジっぽい魚の開き。焼いて食うと絶品でよ」
「は……？」

隆司は言いながら、アジっぽい魚の開きをテーブルの上に置いた。
一応紙に包まれてはいるけれど、確かに良く干された良い開きの魚……じゃなくて。
今こいつ、なんつった？

「ちょっと、あんた……今どこまで行ったって？」
「だからヨークだよ。ヨーク」
「はぁ！？」

袖の下や懐からさらに魚介系のお土産を取り出す隆司の姿を見つ

つ、あたしは唖然となる。
　ヨークってあんた……。普通の馬車で片道四日はかかるはずでしょうが！？
　すると隆司はなんてこと無いように、言い放った。
「いやぁ。シュバルツに乗って一日でどこまでいけるか試したんだけどな？　半日以上走り通しではあったけど、ヨークまで行けてなー」
「ヨークまでいけてって……どんな速度よ！？」
「さあ？　普通の馬車の四倍は速いと思うけど」
　そりゃ速いでしょうよ！　四日のところを半日ちょっとですもんね！
「シュバルツちゃん、すごいんだねー！」
「おう、俺も驚いたわ」
　シュバルツの健脚っぷりに目を丸くする礼美。
　しかし、すごいなんてレベルじゃないわよ……。
　馬車の馬は二頭立てで、しかも限界以上の人数を乗せた馬車を引いて、ちょくちょく休んでいたとはいえ動いているとき時速三十キロは出ていたはずだ。単純に十二時間を休憩時間にあてたと考えても、１５００キロ近い道のりのはずだ。
　それを、馬車を引いていなかったとはいえ、たった半日でヨークまでの道のりを走破するシュバルツ……。やっぱりただの馬じゃないわね……。
「そのシュバルツはどうしたの？　確か、城にある馬屋には入らなかったよね？」
「とりあえず、サンシターに世話を丸投げしておいた。あいつなら

きっと何とかしてくれるって、俺は信じてる！」
「いや、できないことを人に丸投げにするのはやめようよ……」

グッと拳を握りしめる隆司だけど、あたしは知ってる。
昨日、結局使われていない馬屋を改造することになって、一人で半ば泣きながら馬屋を改造していたサンシターの存在を。
っていうか誰かに手伝ってもらやいいのに、なんで一人でやってんのよサンシターも……。
と、今まで倒れていたアルト王子がフラフラと立ち上がった。

「……リュウジさんがヨークに行っていたのは意外でしたが、三日で往復されたのはむしろ好都合かもしれません……」
「そ、そうですわね！　むしろかなりラッキーな展開かと！」

隆司の奇行にまだ慣れないらしいアンナが、少しろれつをおかしくしながらもアルト王子に同意した。
ああ、そういえば、今回この会議室に集められたのは元々アルト王子が相談に乗ってほしいって言ってきたからよね……。
アルト王子とアンナが元のように席に着くと、あたしたちもそれにならって対面に腰かける。
全員がおとなしくなったのを見計らってから、アルト王子がゆっくりと口を開いた。

「実は、とある領地との連絡が、取れなくなっているのです……」
「連絡が？」
「はい。普段は一ヶ月に一度程度の間隔で、その領地から定期報告の者がやってくるはずなのですが、その時期になってもやってこないのです」

領地を治める貴族には、その領地を引き継いだら次代に次がせる

ための努力を行わなければならない義務が、この国には存在する。
その努力の方法や方向は、領地の特色や貴族の性格なんかによってさまざまではあるけれど、だいたい一ヶ月間隔くらいで定期的に報告するのが慣例になってるらしい。
まあ、フォルクス公爵みたいなボンクラ貴族はそれすらも怠るらしいんだけれど、普通の貴族ならそれを怠ることはしないらしい。
今は魔王軍の侵攻を受けているから、竜の谷方面の領地はほとんど機能してない。
でも、今回話に上がっているのは、王都の後方に位置する領地らしい。

「その連絡が来るのって、いつもだったらどのくらいなわけ？」
「一週間ほど前でしょうか……」

アンナの言葉に、私は腕を組んだ。
一週間前ねぇ……。あたしらの世界みたく、交通手段や交信手段が潤沢にそろっているなら一大事だけど、領地間の移動の主な手段が馬車で、交信手段が早馬便の手紙って時点で、一週間程度のずれなら当然起こりうる範囲だと思うんだけどねぇ……。
でもまあ、魔王軍からの侵攻なんて受けてるわけだし、神経過敏になるのも仕方がないかしら。まだ音信不通が確定しているわけじゃないけど。

「で、今回はその領地まで行ってくればいいわけ？」
「はい、その通りなんですが……」

そこまで言ってアルト王子が少し口ごもる。
そして、少しためらってからこう口にした。

「なるべくであれば、少人数かつ、素早く確認してきていただきた

いのです」
「は？　どういうことよ？」
アルト王子の言葉に思わず眉根を寄せると、アンナがフォローするように口を開いた。
「いえ！　まだ、何かあったと確定したわけではありませんし、このことを知っている者が私とお兄様、それからトランドくらいなのです！　皆の不安を煽らぬためにも、なるべくなら内々で解決したくて……」
「いや、別に怒ってるわけじゃないんだけど……」
怯えるように説明してくれたあんなを見て、思わず申し訳なくなってしまう。
けどまあ、どうして隆司の奇行がラッキーなのかは分かったわ。
ヨークへの往復に三日……食道楽の時間に丸一日費やしてそうだから実質二日か。
それだけの速度があれば、ある程度の広範囲を短時間で見て回ることもできるわね。
隆司もそのことを理解したのか、小さく頷いてみせる。
「なるほどな。つまり俺にその領地を見てきてほしいと」
「はい……」
「本当に申し訳ないのですけれど……」
「いいっていいって。一応勇者なわけだしな、俺も」
代わる代わる頭を下げる兄妹に、隆司は鷹揚に手を振って見せる。
本人はやる気まんまんね。残る連中はどうかしら。
光太と礼美の方を振り向いてみると、二人とも納得したような顔で頷いていた。

「確かに、僕たちみんなで行っちゃうと、城内の人や城下町の人にいらない不安を与えちゃうかもしれないしね」
「それにシュバルツちゃんの足の速さなら、すぐに帰ってこれるよね」

ふむ。決まりね。
あたしも同意するように頷くと、ポンと隆司の肩を叩いてやった。

「それじゃあ、隆司。たまにはまじめに働いてらっしゃいな」
「お前、それじゃまるで俺が普段マジメじゃないみたいじゃねぇか」

隆司が半目でこっちを睨む。
が、あんたにそんな顔をする資格はねーわよ。
あたしはため息をついて、隆司の額にツッコミチョップをくれてやるのだった。

No．82：side・mako「とある領地の異変」（後書き）

そんなわけでシュバルツの基礎スペックはヨークを二日ほどで往復できるくらいとなりました。本気になれば二十四時間で往復できるかも知れません。

たぶん、作中で追いつけるのはソフィアくらいかなぁ。先回りは真子でもできるだろうけれど……。

しかしまあ、平和だった場所が音信不通って軽くフラグだよね？

以下次回ー。

No．83：side・mako「帰らないアイツ」

そうして隆司が音信不通となった領地の様子を見に行くことが決まり、早速出発してはや一週間。

今度は隆司の奴が音信不通となっていた。

「あのバカ、ホントどうしてくれようか……！」

「ま、まあまあマコ様、落ち着いてください」

雑巾を引き絞る勢いで手に持った棒をねじるあたしをなだめようとするサンシター。若干腰は引けてるけど。

「そうは言うけどね、サンシター？　予定じゃ四日位で帰ってくるはずだったのよ？」

「そうなのでありますよねー……」

あたしの言葉にサンシターが不安そうにつぶやく。

今回音信不通となった領地と王都との距離は、だいたいヨークと同じくらいらしい。

なので、隆司の奴がシュバルツに本気を出させればそれこそ三日程度で往復することが可能なはずだったのだ。

アルト王子もそう太鼓判を押していたし、途中に森はあっても迂回することができる。そもそも体当たりで木をなぎ倒せるシュバルツに森なんてあってないようなもんでしょうけど。

隆司の奴がサボって、普通の馬車と同じ程度の速度で進んでいる可能性もあるけれど、いくらあのバカだってアルト王子を長々と不安にさせるような馬鹿な真似はしないでしょう……たぶん。

……まさかとは思うけど、勝手にヨークへ向かったと気みたいに、食道楽に勤しんでるとかそういうわけじゃないわよね……？

「ちょっと聞くけどさ、サンシター。隆司が行く予定の領地って、なんか名物のうまいものがあったりするわけ？」
「名物、でありますか？」
首を傾げるサンシター。
しばらくウンウンうなっていたが、特別思い当らなかったのか所在なさげに首を横に振った。
「特別思いつかないであります。そもそも、今回リュウ様が向かいました領地は、特徴がないのが特徴とも呼ばれる場所でありますから」
「やな領地ね……」
なんでそんなとこを収めてんのかしら、そこの貴族……。
ともあれ、食道楽の可能性は潰えたわね。
となると後は……。
「向こうで、敵に遭遇したか……」
「まさか！？　魔王軍の侵略方向とは逆でありますよ？」
あたしの言葉に、サンシターは反論した。
確かに、常識で考えれば王都を迂回して周辺領地から落とそうとするなんて馬鹿げているだろう。
一々そんなことをしなくても、十分に勝ちうるだけの戦力が魔王軍にはあるからだ。
四天王の将ヴァルト。魔導師であるラミレス。そして魔竜姫ソフィアとその親衛隊たち。
正直、この戦力が本気で王都侵攻に乗り出したりしたら、現状凌ぎ切れるだけの力はこの王国にはないでしょうね……。

騎士団長さんはヴァルトと互角だけど、ソフィアとラミレスが厄介すぎる。ソフィアはまだ隆司をあてがうとして、ラミレスはあたしで相手できるかどうか……。

親衛隊の連中だって、バカにはできない。猪突猛進のガオウや呪術師（エンチャンター）のマナ、音もなく移動するミミル。この連中を自由にさせたら、一般騎士では歯が立たない。

そもそも、普通の魔王軍の兵卒でさえ、ただの騎士では満足に戦うことができないのだ。数に利があるとはいえ、それさえも頼りないんじゃね……。

でも連中はそれだけの戦力をそろえておきながら、王都への本格侵攻を開始しようとしていない。

周辺領地を奪還しても、その後領地を奪回しようという動きすら見せない。

侵略戦争を仕掛けている連中の行動として不可解すぎるのだ。そもそも、奪った領地でも特別何をするでもなかったらしいし……。

普通、侵略戦争を仕掛けるのは、物資が足りないとか領土が欲しいとか、そういう火急的な理由があるからだろう。戦争ってのは本来、勝っても負けても消耗する最低の外交手段だ。極力避けるべきだし、行うべきじゃない。

でも、魔王軍の連中は、こちらの消耗を最低限に抑えている節さえある。その気になれば、小枝を折るように、こちらを潰せるはずなのに。

いったい何の目的があって、そんなことをするのか……。

「……マコ様、どうかなさいました？」

「ん……え？」

不意に、サンシターがあたしの顔を覗き込んできた。

その眉根は心配そうに寄せられている。

「どうしたって……そっちこそ急にどうしたのよ？」
「いえ、険しい表情をしていたでありますから、何か心配なことがあるでありますか？」
「ああ……」
サンシターに指摘され、あたしは眉間のしわを伸ばすようにもみほぐした。
まさかサンシターに心配されるほどの顔をしていたとは……。これじゃ、フィーネに見られたらなんて言われるやら。
あたしは深みにはまりすぎた思考を修正し、元々考えていた事柄を思い出す。
あのバカがまだ帰ってこない理由よね……。
自問自答するように、あたしは言葉を声にする。
こうして口に出して再確認するのは重要なことだ。
しっかりと考えをまとめられるし、何より――。
「……仮に隆司の奴が魔王軍と相対したとして、それがいつまでも帰ってこない理由になるかしら？」
「……さすがのリュウ様も、たった一人で魔王軍を蹴散らすことはしないのではないでありましょうか……」
そばに誰かいれば、その人の考えを聞くことができる。
あたしはサンシターの言葉に賛同しつつ、あえて反論してみる。
「理由は？　あいつ一人でも、ソフィアと正対できる。なら、本隊とはぐれた行動を取る魔王軍を打倒することは不可能ではないと思うわ」

あたしの反論に、サンシターは少し悩むそぶりを見せた。
あたしの反論の合理性に対してではなく、自分の考えをどう口にしたものかという様子だ。
しばらくして、サンシターが口を開いた。

「……確かにリュウ様は、デタラメに強いお方であります。でもそれを過信してはいないと思うのであります」
「というと？」
「ケモナー小隊があるでありますよね？　仮にリュウ様が自分一人でなんとかできると思っているのであれば、ああいった部隊は立ち上げないと思うであります」

サンシターはそうつぶやいて、城の外の方へと視線を向ける。
あたしもそれにつられて視線を向けると、城の外の方からケモナー小隊の連中がマラソンを頑張っている掛け声が聞こえてくる。
最近は基礎体力作りに加え、それぞれにできる限りで魔族たちに近づく努力をしているらしい。新しい魔法の開発や、祈りの強化による身体強化の増強。体術訓練を熱心に行う騎士もいる。
元を正せば、隆司の変態嗜好が生みだした変態部隊だ。だが、今やその部隊は魔王軍との戦いに欠かすことができないほどの物へと成長している。
隆司も、騎士団が埋められないあたしたちの穴の補強のために立ち上げたというようなことを言っていた。なるほど、確かにサンシターのいう通りかもしれない。

「じゃあ、仮に魔王軍と行き会ったとしたら、隆司はどうするのかしら？」
「それは……」

サンシターはつぶやき、悩み、そして情けない笑みを浮かべた。

「とりあえず突っ込んでいく気がするであります……」
「さっきといってることが逆じゃないのよ……」

その言葉に、思わず脱力するあたし。
サンシターはばつが悪そうに微笑みながら、後ろ頭を掻いた。

「いやぁ……。リュウ様なら、一人で蹴散らしそうでもありますし、逆に慎重になって戻ってきそうでもありそうだったでありますから……」
「まあねぇ……」

言われてあたしも同意した。
あのバカ、変なところで慎重というか、冷静なところがあるからねぇ……。
そのくせ勢い任せなところもある。特にソフィアと相対した時なんかは完全にノリだけで動いてるし。
よくよく考えてみれば、あいつも十分変人だ。光太の友人やってるだけのことはある。
うんうんと自己完結して頷いていると、サンシターが何か物言いたげな顔になった。

「？　なによ？」
「……いえ、何でもないであります」

サンシターはそういうと、なぜか優しげな表情で微笑んだ。
なになになんなのよ一体。
あたしはなるたけ優しい表情を作りつつ、コトンと小首をかしげるような動作を行ってみた。

「サンシター？　何か言いたいことがあるならおっしゃい？　怒るかもしれないけど聞いてあげるから？」
「そう言われていう奴はいないであります！？」

瞬間顔を青ざめたサンシターがブンブカ首を横に振った。
何よ、そんなに怯えなくてもいいじゃないのよ……。

「そ、それより今はリュウ様が戻らぬ理由でありますよ！　いったいなぜお戻りになられないでありますかね……」
「まったくよねぇ……」

サンシターの無理やりな軌道修正に一応乗ってやりつつ、あたしはまたため息を吐いた。
仮にあのバカが魔王軍に相対し、その制圧を行っているために戻ってくるのが遅れていると考えたとして……。
今度は別の問題が持ち上がる。魔王軍は、どうやって王都とはさんで反対側に位置するその領地を侵略したのか？
もし、魔王軍に場所を無視して移動できる手段があるとするのであれば、かなり驚異的なことなんだけど……。

「ラミレス殿の転移（テレポート）術式で、部隊だけ飛ばしているのではないでありますか？」

サンシターの素朴な疑問に、あたしは首を横に振って答えた。

「転移（テレポート）術式も、そこまで万能じゃないしねぇ……」
「そうなのでありますか？」
「そうよー。転移できるのは自分が認識できる場所のみ……ようするに知ってる場所だけね」

それ以外の場所へと無理やり転移しようとしたとして、仮にそこに何らかの物質が存在した場合、転移した魔導師はその中へとめり込む羽目になる。

いわゆる“石の中にいる”って奴ね。そうなると、一瞬で絶息して死ぬだろうし、そうでなくても物体の隙間に無理やり入り込んだようなもの。そのまま圧死間違いなしね。

何らかの方法で転移地点を観測することもできるでしょうけど……。単体での転移ならともかく、一部隊を送るとなると、定点観測でもしない限りはかなりのハイリスクになるでしょうね。

それで落とせるのは都市一つ……。まったく嬉しくないわねぇ……。

「リターンよりもリスクが大きいでありますか……。別にそれを実行せねばならないほど、魔王軍の情勢がひっ迫しているわけではないでありますしねぇ……」

「まったくね。魔王軍も、そこまで馬鹿じゃないでしょうし」

「結局、リュウ様が食道楽に勤しんでいるというのが、一番妥当そうな理由でありますね」

そういって、サンシターが苦笑する。もっともな理由だ。向かった先が平和であれば、それを存分に謳歌するだけの余裕も金も、今の隆司にはたっぷりある。

……ただ、あたしには一つの懸念があった。

隆司が改めてこの城に招いた、あの大黒馬、シュバルツだ。

ちらりと見ただけで、よく観察したわけではない。だが、あの馬には無数の魔術言語（カオシックルーン）が埋め込まれているように見えた。

それこそ、埋め込まれていない場所がないというほどにびっしりと。

その文字が表わす効果は、主に肉体改造を現すもの。自己の急速再生や、形状変化、あるいは硬質化などを引き起こせるようになる

だろうと予想される。
元来、魔術言語（カオシックルーン）が体に埋まっているというようなことはあり得ない。何故なら、文字は発するものであって生まれるものではないからだ。もし体に魔術言語（カオシックルーン）が埋め込まれているとしたら、それは人為的な原因だ。少なくとも、動物たちは言語（ルーン）を用いない。
そしてあの馬は、ある程度人語を介しているようだとも、隆司は言っていた。実際隆司のいうことはよく聞くし、サンシターの言葉も理解している節があったらしい。
最後に、発見された場所はかつての魔王軍の駐留地。
……それらから導き出される、答えは。

「……そうね。もしそうなら、ぶっとばしてやれるんだけどね」

あたしはサンシターの言葉に笑いながら、もやもやとした懸念を奥底へと仕舞いこんだ。
どうか、この予想が外れてくれるように願いながら。

Ｎｏ．８３：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「帰らないアイツ」（後書き）

何やらシュバルツに黒い疑惑が……。全身真っ黒ですけどねあいつ！

しかし隆司はどうしたのでしょうねぇ。一週間もかかるとなると、相当遠出してることになるんですが……。

まさか……ねぇ？　以下次回ー。

No．84：side・kota「光太と隆司」

「ふぅ……」

隆司が音信不通になった領地へと向かって一週間。
予定ならもう戻っているはずなんだけど、隆司の姿はこの王城にはない。
どうしたんだろう、隆司……。

「コウタ様、こちらにおられましたか」
「あ、アスカさん、アルルさん……」

不意に声をかけられ顔を上げると、そこにいたのはアスカさんとアルルさんだった。
場所は王城の一角のテラス。いつもの訓練が終わった後、なんとなく一人になりたくてフラフラしていたら行きついた場所だ。
アルルさんが一歩前に出て、湯気が上がるコップを僕の前に差し出した。

「は～い、コウタ様～。温か～い、ホットミルクですよ～」
「ありがとう、アルルさん」

僕はお礼を言って、ホットミルクを口に含む。
口の中から入った、温かいミルクが体の中をゆっくりと温めてくれた。
アメリア王国の王都は、一年を通して温暖な気候らしいんだけど、こうして吹きさらしのテラスでじっとしていると、さすがに体が冷えてくる。
そうして少しずつホットミルクを口に含んでいると、アスカさん

が心配そうな顔をして僕に声をかけてきた。
「コウタ様……やはりリュウジ様のことが心配ですか？」
「……はい」
アスカさんの言葉に、僕は一つ頷いた。
「確かに隆司は強いし、頼りになります。でも、やっぱり一人だけじゃ、できることに限界がありますから……」
「リュウジ様なら～、お一人で～特攻とか～しちゃいそうですものね～」
「アルル」
アスカさんが、アルルさんを強い口調で窘めるけど、僕は思わず笑っちゃった。
確かに隆司なら、魔王軍の軍勢にも一人で突っ込んでいっちゃいそうだ。
「確かに、隆司ならあり得ますけど……。隆司は僕よりは慎重ですから。一人だけなら、なおのことね」
「コウタ様より……？」
「慎重～……？」
アスカさんとアルルさんが、訝しむような表情になる。
まあ、普段の隆司の行動を見てると、そうは見えないのかなぁ？
僕は苦笑して、向こうでの僕らのことを話してみることにした。
「いえ、本当ですよ？　向こうでも僕らはちょいちょい厄介ごとに巻き込まれたりしましたけど、突っ込むのは僕で、それを止めるのが隆司の仕事でしたから」

「い、意外です……。コウタ様が、厄介ごとに自ら首を突っ込むなど……」

信じられないという顔で首を振るアスカさん。

向こうでも、よく言われたなぁ。

「まあ、僕は頼りなさそうに見えるかもしれませんけど……」

「いいえ～！　コウタ様以上に～頼りになる～お方を～、私は～知りませんよ～！」

「ありがとうございます、アルルさん」

アルルさんの賞賛を受け止めつつ、僕は空の向こうにあるのかもしれない僕たちの世界を見つめる。

「……厄介ごとっていうか、主に友達の相談事だったんですけどね。どうしても許せないことがあると、頭がカッとなっちゃって……。周りが止めるのも聞かずについ突っ込んじゃうんですよ」

たとえば誰かが誰をいじめてる、なんて話を聞くと、どうしても止めたくなってその両者を引っ張ってきてコンコンと説得した、なんてこともざらだ。

男だろうと女の子だろうと、いさい構わず僕は巻き込む。

誘拐や失踪なんてあれば、それこそ町中を駆けまわってその人を一日中探し続けたことなんかもある。

この辺は、下の姉さんの影響かな、って僕は思ってるんだけど。

「で、そんな中で僕を止めに来てくれるのが隆司だったんですよ」

「そうなのですか……」

「そういえば～、コウタ様と～リュウジ様は～どのくらいの～お付き合いなのですか～？」

「僕と隆司のですか？」

アルルさんの言葉に、僕は少し考え込む。

小学校低学年くらい……って言ってもこの世界じゃ通用しないんだよね……。

「えーっと……だいたい、十年くらいの付き合いですかね？」

「十年ですか～。かなり～深いお付き合いなのですね～」

「そうですね」

アルルさんの驚きの声を肯定するように頷く。

考えてみれば十年か。隆司との付き合いも、もうそんなになるのか。

でも、そんな隆司との初めての出会いを思い出して僕は吹きだした。

「コウタ様？　どうされました？」

「あ、いえ……。そういえば、隆司との初めての出会いって、喧嘩だったなぁって思いだしまして」

「け、喧嘩！？」

「はい」

驚きの声を上げるアスカさん。

そりゃ、びっくりするよね。喧嘩した相手と、十年近く友達でいるんだから。

「な、何が原因で喧嘩されたんですか？」

「うーん……ちょっと覚えてないんですけど、すごい些細なことだった気はするんですよ。何分、子供の頃ですから」

言いながら、僕はぼんやり当時のことを思いだす。
周りに同級生たちがいる僕と、そうでない隆司。
僕はそんな隆司に声をかけたけど、隆司はすげなく首を横に振って……。
で、しばらく言い合いした後、僕から殴りかかっていった気がする。

「……たぶんなんですけど、子供の頃の僕は調子に乗っていた気がするんですよね」
「調子に……ですか？」
「はい」

そこまで思い出して、なんとなく理由が分かった。
たぶん、隆司が僕のいうことに従わなかったからだ。

「昔は、姉さんたちに思いっきり甘やかされて育てられてきましたから……。姉さんたちにしてみれば、両親の忘れ形見だから仕方なかったのかもしれないけど、そのせいで自分が何か言えばその通りになると思ってた気がします」
「……今のコウタ様からは想像もつきません」

アスカさんの言葉に、僕も一つ頷く。
確かに、今の僕にはそんなこと思うこともできない。

「我ながらいやな子供だった気がします。周りに同級生が集まっていたのをいいことに、王様気取りで……。でも、隆司だけはそんな僕の周りから離れていたんですよね」
「……今の～リュウジ様からは～想像も～つきませんね～」
「そうですかね？」

アルルさんの言葉には首をかしげる。
確かに一緒に行動することは多いけど……。でも僕と常に一緒ってわけじゃないと思うけど。

「まあ、とにかく。僕のいうとおりにならない隆司に殴りかかったのが僕なんですよね」
「こ、コウタ様からですか……」
「ええ」

ひきつった顔をするアスカさんに、苦笑して見せる。
そんな僕を見ながら、アルルさんが納得するように頷いた。

「で～、コウタ様が～勝たれたと～」
「いえ、勝ったのは隆司です」
「ええ～！？」

驚きの声を上げるアルルさん。アスカさんも、声こそ上げなかったけれど、目を見開いている。

「コウタ様がリュウジ様に～……ああ～、でも～今のリュウジ様を～見れば～」
「いえ、さすがにあんなに強くはなかったですけど……」

むしろあんな力で殴りかかられたら、僕が死んじゃうし。
……それでも、昔の隆司は子供にしては力が強かったんだよね。
クラスの中でも運動神経が高かった僕だけど、あっさり返り討ちにされちゃったんだよね。

「みんなの目の前で、負かされたのが悔しくて……。そのあとも僕は隆司にしつこく喧嘩を売ったんですよね」

幾度挑んでもなかなか勝てず、所構わず喧嘩を振ってもやっぱり勝てず。
そのうち姉さんたちに喧嘩してることがばれて叱られて、怒られないように隆司と仲良くしているところを見せようと頭を下げたり。
「そんな風に付き合っているうちに、気が付くと僕と隆司は親友になってたんですよね」
普通なら、しつこく喧嘩を売ってくる相手に付き合うなんてお人好し以外の何者でもないけど、隆司の場合は喧嘩を売ってきたことなんてどうでもいいっていう雰囲気だった。
「なんていうか、隆司は昔から細かいことを気にしないというか……。些細なことなら、自分への不利益なんか考えない、そんな一面があったんですよね」
「器が大きい……という奴ですかね」
「かも知れませんね」
僕が頷くと、アスカさんも小さく頷いた。
「それでまあ。隆司との付き合いがあったおかげで、僕の子供の頃の嫌な面なんかがだんだん薄れていって……で、今の僕があるというわけです」
「なるほど～。リュウジ様も～、コウタ様の～育ての親と～いうわけですね～」
「そういう言い方もできますね」
事実、上の姉さんも下の姉さんも僕を可愛がってくれたけれど、しつけという点においてはどうしても甘さが目立っていた気がする。

でも、隆司との付き合いが始まって、僕の悪い点を隆司が指摘するっていう構図が始まってからは、僕は世間の常識と僕の常識のずれを意識し始めるようになった。
もし隆司がいなかったら、僕は自分にできないことはない、叶わないことなんてない、と心の底から考える、傲慢で自尊心の強い嫌な奴になっていただろう。

「本当に、隆司には感謝の気持ちでいっぱいです……。今でも、僕のわがままに付き合ってもらうことが多いですし……」
「コウタ様にとって、唯一無二の親友なのですね」
「ええ、本当にそうですね」

アスカさんの言葉に、僕は頷く。
でも、今はそんな隆司がいない……。
いつ戻ってくるかもわからない状態だ。
そのことが、どうしようもなく不安で仕方ない。
隆司が、僕の知らない、僕の手の届かないどこかへ行ってしまったんじゃないかと……。

「……仮に隆司が魔王軍の人たちに遭遇したとしても、大丈夫ですよね？」

一瞬強い不安に駆られた僕は、誰にともなくそう口にした。
アスカさんやアルルさん、あるいは別の誰かでも構わない。僕の不安を払拭してもらいたかったのかもしれない。
でも、アスカさんは厳しい表情で首を横に振った。

「いえ……。相対した相手にもよるでしょう。リュウジ様といえど、必ず無事とは限りません」
「……そう、ですよね……」

「アスカ～！」

アスカさんの正論に、項垂れる僕。

アルルさんが抗議の声を上げるけど、アスカさんはそれに構わず、すぐに力強い声を上げる。

「ですから、今できることをいたしましょう。仮にリュウジ様が、魔王軍に捕らえられたとしても、すぐに助け出せるように」

「！　……はいっ！」

その言葉に、僕は強く頷いた。

そうだ……いつも助けてもらってばかりだ。なら、今度は僕が隆司を助ける番かもしれないんだ！

力強く拳を握りしめる僕を見て、アルルさんが不安そうな顔になった。

「……でも～」

「ん？　どうした、アルル？」

アスカさんが問いかけると、アルルさんは小首をかしげてこう口にした。

「リュウジ様なら～、喜んで～捕虜になりそうな～気がするんだけど～」

「「……」」

言われて、思い出す。

隆司が嫁と呼んではばからない、魔王軍の魔竜姫、ソフィアさんの存在を。

「……ま、まあ。さしものリュウジ様といえど、そんなことは、しない……ですよね？」
「え、ええ、たぶん……おそらく……きっと……」
自分で口にしながらだんだん自信がなくなってくる。
正直、隆司ならこれを機に魔王軍の本営まで突っ込んで、ソフィアさんを攫ってこないとも限らない……。
ソフィアさんが絡んだ時の隆司って、僕も見たことないテンションになるから、どうするのか想像もつかないんだよね……。
「頼むから、真子ちゃんが怒り出すようなことだけはしないでよね、隆司……」
今ここにいない親友へ届くように、僕は天へと祈りを捧げるのであった……。

No．84：side・kota「光太と隆司」（後書き）

そんなわけで軽い思い出話の回。子供らしい傲慢さで周りを振り回していた光太君は、隆司に迎撃されて、今のような鈍感に……フラグ乱立の原因、隆司じゃねぇのこれ？

しかし攫ってくるとなると、普通の縄じゃ間違いなく役不足ですよね。ワイヤーとか持ってこないと……。

ちなみに隆司がいなかったら間違いなく俺様系でしたでしょうねぇ、光太。以下次回ー。

No．85：side・remi「少女、料理中」

今日、私は厨房の一角を借りて、簡単なクッキーを作っていました。

隆司君が音信不通になったという領地に向かって、もう一週間ほどになるでしょうか。

隆司君が帰ってこないことで、真子ちゃんはイライラしているし、アルト王子は少し元気が無いように見えますし、光太君はどこか上の空。

元々隆司君もすぐに戻ってくる予定だったので、みんな不安なんだと思います。もしものことがあれば……って。

隆司君なら、きっと大丈夫！だと私は信じています。

信じていますけど……やっぱり少しだけ不安です。

隆司君と友達になったのは、高校生になってからで、時間にすればに、三ヶ月くらいですけど……。私にとっては真子ちゃんの次に大切な友達なんですから。

「ここにおられましたか、レミ様」

「あ、ヨハンさん」

いろいろ考えながら、オーブン……はないので竈です。竈の中のクッキーの焼け具合を確認していた私の横から、ヨハンさんが声をかけてくれました。

柔和な微笑をいつものようにたたえたヨハンさんが、ゆっくり近づいて私と同じように竈の中を覗き込みました。

「クッキーですか？」

「はい。真子ちゃんや光太君たちに、元気になってもらいたくて」

「さすがレミ様……！」

ヨハンさんがいつものようにオーバーなリアクションで私のことを称えようとします。
さすがに慣れてきましたけれど、苦笑は抑えられません。

「みんな、隆司君が帰ってこなくて元気がないですから……」
「ええ。マコ様やコウタ様は、リュウジ様が魔王軍と衝突しているのではないかと危惧しておいででしたね」
「そうですね……」

予定通りに返ってこなかった日に、真子ちゃんが冗談でそう私たちに言っていたのを思い出します。
あの時はただの冗談だったのに、ここまで時間がかかってしまうとやっぱり疑いたくなってしまうんでしょう……。
もしそうだとしたら、隆司君はたった一人で魔王軍と戦っていることに……。
項垂れる私の肩を、ヨハンさんがポンと叩いてくれます。
私が顔を上げると、ヨハンさんは優しく微笑んでくれました。

「ご安心を、レミ様。リュウジ様もまた、女神に愛されたお方。きっと元気な姿で帰ってきてくれますとも」
「……はい！　そうですね！」

ヨハンさんの励ましの言葉に、私は笑顔で頷きます。
そうだよね。隆司君なら、きっと元気で帰ってきてくれるよね！

「おっと、レミ様。クッキーの焼け具合がいい感じになってまいりましたよ」
「あ、ホントです！」

ヨハンさんの言葉に、私は慌てて竈から天板を外して、調理台の上に置きます。
おいしそうなきつね色に焼けたクッキーの香ばしい香りが、鼻をくすぐります。
向こうの世界にあるみたいなこった調味料はないから、ごく簡単なものです。一枚手に取って、試しにかじってみます。

「ん～……」

自画自賛になっちゃうけど、おいしい！
砂糖の甘さと小麦粉の香ばしさが何とも言えない味わいです……。こっちの世界の小麦粉でうまく作れるか不安でしたけど、レシピはそんなに変わってないみたいで助かりました！

「ヨハンさんも、一枚どうです？」
「レミ様の手料理……！　いただいてしまってよろしいのですか！？」
「はい！　ぜひ、感想を聞かせてください」
「で、では……」

私が試食をお願いすると、ヨハンさんは恐る恐るといった様子で一枚クッキーをつまみました。
そしてじっとクッキーを見つめてから、ぱくりと口の中に入れて……。
ぶわっ、と音がしそうな勢いで涙を流し始めました。

「え、ええっ！？　あ、あの、何かおかしかったですか！？」
「おかしい……ええ、おかしいかもしれません……。これほど美味なクッキーを、私ごときが食しているという事態が……！　女神よ、お許しください……！」

「え、えー……」

クッキーを食べ終えて、膝をついて女神様へ一心不乱に祈りを捧げはじめるヨハンさんの姿に、私は呆然とします……。

まさかこんなリアクションが帰ってくるとは思いませんでした……。

「と、とりあえず、おいしいですか？」

「おいしいなどと、そんな乱暴な言い方はできません……！　これはもはや美味であると表現すべきです……！」

「そ、そうですか……」

とりあえず、おいしいということで問題はなさそうです……。

私は小さくため息をつきながら、用意しておいた紙袋を取り出します。

「おや、それは？」

「みんなたぶん忙しいと思いますから、いつでもつまめるように包装しておこうかと思って」

真子ちゃんも光太君もアルト王子も、私と違ってみんな忙しいです。

真子ちゃんは、いろんな発明。光太君は修行。アルト王子は公務。私が訪ねにいっても、すぐにクッキーを食べられるとは限りません。

だから、お皿を持って訪ね歩くより、いつでもつまめるように簡単にラッピングして手渡したほうが、便利だと思ったんです。

私の言葉に、ヨハンさんがまた笑顔を見せてくれます。

「ささやかな気遣いも決して忘れない……。さすがレミ様。私もお手伝いしてもよろしいでしょうか？」

「ホントですか！？　ありがとうございます！」

そうして二人でクッキーを紙袋に詰めていきます。

そんなにたくさん持って行っても迷惑だと思いますから、少な目に詰め込んでいきます。

と、ヨハンさんが不思議そうな声を上げました。

「？　レミ様。ご用意されている袋の数ですが、四枚ですか？」

「あ、はい。真子ちゃんと光太君と、アルト王子……」

指折り数えながら、私は最近顔を見ていない、魔法使いの男の子の名前を上げます。

「後、ジョージ君にも上げようかと思いまして」

「ああ、彼ですか。そういえば、ここ最近姿を見ませんね」

「はい……」

ヨハンさんは頷きながら、クッキーを紙袋へと詰めていきます。

私も同じように詰めながら、ジョージ君の姿を思い浮かべます。

「私も、フィーネ様に場所を尋ねたりして会いに行くんですけど、ほとんどお話しできなくて……」

「まあ、彼も一魔導師です。研究に熱が入れば、致し方ないことではないでしょうか」

「そうですね……」

ヨハンさんは慰めるようにそう言ってくれますけれど、本当の理由は違うように思えます。

ジョージ君が私と顔を合わせなくなる……もっと言えば私を避けるようになったのは、向こうでのみんなとの思い出を話してからで

す。
あの時のお話の、いったい何がジョージ君を傷つけてしまったのかはわかりません。
でも、こうして私を避けるようになったということは、何かがジョージ君を傷つけてしまったことには違いないと思います……。
メイド長さんのいうように、しばらくはそっとしておいてあげようと思ったんですけど、それでもやっぱりジョージ君とは仲良くしていきたいです。
だからせめて、クッキーの差し入れくらいはと思ったんですけれど……。

「受け取って、くれますかね……？」
「そう心配なさらずとも、ジョージ君もまだ子供です。こうして甘いものの差し入れを拒む理由もないでしょう」

私を励ますように、ヨハンさんが言葉を紡ぎます。
私はその励ましがうれしくて、顔を綻ばせました。

「ありがとうございます、ヨハンさん」
「いいえ。さて、とりあえず包み終わりましたね」
「あ、はい、そうですね」

ヨハンさんに言われて、四つの包み紙が完成していることに気が付きました。
あう……。私一個くらいしか作れなかった……。

「あまり大きな袋ではないので、数は詰め込めませんでしたが、よろしかったでしょうか？」
「はい。あまり、たくさん持って行っても食べきれないと困りますから」

「そうですね。残ったクッキーは、いかがいたしましょう？」
「そうですね……」

袋に詰める枚数を見誤っちゃって、結構な枚数のクッキーが天板の上に残されていました。
うーん、私一人で食べるのは論外だし、この枚数をいきなり持って行っても普通に食べてくれそうな人たちっていうと……。

「……ケモナー小隊の人たちの差し入れにしようかなぁ……？」
「彼らへの差し入れですか。きっと喜ぶと思いますよ」

何気なくつぶやく私。
あの人たちは、真子ちゃんたちの次くらいに親しく接してくれる人たちです。
この城の人たちは、私たちが勇者ということで気おくれしているのか、なんていうか壁があるように思えるんですけど、ケモナー小隊の人たちはそんなことを気にしないで接してくれているように思えます。
なんでも「隊長の仲間ですから」とのことだったんですけど、そのことがうれしくてたまに皆さんのところに遊びに行ったりもするくらいの仲です。
ヨハンさんの後押しを受け、私は一つ頷きます。
教団の人や、魔導師団の人は遠慮しちゃいそうだけど……あの人たちなら普通に受け取ってくれるかな？
……うん。ケモナー小隊の皆さんなら、きっと喜んでくれるよね？
そうして天板の上に残ったクッキーを大皿の上に載せていると、厨房にあわただしく騎士の人が駆け込んできました。

「れ、レミ様！　ここにおられましたか！？」
「なんです、騒々しい。ここは厨房ですよ」

「ハッ！　申し訳ありません！」

ヨハンさんにたしなめられた騎士の人は、肩で息をしながら私のそばへと近づいてきました。

何か、あったのかな？　ひょっとして、隆司君が！？

私は一歩前に出て、騎士の人に問いかけます。

「何があったんでしょうか？」

「ハッ！　物見台より報告があり、魔王軍からの侵攻の合図である狼煙が上がったと……！」

「狼煙が……！？」

狼煙が上がったということは、今すぐにか、遅くとも明日には魔王軍が攻めてくるということです……！

「幸い、前線より使者はきていませんので、戦闘は明日と思われますが……明日に備えて会議を行うとマコ様から通達されましたので、連絡を……」

「……はい、わかりました。ありがとうございます」

「いえ、それでは！」

騎士の人は敬礼すると、すぐに踵を返してどこかへと駆け出していきます。

次は、光太君のところへ行くのでしょうか？

「しかし、リュウジ様がおられないこのタイミングでの襲撃……」

「はい……」

前に真子ちゃんが言っていた、こちらの行動が魔王軍に筒抜けになっているという言葉を思い出します……。

だからこそ、ソフィアちゃんと親衛隊の人たちが先回りするように奪還領地に先回りしていたわけですけれど、今回は隆司君がいないタイミングを狙ってきたということでしょうか……。

……それなら、絶対に負けるわけにはいきません。

「隆司君だって、がんばってるんだから……。ここで私たちが負けちゃったら、隆司君に顔向けできないよね！」

「はい、その意気ですレミ様」

私はグッと拳を握りしめると、クッキーの入った紙袋をポケットに入れて、クッキーの乗った大皿を手に持って、会議場へと急ぎます。

隆司君、私たちがんばるよ。

だから……早めに帰ってきてね……。

No. 85 : side・remi「少女、料理中」（後書き）

礼美ちゃんの手作りクッキー。特別なアレンジはありませんが、それだけのシンプルな味を保証してくれると思われ。

さて、隆司がいない間に魔王軍が攻めてくるようです。

ケモナー小隊もいるので、抑え自体は効くと思いますが……。以下次回ー。

No．86：side・mako「魔王軍との会戦マイナス1」

狼煙が上がって翌日。結局隆司は戻ってこない。

あのバカは、たとえ馬鹿でも、あたしらにとっては最大戦力の一角だ。

領地奪還に動いてる時なら、向こうもある程度戦力が分散しているんじゃないかと予想が立てられるけど、今回は状況が違う。たぶん、四天王の存在を考えても、向こうも全員でてくるだろう。

そうなると、隆司一人の穴がとてつもなく痛い。現状、魔竜姫ソフィアとまともに打ち合えるのは、あのバカだけなのだ。

一応、団長さんにもそれとなく聞いてみたけれど、速度はともかく、あの重量のせいでまともに打ち合える気がしないと答えが返ってきた。

それに、団長さんにはヴァルト将軍が出てきたときの対処をしてもらわなければならない。

さすがに全員一度に出てくる可能性は低いだろうけれど、もしもの時は、あの狼面と戦ってもらわなければならない。

光太は間違いなくガオウが突っ込んでくるだろうから、あの犬男の抑え役。礼美は、可能なら周辺騎士たちのカバー。そしてあたしはマナが突っ込んでくれれば、マナの相手になるでしょうね……。

そうなると、ソフィアが完全にフリーになってしまうわけだ……。

大きく開いた隆司の穴をどうするか、ああでもないこうでもないと議論したけれどどうにもならず、結局あたしらがソフィアを含める親衛隊たちの相手。残った騎士たちをケモナー小隊を中心とした部隊で消耗させ、いつものように消耗戦を狙うこととなった。

「それでも率は悪いわよね、正直……」

「まあな」

いつものようにデンギュウに乗って前線に乗ってきたあたしたち。メンバーはいつもの領地奪還メンツからジョージを抜いた連中と、アメリア王国騎士団、およびケモナー小隊で構成されている。

ケモナー小隊たちは、今から魔王軍の連中に会えるということで嫌にテンションあがってるけれど、それ以外の騎士たちの表情は若干暗い。

たぶんに、あたしらが持つ雰囲気に引きずられているんだと思う。礼美が一生懸命周りを励まして、空気を換えようと頑張ってくれているけれど、あまり効果は無いみたいね。

あたしの隣に立った団長さんが、武器にしている棒で肩を叩きながら気だるげにつぶやいた。

「一番の問題は魔竜姫対策だが、あれを釘付けにする方策はあるのか？」

「今のところ、アルルが使う地属性系の魔法で拘束する予定だけど……」

ちらりと後ろを見ると、光太に話しかけているアルルの姿が見えた。

今回、ソフィア対策の要であるアルル。地属性の拘束魔法で戦闘開始と同時にソフィアを拘束。そしてあたしが使う天星でアルルの拘束魔法を強化補助。これでソフィアを閉じ込める作戦……なんだけど。

問題は、ソフィアの速度にアルルの魔法が追いつけるのかってことなのよね。

「詠唱の速度も、発動速度自体も悪くないけど……あの魔竜姫に追いつけるかどうかが問題よね」

「話じゃ、魔王軍一のスピードだったか。単純な魔法も、魔族連中にゃ当たり辛いからな」

まるで他人事のように、団長さんが呟く。
そうなのだ。人からすればそこそこの速度を誇る光矢弾（ライトアロー）ですら、魔王軍の魔族たちはあっさり回避する。魔王軍を構成する魔族が、肉食系の動物魔族で構成されているのが原因らしい。
だが、そんな魔族たちも一応生き物。突発的な事態には対処しきれないようだし、中にはマナのような運動音痴……つっても、魔族のレベルで見た場合の運動音痴だから、普通の人間に比べたら、運動神経いいんだろうけど……。ともあれ、運動音痴もいる。当てられない道理はないはずだ。

「いかに開幕で、相手の不意をつけるかね……」
「だな。今回は、立ち上がりをミスったらアウトだろう」

団長さんのいうとおり、今回の会戦は立ち上がりが一番重要だ。
今までであれば、戦力比はほぼ互角だったから割と適当に始まっても何とかなってきた。でも、今回はそうはいかない。ソフィアの拘束に失敗すれば、戦局が向こうに傾きかねない。
あたしは自分を鼓舞するように、グッと拳を握りしめた。
立ち上がりをしくじるわけにはいけない……。大丈夫。メンバーはほぼいつも通りなんだ。やれるはず……。

「さあ、勇者たちよ！　再び闘いの時だ！」

前線に到着すると同時に、とびっきりのいい笑顔で魔竜姫があたしたちを出迎えた。
向こう側はほぼ予想通りのメンツだ。ご丁寧に、ヴァルト将軍の姿まである。

「よう、ヴァルト。ここ最近、ご無沙汰だったじゃないか」

「それは貴公も同じだろう？　互いに、そろそろ引退を考える時かもしれんな」

団長さんとヴァルト将軍が、旧知の親友か何かの様に実に気さくに冗談を言い合っていた。年配者特有の余裕って奴なんでしょうけど……なんかひたすらに腹が立つ……。

でも、ヴァルト将軍の存在はかなり厄介ね……。考えうる限り、最悪のパターンの一つだわ……。

当然、ほかの最悪のパターンはラミレス同伴、あるいは四天王二人が同伴のパターンだ。ラミレスも一緒じゃないだけ、まだマシかもしれない。

と、一声吠えてご満悦気だったソフィアが、ふと何かに気が付いたように不思議そうな顔をしてあたしたちの方をキョロキョロと眺めた。

「……なあ、魔導師よ」

「……なによ？」

いつの日かの光景をデジャブのように感じるあたしに、ソフィアはこう尋ねてきた。

「あの男はどこだ？」

……どこだ、か。

あたしは内心の不安を悟られないようにしながら、軽く肩をすくめてみせた。

「あいつ？　あいつなら、今回はパスするってさ」

「えっ」

あたしの言葉を聞いたソフィアが、傷ついたような声を上げた。
……って何でよ。
思わずソフィアの方をまじまじ見つめると、心なしか尻尾や羽根がしょんぼりと垂れ下がっているように見受けられた。

「そうか……今回はパスなのか……」
「えー、あー……」

小さく項垂れたソフィアの、思いのほかショックを受けた様子に、思わず良心を刺激されるあたし。
まさか、こんな反応されるとは……。
どうするべきか悩むあたしの目の前に、ケモナー小隊ＡＢＣが非難囂々といった様子で現れた。

「いーけないんだー！　いけないんだー！」
「マコ様！　嘘は重罪です！　偽証は犯罪なのです！」
「今すぐ、ここにはいないソフィアさんの旦那である隊長に向かって、五体投地でＤＯＧＥＺＡするのです！」
「死んでもごめんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

あまりにも腹立つＡＢＣの連中の煽りにつられ、思わず無詠唱で火炎球（ファイヤーボール）をぶっ放す。
無詠唱なので、人が死ぬような威力はない。まあ、こんがり焦げるだろうが、自業自得だ。
と、ＡＢＣの発言を聞いたからか、あるいは火炎球（ファイヤーボール）の爆音に驚いてか、多少正気を取り戻したらしいソフィアが目を丸くして、あたしの方を見つめてきた。

「う、うそ？　ど、どういうことだ！？」
「……例え、さっきのあたしの発言がウソだったとして、本当のこ

とをあんたに言う理由があるの？」

ガッツリ食いついてきたソフィアを突き放すように、あたしは冷たく言い放った。

そんなあたしの様子に、冷静さを完全に取り戻したソフィアは、凛々しい顔で頷いた。

「……確かに、その通りだ。いささか、冷静さを欠いていたな」

「愛しの好敵手がいない程度で、慌てないでほしいものね」

「だ、誰が愛しのだ！！？？」

茶化すようなあたしの言葉に、ソフィアが顔を赤くして反論してくる。

……しかし、ソフィアとの今の会話は地味に重要なパーツが含まれていた……。

つまり、今回の魔王軍の侵攻は、決して隆司がいないから行われたわけじゃない……。

そもそも、隆司がいないこと自体、向こうにとってはイレギュラーだった可能性が高い。

それが意味するところはすなわち……。

「確かに隆司はいないけれど、僕たちがいるよ」

「絶対に、負けたりはしませんよ！」

あたしが沈黙すると同時に、筆頭勇者たちが前に進み出て、各々の武器を構える。

「当然、我々もいる。例え貴様の眼中になかろうと、食らいつかせてもらうぞ！」

「ただで～帰れるなんて～思わないことですよ～♪」

「いずれ女神様を奪い返しに参る……その良い予行演習となりましょう」

さらにそれぞれの従者たちも、呼応するように前に出る。

光太の言葉に反応し、背後の騎士たちも、それぞれの武器を構えはじめた。

先ほどまで若干暗く沈んでいたけれど、光太自身が勇ましく前に出たおかげで、気持ちが浮上したように見える。

目の前の立ちはだかった光太たちの姿に、魔竜姫の姿に威厳と威容が戻ってくる。

ソフィアはニヤリと笑うと、マントをひるがえすようにバサリと背中の羽根を羽ばたかせた。

「……無論、お前たちの存在を軽視するわけがない」

両の腕を組み、その姿を誇るように胸を張る。

そしてソフィアの両脇を護るように、親衛隊であるガオウとマナも前に出てくる。

「あの男がおらぬ今こそ！　我らが戦線を押し進める好機なり！」

「このタイミングを逃しません……！　今まで負けてきた負債、ここで返します……！」

親衛隊の二人の言葉に、背後に控えていた魔族たちも各々に声を張り上げ、拳や武器を構える。

両軍の士気が、徐々に高まっているのが分かった。

熱気さえ放つ、両者の中間。火花のようなものが散っているようにさえ見える。

そして、両軍の将が、それぞれを代表するように、前に出た。

「さて、おっぱじめようかね……！」
「ここしばらく、勝ちを得ていない。ここらで、連敗をやめさせていただこう……！」

団長さんとヴァルト将軍が獰猛に牙を剥き、互いの獲物をギシリと握りしめる。
極限まで高まった緊張。張りつめた弓のようなそれはやがて――。

「「「「「ウウオォォォォォ！！！！！」」」」」

どちらともなく、打ち破られることとなった……！
さあ、こっからが本番よ……！

ちなみにこれは余談になるが。

「ダーリン！　会いたかったにゃー！」
「俺もだよミミルゥ！」

ケモナー小隊の面々は、ソフィア親衛隊であるミミルをはじめとする一部の魔族たちを拘束し、その場に釘付けにするという大任を無事に果たしていた。

「マオ君！　今日はゆっくりお話をしましょ！？　ね！？」
「う、うわ！？　お願いですから、だ、抱き付かないでくださいぃ！？」

……あいつらは、間違いなく仕事してるんだ。うん。

例エリア充ダラケダッタトシテモ、吹キ飛バスナンテモッテノ他ヨネ？　ウフフフ……。

「マコ様、お気を確かにでありますー！？」

Ｎｏ．８６：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「魔王軍との会戦マイナス１」（後書き）

魔王軍襲来！　割と初期のような雰囲気になっております。これも隆司がいないせい……いや、おかげですね！

まあ、その一方でケモナー小隊がイチャコラ開始し始めているようですが。一応、敵性戦力を釘付けにはしてるんで、割と役には立ってます。デコイです。リアルデコイです。

しかし、当初の予定と違い、ソフィアへの奇襲がうまくいきそうにはない気配が……。以下次回ー。

Ｎｏ．８７：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「魔竜姫の脅威」

「集え天星ッ！！（サテライト・スターズ）」

開幕と同時に、あたしは天星を生み出す。

何はなくとも、この呪文だ。あたしにすれば、これがなければ始まらない。

「行くぞ！」

そして今ちょうどあたしの眼前にいるソフィアが、気合を入れて翼を羽ばたかせようとする。

けど、あたしへの突進なんぞ、御免こうむる。あいつじゃあるまいし、４００キロ越えの超体重娘を抱きとめる趣味はないわよ！？

「大地起牙（アース・ファング）～！！」

ソフィアが気合を入れた瞬間、その両足が付いている大地がまるで巨大な口か何かの様に隆起し、ソフィアの身体を飲み込もうとする。

「ぬっ！？」

「ソフィアさまぁ！？」

「させないっ！」

ガオウが慌てて牙を破壊しようとするけど、光太が前に出て武器を打ち合わせる。

隣にいたマナは、礼美が放った魔法を防いだり、礼美に魔法を放ったりするのに忙しいようだ。

「邪魔を……！」
「させません！」

ほぼ一瞬の攻防。その間にソフィアの姿は大地の牙の中に飲まれ――。

ゾバンッ！！

た、と思った瞬間。轟音と共に牙が斬り砕かれ、土煙の中からソフィアが上空へと跳びあがっていった。

「やるじゃないか！　少し驚いたぞ！」

喜色満面といった表情のソフィアに対し、あたしは苦々しく舌打ちした。

今の一瞬で拘束しきれない……か。速度で逃げられるのではなく、力技で打ち破られるとは。

一応、予想はしていた。でも、不意を打てれば、攻撃するより先に拘束できると踏んでいた……。

反応速度も反則級ってか……！

「だが、私を捕まえるには、いささか強度が不足しているようだな！」
「こっちくんなぁぁぁぁぁぁ！」

ソフィアは不遜に言い放って、あたしへ向かって急降下を開始する。

あたしの相手はあんたじゃないっつぅの……！

あたしは急ぎ、天星を地面の中に埋め込む。

「粉塵爆風（グラウンド・ボム）！！」

同時に、地面を破砕し、その破片と衝撃で対象を討つ魔法。だけど、天星の強化を合わせれば、ソフィアを迎撃するくらいは……！

打ち上げた破片は何とかソフィアの身体がこちらに届く前に、彼女を迎撃する。

「ちっ！」

破片に見舞われたソフィアが、慌てて翼の羽ばたきで地面の破片と衝撃波を吹き散らす。

くっそ！　一応巨大な生き物くらいなら撃ち倒せる威力があるって、フィーネに太鼓判押してもらった魔法……！

そういえば、あの子実戦経験はほとんどないって言ってたわね……。

「小癪な！」

「だからこっちくんなぁぁぁぁ！！」

今日はあたしの相手をすると決めたらしいソフィア。頑としてこちらへの降下をやめようとしない。

次！　次の魔法！

慌てて次の魔法を出そうとするけど、今度は間に合わない……！

けど、あきらめた瞬間、アスカが前に出てソフィアの剣撃を受け止める

「む！？」

「はぁっ！」

「ぬぉ！？」

受け止めた瞬間、どうやったのかソフィアの身体を吹き飛ばした。
一瞬、身体から何か外へ向かって出たように見えたけど、結果としてソフィアの体勢が崩れる。
チャンス！
「粘着泥土（マッド・スプラッシュ）！！」
「くっ！」

あたしが呪文を唱えると同時に、ソフィアが倒れ込んだ地面が泥へと変わる。
効果範囲の地面を、ひどく粘着性のある泥へと変える魔法だ。
ソフィアの身体が、泥の中へと消えていく。

「おお！　ソフィアさんの身体がなんかエロい感じの泥まみれに！？」
「素敵！　まさに眼福という感じの光景ですな！」
「何故こういうときに隆司さんはいらっしゃらないのか！　興奮のあまり、ソフィアさんのところに突げ」
「おとなしく戦ってろお前らぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

いきなり興奮し始めるＡＢＣを勢いで吹き飛ばす。
まったく、なんであいつらはケモナー小隊なのに嫁嫁とか言っておとなしくしてないのよ……！
一方ソフィアは、ＡＢＣのいうとおり、全身が泥まみれで割とひどいことになっている。
「ぐ……！　この……！」

固体はともかく、液体を吹き飛ばすのは至難の業だ……。

初めからこれを使えばよかったんでしょうけど、発動した地面を泥に変えるだけの魔法だから、相手をその地面に突き落とさないといけないのよね……。

でも、当初の予定通り、ソフィアの拘束には成功――。

「舐めるなぁぁぁぁぁぁ！！！」

したと思いたかった。割とマジで。

ソフィアの怒号と同時、ソフィアの全身を覆っていた泥が一気に吹き飛ぶ。その時、全身から何かが泥と一緒に放出されているのが見えた。

空気がソフィアの怒りに呼応するようにビリビリと震える。

そのソフィアの姿を見て、アスカが恐れ戦いたように呟いた。

「バカな！？　あんな覇気の量、人間ではありえない……！」

「そりゃ人間じゃないもの……！」

どうも、さっきからアスカやソフィアの身体から見える何かは、覇気と呼ばれるものらしい。

まあ、今はどうでもいい。問題は、ソフィアの拘束にまた失敗したということだ……。

「どうやら私を捕まえたいらしいが……そう容易くいくと思うなよ！」

泥がよほど不快だったのか、ソフィアの顔には青筋のようなものも見える。

容易いなんて思っちゃいないわよ。可能な限り、あんたを釘付けにしたいだけで……！

あたしは素早く戦況を確認する。

連中を撤退させるには、最低でも相手側の戦力を半分は削らないといけない。
ここまでの時間で、うまいこと半分減って――。

「ミミルの尻尾ってふわふわで気持ちいいなぁ……」
「にゃ～ん……尻尾マフラーとか、ダーリンレベル高いぃ～♪」
「まるでマシュマロのようなふわふわ感です……！　たまりません……！」
「お、お願いですから、口にくわえないでぇ……」

って違う！　あっちじゃない！　色ボケどもが見たいわけじゃない！
なんであっち向いたあたし！　いやでも目に入るけど、あれを見たって何も変わりゃしない！
目に入ってくる汚物どもから目をそらし、慌てて戦況を確認する。

「おりゃぁぁぁぁぁ！！」
「ハァァァァァァ！！」

えらい勢いと威圧感で、団長さんとヴァルト将軍が激突している。
確かヴァルト将軍も、３００キロは超えてると思ったんだけど、それと正面から打ち合えるって、団長何で出来てんのよ……。
とはいえ、あのチート将軍を引きとめてくれているのはありがたい。あれが普通の騎士団の連中とぶつかったら、こっちが壊滅するのは必至だもの……。
問題は、普通の騎士連中だけど……。
見たところ、とりあえず三対一くらいに持ち込んで何とか互角の勝負に持ち込んでるみたい……なんだけど……。

「せい！」「やぁ！」「どりゃ！」

「当たらんよ！」
「「「ぎゃぁぁぁぁ！？」」」

三対一でも一人に負ける時があるってどういうことよ！？
あのクマ耳のおっさんは玄人っぽいんだけど、それ以外でも負けてるっぽい連中がいるっていうのはどういうことなのよ！？
三人でしょ！？　相手の三倍は攻撃できるはずでしょう！？　騎士団長だって、魔族対策の訓練してるじゃない！！
だっていうのに何で魔族の一人二人あっさり倒せ――！

「よそ見とは余裕じゃないか、魔導師！」
「え」

聞こえてきたソフィアの声に振り向こうとした瞬間、あたしの後頭部に強烈な衝撃が走る。

「真子ちゃ」

聞こえてきた礼美の悲鳴がいやになるくらい遠くに聞こえたと思った瞬間……。
あたしの意識はとっぷりと闇の中に落ちていった。

「――――ハッ！？」

次に気が付いたとき、空はすでに夜陰の中へと沈んでいた。
パチパチと、どこからか薪の燃える音がする。

ゆっくりと体を起こし上げると、ずきりと後ろ頭が痛んだ。

「イタッ……！」

「起きてはいけません、マコ様。今は体を休めて……」

思わず後頭部を抑えると、そばに控えてくれていたらしいヨハンさんが、あたしの身体を抑えた。

あたしはそれに構わず、いったい何があったのか確認しようとした。

「あたし、確か……」

「ソフィアさんの一撃を喰らって、今まで気絶していたでありますよ……」

「サンシター？」

「マコ様、食欲はどうでありますか？　ウッピー肉のスープができたでありますが」

サンシターが、深皿に入れた湯気の上るスープを差し出してくれる。

「ありがとう……」

まだ夢見心地なあたしは、差し出されるままにお礼を一言言って、スープを受け取る。

透明なスープの中に、食べやすいようにカットされたウッピー肉が入っている。

場所が場所だけに、野菜は入っていない。

あたしはお肉と一緒にスープを掬い、一口食べる。

香辛料や香草の匂いとお肉のおかげで、なかなか濃い味がする。

「おいしい」
「お口にあったなら、よかったでありますよ」
ぽつりと思わずつぶやいたあたしに、サンシターが笑顔を見せてくれた。
やっぱり、これサンシターが作ったんだ。
腹立つくらい料理うまいわね、コイツ。
でも、おいしくて暖かいものをお腹に入れたおかげで、意識がはっきりしてきた。
そう、サンシターに言われたように、あたしは意識を失う一瞬前、後頭部にソフィアの一撃を喰らって……。
「……そのあと、どうなったの？」
「……」
「……」
あたしの言葉に、サンシターもヨハンさんも黙り込む。
ヨハンさんは無表情。サンシターは痛ましそうな表情だ。
……もう、その顔を見るだけで、何があったのか察しがついた。
「……負けたの？」
「……はい、であります」
確認の言葉に、サンシターは頷いた。
やっぱりね……。
「どんなふうに？」
「マコ様が気絶させられましたあと、魔竜姫ソフィアが、我が方の戦力を各個撃破。これ以上は不利と判断しました騎士団長様が撤退命令、という流れになります」

淡々と、その時の状況を報告してくれるヨハンさん。
一番恐れていた展開ね……。可能なら、あともう少し引っ張っておきたかったんだけど……うちの戦力があの様じゃ、期待できなかったかな……。

「礼美は？　光太もだけど、ソフィアとぶつかって無事なの？」
「はい、レミ様もコウタ様も無事です」
「ソフィアさんが、お二人と戦おうとしなかったというのが正しいでありますが……」

サンシターが、パチパチと音のする方に視線を向ける。
結構距離が離れているけど、薪のそばに礼美と光太の姿が見える。
二人とも、ひどく気落ちしているようで項垂れているのが分かった。
アルルとナージャ、そしてアスカが何とか気を取り直させようと、声をかけているみたいだけど、二人とも気のない返事を返しているようで、あまり効果が上がっているようには見えない。
怪我をしているようには見えない。サンシターのいうとおり、ソフィアは二人に手を出さなかったようだ……。

「負けたってことは、前線基地も撤退したってことよね？」
「はいであります。現在は、前回の基地から少し離れた位置にある前線基地にいるであります」

周囲を見回すと、確かに前線基地にいるようだけど、今朝こちらに来た時と比べるとテントの配置や周辺に見える光景も変わっている。
どうやら、本当に後退したようだ。

「……王都にどのくらい近づいた？」

「……あと五、六回ほど負けますと、魔王軍の前線が王都に肉薄する位置です」
「リアルな数字ね」

少なく見積もって、あと五回。
それが、あたしらに許された猶予ってことか。
かなり危機的な状況であるけれど、あたしの頭は奇妙に冷静だった。恐ろしく冷えていたと言い換えてもいい。
勝てる算段はあった。あたしがソフィアにばかり気を取られていないで、周りへの援護を行うことができれば、間違いなく勝てるはずだった。
でも、あたしはあいつの拘束にこだわりすぎた。何より、放置しておくことが危険だと考えたから。
あの判断は間違いだったのかしら？　もし間違いだとしたら、どこで間違えたのかしら？

「マコ」

ぐるぐると思考が回り始めたあたしを止めるように、誰かが後ろから肩を叩いた。
あたしが振り返ると、そこには団長さんが立っていた。

「団長さん？」
「とりあえず、今は何も考えるな。せっかくサンシターが作ってくれた飯が冷めちまうぞ？」

言われて、手に持ったスープから上がる湯気が、ほとんどなくなっていることに気が付いた。

「もし、お代わりが欲しければ、まだたくさんありますから

ね」

サンシターが、いつもの笑顔でそう言ってくれた。

あたしはその言葉に甘えて、とりあえず目の前のスープを空にすることにする。

少し冷めたスープの味が、なんだかしょっぱく感じたのは、きっと気のせいじゃないんだろう……。

Ｎｏ．８７：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「魔竜姫の脅威」（後書き）

というわけで、まさかの敗北でした……。別に隆司がいないせいではないんですが。実際今までは何とかなってたわけですし。今回は隆司の行方不明が気になってるだけで。あれ、結局あいつのせいじゃね？

しかし我ながら、騎士団連中の弱さが気になってきました。普段何してんのこいつら。

次回あたり、サンシターにでも視点を移してみたいと思います。

以下次回ー。

No.88：side・Another「サンシターの憂鬱」

魔王軍の会戦に敗北した次の日でありますが、マコ様はまだ落ち込んだままでありました……。

お姿を見たメイドさんが言うところだと、声に張りがなく、誰が見ても落ち込んでいるのがわかる状態であるとか。

どうにかできないものかと悩むものでありますが、とりあえず日々の仕事はこなさねばならないであります。

そんなわけで、今日も今日とて騎士団の備品を掃除するであります。

基本的に騎士団の装備は木の長柄を利用したものが多いであります。ちょっと油断すると、すぐに腐ってしまうでありますから、かなり気を使うのであります……。

「そこ！　踏込が甘いぞ！　もっとしゃんとしろ！」

自分が兵舎の裏手で掃除していると、表の方から団長の怒鳴り声が聞こえてくるであります。

団長は毎日ああして団員たちを鍛えているでありますが、魔族の人たちとの身体能力差までは埋められないのか、かなり歯がゆく思っているらしいであります。

事実、兵舎の裏のゴミ捨て場に、大量に開いた酒瓶が放置してあったであります。何かあると、とりあえずお酒を飲むのはいいでありますが、せめて量は控えて欲しいであります……。自分、アルコールは慣れているでありますが、朝からこの量はきついであります……。

「はあ……」

ため息をつきながら、自分、大量の酒瓶を一つ摘まんだであります。

まだアルコールの匂いがきつく、空けられてからそんなに時間が経ってないのがわかるであります。

漂ってくる匂いからも、かなり度がきついことがわかって、少しゲンナリするであります……。

「でも、こんなに強いお酒を飲むなんて、団長もかなり気にしているでありますね……」

酒瓶を酒屋さんの回収に出すために洗いながら、自分、小さくつぶやいたであります。

昨日の、マコ様をはじめとする勇者様の敗北は少なからず王城の中で波紋を呼んだであります。

アルト王子やアンナ王女は、調子が悪い時もあると皆様を慰めたでありますが、フォルク……ええっとその、意地の悪い貴族様などは大声で皆様のことを罵倒したりしたであります。

過半数近い貴族様が、勇者様たちの擁護に回ったので、その場はすぐに収まったでありますが……罵倒された皆様が項垂れているのを見ているのは、いたたまれなかったであります……。

もっと自分に実力があれば……皆様に恥をかかせずに済んだでありますが……。

悔しいであります……。自分、体力はあるのに筋肉がないせいで、訓練してもまともに続けることができないであります……。

「少しはケモナー小隊の皆様を見習って、訓練に精を出すべきでありますよね……」

自分は、今日も王城の周りを掛け声とともに走り回っているケモナー小隊の皆様の姿を思い浮かべたであります。

ケモナー小隊の皆々様は、日々愛しい人に追いつくための努力と称し、王城の周りを何周もぐるぐるとまわっているであります。
これは、もともと体力が少なかった魔導師や神官の方々のための訓練でありましたが、最近では魔族の方々との追いかけっこに負けないための訓練となりつつあるであります。
やはり嫁との砂浜での追いかけっこはロマンだな！とはリュウ様の弁でありましたが……。

「リュウ様……。今どちらにおいでなのですか？」

ふとそのお名前を思い浮かべ、そしてそのお姿を脳裏に浮かべ、自分はぽつりとつぶやいたであります。
リュウ様がお戻りになられず、もう一週間以上……。リュウ様に限って、めったなことなどないと思うでありますが、今は一刻も早いご帰還を願うばかりであります。
魔竜姫ソフィアさん対策もあるでありますが、それ以上に皆様の調子がよろしくないのは、やはりリュウ様がおられないことも一因であると思っているであります。
親しい人間の行方が分からないことの不安は、自分が思う以上に心の中を蝕むものであります。
自分、昔は病弱でありましたから、少し元気になって母の手伝いをしようと遠出などした日には、死ぬほど心配されたからよくわかるであります。
それに、リュウ様が持つ勢いは、勇者様方の一つの指針となっているようにも思えるであります。
マコ様の慎重さ、コウタ様の勇気、レミ様の優しさ……。どれも前に進むうえで大事でありますが、それらを全部まとめて前へと引っ張っていく力強さがリュウ様にはあるであります。
リュウ様でしたら、負けてしまった悔しさも、全部持って前に進める……そんな気がするであります。

「リュウ様……一刻も早く、帰ってきてくださいであります……」
「まったくだな」
「ウワッ！？」

祈るように呟いた自分に返事があり、自分、死ぬほど驚いたであります。
慌てて振り返ってみると、いつも余裕を持った団長にしては珍しく、焦ったような表情で自分の後ろに立っていたであります。

「だ、団長！？　訓練はどうしたでありますか！？」
「今は休憩だ。根を詰めても、すぐにバテるだけだしな」

団長は、そういうと井戸に沈んだ桶を引っ張り出して、その中の水を乱暴に飲み始めたであります。

「っはぁ！」

そして一息つくと、ガシガシと乱暴に頭を掻き始めたであります。
……やっぱり、イライラしているようであります。

「……訓練がうまくいっていないでありますか？」
「……いや、そういうわけじゃない」

自分、勇気を出して聞いてみたでありますが、意外なことに答えは否でありました。

「うまく、いってるでありますか？」
「そりゃな。魔王軍との開戦当初に比べれば、ずっと動きも良くなってるし、技術も上がってる。ただな」

「ただ……？」
「やっぱり魔族連中とやり合うのに躊躇している奴らが多い」
「ああ……」

団長の言葉に、自分、納得したように頷いたであります。
……きっとマコ様に言えば怒られると思って黙っているでありますが、実は騎士団の団員たちは魔王軍との戦いに乗り気ではないのであります。
この国に広く信仰されている女神様の教えの中に「意志あるものを傷つけるべからず」というのがあるのであります。
今までであれば、自分と同じ人間を傷つけてはいけないでありますが、という意味の教えであったでありますが、ここにきて魔王軍に所属する魔族たちが現れたであります。
手足の先や頭に異形のパーツがあるものの、皆我々と同じように意志を持ち、会話も成立したであります。笑いもすれば怒りもし、あるいは悲しそうな表情を見せたこともあるであります。そして、あまりひどく打ちつけられるようであれば、慌てて謝ってくることもあったでありました。彼らに意志がないというのであれば、我々はいったいなんだというほど、心満ち溢れた者たちが、我々の敵だったのであります。
団長とヴァルト将軍の一騎打ちのさなか、ほんのわずかではあるけれど、世間話をした者もいたであります。……あ、そういえば、今はケモナー小隊として頑張ってる者でありました。昨日の戦いで、彼女の名前を聞けたと喜んでいたでありますな。
……幾度となく戦いの中で、教団の者たちが女神様の奪還のために容赦や情けを捨てるべきだと説くこともありました。
ですが、行軍からはぐれたものを送り届けてくれたことすらある魔族たちに刃を向けることが、騎士団の者たちにはできなかったであります。
結果、長柄の先から刃は外され、ただの木の棒を持って戦地へと

赴くことになったであります。しかし、騎士団の戦術は基本的に、相手に小さな傷をつけ続け、その消耗を狙うものが主流だったであります。ただの棒では十分な威力たりえず、結果として魔族たちとの戦いに敗れる日々となったわけであります……。

むろん、団長や副団長、あるいはアスカさんのように、相手を傷つけない手加減ができる者はいるでありますが、ほとんどの者はその手加減ができないであります……。

手加減を学ぶために、互いに全力で打ち合う訓練も行われたでありますが、ほとんどの者があちらこちらの骨を折る事態に陥ったであります……。

「ですが、コウタ様やレミ様は、魔王軍との講和を望んでいるでありますよ？　それに漕ぎ着けるために、戦おうという者はいないでありますか？」

自分の言葉に、団長は沈黙したであります。

元々、魔王軍との講和は、団長も何度かヴァルト将軍と行おうとしたであります。しかし将軍は真剣な表情で「我々の眼鏡にかなう勇者を連れてきたら考えよう」というばかりだったであります。

そのことを受け、宮廷魔導師であるフィーネ様との相談の元、先代様が残された召喚用と思しき魔法陣を利用して、勇者を召喚する運びとなったであります。

それによって召喚されたのが、リュウ様やコウタ様であったのは、まさに僥倖というより他なかったであります。

コウタ様は、なるべくなら魔王軍と和平を結びたいといってるでありますし、リュウ様は言うに及ばずであります。

そんな彼らの姿に共感を経て、少しでも頑張ろうとする者がいると思ったでありますが……団長の顔色は芳しくないであります。

「もちろん、賛同者は多いさ。だがな、今度は力量差が邪魔をする」

「力量差、でありますか？」
「ああ。基礎身体能力の隔絶がいかんともしがたい。どんだけ全力で打っても躱されるだけに、逆に当たった時どうなるかわからんと、少し恐怖している者もいるんだ」
……手加減を学ぶ訓練のさなか、相手の手を折ってしまい、痛みに叫ぶ者を青白い顔で呆然と見下ろしていたものがいたのを思い出したであります。
あの時の光景が、忘れられずに恐れているというわけでありますね……。
「こうなると、ケモナー小隊の連中が少し羨ましいな……」
「そうでありますね……」
団長のぼやきに、自分も同意して頷くであります。
我々騎士団と勇者様たち以外で、唯一魔王軍の者とも対等に相対しているケモナー小隊。
彼らの真髄は、闘争ではなく愛にあるであります。
ただ愛でるために力をつけ、そして追いかけ、全力でぶつかっていくであります。
その好意に手加減は不要でありますし、相手が戸惑って逃げ惑うのであればそれはそれでおいしいわけであります。
とはいえ、騎士団全員がああなってはこの国の防衛が成り立たなくなってしまうであります。そもそも既婚者も多いでありますから、皆がリュウ様やケモナー小隊の皆様のようになってしまうと……。
「……羨ましくはあるでありますが、ああはなりたくないでありますね」
「違いねぇな」

自分のつぶやきに、今度は団長が同意したであります。
魔王軍との戦争のせいで一家離散とか洒落にならんでありますしね……。
はあ、と陰鬱なため息を団長とともに吐き出していると、ガサリと草を踏みしめる音を立てて、副団長がこちらにやってきたであります。

「団長」
「あん？　どうした、リーク」

副団長は、いつものように冷静な表情で団長を見つめると、王城の正門の方を示したであります。

「ハンターズギルドより使者が参りました」
「ギルドから？」
「はい。依頼だそうです。内容は――」

引き続き酒瓶を洗いながら、何気なく副団長が語るギルドからの依頼に耳を傾けていたでありますが……。

「――ネズミの駆除、だそうです」
「はぁ？」

思わず瓶を取り落してしまったであります。
今のマコ様にその依頼はまずいでありますよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！？？

No．88：side・Another「サンシターの憂鬱」（後書き）

そんなわけでサンシター回。今回のように、主要メンツ以外の場合は、Another sideと称させていただきます。……え？　ソフィアさん？　いや、ほら。隆司sideのメインヒロインですし。

それはともかくとして、魔王軍との戦いに騎士団の連中が弱いのは、宗教上の理由があった模様。たぶん、骨折させるのもビビってるんだと思います。いや、たぶん骨折もしないと思うけど。

次回は、真子ちゃんにとっては最悪なお話となるでしょう……。

以下次回ー。

No．89：side・kotta「王都捜索チュー」

「へぇー。リュウの奴、今仕事でいないのか……」
「そうなんだ……」

僕の説明にカレンさんが、幾度か頷いた。
場所は王都の東区。一緒にアスカさんと礼美ちゃんもいる。
で、今どうしてこの四人で行動しているかといえば……。

「しかし、ギルドの依頼とはいえ、ネズミ探しとは……」
「あ、アスカさん……」

アスカさんが、少しうんざりしたように呟いた。
そう。ギルドからネズミ退治を依頼されたんだ。
カレンさんは、ギルドからの使者だったんだけど、とりあえずは暇だということで町に不慣れな僕たちの案内役として、アスカさんと一緒に来てもらったんだ。
そんなカレンさんが、アスカさんの方を向いて小ばかにするような笑みを浮かべる。

「そりゃ、オエラい騎士様にゃどうでもいい依頼かも知れないねぇ」
「そういうわけではないが……」
「ふ、二人とも、落ち着いてください……」

カレンさんの言葉に、アスカさんが少しムッとしたような表情になった。
少し喧嘩になりそうな雰囲気だったけど、礼美ちゃんが二人を止めようとして割って入る。
そんな礼美ちゃんの様子に、カレンさんは少し肩をすくめた。

「まあ、訓練で忙しい所に無理言って、悪いとは思ってるよ？」
「……いや、とんでもない。第一級害獣ともなれば、早急な手立てが必要になる」

カレンさんの一応の謝罪に、アスカさんも小さく頭を下げた。
アスカさんのらしくない態度に、僕は少しだけ悲しくなった。
あの程度のからかいなら、アルルさんとのやり取りでよく見る。
いつものアスカさんなら、軽く受け流せるはずなんだけど……。
いけない。ダメな方向に気持ちが流れかけてる。隆司がいない今、僕がしっかりしないと。
気持ちを切り替えようと頭を振って、改めてカレンさんにギルドから依頼された内容を確認することにする。

「それで……ギルドからの依頼なんですけど」
「あいよ」

カレンさんが僕の話を聞いてくれる体勢になったのを確認して、僕は慎重に言葉を紡いだ。

「本当に王都でネズミが見られるようになったんですか？」
「ああ。ここ数日のうちだけどね」

カレンさんが僕の質問を肯定するように頷いた。
カレンさんが、騎士団へと持ち込んだ依頼は次のような内容だった。
ここ数日のうちで、ネズミ発見や駆除の依頼がギルドへと持ち込まれるようになった。
ギルドとしても、ネズミ退治はやぶさかではないが、人手が足りない。

第一級害獣ということもあるので、騎士団の人員を貸してもらいたい……。

騎士団長はその依頼を受諾し、こうしてアスカさんをはじめとした人員を王都中に放ってネズミ捜索にあてているというわけ。

「依頼のボードにも、ネズミ退治モトムの張り紙が増えてきてるからね。王都にネズミが出るようになったのはまず間違いないよ」

「そっか……」

元々王都にはネズミをはじめとする害獣除けの結界が張ってあったはず……。だというのに、ネズミが発生しているという事態に、今魔導師団は大慌てになっている。

アルルさんが一緒にいないのは、魔導師団の人と一緒に結界の調査を行っているからだ。

結界に何らかの綻びがあって、そこからネズミが浸入したんではないか……というのが現時点で推測された原因の一つ。もちろん、それ以外に原因があるかもしれないから、一概には言えないって言われたけれど……。

「依頼の数は、どのくらいですか？」

「昨日の時点で、三件ちょっとか。まだ大したことないけど、ホントにネズミがいるんなら、これからもっと増えると思うよ」

「ですよね……」

ネズミは繁殖力が強いことで有名だ。放っておいたらどんどん増えてしまう。

早い所、捕まえるか何かしないと、王都中がネズミだらけになっちゃうからなぁ……。

「そうなると、真子ちゃんがかわいそうだし……」

「マコ？　ああ、あの魔導師のことかい？」

僕の独白に、カレンさんが反応する。

ほんの少し呆れたような様子だったけど……。

「しかしあの魔導師、気が弱すぎないかい？　ネズミって聞いただけで気絶するなんてさ？」

「あ、あはは……」

僕はカレンさんに苦笑を返すほかなかった。

何しろ、団長さんに言われていつもの会議室まで集められた僕たちに、カレンさんが依頼の内容を告げた途端、椅子ごと真後ろに倒れちゃったんだから……。

慌ててサンシターさんが駆け寄って、礼美ちゃんの付き添いのもと部屋まで連れて行かれたけれど……顔が真っ青だったなぁ。

「あのー、カレンさん……。真子ちゃん、ネズミが本当に苦手で……。出来れば、そうっとしておいてあげてください」

「ああ、はいはい。わかってるよ」

後ろから追いついてきた礼美ちゃんが、遠慮がちにお願いすると、カレンさんは苦笑しながらヒラヒラと手を振った。

「ネズミが苦手な奴は多いからね。あまり話題にもしたがらないって連中もいるさ。まあ、名前聞いて気絶するほど嫌いな奴は初めてだけどさ」

「そ、そうですか……」

大きな声で笑い声を上げるカレンさんに、礼美ちゃんはちょっとひきつった様な笑みを浮かべた。

礼美ちゃん、カレンさんのことが苦手なのかな……？
と、アスカさんがみんなの注意を引くようにポンと掌を打った。
「まあ、それは置いておきましょう。カレンさん、ネズミが報告されたのはこのあたりですか？」
「ああ、そうだね」
カレンさんが頷いたのを見て、僕は周囲を見回した。
製服工場が多い東区の中で、割と居住区に近い商店街だ。きっと、この区にすむ人が普段の買い物に利用するんだと思う。
見ればパン屋や飲食店なんかも見える。ネズミが繁殖するにはもってこいな場所だ。
周囲を見回していると、カレンさんが僕にも聞こえるように説明を始めてくれた。
「発見したのは、確かパン屋の娘だったかね。朝方、いつものようにパンを作ろうとしたら、小麦粉を入れてる倉庫の陰でネズミを見つけたらしいよ」
「その娘はどのパン屋の娘ですか？」
「すぐそこのパン屋だよ」
アスカさんはそういって、一件のパン屋を指差した。
全面ガラス張りの、いかにもパン屋っていう感じのお店だった。
そういえば、この世界、魔法が発達してるおかげか、こういうガラス工芸品も普通にあるんだよね……。ガラスの名産地でもあるのかな？
「あっ！？」
と、礼美ちゃんがいきなり素っ頓狂な声を上げた。

驚いてそちらの方を見ると、礼美ちゃんが大きく口を開けてパン屋さんの中を見つめていた。
ど、どうしたんだろう？

「どうかした？」
「ふえ！？　う、うぅん！？　なんでもないよ！？」

僕が尋ねると、礼美ちゃんは慌ててそう言って口を閉じる。
……なんていうか、喋っちゃいけないけど喋りたいっていう感じの顔だなぁ。何かあったんだろうか？

「ああ、レミこのお店知ってるのかい？」
「え、えと……」

カレンさんの言葉に、礼美ちゃんが気まずそうに押し黙るけど、カレンさんはそんな礼美ちゃんの様子に気が付かないまま楽しそうにパン屋の方に進み始めた。

「まあ、この店結構有名だからねぇ。知ってる奴は知ってる名店って奴さ」
「そうなんですか？」
「ああ。かくいうあたいも、この店の常連でね」

なるほど、隠れた名店かぁ……。言われてみれば、なんだかすごくいい匂いがするし……。
あ、ちょっとお腹空いてきたかも……。

「おーい！　シャル、いるかい！？」
「あ、カレンさん！　お久しぶりです」

カレンさんがお店に入っていったので、それに倣って僕らも扉をくぐる。
中で店番をしていた女の子が、カレンさんの姿を見て嬉しそうに顔を綻ばせた。

「今日は、何にしますか？　カレンさんが好きな、木苺のソースを使った……」
「ああ、ごめんよ。今日は仕事できたんだよ」
「そうなんですか？」

仕事、という言葉に驚いたように女の子は目を見開き、そしてカレンさんの後ろにいる僕たちの姿に気が付いた。

「あ、そちらにいるのは……」
「今話題の勇者様さ」
「ど、どうも」

カレンさんの紹介に、僕は照れたようにお辞儀をする。
どうも、カレンさん、僕のことを隆司からいろいろ聞いているのか、僕が王城で勇者と呼ばれているのをもう知ってるんだよね……。うう……。せっかくギルドには偽名で登録しておいたのに……。
カレンさんに勇者と呼ばれた僕を見て、女の子は照れたように小さくはにかんだ。

「ごめんなさい、勇者様。せっかく来ていただいたのに、お構いできませんで……」
「い、いえ。私たちも、カレンさんと同じ用件で来たので……」

礼美ちゃんが、なんというかロボットみたいな動きで、頭を下げた。

……なんだろう。すごく違和感を感じる動きだ。このお店に、前に来たことあるのかな礼美ちゃん。

気にはなったけれど、カレンさんが女の子の紹介を始めたので、僕は前に向き直った。

「こいつはシャーロット。このパン屋の看板娘さ」

「もう、やめてください……。シャーロットです。シャルって呼んでくださいね」

カレンさんの言葉に、照れた様子を見せながらもシャーロットさんは丁寧にお辞儀をしてくれる。

なんていうか、顔立ちが整っているんじゃなくて、雰囲気が可愛らしい人だ。立ち振る舞いは丁寧だし、看板娘というのも納得だなぁ。

カレンさんの紹介を受けたシャーロットさんは、少し不安そうな顔でカレンさんの方に向き直った。

「それで、お仕事ってなんですか？　勇者様までいらっしゃるなんて……」

「ああ、それそれ」

かごの中の色とりどりのパンを物色していたカレンさんは、今気が付いたというような顔をしてシャーロットさんを指差す。

「シャル。あんたギルドに依頼出したろ？　今日はそのことで話を聞きに来たのさ」

「依頼……ああ、はい」

シャーロットさんが頷き、ゆっくりと依頼について話し始めた。

「もうカレンさんからお聞きかも知れませんけど、数日前にネズミが出てしまって……」
「はい、存じ上げております。ギルドから、騎士団へと正式に依頼も出ています」
「そうなんですか……」
アスカさんの言葉に、シャーロットさんが少し怯えたように体を震わせた。
騎士団が動くなんて、想像もしていなかったのかもしれない。確かに、たかがネズミで騎士団が動くなんて、思いもしないしなぁ。
でもシャーロットさんはすぐに顔を上げて話を続けてくれた。
「ギルドに依頼したのは、すぐにでも駆除をお願いしたかったからなんです。うちはパン屋ですから、小麦粉の入った袋やなんかをかじられたら、仕事にならなくなりますので……」
「ええ、わかっています。それで、ネズミが出た場所なのですけど……」
「はい、こちらになります」
アスカさんの質問に、シャーロットさんが一つ頷いてお店の中へと入っていく。
アスカさんがそれについていき、僕と礼美ちゃん、それにカレンさんもお店の中へと入っていく。
途中、シャーロットさんが弟に店番をお願いしつつ、そのまま店の裏の方へと出ていった。僕たちの世界の商店街と違い、そこそこの広さがある。パン屋の敷地も含めて全部使えば、結構な大きさの一軒家が立てられそうだ。隣のお店も、同じくらいの広さがあるみたいだし、この国の商店街って、かなり広々としているみたいだ。
お店の裏は倉庫と厨房、そしてパンを焼く窯が置いてあり、厨房の中ではシャーロットさんのお父さんらしい人が一生懸命パン生地

をこねていた。
そしてシャーロットさんは、倉庫の傍らに立ち、隣の店との隙間辺りを指差した。

「こちらなんです」

シャーロットさんが指差した隙間は、確かにネズミ一匹くらいなら顔を出しそうな、そんな細い隙間だ。

「どれ」

アスカさんは一つ頷くと、隙間を覗き込むようにしゃがみ込んだ。
僕はそんなアスカさんの上から覗き込み、さらに礼美ちゃんが僕の脇の方から顔を覗かせる。
薄暗いその隙間は、太陽の明かりを受けても億を伺うことができない。
と、アスカさんが口の中でぶつぶつと呪文を唱えているのに気付いた。

「光球（ライティング）」

アスカさんの呪文とともに、隙間の間を照らす光の玉がアスカさんの目の前に現れる。アスカさんも、魔法が使えるんだ……。
そうして照らされた倉庫の隙間には、特別ネズミがいたような形跡は見られなかった。代わりに、ネズミ取りみたいな罠だけがぽつんと設置してあった。

「穴もなければ食い残しもなし……か」
「シャル。ネズミを見たってのはいつだい？」
「三日ほど前でしょうか……。すぐに来てくれるとは思わなかった

から、そうして罠も置いておいたんですけど……」

僕らの後ろで、カレンさんが質問する。

しかし三日前か……。定住しているなら、もっと何かあってもいいよね。

「もしかして、ここにはネズミがいないんでしょうか……」

「こうして見る限り、そう言えますね」

礼美ちゃんの言葉を肯定するように、アスカさんが頷く。

でも、それならシャーロットさんが見たネズミはどこに……？

そんな疑問に答えるように、シャーロットさんが気まずそうに口を開いた。

「その事なんですけれど……」

「ん？　なんだい？」

「実は、この三日の間で、この商店街のあちこちで、ネズミを見たって人がいるんです」

「ハァ！？」

シャーロットさんの告白に、カレンさんが素っ頓狂な声を上げる。

つまりそれは……最低でもこの商店街中を点検して回らないといけないってことなのかな……？

No．89：side・kota「王都捜索チュー」（後書き）

そんなわけでネズミの姿が王都に現れたとか……。ネコがいれば一発解決なんですがねぇ。

真子ちゃんにとっては禁断の話題なので、一回休み。気絶するだけましかも。

次回は、そんな真子ちゃんがネズミ対策に乗り出すと思われます。

以下次回ー。

No．90：side・mako「出来れば逃げたい、この現実」

「……ハッ！？」
「気が付いたでありますか？」

気が付くと、あたしはいつの間にか自分の部屋に戻ってきていた。
そして枕元にはほっとした顔のサンシター。
……ホワイ？

「……えっと……」

とりあえず体を起こす。
特別どこかが痛むわけじゃないし、頭痛がするとかそういうわけでもない。
なんで気絶してたのかしら……？

「マコ様。果物はいかがでありますか？　旬の果物を今むくでありますよ」

サンシターはそういって、チェストの上に載っているかごの中から瑞々しい果物を取って、ナイフで器用にむき始めた。
なんというかこう、いつも通りのはずなのに、いやに優しい感じがするというか……。

「ねえサンシター？」
「はいでありますよ？」

呼ばわって振り向く笑顔のサンシター。
とりあえず笑顔を向けつつ、あたしはその頬っぺたを容赦なく抓

り上げた。

「いたたたたた！！？？」

「何かあったのか今すぐいう」

「わ、わかったであります！？」

シャキッと敬礼を取ったサンシター。

あたしはそんな彼の姿に満足し、ほっぺたから手を離してやる。

赤くなった頬を涙目でさすりつつ、サンシターはつぶやいた。

「……でも、後悔しないでありますね？」

「後悔？　なんのことよ？」

サンシターの言葉に首を傾げるあたし。

そんなあたしを見て、サンシターは小さくため息を吐いた。

「ではお訊ねするでありますが……気絶する前に何をしていたか、覚えているでありますか？」

「気絶する前？　えーっと……」

言われて記憶を手繰る。

今日は確か……朝起きて食堂でフィーネに会って、元気がないのを指摘されて、空元気代わりに頭をくしゃくしゃにしてやって……。

あれ？　そこから先、何があったんだっけか？

必死に首をひねって思い出そうとする。

あれ？　あれ？　確か……誰かに呼ばれ……？　あれ、なによこれ。割と真剣に怖いんだけど。

どうしても、フィーネにあった後の記憶が思い出せないあたしを見かねてか、サンシターが話してくれる。

「マコ様。マコ様は、いつも通り錬金研究室で武器の図案を書いているところを呼び出されたでありますよ」
「え？　そうなの？」
と、口では言うが、サンシターに指摘されて思い出す。
そうだそうだ。銃器案が暗礁に乗り上げちゃったから、仕方なく別の武器を作ってみようととりあえず書き溜めた図案引っ張っていろいろ思案してたんだった。
騎士団の連中が使うのだから、竿状武器がいいのかなって思って考えて……。
で、誰が呼びに……？
「呼びに行ったのは、メイド長さんであります」
「ああ、そっか。言われてみれば、錬金研究室に来るの、フィーネかメイド長さんくらいよね」
そもそも魔導師団の半分くらいが、ギルベルトさんのことないものとして扱ってるし。
「で、呼び出されたのがー……」
「会議室でありますね」
サンシターの言葉に、ようやく気絶する前の行動が記憶によみがえってくる。
そうそう、メイド長さんに呼ばれて会議室までいって、ハンターズギルドの使いとか言う女に自己紹介されてー……。
そこまで思い出して、首をかしげる。
「何があったんだっけ？」
「ギルドから依頼されたでありますよ」

サンシターは一拍置いて、ようやく本題に触れる。

「内容は第一級害獣の捜索及び駆除であります」

「だいいっきゅー……」

その名に嫌な予感がする。毛穴が開き、冷や汗がわけもわからず噴出してくる。

不吉な名。それいじょうはいけない……！

しかしわかっていても、あたしにはどうにもできない。体が動かない。サンシターがその名を口にするのを、ただ黙って聞いていることしかできない……！

「早い話がネズ」

「いやぁぁぁぁぁぁぁ！！？？」

あたしはその忌まわしき名がサンシターの口から飛び出す前に、その顔面に枕を叩きつけて、頭から布団をかぶって耳をふさぐ。

聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない！

あたしにはなーんにもきこえなーい！

「……というわけでありますよ、マコ様」

「そうね！　なにもなかった！　そうよね！？」

サンシターの声に、あたしは布団をかぶったまま顔だけ出すというなんかよくわからない化け物みたいなスタイルで振り向く。

けど、サンシターはすべてをあきらめたような、それでいて「覚悟を決めなさい。ＯＫ？」と言いたげな表情であたしを見下ろしていた。

「マコ様がいくら否定なさろうとも、ギルドからの依頼はあったでありますよ？」
「なーんもなかった！　なーんにもないのよ！　アハハハハハハ！！！」

バサァ！と布団を巻き上げサンシターの頭にかぶせ、あたしは狂ったようにくるくる回る。とにかく回る。遠心力でバターになる勢いで回りまくる。
なーんにもない！　なーんにもないのよ！　世界はハッピーなのよぉ！

「マコ様落ち着いてほしいでありますよー」
「わぷっ」

と、顔面に今度はサンシターが投げてきた枕がぶつかって思わず倒れる。
ふかふかお布団のおかげで、もふんと怪我もなく倒れるけど、あたしの顔は青かった。
サンシターの、何の感情も含まれていない冷静な声に、現実を思い知らされたからだ……。
あたしは涙目のまま枕を抱きしめ、ゆっくりと体を起こし上げた。

「……ねえ、サンシター？」
「はいでありますよ？」

相変わらず果物を器用に向くサンシターに、あたしは小声で聞いてみた。

「……この部屋に引きこもっていい？」
「いいのではないでありますか？」

「え」

思わず涙目も引っ込むくらい、あっさり許可が下りてしまった。

え、いいの？　それでいいの？

愕然としてサンシターを見つめると、苦笑した彼はお皿の上に切り分けた果物を乗せた。

「今回の依頼は、あくまで騎士団への物であります。魔導師団や、ましてや勇者であるマコ様はこの件に関わる理由がないでありますよ」

「……でも、光太と礼美は協力してるんでしょう？」

「はいであります。でも……」

あたしの前に、うさぎさんみたいに切られた果物を差し出しつつ、サンシターは優しく諭すようにこう言ってくれた。

「無理をして協力して、マコ様が傷ついては元も子もないであります。出来ることと出来ないこと、この区別はつけるべきでありますよ」

「……」

サンシターの言葉に、あたしはうつむく。

出来ることと、出来ないこと……か……。

あたしは果物を一つ手に取り、しゃくっと齧る。

ひんやりと冷たい果物の汁が、口内を満たし、そして喉を滑り降りていく。

……うん。少しだけ、頭が冷えた。

あたしは決意を固め、サンシターの顔をまっすぐに見つめた。

「……サンシター」

「はいであります」
「ごめん、ちょっと付き合ってもらっていい？」
「もちろんでありますよ」
あたしの言葉を聞いて、サンシターはかすかに微笑んでくれた。
そうしてサンシターを伴ってあたしがやってきたのは魔導師団詰め所。
あの忌まわしき、この世の冒涜ともいうべき生き物が王都に発生したということは、間違いなくそいつらを退けるための結界に何らかの異常が現れたということだ。
あたしには、あの生き物と相対して正気を保っていられるほどの精神力はない。アレに対するあたしのＳＡＮ値はゼロよ。
でも、結界構造に関わることであるなら、多少なり手伝えるはずだ。
ちなみにサンシターは、あたしが正気を失った時のためのストッパーを頼んだ。どこかで名前が出ようもんなら、即気絶できる自信があるわ。
「変な自信は固めないでほしいでありますよ」
「うっさい」
呆れたようなサンシターの言葉に、顔を赤くしつつ、あたしは詰め所の扉を潜り抜けた。
「おーい！　先代様が残した結界構造を書いた魔導書はどこだっけか！？」
「ひょっとしたら、光輝石異常（マナクリスタル）が出たのかもしれんぞ！　ちょっと

だれか行って来い！」

「結界発動のための、魔術言語（カオシック・ルーン）が削れたりはしないの！？」

中は戦場、と呼んでも差し支えない騒ぎだった。

たくさんの魔導師が、詰所の中を右往左往し、あちらでは魔導書を開き、こちらでは魔術言語（カオシック・ルーン）を確認するための道具を確認し、あるいは光輝石（マナクリスタル）の交換のために、倉庫の中からかなり大きな光輝石（マナクリスタル）を持ち出したりしている。

予想通りの騒ぎね……。さて、誰に話を聞こうか……。

「お！？　マコさんじゃねーか！？」

と、あたしの姿を認めた一人の魔導師……ネコ耳萌えの変態《ケモナー小隊のフォルカ》が立ち止ってくれた。

たくさんの魔導書を抱えたまま、あたしの方に首だけを向けてくれた。

「大丈夫かい！？　なんかぶっ倒れたって聞いたけど！？」

「ああ、うん。一応平気。ところで……」

下手に例の生き物の話題を出される前に、あたしは口早にできることがないか尋ねる。

「なにか、あたしにできることってないかしら？　もしあったら、手伝いたいんだけど……」

「なら、ちょっと結界の中心に行ってフィーネちゃんの手伝いしてやってくんねぇかな！？　俺ら、この通り資料漁るんで忙しいからよ！」

フォルカはそれだけ言うと、またあわただしく駆けだした。

どうやら本気で忙しいらしい。まあ、王都を守護する結界に異常となれば、こうなるのも仕方ないわよね……。

あたしはフォルカの言われるままに、結界の中心に向かうことにした。

場所は、あたしたちがこの世界に一番初めにやってきた、あの召喚魔法陣……その真下だ。

どうやらあの辺りが、王都にとって中心にあたる場所らしく、結構重要な結界の基点が複数存在するらしい、と以前フィーネに聞いたことがあったのだ。

サンシターを引き連れつつ、心当たりの場所へと向かってみると、小さな魔方陣の周りに人がたむろしているのが見えた。

光源がないせいで、かなり薄暗いが、ぼんやり光っている魔法陣のおかげで歩くこと自体には苦労しない。

「フィーネ、いるー？」

声を掛けつつ近寄ると、魔法陣に屈みこんでいた小さな影が、ビクンと体を跳ね上げたのが見えた。

その影は、慌てたように振り返ると魔法陣が見えないように精一杯身体を広げた。

「ま、マコ！？　どうしてここに！？」

「どうしてもなにも、手伝いに来たからだけど」

若干涙目なフィーネに問われ、あたしは首をかしげた。

妙に慌ててるわね。何があったのかしら。

「おお、マコ様、ちょうど良い所に」

「あ、オーゼさん」

鷹揚な感じのする嗄れ声に振り返ると、そこには白髪の神官長の姿があった。

「フィーネ。この際だ、マコ様にも見ていただいてはどうだ？」

「だ、だけど……」

オーゼさんの言葉に、フィーネは躊躇う様にあたしと魔法陣を見比べる。

？　ホントどうしたのかしら？

「……ここまで歩いてきたんなら、元気なんじゃねーの？　なら気にすることねーだろ」

「その声は……ジョージ？　あんたいたの？」

「いたら悪いのかよ……」

久しく聞いていなかった小生意気な声に、あたしは首をまたかしげた。

なんか妙に元気がないわね？　なんかあったのかしら？

まあ、それは良いか。とりあえず、オーゼさんの勧めもあることだし……。

「ちょっと失礼するわねー」

「だ、ダメ！？　無理しちゃだめだよ、マコ！？」

あたしはフィーネの肩に手を置いてその体を横にどけようとするけれど、フィーネは何とか踏ん張って、あたしを前に進ませようとしない。

ふむ……。どうやらあたしが倒れたのをどこからか聞きつけて、無理をしないように気を使ってくれているらしい。

地が出るほどに慌てているところを見ていると、良心がシクシク

痛むけど勘弁ね？

「地が出てるわよ、フィーネ。サンシターもいるから気をつけなさい？」

「ふえ！？　さ、サンシターさんが！？」

「はい、ここにいるでありますよ？」

あたしの後ろで片手を上げるサンシターの姿に、フィーネが顔を真っ赤にする。

その隙にあたしはフィーネの横を抜け、結界の基点となっている魔法陣の魔術言語（カオシック・ルーン）を読む。

「……んー？」

そして首をかしげた。

結界に異常が出ているかもしれないと聞いて、てっきり魔術言語（カオシック・ルーン）の方にも異常が出てるもんだと思ったんだけど……。

「見る限り、構成それ自体に異常は出てないわよ？」

「マコ様の目からも、そう見えますか……」

オーゼさんが残念そうにつぶやいた。

「フィーネもそういっているし、原因はここではないか……」

「フィーネの奴、小一時間、魔法陣とにらめっこしてたじゃねーか。それで異常がみつかんねーならここじゃねーってことだろ？」

「そうねぇ……」

魔法陣の大きさは、決して大きいものじゃない。その中に納まっている魔術言語（カオシック・ルーン）も、数こそはかなりのものだが、決して見間違いを

起こすような大きさじゃない。
そもそも、物に刻んだ魔術言語（カオシック・ルーン）は物理的に削ったりしない限り歪むことはない。こうして、石畳に刻まれているならなおさらだ。この上を頻繁に歩くか、天変地異が起こって王城が傾かない限り、魔術言語（カオシック・ルーン）に異常が起きる方が異常だ。

「この場所への出入りって、そう滅多にないですよね？」
「もちろん。万人のとって無縁の場所ですし。魔導師や神官たちとて訪れることはありません」

やっぱりね。
となると、原因は……。

「結界を補助してる光輝石（マナクリスタル）……かしらねぇ……」

あたしはそのことを口にして、これから来る未来を思って顔を蒼くする。
確か結界補助のための光輝石（マナクリスタル）って……城を護る城壁にあるのよねぇ……。

Ｎｏ．９０：ｓｉｄｅ・ｍａｋｏ「出来れば逃げたい、この現実」（後書き）

引き籠るつもりが、いきなりのアウトドアです。真子ちゃんがんばれー。

まあ、よほど運がない限りはネズミに遭遇したりはしませんし、もし遭遇してもサンシターという名のブレーカーも存在しますし、何とかなるなる。

それでは以下次回ー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8909u/

異世界ラブコメ大作戦

2012年1月10日07時22分発行